

中野山遺跡
(第4・5・8～13次)
発掘調査報告

—四日市市北山町—

第一分冊

2022（令和4）年2月

三重県埋蔵文化財センター



中野山遺跡全景（南東上空から）

中日本高速道路（株）提供



中野山遺跡全景（南西上空から）

中日本高速道路（株）提供



S H 1025・1012・1009 (南から)



S F 1015 (北東から)



S F 1405 (南から)



S F 1425 煙道天井部 (南西から)



S F 1594 (南西から)



第 10 次調査区煙道付炉穴群（南から）



S F 1010 底石出土状況（南東から）



S F 1514 半截状況 (南から)



S F 1585 半截状況 (南から)



SH 1679 (南から)



SH 1679 屋内炉 (北から)



S X 1590 遺物出土状況（南から）



SH 1646（内側SH 1677）（南西から）



S H 1646 赤彩壺出土状況（南西から）



S B 1643（南から）



S K 1442 遺物出土状況 (南東から)



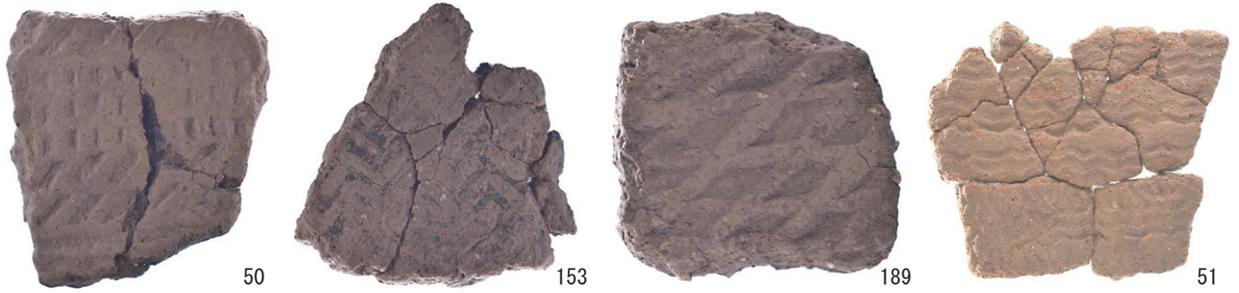
S H 1438 (南から)



S H 1438 カマド周辺遺物出土状況（東から）



S B 1604（東から）



463



469



1548



1584



1549



483



350



486



1582



1550



1551



1552



1553



546



554



528



495



1455



641



1076



993



S K 1442

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市北山町に所在する中野山遺跡（第4・5・8・9・10・11・12・13次）の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。
- 3 発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 4 発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』の4冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
- 5 調査は、下記の体制で実施した。（詳細はI-2参照）
 - ・ 委託者 中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
 - ・ 受託者 三重県教育委員会
 - ・ 調査主体 三重県教育委員会
 - ・ 調査担当 三重県埋蔵文化財センター
- 6 本書の執筆は、大川 操・萩原義彦・服部芳人・松永公喜・水橋公恵・村上 央・和澄さやかが行った。文責は目次に記載したが、遺構の主な分担については、縄文時代を萩原、縄文時代以外の第8次調査を松永、第12次調査を和澄、その他全体を通して服部が行った。遺物については、縄文・弥生時代と石製品・鉄製品を大川、古墳時代以降の土器を水橋が担当した。また、写真撮影は、現地調査担当者および萩原が行った。編集は、大川が行った。
- 7 発掘調査及び報告書作成に際し、下記の方々・機関等に多大なるご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

泉 拓良 山田昌久 工藤雄一郎 渋谷綾子 久保勝正 大下 明 千葉 豊 奥 義次
四日市市教育委員会 北山町自治会
- 8 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「菰野」「桑名」、四日市市発行の1:2,500都市計画図、2011三重県共有デジタル地図（平成24年整理）などの地図類を用い、一部に加筆修正をした図を掲載している。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：令和3年4月5日付け三総合地第1号）。

2 本書で示す方位は、世界測地系第Ⅵ座標による座標北である。

3 本書で表記する土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967初版）に拠った。

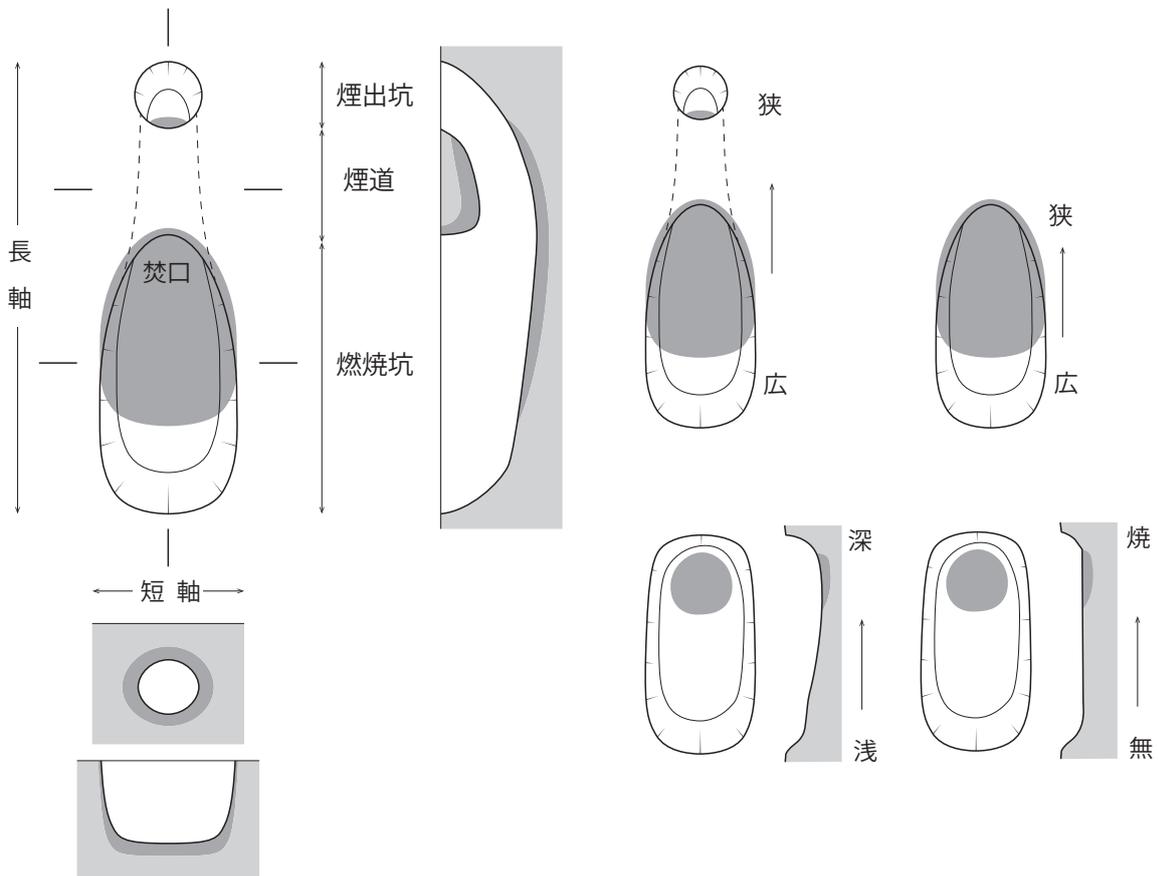
4 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

SA：柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SF：煙道付炉穴・集石炉・土坑炉・土師器焼成坑
SH：竪穴建物 SK：土坑 SX：墓・埋設土器

5 主な遺構の計測については、以下の通りである。

・煙道付炉穴（SF）

- ・長さ（長軸）：最大長を計測した。焼土などがあっても、掘削箇所の高さで計測した。
- ・幅（短軸）：最大幅を計測した。
- ・深さ：検出面から床面までの深さで、概ね中央で計測した



- ・平面形：円形・楕円形・長楕円形・二等辺三角形とした。
 なお、長さ／幅 = 2 未満を楕円形、2 以上を長楕円形とした。
- ・方位：座標北に対する角度を計測した。残存状況によって、以下の観点で計測した。
 - ① 燃焼部から煙道、煙出部への方向
 - ② 幅が広い方から、幅が狭い方への方向
 - ③ 深さの浅い部分から深い部分への方向（煙道部は深く、燃焼している場合が多いため）
 - ④ 燃焼していない方（焼土なし）から燃焼している（焼土あり）方への方向

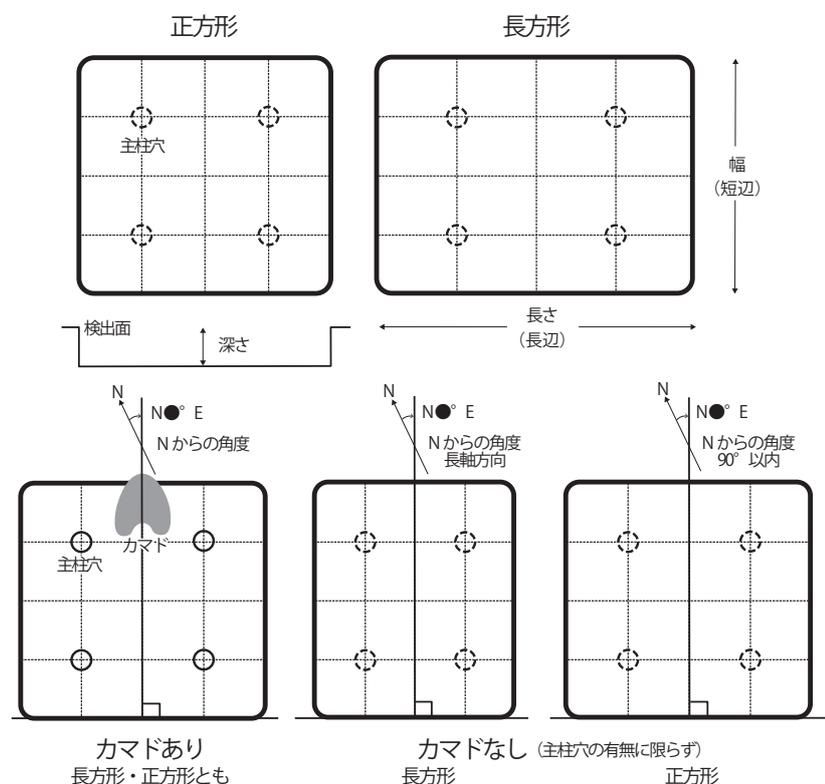
・集石炉・土坑炉（SF）・土坑（SK）

- ・長さ・幅・深さは計測したが、方位は計測していない

・竪穴建物（SH）

- ・規模：長さ（長辺）×幅（短辺）とし、対面する辺の、概ね中央で計測した。
- ・深さ：検出面から床面までの深さで、概ね中央で計測した。
- ・平面形：長さ（長辺）と幅（短辺）が同じ場合は、正方形、違う場合は、長方形とした。
- ・方位：座標北に対する角度を計測した。

カマド（焼土痕跡含む）がある場合（正方形、長方形とも）は、カマドが設置される辺と対面する辺の、概ね中央を結んだ線を方位として計測した。カマド（焼土痕跡含む）がない場合、長方形は、長軸方向を方位として計測した。正方形の場合は、座標北から 90° 以内の方位を計測した。



6 須恵器・土師器の器種名称は、基本的には奈良文化財研究所の仕様や産地での用例に従ったが、以下は本書独自の名称である（V-3・4、VII-2、第32表）。

杯蓋 g：かえりのある杯蓋 杯蓋 b：かえりのない杯蓋 無台杯：杯G身+杯A

7 遺物観察表の口径・高台径は、口縁端部の頂点および高台接地点で計測した数値である。

目次

【第一分冊】

I	前言	(服部・村上)	1
1	調査に至る経緯		1
2	調査の経過		1
II	位置と環境	(村上)	11
III	基本層序	(服部)	15
IV	遺構	(萩原・服部・松永・和澄)	16
1	縄文時代		23
2	弥生時代		123
3	古墳時代後期から古代		137
4	中世		272
5	時期不明		272
V	遺物	(大川・水橋)	279
1	縄文時代		279
2	弥生時代		289
3	古墳時代後期以降		292
4	遺構混入・遺構外出土遺物		304

【第二分冊】

VI	自然科学分析		
1	分析の目的		
2	放射性炭素年代測定		
3	中野山遺跡出土炭化材の樹種同定		
4	土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析		
5	出土石器の残存デンプン粒分析		
6	中野山遺跡(第8・10～12次調査)出土滓の分析調査		
VII	調査のまとめ		
1	遺構の分布状況と変遷について		
2	古墳時代後期から古代にかけての中野山遺跡とその変遷－近隣遺跡との関係を視座として－		
3	中野山遺跡とその周辺遺跡における冶金活動		

図版目次

【第一分冊】

第1図	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～ 亀山西JCT）路線内遺跡位置図……………（7）	第38図	S F 1421・1422・1423・1424・1457・1458・ 1499 実測図2 ……………（80）
第2図	中野山遺跡周辺地形図……………（9）	第39図	S F 1430・1455 実測図……………（81）
第3図	中野山遺跡大地区割図……………（10）	第40図	S F 1431・1432・1434 実測図……………（82）
第4図	遺跡位置図……………（13）	第41図	S F 1441・1452・1456・1465・1467・1469 実測図……………（83）
第5図	調査区土層断面図……………（15）	第42図	S F 1470・1471・1472・1475 実測図……………（84）
第6図	遺構平面図（1）……………（16）	第43図	S F 1473・1474 実測図……………（85）
第7図	遺構平面図（2）……………（17）	第44図	S F 1476・1482・1483 実測図……………（86）
第8図	遺構平面図（3）……………（18）	第45図	S F 1477・1480・1481 実測図……………（87）
第9図	遺構平面図（4）……………（19）	第46図	S F 1478・1484 実測図……………（88）
第10図	遺構平面図（5）……………（20）	第47図	S F 1485・1486・1487・1495 実測図……………（89）
第11図	遺構平面図（6）……………（21）	第48図	S F 1488・1489・1491 実測図……………（90）
第12図	遺構平面図（7）……………（22）	第49図	S F 1494・1497・1500 実測図……………（91）
第13図	S H 1009・1013 実測図……………（55）	第50図	S F 1501・1507・1508・1593・1717・1719 実測図……………（92）
第14図	S H 1012・1025 実測図……………（56）	第51図	S F 1511・1512・1513・1518 実測図……………（93）
第15図	S H 1701 実測図……………（57）	第52図	S F 1519・1521・1525・1527・1528・1529 実測図……………（94）
第16図	S F 1003・1004 実測図……………（58）	第53図	S F 1530・1532・1533・1534 実測図……………（95）
第17図	S F 1005・1006・1062 実測図……………（59）	第54図	S F 1535・1536・1537・1541・1724 実測図……………（96）
第18図	S F 1007・1008 実測図……………（60）	第55図	S F 1546・1547・1548・1549・1552・1553・ 1561・1716 実測図……………（97）
第19図	S F 1014・1015・1080 実測図……………（61）	第56図	S F 1550・1554・1555・1556 実測図……………（98）
第20図	S F 1016・1018・1022 実測図……………（62）	第57図	S F 1559・1564・1579・1580 実測図……………（99）
第21図	S F 1019 実測図……………（63）	第58図	S F 1581・1582・1583・1586・1587 実測図 ……………（100）
第22図	S F 1024 実測図……………（64）	第59図	S F 1592・1594・1595 実測図……………（101）
第23図	S F 1029・1030 実測図……………（65）	第60図	S F 1596・1597・1702 実測図……………（102）
第24図	S F 1073・1074・1077 実測図……………（66）	第61図	S F 1705・1706・1707・1728 実測図……………（103）
第25図	S F 1105・1106・1110 実測図……………（67）	第62図	S F 1713・1718・1721・1723 実測図……………（104）
第26図	S F 1112・1113・1114・1115 実測図……………（68）	第63図	S F 1725・1726・1727 実測図……………（105）
第27図	S F 1116・1120・1121 実測図……………（69）	第64図	S F 1010・1022 実測図……………（106）
第28図	S F 1122・1123・1125 実測図……………（70）	第65図	S F 1023・1404 実測図……………（107）
第29図	S F 1126・1129・1131 実測図……………（71）	第66図	S F 1414・1454・1479・1490 実測図……………（108）
第30図	S F 1133・1134・1135・1136 実測図……………（72）	第67図	S F 1506・1514 実測図……………（109）
第31図	S F 1203・1204・1205 実測図……………（73）	第68図	S F 1492・1544・1546 実測図……………（110）
第32図	S F 1402・1405 実測図……………（74）	第69図	S F 1570・1584 実測図……………（111）
第33図	S F 1403・1406・1408・1411 実測図……………（75）	第70図	S F 1585・1629 実測図……………（112）
第34図	S F 1410・1412・1415 実測図……………（76）	第71図	S F 1310・1493・1498 実測……………（113）
第35図	S F 1416・1425 実測図……………（77）		
第36図	S F 1419・1420 実測図……………（78）		
第37図	S F 1421・1422・1423・1424・1457・1458・ 1499 実測図1 ……………（79）		

第72図	S K 1107・1722 実測図……………(114)	第107図	S H 1607・1617 実測図……………(164)
第73図	S H 1103・1104 実測図……………(115)	第108図	S H 1624・カマド・1628 実測図……………(165)
第74図	S H 1103 実測図……………(116)	第109図	S H 1631・カマド・貯蔵穴実測図……………(166)
第75図	S H 1679 実測図・S K 1693 遺物出土状況図……………(117)	第110図	S H 1648・1649・1662・1678 実測図……………(167)
第76図	S K 1311・1312・1336・1623 実測図……………(118)	第111図	S H 1648 カマド・1649 カマド実測図……………(168)
第77図	S K 1671・1809・1827 実測図……………(119)	第112図	S H 1650・カマド・1651 実測図……………(169)
第78図	S K 1565・1657・1692・1695・1841 実測図……………(120)	第113図	S H 1652・1663 実測図……………(170)
第79図	S K 1670・1686・1838・1840・1849 実測図……………(121)	第114図	S H 1659・カマド・貯蔵穴実測図……………(171)
第80図	S X 1109・1118・1517・1590 実測図……………(122)	第115図	S H 1660・1689・1690・カマド実測図……………(172)
第81図	S H 1026・1331 実測図……………(126)	第116図	S H 1664・カマド・1672・カマド実測図……………(173)
第82図	S H 1305・1333 実測図……………(127)	第117図	S H 1674・南東土坑実測図……………(174)
第83図	S H 1444・1639 実測図……………(128)	第118図	S H 1675・1676 実測図……………(175)
第84図	S H 1641・1645 実測図……………(129)	第119図	S H 1675 カマド・1676 カマド・貯蔵穴・1684・カマド実測図……………(176)
第85図	S H 1644 実測図……………(130)	第120図	S H 1680・1688・1846・1688 カマド・貯蔵穴実測図……………(177)
第86図	S H 1646・1677 実測図……………(131)	第121図	S H 1681・1682・カマド・貯蔵穴実測図……………(178)
第87図	S H 1647・1661 実測図……………(132)	第122図	S H 1685・1694・1696・カマド実測図……………(179)
第88図	S H 394・1683 実測図……………(133)	第123図	S H 1805・貯蔵穴・遺物出土状況・1821 実測図……………(180)
第89図	S B 1643 実測図……………(134)	第124図	S H 1808・カマド実測図……………(181)
第90図	S K 1027・1050・1038・1418・1653 実測図……………(135)	第125図	S H 1813・カマド・北西土坑実測図……………(182)
第91図	S K 1654・S D 1042 実測図……………(136)	第126図	S H 1814・カマド・1818・カマド・貯蔵穴実測図……………(183)
第92図	S H 1011・1044・貯蔵穴実測図……………(149)	第127図	S H 1820・カマド・貯蔵穴実測図……………(184)
第93図	S H 1054・1057・1058 実測図……………(150)	第128図	S H 1831・カマド・貯蔵穴・1832・カマド・土坑実測図……………(185)
第94図	S H 1063・1108・1164 実測図……………(151)	第129図	S H 1834・カマド・西側 Pit・S K 1837 実測図……………(186)
第95図	S H 1209・1213・1218・1219・1220 実測図……………(152)	第130図	S B 1045・1065 実測図……………(198)
第96図	S H 1223・貯蔵穴・1233 実測図……………(153)	第131図	S B 1066・1067 実測図……………(199)
第97図	S H 1313 実測図……………(154)	第132図	S B 1068・1069 実測図……………(200)
第98図	S H 1318・1319・1318 カマド実測図……………(155)	第133図	S B 1070・1071 実測図……………(201)
第99図	S H 1320・1321 実測図……………(156)	第134図	S B 1072・1081 実測図……………(202)
第100図	S H 1322・カマド (S K 1325)・貯蔵穴・砥石出土状況実測図……………(157)	第135図	S B 1082・1084・1085 実測図……………(203)
第101図	S H 1327・1417・1436 実測図……………(158)	第136図	S B 1086・1087 実測図……………(204)
第102図	S H 1438・カマド・貯蔵穴・1450・北東土坑実測図……………(159)	第137図	S B 1088・1089 実測図……………(205)
第103図	S H 701・1446・1496 実測図……………(160)	第138図	S B 1090・1091 実測図……………(206)
第104図	S H 1515・1516・貯蔵穴実測図……………(161)	第139図	S B 1092・1187 実測図……………(207)
第105図	S H 1562・貯蔵穴 (S K 1573)・カマド・1598 実測図……………(162)		
第106図	S H 1714・1606・貯蔵穴実測図……………(163)		

第 140 図	S B 1188 · 1189 実測図 …… (208)	第 182 図	S K 1323 · 1427 · 1428 · 1429 · 1442 実測図 …………… (258)
第 141 図	S B 1190 · 1191 実測図 …… (209)	第 183 図	S K 1437 · 1439 · 1445 · 1447 実測図 …… (259)
第 142 図	S B 1192 · 1193 · 1194 実測図 …… (210)	第 184 図	S K 1448 · 1449 · 1451 · 1453 · 1503 · 1505 実測図 …… (260)
第 143 図	S A 1195 · S B 1196 · 1201 実測図 …… (211)	第 185 図	S K 1509 · 1510 · 1520 · 1526 実測図 …… (261)
第 144 図	S B 1226 · 1309 · 1314 実測図 …… (212)	第 186 図	S K 1524 · 1531 · 1538 · 1542 · 1543 実測図 …………… (262)
第 145 図	S B 1317 · 1324 実測図 …… (213)	第 187 図	S K 1545 · 1560 · 1563 · 1566 実測図 …… (263)
第 146 図	S B 1326 · 1328 実測図 …… (214)	第 188 図	S K 1567 · 1568 · 1569 · 1572 · 1589 · 1591 実測図 …… (264)
第 147 図	S B 1332 · 1426 実測図 …… (215)	第 189 図	S K 324 · 1608 · 1709 · 1711 · 1712 · 1715 実測図 …… (265)
第 148 図	S B 1440 · 1443 実測図 …… (216)	第 190 図	S K 1601 · 1609 · 1610 · 1615 · 1616 実測図 …………… (266)
第 149 図	S B 1504 · 1522 実測図 …… (217)	第 191 図	S K 1622 · 1630 · 1633 · 1634 · 1658 · 1673 実測図 …… (267)
第 150 図	S B 1523 · 1539 · 1540 実測図 …… (218)	第 192 図	S K 1668 · 1669 · 1687 実測図 …… (268)
第 151 図	S B 1551 · 1558 実測図 …… (219)	第 193 図	S K 1699 · 1802 · 1803 · 1804 · 1806 · 1807 · 1810 実測図 …… (269)
第 152 図	S B 1557 · 1571 実測図 …… (220)	第 194 図	S K 1811 実測図 …… (270)
第 153 図	S B 1574 · 1575 実測図 …… (221)	第 195 図	S K 1815 · 1816 · 1819 · 1823 · 1830 実測図 …………… (271)
第 154 図	S B 1576 · 1577 実測図 …… (222)	第 196 図	S X 1039 · 1040 · 1330 · 1828 実測図 …… (274)
第 155 図	S B 1578 · 1703 実測図 …… (223)	第 197 図	S K 1031 · 1033 · 1035 実測図 …… (275)
第 156 図	S B 1704 · 1708 実測図 …… (224)	第 198 図	S K 1111 · 1117 · 1119 · 1127 実測図 …… (276)
第 157 図	S B 1710 · 1729 · 1730 実測図 …… (225)	第 199 図	S K 1124 · 1128 · 1174 · 1177 実測図 …… (277)
第 158 図	S B 1604 · 1612 実測図 …… (226)	第 200 図	S K 1176 · 1182 · 1185 · 1334 · 1588 実測図 …………… (278)
第 159 図	S B 1613 · 1614 実測図 …… (227)	第 201 図	出土遺物実測図 1 …… (308)
第 160 図	S B 1618 · 1619 実測図 …… (228)	第 202 図	出土遺物実測図 2 …… (309)
第 161 図	S B 1620 · 1621 実測図 …… (229)	第 203 図	出土遺物実測図 3 …… (310)
第 162 図	S B 1626 · 1627 実測図 …… (230)	第 204 図	出土遺物実測図 4 …… (311)
第 163 図	S B 1632 · 1636 実測図 …… (231)	第 205 図	出土遺物実測図 5 …… (312)
第 164 図	S B 1637 · 1638 実測図 …… (232)	第 206 図	出土遺物実測図 6 …… (313)
第 165 図	S B 1642 · 1665 実測図 …… (233)	第 207 図	出土遺物実測図 7 …… (314)
第 166 図	S B 1666 · 1667 実測図 …… (234)	第 208 図	出土遺物実測図 8 …… (315)
第 167 図	S B 1691 · 1697 実測図 …… (235)	第 209 図	出土遺物実測図 9 …… (316)
第 168 図	S B 1698 · 1843 · 1801 · S A 1842 実測図 …… (236)	第 210 図	出土遺物実測図 10 …… (317)
第 169 図	S B 1812 · 1817 実測図 …… (237)	第 211 図	出土遺物実測図 11 …… (318)
第 170 図	S B 1822 · 1824 · 1845 実測図 …… (238)	第 212 図	出土遺物実測図 12 …… (319)
第 171 図	S B 1825 · 1826 · 1829 · 1835 実測図 …… (239)	第 213 図	出土遺物実測図 13 …… (320)
第 172 図	S B 1833 · 1844 実測図 …… (240)	第 214 図	出土遺物実測図 14 …… (321)
第 173 図	S B 1847 · 1848 実測図 …… (241)		
第 174 図	S K 1017 · 1032 · 1036 · 1037 実測図 …… (250)		
第 175 図	S K 1043 · 1047 · 1051 · 1052 実測図 …… (251)		
第 176 図	S K 1053 · 1059 · 1060 · 1161 実測図 …… (252)		
第 177 図	S K 1162 · 1165 · 1167 · 1168 実測図 …… (253)		
第 178 図	S K 1169 · 1178 · 1202 · 1206 実測図 …… (254)		
第 179 図	S K 1210 · 1211 · S F 1212 実測図 …… (255)		
第 180 図	S K 1208 · 1214 · 1215 · 1216 · 1221 実測図 …… (256)		
第 181 図	S K 1224 · 1225 · 1227 · 1229 · 1230 · 1231 実測図 …… (257)		

第 215 図	出土遺物実測図 15	(322)
第 216 図	出土遺物実測図 16	(323)
第 217 図	出土遺物実測図 17	(324)
第 218 図	出土遺物実測図 18	(325)
第 219 図	出土遺物実測図 19	(326)
第 220 図	出土遺物実測図 20	(327)
第 221 図	出土遺物実測図 21	(328)
第 222 図	出土遺物実測図 22	(329)
第 223 図	出土遺物実測図 23	(330)
第 224 図	出土遺物実測図 24	(331)
第 225 図	出土遺物実測図 25	(332)
第 226 図	出土遺物実測図 26	(333)
第 227 図	出土遺物実測図 27	(334)
第 228 図	出土遺物実測図 28	(335)
第 229 図	出土遺物実測図 29	(336)
第 230 図	出土遺物実測図 30	(337)
第 231 図	出土遺物実測図 31	(338)
第 232 図	出土遺物実測図 32	(339)
第 233 図	出土遺物実測図 33	(340)
第 234 図	出土遺物実測図 34	(341)
第 235 図	出土遺物実測図 35	(342)
第 236 図	出土遺物実測図 36	(343)
第 237 図	出土遺物実測図 37	(344)
第 238 図	出土遺物実測図 38	(345)
第 239 図	出土遺物実測図 39	(346)
第 240 図	出土遺物実測図 40	(347)
第 241 図	出土遺物実測図 41	(348)
第 242 図	出土遺物実測図 42	(349)
第 243 図	出土遺物実測図 43	(350)
第 244 図	出土遺物実測図 44	(351)
第 245 図	出土遺物実測図 45	(352)
第 246 図	出土遺物実測図 46	(353)
第 247 図	出土遺物実測図 47	(354)
第 248 図	出土遺物実測図 48	(355)
第 249 図	出土遺物実測図 49	(356)
第 250 図	出土遺物実測図 50	(357)
第 251 図	出土遺物実測図 51	(358)
第 252 図	出土遺物実測図 52	(359)
第 253 図	出土遺物実測図 53	(360)
第 254 図	出土遺物実測図 54	(361)
第 255 図	出土遺物実測図 55	(362)
第 256 図	出土遺物実測図 56	(363)

【第二分冊】

第 257 図	マルチプロット図 (1)
第 258 図	マルチプロット図 (2)
第 259 図	マルチプロット図 (3)
第 260 図	暦年較正結果 (1)
第 261 図	暦年較正結果 (2)
第 262 図	暦年較正結果 (3)
第 263 図	暦年較正結果 (4)
第 264 図	暦年較正結果 (5)
第 265 図	暦年較正結果 (6)
第 266 図	中野山遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
第 267 図	中野山遺跡 (第 5 次) の試料
第 268 図	炭素・窒素安定同位体比
第 269 図	炭素安定同位体比と C / N 比の関係
第 270 図	分析した中野山遺跡出土石器の例と検出された残存デンプン粒
第 271 図	デンプン粒の形態分類の基準と現生標本 17 属の形態分類図
第 272 図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・E P M A 調査結果
第 273 図	鍛冶滓の顕微鏡組織・E P M A 調査結果
第 274 図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・E P M A 調査結果
第 275 図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・E P M A 調査結果
第 276 図	鍛冶滓の顕微鏡組織・E P M A 調査結果
第 277 図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・E P M A 調査結果
第 278 図	煙道付炉穴方位図
第 279 図	古代竪穴建物平面形パターン模式図
第 280 図	古代竪穴建物付帯施設位置略記号凡例
第 281 図	時代別遺構分布図 1
第 282 図	時代別遺構分布図 2
第 283 図	時代別遺構分布図 3
第 284 図	時代別遺構分布図 4
第 285 図	時代別遺構分布図 5
第 286 図	時代別遺構分布図 6
第 287 図	須恵器杯 H の法量変化
第 288 図	中野山 1 期の在地窯系須恵器と共伴の猿投窯系須恵器
第 289 図	中野山 2 ~ 5 期の在地窯系須恵器と共伴の猿投窯系須恵器

第 290 図 中野山遺跡と周辺遺跡の変遷 1
 第 291 図 中野山遺跡と周辺遺跡の変遷 2
 第 292 図 中野山遺跡と周辺遺跡の変遷 3
 第 293 図 中野山遺跡と周辺遺跡の変遷 4
 第 294 図 中野山遺跡と周辺遺跡の変遷 5

第 295 図 中野山遺跡と周辺遺跡の変遷 6
 第 296 図 主な遺構の時期区分
 第 297 図 遺跡の動向と暦年代観
 第 298 図 冶金関連遺物の分布
 付図 中野山遺跡調査区全体図

表目次

【第一分冊】

第 1 表 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～
 亀山西 JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表・・(8)
 第 2 表 周辺遺跡位置図一覧（1）・（2）・（11・12）

【第二分冊】

第 3 表 自然科学分析試料一覧（1）・（2）
 第 4 表 測定試料および処理（1）～（3）
 第 5 表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果
 （1）～（3）
 第 6 表 中野山遺跡出土炭化材の樹種同定結果
 第 7 表 中野山遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧
 第 8 表 測定結果
 第 9 表 第 4 次調査出土石器の分析試料と残存デン
 プン粒の検出個数
 第 10 表 第 5 次調査出土石器の分析試料と残存デン
 プン粒の検出個数
 第 11 表 第 9 次調査出土石器の分析試料と残存デン
 プン粒の検出個数
 第 12 表 石器から検出した残存デンペン粒
 第 13 表 供試材の履歴と調査項目

第 14 表 供試材の化学組成
 第 15 表 出土遺物の調査結果のまとめ
 第 16 表 三重県内煙道付炉穴調査遺跡一覧表
 第 17 表 煙道付炉穴方位別一覧表
 第 18 表 煙道付炉穴場所別方角・形状・規模一覧表
 第 19 表 縄文時代場所別遺構数一覧表
 第 20 表 弥生時代場所別遺構数一覧表
 第 21 表 古代堅穴建物カマド位置一覧表
 第 22 表 古代場所別遺構数一覧表
 第 23 表 朱書土器出土遺跡一覧表（1）・（2）
 第 24 表 遺構一覧表（1）～（13）
 第 25 表 煙道付炉穴一覧表（1）～（3）
 第 26 表 集石炉一覧表（1）・（2）
 第 27 表 弥生時代堅穴建物一覧表
 第 28 表 弥生時代掘立柱建物一覧表
 第 29 表 古代堅穴建物一覧表（1）～（3）
 第 30 表 古代土坑一覧表（1）・（2）
 第 31 表 古代掘立柱建物・柱列一覧表（1）～（5）
 第 32 表 遺物観察表（1）～（33）

写真一覧

巻頭写真

巻頭図版 1 中野山遺跡全景（南東上空から）
 中野山遺跡全景（南西上空から）
 巻頭図版 2 S H 1025・1012・1009（南から）
 S F 1015（北東から）
 S F 1405（南から）
 巻頭図版 3 S F 1425 煙道天井部（南西から）
 S F 1594（南西から）
 巻頭図版 4 第 10 次調査区煙道付炉穴群（南から）
 S F 1010 底石出土状況（南東から）
 巻頭図版 5 S F 1514 半截状況（南から）
 S F 1585 半截状況（南から）

巻頭図版 6 S H 1679（南から）
 S H 1679 屋内炉（北から）
 巻頭図版 7 S X 1590 遺物出土状況（南から）
 S H 1646（内側 S H 1677）（南西から）
 巻頭図版 8 S H 1646 赤彩壺出土状況（南西から）
 S B 1643（南から）
 巻頭図版 9 S K 1442 遺物出土状況（南東から）
 S H 1438（南から）
 巻頭図版 10 S H 1438 カマド周辺遺物出土状況（東から）
 S B 1604（東から）
 巻頭図版 11 縄文・弥生時代出土遺物
 巻頭図版 12 古代出土遺物

I 前言

1 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年（2009）年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書¹⁾に、新名神高速道路事業の概要、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

2 調査の経過

(1) 調査経過の概要

中野山遺跡は、朝明川の中流北岸の丘陵上に位置し、四日市市北山町字中野山に所在する。これまでに古墳時代から奈良時代頃を中心とした須恵器片や土師器片などが採集されており、四日市市の遺跡番号238として登録されている。この丘陵上には、当遺跡の他、東に隣接して北山A遺跡や北山C遺跡、西に隣接して北山城跡や居林遺跡など多くの遺跡が集中している地域である。

当遺跡は、概ね新四日市JCT（工事中の名称は、四日市北JCT）の場所に当たり、遺跡範囲のほぼ中央を縦断する形で高速道路が計画された。

この新四日市JCTは、東名阪自動車道の四日市JCTから西進する新名神高速道路と、北進する東海環状自動車道とが、合い乗り入れをする機能を持つJCTである。そのため、路線内に存在する当遺跡と、北側の東西方向の谷を挟んで所在する筆ヶ崎古墳群については、新名神高速道路の新四日市JCTから東海環状自動車道の東員ICへの進入路線範囲は国土交通省、東員ICから新四日市JCTへの進入路線範囲はネクスコ中日本と分割して管轄されていた。

そのため、発掘調査に際しては、各種の調査方法

の調整、調査回数や遺構番号など、東海環状自動車道の調査と、随時調整を行った。

なお、東海環状自動車道の建設に伴う調査成果は既に報告書としてまとめられ、刊行されている²⁾。

以下に、平成22年度から平成26年度にかけて行われた発掘調査の年度ごとの概要を記述する。

平成22年度

三重県埋蔵文化財センターとネクスコ中日本は、事業地内での埋蔵文化財の保護と、高速道路工事との調整を図るため、定期的に協議を行っている（定例会）。前年度からの予定では、当年度は、5月から6月に1,640㎡の発掘調査を実施するとしていた。5月のネクスコとの定例会で現状の確認が行われたが、計画通りには用地買収が進まず、しかも調査対象範囲内には、雑木などが多く、伐採作業が必要な場所があることも判明した。この時点で、発掘調査計画を見直し、当年度には、850㎡の発掘調査を実施することとなった。

その後、各種調整作業が行われ、7月初旬に定例会が行われた。この会議では、伐採のための林地開発許可に時間を要する事、用地買収の状況から発掘調査区への進入が困難である事、当遺跡の周辺にオオタカが営巣している事などが示された。そのため、この時点で、発掘調査は500㎡に面積を減らし、しかも伐採などの諸条件が整った後の9月から10月にすることとした。

さらに、その後の7月下旬に行われた新名神高速道路の自然環境保全対策検討委員会の猛禽類分科会で、オオタカ保護のため、営巣が確認されなくなる時期の後に伐採を行う事となり、発掘調査は、11月中旬から12月頃に開始することとした。

その後、行われた9月初旬の定例会では、用地買収が進んだことから発掘調査面積を増やす計画が提案され、また、中旬に行われた協議では1,530㎡の調査を行う事が正式に決定した。

上記のように、年度の前半に幾度となく協議を重ねることとなったが、ようやく、諸条件が整ったため、11月から3月にかけて発掘調査を実施するこ

とが出来た。

発掘調査の結果、遺跡範囲内の概ね東側において、弥生時代から古代にかけての集落が存在することが判明した。

年度末に行われた定例会で、次年度は、遺跡範囲内の東側で4,000㎡、西側で800㎡の発掘調査が計画された。

平成 23 年度

前年度末から、発掘調査の各種契約計画準備などを行った結果、5月の連休明けから本格的に現地での調査が開始された。具体的には、遺跡範囲の東側で4,000㎡の発掘調査を第4次調査として行った。当遺跡は、東海環状自動車道の建設事業に伴って、平成22年度に第2次調査が実施され、また、平成23年度に第3次調査が計画されたため、次数を区別した。

なお、計画された遺跡範囲内西側の800㎡であるが、調査対象地が、概ね遺跡範囲の西側であり、しかも、オオタカの営巣が、この近隣に確認された。そのため、巣立ち後に伐採し、その後に発掘調査を行うこととした。

7月中旬にネクスコとの定例会が行われ、当遺跡以外の発掘調査や用地買収状況の確認がなされた。発掘調査面積が減少する遺跡があるため、当該年度の合計面積と埋蔵文化財センター担当職員等の検討や調整を行った結果、用地買収済の範囲で追加の発掘調査を行うこととした。

その後、7月末にも協議が行われた。追加の2,400㎡の面積を遺跡範囲のほぼ中央で、北区（1,600㎡）と南区（800㎡）に分断されるが、第5次調査として秋頃から、また、800㎡の調査は、伐採後の冬に計画された。

第4次調査は、現地での調査を年内まで行った。その結果、縄文時代早期の竪穴建物を初め、煙道付炉穴や集石炉などが確認され、多くの土器や石器も出土した。また、第5次調査では、特に北区において、縄文中期の竪穴建物や晩期の土器棺なども確認されるなど、大きな成果が得られた。

なお、普及啓発活動の一環として、第4次調査と第5次調査の現地説明会を10月2日（日）に行い、320名の参加があった。

また、年度後半に行われた発掘調査では、遺跡の北西で、緩やかに傾斜する谷地形部分では、遺構、遺物は確認されなかったが、それ以外の部分においては、いずれも遺構、遺物が確認された。

10月からは、東海環状自動車道に伴う第6次調査を遺跡範囲の北西部分で行われた。

年が替わり1月に行われた定例会で、道路工事計画の關係上、仮設道路や水路工事を実施するため、路線内の南側を優先的に調査することとした。調整協議の結果、次年度は北山A遺跡に隣接する東側と路線内南側で2,700㎡、北山城跡に隣接する西側の路線内南側で7,700㎡、合計10,400㎡の発掘調査が計画された。

平成 24 年度

年度が改まった4月、自然環境保全対策検討委員会の猛禽類分科会において、オオタカの営巣場所に変化が見られ、再び路線近くに舞い戻ってきたとの報告を受けた。営巣地から同心円で200m以内は、オオタカの保全対象範囲であるコアエリアとして位置付けられた。しかし、当遺跡の今年度調査計画箇所2か所、路線内東側2,700㎡と西側の7,700㎡は、営巣地から200m以上離れるため、発掘調査に対して支障は無いと判断された。なお、2,700㎡は第8次調査として、7,700㎡は第9次調査として計画準備を行った。

その後、5月の定例会では、昨年度からの依頼事項である仮設の工事用道路の敷設が具体的に検討された。そのため、逆L字状を呈する第8次調査区の内、南北方向の調査範囲を優先的に行い、その一部を東西方向に貫通する形で、測量・写真終了後、ネクスコによる仮設道路の敷設が計画された。

また、第9次調査については、買収や伐採状況から、排土置場などの検討を行い、調査区を3分割して西側から東側へと調査を進めることとした。

第8次調査は隣接する北山A遺跡の第3次調査と合わせて、第9次調査は単独の委託契約発注で、発掘調査を概ね通年にわたり実施した。

調査の結果、第8次調査では、飛鳥から奈良時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物が南側に集中すること、また、第9次調査でも、やや遺構密度は低くなるが、ともに調査区外の南側へ広がることが判明

した。

なお、普及啓発活動の一環として、第8次調査と第9次調査、北山城跡第2次調査の現地説明会を10月13日(土)に開催して、250名の参加があった。

年度末には、次年度の発掘調査計画の協議が持たれ、当遺跡の未調査面積を次年度以降、どのように計画的に発掘調査を行うかの調整を行った。当センターの調査対応可能面積や他の遺跡の調査面積、道路建設工事の優先度などを加味した結果、次年度は、調査区が3か所に分断されるが、合計17,590㎡の発掘調査が計画された。

平成25年度

前年度計画された3か所の調査区は、遺跡の北東部分で2,480㎡の第10次調査、ほぼ中央で7,110㎡の第11次調査、中央やや西で8,000㎡の第12次調査である。なお、第10次調査は北山A遺跡の第5次調査と合わせて、第11次調査と第12次調査は、それぞれ単独の委託契約発注である。昨年度末から計画準備を始めた結果、いずれも5月の連休頃から調査が開始でき、通年調査を実施することができた。なお、年度内には、若干の未買収地や伐採作業が残っていたが、調査の段取りや作業手順の工夫などで、大きな問題もなく、調査を進めることが出来た。

調査の成果としては、いずれの調査区でも、これまでと同じく、飛鳥から奈良時代の竪穴建物や掘立柱建物を確認することが出来た。特に、第10次調査では縄文時代早期の煙道付炉穴をさらに多く確認し、北東側への広がりが見込まれたこと、第11次調査でも煙道付炉穴が多く確認できたが、北側の谷を挟んで2つのまとまりがありそうなこと、また、第12次調査では、弥生時代中期から後期にかけての竪穴建物の他、近接棟持柱の掘立柱建物が確認できたことなどが特筆されよう。

なお、普及啓発活動の一環として、第10次調査と第11次調査、第12次調査、北山城跡第3次調査の現地説明会を10月5日(土)に開催して、272名の参加があった。

例年通り、年度末に次年度の発掘調査計画の定例会が行われた。その結果、遺跡範囲の西側で北山城跡と接する場所で、6,900㎡の調査が通年で計画された。

平成26年度

当年度も、昨年度末から発掘調査の各種計画準備を始めて、5月の連休明けから第13次調査として、現地での発掘調査を開始した。調査範囲は、計画されている新四日市JCTの西側に当たり、その東側では急ピッチに道路建設工事が進められていた。発掘調査に関する関係者の進入路は、国道365号線方面からとなり、また、駐車場や排土置場なども限られた場所で、道路工事計画と調整を図りながらの発掘調査でもあった。

調査の成果として、他の調査区同様に、縄文時代や古墳時代、古代の遺構、遺物を確認した。特に、遺構が、概ね調査区の東側に集中することから、当遺跡における各時代の集落の西端部であることも判明した。

なお、普及啓発活動の一環として、第13次調査と北山城跡第4次調査の現地説明会を10月5日(日)に開催して、92名の参加があった。

また、この第13次調査をもって、新名神高速道路と東海環状自動車道の建設事業に伴う中野山遺跡の発掘調査は、終了したことになる。

(2) 調査の体制

各年度の担当・体制などは、次の通りである。

平成22年度

担当：川部浩司・岩脇成人・山田猛（調査研究Ⅱ課）

業者：株式会社アート（土工委託）

期間：平成22年11月26日～平成23年3月10日

面積：1,530㎡

平成23年度

担当：東谷洋平・穂積裕昌・山田猛（調査研究Ⅱ課）

業者：安西工業株式会社（調査委託）

期間：平成23年8月24日

面積：880㎡

・第4次調査

担当：穂積裕昌・中村法道・山田猛・櫻井拓馬

（調査研究Ⅱ課）

業者：株式会社島田組（調査補助委託）

期間：平成23年4月25日～平成23年12月22日

面積：4,000㎡

・第5次調査

担当：東谷洋平・穂積裕昌・山田猛（調査研究Ⅱ課）

業者：安西工業株式会社（調査補助委託）

期間：平成23年8月24日～平成24年1月13日

面積：2,400㎡

平成24年度

・第8次調査

担当：松永公喜・東谷洋平（調査研究Ⅲ課）

業者：大成エンジニアリング（調査補助委託）

期間：平成24年5月18日～平成25年2月25日

面積：3,012㎡

・第9次調査

担当：浅野隆司・中村法道・山田猛（調査研究Ⅲ課）

業者：株式会社二友組（調査補助委託）

期間：平成24年5月18日～平成25年1月15日

面積：7,700㎡

平成25年度

・第10次調査

担当：中村法道・東谷洋平・山田猛（調査研究3課）

業者：株式会社アート（調査補助委託）

期間：平成25年5月10日～平成26年2月24日

面積：2,480㎡

・第11次調査

担当：勝山孝文・宮崎久美（調査研究3課）

業者：株式会社イビソク（調査補助委託）

期間：平成25年4月26日～平成26年1月17日

面積：7,347㎡

・第12次調査

担当：相場さやか・西脇智広（調査研究3課）

業者：安西工業株式会社（調査補助委託）

期間：平成25年5月9日～平成26年1月6日

面積：8,006㎡

平成26年度

・第13次調査

担当：中村法道・宮崎久美・山田猛（調査研究3課）

業者：株式会社アーキジオ（調査補助委託）

期間：平成26年4月18日～平成26年11月25日

面積：6,173㎡

（3）調査日誌（抄）

平成22年度

12月15日 掘削開始

2月24日 調査終了

平成23年度

・第4次調査

5月16日 表土掘削開始

6月6日 表土掘削完了

6月8日 煙道付炉穴S F 1003等6基検出

6月14日 集石炉S F 1010検出

7月1日 泉拓良氏による調査指導

7月4日～5日

工藤雄一郎氏による調査指導

8月4日 千葉豊氏による調査指導

10月2日 現地説明会

10月3日 山田昌久氏による調査指導

10月5日 空中写真撮影、全景写真撮影

10月19日 現地作業終了

・第5次調査

9月7日 北区調査前写真撮影

9月12日 北区掘削開始

10月12日 南区掘削開始

10月18日 埋設土器S X 1109検出

11月17日 空中写真撮影、全景写真撮影

12月20日 現地作業終了

平成24年度

・第8次調査

6月6日 掘削開始

8月22日 北区全景写真撮影

10月13日 現地説明会

11月8日 土器焼成坑S F 1212検出

11月22日 竪穴建物S H 1223検出

12月14日 空中写真撮影、全景写真撮影

12月17日 南区全景写真撮影

1月21日 埋め戻し

・第9次調査

6月6日 掘削開始

9月20日 袋状土坑S K 1311検出

9月27日 側柱建物S B 1317検出

10月13日 現地説明会

11月9日 空中写真撮影、全景写真撮影

12月11日 現地作業終了

平成25年度

・第10次調査

7月9日 掘削開始

10月5日 現地説明会

10月23日 竪穴建物SH1438完掘
12月17日 空中写真撮影、全景写真撮影
12月20日 調査区全景写真撮影
2月13日 現地作業終了

・第11次調査

5月15日 掘削開始
10月4日 空中写真撮影、全景写真撮影
10月5日 現地説明会
11月29日 現地作業終了

・第12次調査

5月28日 掘削開始
10月5日 現地説明会
10月8日 空中写真撮影、全景写真撮影
12月25日 現地作業終了

平成26年度

・第13次調査

5月9日 掘削開始
10月2日 空中写真撮影、全景写真撮影
10月5日 現地説明会
10月21日 現地作業終了

(4) 文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護
条例第48条第1項(周知の埋蔵文化財における土
木工事等の発掘に関する通知)

・平成22年8月6日付け、中高名支四工第760号
(中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事
務所長から三重県教育委員会教育長あて)

◎文化財保護法第99条第1項(発掘調査の着手報告)

・平成23年5月2日付け、教埋第39号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成23年度・第4次】

・平成23年9月5日付け、教埋第151号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成23年度・第5次】

・平成24年6月1日付け、教埋第76号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成24年度・第8次】

・平成24年6月1日付け、教埋第77号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成24年度・第9次】

・平成25年5月17日付け、教埋第73号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成25年度・第10次】

・平成25年5月2日付け、教埋第39号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成25年度・第11次】

・平成25年4月13日付け、教埋第62号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成25年度・第12次】

・平成25年4月30日付け、教埋第32号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委
員会教育長あて) 【平成26年度・第13次】

◎文化財保護法第100条第2項(文化財の発見・認
定通知)

・平成24年2月1日付け、教委第12-4421号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成23年度・第4次】

・平成24年2月3日付け、教委第12-4422号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成23年度・第5次】

・平成25年2月22日付け、教委第12-4437号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成24年度・第8次】

・平成25年2月20日付け、教委第12-4435号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成24年度・第9次】

・平成26年3月7日付け、教委第12-4423号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成25年度・第10次】

・平成26年1月23日付け、教委第12-4413号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成25年度・第11次】

・平成25年12月18日付け、教委第12-4411号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成25年度・第12次】

・平成26年12月10日付け、教委第12-4426号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて)
【平成26年度・第13次】

(5) 調査の方法

地区設定 中野山遺跡では、道路完成後に周辺地域
の開発も予想されることから、東海環状自動車道の
調査担当や四日市市教育委員会とも協議し、100m

四方の大地区を設定した。

具体的には、世界測地系第VI系のY = 53,000 m・X = -105,300 mの地点を基点として、遺跡の北西隅から南東端までを網羅する100 m×100 mの大地区(A～U)を設定した(第3図)。

さらに、大地区の中に東西、南北とも100 mを25分割した4 m×4 mを1単位とする小地区(グリッド)を設定した。各グリッドは北西隅を基点とし、調査区の西から東へは1～25の算用数字、北から南へはA～Yのアルファベットを付与した。小地区の名称は、大地区の記号を頭に、アルファベットと数字を組み合わせで表している(例:L-A1)。

掘削と検出 表土掘削は重機(バックホウ)を用いて行い、グリッドを表す地区杭の設置後に、人力による包含層掘削を行った。包含層掘削後は、ジョレン又はステーキホー等で遺構検出面を精査して遺構検出を行った。その際、遺構の重複関係など、検出状況を記録するために、1/40の縮尺で、遺構略測図(以下、遺構カード)をグリッドごとに作成した。さらに、遺構カードをもとに1/100の遺構略測図を作成し、掘立柱建物や遺跡全体の性格についての検討を行った。遺構掘削は、遺構カード記入後、順次、手作業で行った。

遺構番号 ピット以外の遺構については、例言で示した、SK・SHなど遺構の形態等を表す略号を冠した上で、調査区全体で通し番号を付与した。通し番号については、第4次調査は1001～1092、第5次調査は北区で1101～1136、南区で1161～1196、第8次調査は1201～1233、第9次調査は1301～1337、第10次調査は1401～1500、第11次調査は1501～1599と1701～1730、第12次調査は1601～1699、第13次調査は1801～1849の番号を使用した。ピットについては、遺物の出土したものにはグリッドごとに番号を付与した。

遺構実測図 空中写真測量を実施し、縮尺1/50と1/100の遺構図・等高線図・遺構平面図を作成した。この場合、「遺構図」には遺構のみを、「等高線図」には遺構と等高線を、「遺構平面図」には遺構、等高線と標高を記載した。

なお、各土層断面図は1/20で作成した。特に重要と思われる遺構については、個別に1/10または

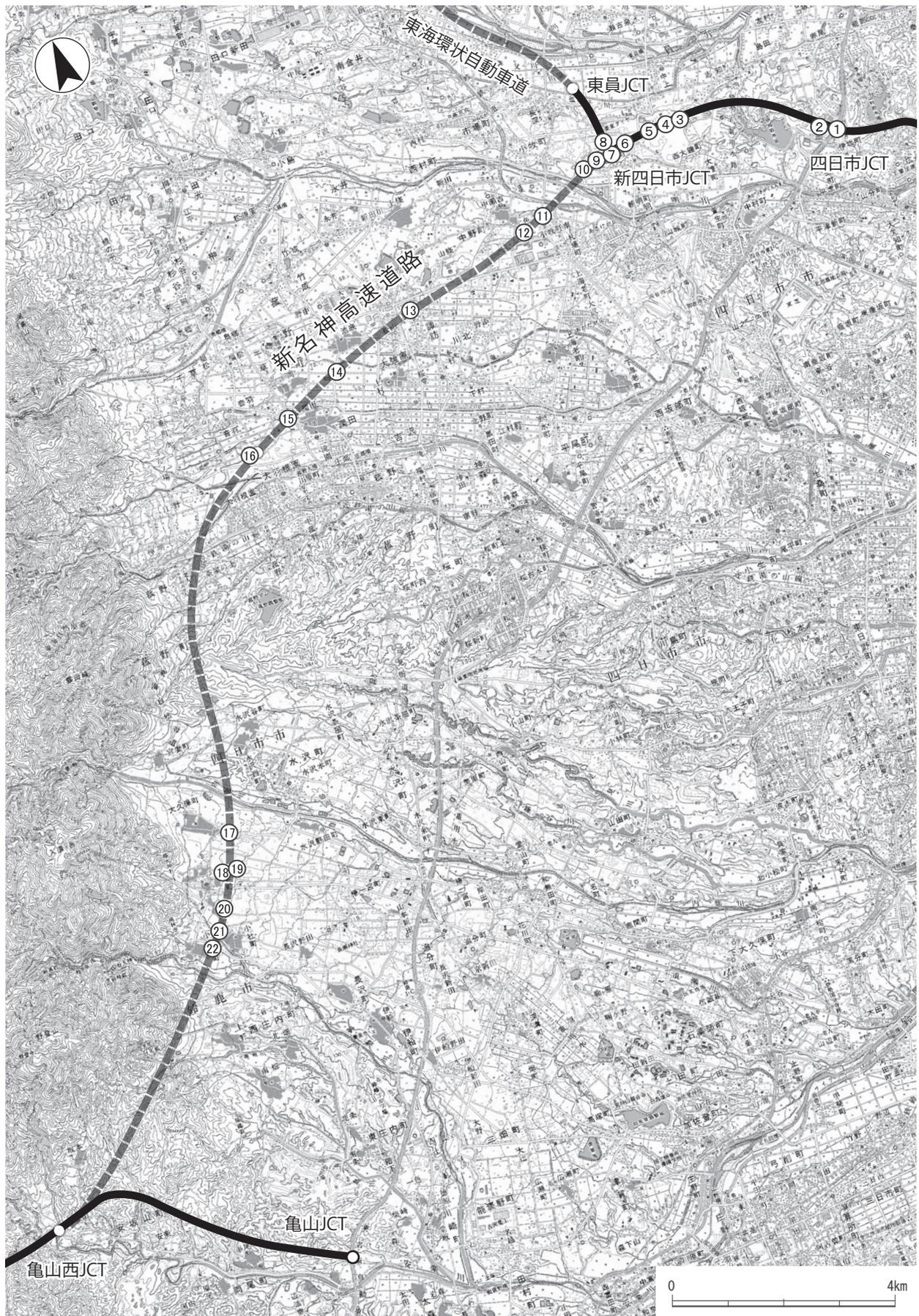
1/20の実測図を作成した。

写真撮影 フィルムは、モノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35mm・ブローニー判・4×5 inch判を使用した。検出状況等は適宜撮影を行い、完掘後の遺構や調査区全景の撮影は、約5 mの足場の上から行った。調査区遠景と垂直写真は、ラジコンヘリを用いて上空から撮影した。遺物の写真撮影には、デジタルカメラ(Nikon D800)を使用した。

整理作業 出土遺物は、洗浄、接合、注記を行った後、出土地点・出土遺構ごとに分類した。さらに実測すべき遺物を選別し、実測を行った。実測された遺物は実測図との照合ができるよう遺物と図面の両方に「R」を付した実測登録番号(「R○○○-○○」)を与えた。

【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』2011
- 2) 三重県埋蔵文化財センター『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』2016

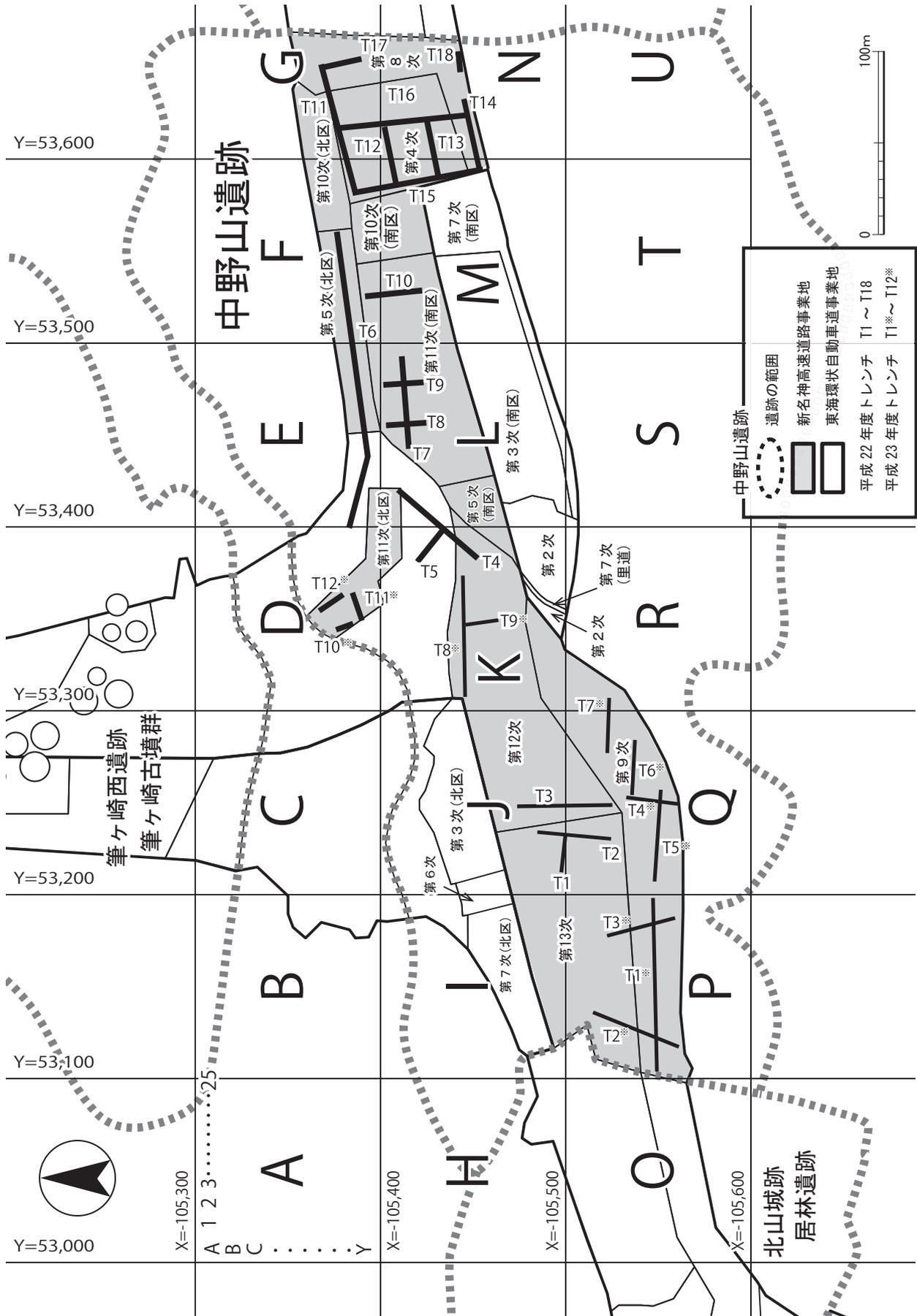


第1図 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）路線内遺跡位置図（1：100,000）

第1表 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

No	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積	一次調査後施工可面積	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	合計面積	備考	
					一次調査	一次調査	一次調査	一次調査	一次調査	一次調査	一次調査	一次調査	一次調査	一次調査			
					二次調査	二次調査	二次調査	二次調査	二次調査	二次調査	二次調査	二次調査	二次調査	二次調査			
1	伊坂遺跡 伊坂窯跡	四日市市伊坂町	3,950	0	42	558	2,870	800	3,150						42		
2	伊坂城跡	四日市市伊坂町	25,000	0		4,490	990	6,000	2,500	589	10,009				16,078		
3	北山C遺跡	四日市市西大鐘町・桑名市志知	29,242	6,517				600		1,000		216			1,816		
4	野中遺跡	四日市市北山町	15,500	15,500						500	500						
5	黒土遺跡	四日市市北山町	11,000	11,000			580	380							960		
6	北山A遺跡	四日市市北山町	19,000	5,300			950	500	100	3,760	4,130	4,370	756		14,500		
7	中野山遺跡	四日市市北山町	43,000	1,155			1,530	880	6,400	10,635	18,485	6,173			24,110		
8	筆ヶ崎古墳群 筆ヶ崎西遺跡	四日市市小牧町	15,000	0				750	9,100	5,319					15,169		
9	居林遺跡 北山城跡	四日市市北山町	20,864	0				630	6,426	6,438	6,948				19,812		
10	居林古墳群	四日市市北山町	—	—											0	北山城跡 対象範囲 に含まれる	
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	20,726	6,885				460	800	72	165				1,497		
12	中野平古遺跡	四日市市中野町	7,000	7,000							940				940		
13	野添御飯山古墳	菟野町川北	1,000	1,000					200						200		
14	椋ノ木遺跡	菟野町池底	16,500	15,650						930	360				1,290		
15	大久保遺跡	菟野町潤田	12,000	12,000						800					800		
16	鈴山遺跡	菟野町音羽	9,450	1,631						980		174			1,154		
17	大松遺跡	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200					180						180		
18	高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	39,390	39,390					1,580		769	848	237.5		3,435		
19	折子遺跡	鈴鹿市山本町	19,200	19,200					800				570		1,370		
20	東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	4,900	4,900					500						500		
21	小社遺跡	鈴鹿市小社町	12,073	8,065				1,020	400						1,420		
22	釜垣内遺跡	鈴鹿市小坂須町	30,000	14,541				2,300	200						2,500		
年度別調査 合計面積					356,995	171,934	42	0	3,060	7,330	5,160	5,222	1,294	1,064	981.5	0	23,153.5
							558	7,360	1,090	10,910	43,260	50,548	35,797	18,620	1,500.0	1,960.0	171,603.0
							800	9,150	2,600	10,910	44,956	53,957	40,060	18,990	1,678.0	1,960.0	185,061.0

単位：㎡



第3図 中野山遺跡大地区割図 (1 : 3,000)

II 位置と環境

中野山遺跡は、三重県の北部、四日市市北山町字中野山に所在する¹⁾。三重県は旧伊勢国・旧志摩国・旧伊賀国・旧紀伊国の一部で構成されており、三重県北部は旧伊勢国にちなんで北勢地方、もしくは北勢地域と呼ばれている。

北勢地域の地理的特徴を概観すると、北側には緩やかな養老山地が東西に連なり、概ね岐阜県との県境になっている。また、その北を沿うように木曾三川が東流している。西側には、御在所山をはじめとする急峻な鈴鹿山脈が南北に連なり、滋賀県との県境になっている。中央には伊勢平野が広がり、鈴鹿山脈から員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川・鈴鹿川などの河川が伊勢平野を東流し、伊勢湾に注いでいる。

当遺跡は、員弁川と朝明川とに挟まれた朝日丘陵上に位置する。この丘陵上には、北山A遺跡・北山C遺跡、筆ヶ崎西遺跡、居林遺跡のほか、多数の遺跡が近年の発掘調査で確認されており、古くから人々が生活していたことが明らかになってきた。また、当遺跡を含む地域は「下野」と呼ばれている。

近隣には下野保育園、下野中央保育園、下野幼稚園、下野小学校、下野駐在所、下野地区市民センターなど、「下野」という地名が随所に使われている。

なお、「歴史的環境」については、これまで多くの報告書で述べられている²⁾ので参照されたい。代わりに、図・表を用いて、周辺の遺跡の情報を掲載した。

【註】

- 1) 四日市市『四日市市史』第1巻資料編自然 1991
四日市市土地分類調査会『四日市市の土地分類』1992
- 2) 三重県埋蔵文化財センター『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』2016
三重県埋蔵文化財センター『北山A遺跡(第2・3・5・6次)発掘調査報告』2017
三重県埋蔵文化財センター『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』2019
三重県埋蔵文化財センター『北山C遺跡(第2～7次)・西山古墳群 発掘調査報告』2020 など

第2表 周辺遺跡位置図一覧(1)

	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構・遺物	文献
1	中野山遺跡	四日市市北山町字中野山	縄文早期・中期～後期・晩期・弥生・古代	煙道付炉穴、集石炉、埋設土器、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、中世墓など	
2	川向遺跡	いなべ市北勢町瀬木	旧石器 縄文中期	ナイフ型石器の可能性あるチャート製剥片石器 縄文中期の竪穴建物1棟、屋外炉3基など	①
3	前野遺跡	菰野町竹成字高原ほか	縄文草創期	有舌尖頭器7点	②
4	高原遺跡				
5	照光寺遺跡	いなべ市大安町	縄文草創期 早期・前期	縄文土器、有舌尖頭器、石鏃、石匙、石斧、砥石、石棒など	③
6	野々田遺跡	いなべ市大安町	縄文早期・晩期 古墳	押型文土器、織維土器、突帯文土器の土器棺蓋、弥生土器、須恵器、山茶碗、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、石剣、石槌など	④
7	中山遺跡	いなべ市北勢町中山宮之西	縄文前期	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、山茶碗、有舌尖頭器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、石匙、搔器、削器、石皿、蔽石、凹石、石棒など	⑤
8	中大野遺跡	いなべ市大安町	縄文前期	羽状縄文土器、爪型文土器、特殊突帯文土器、乳棒状石斧、打製石斧、石鏃、石匙、石錘、磨石、石皿など	⑥
9	北野遺跡	いなべ市員弁町上笠田字北野	縄文前期	縄文時代前期の竪穴建物、縄文土器、石鏃、石錘、石匙、削器、磨製石斧、打製石斧など	②
10	村前遺跡	東員町瀬古泉	縄文中期	竪穴建物、縄文土器、石鏃、石錘など	⑦
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	縄文中期・古墳	縄文時代の竪穴建物、掘立柱建物、石囲炉、古墳時代の竪穴建物など	⑧
12	鈴山遺跡	菰野町大字音羽	縄文中期	縄文時代早期の煙道付炉穴10基、集石炉2基、押型文土器片、中期の竪穴建物13棟、掘立柱建物6棟、中期後葉の土器、石器など	⑨
13	覚正垣内遺跡	いなべ市北勢町阿下喜字覚正垣内	縄文後期 古代・中世	縄文時代の埋設土器、土師器、中世の掘立柱建物、山茶碗、土師器、陶器など	⑩
14	富山遺跡	いなべ市大安町片樋字富山	縄文後期・晩期 弥生中期	縄文時代の平地住居跡21棟、土器棺蓋1基、石鏃、石錘、弥生時代の竪穴建物13棟、掘立柱建物4棟、中央陸橋型方形周溝墓、弥生土器、石斧未完成品、石斧製作工具類、土師器、須恵器など	⑪ ⑫
15	丸岡遺跡	四日市市西村町	縄文後期 古墳・古代	弥生時代の住居址、磨消縄文土器片、弥生土器片など	⑬

第2表 周辺遺跡位置図一覧(2)

	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構・遺物	文献
16	権現坂遺跡	いなべ市北勢町東村字治田外面	縄文晩期 古代・中世	突帯文土器の土器棺墓、古代の竪穴建物、掘立柱建物、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、中世の掘立柱建物、ロクロ土師器、山茶碗など	⑭
17	山田遺跡	東員町山田	縄文晩期 弥生・古代	縄文晩期の突帯文土器、古代の掘立柱建物15棟など	⑮
18	志知南浦遺跡	桑名市志知	縄文晩期 古代・中世	縄文時代晩期の土器棺墓9基、古代の掘立柱建物、中世の集落跡、縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶器、磁器など	⑯
19	東村城跡	いなべ市北勢町東村	弥生 古代・中世	中世墓、須恵器、土師器、山茶碗、鉄製の刀子など	⑰
20	菟上遺跡	四日市市伊坂町	弥生 古代・中世	弥生時代中期の竪穴建物120棟、古代の大型掘立柱建物群、中世の火葬墓129基、弥生土器、須恵器、土師器、山茶碗、木製品、石製品など	⑱
21	山村遺跡	四日市市山村町	弥生 古代・中世	弥生時代中期の方形周溝墓、後期の環濠、古代の掘立柱建物、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器など	⑲ ⑳
22	西ヶ広遺跡	四日市市伊坂町	弥生後期 古墳後期 古代・中世	方形周溝墓、弥生時代の竪穴建物、弥生土器、ガラス玉、鉄製品、古墳時代の竪穴建物、土師器、須恵器、古代の竪穴建物、掘立柱建物、中世の居館跡、陶器、磁器	㉑ ㉒ ㉓
23	山奥遺跡	四日市市大字羽津字山ノ奥・大矢知町	弥生後期 古墳後期	方形周溝墓、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴建物138棟、掘立柱建物10棟、土器焼成坑7基、須恵器、土師器、石製品、鉄製品、土製模造品など	㉔ ㉕
24	伊坂遺跡	四日市市伊坂町	弥生	銅鐸出土の伝承、縄文時代の陥し穴、古墳時代前期の竪穴建物、土坑墓、古墳の周溝、瓦窯の灰原、弥生土器、土師器、須恵器、石鏃、砥石、白玉、刀子、平瓦など	㉖
25	小牧北遺跡	四日市市小牧町野畑・東山	弥生・古代	縄文時代晩期の土器棺、縄文土器、弥生時代後期の方形周溝墓、土器棺墓、弥生土器、古代の竪穴建物、掘立柱建物、須恵器、土師器焼成坑、輪羽口、鉄滓、水晶の破片など	㉗
26	居林遺跡	四日市市北山町	弥生	弥生時代後期の竪穴建物	㉘ ㉙ ㉚
27	筆ヶ崎古墳群	四日市市小牧町字筆ヶ先	古墳	古墳10基、土師器、須恵器	㉛ ㉜
28	西山古墳群	桑名市大字志知	古墳	古墳55基(円墳8基・方墳47基)、須恵器、土師器、ガラス玉、砥石、鉄製品、埴輪	㉝
29	門ノ上古墳群	四日市市小牧町字門ノ上	古墳	円墳6基	㉞
30	鶯谷古墳群	四日市市朝明町字鶯谷・字上之山	古墳	円墳15基	㉟
31	江平古墳群	菟野町日光字上江平	古墳	円墳14基	㊱
32	野々田古墳群	いなべ市大安町大字石榑南字野々田	古墳	古墳10基	㊲
33	宇賀新田古墳群	いなべ市大安町大字宇賀新田字前田	古墳	横穴式石室、墓道、須恵器、土師器、耳環、ガラス玉、鉄釘、鉄鏃、刀子など	㊳
34	大辻古墳群	いなべ市大安町大字大井田字大辻	古墳	古墳17基	㊴
35	上小原古墳群	いなべ市大安町大字石榑東字野口	古墳	古墳8基	㊵
36	下小原古墳群	いなべ市大安町大字石榑東字中大野・東大野ほか	古墳	古墳18基	㊶
37	猪名部神社古墳群	東員町北大社	古墳	前方後円墳1基、円墳5基	㊷
38	岡古墳群	いなべ市員弁町東一色字岡山	古墳	古墳3基、横穴式石室、勾玉、須恵器など	㊸
39	麻績塚古墳群	いなべ市北勢町	古墳	前方後方墳1基、円墳1基	㊹
40	広古墳群	四日市市大鐘町字広	古墳	方墳4基、円墳3基	㊺
41	飛塚古墳	菟野町大強原	古墳	弥生時代の竪穴建物1棟・弥生土器、古墳1基・埴輪・古式土師器、鎌倉時代の土師器・山茶碗・青磁碗 など	㊻
42	西辻遺跡	四日市市西大鐘町字西辻	弥生後期 古代・中世	弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、山茶碗、瓦質土器、美濃瀬戸系陶器片など	㊼
43	鐘撞遺跡	四日市市大鐘町字鐘撞	弥生後期 古代・中世	打製石鏃、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、山皿、常滑系土器、美濃瀬戸系陶器など	㊽
44	北山A遺跡	四日市市北山町	古代	竪穴建物49棟、掘立柱建物18棟、大型土坑40基、土師器、須恵器、製塩土器	㊾
45	筆ヶ崎西遺跡	東員町長深字筆ヶ先	古代	縄文時代の埋設土器、古代の竪穴建物、掘立柱建物、土師器、須恵器、鉄滓	㊿ ①
46	広山B遺跡	東員町長深字広山	古代	土坑、掘立柱建物など	②
47	西山遺跡	東員町大字中上	古代	掘立柱建物13棟、柱列3条、カマド1基、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓など	③
48	新野遺跡	東員町大字中上	古代	竪穴建物14棟、掘立柱建物24棟、土師器、須恵器、砥石、鉄滓、灰釉陶器など	④
49	北山C遺跡	桑名市大字志知 四日市市西大鐘町	古代	竪穴建物1棟、木棺墓など20基、須恵器、土師器、鉄製品、砥石、勾玉、白玉	⑤
50	下江平遺跡	菟野町大字日光字下江平	古代・中世	竪穴建物29棟、掘立柱建物33棟、土師器、須恵器、墨書土器、山茶碗、山皿、青磁碗、鉄鏃など	⑥ ⑦
51	六谷遺跡	菟野町小島字上六谷・下六谷	古代	竪穴建物、掘立柱建物、土師器、須恵器など	⑧
52	中村遺跡	四日市市中村町	古代	掘立柱建物11棟、土師器、須恵器、山茶碗、灰釉土器、砥石など	⑨
53	久留倍遺跡	四日市市大矢知町字久留倍・字矢内谷	弥生 古代・中世	弥生時代の竪穴建物、方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物、方形周溝墓、土器棺墓、円墳、横穴式石室、掘立柱建物、官衙、中世墓18基など	⑩



第4図 遺跡位置図 (1 : 80,000)

【参考文献】

- ①北勢町教育委員会『川向遺跡発掘調査報告』1993
- ②三重県『三重県史』資料編 考古1 2005
- ③大安町教育委員会『大安町史』第一巻「照光寺遺跡」1986
- ④大安町教育委員会『大安町史』第一巻「野々田遺跡」1986
- ⑤川瀬聡「北勢町中山遺跡とその遺物」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999
- ⑥大安町教育委員会『大安町史』第一巻「中大野遺跡」1986
- ⑦東員町教育委員会『村前遺跡発掘調査報告』1993
- ⑧三重県埋蔵文化財センター『小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告』2021
- ⑨三重県埋蔵文化財センター『鈴山遺跡（第2・3次）発掘調査報告』2018
- ⑩三重県埋蔵文化財センター『覚正垣内遺跡発掘調査報告』2003
- ⑪三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡発掘調査報告』1999
- ⑫三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡（第2次）・大久保城跡』2003
- ⑬四日市市『四日市市史』第二巻 史料編 考古I 1988
- ⑭三重県埋蔵文化財センター『権現坂遺跡発掘調査報告』2002
- ⑮三重県埋蔵文化財センター『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008
- ⑯三重県埋蔵文化財センター『東村城跡発掘調査報告』2000
- ⑰三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005
- ⑱三重県埋蔵文化財センター『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002
- ⑲三重県埋蔵文化財センター『山村遺跡（第2次）発掘調査報告』2004
- ⑳日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財発掘調査報告』1970
- ㉑四日市市教育委員会『西ヶ広遺跡発掘調査報告—D地区—』1972
- ㉒三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告』2006
- ㉓四日市市教育委員会『山奥遺跡I』2003
- ㉔四日市市教育委員会『山奥遺跡II』2004
- ㉕三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』2004
- ㉖三重県埋蔵文化財センター『小牧北遺跡発掘調査報告』2007
- ㉗三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013
- ㉘三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014
- ㉙三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』2015
- ㉚三重県埋蔵文化財センター『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第4・5・7次）発掘調査報告』2019
- ㉛三重県埋蔵文化財センター『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第2・3・6次）発掘調査報告』2021
- ㉜三重県埋蔵文化財センター『北山C遺跡（第2～7次）・西山古墳群 発掘調査報告』2020
- ㉝菰野町教育委員会『菰野町遺跡地図』2013
- ㉞大安町教育委員会『下小原古墳群発掘調査報告』1993
- ㉟大安町教育委員会・三重大学人文学部 考古学研究室『宇賀新田古墳群』2003
- ㊱東員町教育委員会・東員町史編さん委員会『東員町史』上巻 1989
- ㊲北勢町・北勢町町史編さん委員会『北勢町史』2000
- ㊳三重県埋蔵文化財センター『飛塚古墳発掘調査報告』2015
- ㊴四日市市『四日市市史』第三巻 史料編 考古II 1993
- ㊵三重県埋蔵文化財センター『北山A遺跡（第2・3・5・6次）発掘調査報告』2017
- ㊶三重県埋蔵文化財センター『広山A遺跡・広山B遺跡発掘調査報告』2009
- ㊷東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡』1976
- ㊸菰野町遺跡調査会『下江平遺跡発掘調査報告I』1987
- ㊹菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告II』1988
- ㊺三重県教育委員会「六谷遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1984
- ㊻四日市市教育委員会『中村遺跡』1979
- ㊼四日市市教育委員会『久留倍遺跡5』2013

Ⅲ 基本層序

中野山遺跡は、標高約 50 m の朝日丘陵上に位置している。丘陵上は概ね平坦であるが、全体的に西側へ緩やかに傾斜している。また、遺跡のほぼ中央には、南西から北東方向に、丘陵下の集落から丘陵に上る里道がある。この里道を境にして西側と東側で、基本層序に若干の違いが見受けられる。

今回の調査区は、複数年度で数次にわたるが、前述の里道より西側では南壁、東側では北壁で、ともに東西方向の層序の状況を、部分的にいくつか抜粋して、図示した（第 5 図）。

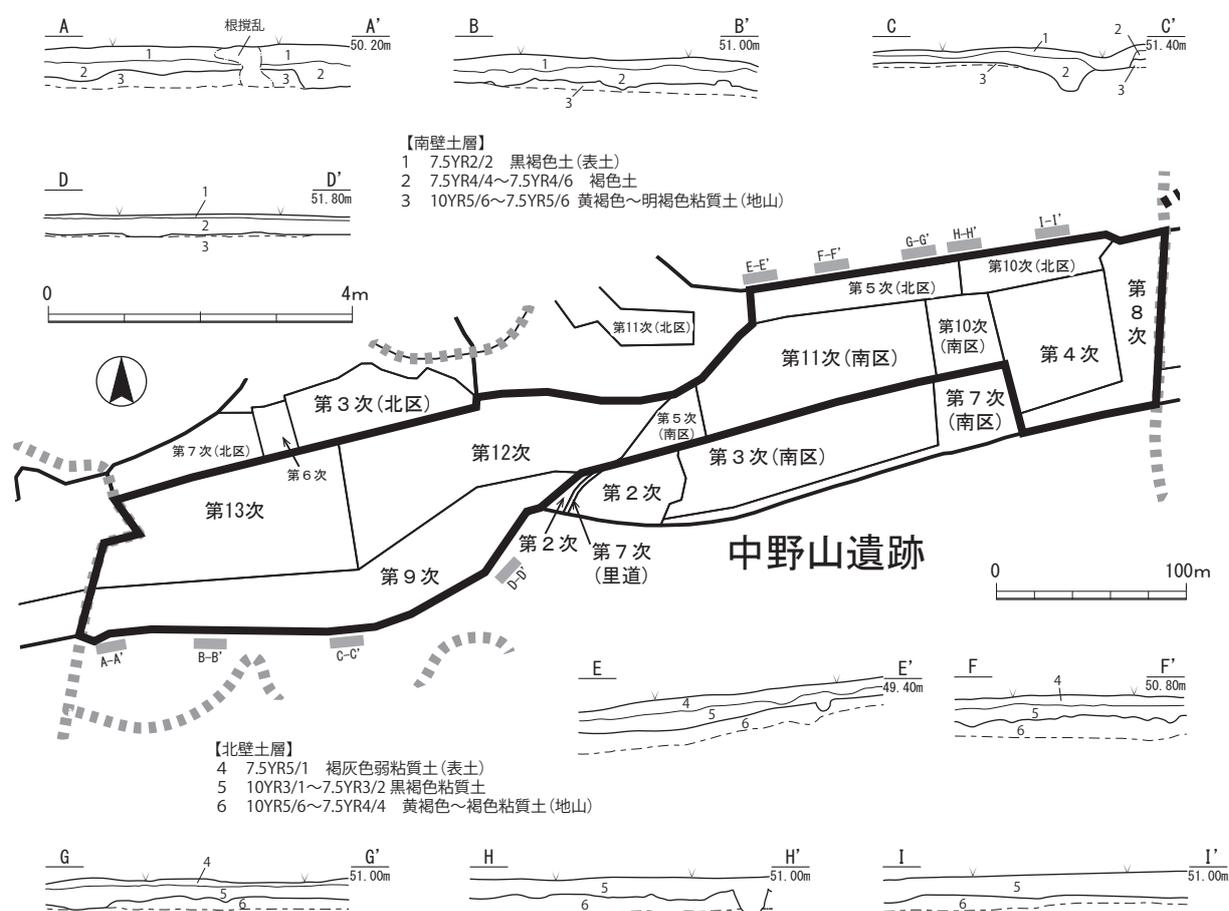
西側であるが、基本的に 3 層に分かれる。第 1 層は表土、耕作土である。第 2 層は褐色土で、細砂粒を含む所もある。第 3 層は黄褐色～明褐色粘質土の地山である。

東側も基本的に 3 層に分かれる。第 4 層は表土である。第 5 層は黒褐色粘質土で、場所によっては焼土や炭化物が含まれる。第 6 層は黄褐色～褐色粘質土の地山である。

当遺跡は、東海環状自動車道建設事業に伴う発掘調査も行われており、里道より西側では北区の南壁で、東側では南区の北壁で、基本層序が報告されている¹⁾。層名などに若干の違いはあるものの、ともに 3 層に分かれ、地山上面で遺構の検出を行っていることに変わりはない。

【註】

1) 三重県埋蔵文化財センター『中野山遺跡（第 2・3・6・7 次）発掘調査報告』2016

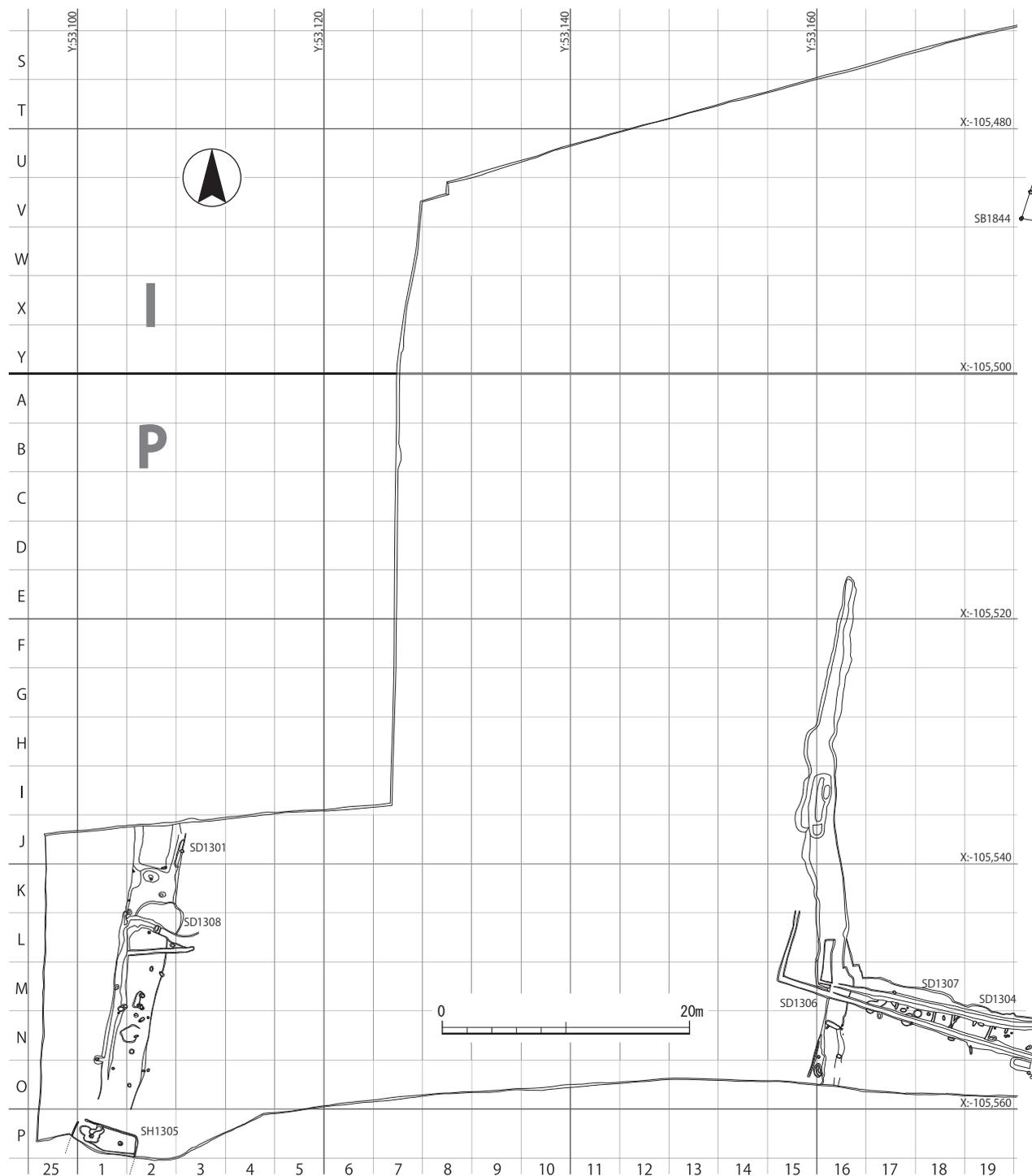


第 5 図 調査区土層断面図（1 : 100・1 : 4,000）

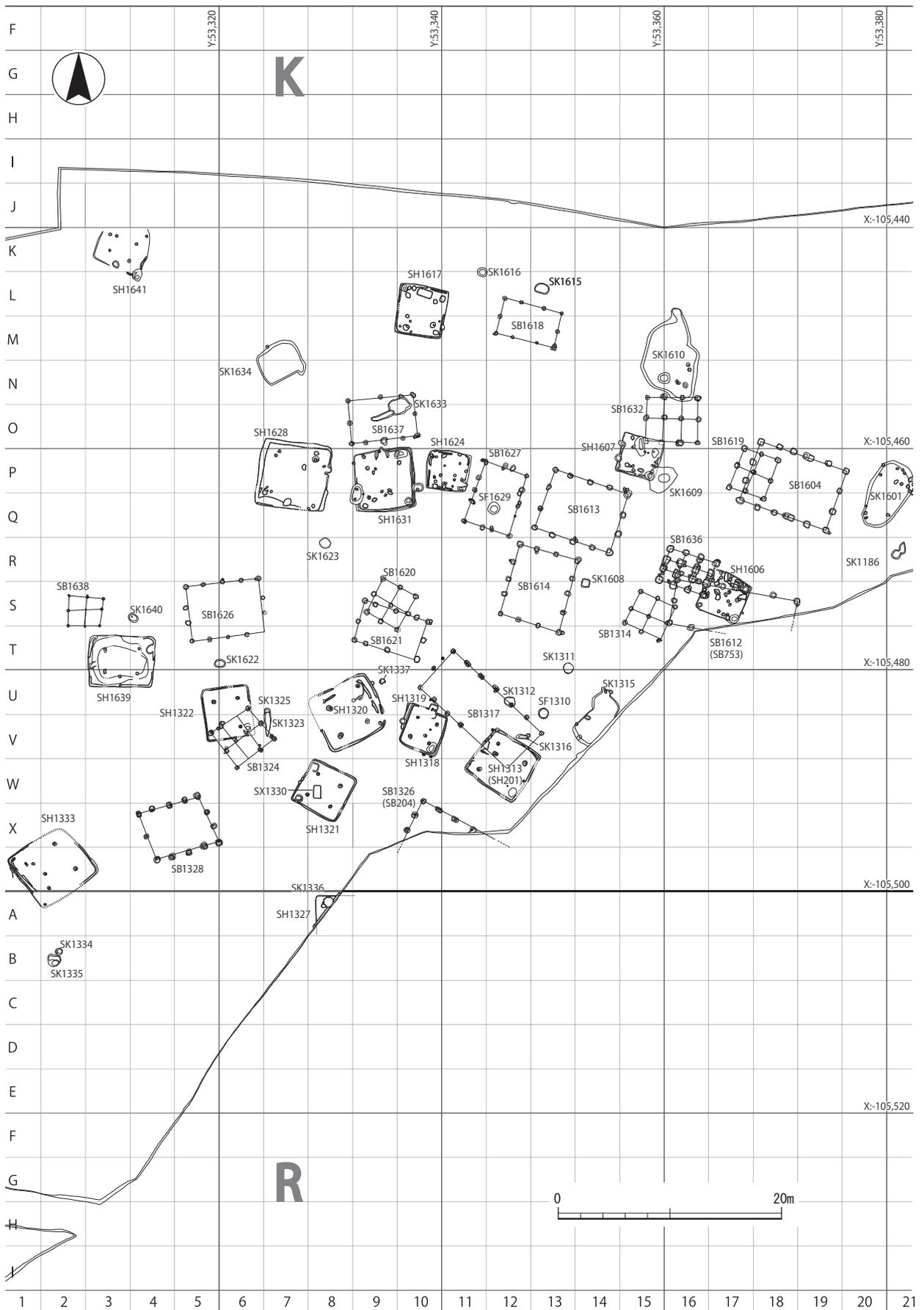
IV 遺構

今回の調査では、縄文時代の遺構として、竪穴建物 8 棟、煙道付炉穴 159 基、集石炉 17 基、土坑炉 3 基、集石遺構 8 基、袋状土坑 6 基、土坑 6 基、埋設土器 4 基を確認した。弥生時代の遺構として、竪穴建物 15 棟、掘立柱建物 1 棟、土坑 6 基、溝 1 条を確認

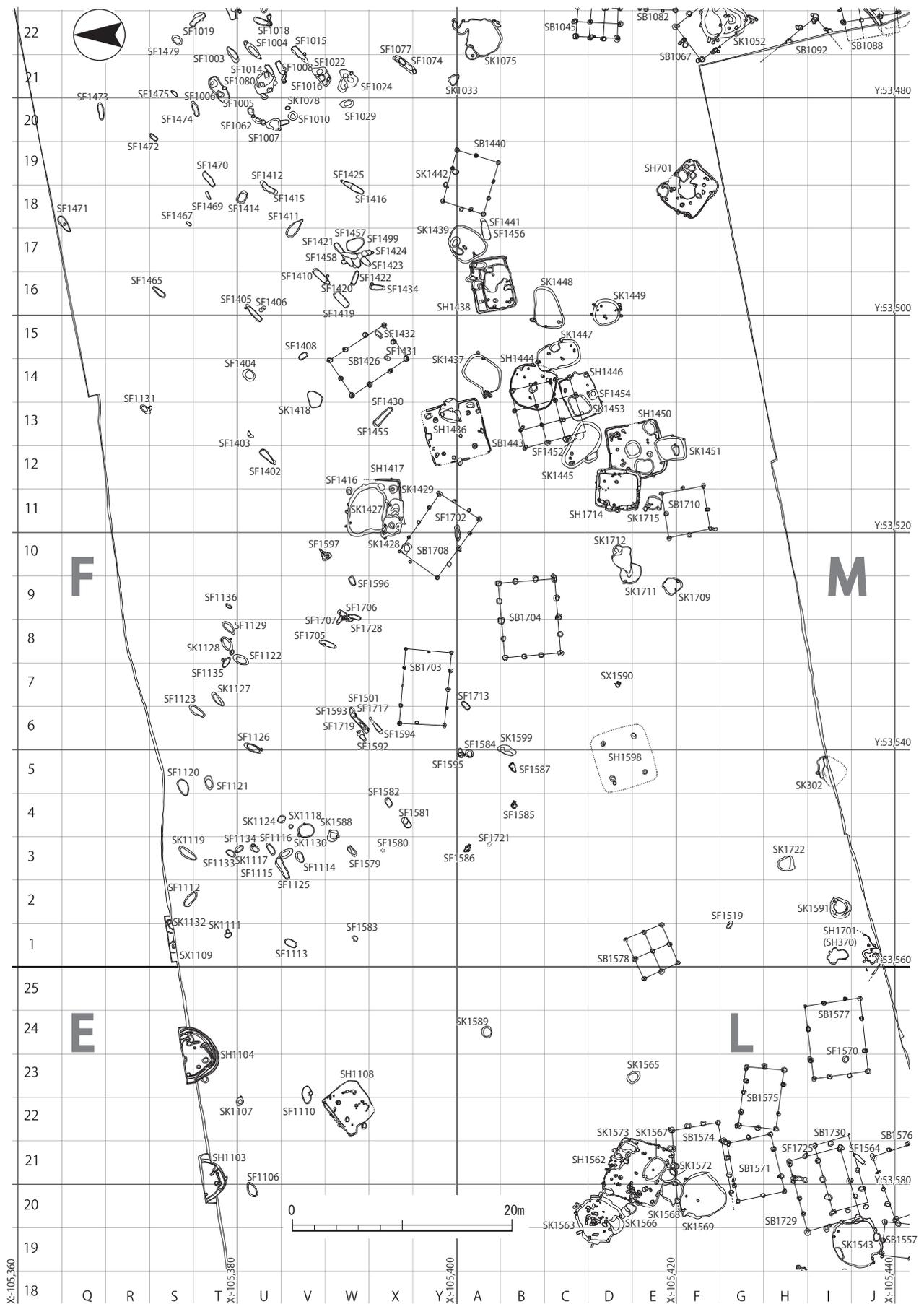
した。古墳時代後期～古代の遺構として、竪穴建物 76 棟、掘立柱建物 97 棟、柱列 2 列、土坑 108 基を確認した。中世（鎌倉時代～室町時代）の遺構として、墓 4 基を確認した。



第6図 遺構平面図 (1) (1 : 500)



第9図 遺構平面図(4) (1:500)



第11図 遺構平面図(6) (1:500)

1 縄文時代

早期、中期から後期、晩期の三つの時期の遺構を確認した。早期の遺構は、竪穴建物、煙道付炉穴、集石炉、土坑炉、集石遺構である。中期から後期の遺構は、竪穴建物、袋状土坑、土坑、集石遺構である。晩期の遺構は、埋設土器である。以下に、各時期の遺構について記述する。

(1) 縄文時代早期

縄文時代早期の遺構数は、竪穴建物5棟、煙道付炉穴159基、集石炉17基、土坑炉3基、集石遺構2基である。

ア 竪穴建物

平面形は円形で、皿状に浅く掘り窪められるものが多い。

S H 1009 (第13図) 第4次調査区の北西部で検出した竪穴建物である。平面形は円形で、浅い皿状である。規模は長径2.7 m、短径2.6 m、深さ0.24 mである。集石炉 S F 1023 と土坑 S K 1028 と一部重複する。建物内では支柱穴をはじめ、壁周溝及び被熱痕跡、建物外では垂木穴の痕跡は確認できなかった。埋土は二層からなり、第1層が暗褐色粘質土で、第2層が暗褐色土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢(1・2)、磨石(3)、石皿(4・5)、楔形石器(6)、U F (7)がある。
S H 1012 (第14図) 第4次調査区の北西部で検出した竪穴建物である。平面形は円形で、浅い皿状である。規模は、長径3.8 m、短径3.7 m、深さ0.11 mである。竪穴建物 S H 1025 と一部重複している。新旧関係は、竪穴建物 S H 1012 が古く、竪穴建物 S H 1025 が新しい。また、土坑 S K 1035・S K 1079 とも重複する。建物内には支柱穴をはじめ、壁周溝及び被熱痕跡、建物外には垂木穴の痕跡は確認できなかった。埋土は一層で、褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢(8~10)がある。
S H 1013 (第13図) 第4次調査区の中央北部で検出した竪穴建物である。平面形は円形で、浅い皿状である。規模は長径3.0 m、短径2.9 m、深さ0.15 mである。支柱穴をはじめ、壁周溝及び屋内に被熱痕跡は確認できなかった。建物の外側には垂木穴と考えられる柱穴がいくつか存在している。埋土は一

層で、褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢(11~16)、磨石(17)がある。

S H 1025 (第14図) 第4次調査区の北西部で検出した竪穴建物である。平面形は円形で、浅い皿状である。規模は径3.7 m、深さ0.17 mである。竪穴建物 S H 1012 と一部重複している。支柱穴をはじめ、壁周溝及び屋内に被熱痕跡、垂木穴の痕跡は確認できなかった。埋土は一層で、暗褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢(18~24)、磨石(25~27)、石皿(28・29)、剥片(30)、敲石(31)、礫器(32)がある。

S H 1701 (第15図) 第11次調査区の中央南隅で、東海環状自動車道(以下、東環とする)の第3次調査区にまたがって検出した竪穴建物 S H 370 と同じである。遺構の上半部が削平を受けており、底部の深い部分しか残存していないが、一つの竪穴建物と判断した。平面形は不明である。

出土遺物には、縄文土器深鉢(33)がある。

イ 煙道付炉穴

土坑状の遺構にトンネルが取りつき、底面から壁面にかけて被熱痕跡や炭化物を含む埋土をとどめる遺構について、煙道付炉穴として報告する。

S F 1003 (第16図) 第4次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸1.6 m、短軸0.6 m、深さ0.33 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 51° Eである。遺構の底面から壁面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸1.28 m、短軸0.55 m、厚さ0.06 mの範囲である。被熱痕跡は広い。埋土は、第1層がにぶい黄褐色粘質土、第2層がにぶい赤褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1004 (第16図) 第4次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸2.3 m、短軸0.7 m、深さ0.25 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 134° Wである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇

所あり、北側が長軸 0.53 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.02 m で、南側が長軸 0.44 m、短軸 0.32 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい黄褐色粘質土、第 2 層が灰黄褐色粘質土、第 3 層が黒褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1005 (第 17 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.8 m 以上、短軸 0.5 m、深さ 0.18 m である。西側は、煙道付炉穴 S F 1062 と重複していたとみられる。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 26° E である。壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.54 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (34)、礫器 (35) がある。また、AMS 法による放射性炭素年代測定¹⁾(以下、年代測定と略して表記する) では 2σ 暦年代範囲で 8630 - 8422cal B C を示す。

S F 1006 (第 17 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.5 m、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼部にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 123° W である。壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇所あり、北側が長軸 0.69 m、短軸 0.5 m、厚さ 0.05 m で、南側が長軸 0.23 m、短軸 0.17 m、厚さ 0.01 m である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層がにぶい赤褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (36) がある。

S F 1007 (第 18 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.8 m、深さ 0.29 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 173° E である。遺構の底面から壁面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.7 m、短軸 0.64 m、厚さ 0.1 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐灰色粘質土、第 2 層が灰褐色粘質

土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1008 (第 18 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.5 m、深さ 0.27 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 68° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.1 m、短軸 0.5 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が黒褐色粘質土、第 2 層が明黄褐色粘土質砂、第 3 層が黒褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器片、剥片 (37)、磨石 (38) がある。

S F 1014 (第 19 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形とみられる。遺構の一部は、煙道付炉穴 S F 1080 と重複している。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.5 m、深さ 0.24 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 125° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.87 m、短軸 0.38 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰黄褐色粘質土、第 2 層が灰褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1015 (第 19 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形である。規模は長軸 2.1 m、短軸 0.5 m、深さ 0.40 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 127° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.49 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色粘質土、第 2 層が灰黄褐色粘質土、第 3 層が灰黄褐色粘質土、第 4 層がにぶい黄褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器数点、石皿 (39) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8489 - 8301cal B C を示す。

S F 1016 (第 20 図) 第 4 次調査区の北西部で検

出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形とみられる。集石炉 S F 1022 と重複している。新旧関係は煙道付炉穴 S F 1016 → 集石炉 S F 1022 である。規模は長軸 1.2 m 以上、短軸 0.7 m、深さ 0.37 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 125° W である。遺構の底面から壁面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.6 m、短径軸 0.57 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土、第 2 層が灰褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (40～51)、剥片 (52) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8658 - 8538cal B C を示す。

S F 1018 (第 20 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.5 m、深さ 0.37 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 17° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.22 m、短軸 0.49 m、厚さ 0.1 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層が明黄褐色粘土質砂、第 3 層が褐灰色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (53) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8738 - 8548cal B C を示す。

S F 1019 (第 21 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形であろう。規模は長軸 1.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.08 m である。煙道付炉穴の大部分は、攪乱により削平を受けている。炉の方位は、N 135° E である。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は二箇所あり、北側が長軸 0.5 m、短軸 0.49 m、厚さ 0.02 m の範囲である。もう一箇所は、長軸 0.47 m、短軸 0.39 m、厚さ 0.02 m である。埋土は、被熱痕跡の上層が一部残るのみで、にぶい赤褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器数点、磨石 (54) がある。**S F 1024** (第 22 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形で

ある。規模は長軸 2.0 m、短軸 1.0 m、深さ 0.44 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 41° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.45 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.03 m の範囲である。それ以外に壁面に数箇所の被熱痕跡を留める。また、10～20cm 前後の礫が埋土中に底面から浮いた状態で出土している。廃棄土坑の可能性も考えられる。埋土は、第 1 層が黒褐色粘質土、第 2 層が暗褐色粘質土、第 3 層がにぶい黄褐色粘質土、第 4 層が明黄褐色砂質土である。

出土遺物には、縄文土器数点、磨石 (55)、楔形石器 (56)、礫器 (57) がある。

S F 1029 (第 23 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.8 m、深さ 0.41 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 2° W である。遺構の底面は、中央部を中心に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.6 m、短軸 0.6 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰黄褐色粘質土、第 2 層が暗褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (58・59)、礫器 (60) がある。

S F 1030 (第 23 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.6 m、深さ 0.5 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 126° E である。遺構の底面の中央部を中心に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.95 m、短軸 0.46 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色粘質土、第 2 層が黒褐色粘質土、第 3 層が暗褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (69)、U F (70)、石皿 (71・74)、磨石 (72)、敲石 (73)、礫器 (75) がある。これらの遺物は、第 1 層から第 2 層にかけて出土しており、煙道付炉穴として使用したのちに、廃棄土坑として再利用されたと考えられる。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8659 - 8537cal

BCを示す。

S F 1062 (第 17 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。遺構の一部は煙道付炉穴 S F 1005 と重複している。規模は長軸 1.35 m、短軸 0.5 m、深さ 0.14 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 82° E である。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.98 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (61) がある。年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8555 - 8322cal BC および 8485 - 8301cal BC を示す。

S F 1073 (第 24 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は円形である。遺構は、後世の攪乱によって大きく削平されている。規模は長軸 0.6 m 以上、短軸 0.6 m 以上、深さは不明である。他の煙道付炉穴に伴うような被熱痕跡を留めていないが、埋土中に焼土・炭化物を含むため、煙道付炉穴とした。

出土遺物はない。

S F 1074 (第 24 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。北東部分において煙道付炉穴 S F 1077 と重複している。遺構の新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1074 の構築・廃棄後に煙道付炉穴 S F 1077 が構築される。規模は長軸 1.6 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.54 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 142° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.82 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層が暗褐色粘質土、第 3 層がにぶい黄褐色粘質土、第 4 層がにぶい褐色粘質土である。なお、第 1 層では 10 ~ 20cm 前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (62) がある。

S F 1077 (第 24 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。遺構は、攪乱によって北東部分を中心に削平を受け

ている。規模は長軸 0.9 m 以上、短軸 0.7 m、深さ 0.34 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 137° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.45 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層が焼土・炭を含む灰褐色粘質土、第 3 層が明赤褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1080 (第 19 図) 第 4 次調査区の北西部で検出した煙道付炉穴である。大半が削平を受けており、一部分だけの残存である。平面形は不明である。遺構の一部は煙道付炉穴 S F 1014 と重複している。規模は不明である。炉の方位は、N 88° E とみられる。遺構の壁面の一部は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。

出土遺物はない。

S F 1105 (第 25 図) 第 5 次調査北区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.4 m、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 32° E である。遺構の底面は、南寄りを中心に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.55 m、短軸 0.34 m、厚さ 0.09 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土、第 2 層が灰褐色粘質土である。5 ~ 20cm 前後の礫が第 1 層を中心に出土している。

出土遺物はない。

S F 1106 (第 25 図) 第 5 次調査北区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.8 m、深さ 0.19 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 119° W である。遺構の壁面から底面全体に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.35 m、短軸 0.57 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1110 (第 25 図) 第 5 次調査北区の中央北側

で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.65 m、短軸 0.8 m、深さ 0.26 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 89° W である。遺構の壁面から底面にかけては、被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.8 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層が褐色粘質土である。

出土遺物には、石皿 (63) がある。

S F 1112 (第 26 図) 第 5 次調査北区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.7 m、短軸 0.7 m、深さ 0.36 m である。煙出坑から燃焼部にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 131° E である。遺構の底面の西寄りを中心に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.95 m、短軸 0.62 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色粘質土、第 2 層が焼土を含む暗褐色粘質土、第 3 層が焼土や炭化物を含む灰褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1113 (第 26 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.25 m、短軸 0.65 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 28° E である。遺構の底面全体の基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.7 m、短軸 0.57 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が焼土を含む赤褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1114 (第 26 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.65 m、深さ 0.4 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 114° W である。遺構の底面中央部は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.45 m、短軸 0.33 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい黄褐色粘質土、第 2 層が焼土や炭化物を含む灰褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1115 (第 26 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 2.25 m、短軸 0.75 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 118° E である。遺構の壁面から底面にかけて分散し、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、最も大きい範囲で長軸 0.42 m、短軸 0.23 m、厚さ 0.03 m である。埋土は、第 1 層が焼土や炭化物を含む灰褐色粘質土、第 2 層が黒褐色粘質土、第 3 層が褐灰色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1116 (第 27 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.5 m、深さ 0.29 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 57° E である。遺構の壁面から底面にかけては、被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。底面の被熱痕跡は、長軸 0.5 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層の褐色粘質土である。

出土遺物には、石皿 (76)、縄文土器深鉢 (77) がある。

S F 1120 (第 27 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形はやや不定形な楕円形である。規模は長軸 1.55 m、短軸 0.95 m、深さ 0.4 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 103° W である。遺構の壁面から底面全面にかけては、全体的に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。埋土の堆積状況から複数回にわたって使用された可能性が考えられる。

出土遺物はない。

S F 1121 (第 27 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.25 m、短軸 0.7 m、深さ 0.11 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 90° E である。遺構の底面は全体的に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.85 m、短

軸 0.49 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色粘質土、第 2 層が焼土を含む暗褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1122 (第 28 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.55 m、短軸 0.8 m、深さ 0.26 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 27° E である。遺構の底面を中心に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.94 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土、第 2 層が焼土を含む暗褐色粘質土、第 3 層が焼土や炭化物を含むにぶい赤褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1123 (第 28 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.65 m、短軸 0.6 m、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 144° W である。遺構の壁面から底面を中心に二箇所、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、東側が長軸 0.75 m、短軸 0.46 m、厚さ 0.13 m で、西側が長軸 0.4 m、短軸 0.33 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色粘質土、第 2 層が褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1125 (第 28 図) 第 5 次調査北区の中央南側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.7 m、深さ 0.28 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分が、残存している。炉の方位は、N 151° E である。遺構の壁面から底面にかけては、被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。埋土は、第 1 層が灰褐色土、第 2 層が褐色粘質土、第 3 層が焼土や炭化物を含む褐色粘質土、第 4 層が赤灰色粘質土、第 5 層が黒色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1126 (第 29 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.7 m、短軸 0.7 m、深さ 0.2 m であ

る。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 28° E である。遺構の底面は、全体的に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.27 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土、第 2 層が暗褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1129 (第 29 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形である。規模は長軸 1.45 m、短軸 0.65 m、深さ 0.3 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 134° W である。遺構の東側を中心に壁面から底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.77 m、短軸 0.39 m、厚さ 0.6 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土、第 2 層が明褐色粘質土、第 3 層が焼土や炭化物を含む暗褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1131 (第 29 図) 第 5 次調査北区の東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.5 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 140° W である。底面の基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.55 m、短軸 0.42 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は一層で、焼土や炭化物を含む灰褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1133 (第 30 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.0 m、短軸 0.55 m、深さ 0.21 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 30° E である。遺構の壁面から底面にかけて基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.73 m、短軸 0.54 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (64・65) がある。

S F 1134 (第 30 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。

規模は長軸 0.85 m、短軸 0.5 m、深さ 0.09 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 138° E である。遺構の壁面を中心に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。埋土は、焼土や炭化物を含む暗褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1135 (第 30 図) 第 5 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形である。規模は長軸 1.55 m、短軸 0.45 m、深さ 0.35 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 131° W である。遺構の壁面から底面にかけて基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.0 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層が褐灰色粘質土、第 3 層が灰褐色粘質土、第 4 層が焼土や炭化物を含む黒褐色粘質土、第 5 層が焼土を含む暗褐色粘質土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (66・67) がある。

S F 1136 (第 30 図) 第 5 次調査北区の中央東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.6 m、短軸 0.35 m、深さ 0.05 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、不明である。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.34 m、短軸 0.16 m、厚さ 0.06 m の範囲である。

出土遺物はない。

S F 1203 (第 31 図) 第 8 次調査の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.7 m、短軸 0.4 m、深さ 0.3 m である。内部は、西側が深く二段になるように掘り窪められており、その中央部分はやや深い。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 64° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は二箇所あり、遺構の中央部を中心としたものが長軸 0.83 m、短軸 0.39 m、厚さ 0.1 m で、東側が長軸 0.35 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物

を含む褐灰色粘質土、第 2 層が黄褐色粘質土、第 3 層が炭化物を含む灰黄褐色粘質土、第 4 層が炭化物を含むいぼい褐色粘質土、第 5 層が焼土や炭化物を含む灰褐色粘質土である。

出土遺物には、礫器 (68) がある。

S F 1204 (第 31 図) 第 8 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.35 m、短軸 0.45 m、深さ 0.22 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 120° W である。遺構の壁面から底面にかけて基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は二箇所あり、西側が長軸 0.45 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.1 m で、東側が長軸 0.57 m、短軸 0.33 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層がいぼい黄褐色粘質土、第 2 層が焼土や炭化物を含む褐色粘質土、第 3 層が炭化物を含む黒褐色粘質土である。第 1 層から第 3 層にかけて 10 ~ 20cm 前後の礫が含まれる。

出土遺物はない。

S F 1205 (第 31 図) 第 8 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 0.85 m、短軸 0.4 m、深さ 0.09 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 46° E である。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.38 m、短軸 0.31 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、炭化物を含む灰黄褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1402 (第 32 図) 第 10 次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形状である。規模は長軸 1.7 m、短軸 0.65 m、深さ 0.26 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 135° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇所あり、北東側が長軸 0.57 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.09 m で、南西側が長軸 0.45 m、短軸 0.34 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐灰色シルト～中位粘砂土、第 2 層が褐色シルト～中粒粘砂土、第 3 層が明褐色シルト～中粒粘砂土、第 4

層が暗褐色シルト～中粒粘砂土、第5層が褐色シルト～中粒粘砂土、第6層が暗赤褐色シルト～中粒粘砂土、第7層がにぶい褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢（78～81）、磨石（82）がある。また、年代測定によると2 σ 暦年代範囲で3028 - 2910cal BCを示す。

S F 1403（第33図） 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。遺構は、攪乱により大きく削平されており、平面形は不定な楕円形である。規模は長軸0.65 m以上、短軸0.45 m、深さ0.19 mである。壁面は、一部オーバーハングしている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 147° Wである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.39 m、短軸0.22 m、厚さ0.03 mの範囲である。埋土は、第1層が黒褐色シルト～中粒粘砂土、第2層が暗褐色シルト～中粒粘砂土、第3層が極暗褐色シルト～細粒粘砂土、第4層が褐色シルト～中粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1405（第32図） 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形状である。規模は長軸2.0 m、短軸0.5 m、深さ0.21 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 48° Eである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇所ある。北東側は、長軸0.87 m、短軸0.42 m、厚さ0.05 mで、南西側は、長軸0.75 m、短軸0.44 m、厚さ0.04 mの範囲である。埋土は、第1層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が黒褐色シルト～中粒粘砂土、第3層が褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1406（第33図） 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸0.7 m、短軸0.4 m、深さ0.15 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 150° Eである。遺構の壁面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。また、10～20cm前後の礫がみられる。

埋土は、第1層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が褐色シルト～中粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1408（第33図） 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸0.9 m、短軸0.5 m、深さ0.18 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 36° Wである。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。アメーバ状の被熱痕跡は、長軸0.41 m、短軸0.35 m、厚さ0.06 mの範囲である。遺構の中央部付近には、磨石・土器細片が確認でき、廃棄土坑の可能性もある。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が黒褐色シルト～粗粒粘砂土、第3層が明褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、磨石（83）がある。

S F 1410（第34図） 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸1.6 m、短軸0.6 m、深さ0.38 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 137° Wである。遺構の壁面から底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.54 m、短軸0.45 m、厚さ0.03 mの範囲である。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第3層がにぶい褐色ブロックを含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第4層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢（84）がある。また、年代測定によると2 σ 暦年代範囲で8796 - 8617cal BCを示す。

S F 1411（第33図） 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は片方がやや尖り気味の二等辺三角形状である。規模は長軸2.1 m、短軸0.9 m、深さ0.45 mである。煙出坑から燃焼坑にかけては、一部分トンネル状に残る。炉の方位は、N 136° Eである。遺構の壁面から底面とトンネル部分にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。底面の被熱痕跡は、長軸0.85 m、短軸0.58 m、厚さ0.02 mの範囲である。一方、トンネル部分については、基盤層が厚さ0.05 mの

範囲である。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第3層が黒褐色シルト～粗粒粘砂土、第4層が褐色シルト～粗粒砂、第5層がトンネル部分の崩落土とみられるにぶい赤褐色シルト～中粒粘砂土である。炉の内部には、10～20cm前後の礫が多くみられた。礫は被熱痕跡を残していないため、炉の廃棄後に投げられたものとみられる。

出土遺物には、縄文土器数点がある。

S F 1412 (第34図) 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。煙道付炉穴 S F 1415 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1412 を廃棄後に煙道付炉穴 S F 1415 が構築される。規模は長軸 0.85 m 以上、短軸 0.45 m、深さ 0.22 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 52° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.39 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.05 m の範囲である。炉の内部には、石皿をはじめとした 10～20cm の礫が確認された。礫は被熱痕跡を残していないため、炉の廃棄後に投げられたものであろう。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層がにぶい赤褐色シルト～粗粒砂、第3層が焼土である赤褐色シルト～粗粒砂である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (85・86)、石皿 (87～89) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8741 - 8554cal B C を示す。

S F 1415 (第34図) 第10次調査北区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.5 m、深さ 0.31 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 152° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.52 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が炭化物を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。炉の内部には、10～20cm 前後の礫や石皿がみられた。礫は被熱痕跡を残していないため、廃棄後に投げられたとみられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (90・91)、石皿 (92) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8651 - 8537cal B C を示す。

S F 1416 (第35図) 第10次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.2 m 以上、短軸 0.55 m、深さ 0.13 m である。煙道付炉穴 S F 1425 と重複している。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1416 廃棄後に煙道付炉穴 S F 1425 が構築される。炉の方位は、N 151° W である。遺構の壁面の一部と底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.52 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第1層が灰褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が明褐色ブロックを含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1419 (第36図) 第10次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.8 m、短軸 0.65 m、深さ 0.4 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 131° W である。遺構の中央部は壁面から底面にかけて、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.98 m、短軸 0.63 m、厚さ 0.01 m の範囲である。炉の内部には、石皿を初めとした 5～20cm 前後の礫がみられた。礫は被熱痕跡を残していないため、炉の廃棄後に投げられたものであろう。埋土は、第1層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が明黄褐色ブロックや炭化物を含む灰褐色シルト～粗粒粘砂土、第3層が炭化物を含む暗褐色シルト～中粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器数点、石皿 (93・94) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8748 - 8601cal B C を示す。

S F 1420 (第36図) 第10次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.35 m、短軸 0.45 m、深さ 0.19 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 110° E である。遺構の南東を中心として壁面から底面に向け

ては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.6 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。炉の内部には、10～20cm 前後の礫がみられた。礫は被熱痕跡を残していないため、炉の廃棄後に投げられたとみられる。

出土遺物はない。

S F 1421 (第 37・38 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.1 m 以上、短軸 0.55 m、深さ 0.37 m である。遺構の一部は、連結状態で煙道付炉穴 S F 1457・1499 などと繋がっている。新旧関係は、S F 1421 → 1457 → 1499 である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 131° W である。遺構の中央部の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.65 m、短軸 0.44 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物は、縄文土器数点、石皿 (95) がある。

S F 1422 (第 37・38 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。煙道付炉穴 S F 1423・1499 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1423・1499 の方が新しいとみられる。規模は長軸 1.1 m 以上、短軸 0.65 m、深さ 0.16 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 131° W である。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.44 m、短軸 0.37 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8632 - 8425cal B C を示す。

S F 1423 (第 37・38 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。煙道付炉穴 S F 1422・1424・1499 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1423 が

最も新しいとみられる。規模は長軸 1.65 m、短軸 0.55 m、深さ 0.34 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 140° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.68 m、短軸 0.42 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層がにぶい黄褐色ブロックを含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1424 (第 37・38 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.9 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.22 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 160° E である。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.48 m、短軸 0.38 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1425 (第 35 図) 第 10 次調査南区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。同一方向で煙道付炉穴 S F 1416 と重複する。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1416 より S F 1425 の方が新しいとみられる。規模は長軸 1.35 m、短軸 0.5 m、深さ 0.29 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてトンネル状に残る。炉の方位は、N 30° E である。遺構の壁面から底面及びトンネル付近は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.42 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.01 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (96・97)、礫器 (98) がある。

S F 1430 (第 39 図) 第 10 次調査南区の北西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。煙道付炉穴 S F 1455 とほぼ同一方向で重複している。新旧関係は、S F 1455 より S F 1430 の方が

新しいとみられる。規模は長軸 1.8 m、短軸 0.55 m、深さ 0.17 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 134° E である。遺構の底面が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.66 m、短軸 0.34 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が明褐色焼土ブロックを含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土内には、5～10cm 前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器片、石皿 (99)、礫器 (100) がある。

S F 1431 (第 40 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。遺構は、掘削された土坑と被熱痕跡を離れて確認した。規模は長軸 1.15 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.06 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 50° W である。遺構のトンネル部とみられる被熱痕跡は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。平面形は円形で、規模は直径 0.2 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1432 (第 40 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.85 m、短軸 0.45 m、深さ 0.08 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 136° W である。遺構の中央部付近の底面から壁面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.47 m、短軸 0.38 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1434 (第 40 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.5 m、深さ 0.27 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 176° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱

を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、不定形であるが長軸 0.5 m、短軸 0.41 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が灰褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が焼土を含む明褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土中から 10～20cm 前後の自然礫が随所で出土した。礫のなかには被熱を受けているものもある。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1441 (第 41 図) 第 10 次調査南区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。煙道付炉穴 S F 1456 とほぼ同一方向に重複している。新旧関係は、S F 1456 → S F 1441 の順である。規模は長軸 2.0 m、短軸 0.7 m、深さ 0.31 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 104° W である。遺構の北東側の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.48 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物や礫を含む灰褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が明褐色焼土ブロックや炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (101)、磨石 (102) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8641 - 8533cal B C を示す。

S F 1452 (第 41 図) 第 10 次調査南区の中央部で検出した煙道付炉穴である。被熱痕跡だけが残存したとみられる。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.8 m 以上、短軸 0.55 m 以上、深さ 0.05 m である。炉の方位は、N 37° W である。被熱痕跡は、遺構の底面とみられる箇所では基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。

出土遺物はない。

S F 1455 (第 39 図) 第 10 次調査南区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。煙道付炉穴 S F 1430 とほぼ同一方向で重複している。新旧関係は、S F 1430 よりも古い。規模は長軸 1.5 m 以上、短軸 0.65 m、深さ 0.4 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 134° E である。遺構

の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.7 m、短軸0.45 m、厚さ0.05 mの範囲である。埋土内で遺構の底面には、10cm前後の礫がみられた。埋土は、にぶい黄褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1456 (第41図) 第10次調査南区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。煙道付炉穴 S F 1441 とほぼ同一方向に重複している。新旧関係は、S F 1456 → 1441 の順である。規模は長軸1.31 m以上、短軸0.7 m、深さ0.15 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 104° Wである。底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.8 m、短軸0.5 m、厚さ0.06 mの範囲である。埋土は、にぶい褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1457 (第37・38図) 第10次調査南区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形とみられる。煙道付炉穴 S F 1458・1499 と重複している。新旧関係は、S F 1458 → 1457 → 1499 の順序である。規模は長軸1.45 m以上、短軸0.55 m、深さ0.28 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 125° Wである。遺構の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸1.24 m、短軸0.5 m、厚さ0.05 mの範囲である。一部はS F 1499 の被熱痕跡を重複しているとみられる。埋土は、第1層が赤褐色焼土ブロックや炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土内には5～10cm前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器片、石核(103)がある。

S F 1458 (第37・38図) 第10次調査南区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形であろうか。煙道付炉穴 S F 1457 と重複している。新旧関係は、S F 1458 よりも S F 1457 の方が新しいとみられる。規模は長軸0.4 m以上、短軸0.4 m、深さ0.18 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N

26° Wである。被熱痕跡は、ごく一部でみられる。埋土は、第1層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層がにぶい黄褐色ブロックを含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土内には、10cm前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器数点、磨石(104)がある。

S F 1465 (第41図) 第10次調査北区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形に近い。規模は長軸1.4 m、短軸0.5 m、深さ0.17 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 42° Eである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.78 m、短軸0.48 m、厚さ0.11 mの範囲である。埋土は、炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土内には、5～20cm前後の礫が多くみられた。

出土遺物はない。

S F 1467 (第41図) 第10次調査北区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸0.55 m、短軸0.25 m、深さ0.14 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 33° Eである。遺構の壁面を中心として底面の一部は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。埋土は、炭化物を含む黒褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1469 (第41図) 第10次調査北区の西側で検出した煙道付炉穴である。遺構は、後世の溝によって削平を受けている。平面形は長楕円形である。規模は長軸0.85 m、短軸0.25 m以上、深さ0.15 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 118° Wである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.45 m、短軸0.25 m、厚さ0.03 mの範囲である。埋土は、焼土を含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1470 (第42図) 第10次調査北区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸1.6 m以上、短軸0.5 m、深さ0.25 mで

ある。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 128° Wである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は三箇所ある。大きな被熱痕跡は、長軸 0.47 m、短軸 0.39 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1471 (第 42 図) 第 10 次調査北区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形状である。遺構の中央部は、後世の柱穴によって掘削されている。規模は長軸 1.75 m、短軸 0.7 m、深さ 0.19 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 125° W である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は二箇所あり、大きい被熱痕跡は、長軸 1.08 m、短軸 0.57 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (105) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8636 - 8448 cal BC を示す。

S F 1472 (第 42 図) 第 10 次調査北区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 0.85 m、短軸 0.4 m、深さ 0.08 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 44° E である。被熱痕跡は、確認できなかった。埋土は、暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1473 (第 43 図) 第 10 次調査北区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.6 m、短軸 0.55 m、深さ 0.21 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 82° E である。被熱痕跡は、確認できなかった。埋土は、第 1 層が

炭化物を含む灰褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含むにぶい褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土には、炭化物を含んでいるため、煙道付炉穴と判断した。

出土遺物はない。

S F 1474 (第 43 図) 第 10 次調査北区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.5 m、深さ 0.18 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 69° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。底面の被熱痕跡は、二箇所あり、両壁面にも被熱痕跡を留める。北側の被熱痕跡は、長軸 0.35 m、短軸 0.14 m、厚さ 0.04 m、南側の被熱痕跡は、長軸 0.39 m、短軸 0.27 m、厚さ 0.01 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層がにぶい黄褐色ブロックを含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層がにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 5 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 6 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (106・107) がある。

S F 1475 (第 42 図) 第 10 次調査北区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形である。遺構は後世の溝によってかなり削平を受けている。規模は長軸 0.75 m 以上、短軸 0.3 m 以上、深さ 0.18 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 38° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.4 m、短軸 0.33 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1476 (第 44 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は丸みを帯びた二等辺三角形である。煙道付炉穴 S F 1482・1483 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1482 → 1483 → 1476 の順である。規模は長軸 1.25 m 以上、短軸 0.6 m 以上、深さ 0.19 m である。

煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 64° Eである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.71 m、短軸0.6 m、厚さ0.08 mの範囲である。埋土は、第1層がにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第3層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1477 (第45図) 第10次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。遺構の大半は後世の溝によって削平を受けている。平面形は楕円形状であろうか。煙道付炉穴S F 1481と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴S F 1477 → 1481の順である。また、規模は長軸0.4 m以上、短軸0.35 m以上、深さ0.29 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 72° Wである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、残存している範囲で、長軸0.32 m、短軸0.24 m、厚さ0.03 mである。埋土は、第1層が炭化物を含む黒褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1478 (第46図) 第10次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。後世の溝によって削平を受けている。また、北側で煙道付炉穴S F 1484と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴S F 1478 → 1484の順である。規模は長軸1.3 m以上、短軸0.55 m、深さ0.32 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 126° Wである。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸1.15 m、短軸0.55 m、厚さ0.03 mの範囲である。埋土は、第1層がにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第3層が褐色シルト～粗粒粘砂土である。第3層には、5～15 cm前後の自然礫がみられた。

出土遺物はない。

S F 1480 (第45図) 第10次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。

後世の溝によって削平を受けているが、煙道付炉穴S F 1477と連結していたと推測される。新旧関係は、不明である。規模は長軸1.5 m以上、短軸0.8 m、深さ0.35 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 33° Eである。炉穴の中央部の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.68 m、短軸0.58 m、厚さ0.05 mの範囲である。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層がにぶい黄褐色ブロックを含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。第1層からは、10 cm前後の自然礫や石皿などがみられた。

出土遺物には、縄文土器数点、磨石(108)、石皿(109)がある。

S F 1481 (第45図) 第10次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形形状であろうか。北側で煙道付炉穴S F 1477と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴S F 1477 → 1481の順である。規模は長軸1.45 m以上、短軸0.6 m、深さ0.17 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 56° Wである。炉穴の中央部の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.57 m、短軸0.45 m、厚さ0.04 mの範囲である。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土の第2層で5～10 cm前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器深鉢(110・111)、礫器(112)がある。

S F 1482 (第44図) 第10次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は先端を丸くした二等辺三角形形状である。北東側において煙道付炉穴S F 1476・1483と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴S F 1482 → 1476の順である。規模は長軸1.85 m、短軸0.6 m、深さ0.29 mである。内部は、二段になるように掘り窪められている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 140° Wである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇所あり、南側

が長軸 0.73 m、短軸 0.6 m、厚さ 0.04 m で、北側が長軸 0.17 m、短軸 0.12 m、厚さ 0.06 m の範囲である。もう一基煙道付炉穴が重複している可能性もあるか。埋土は、第 1 層が褐色ブロックを含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が赤褐色焼土ブロック・炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層がにぶい黄褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1483 (第 44 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形であろうか。北東側で煙道付炉穴 S F 1476 と北側で煙道付炉穴 S F 1482 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1483 → 1476 の順である。規模は長軸 0.75 m 以上、短軸 0.55 m、深さ 0.18 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 119° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.6 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色土、第 2 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が赤褐色焼土ブロックを含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土の第 2 層で 10cm 前後の礫がみられた。

出土遺物はない。

S F 1484 (第 46 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。後世の溝によって削平を受けている。南側で煙道付炉穴 S F 1478 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1478 → 1484 の順である。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.7 m、深さ 0.34 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 114° W である。炉穴全体に壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.14 m、短軸 0.68 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が第 1 層と同様に褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層が明褐色焼土ブロックを含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 5 層が明赤褐色ブロックを含むにぶい赤褐色シルト～

粗粒粘砂土、第 6 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。おそらく第 5 層は、トンネル部分は崩落し、堆積したものとみられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (113・114) がある。**S F 1485** (第 47 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形に近い。規模は長軸 1.35 m、短軸 0.5 m、深さ 0.13 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 125° W である。炉穴の南西側を中心に壁面から底面にかけて、基盤層まで被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.92 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む灰褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。第 3 層は、トンネル部分の崩落土とみられる。埋土の第 1 層から 5～10cm 前後の礫がみられた。

出土遺物はない。

S F 1486 (第 47 図) 第 10 次調査北区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.5 m、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 57° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.45 m、短軸 0.35 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が焼土を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。埋土の第 1 層からは、10cm 前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1487 (第 47 図) 第 10 次調査北区の中央北側で検出した煙道付炉穴である。平面形はやや不定な長楕円形である。炉穴の一部は、攪乱によって削平を受けている。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.55 m、深さ 0.18 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 98° W である。炉穴の中央部の底面は、基盤層が被

熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.69 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層がにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層がシルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S F 1488 (第 48 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形状である。北東側で煙道付炉穴 S F 1489・1491 と連結している。新旧関係は、埋土の堆積状況から煙道付炉穴 S F 1491 → 1489 → 1488 の順である。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.55 m、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 121° W である。炉穴の南側の大半が壁面から底面にかけて、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.83 m、短軸 0.46 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が赤褐色焼土を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む黒褐色シルト～粗粒粘砂土である。第 2 層は、トンネル部分が崩落した堆積の可能性がある。

出土遺物には、磨石 (115) がある。

S F 1489 (第 48 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形状である。北東側で煙道付炉穴 S F 1491 と南西側で煙道付炉穴 S F 1488 と連結している。新旧関係は、埋土の堆積状況から煙道付炉穴 S F 1491 → 1489 → 1488 の順である。規模は長軸 2.1 m 以上、短軸 0.7 m、深さ 0.35 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 112° W である。炉穴の北側の一部を除いて、南側の大半が壁面から底面にかけて、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.73 m、短軸 0.65 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が暗赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層が暗赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 5 層が炭化物を含む黒褐色シルト～粗粒粘砂土、第 6 層が焼土ブロックを

含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 7 層が赤褐色シルト～粗粒砂、第 8 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒砂である。埋土の第 2 層には、5～20 cm 前後の礫がみられた。礫自体ほとんど被熱を受けていないため、使用後に入れられたとみられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (116・117)、石皿 (118・119)、磨石 (120) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8748 - 8601 cal B C を示す。

S F 1491 (第 48 図) 第 10 次調査北区の中央東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形であろうか。南西側で煙道付炉穴 S F 1489 と連結している。新旧関係は、埋土の堆積状況から煙道付炉穴 S F 1491 → 1489 → 1488 の順である。規模は長軸 1.15 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 116° W である。炉穴の北半分は、壁面から底面にかけて基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.8 m、短軸 0.52 m、厚さ 0.02 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が焼土ブロックを含む褐色シルト～粗粒粘砂土、第 4 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1494 (第 49 図) 第 10 次調査北区の中央東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な楕円形である。炉穴のほとんどが後世の遺構によって削平を受けており、残存部分は少ない。規模は長軸 0.5 m 以上、短軸 0.35 m 以上、深さ 0.11 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 51° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.3 m、短軸 0.15 m、厚さ 0.02 m の範囲である。埋土は、炭化物を含むにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1495 (第 47 図) 第 10 次調査北区の中央東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な楕円形である。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.55 m、深さ 0.08 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部

分は、残存していない。炉の方位は、N 134° Wである。底面には、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.45 m、短軸 0.29 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層がにぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1497 (第 49 図) 第 10 次調査北区の中央東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。後世の溝によって削平を受けている。規模は長軸 0.55 m、短軸 0.4 m、深さ 0.08 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 41° E である。炉穴の壁面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が赤褐色焼土ブロックや炭化物を含む褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1499 (第 37・38 図) 第 10 次調査南区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形形状であろうか。西側で煙道付炉穴 S F 1422・1457、北側で煙道付炉穴 S F 1421、南側で煙道付炉穴 S F 1423 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1422・1457 → 1499、1421 → 1499 の順である。規模は長軸 1.5 m 以上、短軸 0.55 m、深さ 0.35 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 171° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、煙道付炉穴 S F 1457 と繋がっており、長軸 1.05 m、短軸 0.41 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層がにぶい黄褐色ブロックや炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8619 - 8415cal B C を示す。

S F 1500 (第 49 図) 第 10 次調査北区の中央東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形とみられる。規模は長軸 1.9 m、短軸 0.6 m 以上、深さ 0.23 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのト

ンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 70° E である。炉穴の東側の壁面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.4 m、短軸 0.15 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1501 (第 50 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形状とみられる。北側で煙道付炉穴 S F 1719 と連結しているだけでなく、下層には煙道付炉穴 S F 1717 が重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1717 → 1719 → 1501 の順である。規模は長軸 1.05 m、短軸 0.55 m、深さ 0.15 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 133° W である。炉穴の北側を中心に壁面から底面にかけて、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.6 m、短軸 0.56 m、厚さ 0.03 m 以上の範囲である。埋土は、焼土ブロック・炭化物を含む褐色粘質シルトである。埋土内には石皿があり、一部被熱を受けている。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (121)、石皿 (122) がある。

S F 1507 (第 50 図) 第 11 次調査区の北西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形である。東側の一部は、攪乱によって削平を受けている。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.65 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 93° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.11 m、短軸 0.6 m、厚さ 0.1 m の範囲である。埋土は、炭化物を含む褐色砂質シルトである。埋土内には、15～20cm 前後の礫が置かれており、被熱を受けている。

出土遺物はない。

S F 1508 (第 50 図) 第 11 次調査区の北西隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.4 m、深さ 0.2 m である。内部は、二段になるように掘り窪められている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存し

ていない。炉の方位は、N 77° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで及んでおり、長軸 1.08 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.08 mの範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい黄褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトである。第 1 層には土器片が含まれている。第 2 層には 10cm前後の礫がみられるが、被熱を受けていない。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (123) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8748 - 8606cal B Cを示す。

S F 1511 (第 51 図) 第 11 次調査区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形である。炉穴は全体的に後世の削平を受けており、残存状況は良くない。規模は基盤層の被熱痕跡を含めて長軸 1.15 m、短軸 0.55 m、深さ 0.05 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 5° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、全体的に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.99 m、短軸 0.57 m、厚さ 0.07 mの範囲である。埋土は、炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1512 (第 51 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形状である。規模は長軸 1.25 m、短軸 0.45 m、深さ 0.1 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 55° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.9 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.04 mの範囲である。埋土は、炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1513 (第 51 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.0 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 104° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、全体的に基盤層が被熱

を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.98 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.08 mの範囲である。埋土は、炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (124・125) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8827 - 8698cal B Cを示す。

S F 1518 (第 51 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.1 m、短軸 0.6 m、深さ 0.15 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 86° Eである。炉穴の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、ほぼ底面全体に及び、長軸 0.75 m、短軸 0.51 m、厚さ 0.09 mの範囲である。埋土は、炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1519 (第 52 図) 第 11 次調査区の中央南側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 0.8 m、短軸 0.4 m、深さ 0.1 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 116° Eである。埋土は、炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1521 (第 52 図) 第 11 次調査区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形状である。南半分は樹木の根によって削平を受けている。規模は長軸 1.1 m、短軸 0.5 m、深さ 0.2 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 178° Wである。炉穴の壁面から底面にかけては、逆 U 字状に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.67 m、短軸 0.42 m、厚さ 0.03 mの範囲である。埋土は、第 1 層が褐色～暗褐色粘質シルト、第 2 層が褐色粘質シルト、第 3 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1525 (第 52 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.35 m、深さ 0.2 mである。内部は、壁面の一部がオーバーハングしている。煙

出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 43° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、全体的に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで及び、長軸 0.8 m、短軸 0.41 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、褐色～赤褐色粘質シルトである。埋土内に 20cm 前後の礫が見られたが被熱を受けていない。

出土遺物はない。

S F 1527 (第 52 図) 第 11 次調査区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴の中央部は、後世の溝によって削平を受けている。規模は長軸 0.8 m、短軸 0.5 m、深さ 0.15 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 55° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の全体に及んで、長軸 0.8 m、短軸 0.5 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が焼土・炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1528 (第 52 図) 第 11 次調査区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴は、後世の削平を受けて被熱痕跡を残しているだけである。規模は長軸 0.6 m、短軸 0.5 m、深さ 0.05 m である。炉の方位は不明である。

出土遺物はない。

S F 1529 (第 52 図) 第 11 次調査区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴は、後世の削平を受けて被熱痕跡を残しているだけである。規模は長軸 0.75 m、短軸 0.6 m、深さ 0.01 m である。炉の方位は不明である。

出土遺物はない。

S F 1530 (第 53 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は歪な楕円形である。全体的に後世の削平を受けているとみられる。規模は長軸 0.65 m、短軸 0.4 m、深さ 0.04 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 14° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤

褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで及んで、長軸 0.85 m、短軸 0.6 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、炭化物を含むにぶい橙色砂質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1532 (第 53 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な楕円形である。全体的に後世の削平を受けているとみられる。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 105° E である。遺構の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで及んで、長軸 0.94 m、短軸 0.48 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、炭化物を含む褐色シルトである。

出土遺物はない。

S F 1533 (第 53 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。北側の一部は古代のピットによって削平を受けている。規模は長軸 1.1 m 以上、短軸 0.45 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 62° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、逆 U 字状になり、長軸 1.05 m、短軸 0.52 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 3 層が炭化物を含む赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8715 - 8553cal B C を示す。

S F 1534 (第 53 図) 第 11 次調査区の西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は、やや歪な楕円形である。炉穴の一部は後世の溝によって削平を受けている。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.6 m、深さ 0.15 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 44° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで及んで、長軸 0.9 m、短軸 0.64 m、

厚さ 0.02 m の範囲である。埋土は、褐色～赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1535 (第 54 図) 第 11 次調査区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な長楕円形である。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.45 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 49° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴のほぼ中央部で東西方向に外側まで及んで、長軸 0.88 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1536 (第 54 図) 第 11 次調査区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴の中央部は、後世の溝によって削平を受けている。規模は長軸 1.0 m、短軸 0.6 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 26° E である。炉穴の中央部付近の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.21 m、短軸 0.18 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む黒褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1537 (第 54 図) 第 11 次調査区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.45 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。南側は壁面が一部オーバーハングしている。炉の方位は、N 110° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで及んで、長軸 0.93 m、短軸 0.52 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい黄褐色粘質シルト、第 2 層がにぶい赤褐色粘質シルト、第 3 層が炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルト、第 4 層が炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。年代測定によると 2 σ 暦年代範

囲で 8752 - 8610cal B C を示す。

S F 1541 (第 54 図) 第 11 次調査区の南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。西側で煙道付炉穴 S F 1724 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1541 → 1724 の順である。規模は長軸 1.25 m、短軸 0.4 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 49° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、中央部からやや南側が中心で、長軸 0.94 m、短軸 0.42 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物・焼土ブロックを含む褐色シルト、第 2 層が炭化物を含む暗褐色シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (126 ~ 128) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8745 - 8605cal B C を示す。

S F 1547 (第 55 図) 第 11 次調査区の中央部で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形であろうか。西側の大半を集石炉 S F 1546 や煙道付炉穴 S F 1716 によって削平を受けている。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1547 → 1716 → 集石炉 S F 1546 の順である。規模は長軸 0.5 m 以上、短軸 0.4 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 64° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、集石炉 S F 1546 と重なっている。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (129) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 13519 - 13195 cal B C を示しており、縄文時代の草創期の可能性も考えられる。

S F 1548 (第 55 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.45 m、深さ 0.15 m である。内部は、やや北側が深くなるように掘り窪められている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 53° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕

跡は、北側を中心に外側まで及んで、長軸 0.82 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含むにぶい赤褐色砂質シルト、第 3 層が炭化物を含む暗褐色砂質シルトである。

出土遺物には、縄文土器数点がある。年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8779 - 8619cal B C を示す。**S F 1549** (第 55 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.35 m、短軸 0.25 m、深さ 0.1 m である。炉穴は、後世の削平を受けており、大半が失われている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 9° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇所にわたっている。埋土は、炭化物を含む褐色粘質シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (130) がある。**S F 1550** (第 56 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。北東側が古代の掘立柱建物の柱穴と重複している。南西側の壁面の一部は、オーバーハングしている。規模は長軸 1.6 m、短軸 0.45 m、深さ 0.45 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 62° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の全体に広がっており、長軸 1.3 m、短軸 0.5 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が焼土・炭化物を含む褐色～暗褐色粘質シルト、第 2 層が赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。**S F 1552** (第 55 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は歪な円形である。炉穴は、後世の削平を受けている。規模は長軸 0.35 m、短軸 0.3 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 32° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、二箇所あり、ともに、長軸 0.26 m、短軸 0.1 m である。底面におい

ては、基盤層の礫が露呈している。埋土は、焼土・炭化物を含む褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。**S F 1553** (第 55 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴は、後世の削平を受けている。規模は長軸 0.35 m、短軸 0.2 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 31° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は二箇所あり、ともに、長軸 0.25 m、短軸 0.1 m である。埋土は、第 1 層が赤褐色粘質シルト、第 2 層がにぶい赤褐色粘質シルト、第 3 層が暗褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。**S F 1554** (第 56 図) 第 11 次調査区の中央南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形とみられる。南側で煙道付炉穴 S F 1555 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1555 → 1554 とと思われる。規模は長軸 0.85 m、短軸 0.4 m、深さ 0.05 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 34° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.46 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。**S F 1555** (第 56 図) 第 11 次調査区の中央南西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形とみられる。北側で煙道付炉穴 S F 1554 と連結している。規模は長軸 0.65 m、短軸 0.35 m 以上、深さ 0.05 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 92° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、全体的に広がっており、長軸 0.6 m、短軸 0.39 m、厚さ 0.02 m の範囲である。埋土は、焼土・炭化物を含む暗赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。**S F 1556** (第 56 図) 第 11 次調査区の中央南西側

で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴は、後世の削平を受けている。規模は長軸 0.65 m、短軸 0.45 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 29° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.74 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質土、第 2 層が炭化物を含む赤褐色粘質土である。

出土遺物はない。

S F 1559 (第 57 図) 第 11 次調査区の中央南端で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の一部は古代のピットによって削平を受けている。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.55 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 26° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.9 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を多く含む暗褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1561 (第 55 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。炉穴は、全体的に後世の削平を受けている。被熱痕跡を確認しただけである。平面形は楕円形である。炉の方位は、被熱痕跡だけのため不明である。炉穴は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.5 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.03 m の範囲である。

出土遺物はない。

S F 1564 (第 57 図) 第 11 次調査区の中央南端で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の壁面の一部は、オーバーハングしている。規模は長軸 1.45 m、短軸 0.35 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 42° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 1.11 m、短軸 0.38 m、

厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルトである。

出土遺物には、磨石 (131) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8779 - 8619cal B C を示す。

S F 1579 (第 57 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴の北側は、後世の削平を受けている。規模は長軸 0.95 m 以上、短軸 0.5 m、深さ 0.35 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 58° E である。炉穴の壁面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、ほぼ壁面を一周しているが、底面では確認できなかった。埋土は、第 1 層が長石粒を含む灰褐色粘質シルト、第 2 層が灰褐色粘質シルト、第 3 層が炭化物を含む褐灰色砂質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1580 (第 57 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。炉穴は、後世の削平を受けており、被熱痕跡を確認できただけである。平面形は円形である。炉の方位は、不明である。炉穴は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.3 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.03 m の範囲である。

出土遺物はない。

S F 1581 (第 58 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は歪な楕円形である。炉穴の壁面の一部は、オーバーハングしている。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.65 m、深さ 0.5 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 51° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、穴全体に及び、長軸 0.67 m、短軸 0.6 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい黄橙色粘質シルトブロックを含む灰黄褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む褐灰色粘質シルト、第 3 層が灰黄褐色砂質シルト、第 4 層がにぶい橙色粘質シルトブロックを含む褐灰色砂質シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (132) がある。

S F 1582 (第 58 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.95 m、短軸 0.55 m、深さ 0.3 m である。内部は、二段になるように掘り窪められている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 65° E である。炉穴の底面は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.59 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質シルト、第 2 層がにぶい橙色粘質シルトブロックを含むにぶい褐色砂質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1583 (第 58 図) 第 11 次調査区の中央北端で検出した煙道付炉穴である。平面形は歪な楕円形である。規模は長軸 0.6 m、短軸 0.4 m、深さ 0.02 m である。煙出坑から燃焼部にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 121° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.47 m、短軸 0.32 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、にぶい赤褐色砂質シルトである。20cm前後の礫が含まれており、被熱を受けている。

出土遺物には、石皿 (137) がある。

S F 1586 (第 58 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な楕円形である。南側で後世の削平を受けている。規模は長軸 0.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 49° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.43 m、短軸 0.36 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい橙色粘質シルトブロックを含むにぶい黄褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1587 (第 58 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形である。炉穴の北側の一部は後世の削平を受けている。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.5 m、深さ 0.05 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存

していない。炉の方位は、N 114° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 1.05 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、赤橙色粘質シルトブロックを含むにぶい灰褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1592 (第 59 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な楕円形である。炉穴の北側の一部は後世の削平を受けている。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 51° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、円弧状に基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.73 m、短軸 0.46 m、厚さ 0.02 m の範囲である。埋土は、第 1 層がにぶい褐色シルト、第 2 層が炭化物を含む極暗褐色シルト、第 3 層が焼土ブロック・炭化物を含む黒色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1593 (第 50 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴の南西側で煙道付炉穴 S F 1719 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1593 → 1719 の順である。規模は長軸 0.8 m 以上、短軸 0.45 m、深さ 0.2 m である。内部は、底面の凹凸が著しい。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 109° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.8 m、短軸 0.58 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルト、第 2 層がにぶい赤褐色粘質シルト、第 3 層が焼土ブロックを含む暗赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1594 (第 59 図) 第 11 次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.85 m、短軸 0.4 m、深さ 0.4 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存

している。炉の方位は、N 50° Eである。遺構の壁面から底面及びトンネル天井部にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.05 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.05 mの範囲である。埋土は、第1層が焼土・炭化物を含む暗褐色～褐色砂質シルト、第2層がにぶい赤褐色粘質シルトである。なお、煙出坑に近い位置からピットが検出されている。このピットからの遺物はないが、埋土の特徴や検出された位置などから炉穴に関連する遺構である可能性が考えられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢（133）がある。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8635 - 8535cal BCを示す。

S F 1595（第59図） 第11次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。炉穴の中央部は、樹木の根によって削平を受けている。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 76° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は推定であるが、長軸 0.72 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.02 mの範囲である。埋土は、第1層が焼土・炭化物を含む暗褐色土である。

出土遺物はない。

S F 1596（第60図） 第11次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形はやや角張った楕円形である。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.5 m、深さ 0.2 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。また、炉穴内部には、被熱痕跡を残していない。炉の方位は、N 78° Eである。埋土は、炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトである。土坑の可能性もあるが、埋土内には炭化物を含んでいるため煙道付炉穴と判断した。

出土遺物はない。

S F 1597（第60図） 第11次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形であろうか。炉穴の北側の大半と西側が後世の削平を受けている。規模は長軸 1.05 m、短軸 0.8 m、深さ 0.2 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 151° Eである。

炉穴内部には被熱痕跡を残していない。埋土は、第1層が炭化物を含む灰赤褐色粘質シルト、第2層が炭化物を含む赤灰色砂質シルト、第3層が灰褐色砂質シルトである。土坑の可能性もあるが、埋土内には炭化物を含んでいるため煙道付炉穴と判断した。

出土遺物はない。

S F 1702（第60図） 第11次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.5 m、深さ 0.35 mである。内部は、二段になるように掘り窪められている。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 86° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.79 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.04 mの範囲である。埋土は、第1層が炭化物を含む褐色粘質シルト、第2層が炭化物を含む暗褐色粘質シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢（134・135）がある。

S F 1705（第61図） 第11次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。北東側と南側の一部は、古代のピットによって削平を受けている。規模は長軸 1.6 m、短軸 0.45 m、深さ 0.25 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 23° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.97 m、短軸 0.5 m、厚さ 0.06 mの範囲である。埋土は、第1層が炭化物を含むにぶい黄褐色粘質シルト、第2層が炭化物を含む暗褐色砂質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1706（第61図） 第11次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の各所で古代のピットによって削平を受けている。炉穴の西側は煙道付炉穴 S F 1707 と南側は煙道付炉穴 S F 1728 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1707 → 1706 → 1728 の順である。規模は長軸 1.3 m以上、短軸 0.5 m、深さ 0.25 mである。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 32° Eである。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受け

て赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の中央部で、長軸 1.09 m、短軸 0.46 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む灰褐色～褐灰色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物には、磨石 (136) がある。

S F 1707 (第 61 図) 第 11 次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の南東側で煙道付炉穴 S F 1706 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1707 → 1706 の順である。規模は長軸 0.8 m 以上、短軸 0.35 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼部にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 51° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.58 m、短軸 0.5 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、にぶい橙色粘質ブロックを含む褐灰色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1713 (第 62 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.95 m、短軸 0.5 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 48° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.62 m、短軸 0.4 m、厚さ 0.04 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む褐色シルト、第 2 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 3 層が暗褐色シルトである。第 1 層及び第 2 層からは、土器片と 5～10 cm 前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (138～143) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8712 - 8549cal B C を示す。

S F 1716 (第 55 図) 第 11 次調査区の中央南側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の東側で煙道付炉穴 S F 1547 と集石炉 S F 1546 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1547 → 1716 → 集石炉 S F 1546 の順である。規模は長軸 1.4 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.35 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分が

残存している。炉の方位は、N 116° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴のほぼ全体に及び、長軸 1.75 m、短軸 0.48 m、厚さ 0.08 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色～褐色シルト、第 2 層が極暗赤褐色～明赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1717 (第 50 図) 第 11 次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴は煙道付炉穴 S F 1501 と同じ位置で重複している。また、北側で煙道付炉穴 S F 1719 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1717 → 1719 → 1501 の順である。規模は長軸 0.85 m、短軸 0.35 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 124° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.6 m、短軸 0.57 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、炭化物を含む褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1718 (第 62 図) 第 11 次調査区の中央南端で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の北西側が一部、古代の遺構によって削平を受けている。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.65 m、深さ 0.45 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 70° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 1.04 m、短軸 0.55 m、厚さ 0.55 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 3 層は暗赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8713 - 8550cal B C を示す。

S F 1719 (第 50 図) 第 11 次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の東側で煙道付炉穴 S F 1593 と南西側で煙道付炉穴 S F 1501・1717 と連結している。新旧関係は、

煙道付炉穴 S F 1717・1593 → 1719 → 1501 の順である。規模は長軸 1.0 m 以上、短軸 0.45 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 132° W である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.67 m、短軸 0.42 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む灰褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含むいぶい赤褐色粘質シルト、第 3 層が焼土ブロックを含むいぶい赤褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1721 (第 62 図) 第 11 次調査区の北東側で検出した煙道付炉穴である。平面形は不定な楕円形である。炉穴の大半は、後世の削平を受けている。規模は長軸 0.4 m 以上、短軸 0.3 m 以上、深さ 0.24 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、不明である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、いくつも確認できた。埋土は、第 1 層が焼土ブロック・明赤褐色粘質シルトを含む灰褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1723 (第 62 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.75 m、短軸 0.55 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 70° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.59 m、短軸 0.44 m、厚さ 0.07 m の範囲である。埋土は、第 1 層が褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1724 (第 54 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。北東側で煙道付炉穴 S F 1541 と連結している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1541 → 1724 の順である。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.45 m、深さ 0.2 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、

残存していない。炉の方位は、N 44° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 1.03 m、短軸 0.53 m、厚さ 0.03 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む褐色から暗褐色シルト、第 2 層が炭化物を含む黒褐色シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (144) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8488 - 8306 cal BC を示す。

S F 1725 (第 63 図) 第 11 次調査区の中央南側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の一部は、古代のピットによって削平を受けている。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.4 m、深さ 0.3 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 2° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.8 m、短軸 0.45 m、厚さ 0.09 m の範囲である。埋土内には 10 ~ 20 cm 前後の礫がみられた。

出土遺物はない。

S F 1726 (第 63 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は二等辺三角形にやや近い。炉穴は東側が古代のピットによって削平を受けている。また、北側で煙道付炉穴 S F 1727 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1726 → 1727 の順である。規模は長軸 1.15 m、短軸 0.45 m、深さ 0.1 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 96° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 1.0 m、短軸 0.3 m、厚さ 0.06 m の範囲である。埋土は、第 1 層が焼土ブロックを含む明褐色粘質シルトである。

出土遺物はない。

S F 1727 (第 63 図) 第 11 次調査区の中央西側で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。炉穴の東側が古代のピットによって、西側が攪乱によって削平を受けている。また、南側で煙道付

炉穴 S F 1726 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1726 → 1727 の順である。規模は長軸 0.8 m 以上、短軸 0.35 m、深さ 0.15 m である。煙出坑から燃焼部にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 96° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、炉穴の外側まで広がっており、長軸 0.65 m、短軸 0.47 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、炭化物を含むにぶい赤褐色粘質シルトである。埋土内には 10cm 前後の礫がみられた。

出土遺物はない。

S F 1728 (第 61 図) 第 11 次調査区の北東隅で検出した煙道付炉穴である。平面形は長楕円形である。北側で煙道付炉穴 S F 1706 と連結している。新旧関係は、古代のピットによって削平を受けているため順序は判断できない。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.4 m、深さ 0.25 m である。煙出坑から燃焼坑にかけてのトンネル部分は、残存していない。炉の方位は、N 17° E である。炉穴の壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸 0.7 m、短軸 0.37 m、厚さ 0.05 m の範囲である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む灰褐色粘質シルト、第 2 層がにぶい橙色粘質シルト、第 3 層が褐灰色砂質シルトである。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (145)、石皿 (146) がある。

ウ 集石炉

地面を掘り込み、集石を伴う土坑の炉を集石炉として報告する。

S F 1010 (第 64 図) 第 4 次調査区の北西隅で検出した集石炉である。平面形は方形である。規模は、長軸 0.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.27 m である。埋土は、第 1 層が黒褐色粘質土、第 2 層が炭化物を多く含む黒色粘質土である。第 1 層には 10cm 前後の角礫が入っており、第 2 層の底面には 20 ~ 30cm 前後の石があり配石されている。この配石は石皿を割って使用している。

出土遺物には、石皿 (147) がある。

S F 1022 (第 20・64 図) 第 4 次調査区の北西隅で検出した集石炉である。平面形は長方形である。

煙道付炉穴 S F 1016 と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴 S F 1016 → 集石炉 S F 1022 の順である。規模は、長軸 1.1 m、短軸 0.8 m、深さ 0.45 m である。埋土は、第 1 層が灰褐色粘質土、第 2 層が暗褐色粘質土である。埋土の第 1 層から第 2 層にかけては、5 ~ 20cm 前後の円・角礫が多く含まれている。また、基盤層が厚さ 3 cm 前後被熱している。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (148 ~ 154)、磨石 (155・156)、石皿 (157・159)、礫器 (158) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8311 - 8238cal B C を示す。

S F 1023 (第 13・65 図) 第 4 次調査区の北西隅で検出した集石炉である。平面形はほぼ円形である。竪穴建物 S H 1009 と重複している。新旧関係は、竪穴建物 S H 1009 → 集石炉 S F 1023 の順である。規模は、長軸 1.1 m、短軸 1.0 m、深さ 0.7 m である。埋土は、第 1 層が暗褐色粘質土、第 2 層が暗褐色土、第 3 層がにぶい黄褐色粘質土である。5 ~ 20 前後の円・角礫が多くみられる。基盤層が厚さ 2 ~ 6 cm 被熱している。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (160・161)、磨製石斧 (162)、打製石斧 (163)、R F (164)、石皿 (165)、礫器 (166) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8228 - 7942cal B C を示す。

S F 1404 (第 65 図) 第 10 次調査北区の南西隅で検出した集石炉である。平面形は楕円形である。規模は、長軸 1.15 m、短軸 1.0 m、深さ 0.52 m である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色シルト～中粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む極暗褐色シルト～細粒粘砂土、第 3 層がにぶい黄褐色ブロック・炭化物を含む褐色シルト～中粒粘砂土、第 4 層が炭化物を含む明赤褐色シルト～粗粒粘砂土、第 5 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土で、基盤層は被熱する。第 1 層から第 2 層にかけては土器片や 10cm 前後の礫がみられた。第 3 層では 10 ~ 20cm 前後の角礫が多くみられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (172・173)、礫器 (174) がある。また、年代測定によると 2σ 暦年代範囲で 8564 - 8328cal B C を示す。

S F 1414 (第 66 図) 第 10 次調査北区の南西側で検出した集石炉である。平面形は長方形に近い。

規模は、長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.22 m である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗赤褐色シルト～中粒粘砂土、第 2 層が炭化物を含む暗赤褐色シルト～中粒粘砂土、底面に 10～20cm 前後の角礫が入っている。被熱層は厚さ 0.04 m 前後で、集石炉の底面から壁面まで広がっている。

出土遺物はない。

S F 1454 (第 66 図) 第 10 次調査南区の中央部で検出した集石炉である。平面形は方形である。規模は、長軸 0.9 m、短軸 0.75 m、深さ 0.35 m である。埋土は、黒色シルト～粗粒粘砂土である。また、遺構底面には、10～30cm の礫が配石されている。

出土遺物には、石皿 (175) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8739 - 8558cal B C を示す。

S F 1479 (第 66 図) 第 10 次調査北区の中央西側で検出した集石炉である。平面形は楕円形である。規模は、長軸 1.1 m、短軸 0.7 m、深さ 0.38 m である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が極暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む黒褐色シルト～粗粒粘砂土である。被熱層は厚さ 0.04 m 前後で、遺構の中央部周辺だけでなく壁面においても確認できた。円・角礫は第 1 層から第 3 層底面においてみられ、30cm 前後の大型礫も含まれる。

出土遺物には、縄文土器深鉢 (167・168)、剥片 (169・171)、U F (170) がある。

S F 1490 (第 66 図) 第 10 次調査北区の中央部で検出した集石炉である。平面形は長方形である。一部は、後世の溝によって削平を受けている。規模は、長軸 1.2 m 以上、短軸 0.8 m 以上、深さ 0.37 m である。埋土は、第 1 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層がにぶい黄褐色ブロック・赤褐色ブロックを含む灰褐色シルト～粗粒粘砂土である。また、被熱層は厚さ 4 cm 前後で、集石炉の中央部周辺から壁際まで広がる。なお、集石炉の底面には、炭化材だけでなく角礫も認められた。

出土遺物には、縄文土器数点、礫器 (176) がある。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8473 - 8295cal B C を示す。

S F 1492 (第 68 図) 第 10 次調査北区の中央部で

検出した集石炉である。平面形は長方形状であろうか。後世の溝によって削平を受けている。規模は、長軸 1.0 m 以上、短軸 0.6 m 以上、深さ 0.29 m である。埋土は、第 1 層が褐色シルト～粗粒粘砂土、第 2 層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第 3 層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。第 2 層内には、10～20cm 前後の礫が含まれている。被熱層は厚さ 3 cm 前後で、遺構の中央部周辺だけでなく壁面まで広がる。

出土遺物には、礫器 (177・178) がある。

S F 1506 (第 67 図) 第 11 次調査区の北西側で検出した集石炉である。平面形は楕円形である。規模は、長軸 0.9 m、短軸 0.7 m、深さ 0.35 m である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルト、第 2 層が炭化物を含む黒褐色細粒シルト、第 3 層が暗褐色粘質シルトである。第 1・2 層には 3～20cm 前後の礫が多くみられる。底面には 20cm 前後の礫によって配石されており、礫上面は被熱している。被熱層は、最大厚 10cm であり、壁面を中心に全周している。

出土遺物はない。また、年代測定によると 2 σ 暦年代範囲で 8556 - 8324cal B C を示す。

S F 1514 (第 67 図) 第 11 次調査区の南西側で検出した集石炉である。平面形は円形である。規模は、長軸 0.55 m、短軸 0.55 m、深さ 0.25 m である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む黒褐色粘質シルト、第 2 層が黒褐色粘質シルト、第 3 層が炭化物を含む暗褐色粘質シルトである。第 1・2 層には 10cm 前後の礫が含まれている。第 3 層には 10cm 前後の礫が配石される。被熱層は、壁面を中心に途切れながらも全周する。

出土遺物はない。

S F 1544 (第 68 図) 第 11 次調査の中央西側で検出した集石炉である。平面形は方形である。規模は、長軸 0.6 m、短軸 0.6 m、深さ 0.25 m である。埋土は、第 1 層が炭化物を含む黒褐色～暗褐色細粒シルト、第 2 層が炭化物を含む黒色～黒褐色粘質シルトである。第 1・2 層において 5～20cm 前後の礫が含まれている。第 1・2 層が底面の配石の可能性も考えられる。埋土に炭化物が含まれるが被熱層は確認できなかった。

出土遺物には、石皿 (179) がある。また、年代

測定によると2σ暦年代範囲で8756 - 8610cal B Cを示す。

S F 1546 (第68図) 第11次調査区の中央部で検出した集石炉である。平面形は楕円形である。集石炉全体が煙道付炉穴S F 1547・1716と重複している。新旧関係は、煙道付炉穴S F 1547 → 1716 → 集石炉S F 1546の順である。規模は、長軸0.9 m、短軸0.7 m、深さ0.3 mである。埋土は、第1層が炭化物を含む極暗赤褐色シルト、第2層が炭化物を含む黒褐色シルト、第3層が炭化物を含む黒色粘質シルトである。第1・2層は5 cm前後の礫が多く含まれる。第3層には10 ~ 30cm前後の礫が配石される。被熱層は壁際を中心に認められる。

出土遺物には、石皿(180)がある。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8750 - 8607cal B Cを示す。

S F 1570 (第69図) 第11次調査区の中央南東側で検出した集石炉である。平面形はほぼ円形である。規模は、長軸0.65 m、短軸0.55 m、深さ0.15 mである。埋土は、第1層は炭化物を含む黒色粘質シルトで、第2層は炭化物を含む褐色粘質シルトである。第1層には5 cm前後の礫が多くみられる。第2層には20cm以上の扁平礫が配石される。なお、被熱痕跡は確認できなかった。

出土遺物には、石皿(181 ~ 183)がある。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8714 - 8547cal B Cを示す。

S F 1584 (第69図) 第11次調査区の北東側で検出した集石炉である。平面形はほぼ円形である。規模は、長軸0.8 m、短軸0.75 m、深さ0.32 mである。埋土は、第1層が黒色シルト、第2層が炭化物を含む黒色シルト、第3層が炭化物・黄褐色ブロックを含む黒色シルトである。第1層には、10 ~ 30cm前後の礫が多く含まれる。第2・3層には、炭化物が確認され、被熱痕跡は壁面を中心にみられる。

出土遺物はない。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8479 - 8300cal B Cを示す。

S F 1585 (第70図) 第11次調査区の北東側で検出した集石炉である。平面形は不定円形である。規模は、長軸0.75 m、短軸0.55 m、深さ0.2 mである。埋土は、第1層が炭化物を含む黒色粘質シルト、第

2層が炭化物・黄褐色ブロックを含む黒褐色シルト、第3層はにぶい赤褐色粘質シルトである。第1層には5 ~ 10cm前後の礫が多くみられる。第2層には10 ~ 30cmの扁平礫が配石されている。被熱痕跡は北側を中心に壁面でみられた。

出土遺物はない。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8760 - 8605cal B Cを示す。

S F 1629 (第70図) 第12次調査区の東側で検出した集石炉である。平面形は楕円形である。規模は、長軸1.2 m、短軸1.05 m、深さ0.3 mである。埋土は、第1層が炭化物を含む褐色灰色シルト、第2層が炭化物を含む黒色土、第3層が炭化物を含む灰黄褐色砂質土、第4層がにぶい黄褐色シルト質土、第5層が炭化物を含むにぶい黄褐色シルトである。第1層には10 ~ 20cm前後の礫が含まれる。第2層にはやや大きめの20cm前後の礫が含まれるが、底面に配石をした痕跡は認められない。

出土遺物はない。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8475 - 8294cal B Cおよび8487 - 8300cal B Cを示す。

エ 土坑炉

地面を掘り込み、石を伴わない土坑の炉を土坑炉として報告する

S F 1310 (第71図) 第9次調査区の北東側で検出した土坑炉である。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.0 m、短軸0.95 m、深さ0.3 mである。壁面は、オーバーハングしている。壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.67 m、短軸0.6 m、厚さ0.04 mの範囲である。埋土は、第1層が黒褐色シルト～中粒粘砂土、第2層が暗褐色シルト～中粒粘砂土、第3層が褐色シルト～中粒粘砂土、第4層が褐色シルト～中粒粘砂土である。

出土遺物はない。

S F 1493 (第71図) 第10次調査北区の東側検出した土坑炉である。平面形は楕円形とみられる。規模は長軸0.9 m以上、短軸0.5 m以上、深さ0.32 mである。壁面から底面にかけては、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。被熱痕跡は、長軸0.62 m、短軸0.37 m、厚さ0.02 mの範囲である。埋土は、第1層が暗褐色シルト～粗粒粘砂土、

第2層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土である。土坑炉としたが、後世の削平を受けているため、煙道付炉穴の可能性も考えられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢（184）がある。

S F 1498（第71図） 第10次調査北区の東側で検出した土坑炉である。平面形は楕円形とみられる。土坑炉の西側を後世の溝によって削平を受けている。規模は長軸0.8 m、短軸0.5 m以上、深さ0.25 mである。壁面から底面の一部は、基盤層が被熱を受けて赤褐色系の色調に変化している。埋土は、第1層が褐色ブロックを含む暗褐色シルト～粗粒粘砂土、第2層が炭化物を含む暗褐色シルト～粗粒砂である。土坑炉としたが、煙道付炉穴の可能性も考えられる。

出土遺物はない。また、年代測定によると2σ暦年代範囲で8465 - 8292cal BCを示す。

オ 集石遺構

炉跡ではなく、礫を多く含む土坑を集石遺構として報告する。

S K 1107（第72図） 第5次調査北区の中央部で検出した集石遺構である。平面形は不定な円形である。規模は長軸0.7 m、短軸0.6 m、深さ0.18 mである。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物はない。

S K 1722（第72図） 第11次調査区の南東側で検出した集石遺構である。平面形は不定な方形である。規模は長軸1.5 m、短軸1.4 m、深さ0.25 mである。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、縄文土器深鉢（192）、石皿（193～195）、台石（196）がある。

（2）縄文時代中期から後期

縄文時代中期から後期の遺構数は、竪穴建物3棟、袋状土坑6基、土坑6基、集石遺構6基である。

ア 竪穴建物

S H 1103（第73・74図） 第5次調査北区の中央北端で検出した竪穴建物である。平面形はほぼ円形で、遺構の約半分は調査区外である。規模は長径4.1 m、短径2.15 m以上、深さ0.53 mである。建物内には、支柱穴とみられる柱穴2つと、壁周溝を確認した。被熱痕跡や屋内炉は、調査区内で確認できなかった。埋土中には多くの礫や土器で埋められており、遺物

の廃棄土坑として機能していたとみられる。

出土遺物には、縄文土器深鉢（197～296・298～342）、台付深鉢（297・343～349）、石鏃（350）、楔形石器（351）、R F（352）、U F（353）、石皿（354～356）がある。

S H 1104（第74図） 第5次調査北区の中央北端で検出した竪穴建物である。平面形はほぼ円形で、遺構の約半分は調査区外である。規模は長径5.15 m、短径3.15 m以上、深さ0.86 mである。建物内では支柱穴をはじめ2重の壁周溝を確認しており、建て替えの可能性がある。被熱痕跡は確認できなかったが、屋内炉の可能性のある遺構が、中央からやや北よりの位置に認められる。

出土遺物には、縄文土器深鉢（357～375・377）、台付深鉢（376）、凹石（378）がある。

S H 1679（第75図） 第12次調査区の南西隅で検出した竪穴建物である。平面形はほぼ円形である。規模は、長径3.45 m、短径3.2 m、深さ0.3 mである。屋内炉S K 1693を中央部からやや西寄りで見出した。平面形は正方形で、規模は長径0.65 m、短径0.55 m、深さ0.28 mである。炉の内部は、側面から底部にかけて土器を破碎して敷き詰めている。支柱穴は、壁際近くの四隅に配する。柱穴の規模は、径0.2～0.25 m、深さ0.25～0.3 mである。壁周溝は、最大幅0.4 m、深さ0.1 mである。北面には壁周溝が見られなかったため、建物の出入り口は北側であったと思われる。建物の北東隅には拳大以下の集石が見られたが、性格は不明である。

埋土の出土遺物には時期差がみられ、時期は中期末葉から後期初頭である。屋内炉S K 1693から出土した深鉢（386～395）は、額額・高橋編年による4期新段階から5期古段階である。建物埋土から出土した深鉢の脚台部（383）は、額額・高橋編年の4期から5期、深鉢（381）は、口縁部における筒状突起があるため後期初頭のものである。

イ 袋状土坑

S K 1311（第76図） 第9次調査区の東端で検出した袋状土坑である。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.05 m、短軸0.95 m、深さ0.41 mである。壁面は、オーバーハングしている。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、磨石（396）がある。

S K 1312（第76図） 第9次調査区の東端で検出した袋状土坑である。平面形は楕円形である。壁面は、オーバーハングしている。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。規模は長軸1.1 m、短軸0.95 m、深さ0.4 mである。

出土遺物には、縄文土器深鉢（397～401）、切目石錘（402）がある。

S K 1336（第76図） 第9次調査区の東部で検出した袋状土坑である。平面形はほぼ円形である。規模は長軸0.95 m、短軸0.95 m、深さ0.22 mである。壁面は、オーバーハングしている。

出土遺物には、縄文土器深鉢（403）がある。

S K 1623（第76図） 第12次調査区の中央東側で検出した袋状土坑である。平面形はほぼ円形である。規模は長軸0.95 m、短軸0.9 m、深さ0.3 mである。壁面は、オーバーハングしている。

出土遺物はない。

S K 1671（第77図） 第12次調査区の北西隅で検出した袋状土坑である。平面形は楕円形である。規模は長軸1.6 m、短軸1.4 m、深さ0.45 mである。壁面は、オーバーハングしている。遺構内には10 cm前後の礫がみられた。

出土遺物はない。

S K 1827（第77図） 第13次調査区の東側で検出した袋状土坑である。平面形は楕円形である。規模は長軸0.95 m、短軸0.9 m、深さ0.3 mである。壁面は、オーバーハングしている。遺構内には5～20cm前後の礫がみられた。

出土遺物には、縄文土器深鉢（430～432）がある。

ウ 土坑

S K 1565（第78図） 第11次調査区の中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形である。規模は長軸1.35 m、短軸0.95 m、深さ0.15 mである。

出土遺物には、縄文土器深鉢（404・405）がある。

S K 1657（第78図） 第12次調査区の北西側で検出した集石遺構である。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.05 m、短軸0.9 m、深さ0.25 mである。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、縄文土器深鉢（436～451）、磨石（452）、U F（453）がある。年代測定によると2σ

暦年代範囲で2464 - 2333cal B Cを示す。縄文時代後期初頭とみられる。

S K 1692（第78図） 第12次調査区の南西側で検出した土坑である。平面形はやや歪な楕円形である。規模は長軸0.9 m、短軸0.7 m、深さ0.15 mである。

出土遺物には、縄文土器深鉢（417～423）、剥片（424）がある。

S K 1695（第78図） 第12次調査区の西端で検出した土坑である。平面形は楕円形である。規模は長軸1.2 m、短軸0.75 m、深さ0.15 mである。埋土の色調は、第1層が明黄褐色、第2層が暗赤褐色である。

出土遺物には、縄文土器深鉢（425・426）がある。

S K 1809（第77図） 第13次調査区の北東側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長軸0.95 m、短軸0.7 m、残存の深さは0.08 mである。

出土遺物には、縄文土器深鉢（428）がある。

S K 1841（第78図） 第13次調査区の東側で検出した土坑である。平面形はほぼ円形である。規模は長軸0.5 m、短軸0.45 m、深さ0.35 mである。

出土遺物には、切目石錘（435）がある。

エ 集石遺構

S K 1670（第79図） 第12次調査区の西側で検出した集石遺構である。平面形は楕円形である。規模は長軸1.15 m、短軸1.0 m、深さ0.25 mである。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、磨石・敲石（416）がある。

S K 1686（第79図） 第12次調査区の南西隅で検出した集石遺構である。平面形は方形である。規模は長軸0.7 m、短軸0.65 m、深さ0.2 mである。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、縄文土器片がある。

S K 1838（第79図） 第13次調査区の中央東側で検出した集石遺構である。平面形は方形である。規模は長軸0.8 m、短軸0.75 m、深さ0.25 mである。遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、縄文土器深鉢（454～461）、凹石（462）がある。

S K 1840（第79図） 第13次調査区の中央東側で検出した集石遺構である。平面形は不定な楕円形である。規模は長軸0.75 m、短軸0.4 m、深さ0.1 mである。

遺構内には、5～20cm前後の礫が確認された。

出土遺物には、縄文土器深鉢（433・434）がある。

S K 1849（第79図） 第13次調査区の中央東側で検出した集石遺構である。平面形は不定な楕円形である。S K 1840と重複する。規模は長軸0.65 m、短軸0.6 m以上、深さ0.1 mである。遺構内には、人頭大の礫が確認された。

出土遺物はない。

（3） 縄文時代晩期

ア 埋設土器

S X 1109（第80図） 第5次調査北区の北側で検出した埋設土器である。平面形が楕円形の掘形に、土器を横倒しにして埋設している。掘形の規模は長径1.2 m、短径0.65 m以上、深さ0.53 mである。土器棺墓の可能性が高い。

埋設している土器は、晩期の突帯文土器（463）の深鉢である。

S X 1118（第80図） 第5次調査北区の北側で検出した埋設土器である。平面形が円形の掘形に、土器を直立させて埋設している。掘形の規模は長径0.35 m、短径0.3 m、深さ0.12 mである。上部は後世の削平を受けている。土器棺墓の可能性が高い。

埋設している土器は、晩期の突帯文土器（464・465）の深鉢である。

S X 1517（第80図） 第11次調査区の南西側で検出した埋設土器である。平面形が楕円形の掘形に、土器を横倒しにして埋設している。掘形の規模は長径0.4 m、短径0.3 m、深さ0.05 mである。土器は、細片に割れている。土器棺墓の可能性が高い。

埋設している土器は、晩期の突帯文土器（466・467）の深鉢である。

S X 1590（第80図） 第11次調査区の東側で検出した埋設土器である。平面形が楕円形の掘形に、土器を横倒しにして埋設している。掘形の規模は長径0.55 m、短径0.4 m、深さ0.1 mである。土器棺墓の可能性が高い。

埋設している土器は、晩期の突帯文土器（468・469）の深鉢である。合わせ口で、組み合わされていたものと思われる。

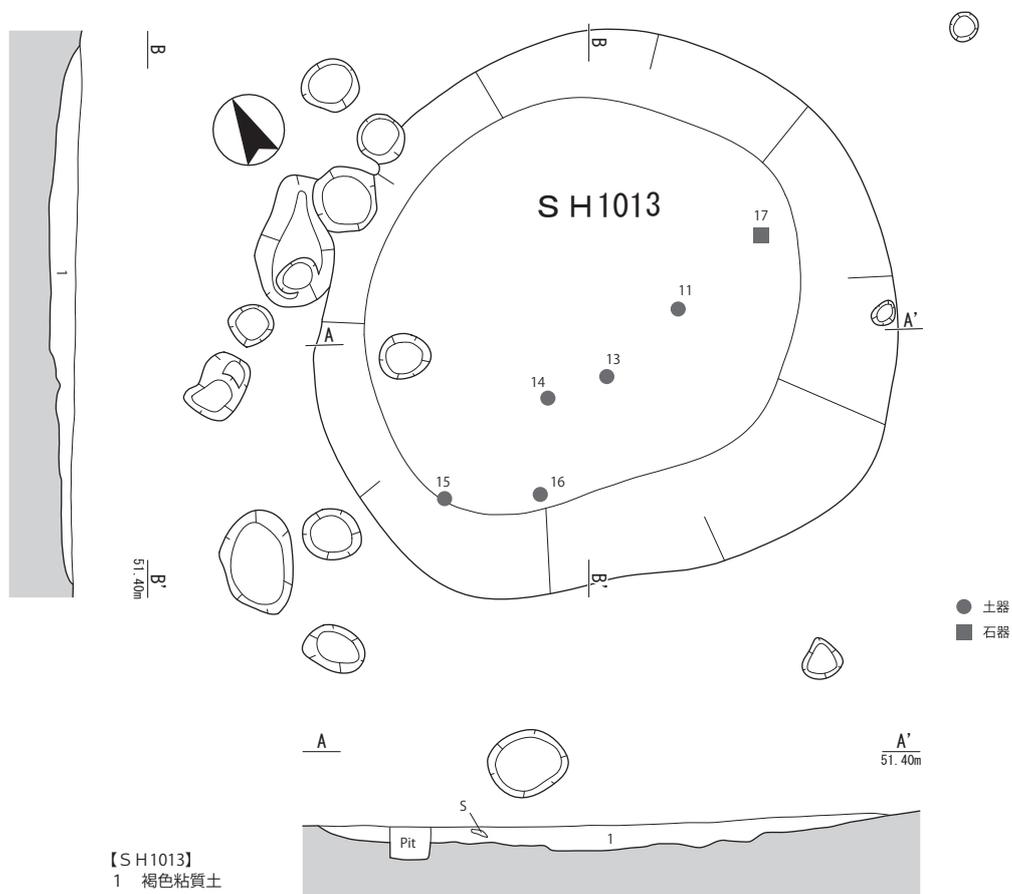
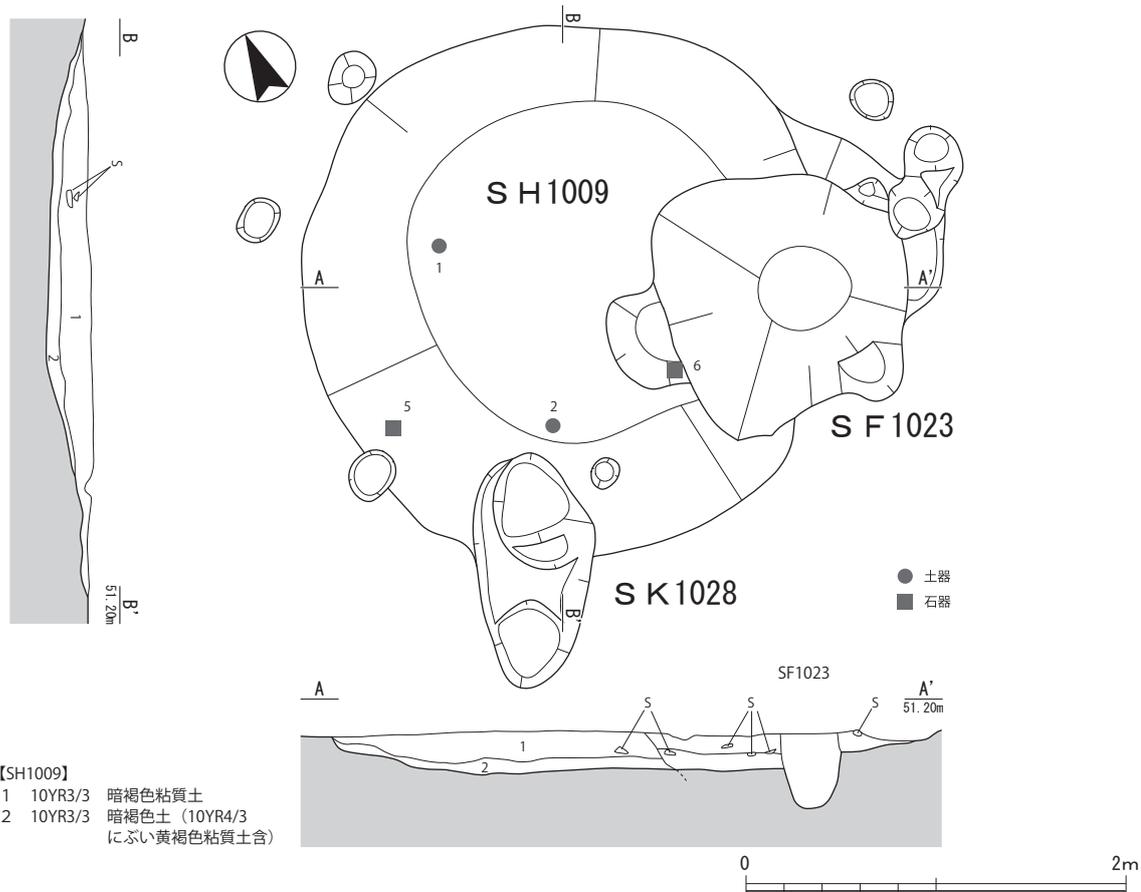
【註】

- 1) 放射性炭素年代測定はすべてAMS法で実施した。詳細は二分冊Ⅵ章-2を参照されたい。

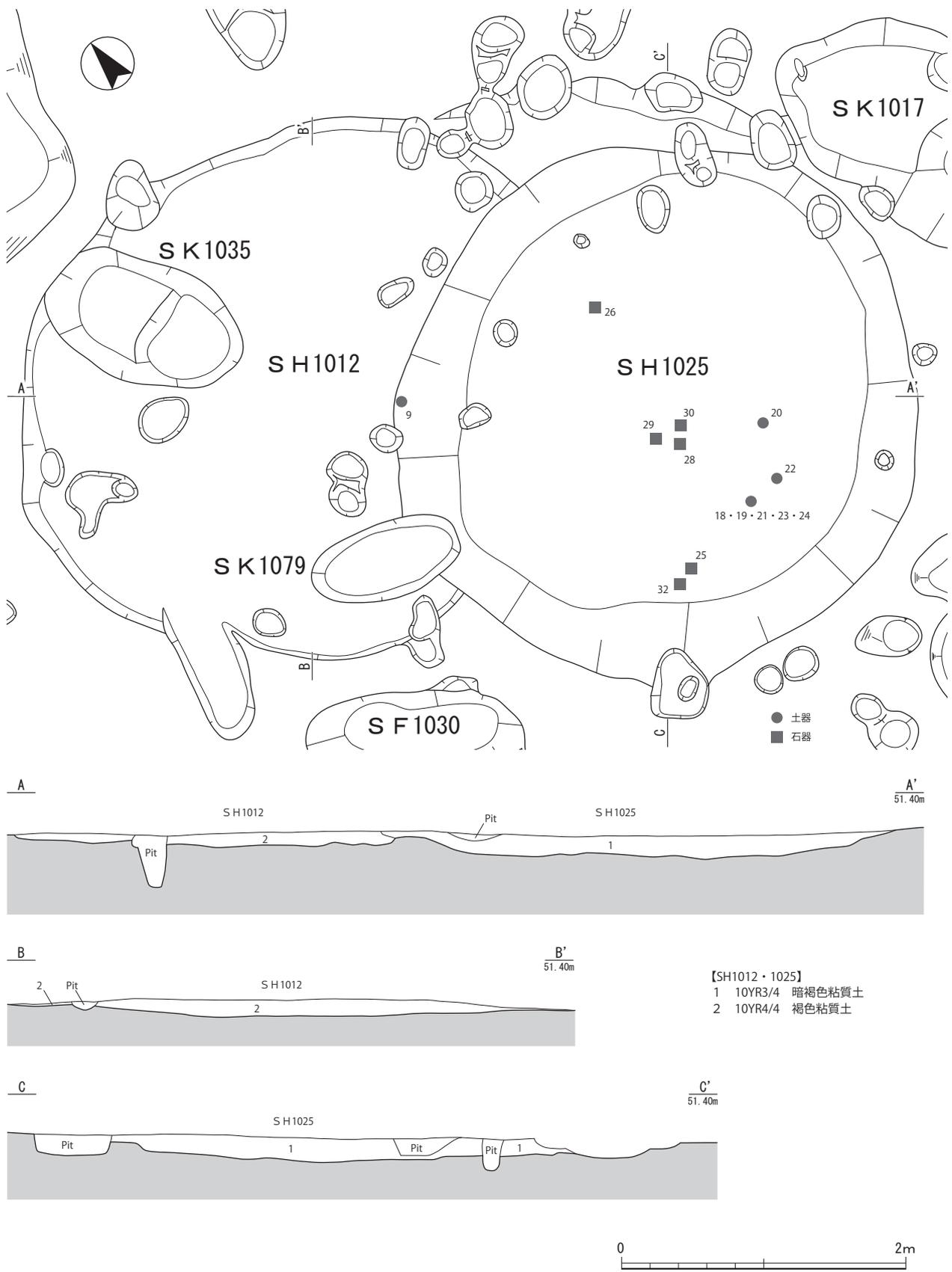
【参考文献】

土器の様式、時期区分は以下の文献による。

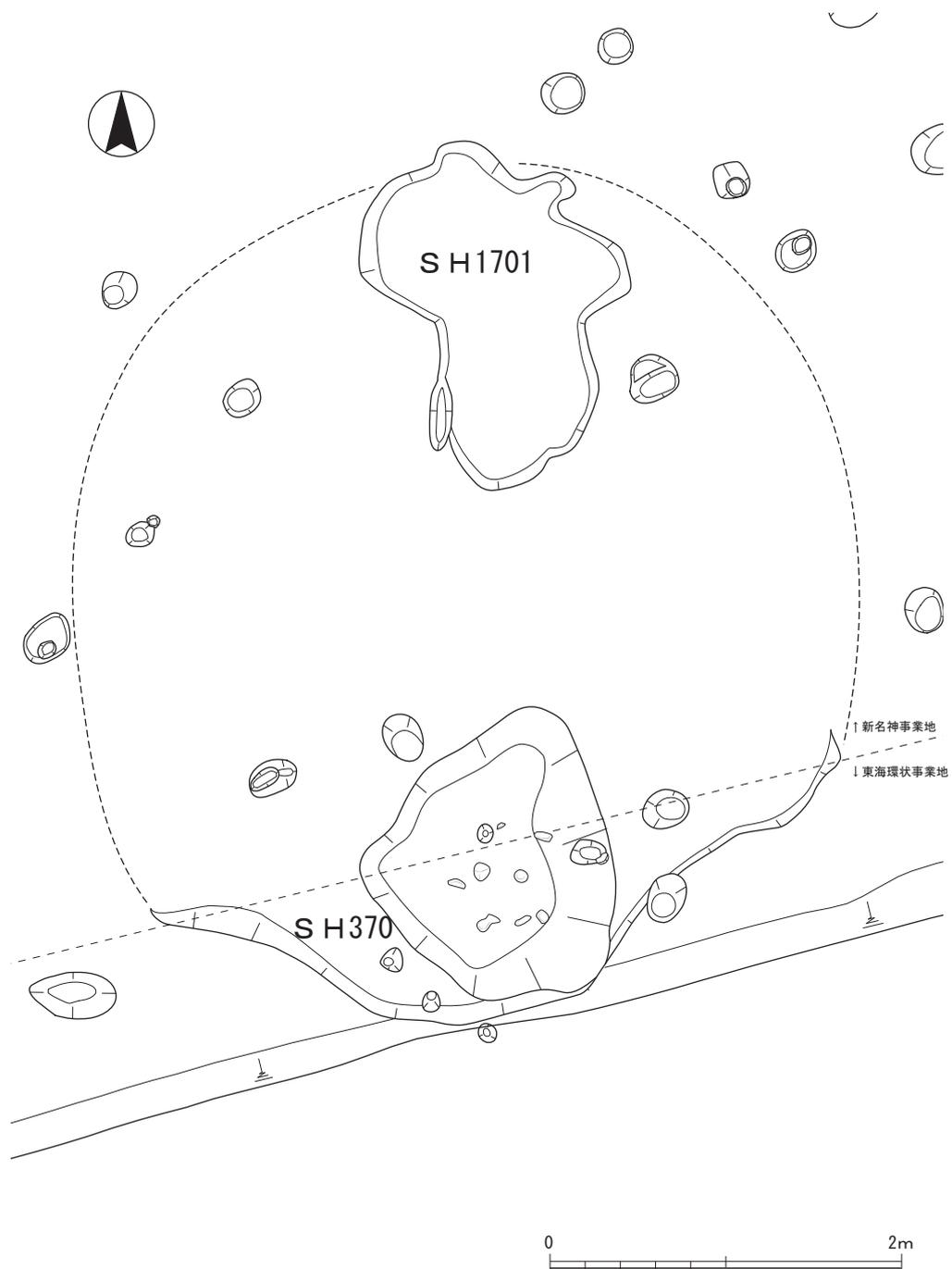
- ・ 額野茂・高橋健太郎 2008「中富式・神明式土器」『総攬縄文土器』
- ・ 中島庄一 2008「称名寺式土器」『総攬縄文土器』
- ・ 石田由紀子 2008「中津式・福田KⅡ式土器」『総攬縄文土器』



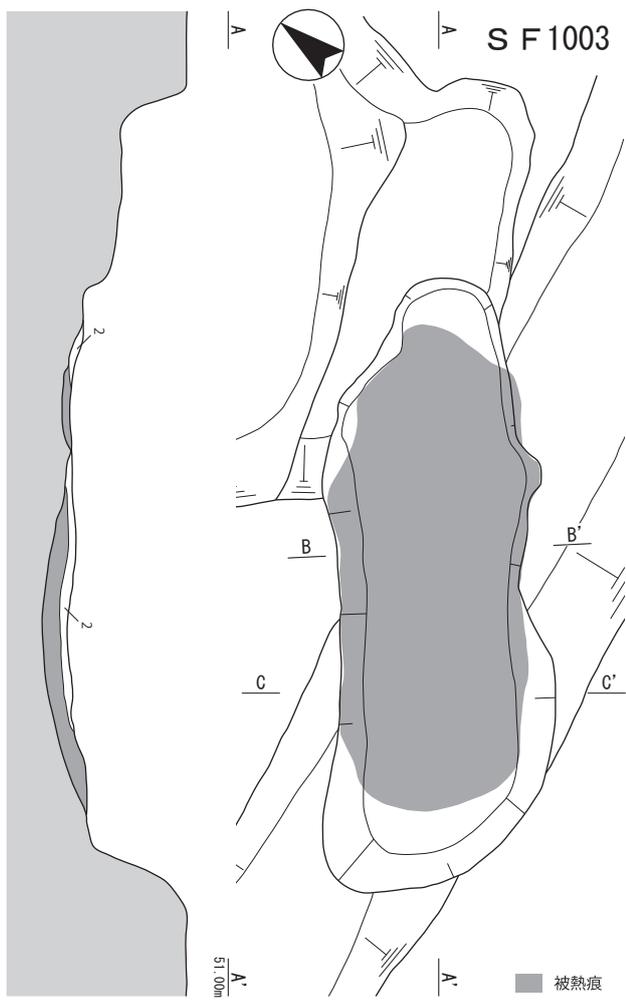
第 13 図 SH 1009・1013 実測図 (1 : 40)



第 14 図 SH 1012・1025 実測図 (1 : 40)

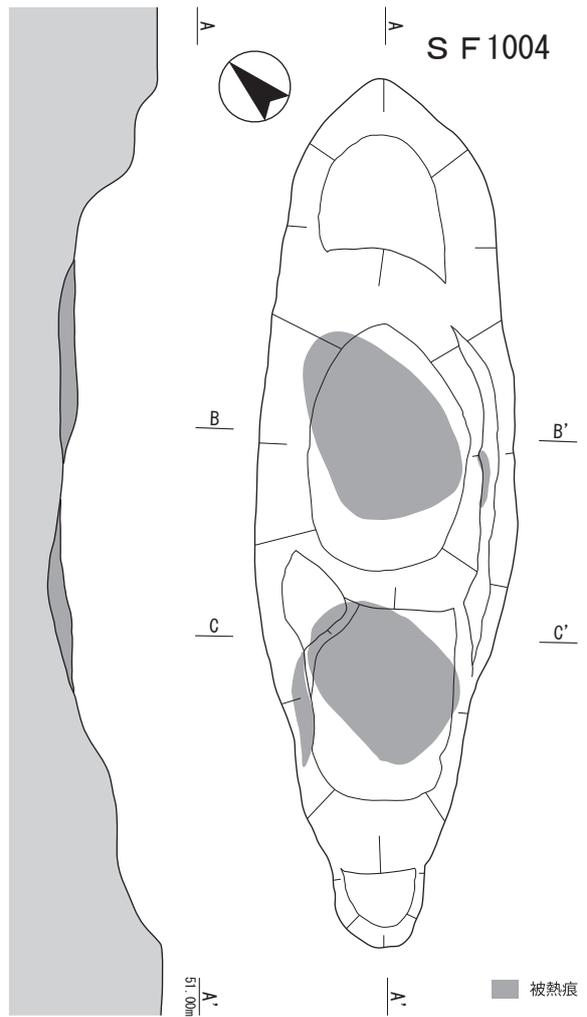


第 15 図 SH 1701 実測図 (1 : 40)



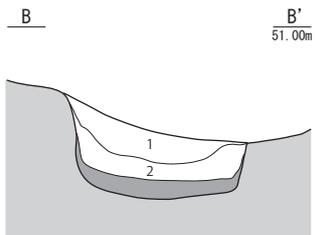
51.00m

被熱痕

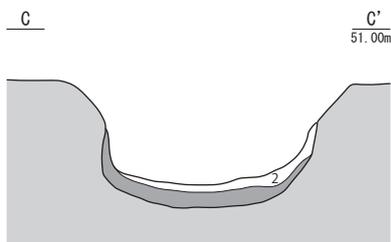


51.00m

被熱痕



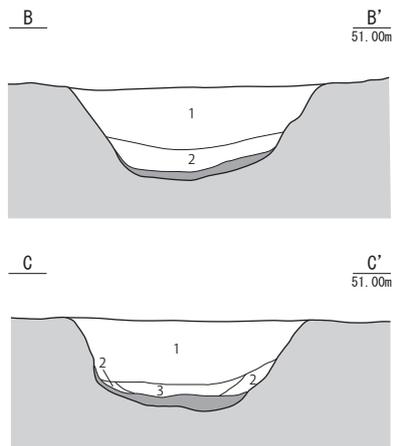
51.00m



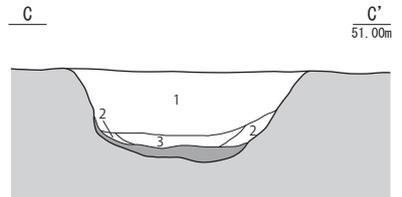
51.00m

【SF1003】

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (明黄褐色土ブロック含)
- 2 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土



51.00m



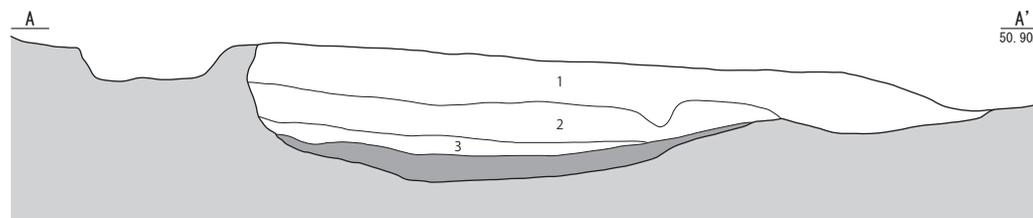
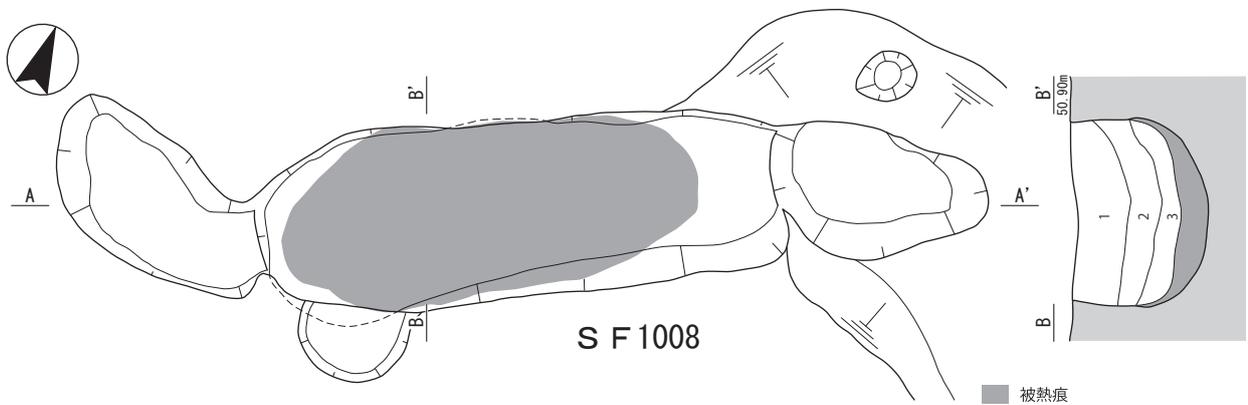
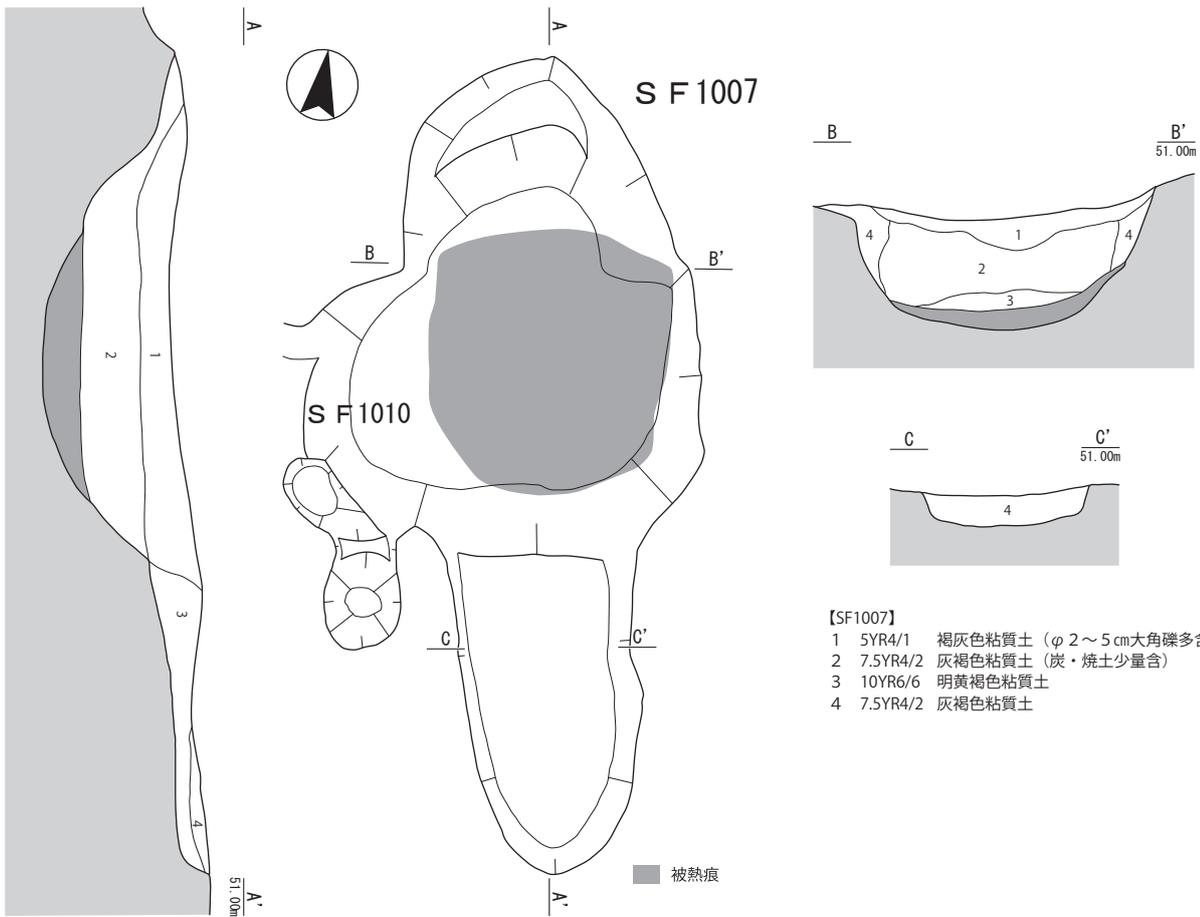
51.00m

【SF1004】

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (φ 5mm大炭化物斑状含)
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質土 (φ 5mm大炭化物多含)



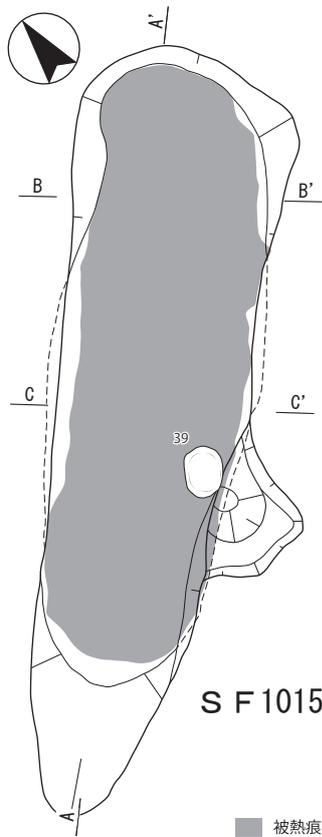
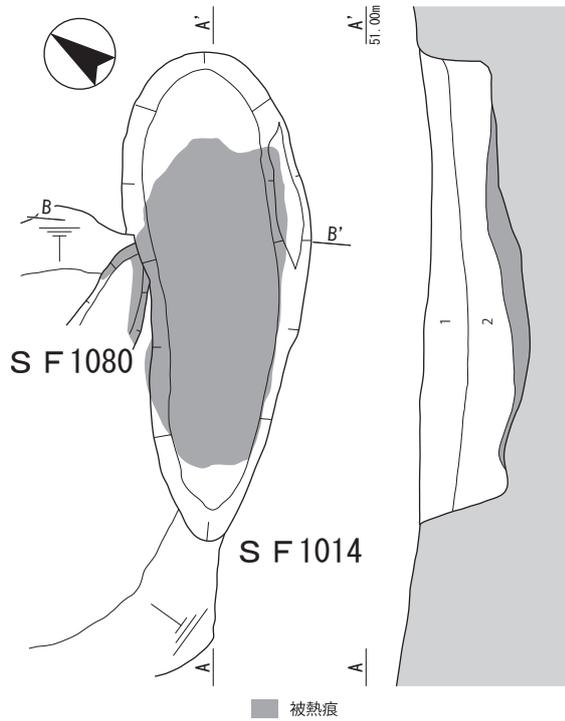
第 16 図 S F 1003・1004 実測図 (1 : 20)



- 【SF1008】
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 (炭化物斑状含)
 - 2 2.5Y7/6 明黄褐色粘土質砂 (灰黄褐色粘質土ブロック含)
 - 3 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物・焼土含)

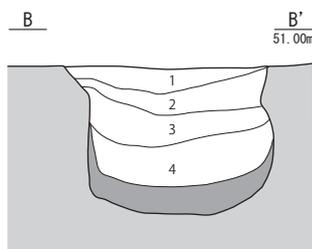


第 18 図 S F 1007・1008 実測図 (1 : 20)



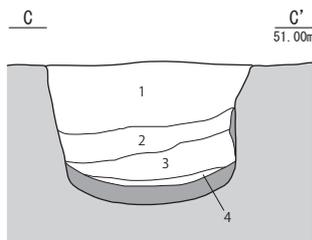
【SF1014】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (明黄褐色土ブロック含)
- 2 7.5YR4/2 灰褐色粘質土

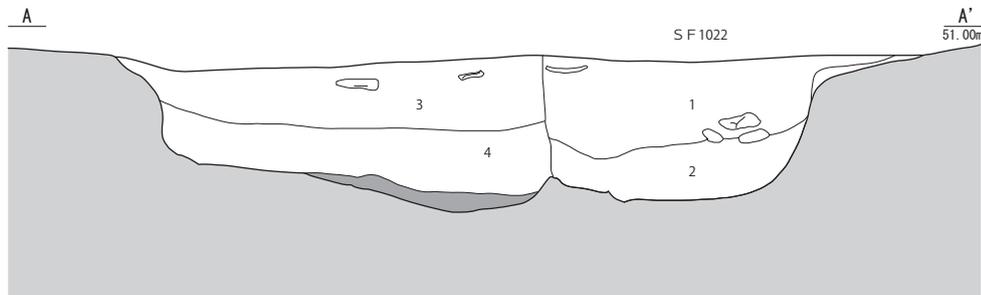
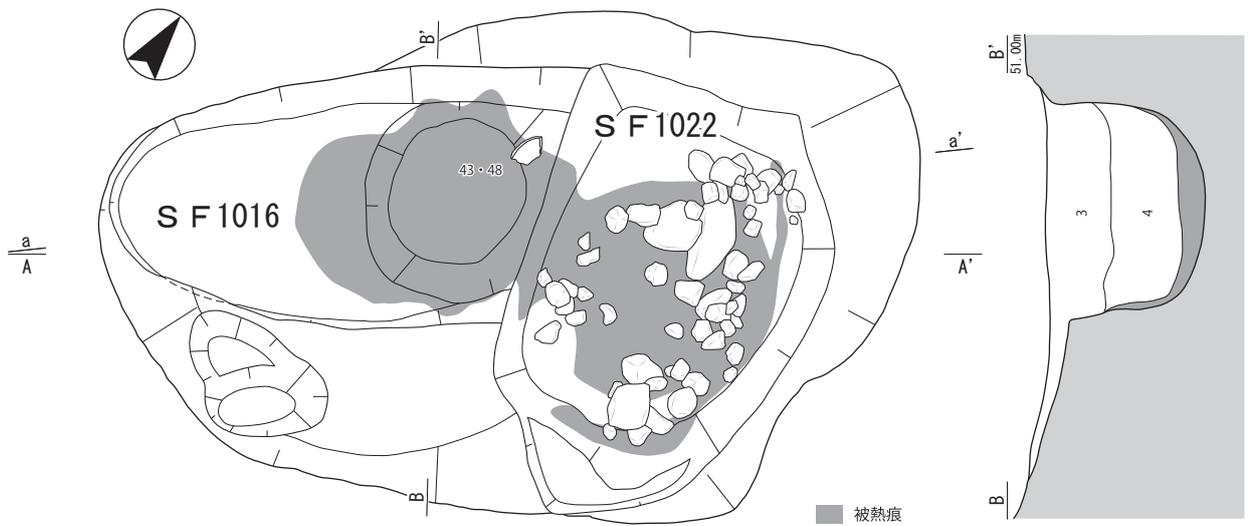


【SF1015】

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 (炭化物少量含)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (明黄褐色粘土質砂ブロック含)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (焼土・炭化物少量含)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (明黄褐色砂質土ブロック含・焼土・炭化物少量含)

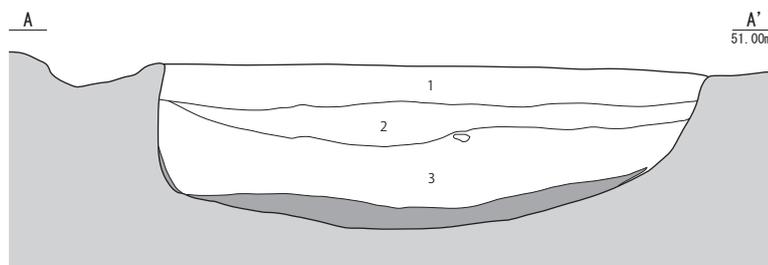
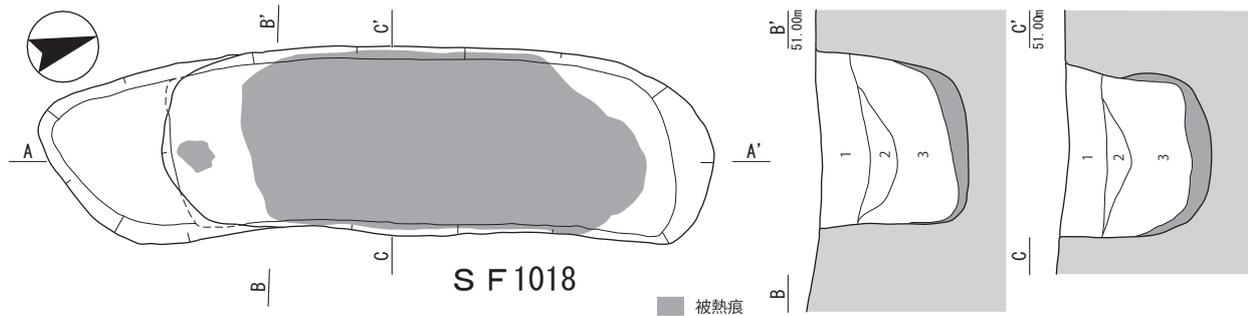


第 19 図 S F 1014 ・ 1015 ・ 1080 実測図 (1 : 20)



- 【SF1016・1022】
- 1 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (橙色粘質ブロック含)
 - 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (炭化物・焼土斑状含)
 - 3 7.5YR4/3 褐色粘質土
 - 4 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 (炭化物・焼土少量含)

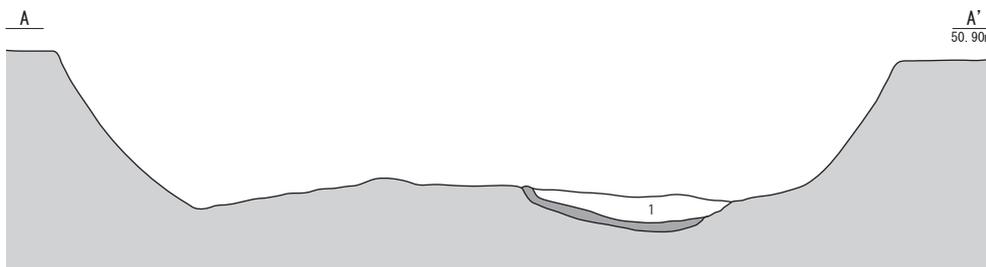
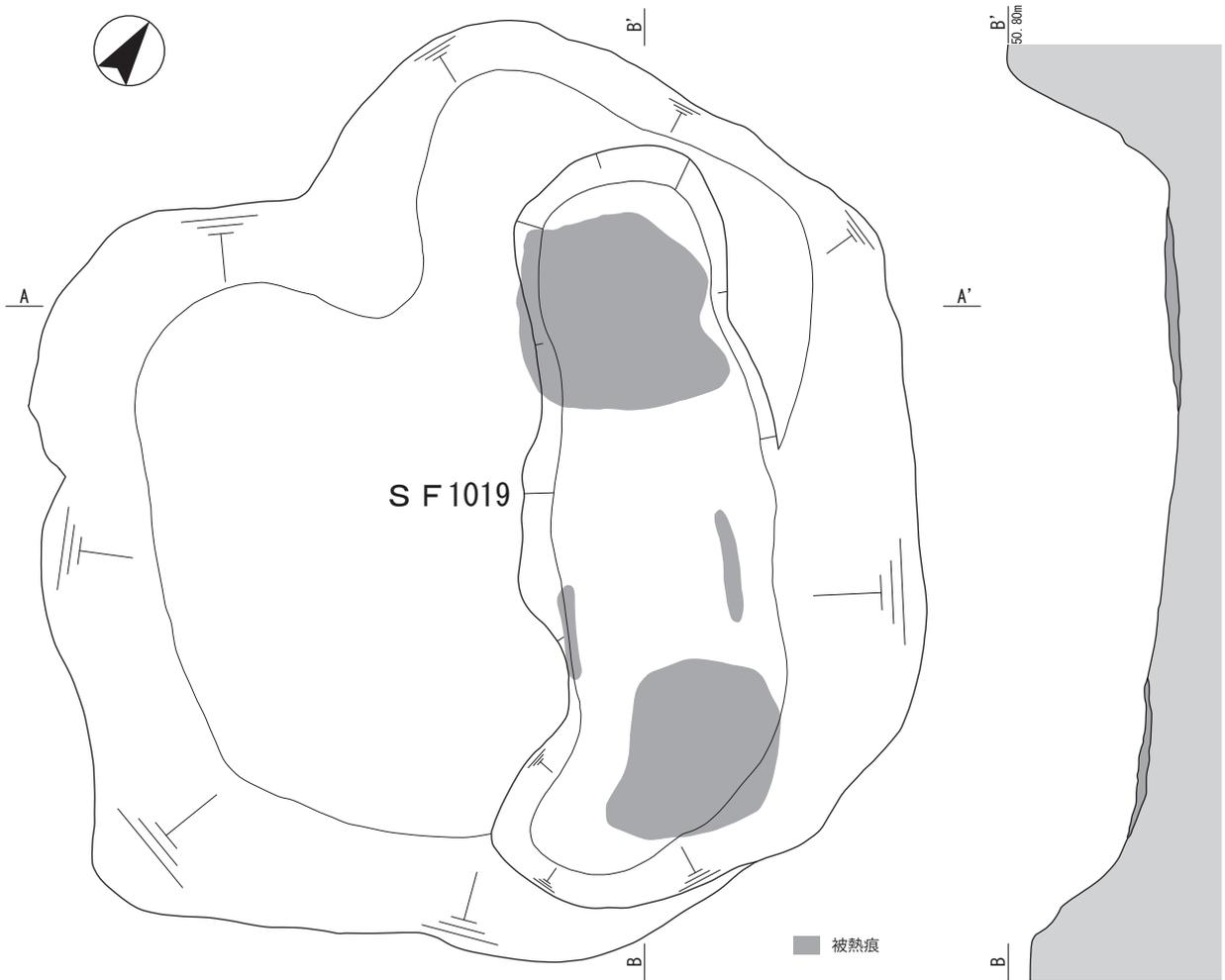
※ 土層断面A-A'にa-a'見透し図合成



- 【SF1018】
- 1 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
 - 2 2.5Y7/6 明黄褐色粘土質砂 (灰黄褐色粘質土ブロック含)
 - 3 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物・焼土含)



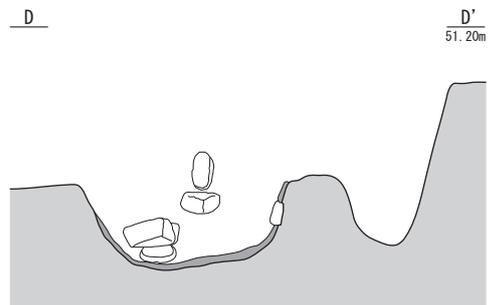
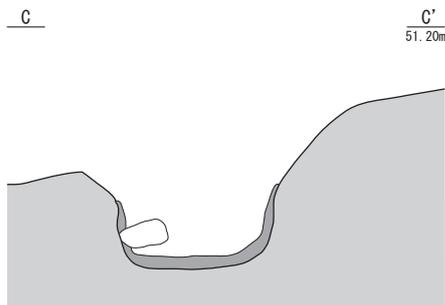
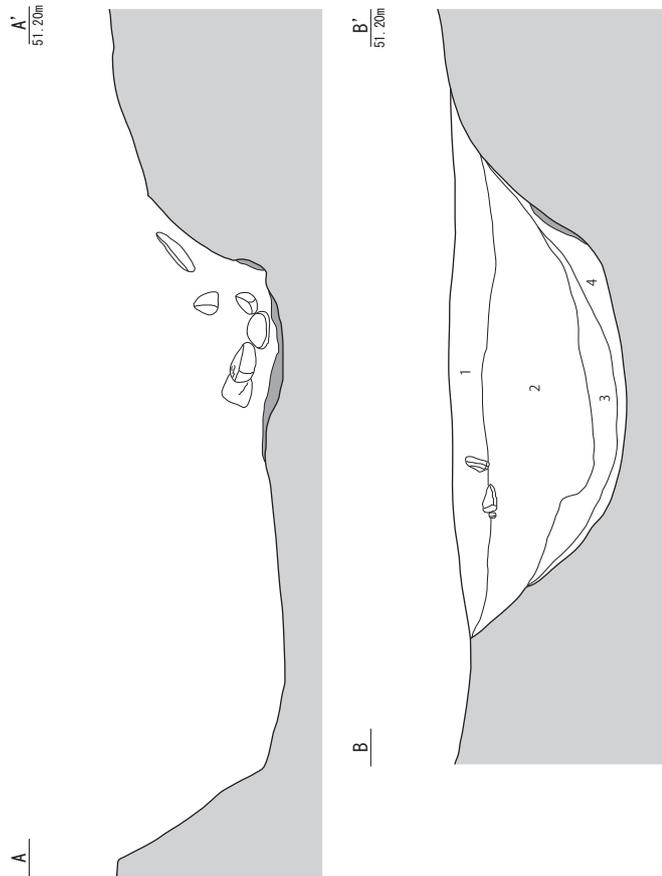
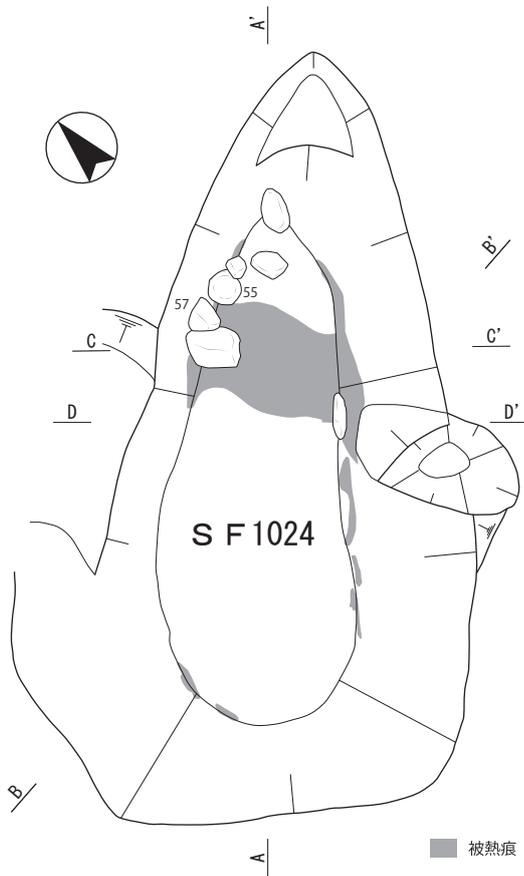
第 20 図 S F 1016・1018・1022 実測図 (1 : 20)



【SF1019】
 1 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土 (炭化物少量含)



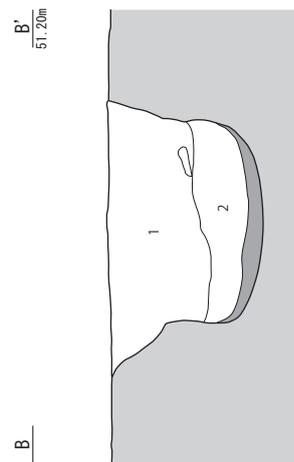
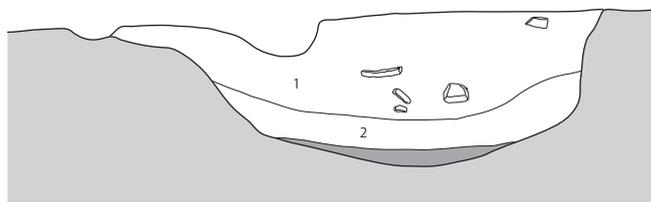
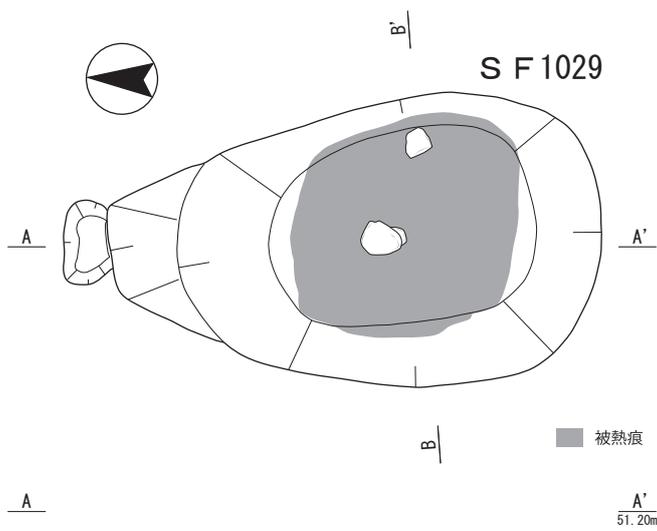
第 21 図 S F 1019 実測図 (1 : 20)



- 【SF1024】
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土
 - 2 10YR3/3 暗褐色粘質土 (φ 3~8 cm礫含)
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (炭化物少量含)
 - 4 2.5Y7/6 明黄褐色砂質土 (焼土・炭化物含)

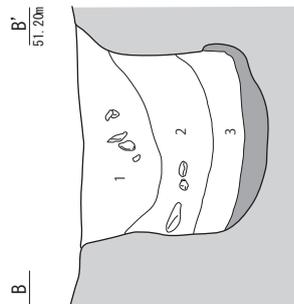
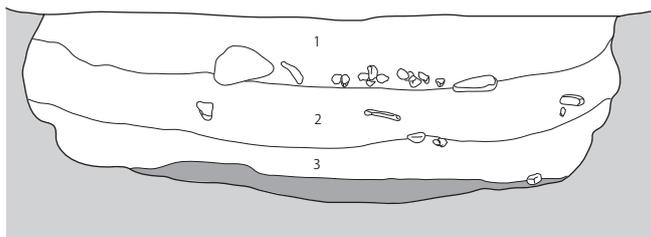
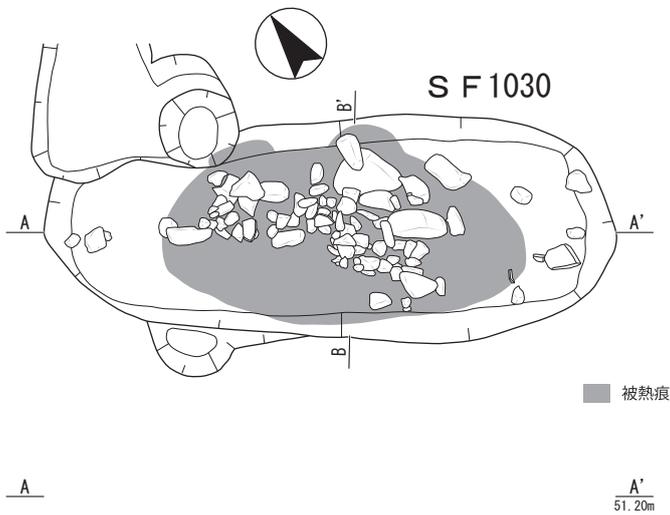


第 22 図 S F 1024 実測図 (1 : 20)



【SF1029】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (φ 3~5 cm礫含)
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質土 (焼土・炭化物含)

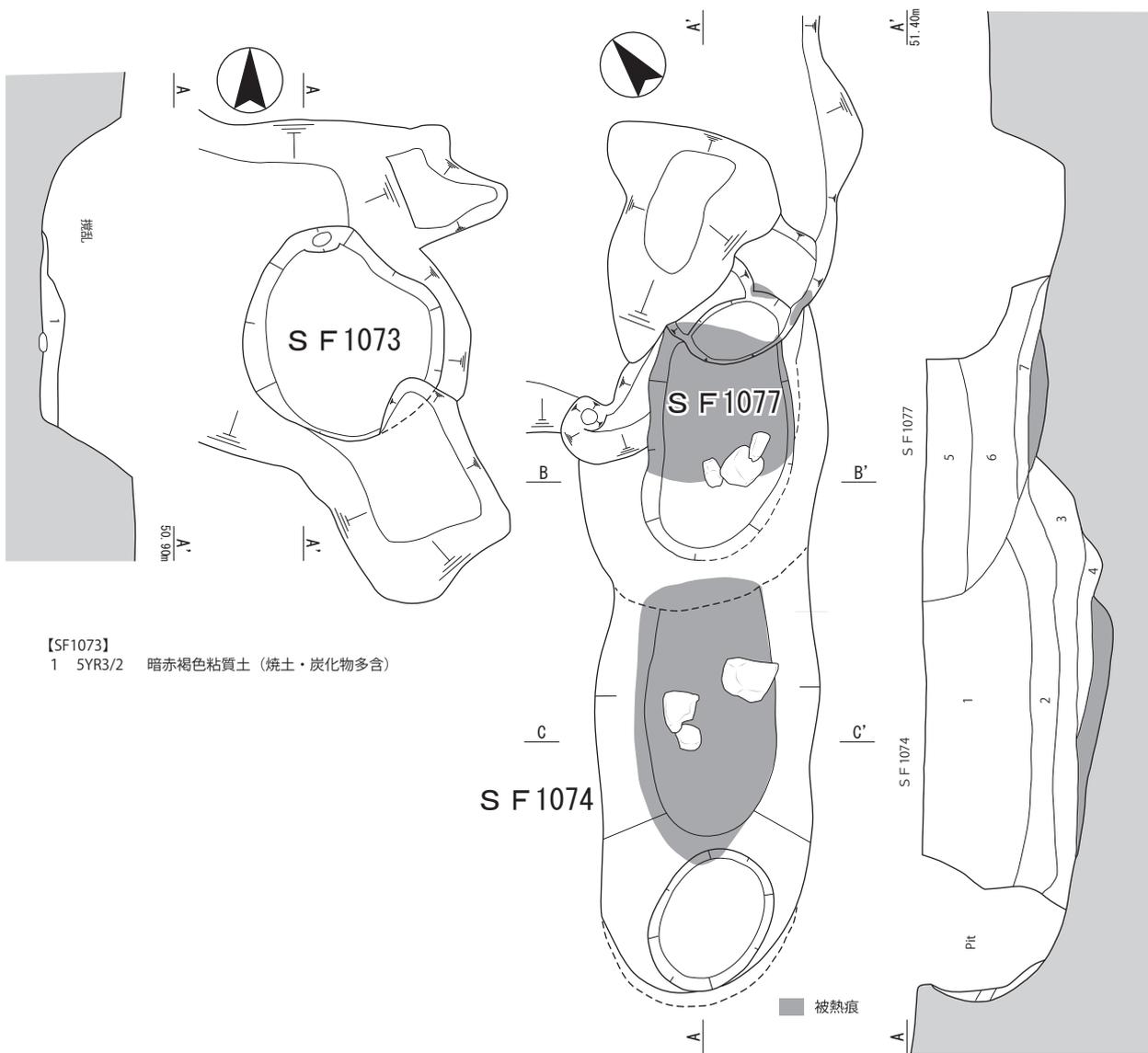


【SF1030】

- 1 10YR3/4 暗褐色粘質土
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質土
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土



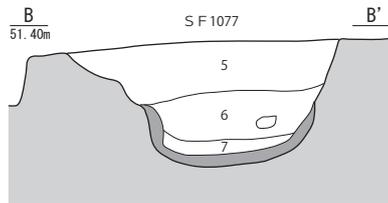
第 23 図 S F 1029・1030 実測図 (1 : 20)



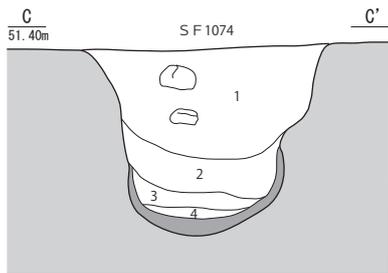
【SF1073】
1 5YR3/2 暗赤褐色粘質土（焼土・炭化物多含）

S F 1074

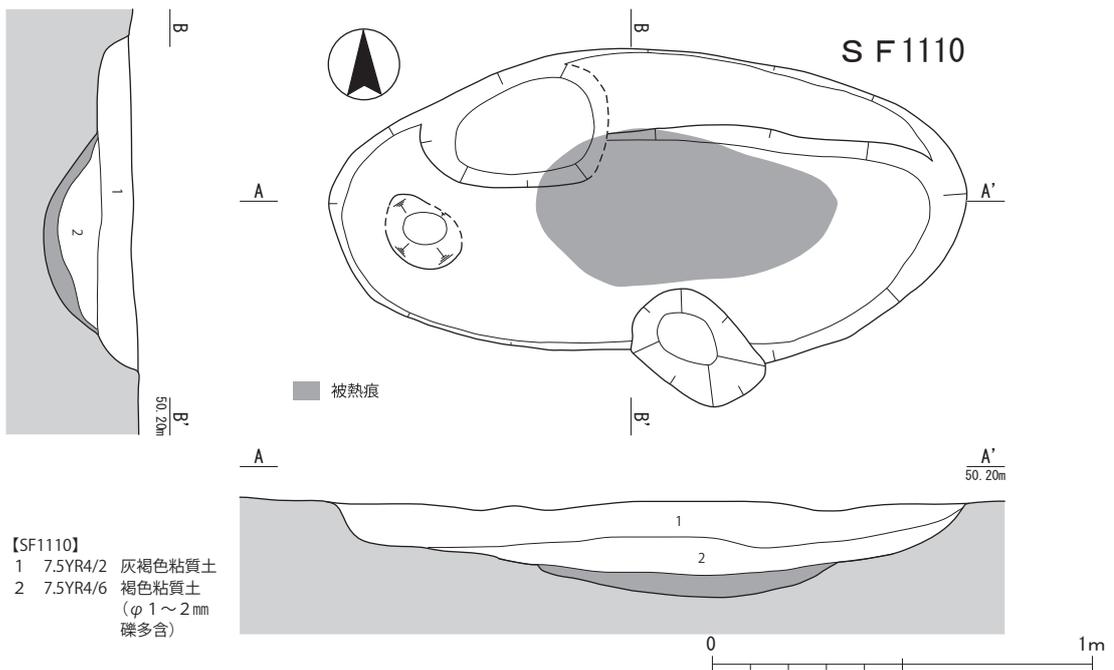
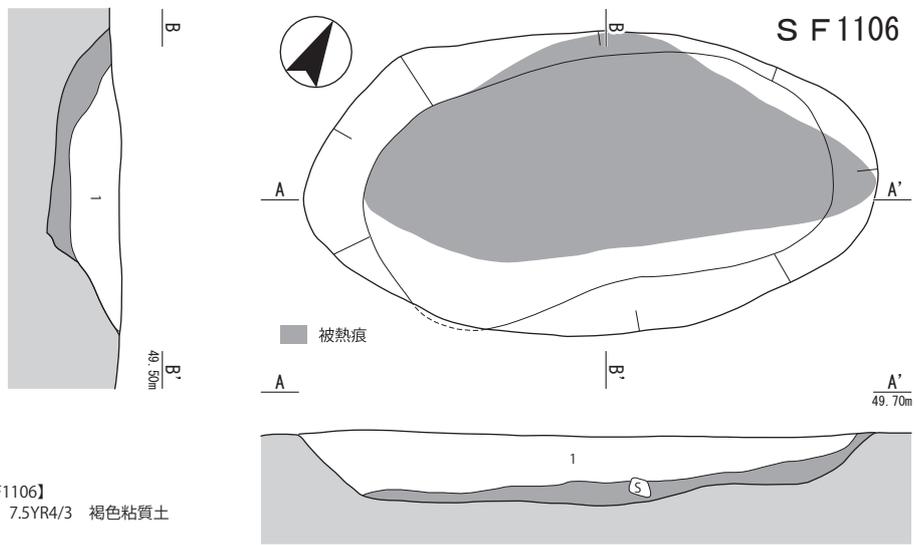
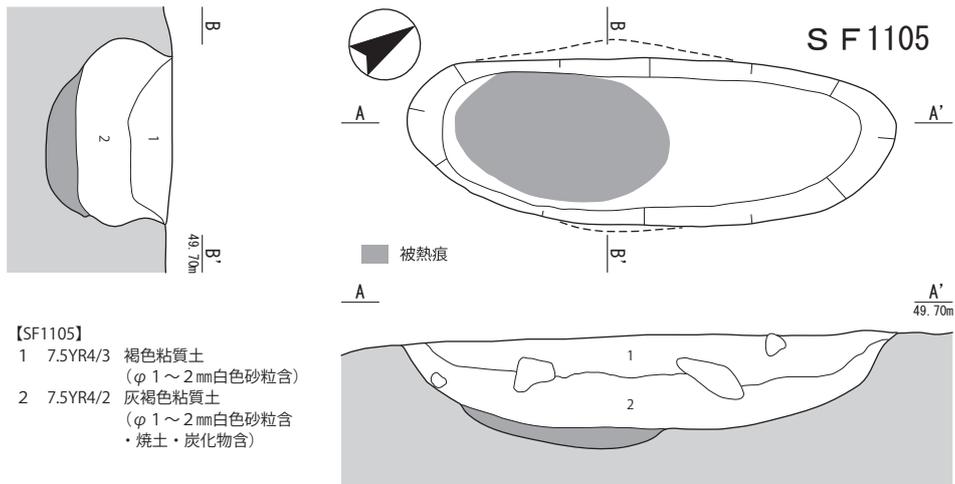
被熱痕



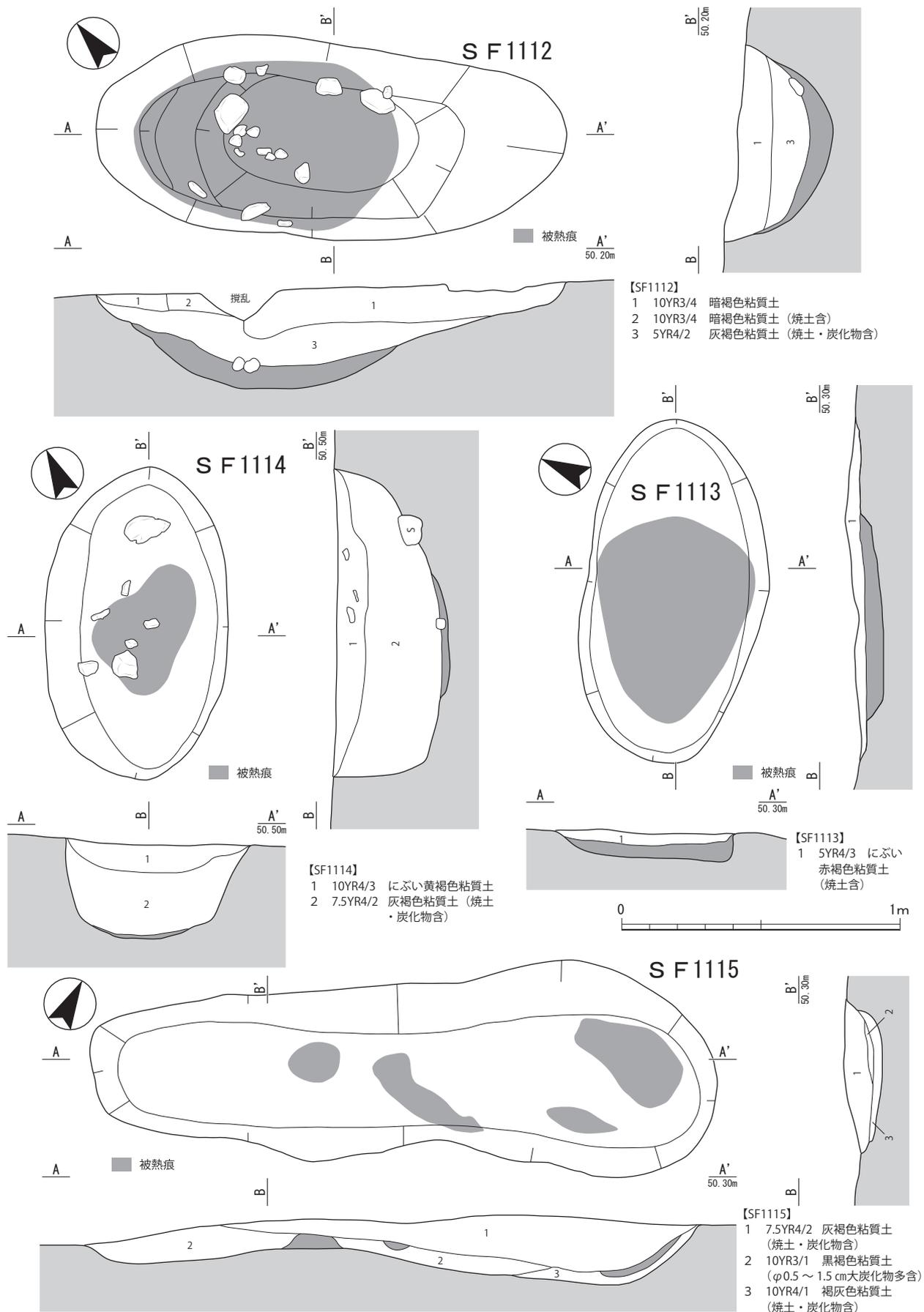
【SF1074・1077】
1 10YR4/2 灰褐色粘質土（φ 5mm~2cm大炭少量含）
2 10YR3/3 暗褐色粘質土（黄褐色粘質ブロック多含）
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
4 7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土
5 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
6 5YR4/2 灰褐色粘質土（焼土・炭を斑状含）
7 2.5YR5/6 明赤褐色粘質土（被熱層）



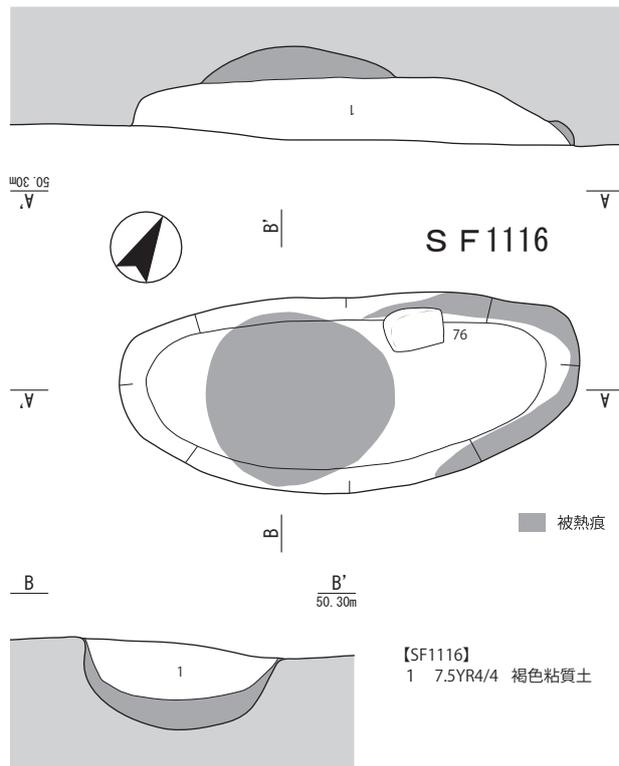
第 24 図 S F 1073・1074・1077 実測図（1：20）



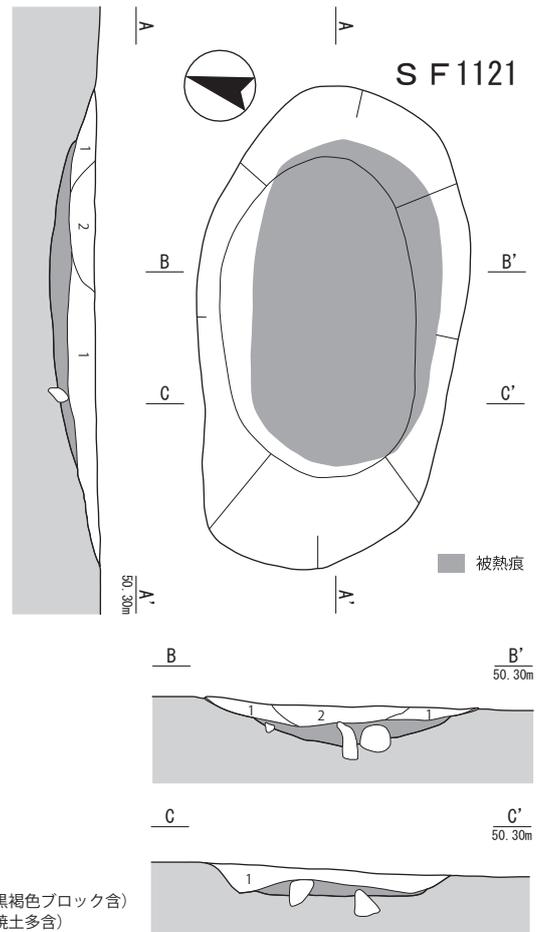
第 25 図 S F 1105・1106・1110 実測図 (1 : 20)



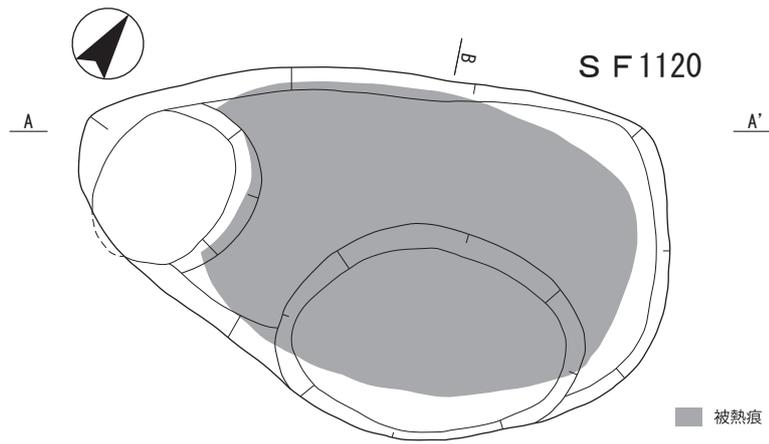
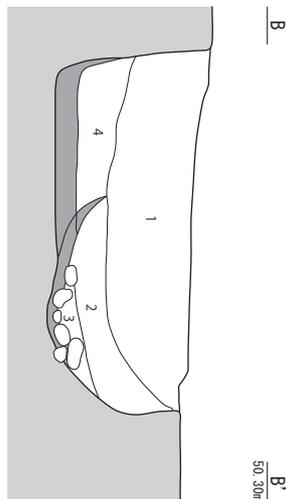
第 26 図 S F 1112・1113・1114・1115 実測図 (1 : 20)



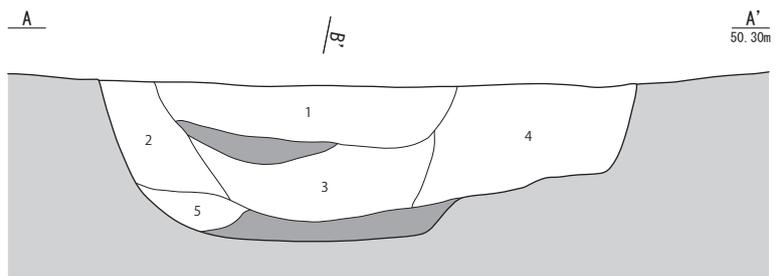
【SF1116】
1 7.5YR4/4 褐色粘質土



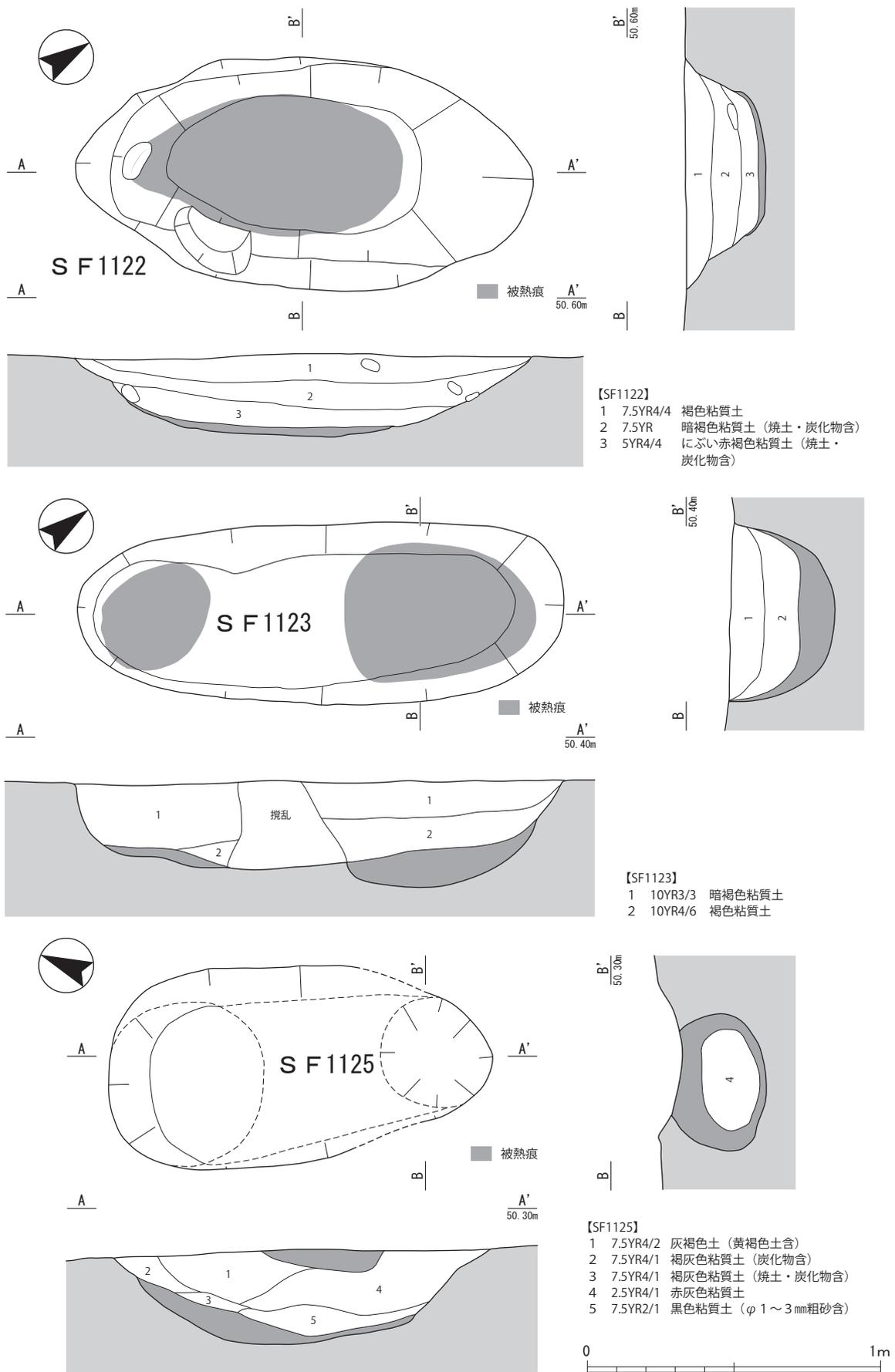
【SF1121】
1 10YR3/4 暗褐色粘質土 (黒褐色ブロック含)
2 10YR3/4 暗褐色粘質土 (焼土多含)



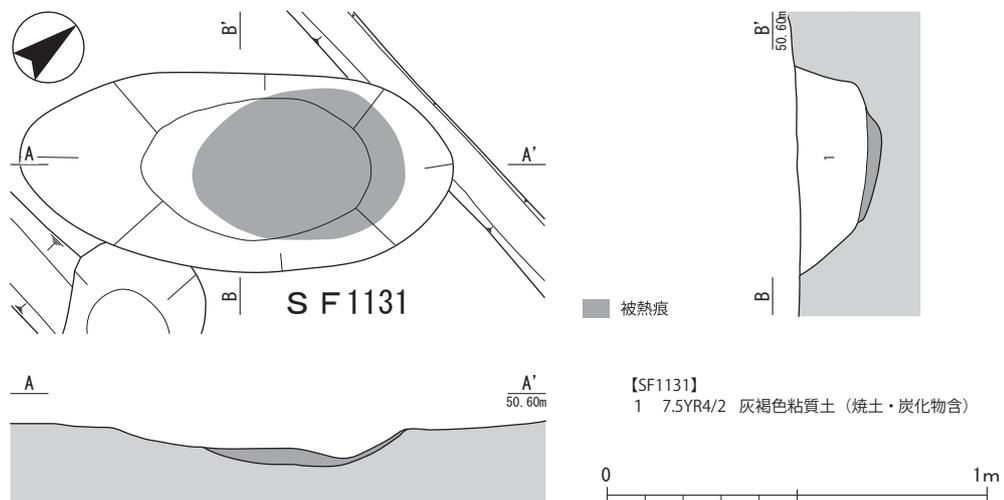
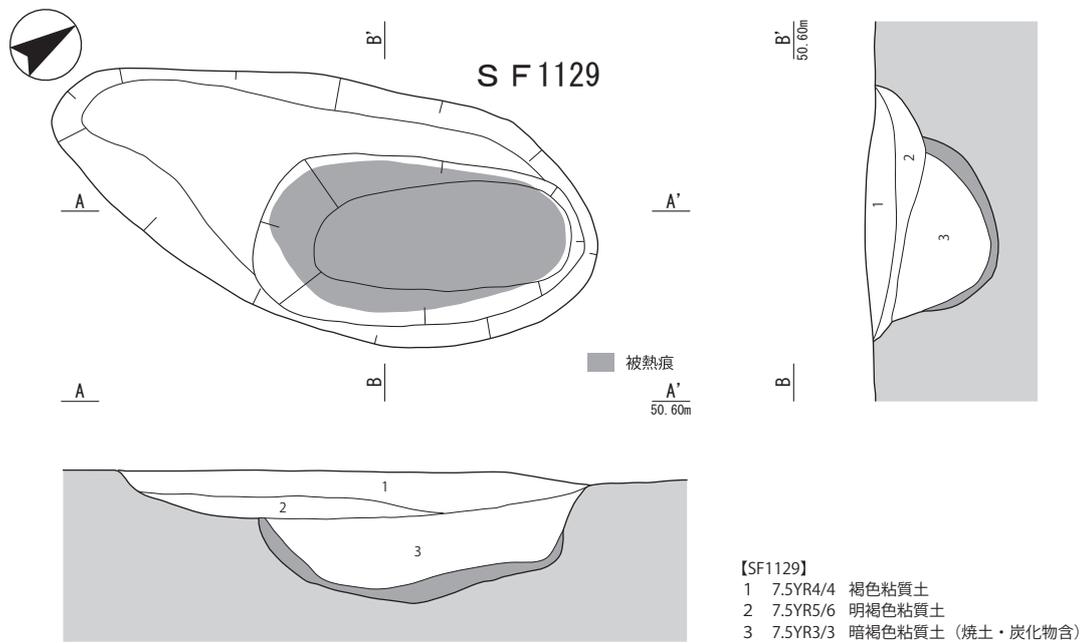
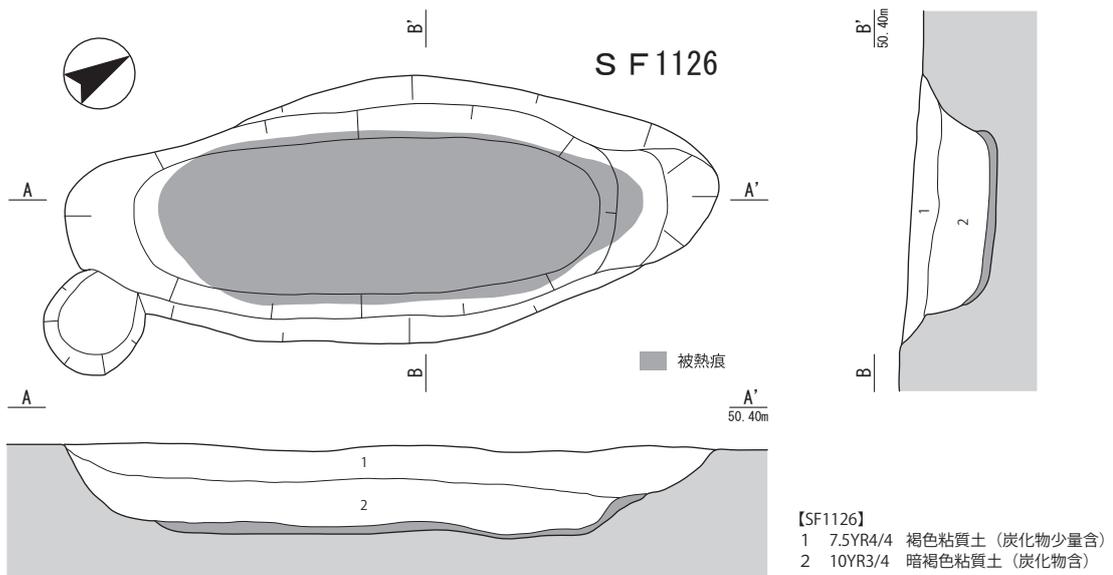
【SF1120】
1 10YR3/3 暗褐色粘質土 (黒褐色ブロック含)
2 10YR4/6 褐色粘質土 (焼土含)
3 5YR4/4 にぶい赤褐色砂質土 (炭化物多含)
4 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (炭化物多含)
5 炭化物



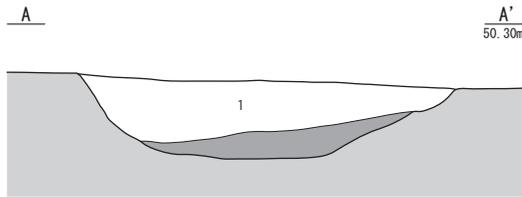
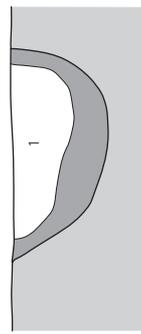
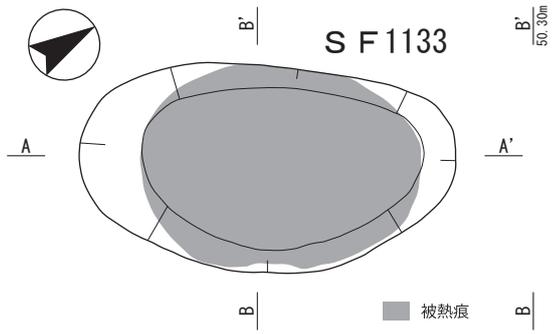
第 27 図 S F 1116・1120・1121 実測図 (1 : 20)



第 28 図 S F 1122・1123・1125 実測図 (1 : 20)

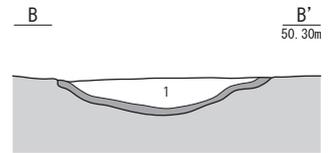
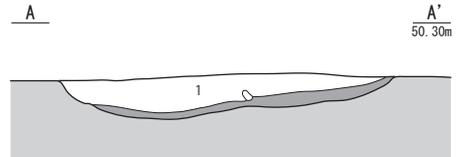
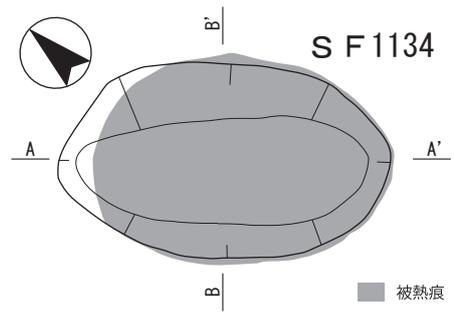


第 29 図 S F 1126・1129・1131 実測図 (1 : 20)



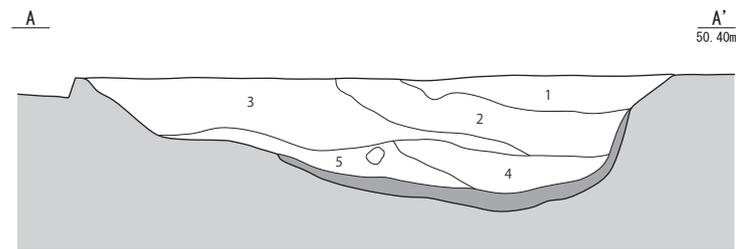
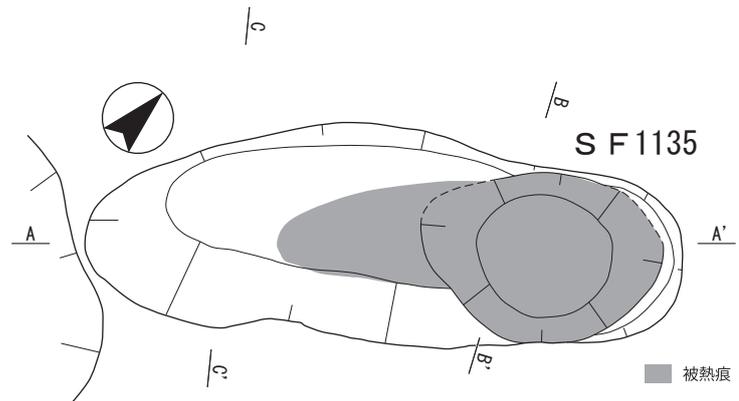
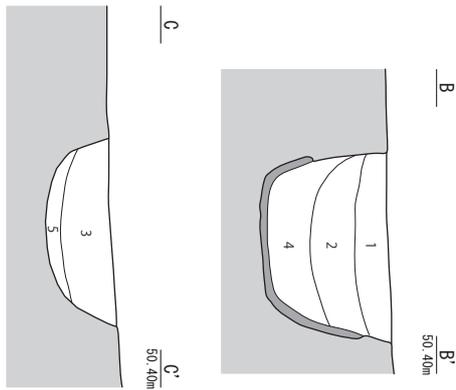
【SF1133】

1 7.5YR4/4 褐色粘質土 (φ 1~2mm砂粒含)



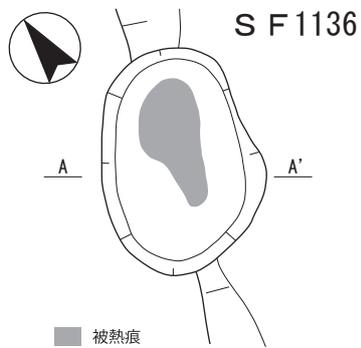
【SF1134】

1 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (炭化物・焼土含)



【SF1135】

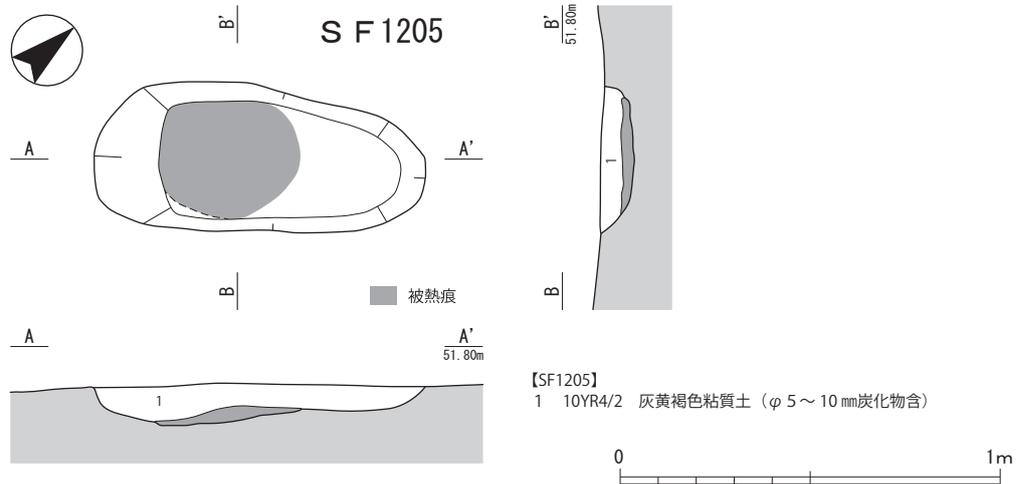
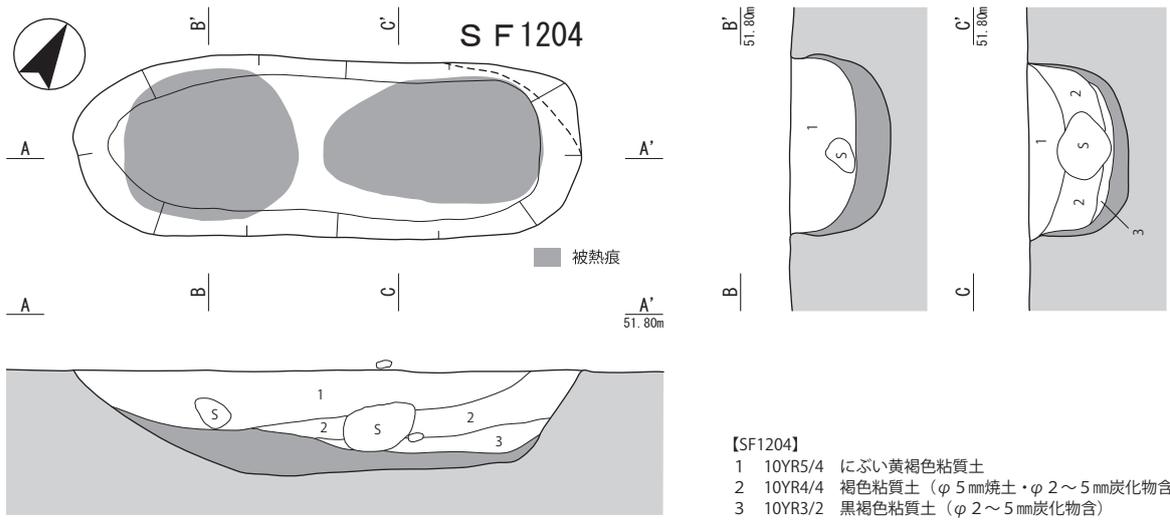
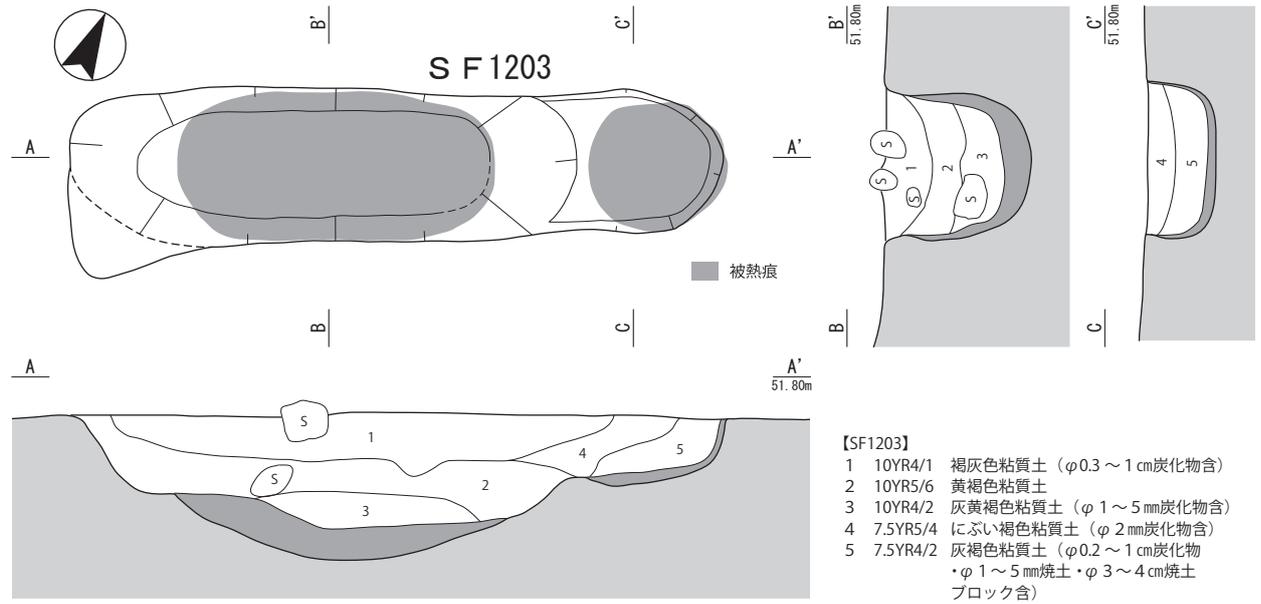
1 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 4 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物含)
 2 7.5YR4/1 褐色粘質土 5 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (焼土含)
 3 7.5YR4/2 灰褐色粘質土



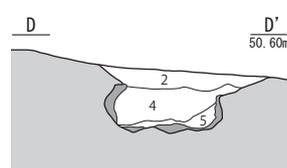
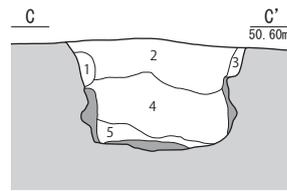
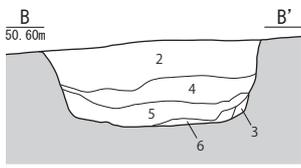
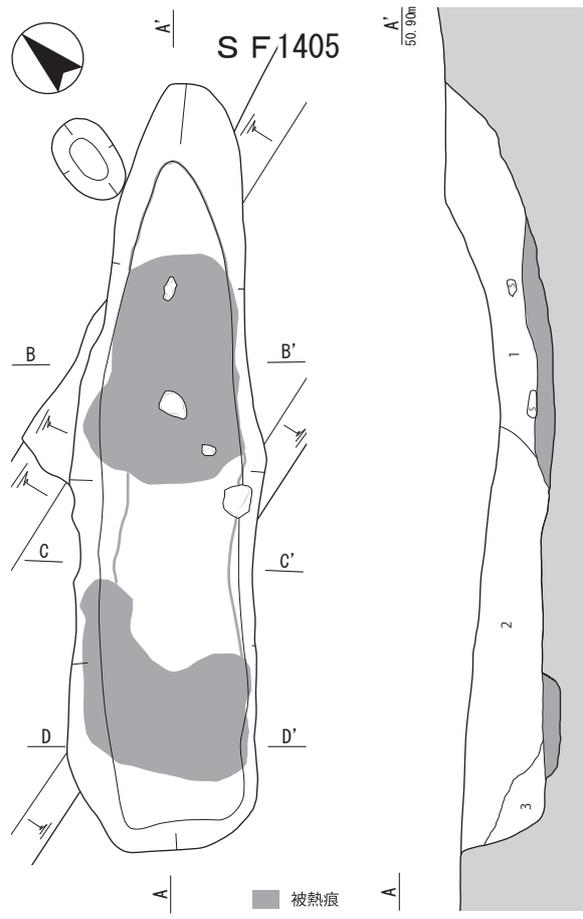
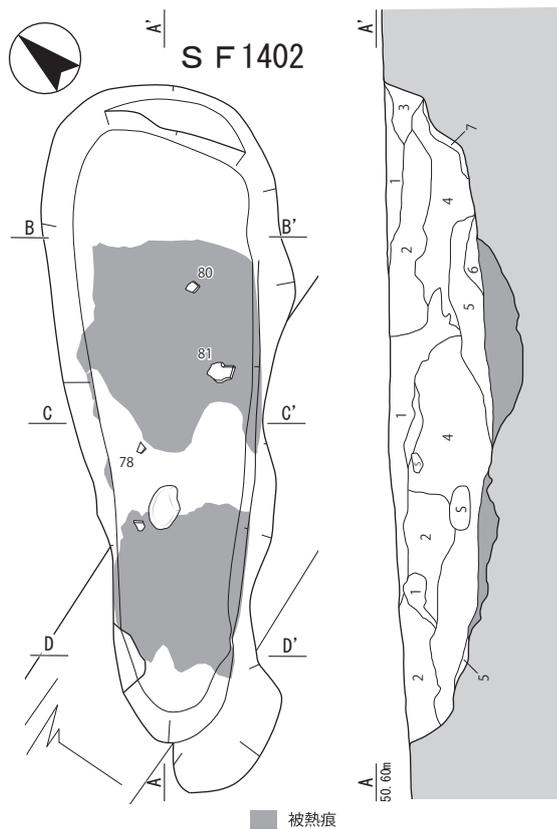
被熱痕



第 30 図 S F 1133 ・ 1134 ・ 1135 ・ 1136 実測図 (1 : 20)



第 31 図 S F 1203・1204・1205 実測図 (1 : 20)

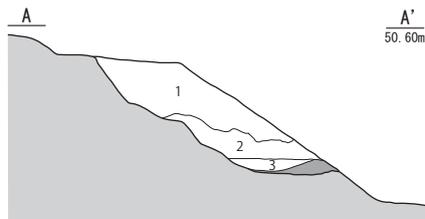
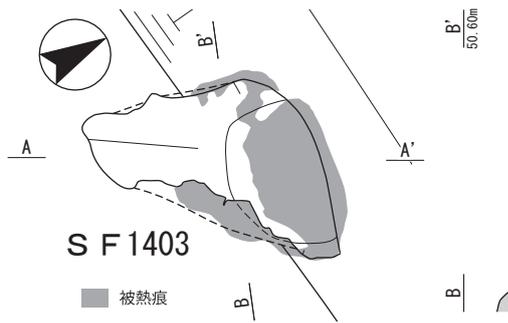


- 【SF1402】
- 1 7.5YR4/1 褐灰色シルト～中粒粘砂土
 - 2 7.5YR4/3 褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1mm炭化物極微量含)
 - 3 7.5YR5/6 明褐色シルト～中粒粘砂土
 - 4 7.5YR3/4 暗褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1mm炭化物微量含)
 - 5 7.5YR4/4 褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1mm炭化物極微量含・5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック約 10%含)
 - 6 5YR3/6 暗赤褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1mm炭化物極微量含・5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック多含)
 - 7 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/6 明褐色シルト～中粒粘砂土含)

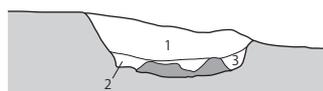
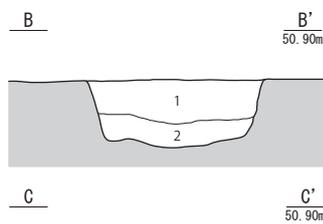
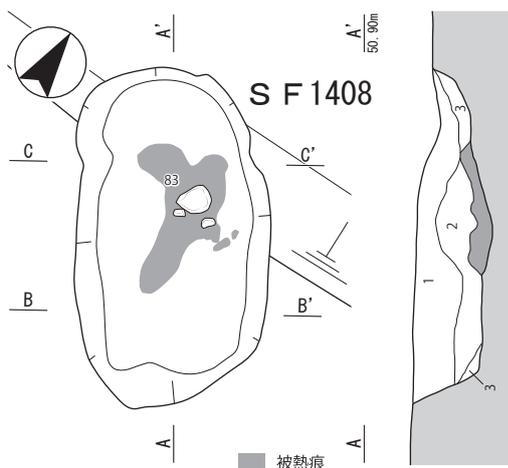
- 【SF1405】
- 1 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1mm炭化物極微量含・φ 1～4 cm 礫微量含)
 - 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～中粒粘砂土
 - 3 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 3mm炭化物極微量含)



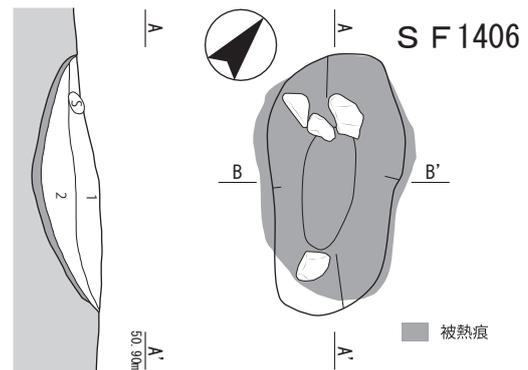
第 32 図 S F 1402・1405 実測図 (1 : 20)



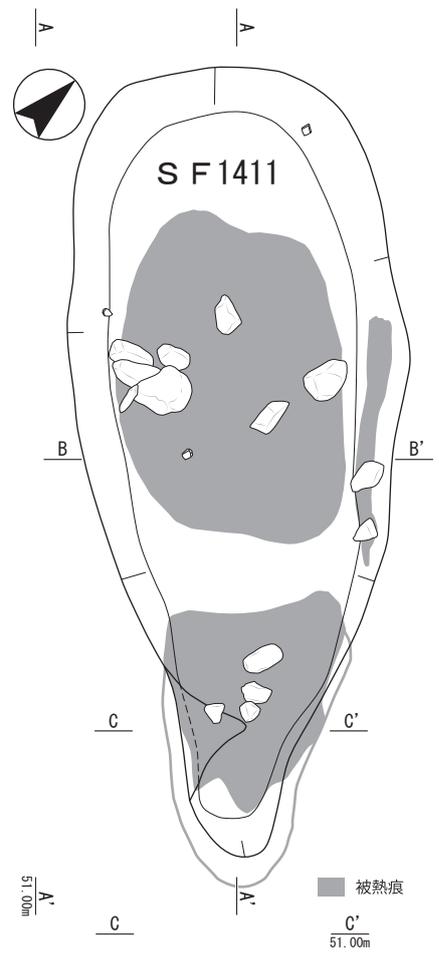
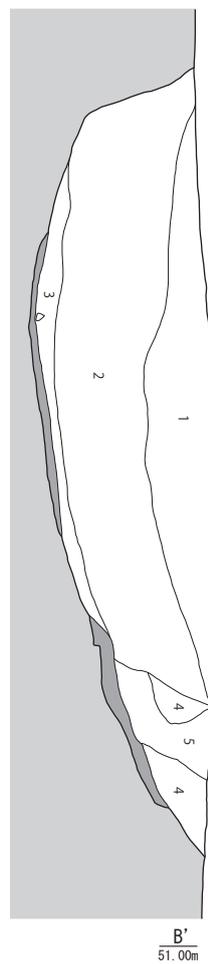
- 【SF1403】
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～中粒粘砂土
 - 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1cm炭化物極微量含)
 - 3 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～細粒粘砂土 (φ 1cm炭化物極微量含)
 - 4 7.5YR4/3 褐色シルト～中粒粘砂土 (φ ~1cm炭化物極微量含・10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状多含)



- 【SF1408】
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1mm炭化物を微量含・φ 4～10cm礫含)
 - 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1～5cm炭化物少量含)
 - 3 7.5YR5/6 明褐色シルト～粗粒粘砂土
- 0 1m

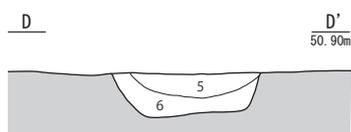
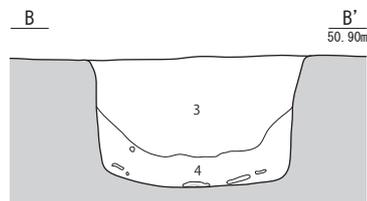
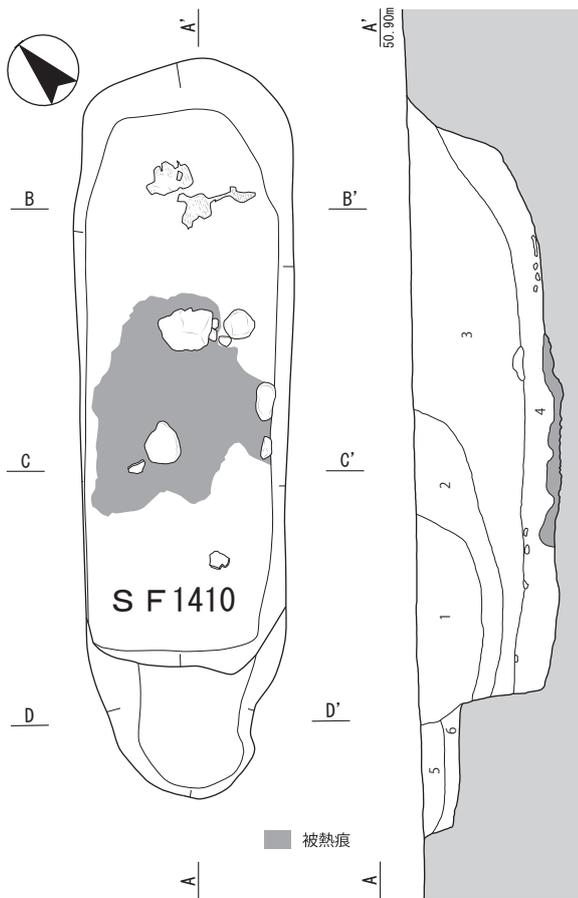


- 【SF1406】
- 1 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1mm炭化物極微量含)
 - 2 7.5YR4/4 褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 3mm炭化物極微量含)



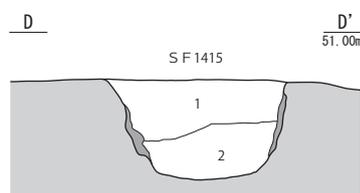
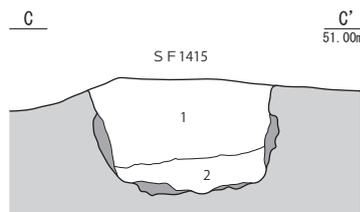
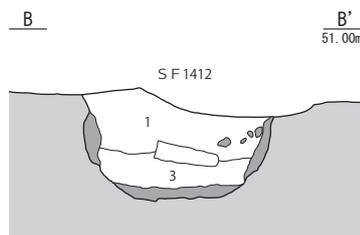
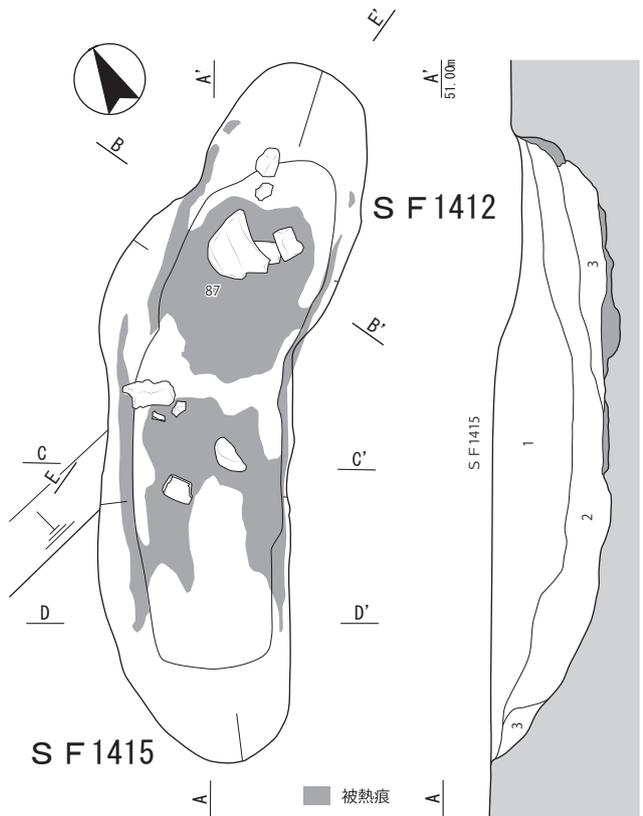
- 【SF1411】
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/6 明褐色焼土ブロック斑状 20%含)
 - 3 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 2～3cm炭化物微量含)
 - 4 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒砂
 - 5 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～中粒粘砂土 (焼土微量含)

第 33 図 S F 1403・1406・1408・1411 実測図 (1 : 20)



[SF1410]

- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ1～2mm炭化物微量含・φ～1cm炭化物多含)
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ1～5mm炭化物を微量含)
- 3 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ1～5mm炭化物微量含・7.5YR5/4 にぶい褐色フロック斑状 40%含)
- 4 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～1cm炭化物多含)
- 5 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土
- 6 7.5YR4/6 褐色シルト～粗粒粘砂土



[SF1412]

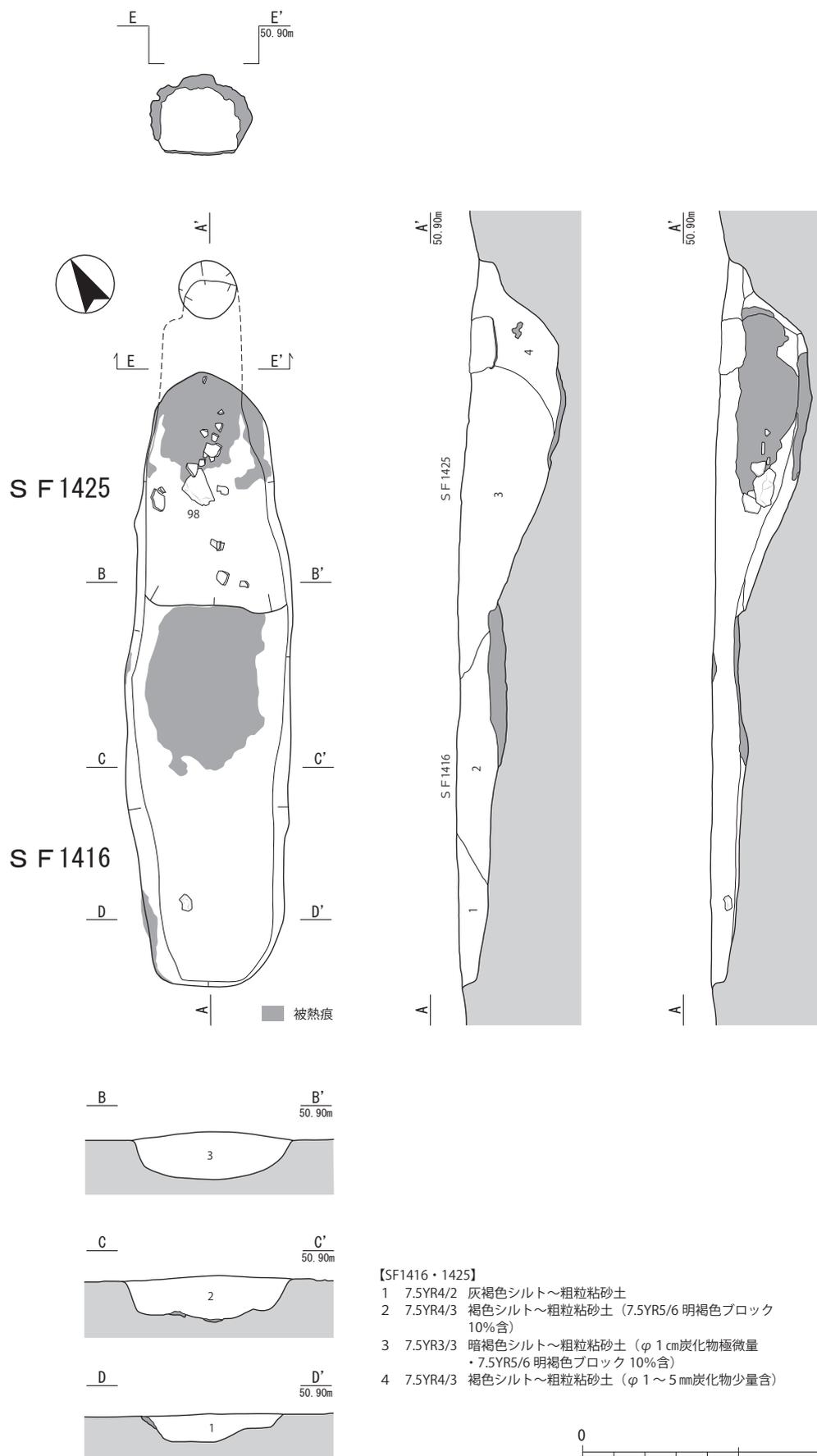
- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ1～2mm炭化物微量含・φ1～3mm礫微量含)
- 2 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土
- 3 2.5YR4/6 赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土)

[SF1415]

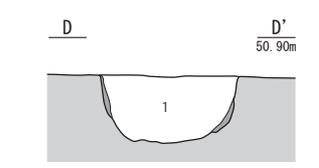
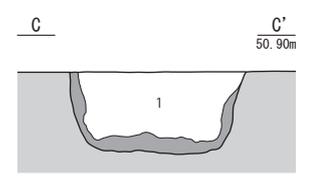
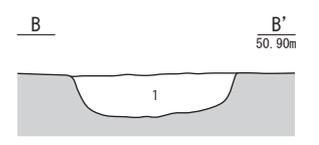
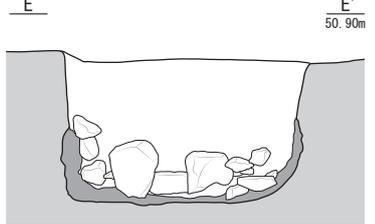
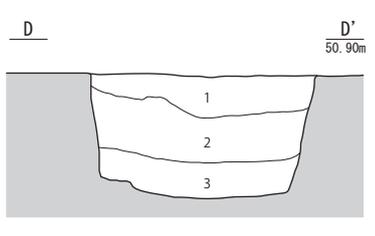
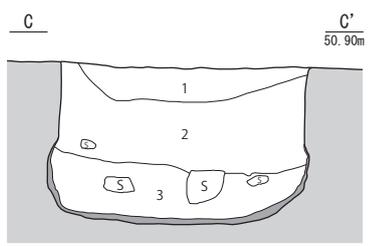
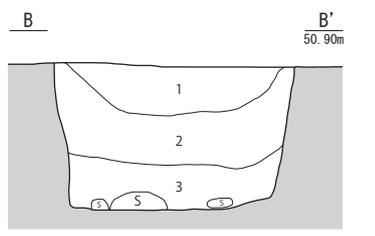
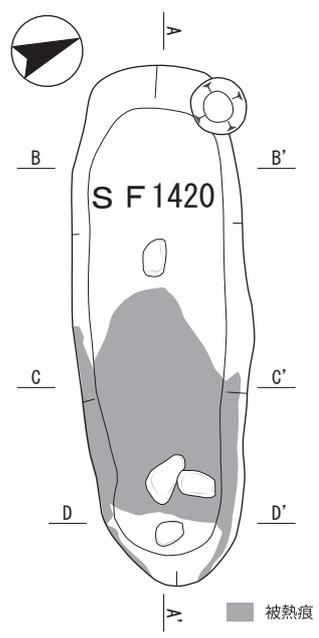
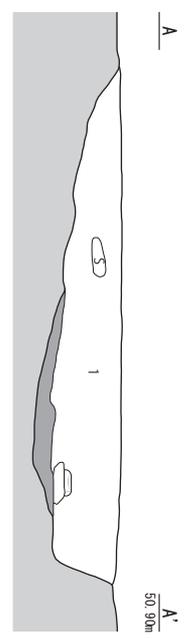
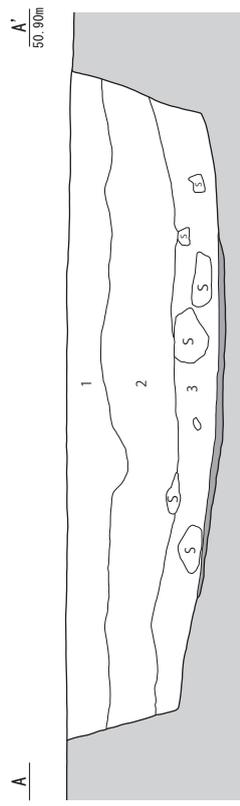
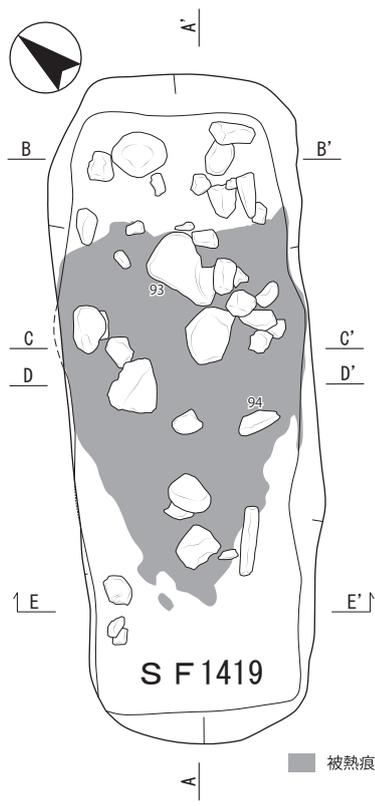
- 1 10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ2mm炭化物極微量含・φ1～5cm礫微量含)
- 2 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ3～4mm炭化物少量含)
- 3 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～粗粒粘砂土



第 34 図 SF 1410・1412・1415 実測図 (1 : 20)



第 35 図 S F 1416・1425 実測図 (1 : 20)

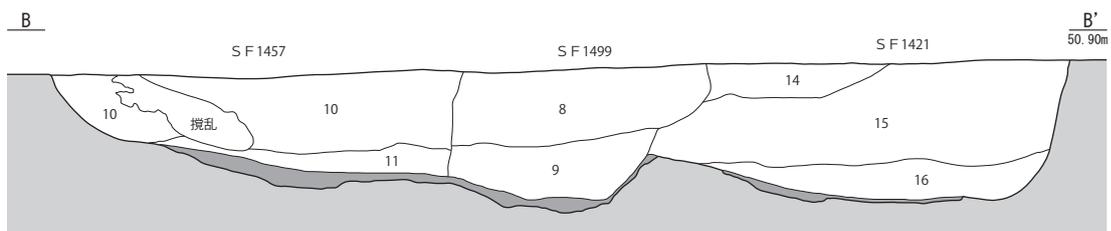
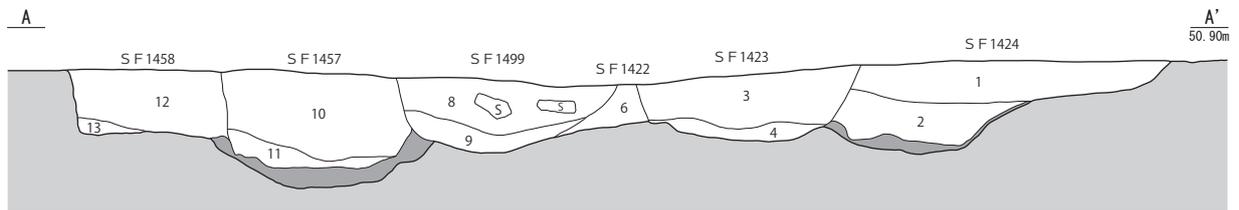
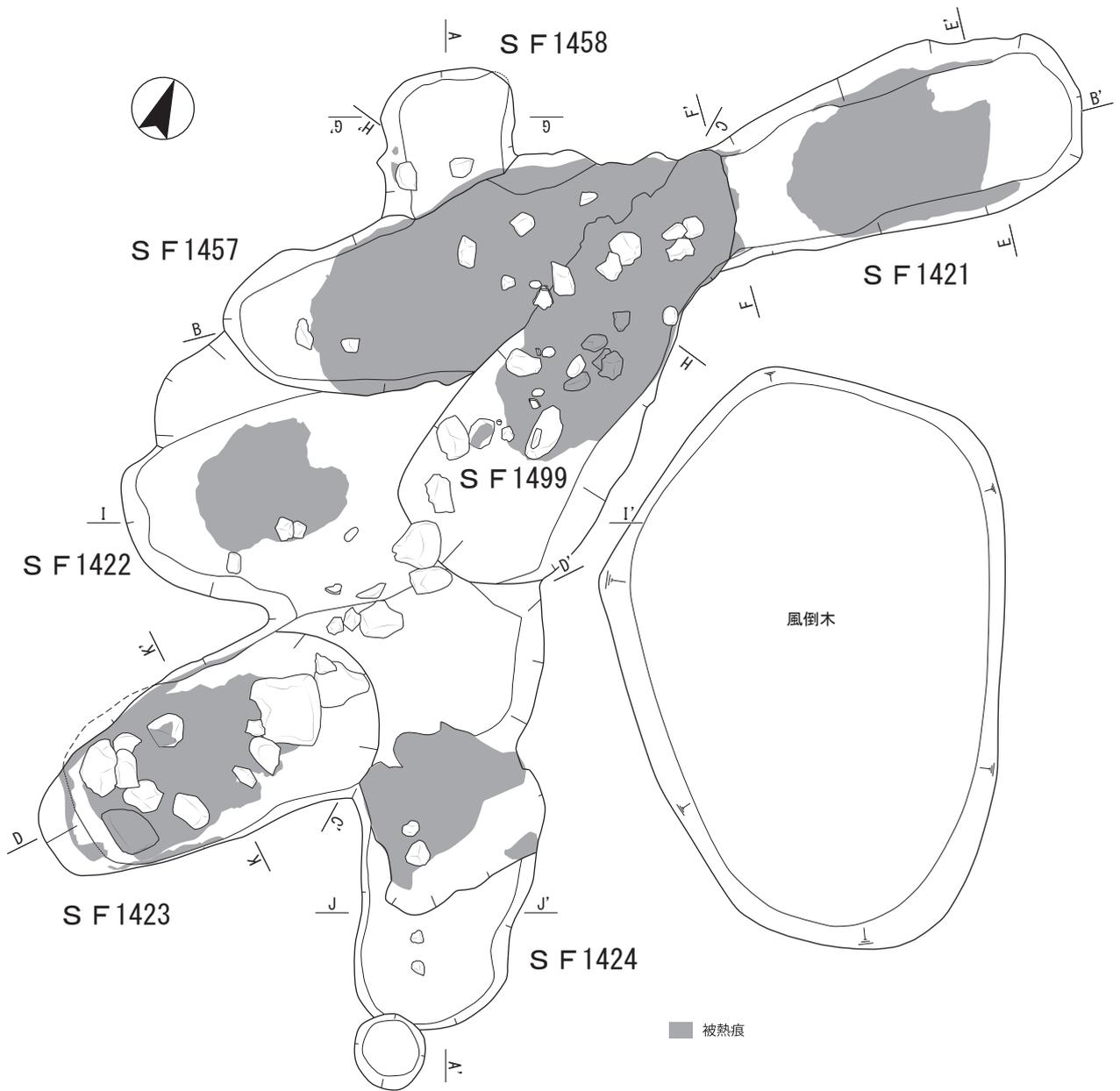


【SF1420】
1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土

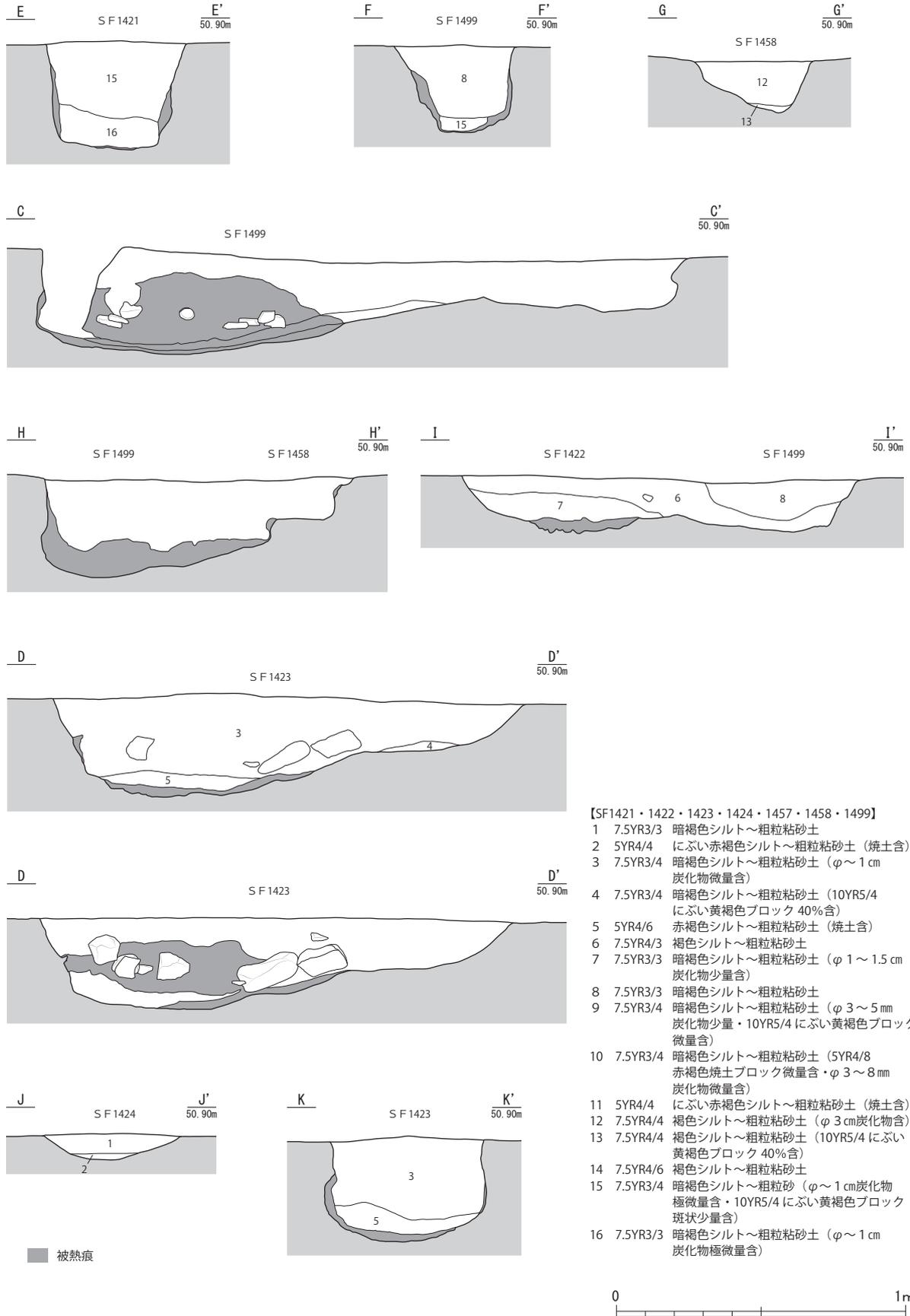
【SF1419】
1 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土
2 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1～5 cm礫少量含
・10YR6/6 明黄褐色ブロック斑状 30%含・φ 1～3 mm
炭化物微量含)
3 7.5YR3/3 暗褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1～2 cm炭化物多含)



第 36 図 S F 1419・1420 実測図 (1 : 20)

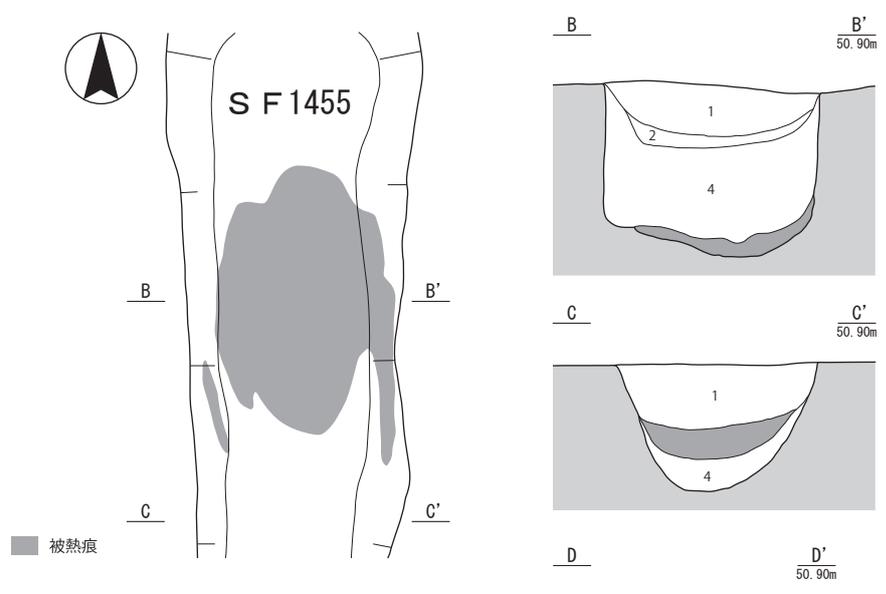
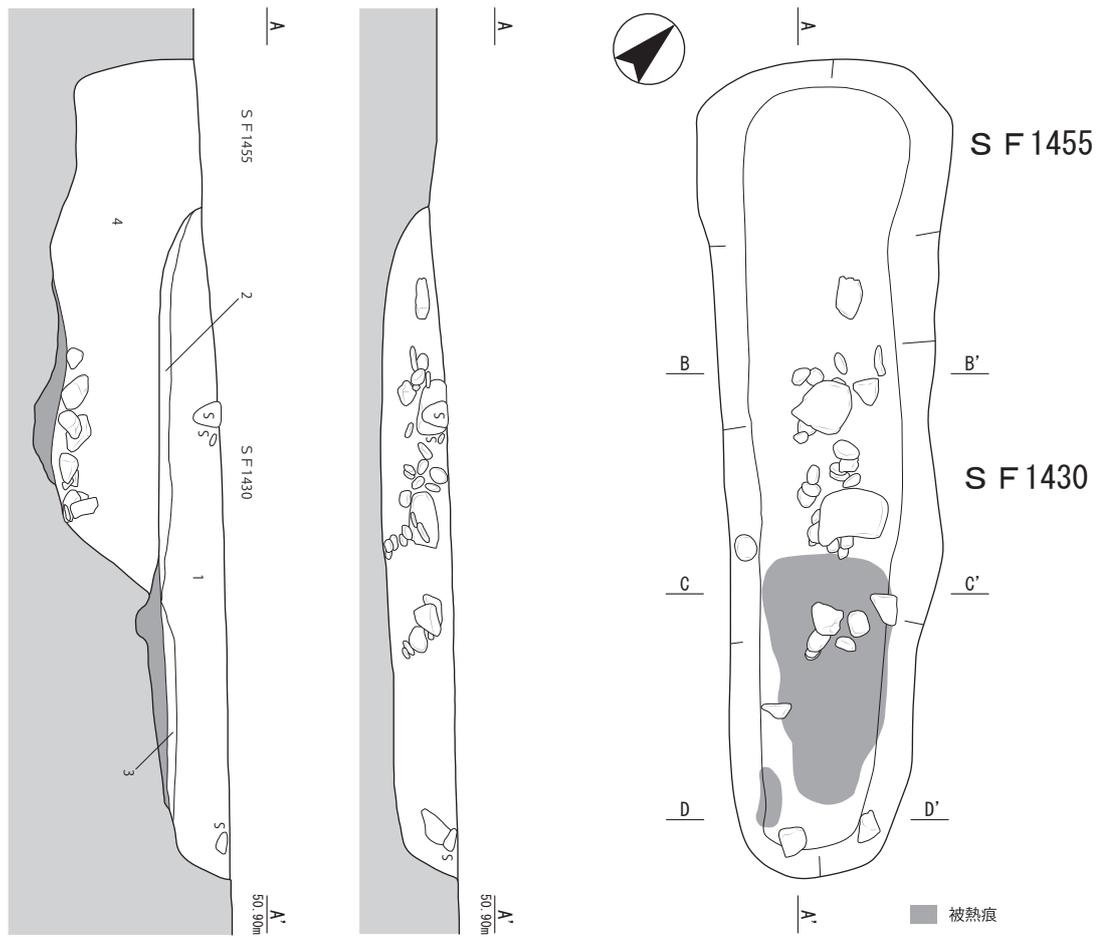


第 37 図 S F 1421・1422・1423・1424・1457・1458・1499 実測図 1 (1 : 20)



- 【SF1421・1422・1423・1424・1457・1458・1499】
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土（焼土含）
 - 3 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ～1cm炭化物微量含）
 - 4 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック 40%含）
 - 5 5YR4/6 赤褐色シルト～粗粒粘砂土（焼土含）
 - 6 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 7 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ 1～1.5 cm炭化物少量含）
 - 8 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 9 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ 3～5mm炭化物少量・10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック微量含）
 - 10 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（5YR4/8 赤褐色焼土ブロック微量含・φ 3～8mm炭化物微量含）
 - 11 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土（焼土含）
 - 12 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土（φ 3cm炭化物含）
 - 13 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土（10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック 40%含）
 - 14 7.5YR4/6 褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 15 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ～1cm炭化物極微量含・10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状少量含）
 - 16 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ～1cm炭化物極微量含）

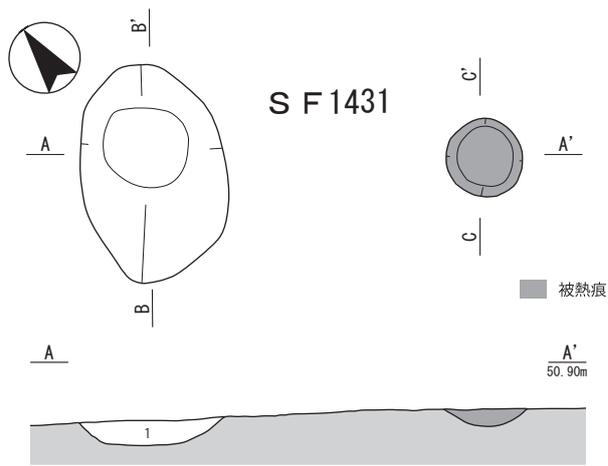
第 38 図 SF 1421・1422・1423・1424・1457・1458・1499 実測図 2 (1 : 20)



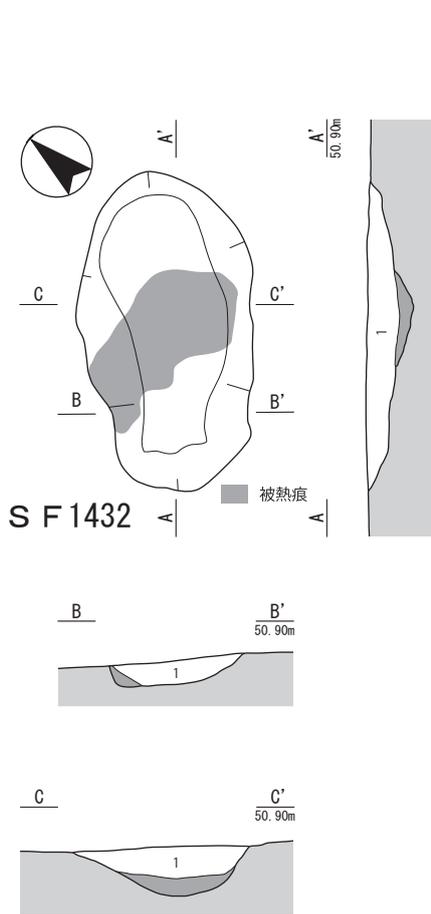
- 【SF1430・1455】
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～3cm炭化物極微量含)
 - 2 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/6 明褐色焼土ブロック多含)
 - 3 5YR4/6 赤褐色シルト～中粒粘砂土 (焼土多含)
 - 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ1～2mm粗粒砂多含)



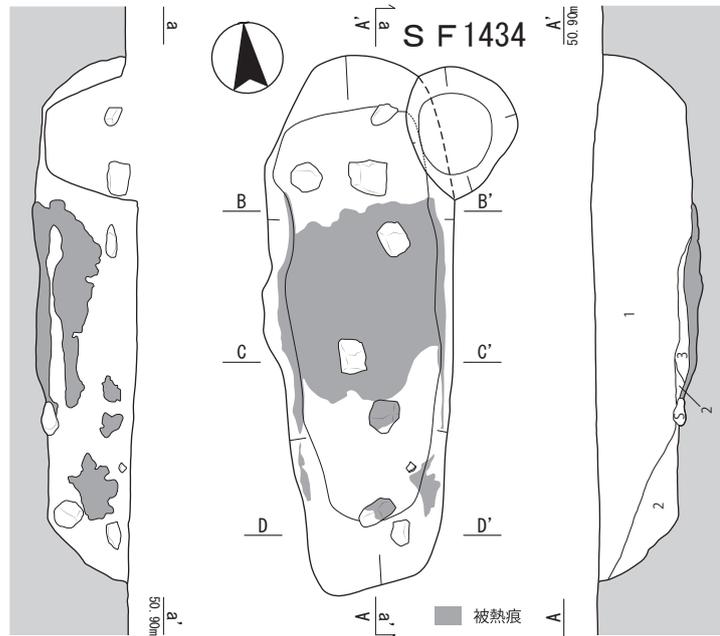
第 39 図 S F 1430・1455 実測図 (1 : 20)



【SF1431】
1 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土



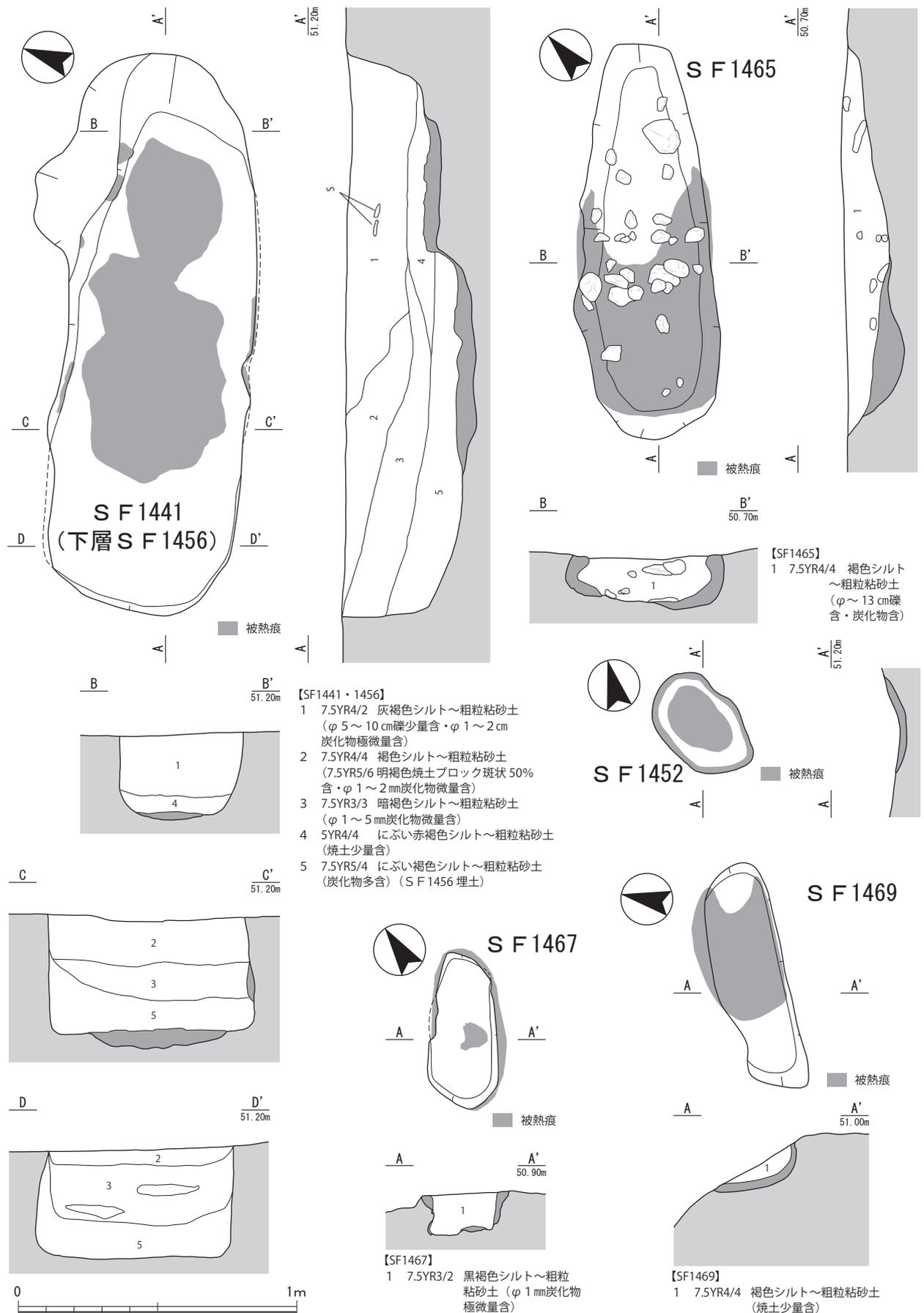
【SF1432】
1 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土



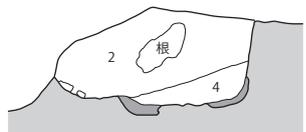
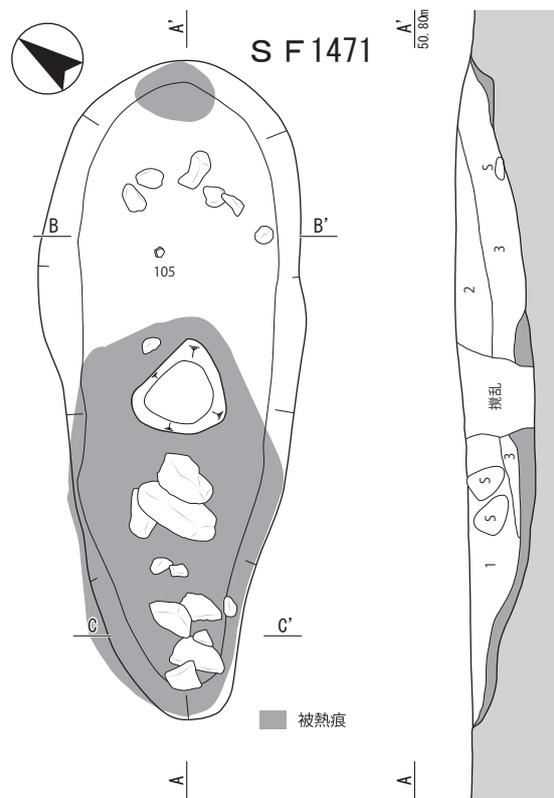
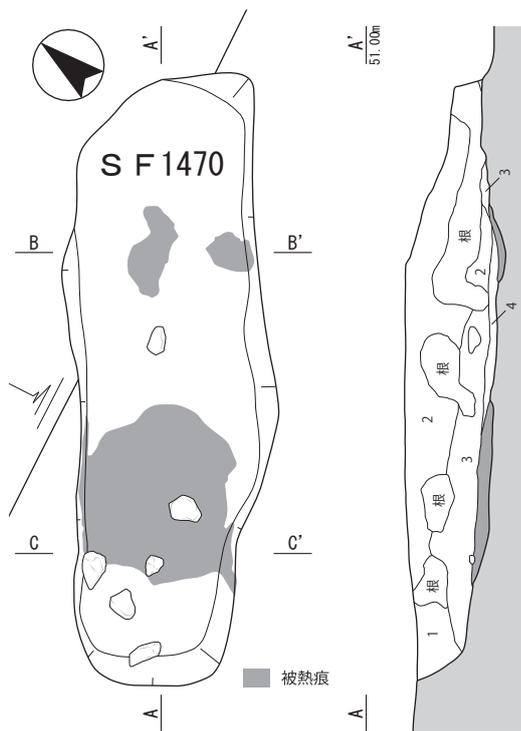
【SF1434】
1 7.5YR4/4 褐色シルト
～粗粒粘砂土
2 7.5YR4/2 灰褐色シルト
～粗粒粘砂土
3 7.5YR5/6 明褐色シルト
～粗粒粘砂土
(焼土少量含)



第 40 図 S F 1431 ・ 1432 ・ 1434 実測図 (1 : 20)

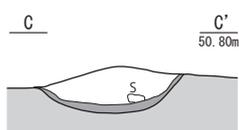
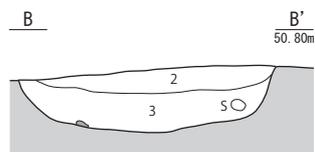


第 41 図 S F 1441・1452・1456・1465・1467・1469 実測図 (1 : 20)



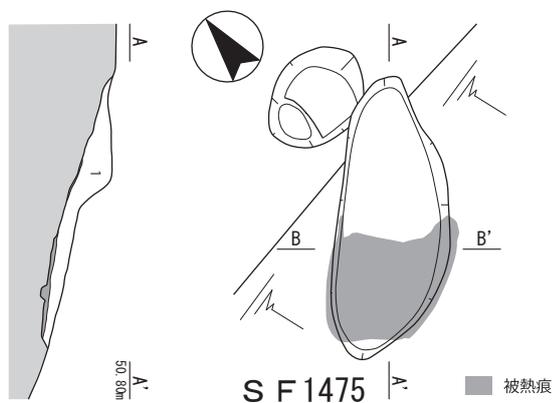
【SF1470】

- 1 7.5YR4/4 褐色シルト
～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト
～粗粒粘砂土 (φ5mm
炭化物微量含)
- 3 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト
～粗粒粘砂土 (焼土
少量含)
- 4 6.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒
粘砂土 (φ～5mm
炭化物少量含)



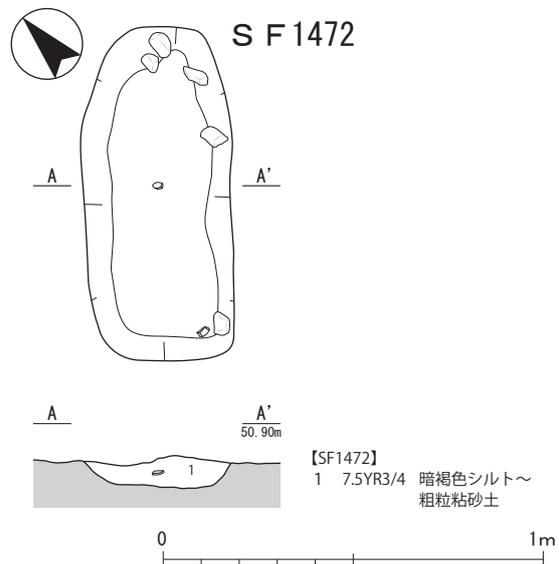
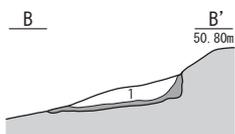
【SF1471】

- 1 7.5YR4/3 褐色シルト～
粗粒粘砂土
(φ5～10cm
礫含)
- 2 7.5YR4/2 灰褐色シルト
～粗粒粘砂土
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト
～粗粒粘砂土
(φ～1cm
炭化物微量含)



【SF1475】

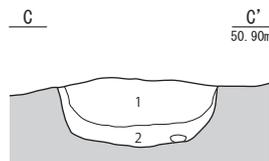
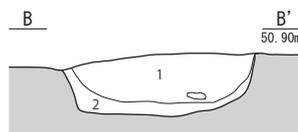
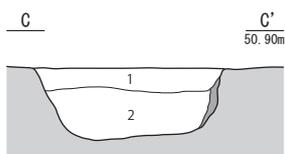
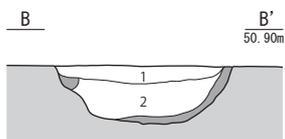
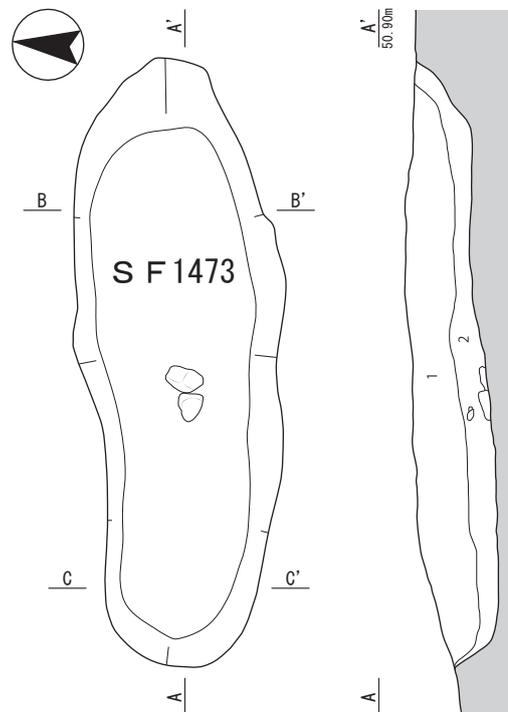
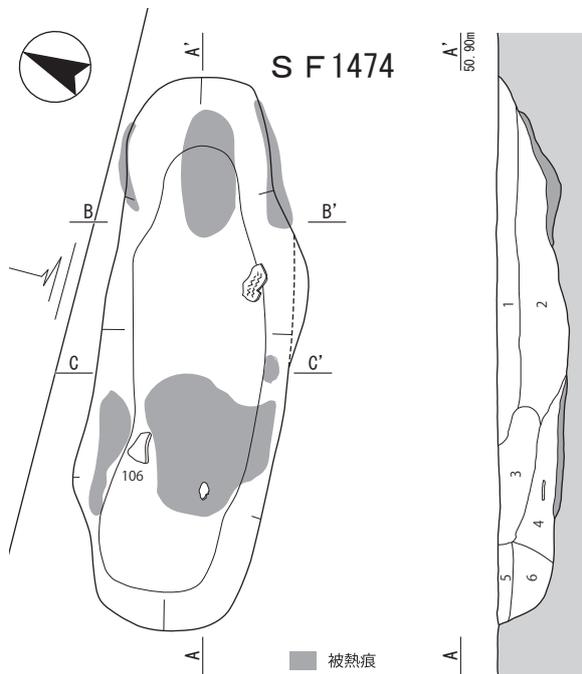
- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト
～粗粒粘砂土



【SF1472】

- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト
～粗粒粘砂土

第 42 図 S F 1470・1471・1472・1475 実測図 (1 : 20)



【SF1474】

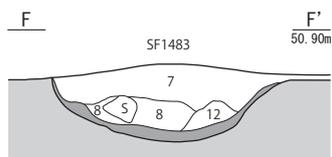
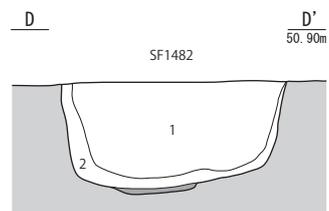
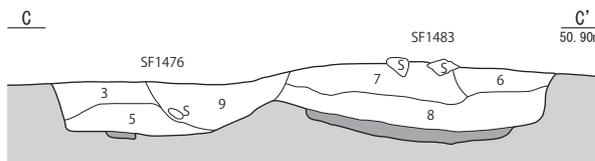
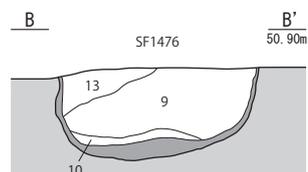
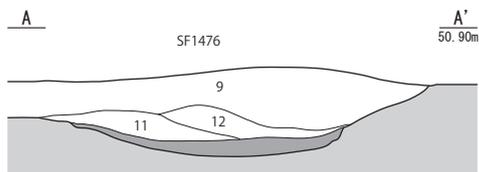
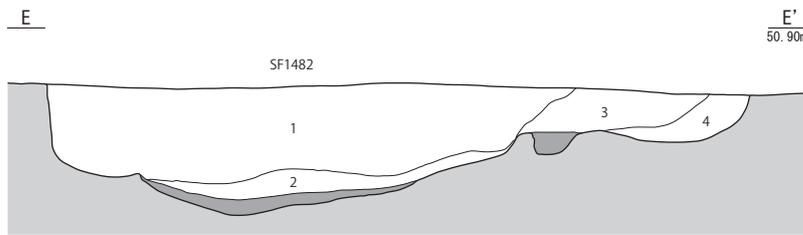
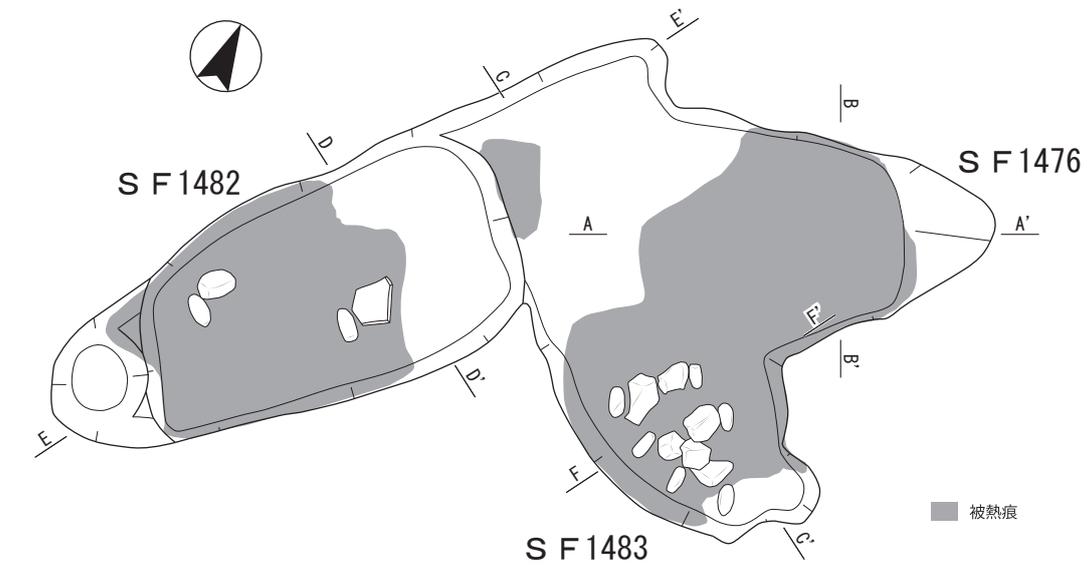
- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 3mm炭化物極微量含)
- 3 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状 40%含)
- 4 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土
- 5 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土
- 6 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土

【SF1473】

- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ ~ 1cm炭化物微量含)
- 2 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ ~ 1cm炭化物微量含)



第 43 図 S F 1473 ・ 1474 実測図 (1 : 20)

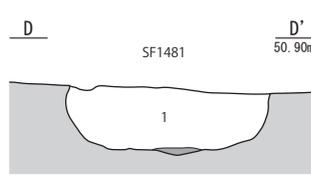
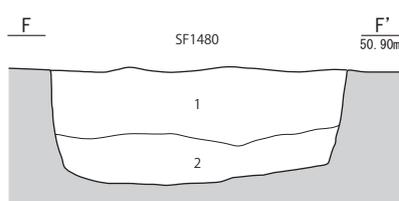
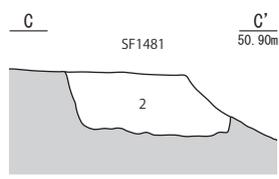
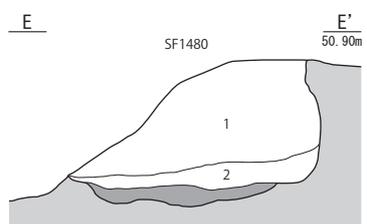
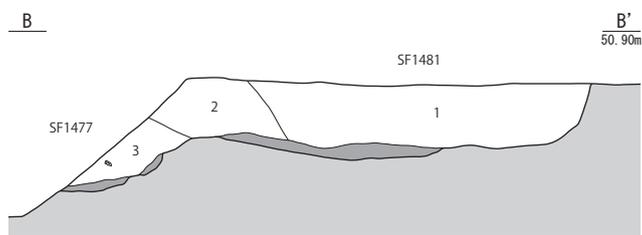
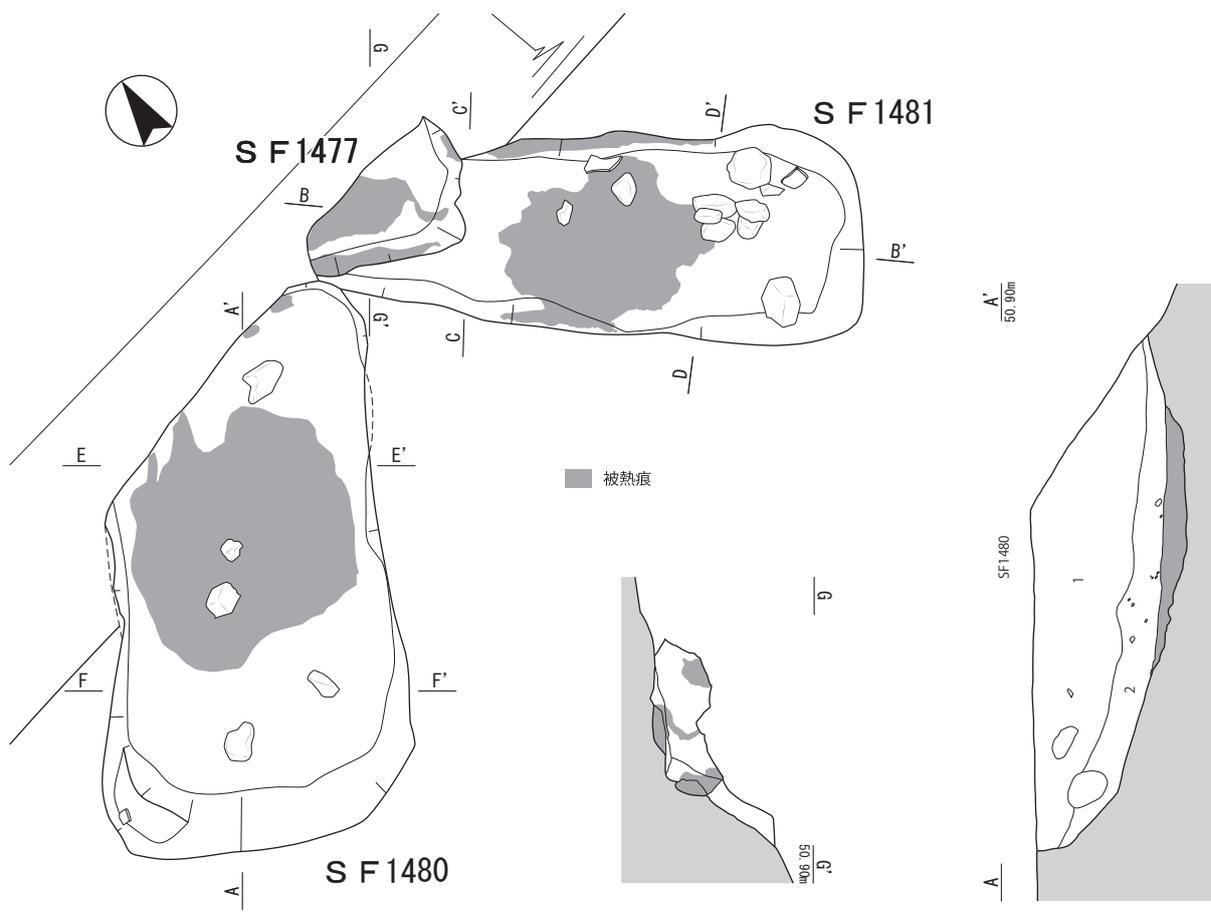


【SF1476・1482・1483】

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR4/6 褐色ブロック斑状多含)
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR4/8 赤褐色焼土ブロック少量含・φ 1mm炭化物微量含)
- 3 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～粗粒粘砂土
- 5 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック少量含)
- 6 7.5YR4/3 褐色土
- 7 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 8 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR4/6 赤褐色焼土ブロック多含)
- 9 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 10 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 11 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック微量含)
- 12 5YR4/6 赤褐色シルト～粗粒粘砂土
- 13 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土少量含)



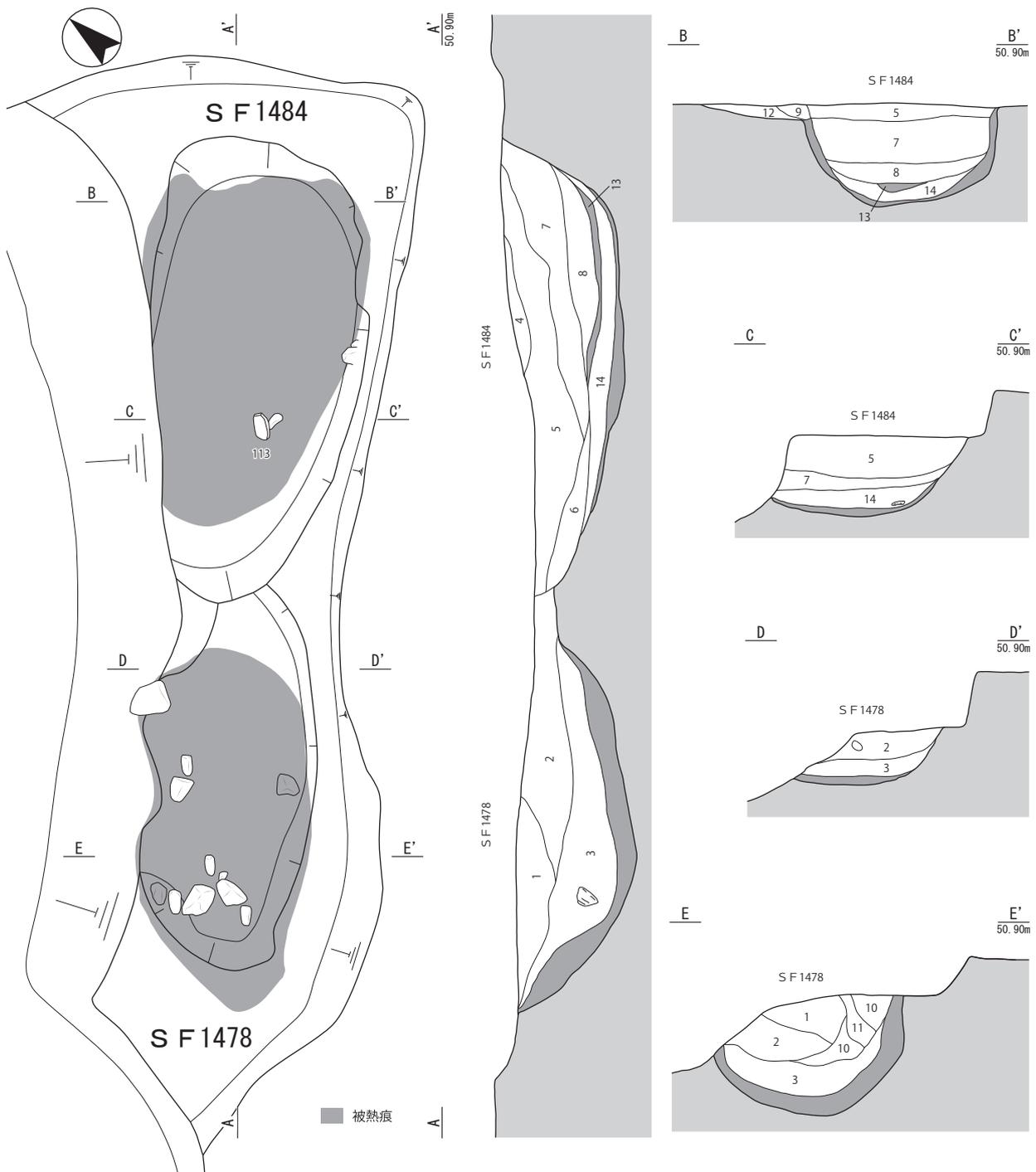
第 44 図 S F 1476 ・ 1482 ・ 1483 実測図 (1 : 20)



- 【SF1477・1480】
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～8cm礫微量含)
 - 2 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色 ブロック斑状 10%含・炭化物含)
 - 3 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (炭化物含)
- 【SF1481】
- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土少量含)
 - 2 5YR4/3



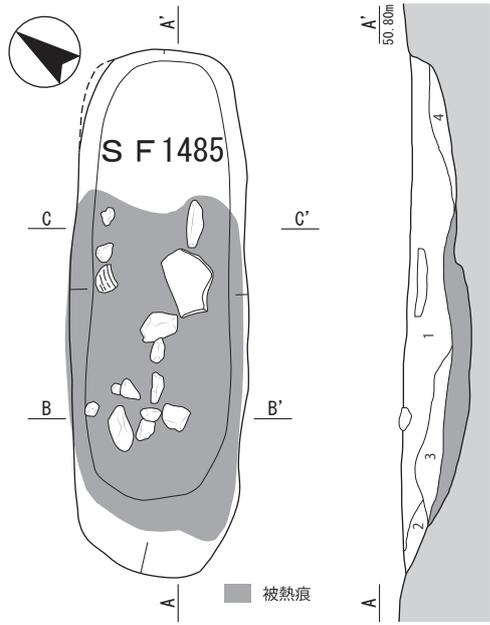
第 45 図 S F 1477・1480・1481 実測図 (1 : 20)



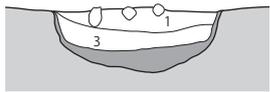
【SF1478・1484】

- | | | | | | |
|---|----------|--|----|----------|---------------------------------------|
| 1 | 5YR4/3 | にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土微量含) | 9 | 7.5YR4/4 | 褐色シルト～粗粒粘砂土 |
| 2 | 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 | 10 | 5YR4/4 | にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土少量含) |
| 3 | 7.5YR4/4 | 褐色シルト～粗粒粘砂土 | 11 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色シルト～粗粒粘砂土 |
| 4 | 10YR4/6 | 褐色シルト～粗粒粘砂土 | 12 | 10YR6/6 | 明黄褐色粗粒砂 |
| 5 | 7.5YR4/3 | 褐色シルト～粗粒粘砂土 | 13 | 5YR4/4 | にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR5/6 明赤褐色焼土ブロック多含) |
| 6 | 10YR4/4 | 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～1cm炭化物微量含) | 14 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～1cm炭化物多含) |
| 7 | 7/5YR4/6 | 褐色シルト～粗粒粘砂土 | | | |
| 8 | 7/5YR3/3 | 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/6 明褐色焼土ブロック 10%含) | | | |

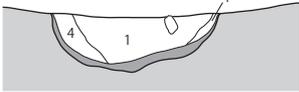
第 46 図 SF 1478・1484 実測図 (1 : 20)



B B' 50.90m

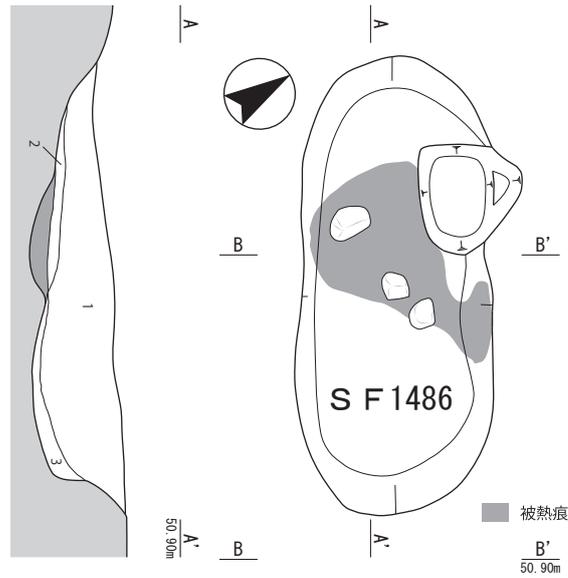


C C' 50.90m



【SF1485】

- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～1cm炭化物少量含)
- 2 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土微量含)
- 3 5YR4/8 赤褐色シルト～粗粒粘砂土
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ2～5mm炭化物多含)

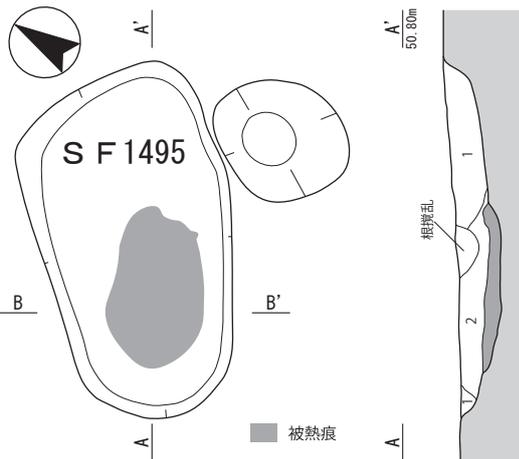
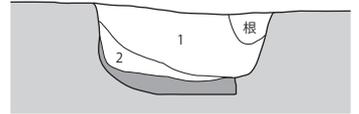


A' 50.70m

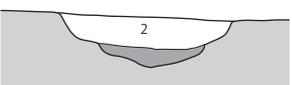
B B' 50.90m

【SF1486】

- 1 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～1cm炭化物極微量含)
- 2 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土含)
- 3 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ5mm炭化物微量含)

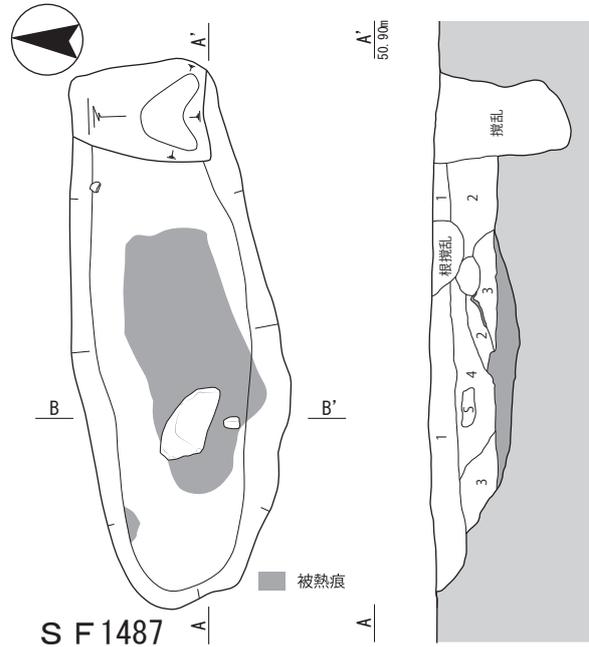


B B' 50.80m



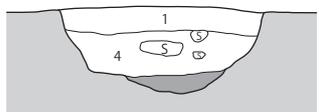
【SF1495】

- 1 7.5YR4/6 褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土



S F 1487

B B' 50.90m

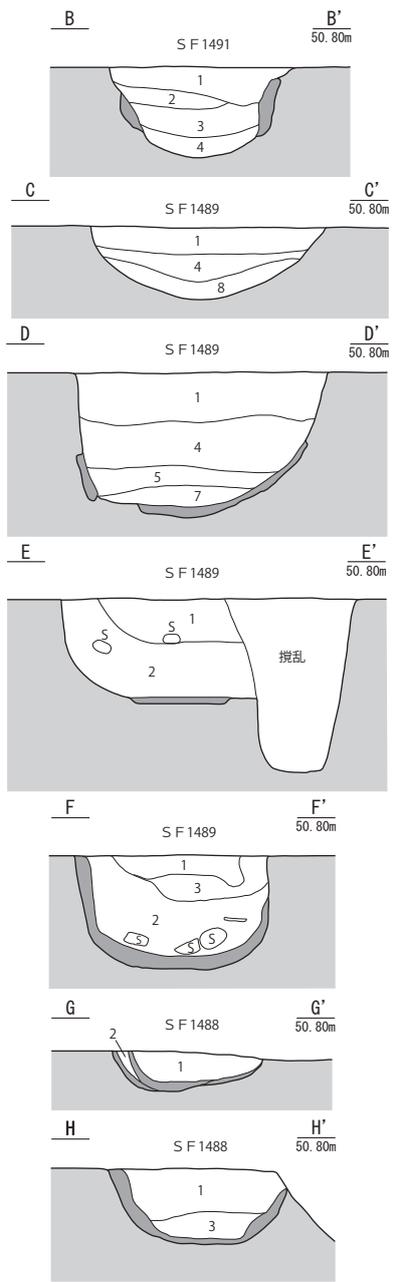
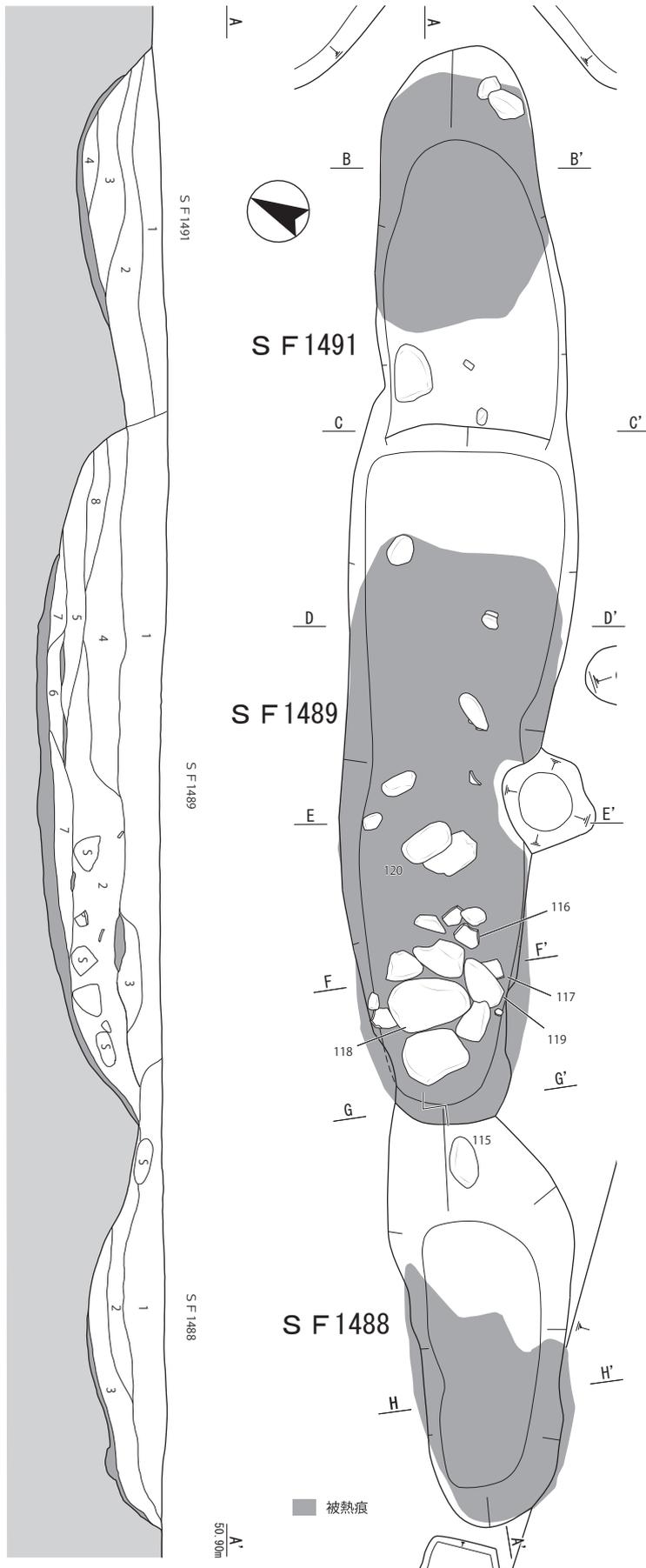


【SF1487】

- 1 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ3mm炭化物微量含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 3 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土微量含)
- 4 7.5YR3/4 シルト～粗粒粘砂土



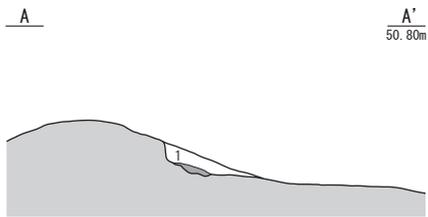
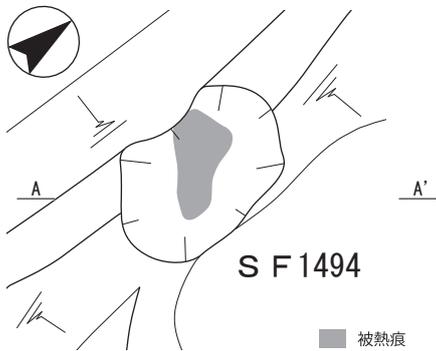
第 47 図 S F 1485・1486・1487・1495 実測図 (1 : 20)



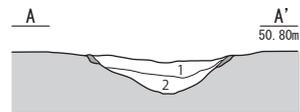
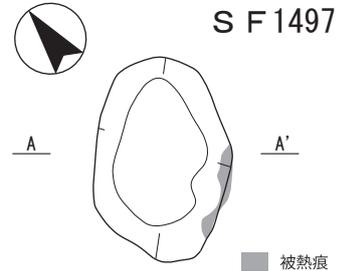
- [SF1488]**
- 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR4/6 赤褐色焼土斑状5%含)
 - 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 5mm炭化物微量含)
- [SF1489]**
- 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1cm炭化物微量含)
 - 5YR3/3 暗赤褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 10YR3/4 暗赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状多含)
 - 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1～4cm炭化物微量含)
 - 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック層状含)
 - 5YR4/8 赤褐色シルト～粗粒砂
 - 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂 (φ 1～2cm炭化物微量含)
- [SF1491]**
- 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック微量含)
 - 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1mm炭化物微量含)



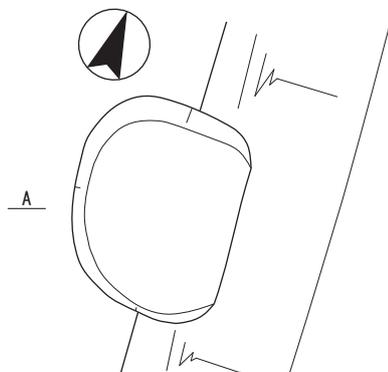
第 48 図 S F 1488 ・ 1489 ・ 1491 実測図 (1 : 20)



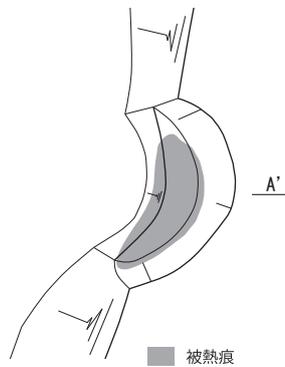
【SF1494】
 1 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト～粗粒粘砂土
 (φ 3～5mm炭化物微量含)



【SF1497】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 (φ 2cm炭化物微量含)
 2 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土
 (5YR4/6 赤褐色焼土ブロック微量含
 ・炭化物微量含)



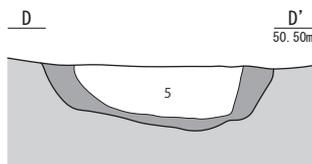
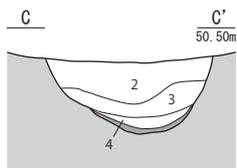
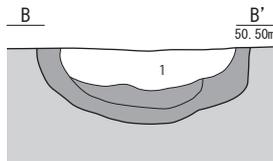
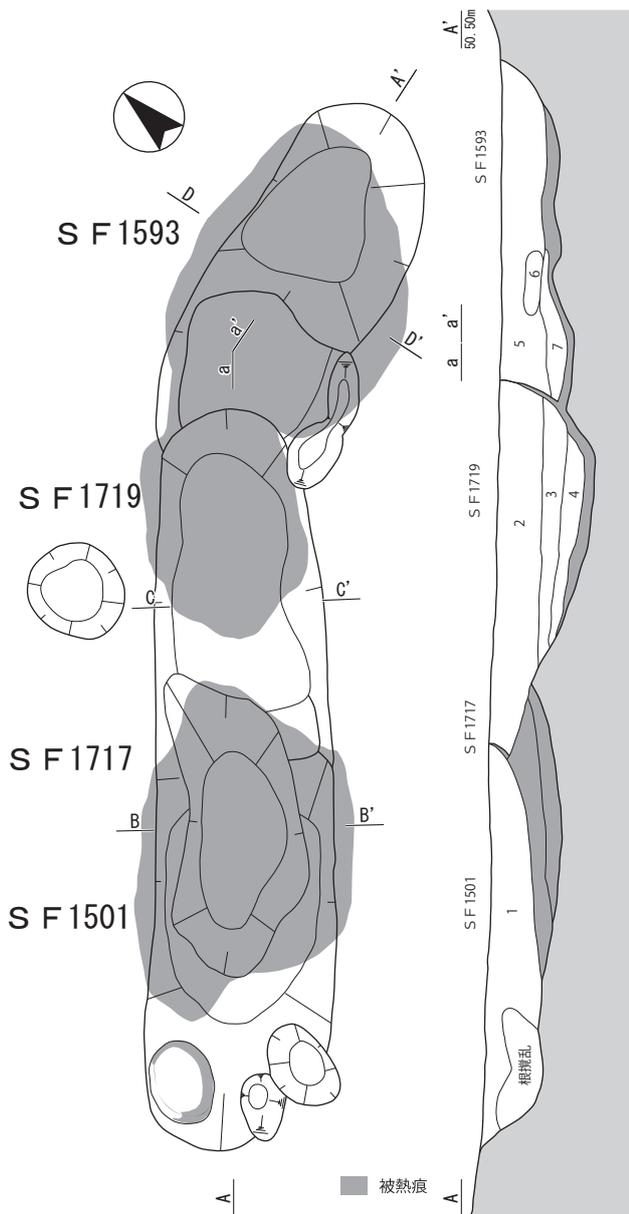
S F 1500



【SF1500】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 4～5mm炭化物微量含)

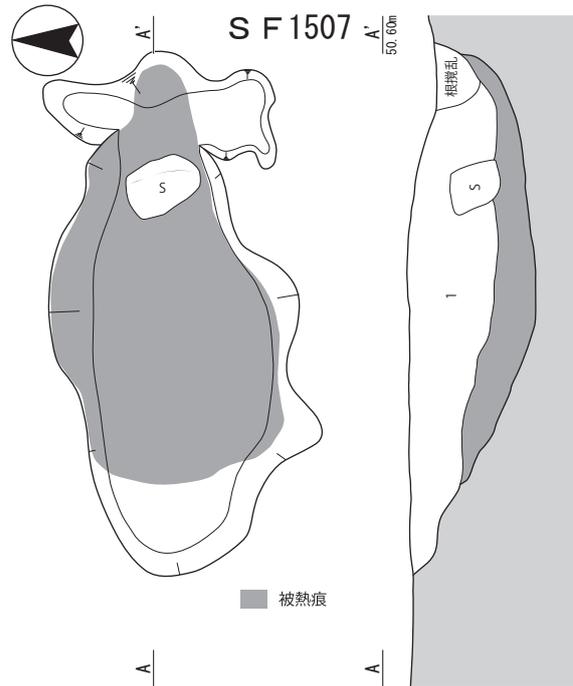


第 49 図 S F 1494・1497・1500 実測図 (1 : 20)



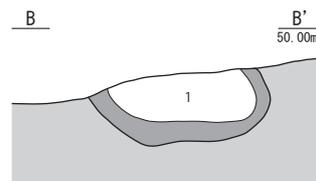
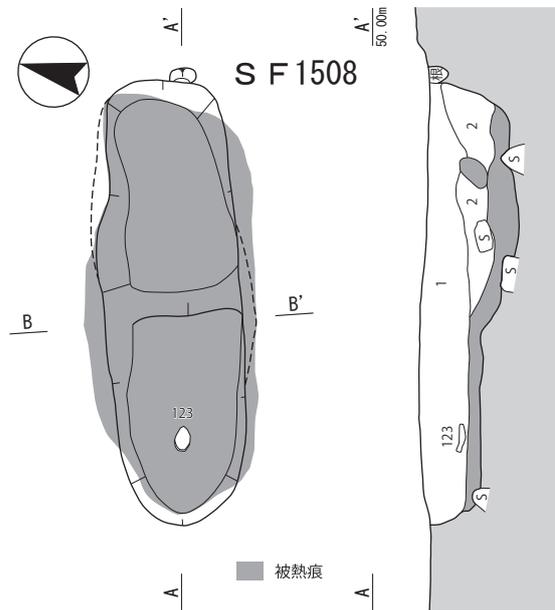
【SF1501・1593・1717・1719】

- 1 7.5YR4/3 褐色粘質シルト (φ 1cm 焼土ブロック・炭化物少量含)
- 2 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト (炭化物少量含)
- 3 5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト (炭化物少量含・粗砂少量含)
- 4 2.5Y4/4 にぶい赤褐色粘質シルト (粗砂少量含・φ 1cm 2.5YR4/6 赤褐色焼土ブロック少量含)
- 5 5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト (粗砂・炭化物少量含)
- 6 2.5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト
- 7 5YR3/3 暗赤褐砂質シルト (φ 1cm 2.5YR4/4 にぶい赤褐色焼土ブロック少量含)



【SF1507】

- 1 7.5YR4/3 褐色砂質シルト (炭化物少量含)

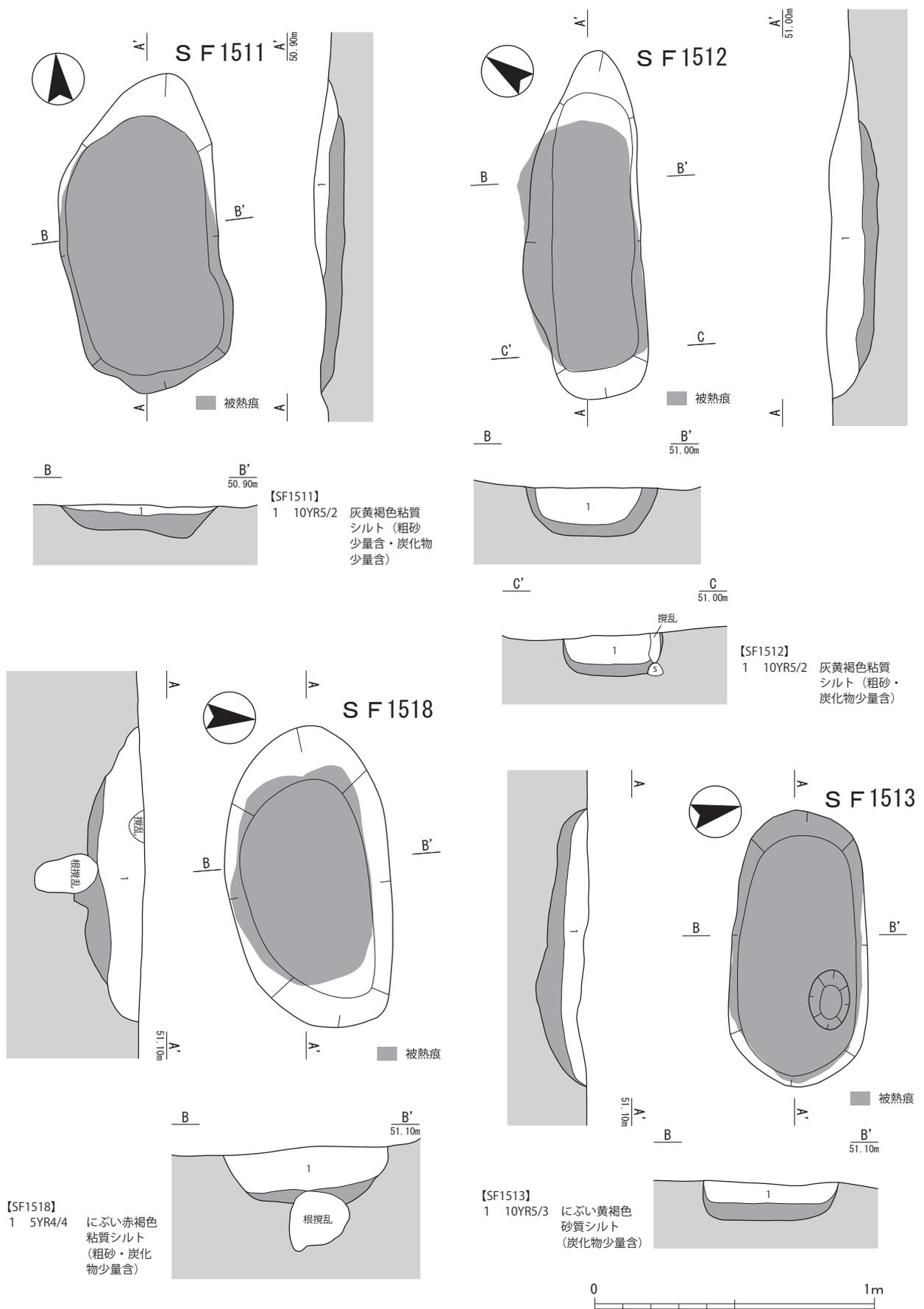


【SF1508】

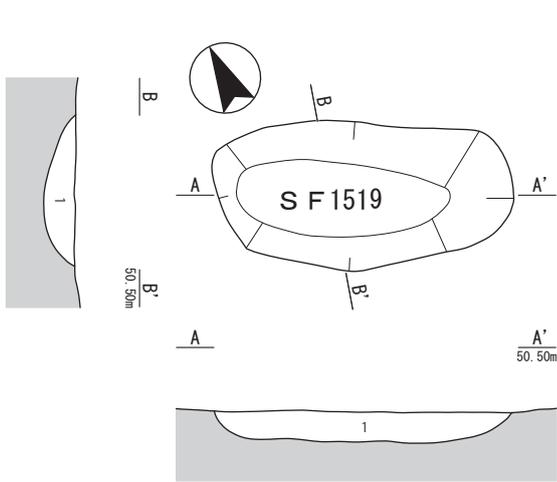
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト (粗砂少量含)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (粗砂少量含・炭化物多量含)



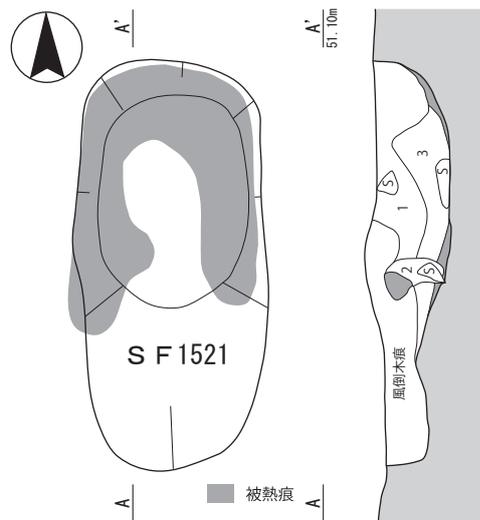
第 50 図 S F 1501・1507・1508・1593・1717・1719 実測図 (1 : 20)



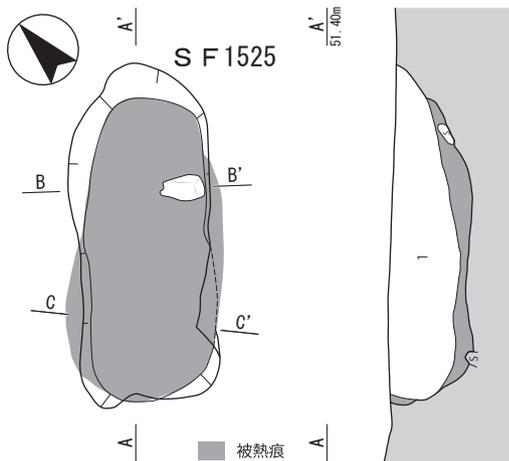
第 51 図 S F 1511・1512・1513・1518 実測図 (1 : 20)



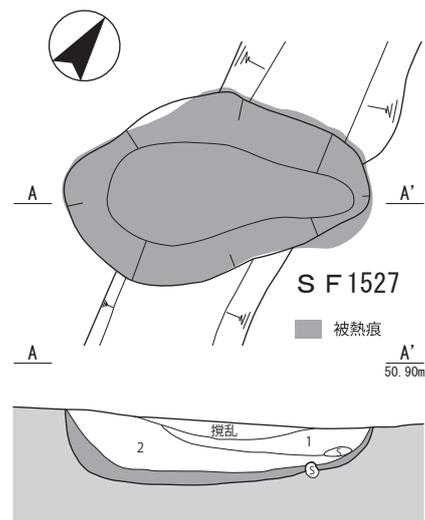
【SF1519】
1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
(φ 2mm長石粒 7%・炭化物少量含)



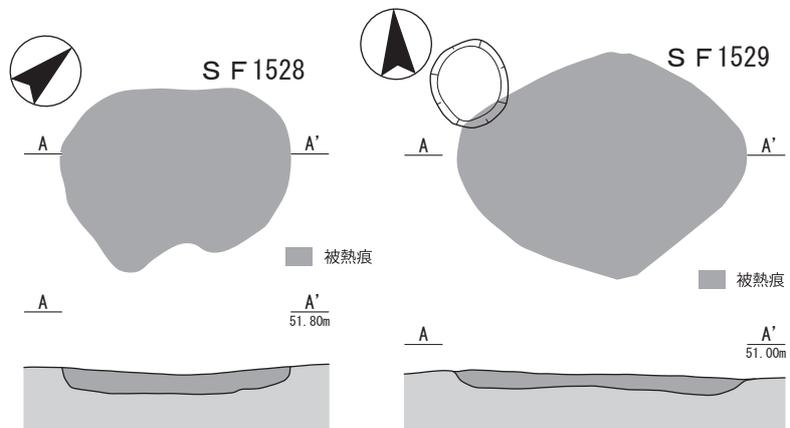
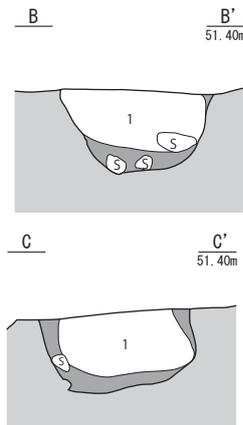
【SF1521】
1 7.5YR4/3 ~ 7.5YR3/4 褐色~暗褐色粘質シルト
2 7.5YR4/4 褐色粘質シルト (5YR4/6 赤褐色粘質シルト含)
3 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭化物多含)



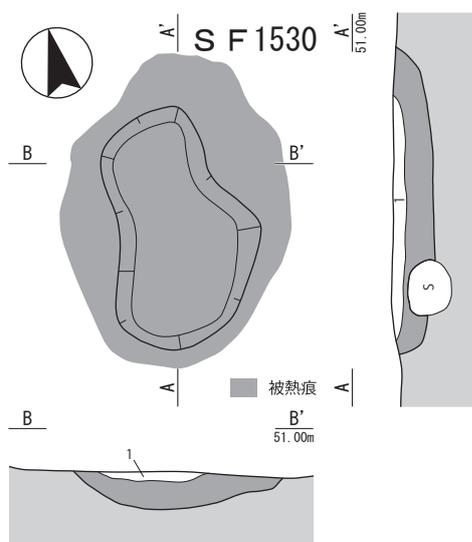
【SF1525】
1 7.5YR4/6 褐色~5YR4/6
赤褐色粘質シルト
(炭化物少量含)



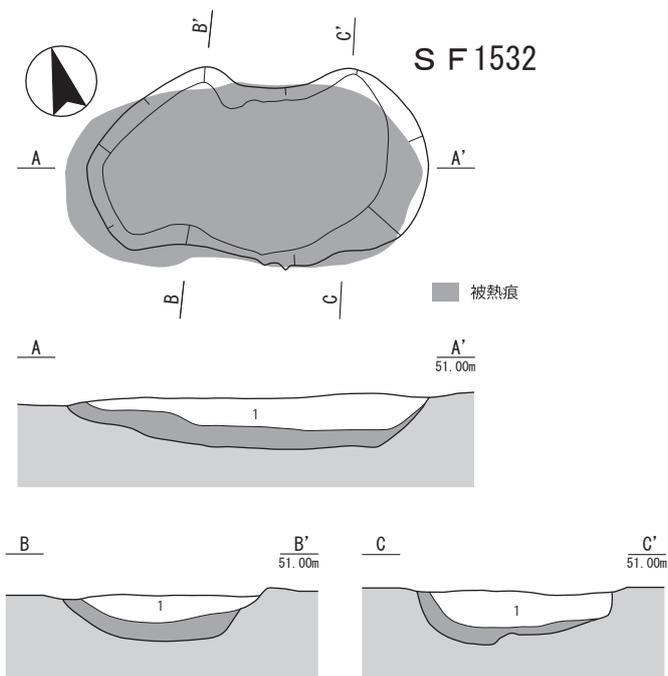
【SF1527】
1 2.5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト (炭化物・焼土含)
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト (粗砂・炭化物少量含)



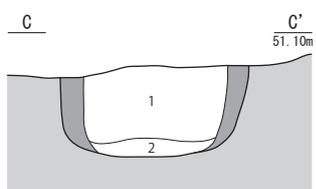
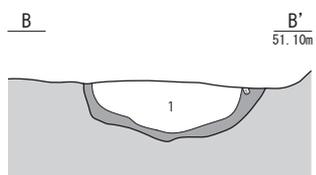
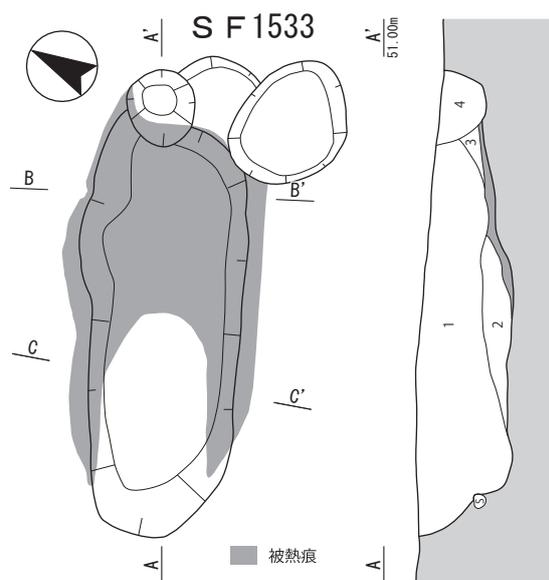
第 52 図 S F 1519・1521・1525・1527・1528・1529 実測図 (1 : 20)



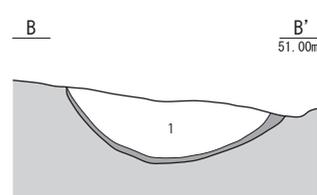
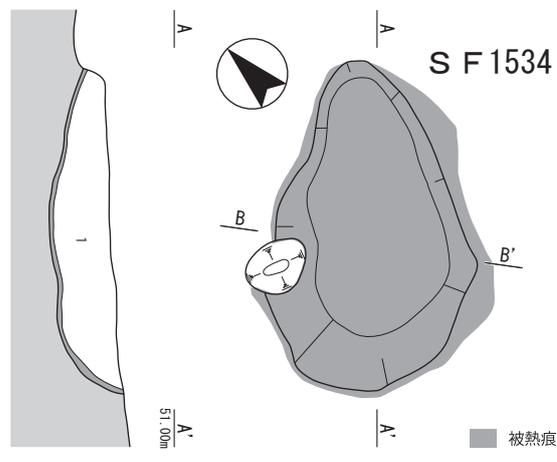
【SF1530】
1 5YR6/3 にぶい橙色砂質シルト (φ 5mm炭化物少量含)



【SF1532】
1 7.5YR4/6 褐色シルト (炭化物少量含)



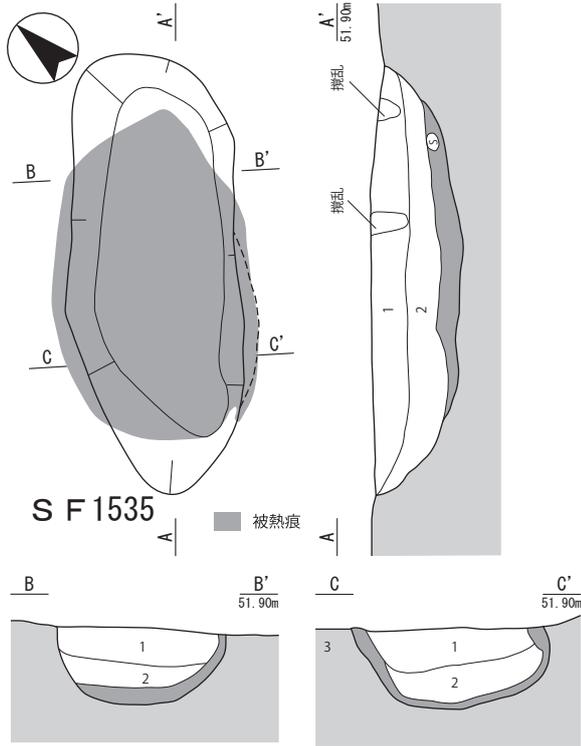
【SF1533】
1 10YR3/4 暗褐色粘質シルト (炭化物少量含)
2 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭化物多含)
3 5YR4/6 赤褐色粘質シルト (炭化物少量含)
4 10YR2/2 黒褐色シルト



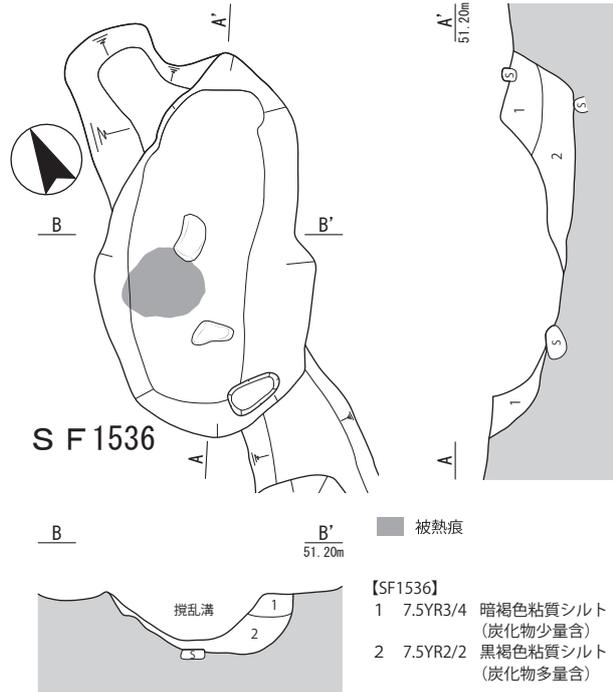
【SF1534】
1 7.5YR4/6 褐色～5YR4/8 赤褐色粘質シルト (炭化物少量含)



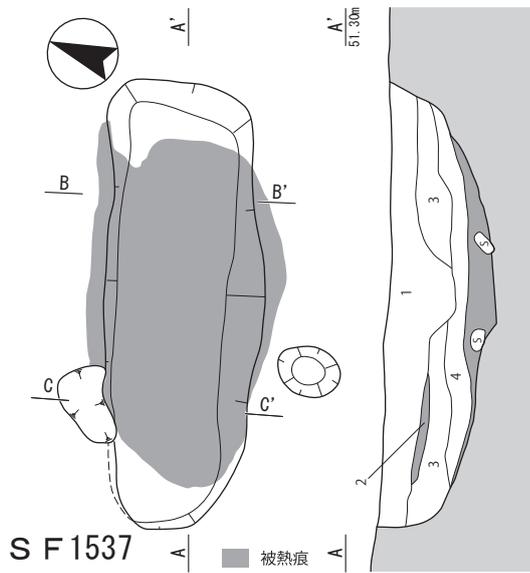
第 53 図 S F 1530・1532・1533・1534 実測図 (1 : 20)



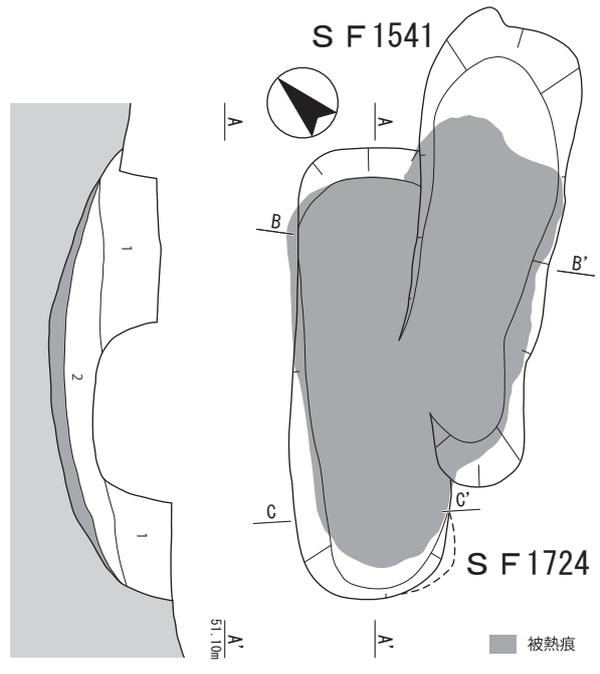
- 【SF1535】
- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト (φ 1cm炭化物片・炭化物少量含)
 - 2 7.5YR4/3 褐色粘質シルト (炭化物多量含)



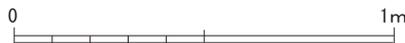
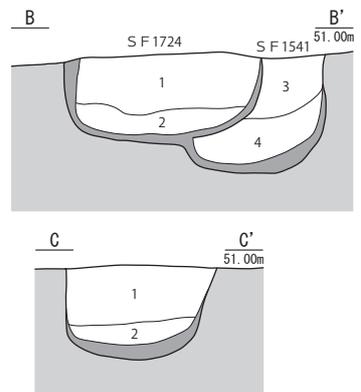
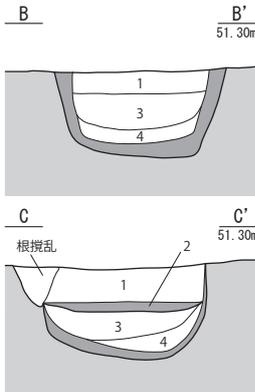
- 【SF1536】
- 1 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト (炭化物少量含)
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト (炭化物多量含)



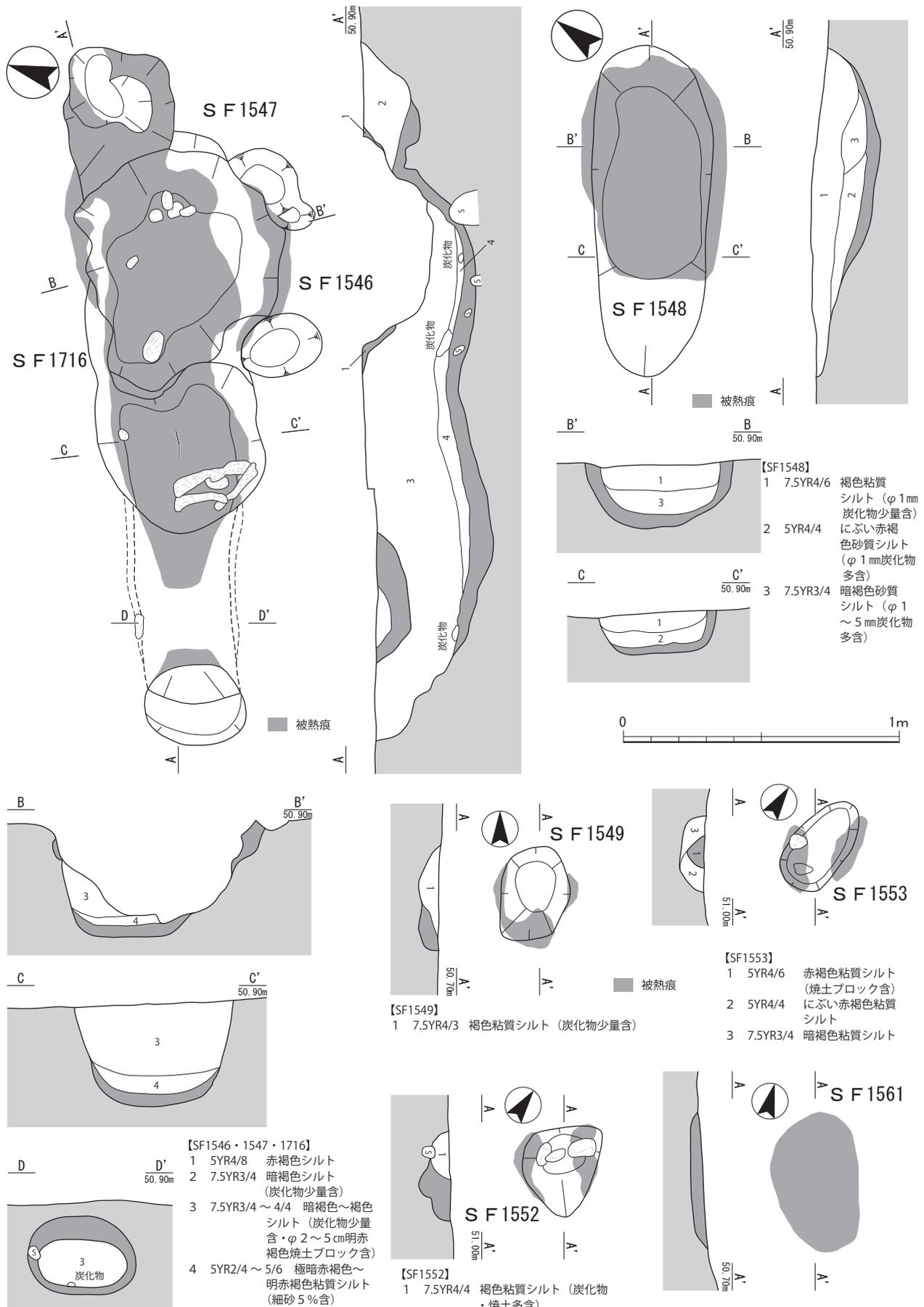
- 【SF1537】
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
 - 2 2.5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト (炭化物少量含)
 - 4 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト (炭化物少量含)



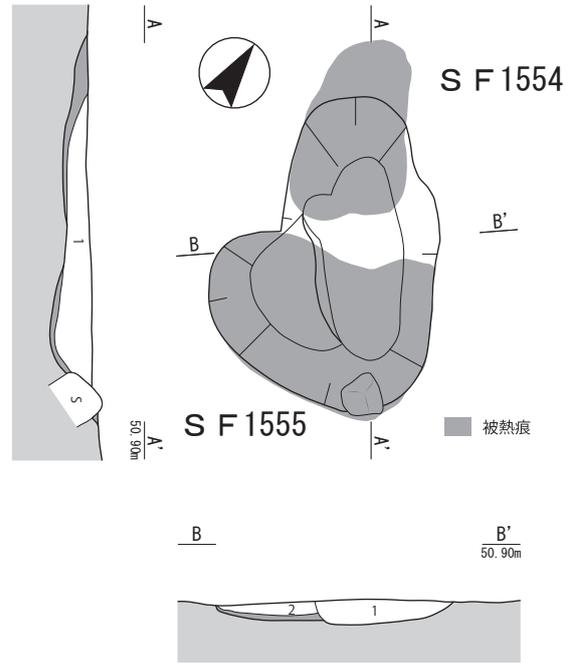
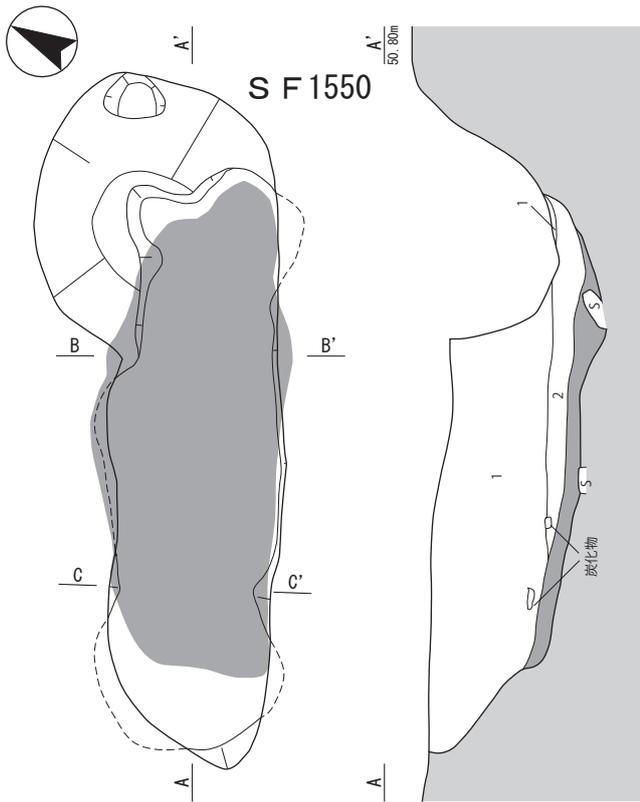
- 【SF1541・1724】
- 1 7.5YR4/6～7.5YR3/4 褐色～暗褐色シルト (炭化物少量含)
 - 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト (炭化物多量含)
 - 3 7.5YR4/3 褐色シルト (φ 1cm焼土塊・炭化物少量含)
 - 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト (炭化物少量含)



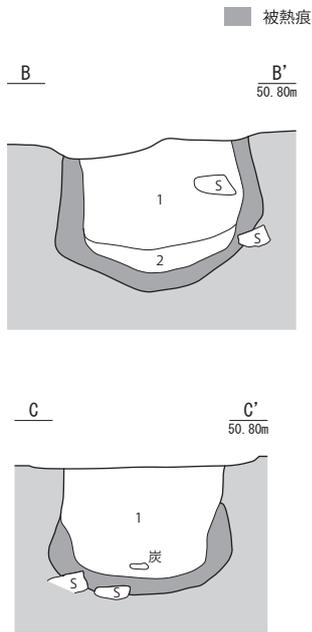
第 54 図 S F 1535・1536・1537・1541・1724 実測図 (1 : 20)



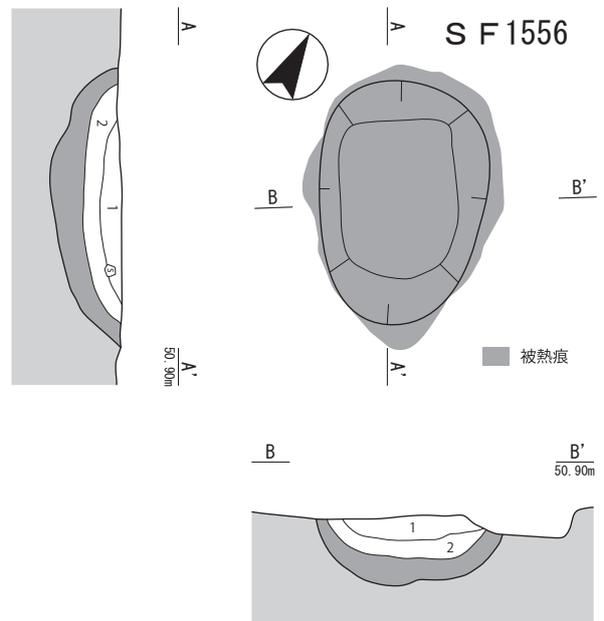
第 55 図 S F 1546・1547・1548・1549・1552・1553・1561・1716 実測図 (1 : 20)



- 【SF1554・1555】
 1 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト（粗砂少量・炭化物多含）
 2 5YR3/4 暗赤褐色粘質シルト（炭化物・焼土多含）



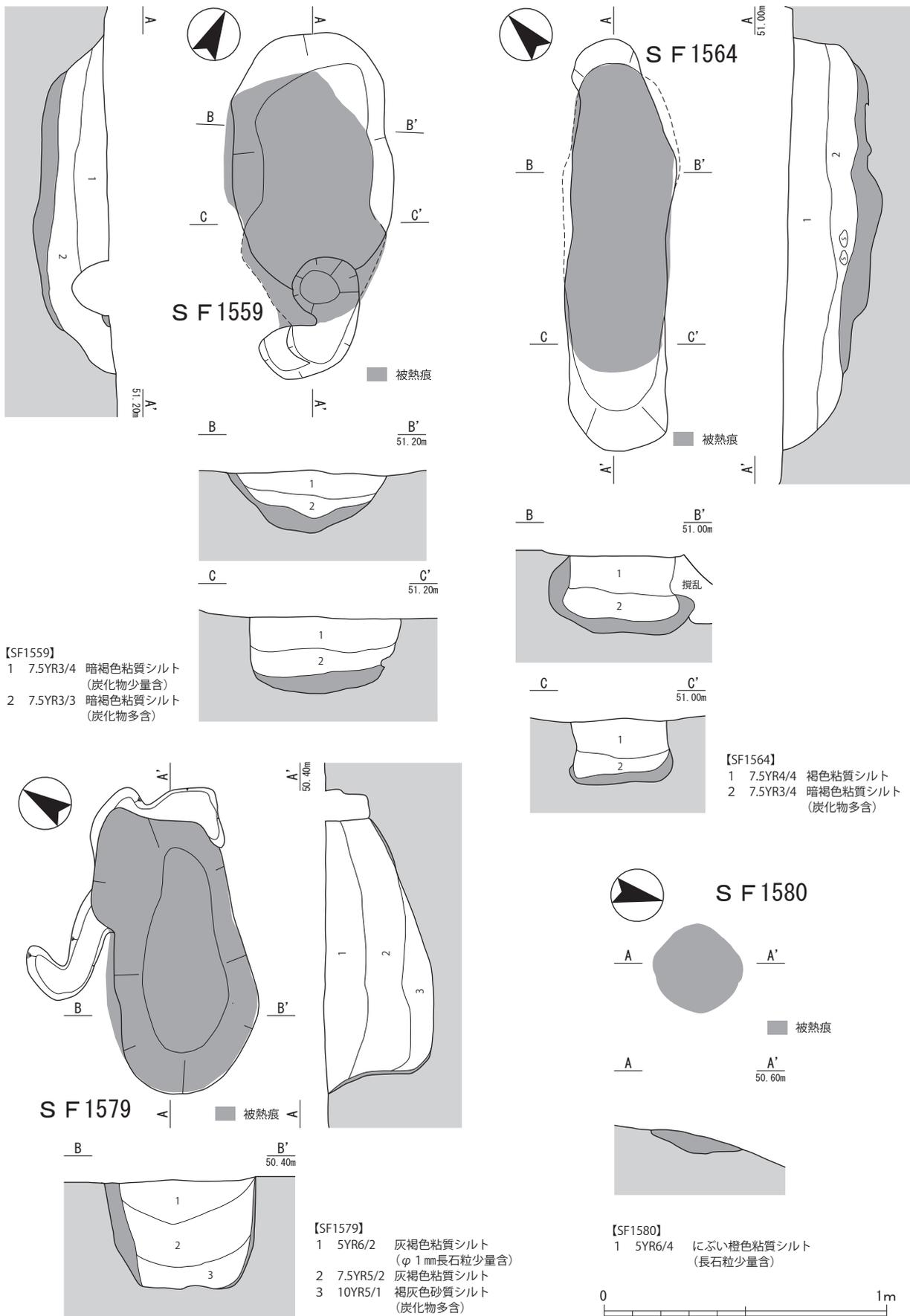
- 【SF1550】
 1 7.5YR4/4 ~ 7.5YR3/4 褐色~暗褐色粘質シルト（炭化物・焼土含）
 2 5YR4/6 赤褐色粘質シルト



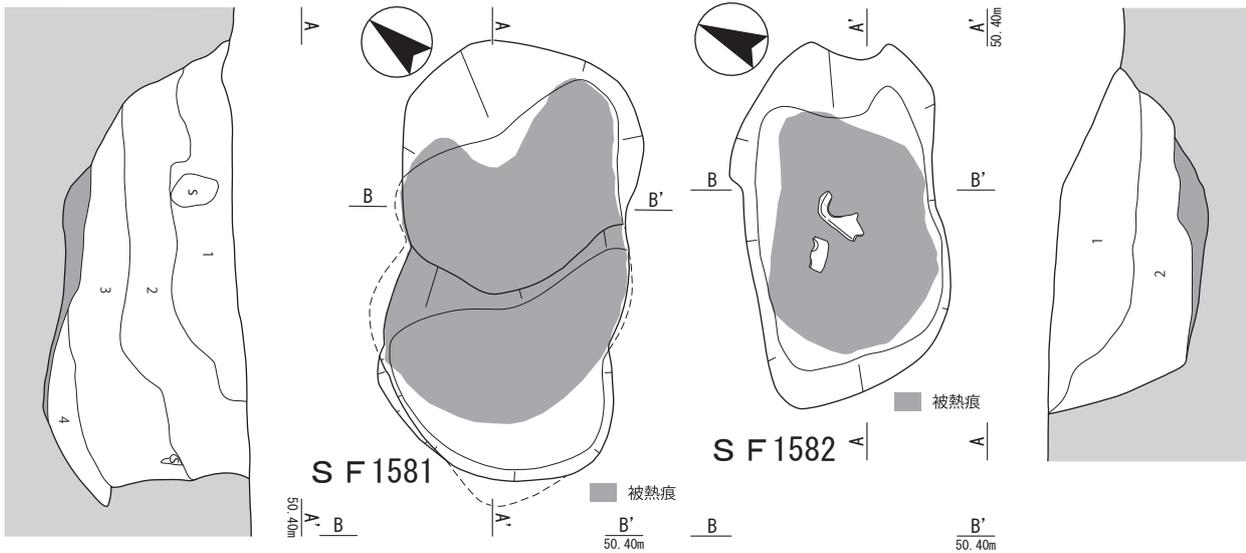
- 【SF1556】
 1 7.5YR4/6 褐色粘質土
 2 5YR4/6 赤褐色粘質土（粗砂・炭化物少量含）



第 56 図 S F 1550・1554・1555・1556 実測図（1 : 20）

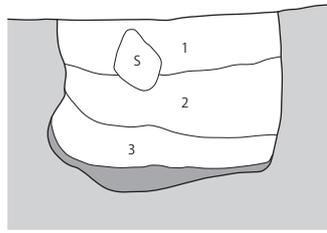


第 57 図 S F 1559・1564・1579・1580 実測図 (1 : 20)



【SF1581】

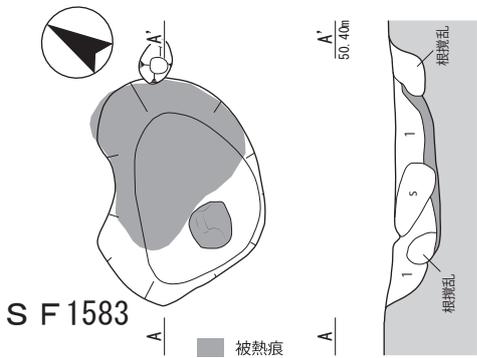
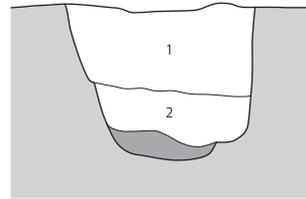
- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ20 cm 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルトブロック 30%含)
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (炭化物多含)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
- 4 10YR5/1 褐灰色砂質シルト (φ 2 cm 5YR7/4 にぶい 橙色粘質シルトブロック ・被熱硬化土 20%含)



S F 1582

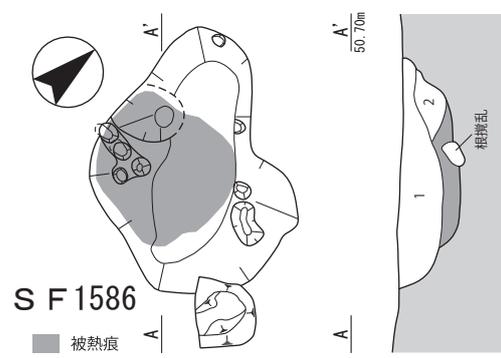
【SF1582】

- 1 7.5YR5/2 灰褐色粘質シルト (長石粒少量含)
- 2 7.5YR5/3 にぶい褐色砂質シルト (φ 5 mm 7.5YR7/4 にぶい 橙色粘質シルトブロック 20%含)



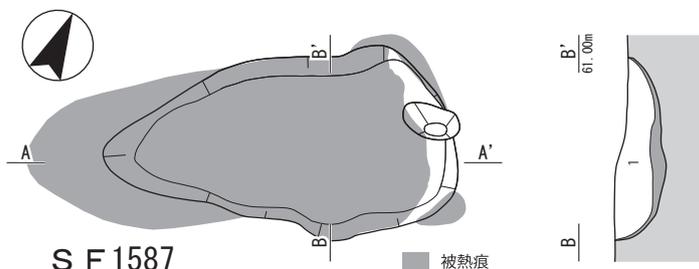
【SF1583】

- 1 5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト



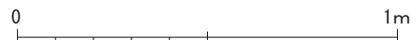
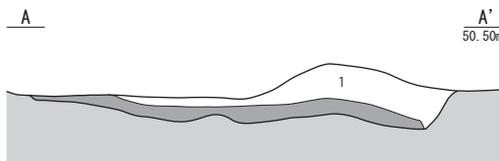
【SF1586】

- 1 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 3 cm 5YR7/4 にぶい 橙色粘質シルトブロック 20%含)
- 2 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (炭化物多含)

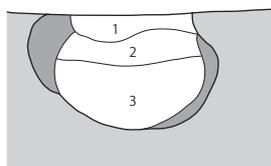
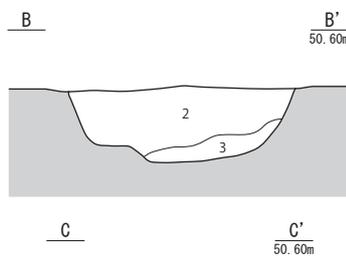
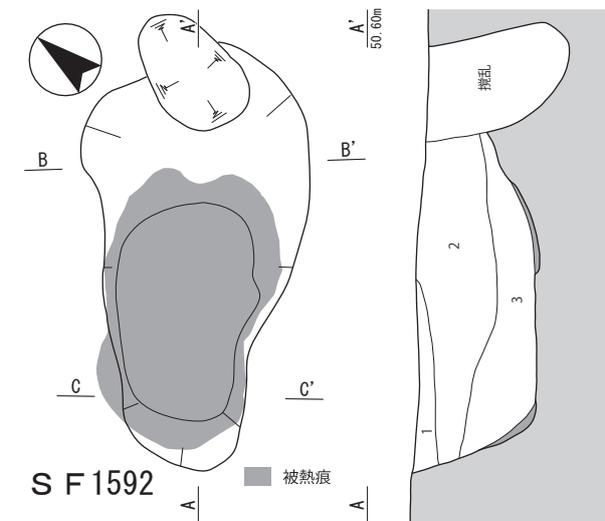


【SF1587】

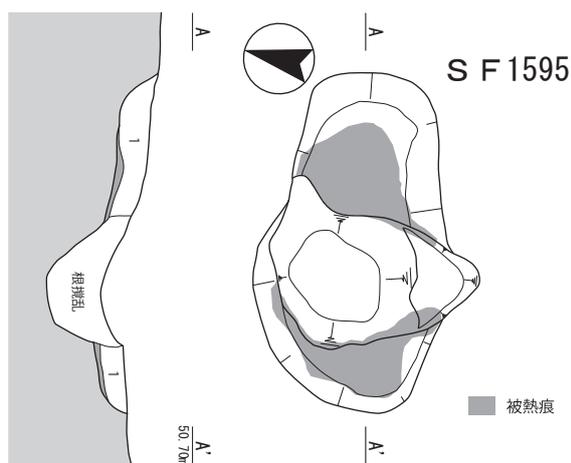
- 1 5YR5/2 灰褐色粘質シルト (φ 2 cm 10R6/6 赤橙色粘質シルトブロック 30%含)



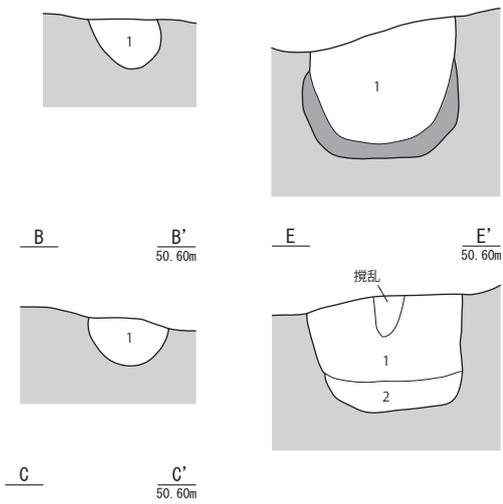
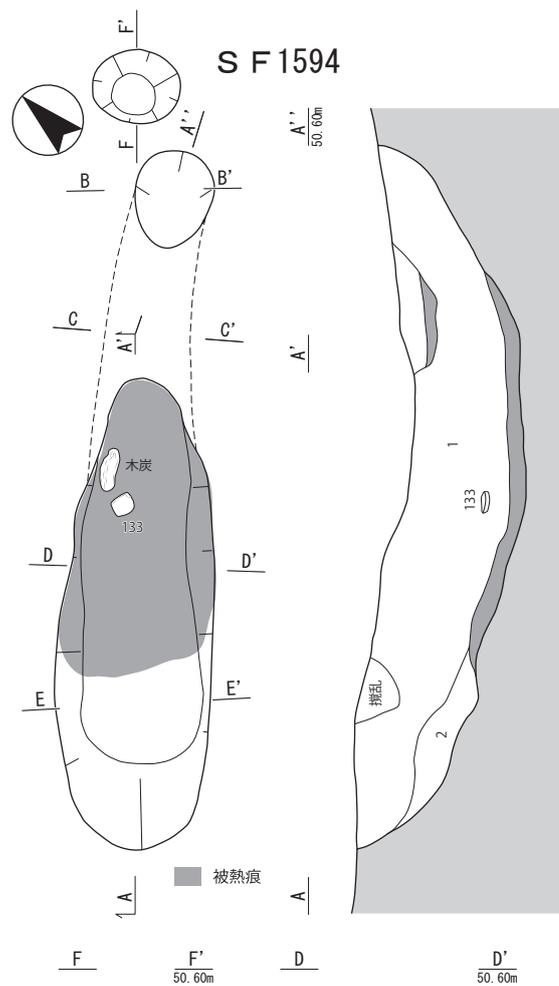
第 58 図 S F 1581 ・ 1582 ・ 1583 ・ 1586 ・ 1587 実測図 (1 : 20)



- 【SF1592】
- 1 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト (細砂少量含)
 - 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト (炭化物少量含)
 - 3 10YR2/1 黒色粘質シルト (炭化物多量含・焼土ブロック少量含)

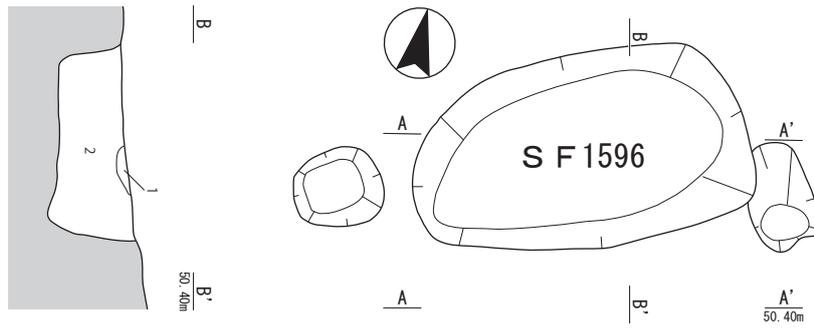


- 【SF1595】
- 1 10YR3/3 暗褐色土 (炭化物・φ 1mm焼土含)

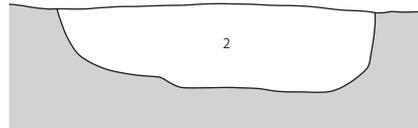


- 【SF1594】
- 1 7.5YR3/4 ~ 7.5YR4/3 暗褐色~褐色砂質シルト (炭化物・焼土多含)
 - 2 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト (粗砂多含)

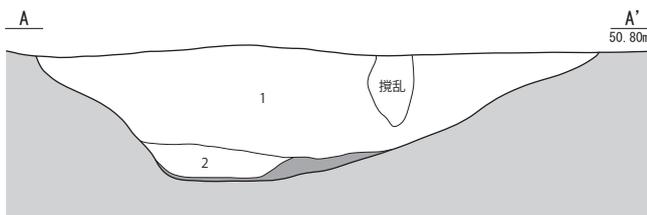
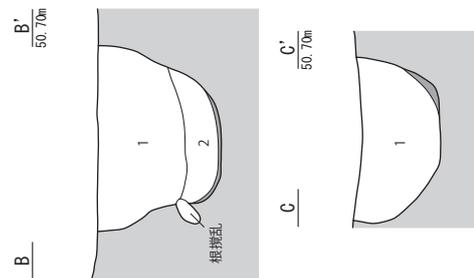
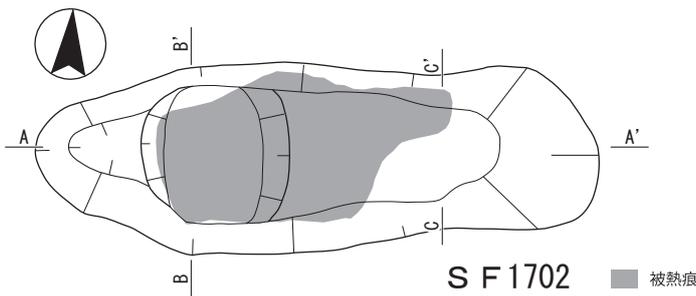
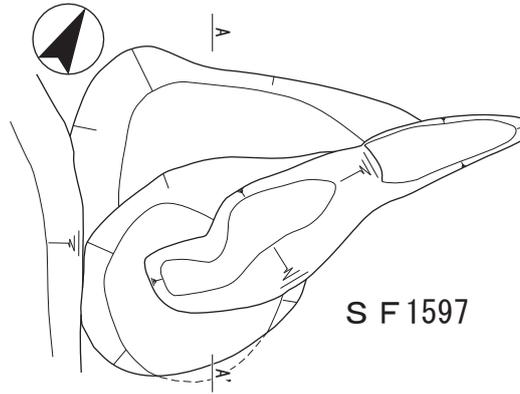
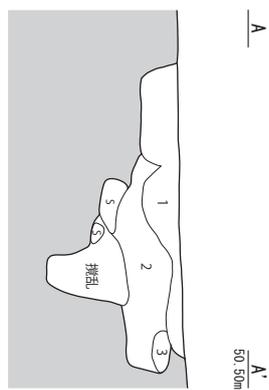
第 59 図 S F 1592・1594・1595 実測図 (1 : 20)



- 【SF1596】
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (φ 5mm 10YR2/1 黒色粘質シルト・黒ボクブロック 50%含)
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (炭化物少量含)



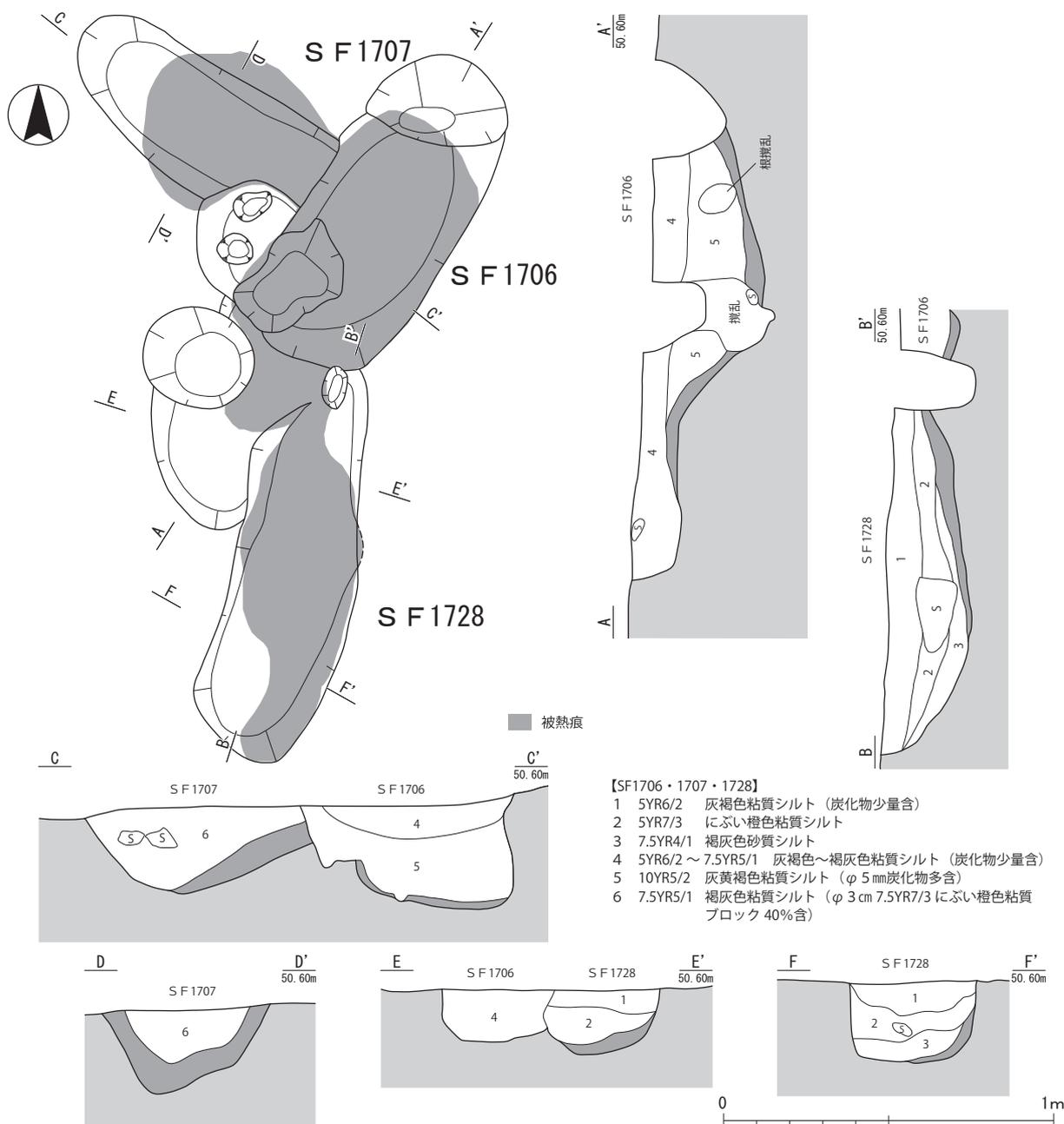
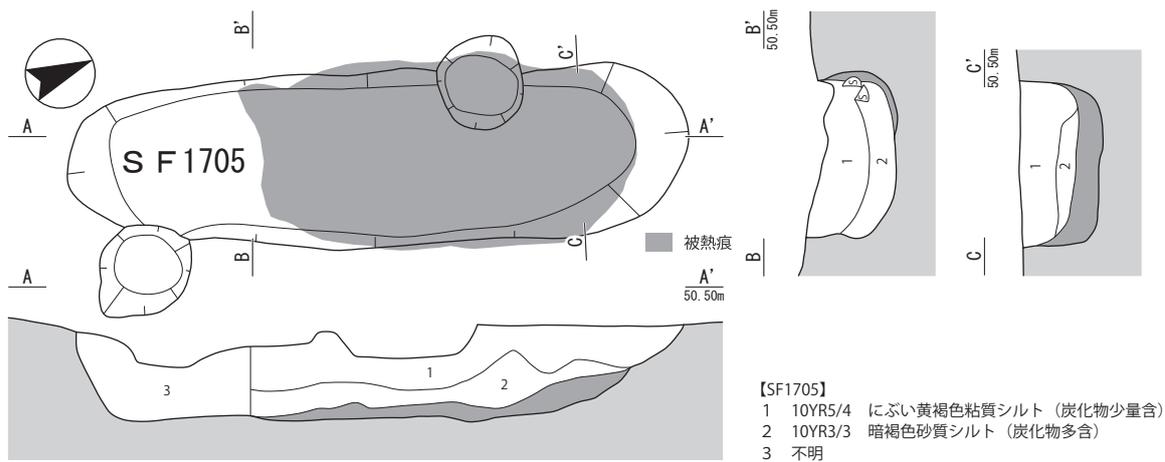
- 【SF1597】
- 1 2.5YR5/2 灰赤褐色粘質シルト (炭化物少量含)
 - 2 2.5YR4/1 赤灰色砂質シルト (炭化物多含)
 - 3 5YR6/2 灰褐色砂質シルト (φ 1mm長石粒 30%含)



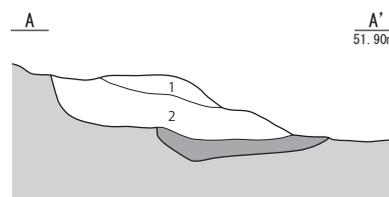
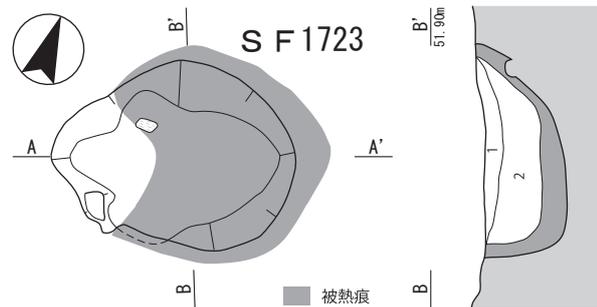
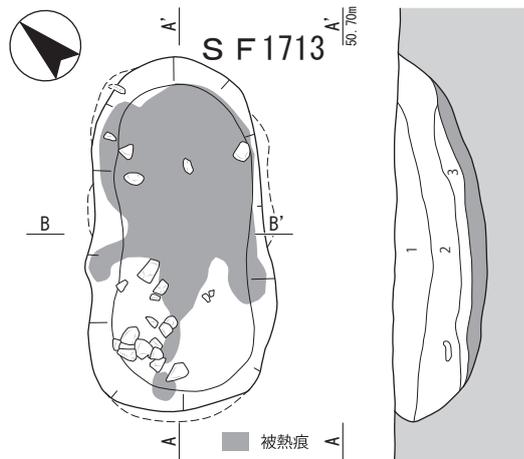
- 【SF1702】
- 1 7.5YR4/4 褐色粘質シルト (炭化物少量含)
 - 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭化物多含)



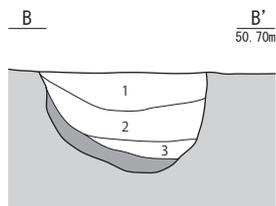
第 60 図 S F 1596 ・ 1597 ・ 1702 実測図 (1 : 20)



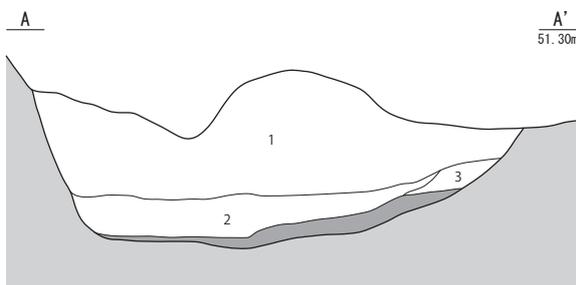
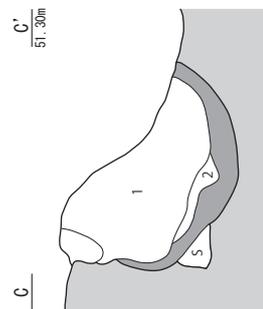
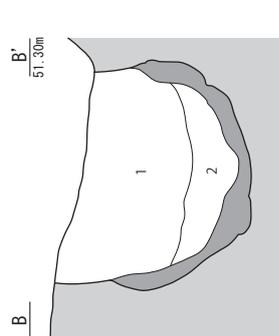
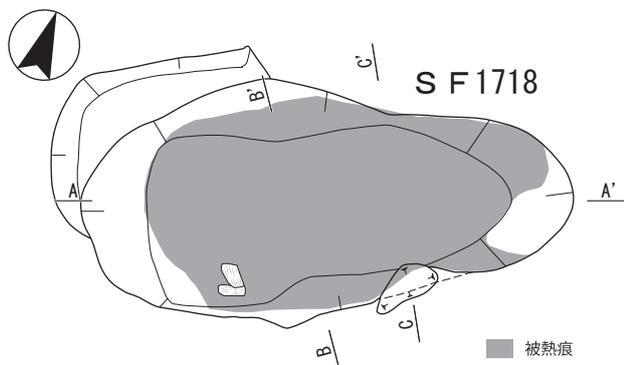
第 61 図 S F 1705 ・ 1706 ・ 1707 ・ 1728 実測図 (1 : 20)



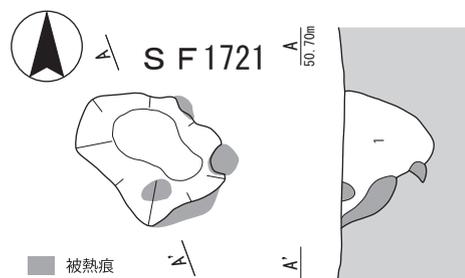
【SF1723】
 1 7.5YR4/3 褐色粘質シルト
 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト
 (φ 5cmベースブロック・炭化物少量含)



【SF1713】
 1 7.5YR4/3 褐色シルト (極小砂 3%・炭化物含)
 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト (極小砂 2%・炭化物含)
 3 7.5YR3/4 暗褐色シルト

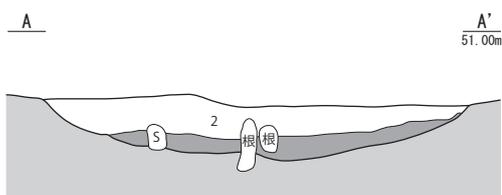
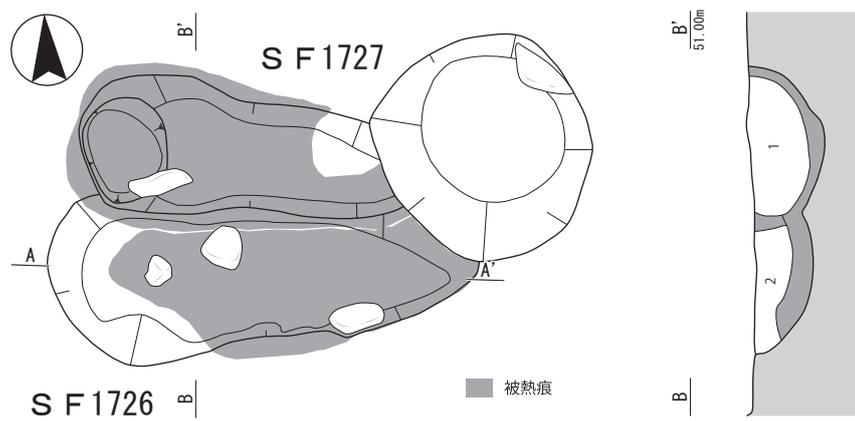
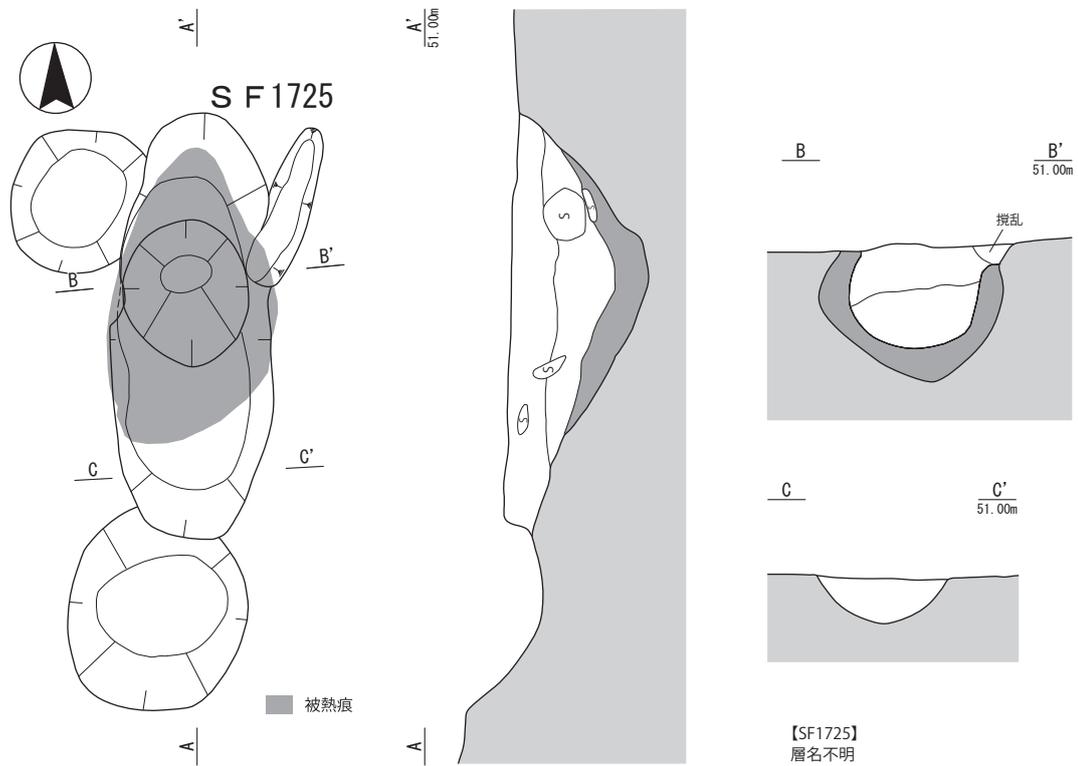


【SF1718】
 1 10YR4/4 褐色粘質シルト (炭化物少量含)
 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭化物多含)
 3 5YR3/4 暗赤褐色粘質シルト (粗砂少量含)



【SF1721】
 1 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト (φ 5cm焼土ブロック・5YR5/6 明赤褐色粘質シルト 15%含)

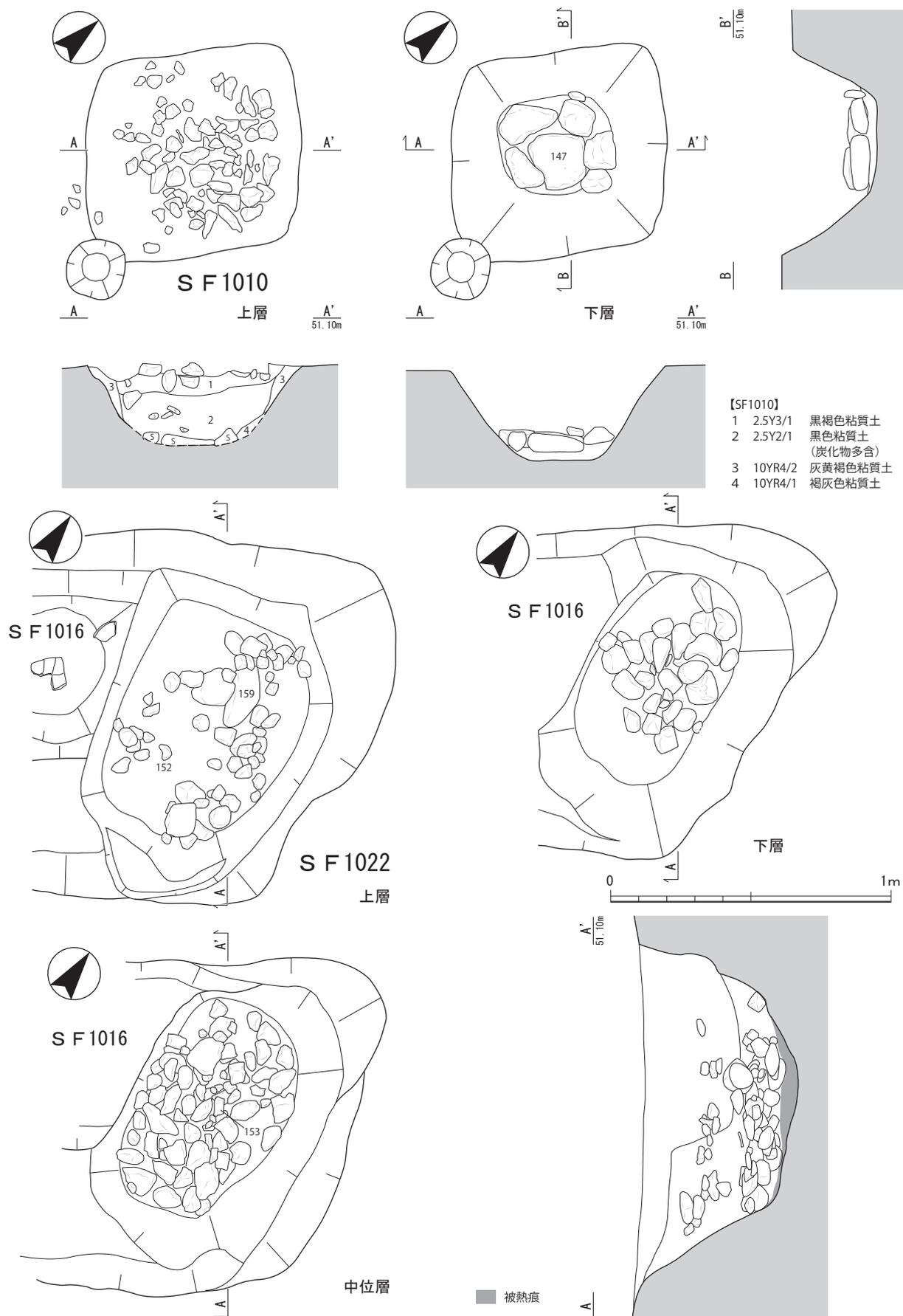
第 62 図 S F 1713・1718・1721・1723 実測図 (1 : 20)



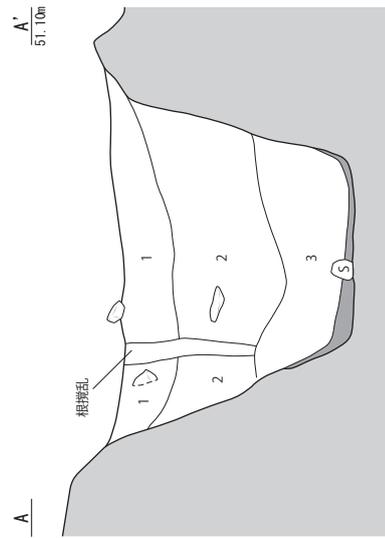
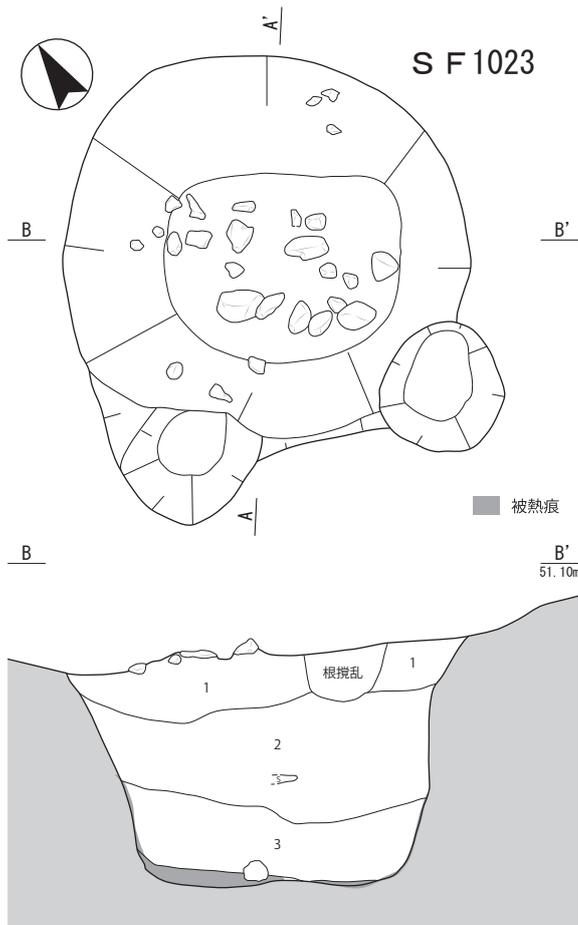
- 【SF1726・1727】
- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色粘質シルト（炭化物・焼土少量含）
 - 2 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト（φ 5mm焼土ブロック7%含）



第 63 図 S F 1725・1726・1727 実測図（1：20）

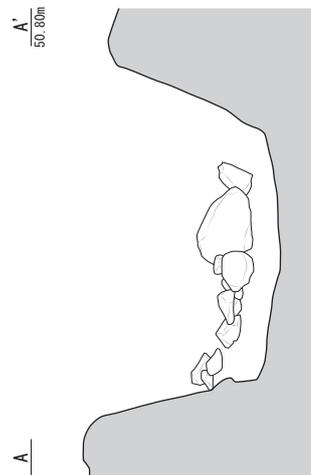
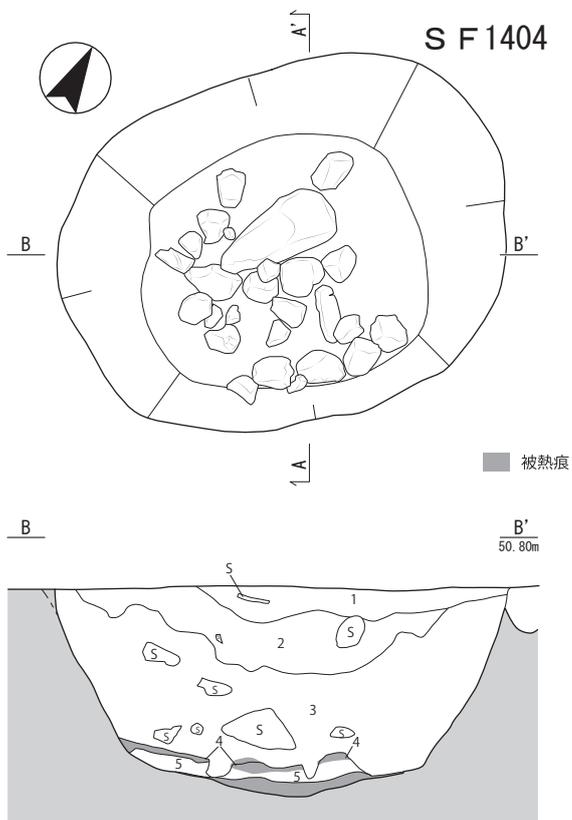


第 64 図 S F 1010・1022 実測図 (1 : 20)



【SF1023】

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 2 10YR3/3 暗褐色土 (10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土含)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土

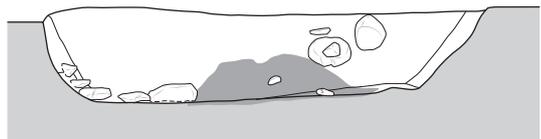
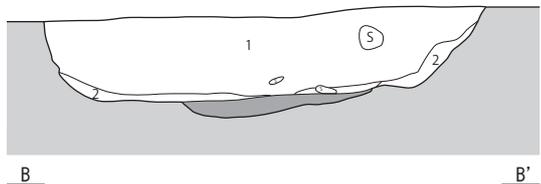
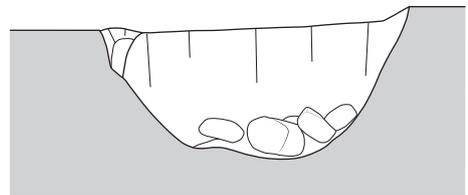
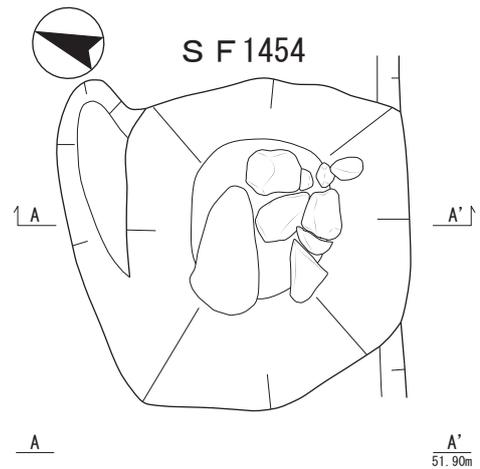
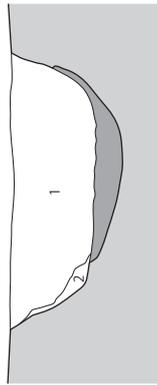
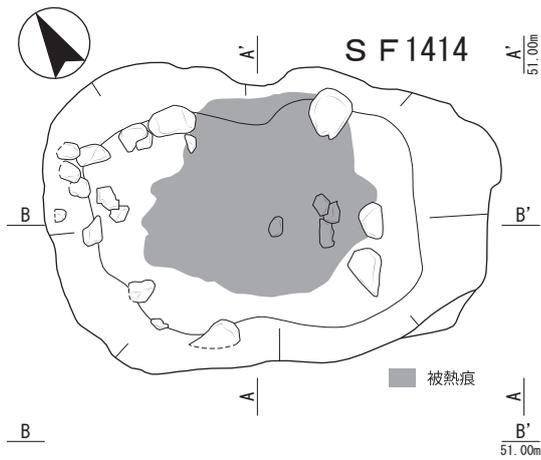


【SF1404】

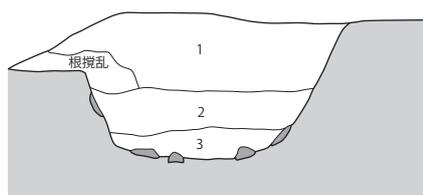
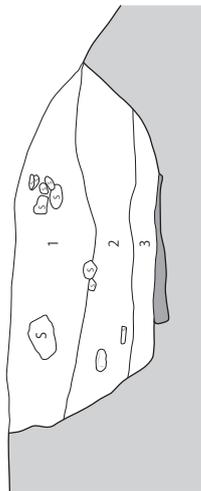
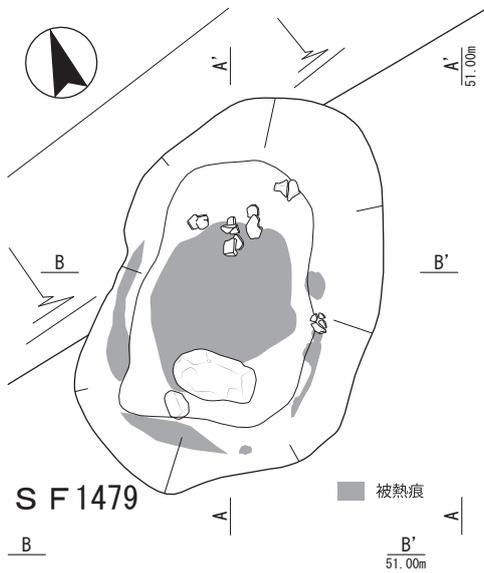
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～中粒粘砂土 (φ 1mm炭化物を極微量含)
- 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～細粒粘砂土 (φ 1mm炭化物極微量含)
- 3 7.5YR4/3 褐色シルト～中粒粘砂土 (φ ~ 1cm炭化物極微量含・10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状多含)
- 4 5YR5/6 明赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 3~5cm炭化物少量含)
- 5 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1~2cm炭化物少量含)



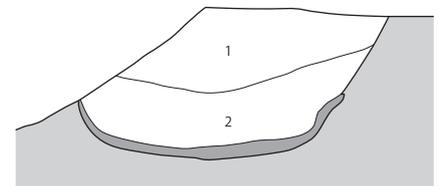
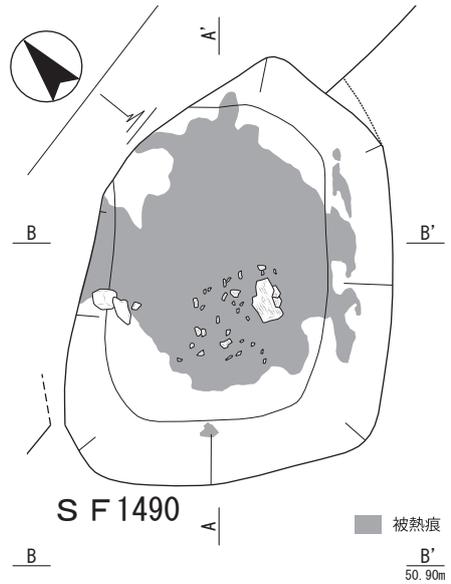
第 65 図 S F 1023・1404 実測図 (1 : 20)



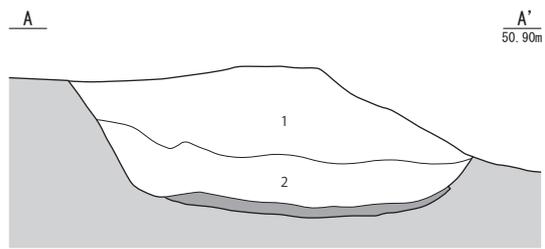
【SF1414】
 1 5YR3/3 暗赤褐色シルト～中粒粘砂土 (φ～5mm炭化物微量含)
 2 5YR3/4 暗赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック 50% 含・1mm炭化物微量含) (ベース)



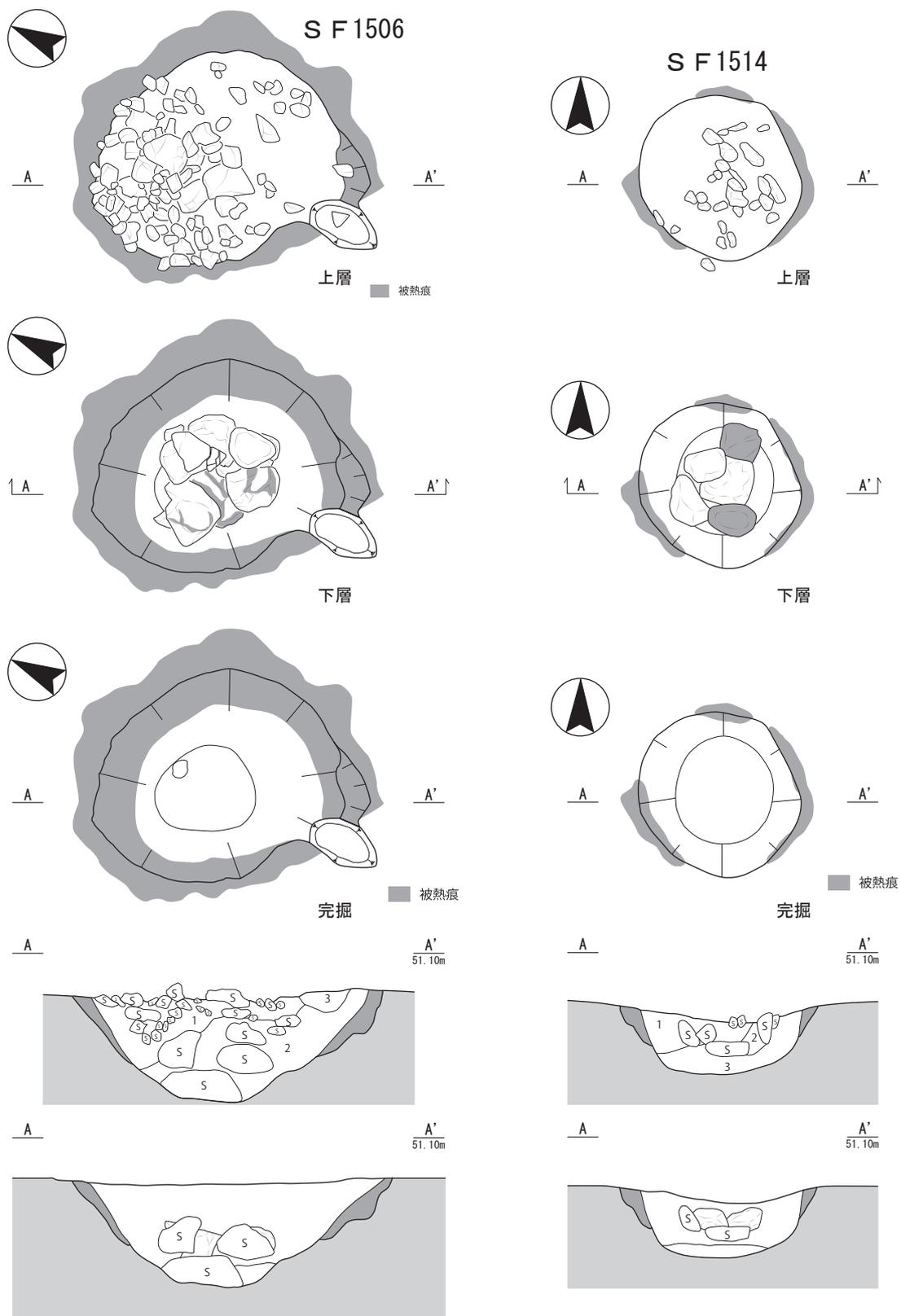
【SF1479】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～12cm礫含)
 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～2cm礫含)
 3 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (炭化物少量含)



【SF1490】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 2 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状 10% 含・5YR4/8 赤褐色焼土ブロック極微量含・炭化物多含)



第 66 図 S F 1414・1454・1479・1490 実測図 (1 : 20)



【SF1506】

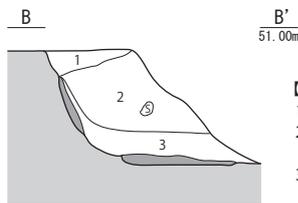
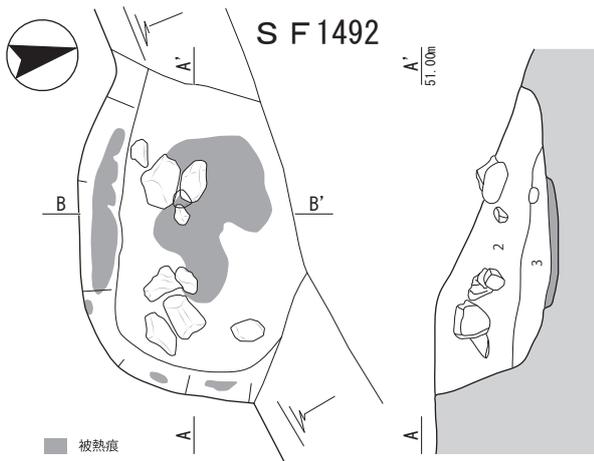
- 1 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト (炭化物含)
- 2 10YR2/2 黒褐色細粒上シルト (炭化物含)
- 3 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト (黄褐色ブロック含)

【SF1514】

- 1 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト (炭化物含)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト (小粒状)
- 3 10YR3/4 暗褐色粘質シルト (小粒状・炭化物含)

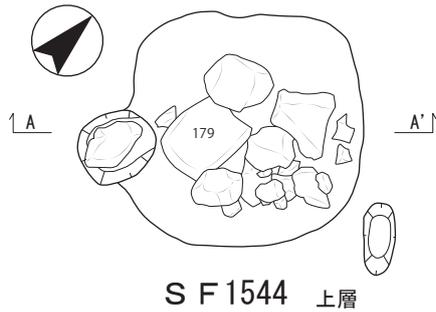


第 67 図 S F 1506・1514 実測図 (1 : 20)

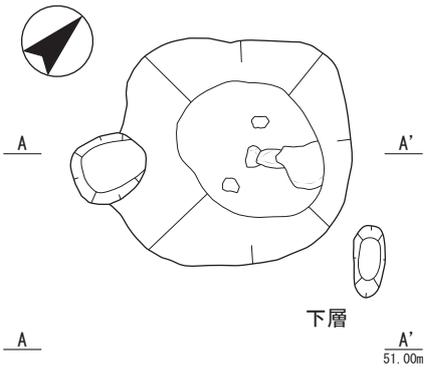


【SF1492】

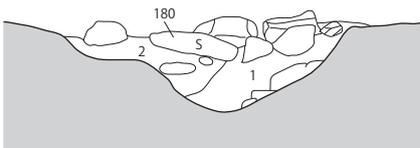
- 1 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～12cm礫含)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ2～5mm炭化物微量含)



S F 1544 上層

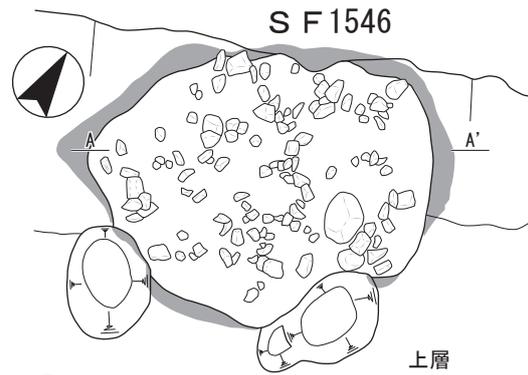


下層

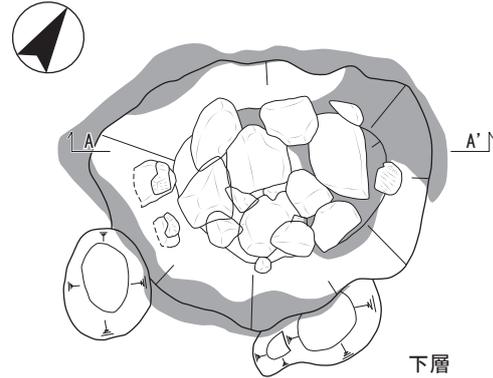


【SF1544】

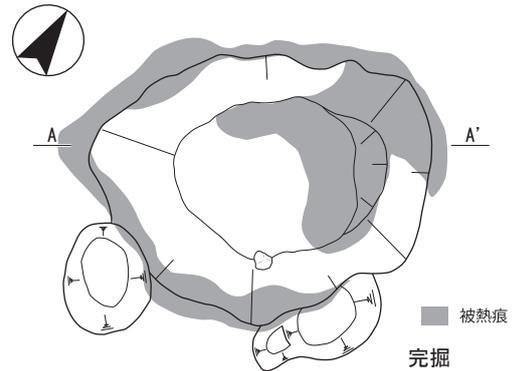
- 1 7.5YR3/1～10YR3/3 黒褐～暗褐色細粒シルト (炭化物含)
- 2 7.5YR1.7/1～10YR2/2 黒～黒褐色粘質シルト (炭化物含)



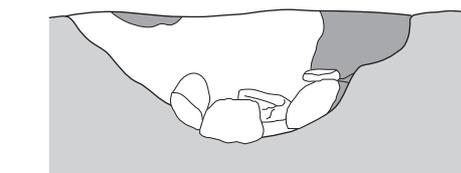
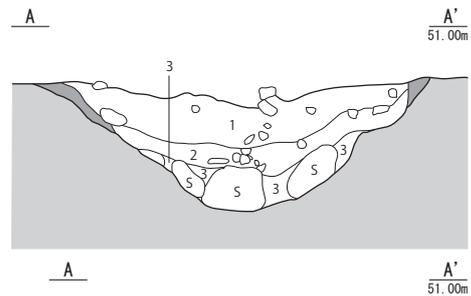
上層



下層



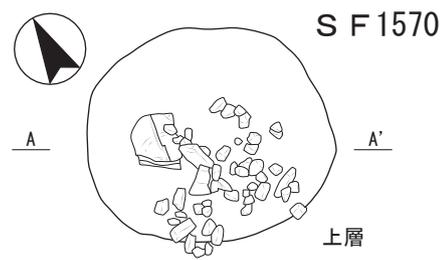
完掘



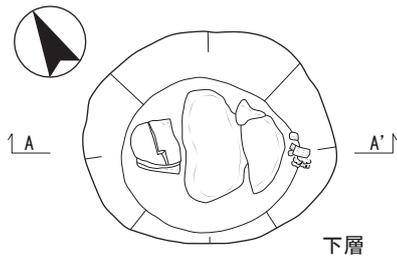
【SF1546】

- 1 5YR2/3 極暗赤褐色シルト (極小粒砂7%～10%・7.5YR3/1 黒褐シルト極小粒砂2%・炭化物を含・φ1～3cm小石含)
- 2 7.5YR2/2 黒褐色シルト (明褐色小粒砂1%・φ10～20mm 小石・炭化物多含)
- 3 7.5YR2/1 黒色粘質シルト (炭化物多含)

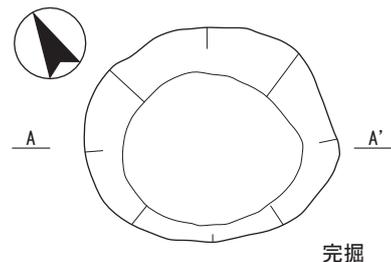
第 68 図 S F 1492・1544・1546 実測図 (1 : 20)



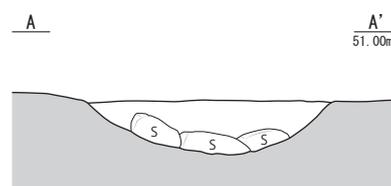
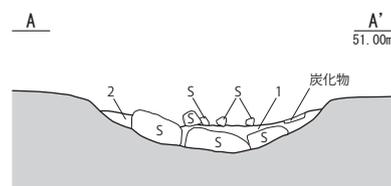
S F 1570



下層



完掘

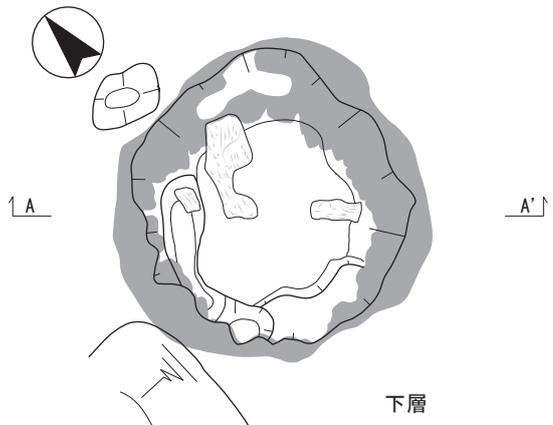


- 【SF1570】
 1 7.5YR2/1 黒色粘質シルト (黄褐色小粒砂 5%・炭化物含)
 2 7.5YR4/4 褐色粘質シルト (小粒砂 1%・炭化物含)

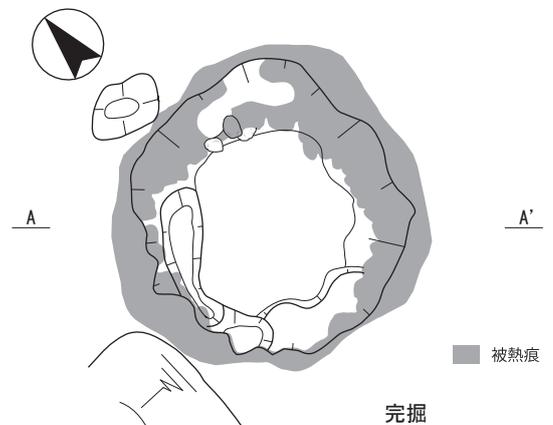
- 【SF1584】
 1 10YR1.7/1 黒色細砂含シルト
 2 2.5Y2/1 黒色細砂含シルト (黄褐色極小粒砂 3%~10%・炭化物含)
 3 10YR2/1 黒色細砂含シルト (黄褐色ブロック・炭化物含)



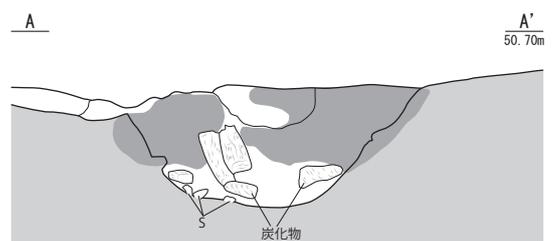
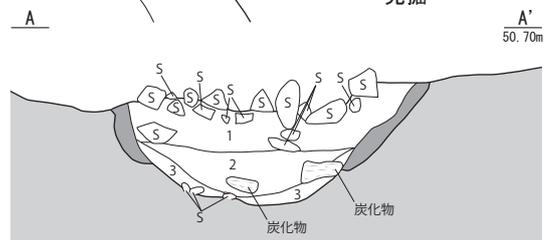
S F 1584



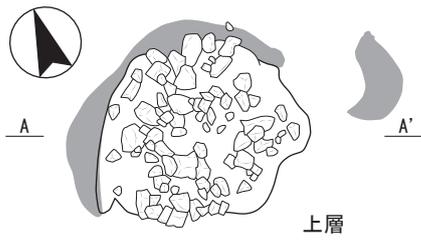
下層



完掘

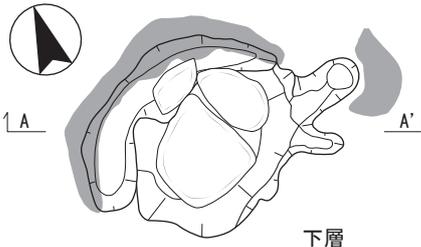
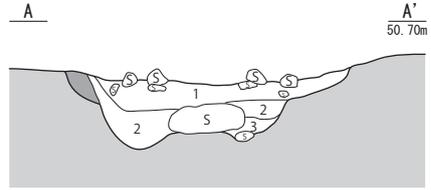


第 69 図 S F 1570・1584 実測図 (1 : 20)

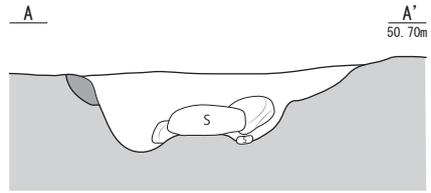


S F 1585

上層

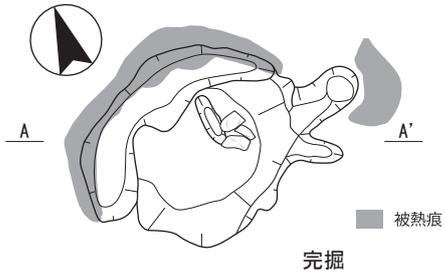


下層

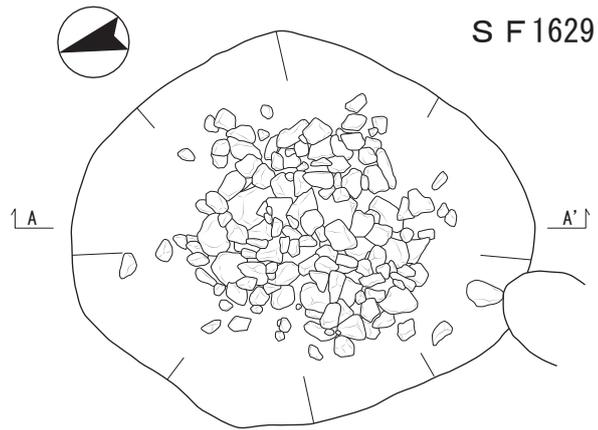


【SF1585】

- 1 2.5Y2/1 黒色粘質シルト (φ10~40mm礫・炭化物含)
- 2 10YR2/2 黒褐色細砂含シルト (黄褐色ブロック・小粒砂5%・炭化物含)
- 3 5YR4/3 にぶい赤褐色粘質シルト (褐色小粒砂2%)



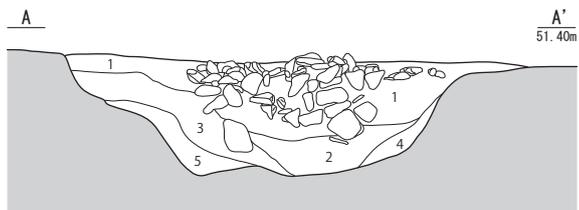
完掘



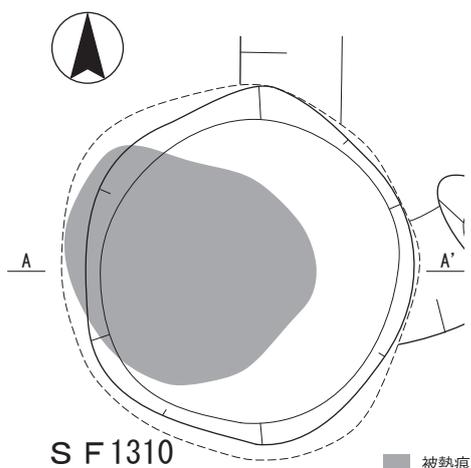
S F 1629

【SF1629】

- 1 10YR5/1 褐灰色シルト (炭化物5%含)
- 2 10YR2/1 黒色土 (炭化物多含)
- 3 10YR2/4 灰黄褐色砂質土 (炭化物5%含)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (炭化物3%含)

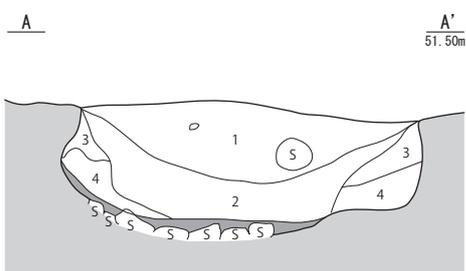


第70図 S F 1585・1629 実測図 (1:20)



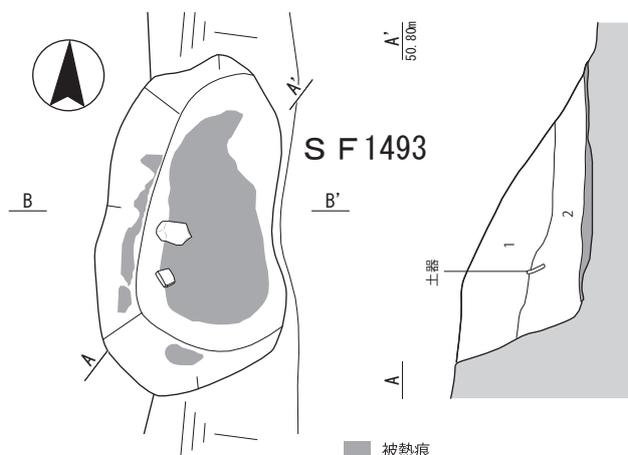
S F 1310

被熱痕



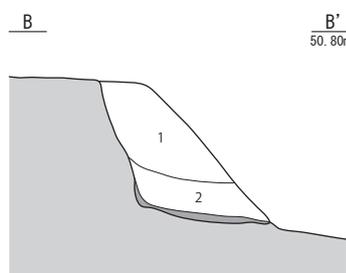
【SF1310】

- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～中粒粘砂土（φ0.5～1cm礫少量・φ5～8cm礫少量・炭化物少量含）
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～中粒粘砂土（φ0.5～1cm礫少量含）
- 3 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒粘砂土（φ0.5～1cm礫少量含）
- 4 7.5YR4/3 褐色シルト～中粒粘砂土（φ1～2cm礫少量含）



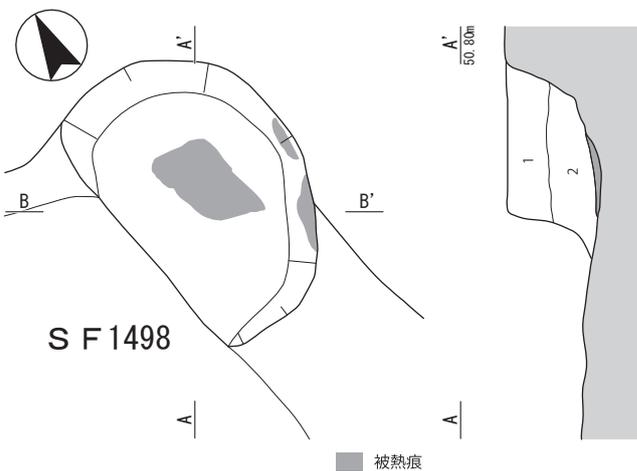
S F 1493

被熱痕



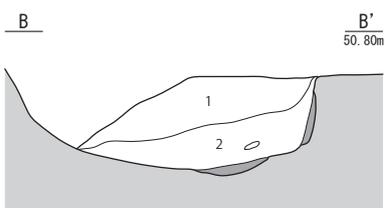
【SF1493】

- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ～1cm炭化物を微量含）



S F 1498

被熱痕

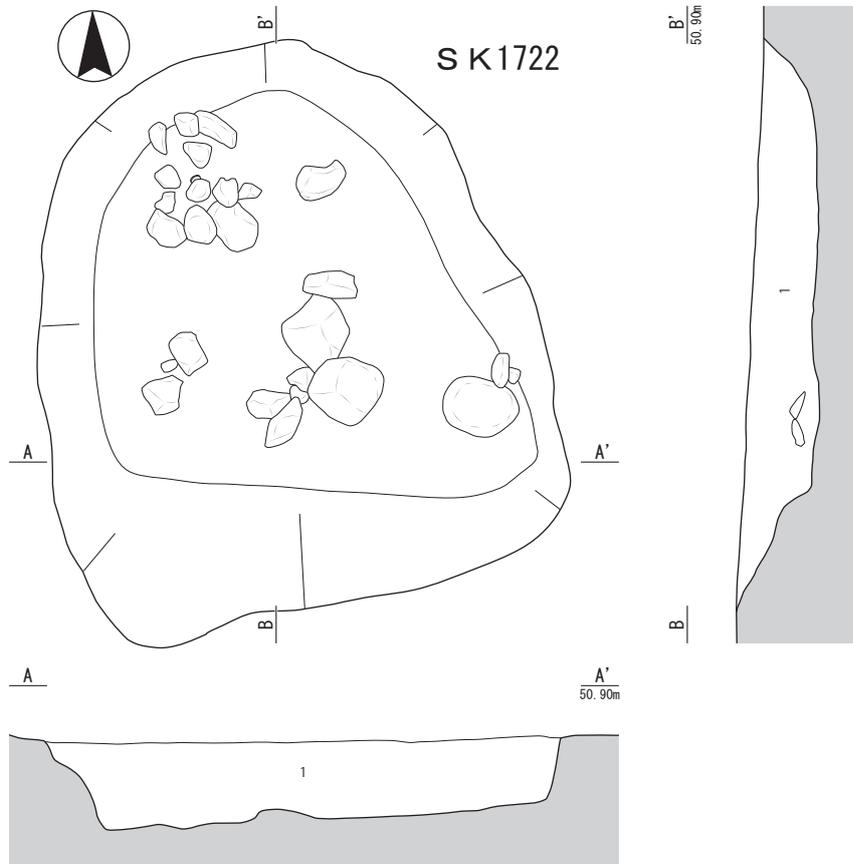


【SF1498】

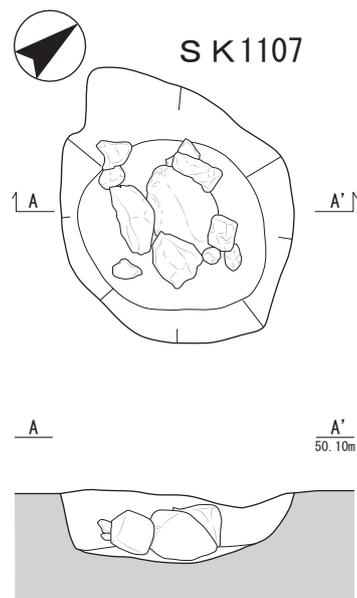
- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（10YR4/4褐色ブロック斑状少量含）
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂（φ1cm炭化物微量含）



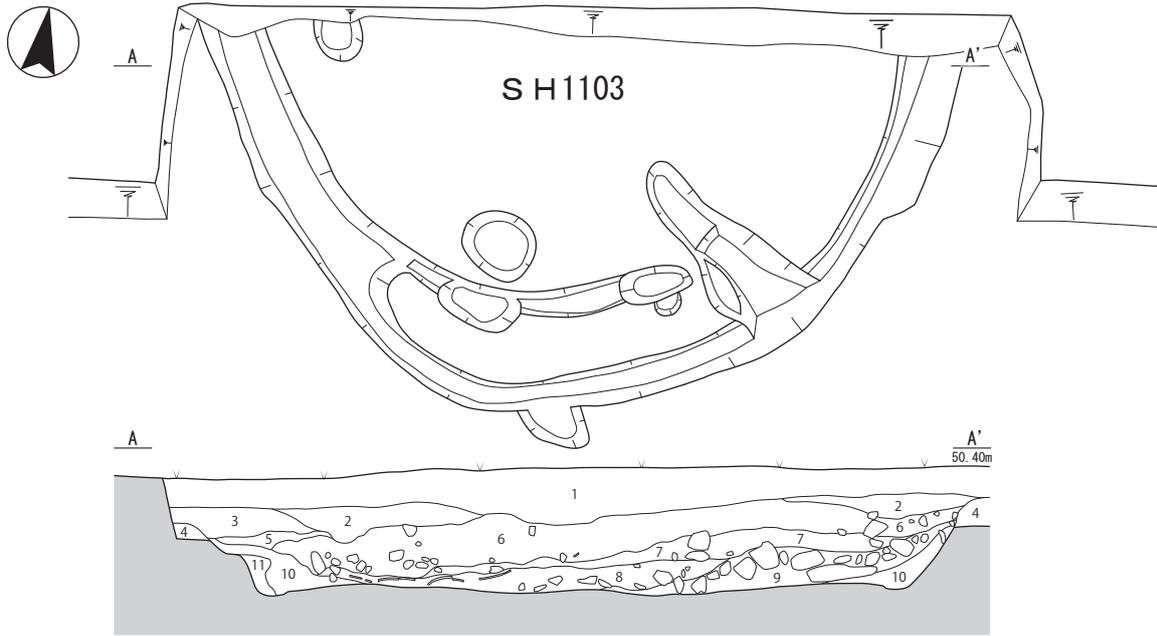
第 71 図 S F 1310・1493・1498 実測図（1：20）



【SK1722】
 1 7.5YR4/3 褐色粘質シルト (φ 3cm拳大礫7%含・炭化物少量含)



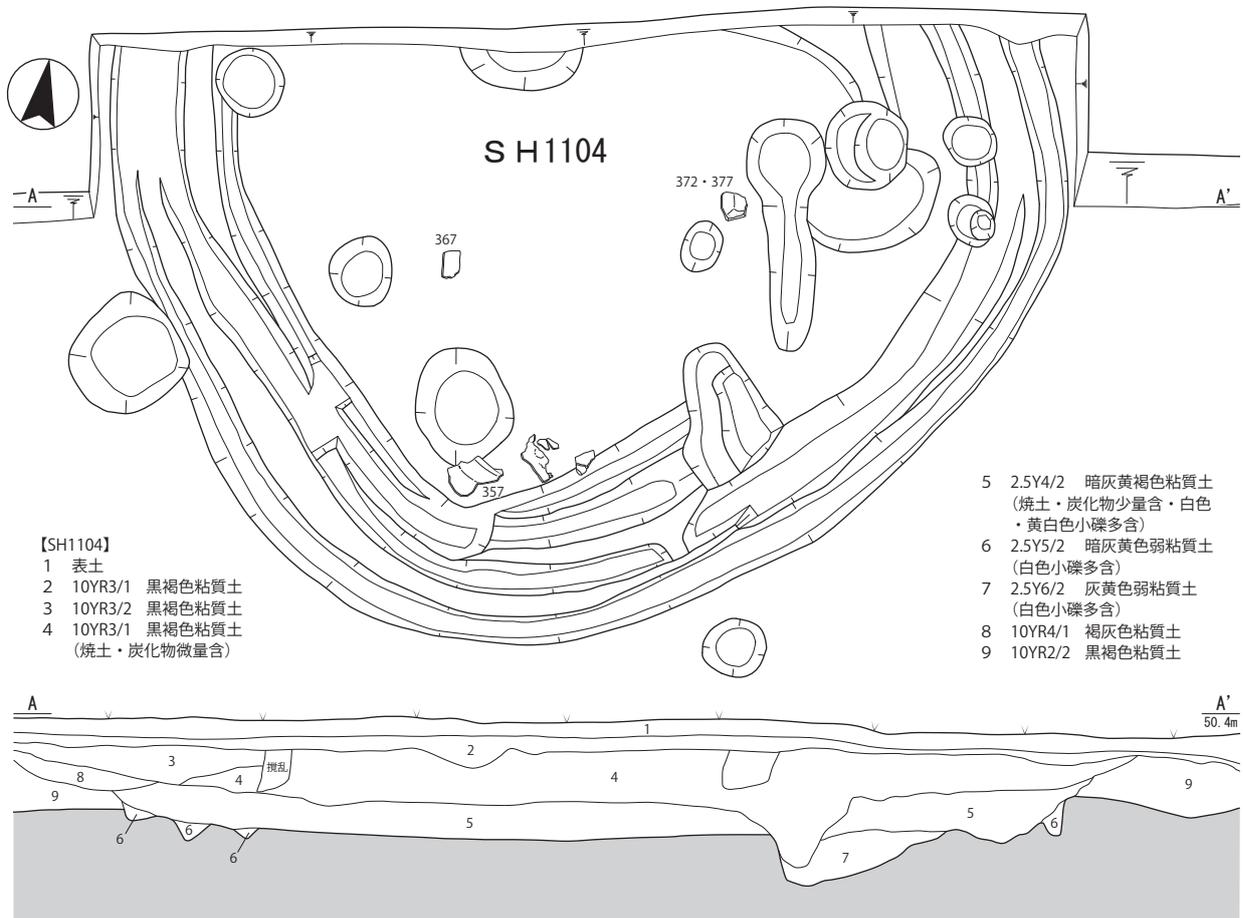
第 72 図 SK 1107・1722 実測図 (1 : 20)



【SH1103】

- 1 表土
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (礫多量含)
- 3 10YR5/3 黒褐色粘質土 (焼土粒・炭化物微量含)
- 4 10YR5/6 黄褐色粘質土 (10YR7/3 にぶい黄褐色粘質土含・白色大小礫含)
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (黄色粒少量含)
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物少量含・中小礫若干含)

- 7 10YR3/2 黒褐色粘質土 (焼土炭化物多含・中小礫若干含)
- 8 10YR2/3 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物若干含・拳大礫少量含)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐色弱粘質土含・拳大礫多含)
- 10 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含・黄色粒少量含)
- 11 7.5YR4/2 灰黄褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含・黄色粒少量含)



【SH1104】

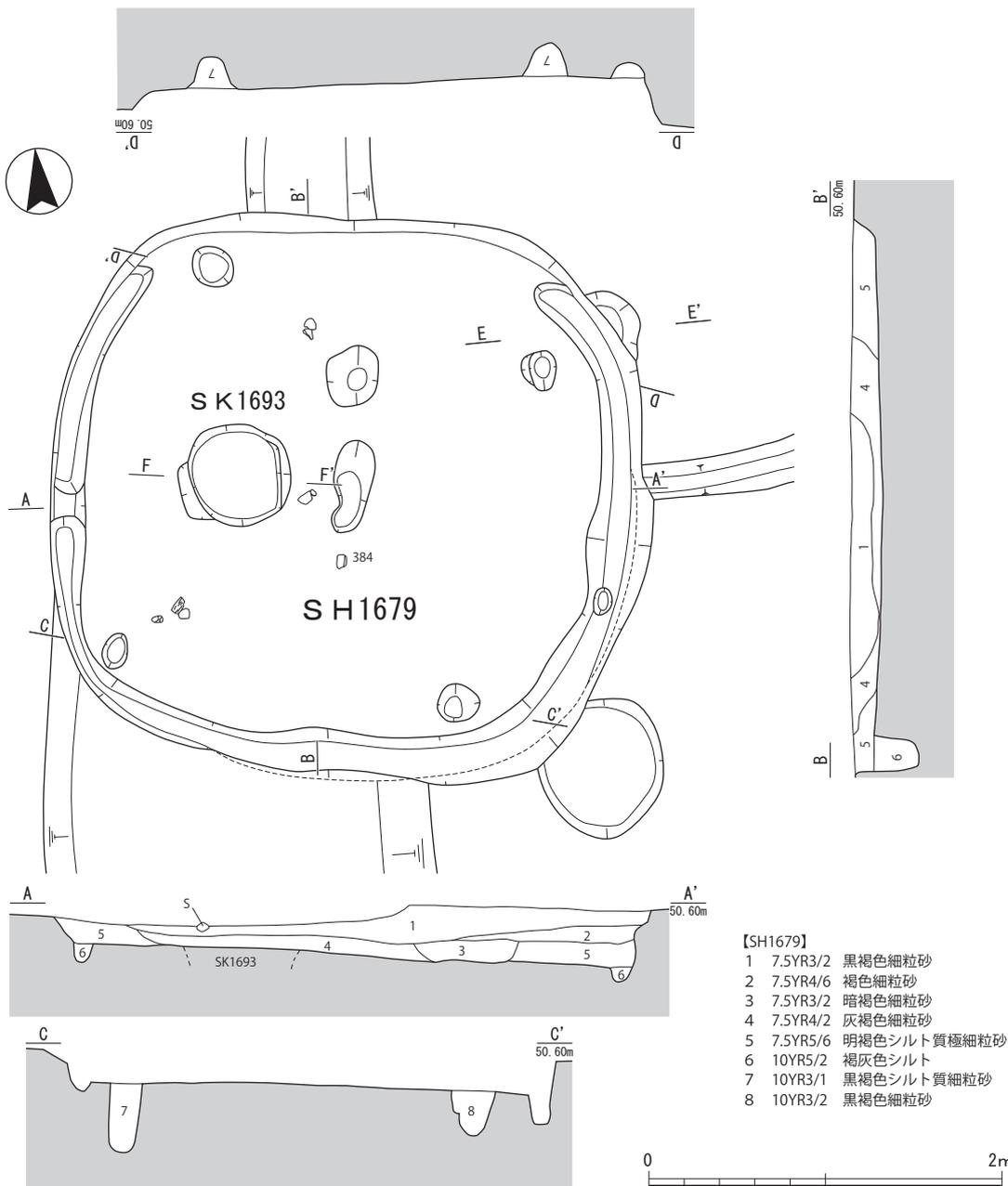
- 1 表土
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含)

- 5 2.5Y4/2 暗灰黄褐色粘質土 (焼土・炭化物少量含・白色・黄白色小礫多含)
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色弱粘質土 (白色小礫多含)
- 7 2.5Y6/2 灰黄色弱粘質土 (白色小礫多含)
- 8 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質土

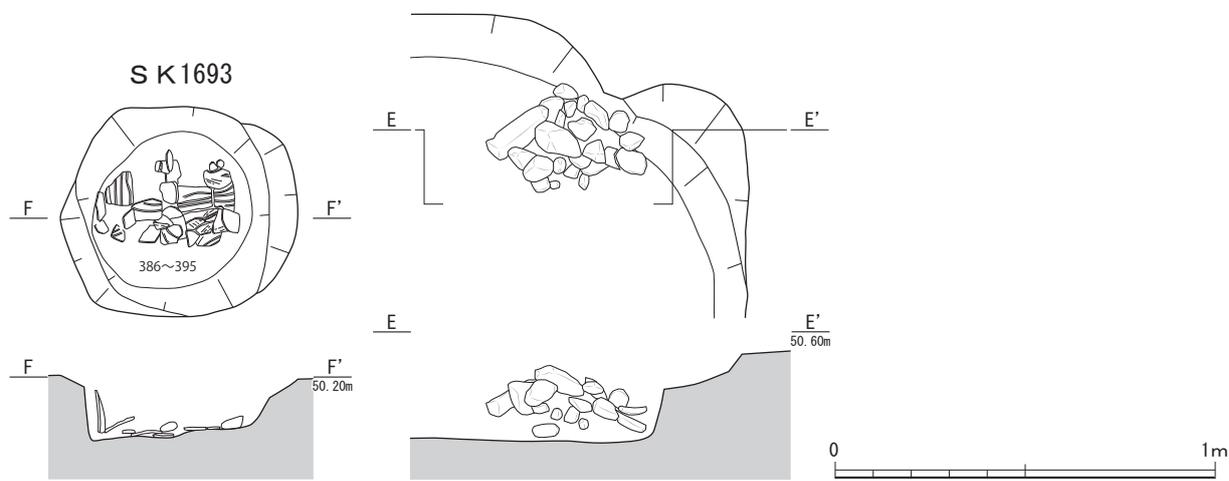
第 73 図 SH 1103・1104 実測図 (1 : 40)



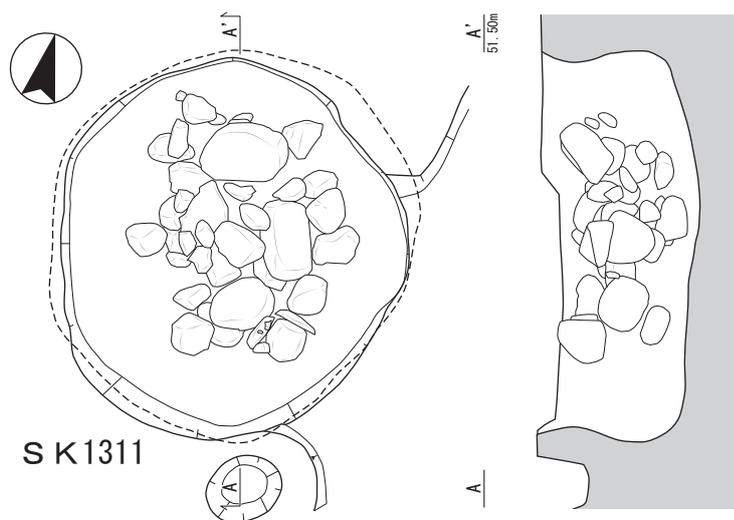
第 74 図 SH 1103 実測図 (1 : 20)



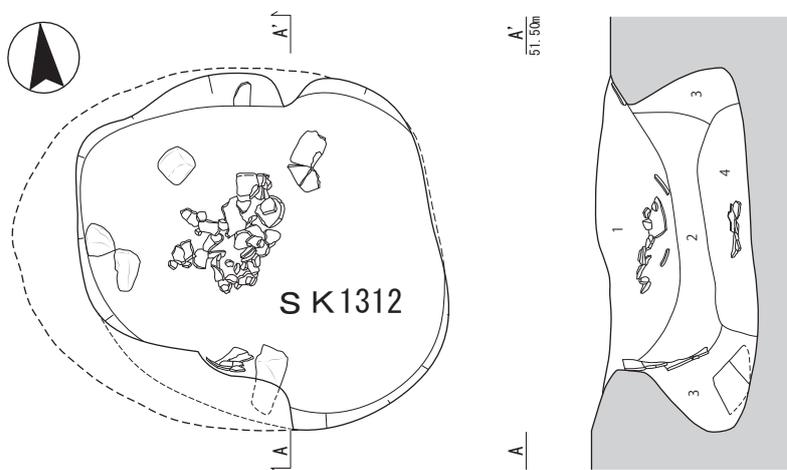
- 【SH1679】
- 1 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂
 - 2 7.5YR4/6 褐色細粒砂
 - 3 7.5YR3/2 暗褐色細粒砂
 - 4 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂
 - 5 7.5YR5/6 明褐色シルト質極細粒砂
 - 6 10YR5/2 褐灰色シルト
 - 7 10YR3/1 黒褐色シルト質細粒砂
 - 8 10YR3/2 黒褐色細粒砂



第 75 図 SH 1679 実測図・SK 1693 遺物出土状況図 (1 : 20・1 : 40)



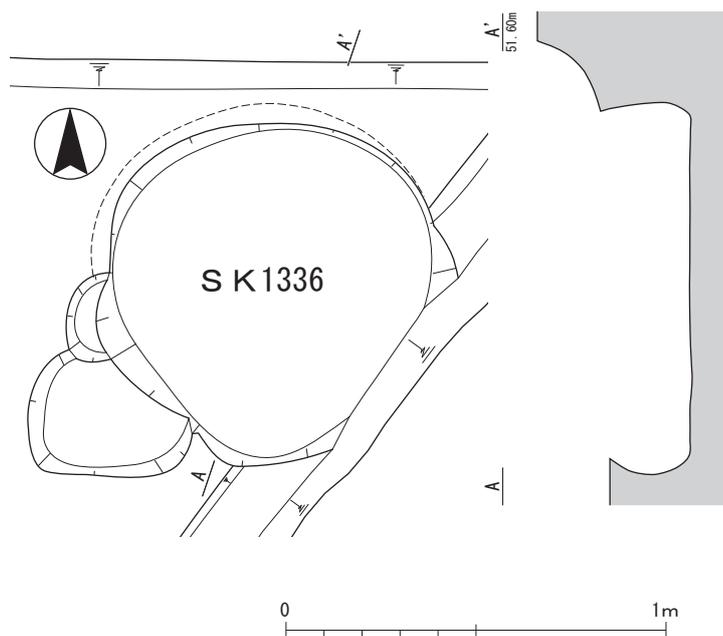
S K1311



S K1312

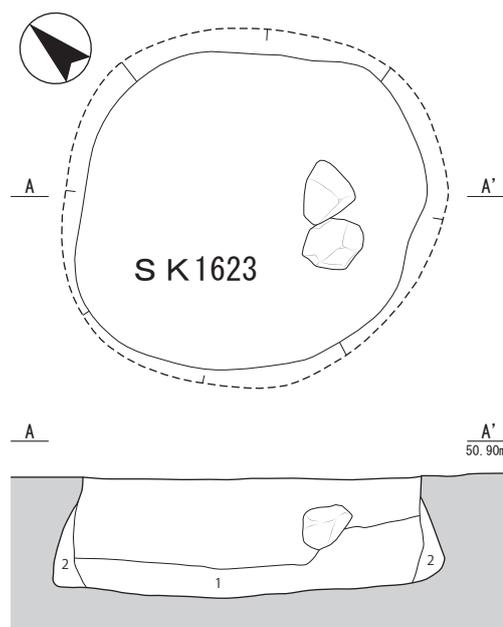
【SK1312】

- 1 7.5YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト含極細砂 (5cm大土器片多・細礫・炭化物少量含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (細礫・明褐色シルト小ブロック少量含)
- 3 7.5YR4/4 褐色極細砂多く含シルト (明褐色シルトブロック・暗褐色極細砂ブロック多含)
- 4 7.5YR3/2 ~ 3 黒褐色シルト含極細砂 (明褐色シルト小ブロック・1cm大細礫少量)



S K1336

0 1m

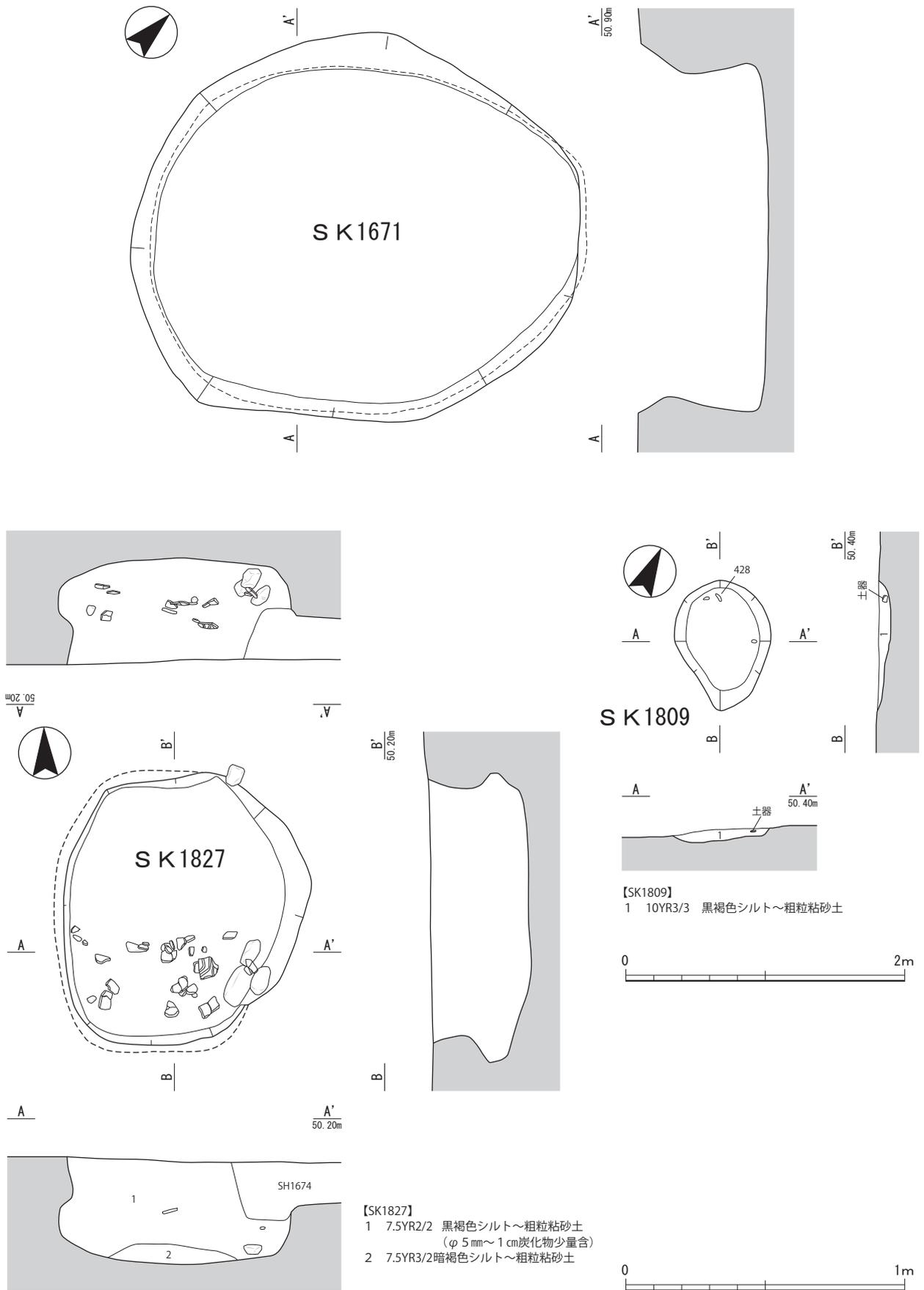


S K1623

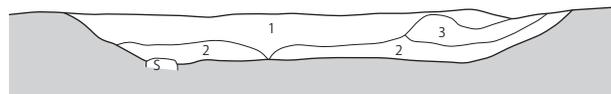
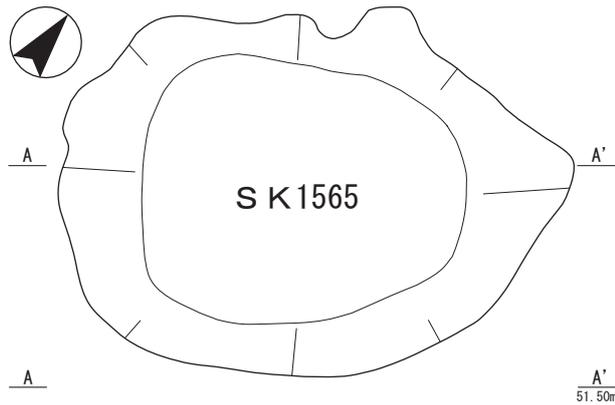
【SK1623】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭・土器含)
- 2 10YR4/4 褐色シルト (ベースブロック5%含)

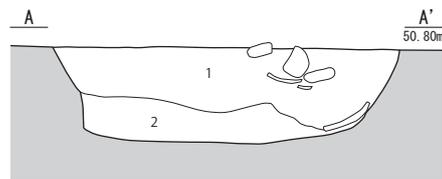
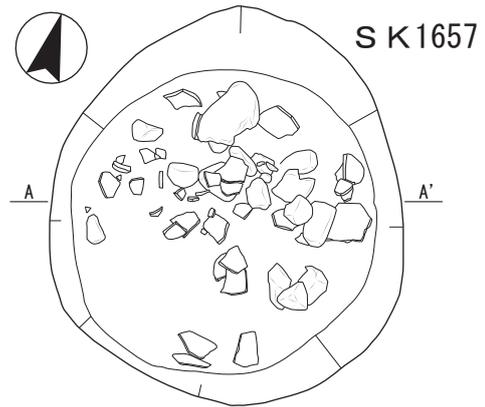
第76図 SK1311・1312・1336・1623実測図 (1:20)



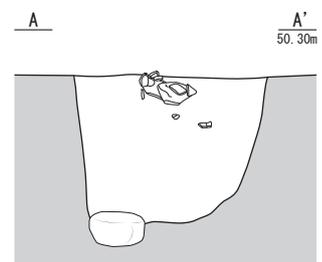
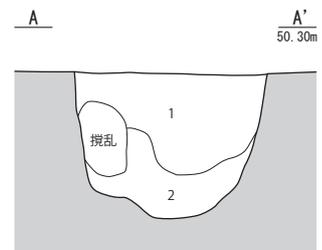
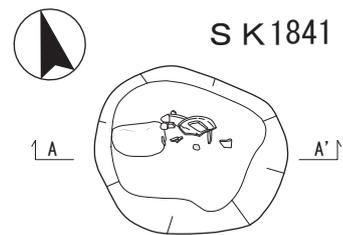
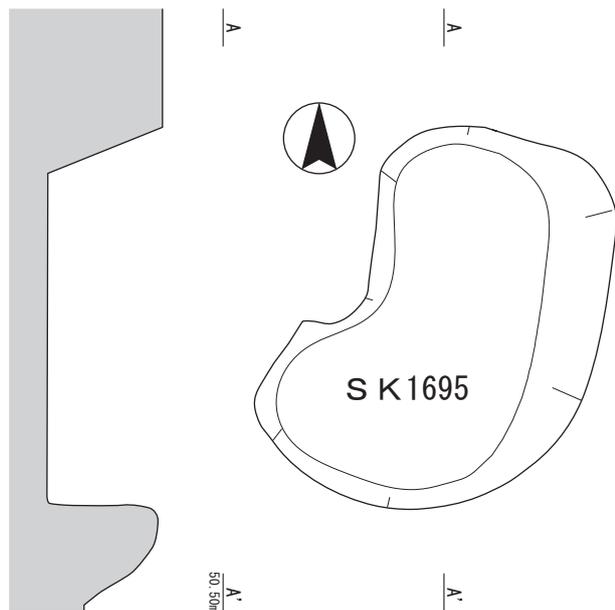
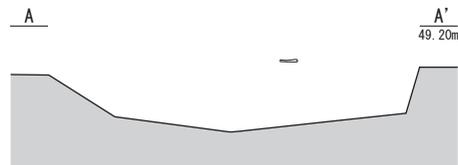
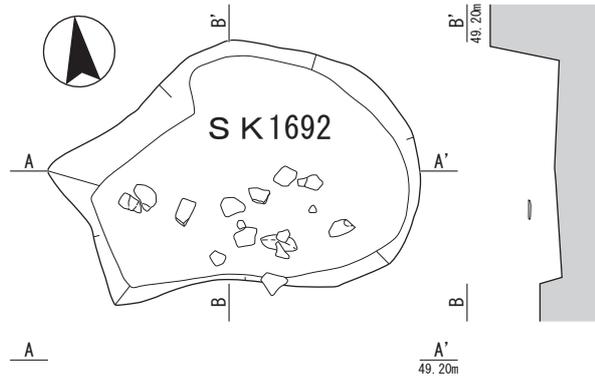
第 77 図 S K 1671・1809・1827 実測図 (1 : 20・1 : 40)



- 【SK1565】
- 1 7.5YR1.7/1 黒色粘質シルト (小粒砂7%・10cm小石1%含)
 - 2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト (黄褐色ブロック~小粒砂3%)
 - 3 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト (小粒砂5%)



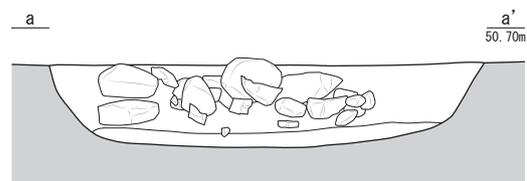
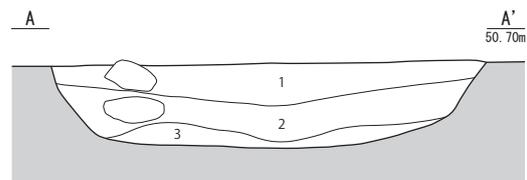
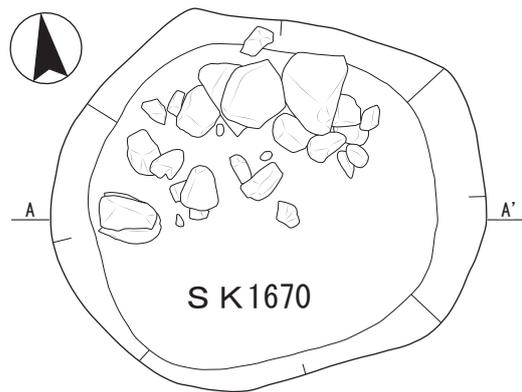
- 【SK1657】
- 1 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂含シルト (炭3%含)
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ベースブロック7%・炭2%含)



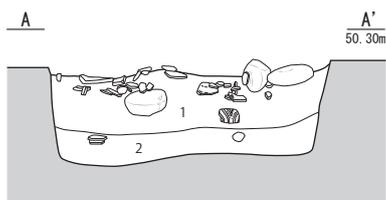
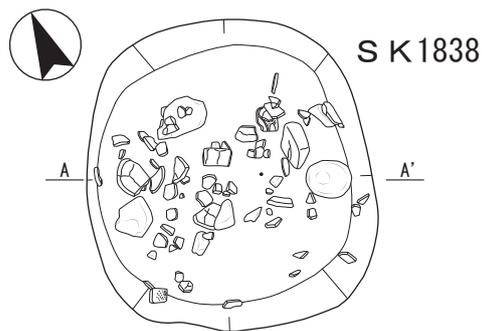
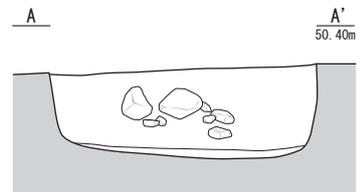
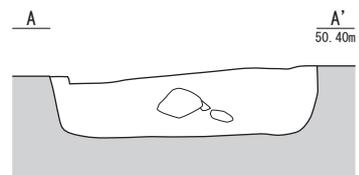
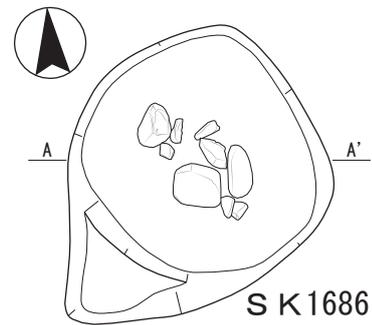
- 【SK1841】
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト~粗粒粘砂土 (φ0.1~3cm礫少量含)
 - 2 7.5YR4/3 褐色シルト~粗粒粘砂土



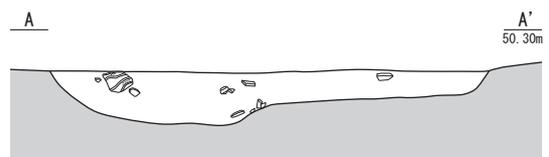
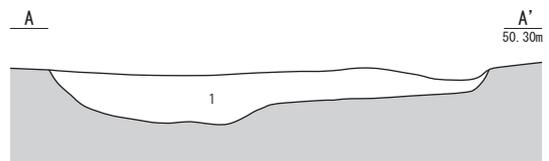
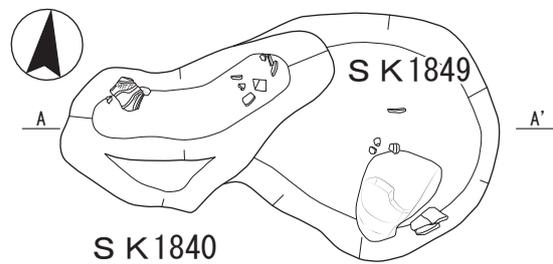
第 78 図 S K 1565 ・ 1657 ・ 1692 ・ 1695 ・ 1841 実測図 (1 : 20)



- 【SK1670】
 1 5YR4/2 灰褐色土（焼土7%・炭3%含・土器少量含）
 2 7.5YR4/1 褐灰色土（炭3%含）
 3 10YR4/4 褐色シルト質土（炭少量・ベースブロック50%含）



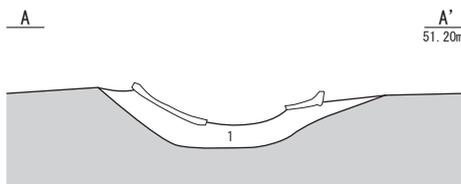
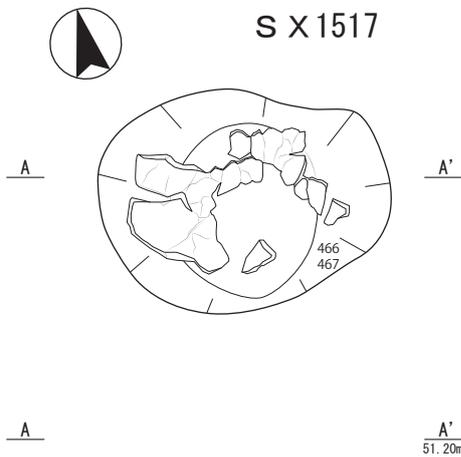
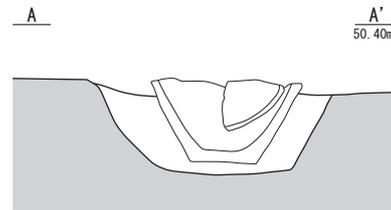
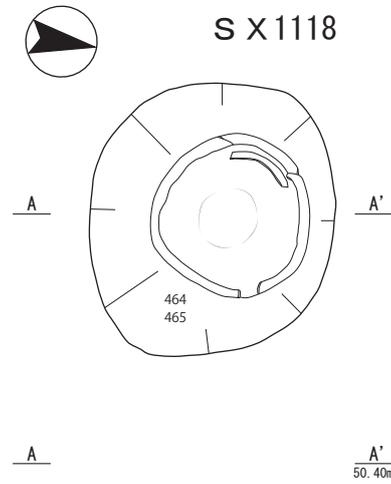
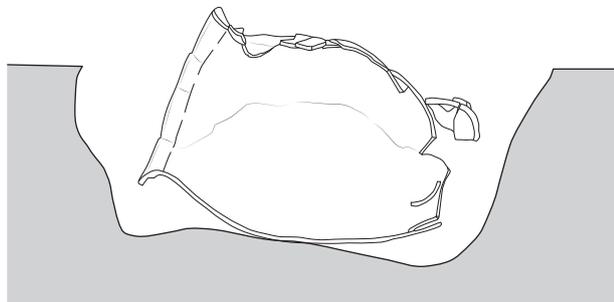
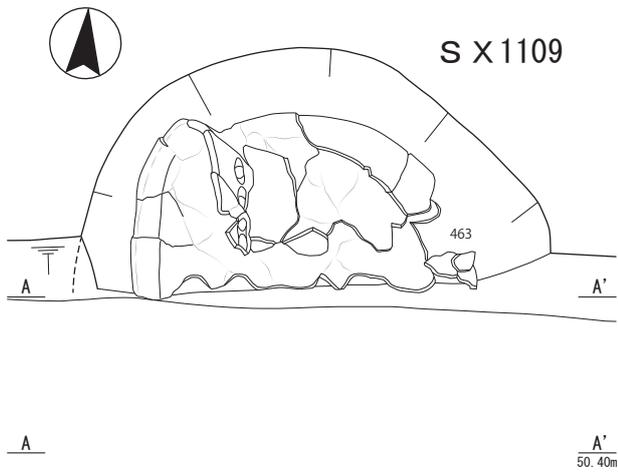
- 【SK1838】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ0.2～1cm炭化物微量含）
 2 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（7.5YR4/6褐色ブロック微量含）



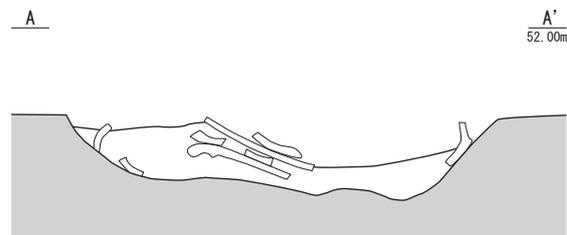
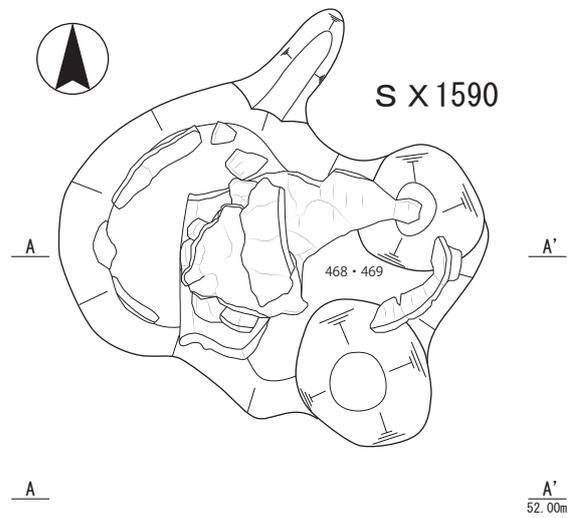
- 【SK1840・1849】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（φ1cm炭化物極微量含）



第 79 図 S K 1670 ・ 1686 ・ 1838 ・ 1840 ・ 1849 実測図（1 : 20）



【SX1517】
1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト



第 80 図 S X 1109 ・ 1118 ・ 1517 ・ 1590 実測図 (1 : 10)

2 弥生時代

中期から後期の遺構を確認した。竪穴建物 15 棟、掘立柱建物 1 棟、土坑 6 基、溝 1 条である。

ア 竪穴建物

S H 1026 (第 81 図) 第 4 次調査区の中央北側で検出した竪穴建物である。一辺 3.5 m × 2.8 m の長方形を呈するが、東側辺は挟れる。壁周溝、主柱穴は確認できなかったが、中央やや西寄りに 80cm × 60cm の楕円形の土坑を検出した。埋土には、焼土が含まれる。屋内炉跡であろうか。

出土遺物には、壺 (488 ~ 491)、甕 (492 ~ 494)、柱状片刃石斧 (495)、石皿 (496) の他、弥生土器が多数ある。時期は、概ね中期中葉¹⁾の頃と思われる。

S H 1305 (第 82 図) 第 9 次調査区の南西隅で検出した竪穴建物である。遺構の北側一部を確認したが、南側は調査区外になるため、規模は確定できない。東西方向に 5.4 m の規模である。主柱穴を 2 つ検出した。

遺物には、壺 (497)、土製品 (498) があり、床面直上から出土した。

S H 1331 (第 81 図) 第 9 次調査東区の北西端で、第 12 次調査区の南西にまたがって検出した竪穴建物である。規模は 5.05 m × 4.4 m で、長方形を呈している。主柱穴は 3 つ確認できたが、やや壁面に近い位置に設けられている。壁周溝は南東辺で確認でき、周溝内には複数の小穴がある。なお、この南東辺の中央壁際で、直径約 80cm の円形の貯蔵穴を検出した。

出土遺物には、壺の口縁 (499)、中期末から後期初頭頃の受口甕の口縁部 (500) がある。

S H 1333 (第 82 図) 第 9 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。この遺構のほぼ中央に後世の耕作溝が走るため、大半が削平を受けている。壁周溝は、西側と東側の隅が確認されたため、規模は約 6 m 四方で、若干平行四辺形状を呈することが推定できる。主柱穴については、西側の 1 つははっきりとはしないが、一応 4 つ検出できた。また、貯蔵穴は確認できなかった。なお、この遺構内の南西部分に溝がある。壁周溝であるとする、建て替えの可能性もある。

柱穴から、甕 (501)、壺 (502) が出土した。

S H 1444 (第 83 図) 第 10 次調査区の西側で検出した竪穴建物である。南辺はやや直線的であるが、全体に胴張の隅丸方形を呈する。規模は 4.2 m × 4.1 m である。壁周溝は概ね全周するが、主柱穴や炉跡は不明である。

遺物には、甕 (503)、中期中葉の櫛描横線文を施した壺 (504・505) があり、床面直上で出土した。

S H 1639 (第 83 図) 第 12 次調査区の中央部南側で検出した竪穴建物である。規模は 6.0 m × 4.7 m、長方形を呈する。壁周溝は、四隅を中心に確認できる。全体的に削平を受けるため定かではないが、おそらく全周していたものと思われる。主柱穴は、4 つ検出できた。建物内の中央の大部分に、楕円形の土坑がある。性格は不明であるが、貼床下土坑のようなものであろうか。

遺物としては、弥生時代後期を中心とした土器が多数出土した。特に、住居の南辺中央付近からは、後期初頭の八王子古宮式併行期²⁾の壺 (507) が出土した。他に、壺 (506)、高杯 (508) などが出土した。

S H 1641 (第 84 図) 第 12 次調査区の中央部北側で検出した竪穴建物である。全体的に大きく削平を受けており、埋土はほとんど残存していない。規模は、東西に 4.6 m、南北に 2.4 m 以上、主柱穴の配置から長方形を呈するものと思われる。壁周溝は南東隅で一部検出し、貯蔵穴は南辺のほぼ中央で検出した。平面プランから判断して、時期は弥生時代後期と考えられる。

高杯 (510) が、遺構上面から出土した。

S H 1644 (第 85 図) 第 12 次調査区の中央、やや西側で検出した竪穴建物である。一辺 7.0 m 四方の正方形で、比較的大型である。主柱穴 4 つのうち、東側以外の 3 つの上面は、テラス状に掘り窪められている。住居中央のやや東寄りにある方形の土坑は、壁面の被熱が確認されることから、屋内炉と考えられる。貯蔵穴は南東辺の中央部付近にあり、周囲には地山を馬蹄状に掘り残した盛り上がり確認される。これは、天花寺丘陵内遺跡群の S H 14³⁾ などでも確認されており、水等の流入を防ぐ目的のものと思われる。また、床面の硬化は、東隅以外の全面

で確認できた。

埋土から、甕 (511)、壺 (512・513)、高杯 (514～516) などの他、多数の弥生土器や砥石 (517) が出土した。時期は、後期前半と思われる。

S H 1645 (第 84 図) 第 12 次調査区の中央、やや西側で検出した竪穴建物である。規模は 5.55 m × 4.75 m と、長方形を呈する。壁周溝は、西隅と貯蔵穴が確認された南東辺以外は、残存している。主柱穴を 4 つ確認した。径は 30cm 弱と小さいが、深い。また、床の硬化面は建物中心に広がり、北東隅がやや高くなっている。

多くの弥生土器が出土したが、時期幅が見られる。緩やかな肩部をもつ壺 (539) は、中期から続く系譜上に位置するもので、後期初頭である。北側の主柱穴から出土している甕 (536) の底部も、中期末の様相を残している。また、多数の甕 (529～535) や石鏃 (546) も出土した。ただし、埋土からは山中式併行期の高杯 (541～545) が出土しているため、住居の廃絶時期は、山中式併行期の後期後半としておきたい。

S H 1646・S H 1677 (第 86 図) 第 12 次調査区の中央、やや西側で検出した竪穴建物である。入れ子状に 2 棟を検出したが、規模は S H 1677 が一辺 6.8 m × 6.7 m、S H 1646 は一辺 9.1 m × 8.0 m と大型である。土層断面から、正方形の S H 1677 を拡張する形で長方形を呈する S H 1646 へと建て替えられたことが判明した。それぞれに対応する壁周溝や主柱穴が明確に残り、内から外へと増築している。緩やかに掘り窪められた貯蔵穴も拡張の痕跡が確認される。貯蔵穴南西側の地山は、壁周溝が掘られることなく僅かに残っているが、これが馬蹄状の貯蔵穴になるのかどうかは定かではない。住居の規模に対して、主柱穴は小さく深いもので、壁柱穴は見られない。

遺物としては、北東辺北側から赤色顔料が施された小型壺 (522)、東隅から磨製石斧 (528)、南東辺南側から壺 (525) が出土した。その他に、甕 (520)、壺 (521・523・524・527)、高杯 (526) などが出土した。概ね、時期は後期前半と考えられる。

S H 1647 (第 87 図) 第 12 次調査区の中央、やや西側で検出した竪穴建物である。東半部は土砂の流

出により削平されているが、規模は一辺 4.5 m 程度で、若干東西に細長い形状であろうか。主柱穴は小さくて深い。床面の被熱痕は、建物中央の西寄りにある。南辺中央に貯蔵穴に相当すると考えられる 0.4～0.5 m の土坑が 2 基ある。床面の硬化は僅かに確認できたが、全体的に削平されているため、範囲は明確ではない。

出土遺物として、砥石 (551) がある。

S H 1661 (第 87 図) 第 12 次調査区の中央、やや西側で検出した竪穴建物である。規模は 5.0 m × 4.5 m で、やや長方形を呈する。建物の中央に向かって放射状に広がる炭化材が見られることから、焼失家屋と考えられる。貯蔵穴は南辺の中央にあり、床面の被熱範囲は、中央部と西辺付近で確認される。

遺物としては、北東隅から甕 (552)、壺 (553・554) が出土した。

S H 1683 (第 88 図) 第 12 次調査の南西部で検出した竪穴建物である。形状は、全体に丸みを帯びた隅丸方形を呈する。規模は 4.45 m × 4.4 m、残存の深さは 0.1 m である。

壁周溝は南辺で確認された、また、主柱穴を 4 つ確認したが、重複や放射状の外側に位置する柱穴もあるため、建て替えの可能性もある。

建物の中央には、不定形な円形の土坑がある。規模は、長径 1.45 m × 短径 1.2 m、残存の深さは 30cm である。屋内炉の可能性もある。

中央の土坑から、甕の底部 (555) が出土した。

S H 394 (第 88 図) 第 12 次調査区の中央部北端、東環の第 3 次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。規模は 6.0 m × 5.4 m で、長方形を呈する。壁周溝は全周すると思われるが、北西から南東にかけて走る攪乱溝によって分断されている。主柱穴は 4 つ検出できたが、焼土の痕跡は確認できなかった。なお、南辺中央に土坑を検出したが、貯蔵穴かどうかは定かではない。

遺物としては、壺 (556・557)、高杯 (558・559) が出土した。

イ 掘立柱建物

S B 1643 (第 89 図) 第 12 次調査区のほぼ中央で検出した、近接棟持柱付の掘立柱建物である。桁行 6 間 (9.9 m) × 梁行 2 間 (5.55 m) の南北棟で、

棟方位はN 6° Eである。柱間は、若干ばらつきはあるが、桁行は1.7 m前後、梁行は2.8 m前後である。また、2つの棟持柱の間は10.2 mであり、やや小さめの床柱と考えられる柱穴が5つ、不等間で並ぶ。なお、棟持柱は、建物の方向に傾いて建つ点が特徴であるが、土層断面では、それを確認することはできなかった。

柱穴の直径が小さいことから、高床式ではなく平地式の建物であったと思われる⁴⁾。また、出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、周囲の遺構の状況から中期末から後期の可能性が高いと考えられる。

ウ 土坑

S K 1027 (第90図) 第4次調査区の中央北側で検出した土坑である。規模は3.4 m × 1.05 m、長楕円形状を呈し、概ね垂直に掘削される。出土遺物には、壺(560・561)、甕(562)や打製石斧(563)があり、中期中葉のものと思われる。

S K 1038 (第90図) 第4次調査区の中央、東隅で検出した土坑である。直径約40cmの円形土坑で、壺の底部(565)が正立状態で出土した。上半部が残存しないため定かではないが、土器棺であった可能性もある。

S K 1050 (第90図) 第4次調査区の南西部で検出した土坑である。一辺約1.8 mの隅丸方形形状を呈する。残存の深さは38cmで、二段に掘削される。

出土遺物には、磨製石斧(566)がある。

S K 1418 (第90図) 第10次調査区の西側で検出した土坑である。径約60cmの不定形で、埋土から甕の底部(568)と、櫛描横線文や櫛描波状文を施した壺(567・569)が出土した。中期中葉のものと思われる。

S K 1653 (第90図) 第12次調査区の北西部で検出した浅い土坑である。規模は4.5 m × 3.1 m、平面形は三角形状を呈しており、被熱面が確認されるが竪穴建物ではないと思われる。埋土は褐灰色シルト～灰褐色土である。尾張から三河を中心とした地域からの搬入品である岩滑式厚口鉢(Ⅱ類)(570)が出土している他、壺(571～573)がある。

S K 1654 (第91図) 第12次調査区の中央、やや西側で検出した土坑である。形状は、長方形形状を呈

する。規模は、長辺1.3 m × 短辺0.65 m、残存の深さは15cmである。上部が削平されており、10cm程度の角ばった石が露出している。最下層は炭片を僅かに含んだ黒褐色シルト質土で、床面は僅かに被熱している。

出土遺物には、壺(574)があるが、土坑の性格は、不明である。

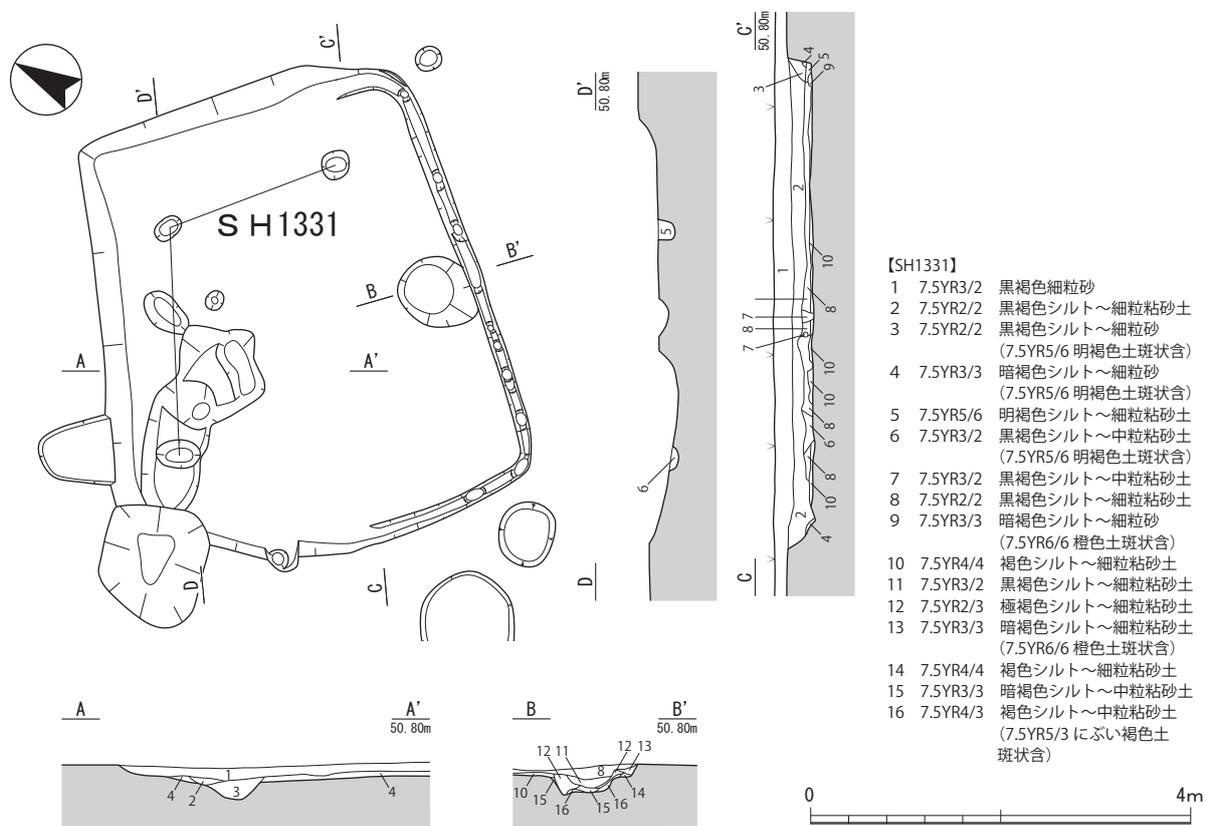
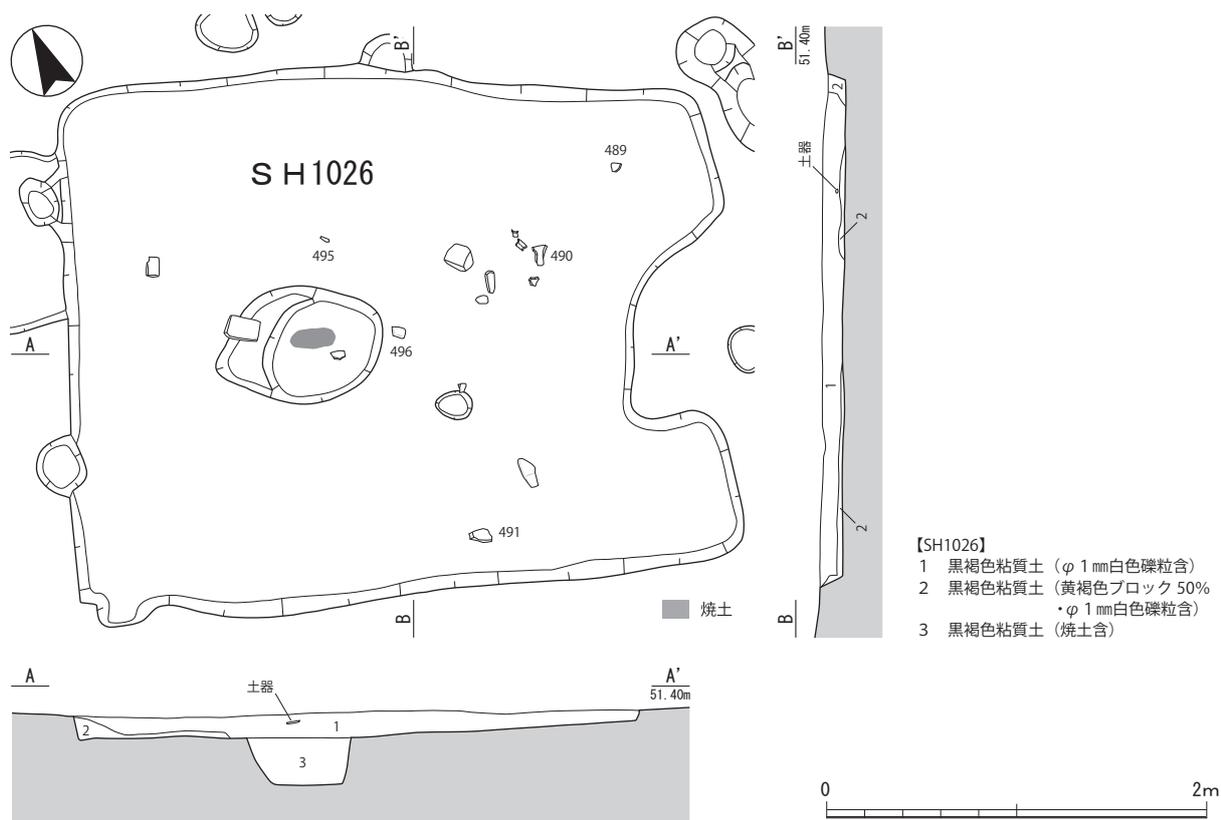
エ 溝

S D 1042 (第91図) 第4次調査区の南東部で検出した溝である。幅約60cm、長さ約6 mで東西方向に走る。

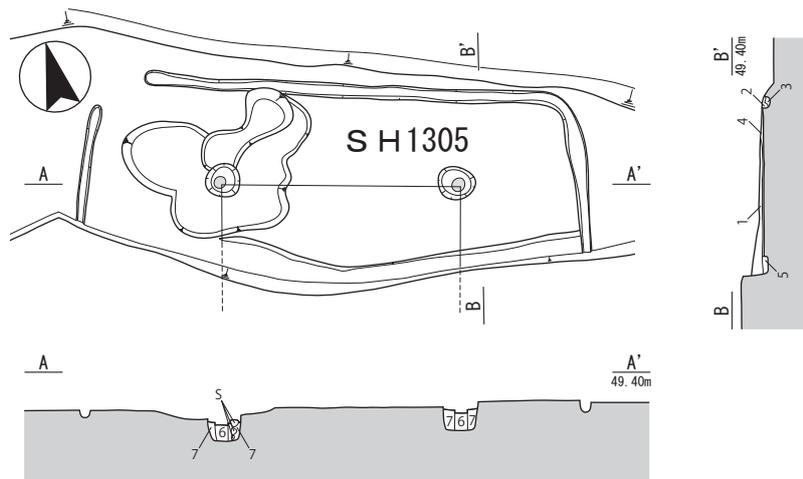
出土遺物には、壺(575～578)があり、中期中葉のものと思われる。

【註】

- 1) 土器の様式、時期区分は、以下の文献による。
・赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1990
・上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社2002
- 2) 愛知県埋蔵文化財センター 早野浩二氏のご教示による。
- 3) 三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵遺跡群発掘調査報告～一志郡嬉野町天花寺所在、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡の調査～』1996
- 4) 弥生時代における同様の建物形態は、岡山県沼EⅡ遺跡や島根県上中原遺跡に類例が見られ、棟持柱付建物の性格については、神殿・集会施設・倉などが想定されている。
・埋蔵文化財協会『弥生時代の掘立柱建物－資料西日本・本州』1991

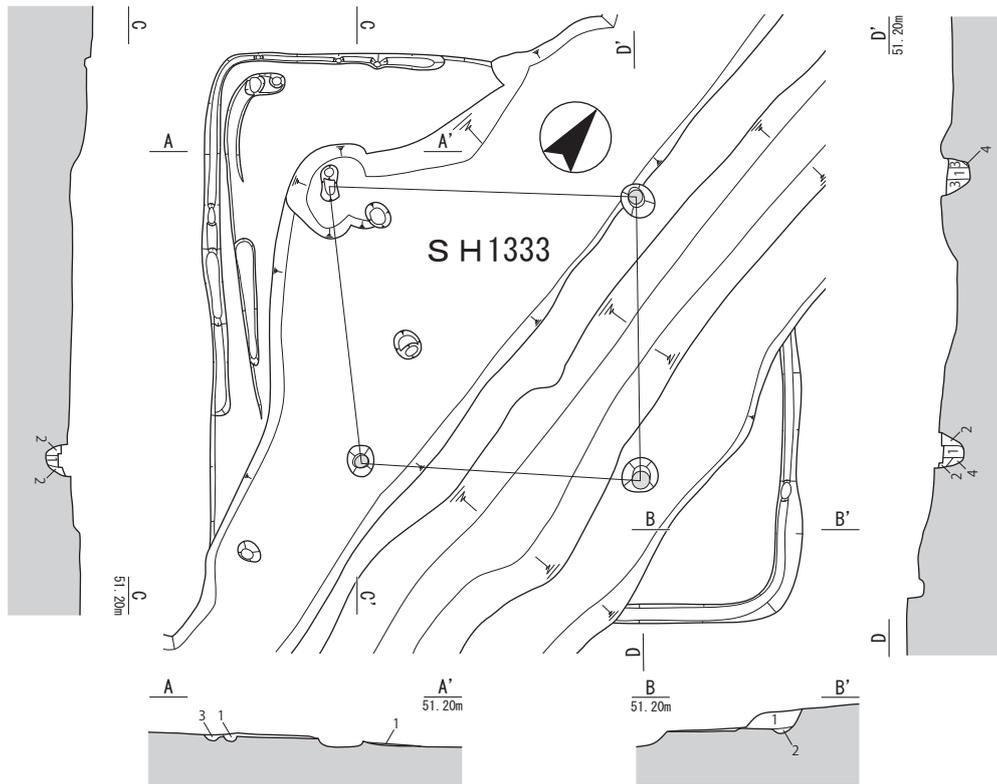


第 81 図 SH 1026・1331 実測図 (1 : 40・1 : 80)



[SH1305]

- 1 10YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト少量含極細砂 (極粗砂・黄褐色シルト・黒褐色極細砂ブロック含)
- 2 10YR4/6 褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含)
- 3 10YR4 ~ 5/4 にぶい黄褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含)
- 4 10YR4/6 褐色シルト多く含極細砂 (暗褐色極細砂ブロック・黄褐色シルト多含)
- 5 10YR5/6 黄褐色極細砂含シルト
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含・暗褐色極細砂小ブロック少量含)
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック・φ 5 cm 礫多含)



[SH1333 A-A'・B-B']

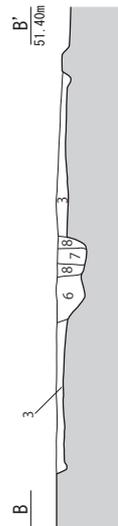
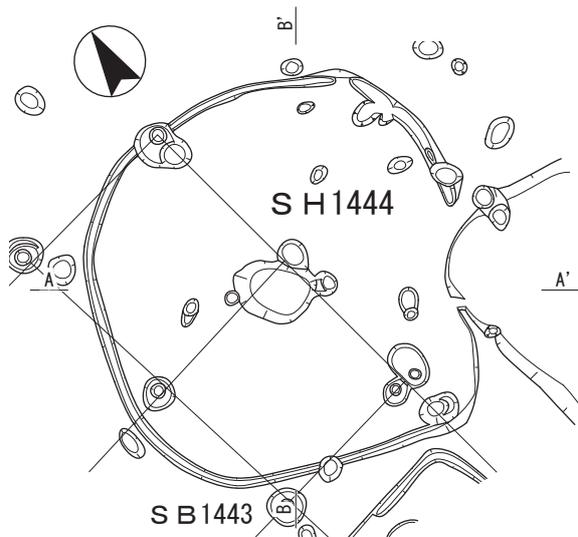
- 1 7.5YR3/2 黒褐色中砂含細砂 (φ 2mm 砂礫含)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色中砂含細砂 (7.5YR5/6 明褐色ブロック含・φ 2mm 砂礫含)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色中砂含細砂 (φ 2mm 砂礫含)

[SH1333 主柱穴 C-C'・D-D']

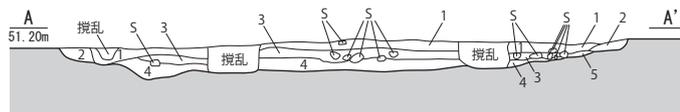
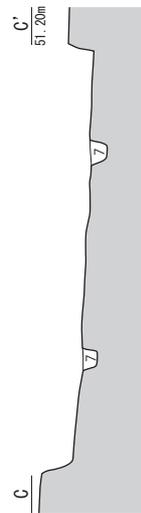
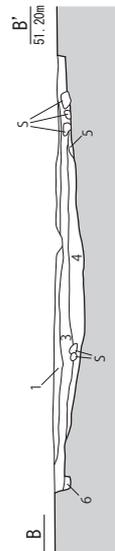
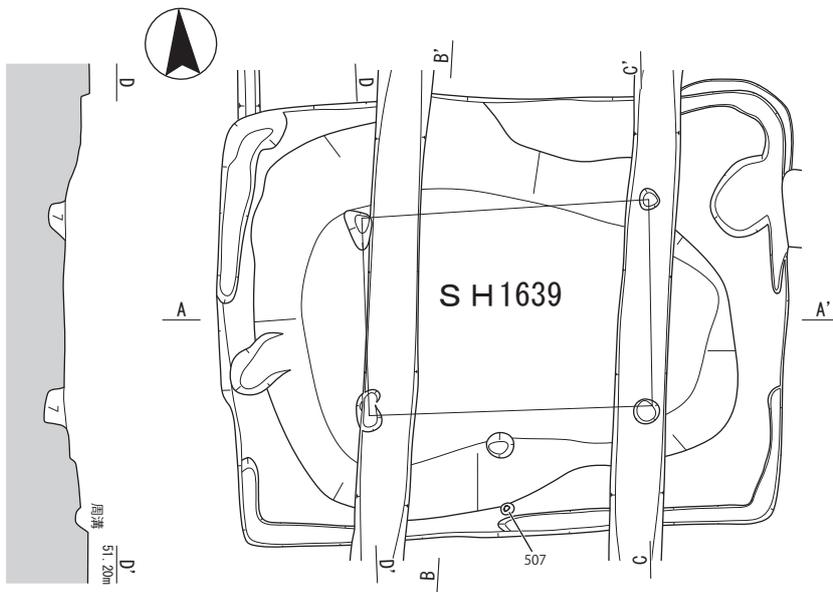
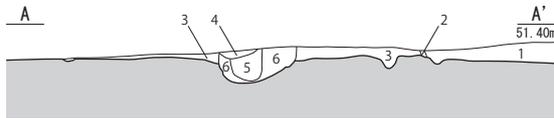
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック少量含)
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・炭化物少量含)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロックを少量・炭化物多含)
- 4 7.5YR5/6 黄褐色細礫含シルト (暗褐色極細砂ブロック多含)



第 82 図 SH 1305・1333 実測図 (1 : 80)



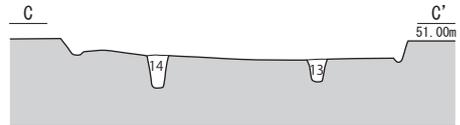
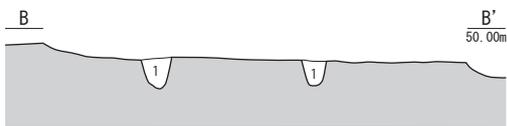
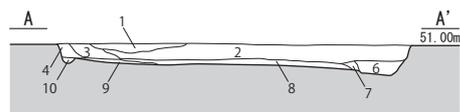
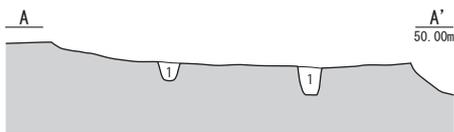
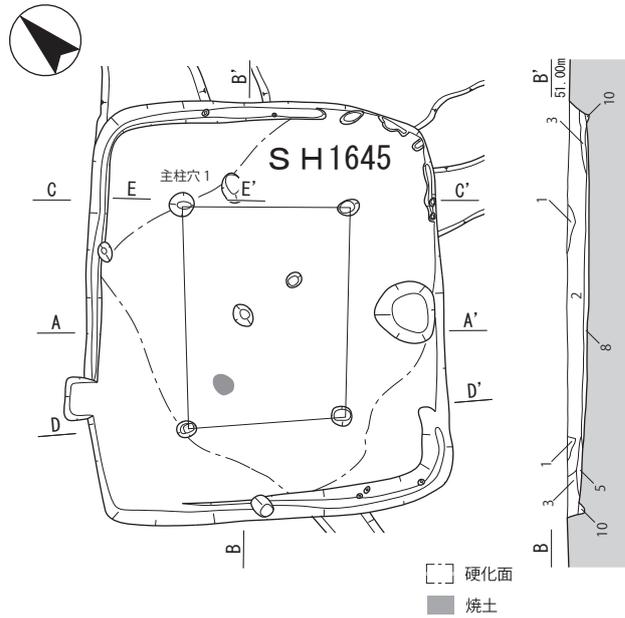
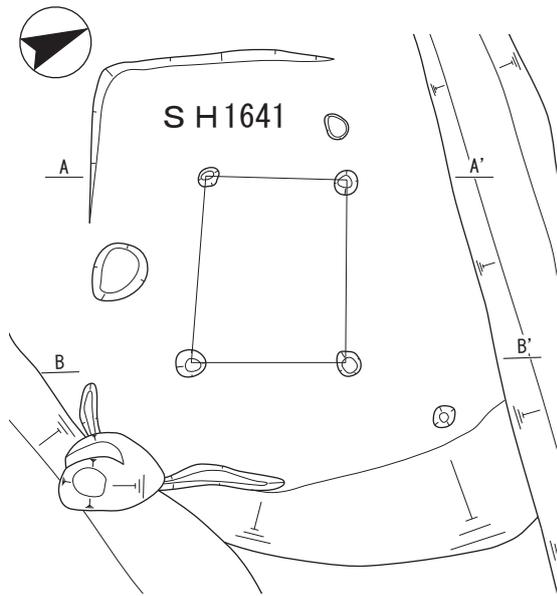
- 【SH1444】
- 1 7.5YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(7.5YR5/3 にぶい褐色土斑状多含)
 - 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 4 7.5YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土
 - 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(φ 3～5mm炭化物少量含)
 - 6 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(φ 3～5mm炭化物少量含)
 - 7 7.5YR1.7/1 黒色シルト～粗粒粘砂土
 - 8 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(7.5YR5/6 明褐色ブロック多含)



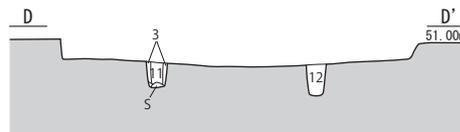
- 【SH1639】
- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 (黒ボク土)
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト
 - 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト質土 (土器少量含)
 - 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 (黒ボク土)
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
 - 6 10YR5/1 褐灰色シルト
 - 7 2.5Y3/1 黒褐色粗砂含シルト



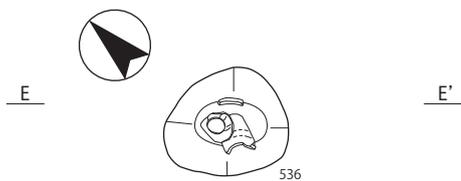
第 83 図 SH 1444・1639 実測図 (1 : 80)



【SH1641】
1 7.5Y3/1 黒褐色シルト（粗砂含）



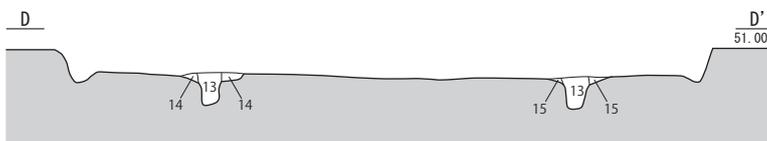
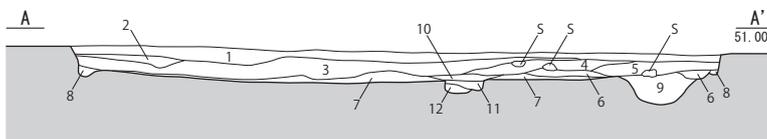
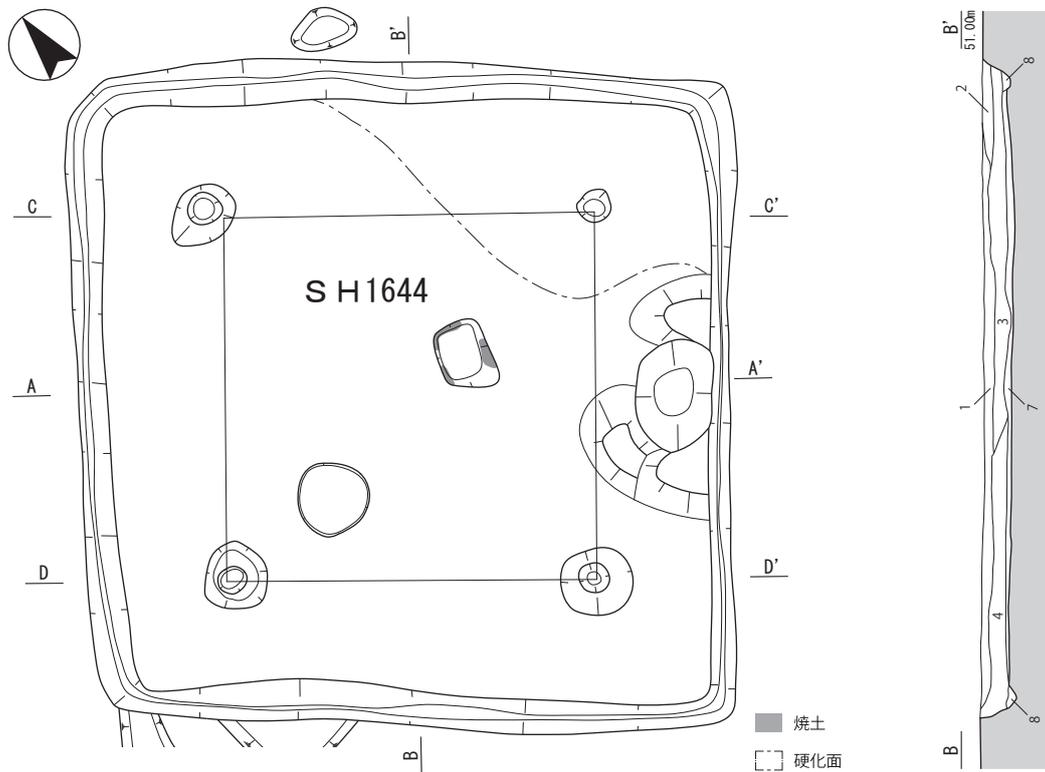
SH1645 主柱穴 1



- 【SH1645】
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄褐色シルト
 - 2 10YR3/1 黒褐色土（黒ボク土）
 - 3 10YR3/2 黒褐色土（極細粒砂含）
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土
 - 5 10YR4/1 褐灰色シルト質土
 - 6 10YR3/3 暗褐色土
 - 7 10YR3/4 暗褐色シルト
 - 8 7.5YR4/2 灰褐色土（ベースブロック7%含）
 - 9 10YR5/4 にぶい黄褐色土
 - 10 10YR5/1 褐灰色シルト質土
 - 11 10YR3/1 黒褐色シルト質土
 - 12 10YR4/2 灰黄褐色（ベースブロック3%含）
 - 13 10YR4/1 褐灰色土
 - 14 10YR4/1 褐灰色土（ベースブロック3%含）



第 84 図 SH 1641・1645 実測図（1：20・1：80・1：100）

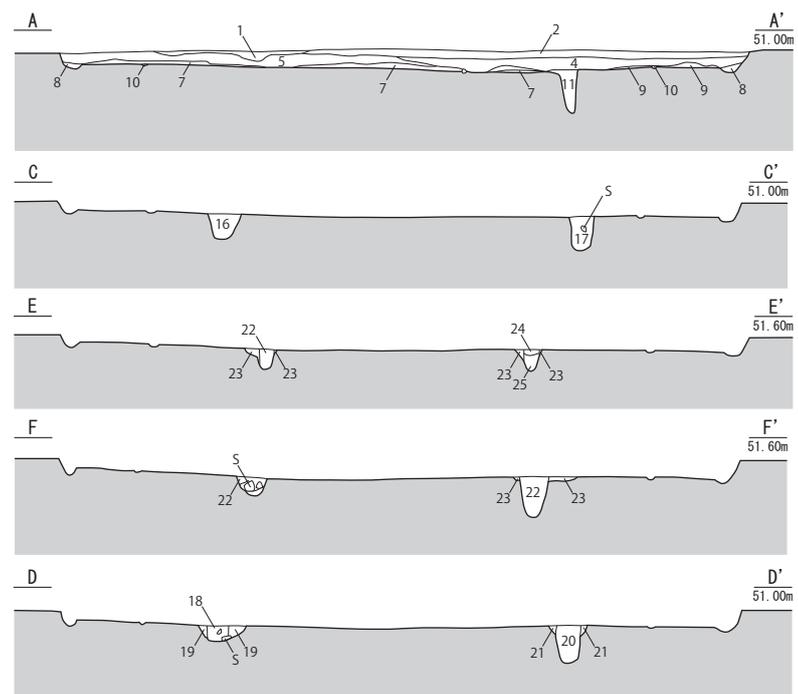
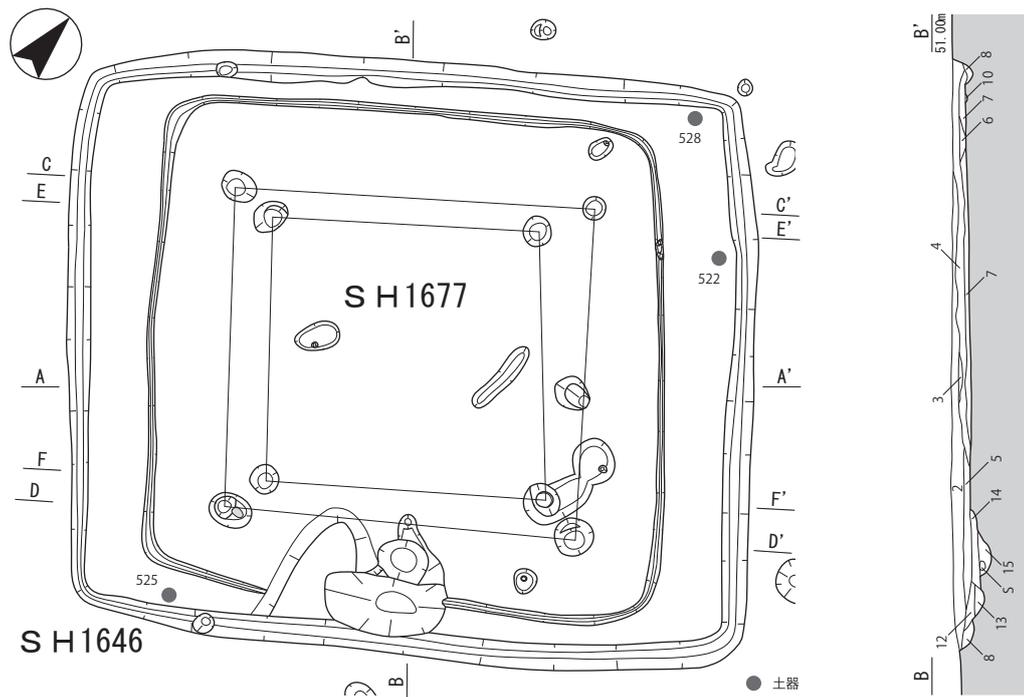


【SH1644】

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂含シルト | 10 10YR5/2 灰黄褐色土 |
| 2 10YR4/1 褐灰色土 | 11 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂含土 |
| 3 10YR3/1 黒褐色土 (黒ボク土) | 12 10YR3/3 暗褐色砂質土 (炭多含) |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色土 | 13 10YR4/1 褐灰色シルト質土 |
| 5 10YR2/2 黒褐色土 (炭3%含) | 14 10YR5/1 褐灰色シルト |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 15 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 |
| 7 10YR4/6 褐色粘質土 | 16 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 |
| 8 2.5Y4/2 暗灰黄色土 | 17 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (土器含) |
| 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質土 | 18 10YR4/2 灰黄褐色土 |



第 85 図 SH 1644 実測図 (1 : 80)



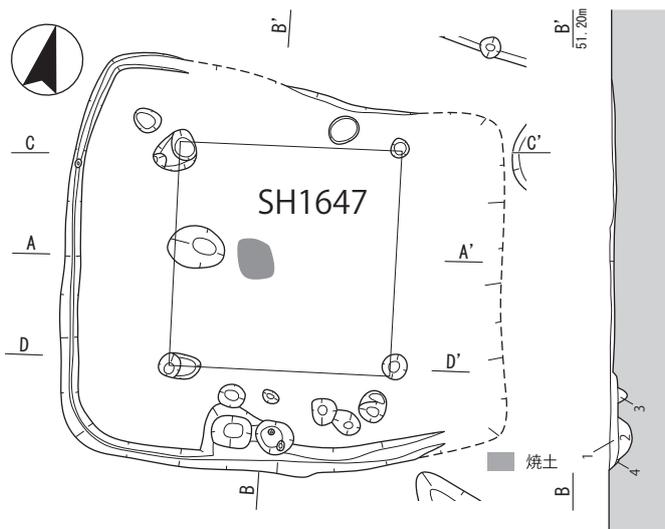
【SH1646・1677】

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂含シルト
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト (1646 埋土)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 (1646 埋土)
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄土 (1646 埋土)
- 5 10YR3/1 黒褐色土 (炭少量含) (1646 埋土)
- 6 10YR3/2 黒褐色土 (1646 埋土)
- 7 2.5Y5/4 黄褐色粗粒砂含シルト (明黄褐色シルトブロック 50%含) (1646 床面)
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂含シルト (1646 壁周溝)
- 9 2.5Y5/6 黄褐色極細粒砂含シルト (明黄褐色シルトブロック 50%含) (1677 床面)
- 10 2.5Y4/1 黄灰色シルト (1677 壁周溝)
- 11 10YR3/1 黒褐色土

- 12 10YR3/1 黒褐色土 (1646 貯蔵穴)
- 13 10YR3/2 黒褐色極細粒砂含シルト (1646 貯蔵穴)
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂含シルト (1677 貯蔵穴)
- 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂含シルト (1677 貯蔵穴)
- 16 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂含シルト (1646 主柱穴)
- 17 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土 (1646 主柱穴)
- 18 10YR3/1 黒褐色土 (1646 主柱穴)
- 19 2.5Y4/2 暗灰黄色粗粒砂含シルト (1646 主柱穴)
- 20 2.5Y4/1 黄灰色シルト (炭 3%含) (1646 主柱穴)
- 21 10YR4/4 褐色粗粒砂含シルト (1646 主柱穴)
- 22 10YR4/1 褐色シルト (1677 主柱穴)
- 23 10YR5/3 にぶい黄褐色粗粒砂含シルト (1677 主柱穴)
- 24 10YR4/1 褐色シルト (炭少量含) (1677 主柱穴)
- 25 10YR4/2 灰黄褐色土 (1677 主柱穴)

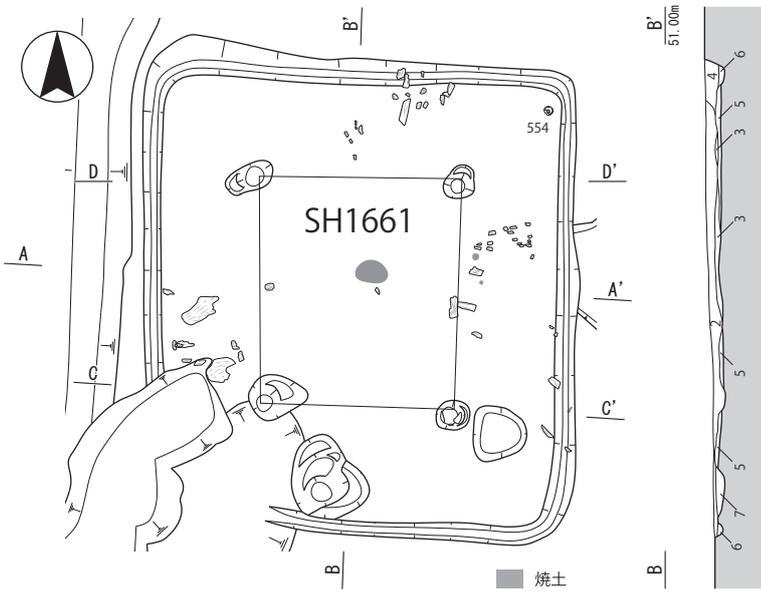
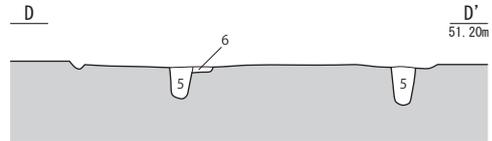
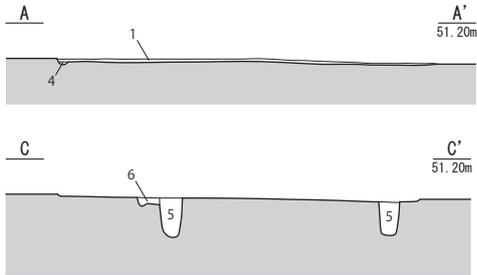


第 86 図 SH 1646・1677 実測図 (1 : 100)



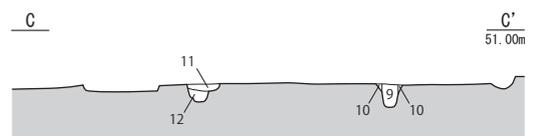
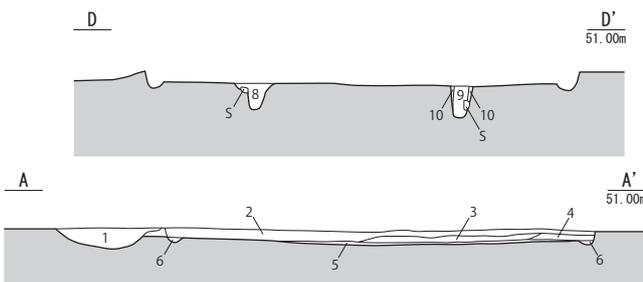
【SH1647】

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト質土
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質土
- 3 10YR3/2 黒褐色土
- 4 10YR5/1 褐灰色シルト
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト

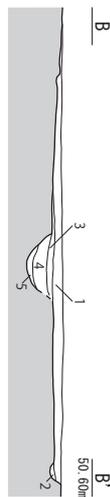
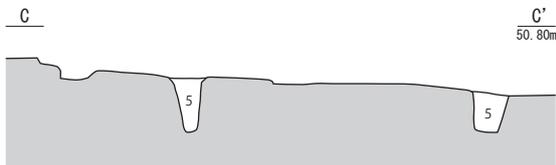
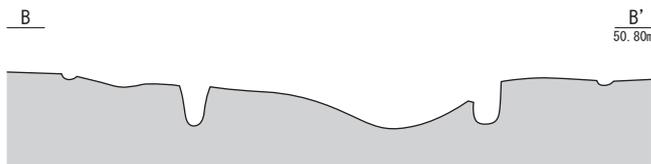
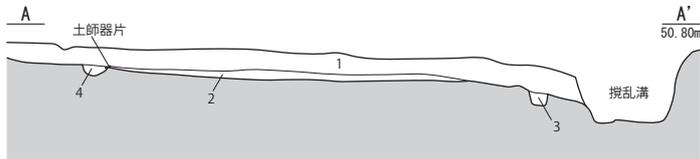
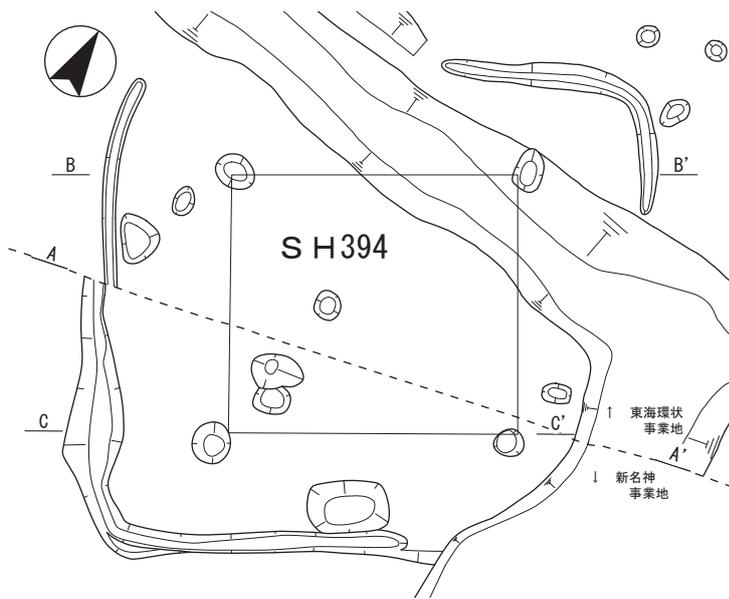


【SH1661】

- 1 10YR5/1 褐灰色極細粒砂含シルト (黄褐色ブロック 30%含)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト (炭少量含)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト (焼失材含)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土
- 5 10YR6/6 明黄褐色中粒砂含砂質シルト
- 6 10YR4/1 褐灰色中粒砂含シルト
- 7 2.5Y4/1 黄灰色土 (炭 3%含)
- 8 10YR4/1 褐灰色土 (炭 10%含)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色粗砂含シルト (炭 7%含)
- 10 2.5Y5/6 黄褐色粗砂含シルト
- 11 10YR4/1 褐灰色シルト
- 12 2.5Y5/6 黄褐色粗砂含シルト

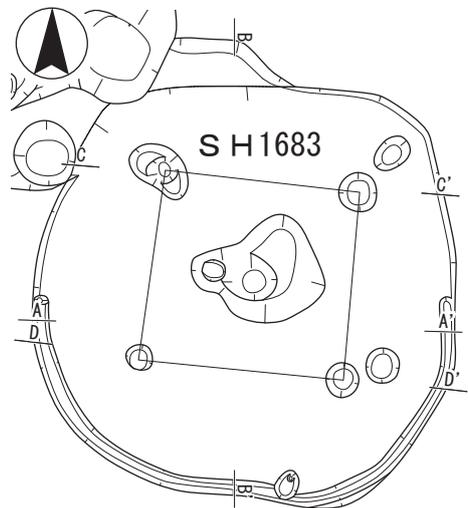


第 87 図 SH 1647・1661 実測図 (1 : 80)



【SH394】

- 1 10YR5/2 灰黄褐色土（焼土・炭化物・明黄褐色粒子含
礫・白色砂粒少量含）（旧耕作土）
- 2 10YR3/2 黒褐色土（粘性有）（竪穴埋土）
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土（炭化物・地山土少量含）
（壁周溝埋土）
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土（炭粒含）（主柱穴）
- 5 10YR3/1 黒褐色粗砂含シルト

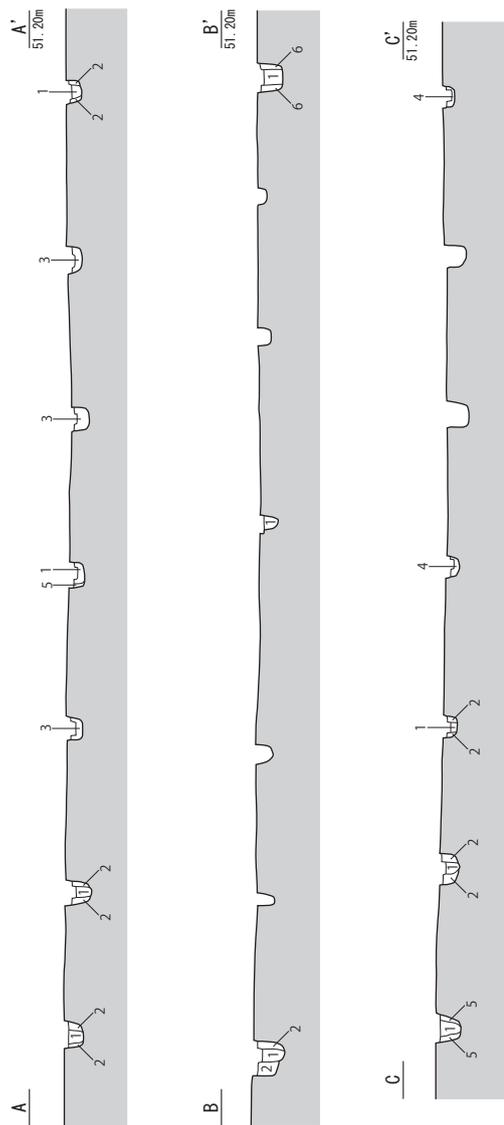
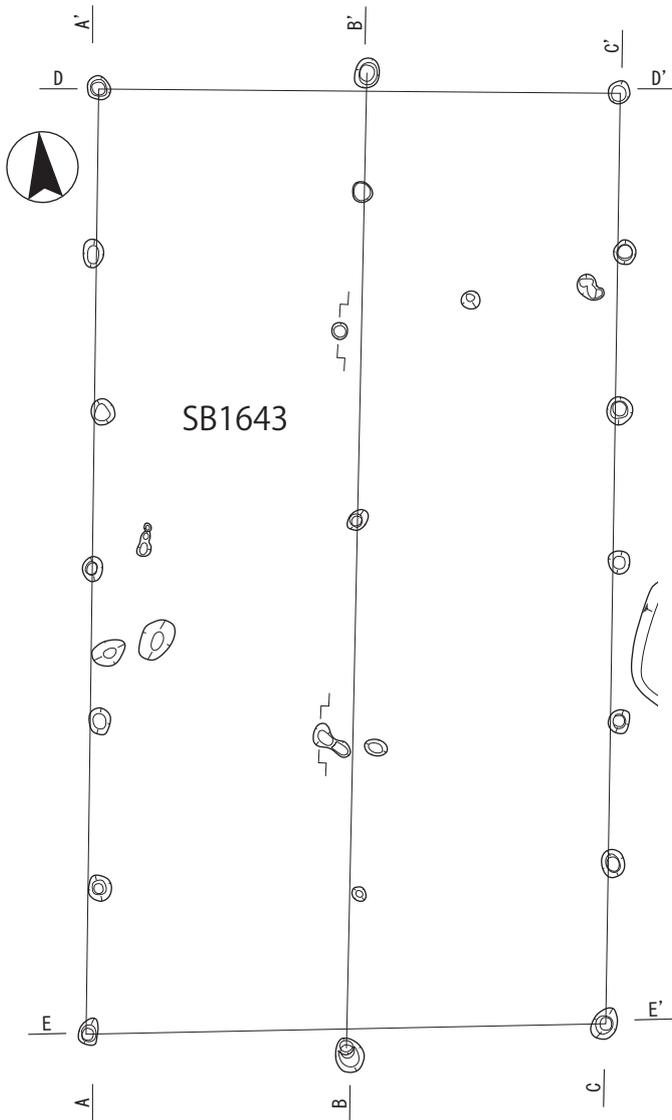


【SH1683】

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色
粗粒砂含シルト
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト土
- 5 10YR4/6 褐色極細粒砂
- 6 10YR3/2 黒褐色シルト
- 7 10YR3/3 暗褐色シルト
- 8 10YR4/4 褐色シルト
- 9 10YR3/3 褐色シルト



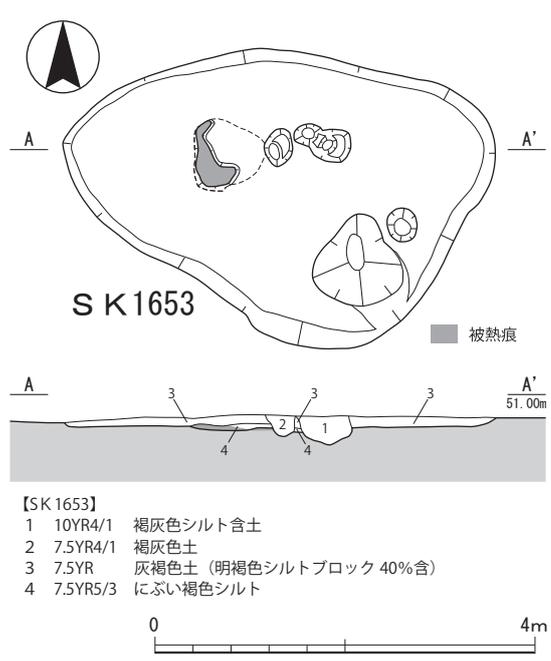
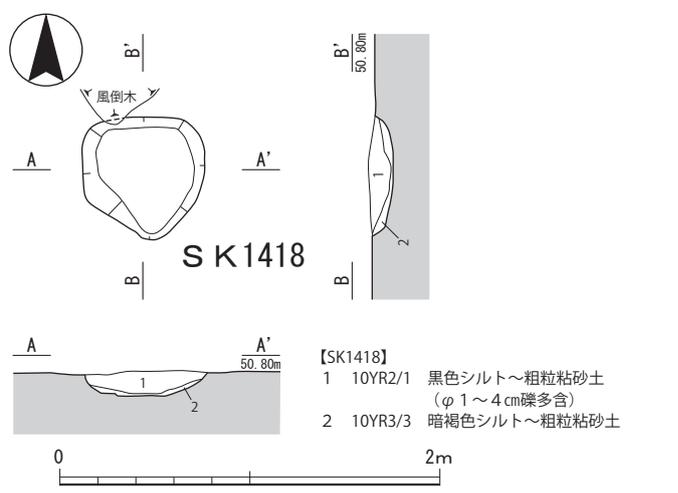
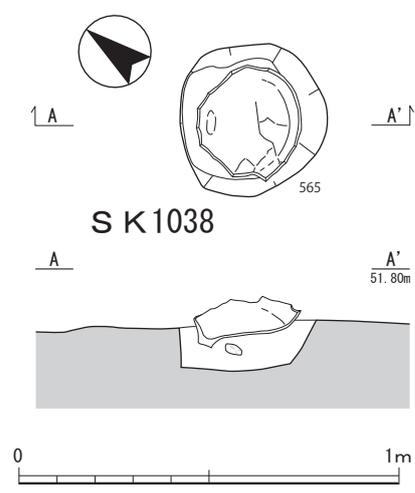
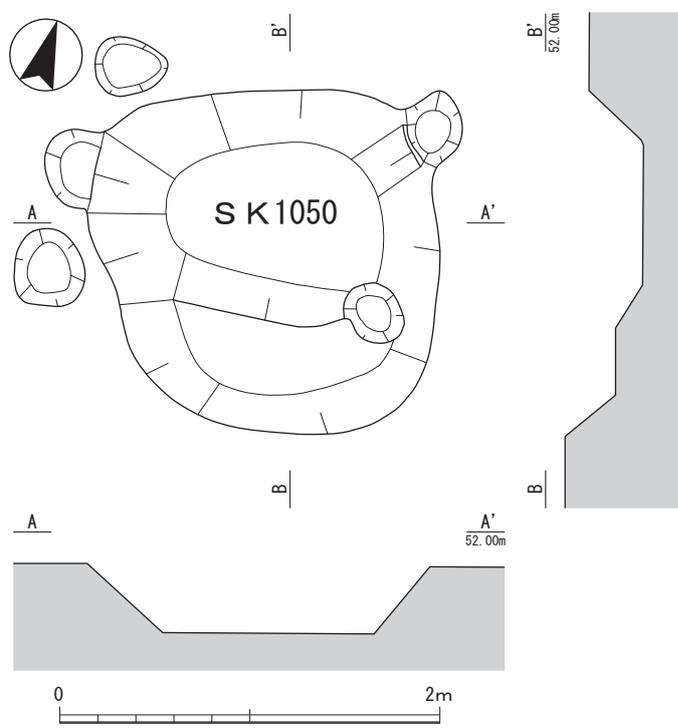
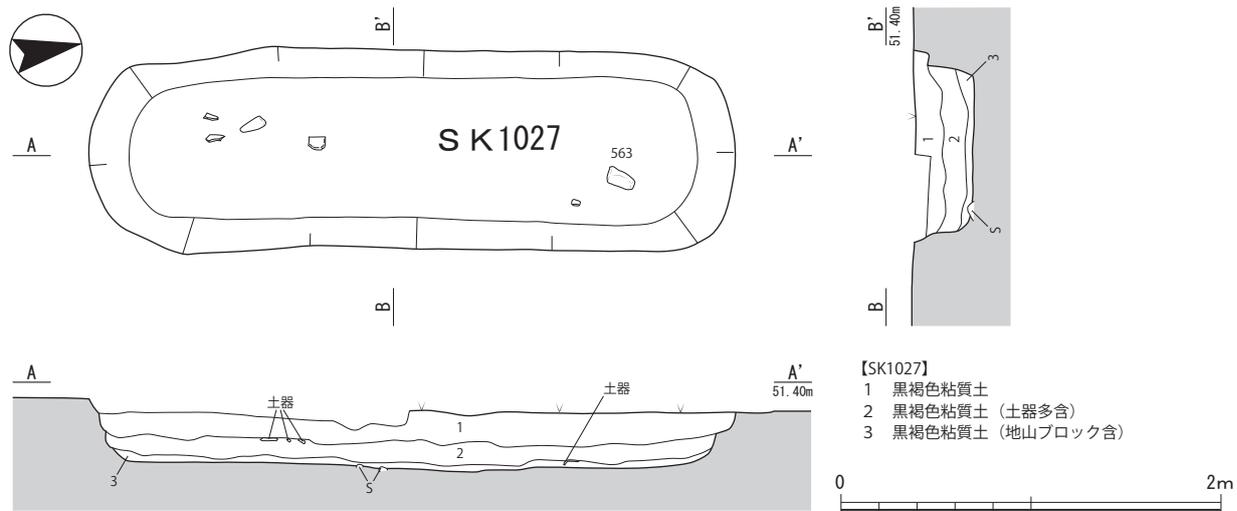
第 88 図 S H 394・1683 実測図 (1 : 80)



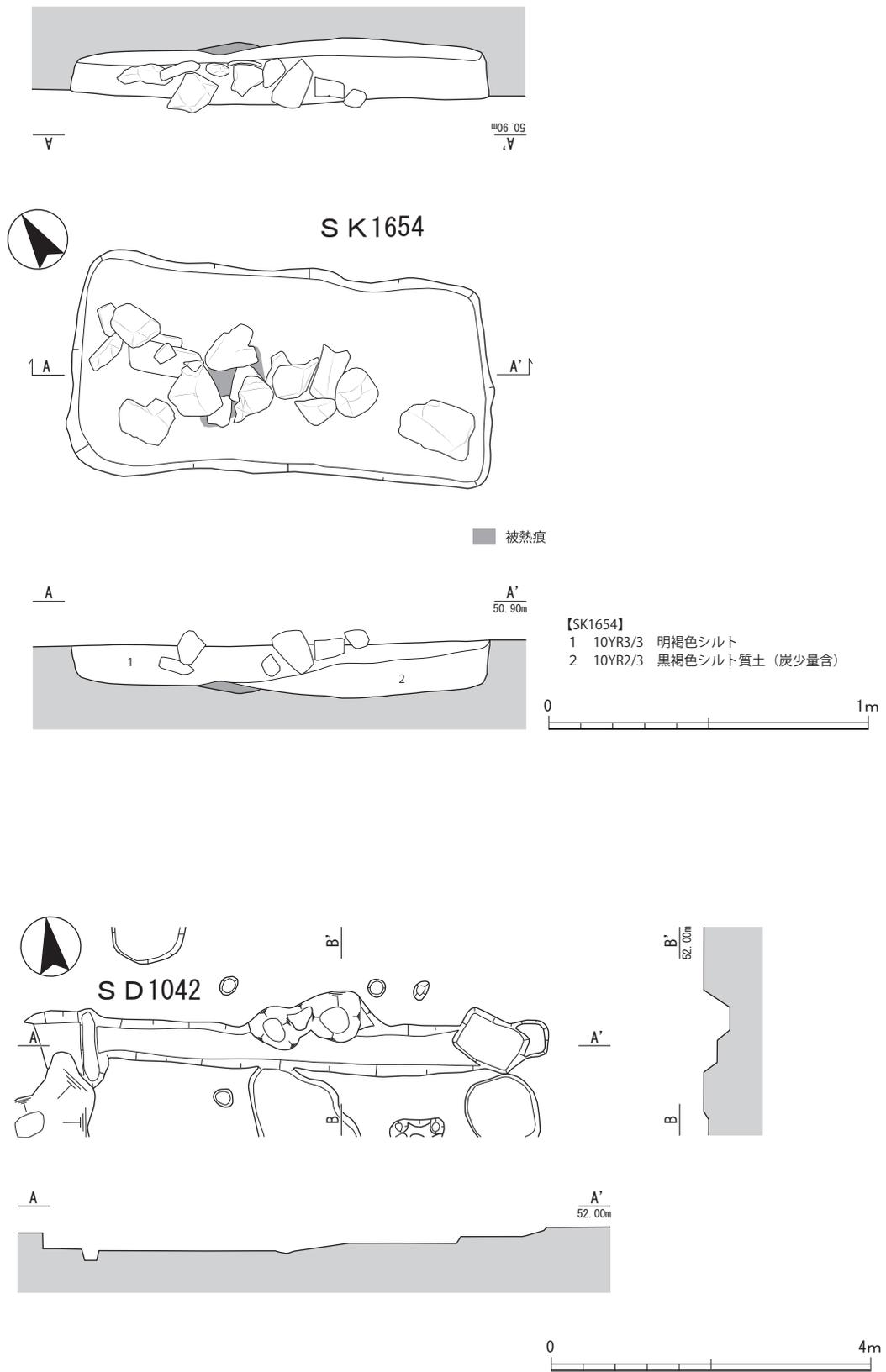
- 【SB1643】
- 1 7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘質土（黒ボク土）
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト質（ベースブロック 3%含）
 - 3 10YR3/2 黒褐色土（黒ボク土）
 - 4 10YR4/1 褐灰色シルト
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土（黄褐色砂質ブロック 5%含）
 - 6 10YR3/3 黒褐色シルト質土（2.5Y5/3 黄褐色シルト質土）
（2.5Y5/3 黄褐色細粒砂ブロック 3%含）



第 89 図 SB 1643 実測図 (1 : 80)



第90図 SK 1027・1050・1038・1418・1653 実測図（1：20・1：40・1：80）



第 91 図 S K 1654 ・ S D 1042 実測図 (1 : 20 ・ 1 : 80)

3 古墳時代後期から古代

当該期の遺構として、竪穴建物 76 棟、掘立柱建物 97 棟、柱列 2 列、土坑 108 基などがある。遺構数も多く、当遺跡の中心となる時期である。

ア 竪穴建物

当該期の竪穴建物を 76 棟確認した。概ね、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけてのものと思われるが、中心となるのは飛鳥時代であろう。形状は、正方形や長方形で、規模は 4 m 前後のものから、8 m を超える大型のものもある。カマドが残存しているものも多く、辺の中央だけでなく、左右のどちらかに偏って位置するものもある。貯蔵穴と思われるものの多くはカマドに隣接するが、建物の隅に位置するものもある。また、主柱穴が明瞭でないもの、壁周溝内に壁柱穴が巡るものなど、多種多様である。

S H 1011 (第 92 図) 第 4 次調査区の中央北東側で検出した竪穴建物である。規模は、東西 4.6 m、南北 3.9 m であるが、平行四辺形様の長方形を呈する。壁周溝は全周し、壁柱穴と思われる小穴が多数確認された。壁立ちの建物と思われる。建物の中央には、直径約 1.2 m の円形の貼床下土坑が存在する。また、北辺の中央やや東寄りにカマドを持つが、他の土坑と重複しており、残存状態は良くない。そのカマドの右側、北東隅にある直径 50cm の土坑が、貯蔵穴になるとと思われる。建物内の四隅周辺に、柱穴がいくつかはあるが、主柱穴に相当するのがどれかは、定かではない。

なお、遺構埋土から多数の土師器、砥石 (593) などが出土した他、炭化材や土壁が多く確認されたため、焼失家屋であると考えられる。

S H 1044 (第 92 図) 第 4 次調査区の中央南西側で検出した竪穴建物である。規模は 5.1 m × 5.1 m、正方形を呈する。後述する S B 1070 と平面形はほぼ重複するが、新旧関係は S H 1044 が古く、S B 1070 が新しい。北西辺の中央に直径 60cm、深さ 30cm、断面形は若干下膨れの袋状を呈する貯蔵穴がある。また、検出時に北東辺の中央周辺のピットに焼土、炭化物などが確認されたため、カマドの存在が想定されるが、残存状況は良くない。また、そのカマドの右側、東隅には直径 80cm の土坑があ

り、これも貯蔵穴の可能性もあるが、北西辺の貯蔵穴に比べると浅い。主柱穴は 4 つ確認した。

北西辺の貯蔵穴から、須恵器短頸壺 (594)、甕 (595) の他、土師器甕 (596) が出土した。

S H 1054 (第 93 図) 第 4 次調査区の中央南西側で検出した竪穴建物である。残存状態が悪く、壁周溝と思われる溝は、南東側と南西側の一部しかはつきりしない。後述する S B 1069 の南西部分と、ほぼ重複する。仮に、一辺約 4 m 四方の建物だとすると、北西辺の中央に、焼土を含む柱穴があり、カマドの想定も可能となる。また、中央には約 2.0 m × 1.0 m の楕円形状の土坑があるが、主柱穴や貯蔵穴は判然としない。

出土遺物はない。

S H 1057 (第 93 図) 第 4 次調査区の南西隅、東環第 7 次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。この遺構の中央の大半は、S K 1061 と重複しており、北西側と東側隅、南側隅が一部残存しているに過ぎない。形状は正方形で、規模は概ね 6 m 四方である。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (597・598)、杯身 (599)、甗 (600)、短頸壺 (601)、横瓶? (602)、平瓶? (603)、土師器甕 (604～607) の他、鞆羽口 (608) がある。

S H 1058 (第 93 図) 第 4 次調査区の南西側で検出した竪穴建物である。残存状態は良くなく、確認できたのは、西側約半分の壁周溝だけである。主柱穴ははつきりしないが、全体の形状が正方形を呈するとすると、規模は一辺 4 m 弱くらいになろうか。遺構検出時に、東辺中央に相当する場所に焼土が確認できたため、カマドの想定も可能である。

出土遺物には、土師器甕 (609) がある。

S H 1063 (第 94 図) 第 4 次調査区の中央南側で検出した竪穴建物である。遺構の中央には後世の攪乱溝が南北方向に走り、また周辺には S B 1068 や S B 1084 などが重複する。なお、北辺と東辺でやや小さめの竪穴建物の壁周溝の痕跡と思われる溝があるため、2 棟の竪穴建物が重複している可能性も考えられる。規模は、東西 4.7 m × 南北 3.7 m で長方形を呈している。東辺中央に焼土痕跡があり、カマドが想定される。東辺南寄りに 1.0 m × 0.6 m の楕円

形の土坑と、中央やや西側には直径 0.7 m の土坑があり、貯蔵穴と屋内土坑の可能性が考えられる。主柱穴は、南西部以外は、壁際に近い所で 3 つ確認した。

出土遺物には、土師器甕 (610) がある。

S H 1108 (第 94 図) 第 5 次調査北区の中央西側、第 11 次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。規模は 3.9 m × 3.9 m で、正方形を呈する。なお、南側半分の第 11 次調査区は、後世の里道と重なり削平を受けている。そのため、壁周溝や主柱穴などは、第 5 次調査区内での確認に止まる。なお、平面形と主柱穴の方向は若干異なり、カマドや貯蔵穴は、確認できなかった。

出土遺物はない。

S H 1164 (第 94 図) 第 5 次調査南区の中央南端、東環第 2 次調査区に一部またがって検出した竪穴建物である。一辺 5.4 m 四方で、形状は概ね正方形であるが、北辺がやや広く、若干台形状を呈する。壁周溝は四辺に巡り、東辺中央にカマドがあるが、残存状態はあまり良くない。貯蔵穴は不明である。なお、後述する S B 1190 や S B 1193 と重複している。新旧関係は、この S H 1164 が一番古く、S B 1193、S B 1190 の順であることが、遺構検出時の観察状況から判明している。

出土遺物には、須恵器高杯 (611)、土師器甕 (612) がある。

S H 1209 (第 95 図) 第 8 次調査区の南東隅で検出した竪穴建物である。削平が著しく、断続的に残る壁周溝やカマドの位置から、平面形は、一辺約 4 m の正方形を呈すると判断した。壁周溝は、主に西辺と北辺に残存し、幅約 20cm、深さ 5 ~ 7 cm であった。東辺の中央やや北寄り、カマドと想定される焼土を検出した。また、南辺の中央付近でも黒褐色土混じりの焼土を検出したが、詳細は不明である。貯蔵穴については、はっきりとはしないが、カマドの右側に想定される土坑がある。

なお、西辺の外、約 1 m の場所に焼土が確認され、また、西辺と直交する溝が、竪穴建物の壁周溝の可能性もあった。そのため、S H 1209 と重複する竪穴建物を想定して、精査を行った。わずかな埋土は確認できたものの、他に壁周溝などは見つからなかったため、竪穴建物とは判断しなかった。

出土遺物には、須恵器無台杯 (613) がある。

S H 1213 (第 95 図) 第 8 次調査区の南東隅で検出した竪穴建物である。残存状況が良くなく、壁周溝は、北西辺以外の三辺も途切れた状態である。遺構検出段階で、北東辺に焼土の痕跡が確認されたため、カマドの存在が想定される。また、カマドの右側、東隅には貯蔵穴と思われる土坑があるが、主柱穴は、はっきりとしない。規模は、南北方向に 4.5 m、カマドを一辺のほぼ中央と仮定すると、東西方向がやや短い長方形を呈することになる。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器甕 (614) がある。

S H 1218 (第 95 図) 第 8 次調査区の中央南隅で検出した竪穴建物である。遺構全体の北側 4 分の 1 程度確認できたが、大半は調査区外に広がる。北側の一辺は 3.0 m で、当遺跡検出の竪穴建物の中では、小型のものである。深さは検出面から 7 cm 程度で、壁周溝や主柱穴は確認できなかった。

中央にある土坑は、南半分が調査区外であるため、詳細は不明であるが、直径約 80cm、深さ 20cm ほどの規模であると思われる。埋土には直径 5 ~ 20mm の焼土ブロックが含まれ、土師器の長胴甕片が出土した。その上層は、焼土粒・炭化物と土師器の長胴甕小片を含む厚さ 5 ~ 10cm の貼床であった。このため、この土坑は、竪穴建物と同時期に存在し得ないことは明確であるが、竪穴建物以前の遺構なのか、築造時に焼土ブロックが混じった土で整地したのかは、不明である。また、この穴が人為的なのか、自然地形なのかについても、判然とはしない。

出土遺物には、須恵器杯身片、土師器甕片がある。

S H 1219 (第 95 図) 第 8 次調査区の西側南端で検出した竪穴建物である。北辺は 4.8 m であるが、大半は調査区外であるため、形状と規模は不明である。深さは、検出面から 10cm 程度である。わずかに残る褐色粘質土を床面とすると、厚さ 5 cm ほどの貼床となる。検出した東部は、木根等による攪乱を受けるなど残存が極めて悪く、北西部で壁周溝と土坑を確認したのみである。壁周溝は、幅 12 ~ 24cm、深さ 7 ~ 14cm であった。確認できた唯一の土坑は、南半分が調査区外であるため、詳細は不明であるが、直径約 60cm で、深さは 15cm ほどである。

出土遺物には、須恵器杯蓋片、多数の土師器甕片がある。

S H 1220 (第 95 図) 第 8 次調査区の中央西側で検出した竪穴建物である。深さは、検出面から 10cm 程度である。残存状況が悪い上に、南半分が攪乱溝で消失しているため、詳細は不明であるが、東西に長い長方形を呈するものと思われる。支柱穴の可能性のある 4 つの柱穴の位置を結ぶと台形状になる。また、東辺の中央に焼土の痕跡が残存しており、カマドの存在が想定される。また、カマドの北隣には、貯蔵穴と思われる土坑がある。形状と規模は、三角形に近い長径 60cm の楕円形で、深さは 30cm ほどである。なお、北辺部分で壁周溝が二重に確認できるため、竪穴建物の建て替えの可能性が考えられる。重複関係から、外側の方が新しいものと判断した。

出土遺物には、須恵器無台杯 (615)、甕片の他、土師器甕片が多数ある。

S H 1223 (第 96 図) 第 8 次調査区の西側で検出した竪穴建物である。一辺約 5 m 四方の規模で、正方形を呈する。壁周溝は、概ね四辺で確認できるが、攪乱などにより一部、途切れた状態である。東辺の中央に焼土の痕跡が確認できたため、カマドの存在が想定される。また、南東隅には直径約 1 m の土坑、北東隅には直径約 0.7 m の土坑がある。ともに貯蔵穴の可能性もあるが、北東隅の土坑は竪穴建物と重複しているようである。なお、支柱穴と思われる柱穴は、南西部のもの以外は、相当する場所で 3 つ確認できる。

出土遺物には、南東隅の貯蔵穴から、土師器甕 (619)、甌 (620)、北東隅の貯蔵穴から、須恵器杯蓋 b (616)、杯 (617)、土師器小型甕 (618)、土錘 (622)、台石 (623)、弥生土器甕 (1592) がある。

S H 1233 (第 96 図) 第 8 次調査区の南西隅の壁際、東環第 7 次調査の南区にまたがって検出した竪穴建物である。東側の一部の確認で、大半は第 7 次調査区に含まれる。また、北側は攪乱溝で、南側は調査区外となるため、南北の規模は不明であるが、東西の規模は一辺 6.2 m である。

出土遺物には、土師器片がある。

S H 1313 (第 97 図) 第 9 次調査区の東隅、一部東環第 2 次調査区にまたがって検出した竪穴建物で

ある。規模は 5.4 m × 5.1 m、若干東西に長い正方形を呈する。壁周溝は四辺に巡るが、北西辺と北東辺の周溝内に、壁柱穴と思われる小穴が確認される。南東辺の中央に焼土の痕跡があり、カマドが想定される。また、焼土のすぐ南東に小穴があり、支柱石の痕跡の可能性が考えられる。また、南隅には 0.8 m × 0.7 m の楕円形を呈する貯蔵穴がある。

東海環状自動車道の調査区内での貯蔵穴から焼土、灰、赤く焼けた石、土師器の甕、須恵器の杯蓋が出土した他、磨石 (1581)、剥片 (1587) が出土した。
S H 1318 (第 98 図) 第 9 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。規模は一辺 4 m 弱で、正方形を呈する。壁周溝は四辺に巡り、北辺の中央にカマドを設ける。このカマドの中央から土師器長胴甕 (626) の上半部が正立状態で出土した。支柱穴は 4 つ確認され、1.0 m × 0.6 m の楕円形の貯蔵穴が、南東隅の位置にある。土層の観察から貼床がなされていることも判る。なお、後述する S H 1319 と重複しているが、この S H 1318 の方が新しく、全体に深く掘削されている。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (624・625)、土師器長胴甕 (626) がある。

S H 1319 (第 98 図) 第 9 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。S H 1318 の大半が重複しており、また、周辺の耕作溝による削平されているが、東西に 4.2 m、南北に 2.6 m の長方形を呈すると思われる。カマドや貯蔵穴、支柱穴などは、はっきりとはしない。

出土遺物はない。

S H 1320 (第 99 図) 第 9 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。東西に若干長い、概ね正方形を呈する。壁周溝の残存は、北側と東側で二重になっており、2 棟の竪穴建物が重複する可能性も考えられる。しかし、南東部分の壁周溝の重複や土層断面の観察を行った結果、北東から南西の方向にかけて縮小した 1 棟の竪穴建物であったものとして報告する。北辺中央には二箇所の焼土の痕跡が見られ、カマドの存在が想定される。

出土遺物には、須恵器杯 H 身 (627・628)、提瓶 (629)、土師器甕 (630～634) がある。

S H 1321 (第 99 図) 第 9 次調査区の東側で検出

した竪穴建物である。規模は、4.5 m × 4.2 mで、若干東西に長い。壁周溝は四辺に巡り、主柱穴は4つ確認できた。西辺中央に焼土の痕跡があり、カマドが想定される。また、貯蔵穴と思われる土坑は、北西隅と南西隅の二箇所があり、ともに方形状である。なお、遺構内の西側にある長方形の土坑は、中世墓S X 1330である。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(635)、杯H身(636・637)、土師器甕(638)などがある。

S H 1322 (第100図) 第9次調査区の北東隅の壁際、第12次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。壁周溝の北辺周辺のみが第12次調査区で、大半は第9次調査区内である。規模は、南北4.8 m × 東西4.5 m、若干長方形を呈する。後世の耕作溝や攪乱などで削平されるが、4つの主柱穴、東辺の中央にカマドS K 1325、南東隅に貯蔵穴を確認した。

壁周溝の西辺北側から砥石(641)が出土した他、遺構埋土から、須恵器杯H蓋(639)、土師器把手(640)なども出土した。

S H 1327 (第101図) 第9次調査区の南東隅の壁際で検出した竪穴建物である。竪穴建物の北西隅の一部を確認したに止まり、大半は調査区外であるため、規模は不明である。主柱穴、カマド、貯蔵穴などは、調査区内では検出されなかった。なお、当遺構の下層から縄文時代の土坑S K 1336が確認された。

出土遺物はない。

S H 1417 (第101図) 第10次調査南区の北西側で検出した竪穴建物である。遺構の大半が重複するS K 1427によって削平されているため、壁周溝の南東辺の一部しか検出できなかった。そのため、形状や規模、主柱穴は不明である。なお、北辺の中央に当たる部分に焼土の痕跡があり、カマドが想定される。また、南東隅にある土坑は貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物には、土師器甕が数点ある。

S H 1436 (第101図) 第10次調査南区の西側で検出した竪穴建物である。残存状態があまり良くないため、壁周溝は四辺いずれも途切れる。規模は一辺5.4 m四方で、ほぼ正方形を呈する。北辺のほぼ中央に焼土の痕跡が認められ、カマドの存在が想

定される。貯蔵穴と思われる土坑が、北東隅と南東隅に2基存在するが、定かではない。

東土坑から製塩土器(643～645)、南東隅の土坑から土師器甕(642)の他、須恵器甕片、杯蓋片が出土した。

S H 1438 (第102図) 第10次調査南区の中央で検出した竪穴建物である。東西方向に長い長方形を呈している。遺構の中央東側が土坑などと重複しているが、壁周溝の残存状況は良く、土層断面の観察から、北側と東側に60cm程度拡張したものと判断した。壁周溝内には、壁柱穴と思われる小穴も若干認められるが、主柱穴は判然とはしない。北辺中央のやや東寄りにはカマドが築かれ、大径側を下に立てた完形の鞆羽口(665)が支柱石代わりに転用されていた。また、カマド周辺からは土師器小型甕(657)、甕(658・660)、長胴甕(664)などが多数出土した。北東隅には、規模1.3 m × 0.7 mの楕円形の貯蔵穴があり、埋土上層からはやや浮いた状態で、完形の須恵器杯H身(648)、土師器甕(659・662)が出土した他、須恵器杯H蓋(646・647)、須恵器杯H身(649)、杯B(650)、高杯(651)、製塩土器(653～655)などが出土した。

S H 1446 (第103図) 第10次調査南区の中央西側で検出した竪穴建物である。規模は、概ね4.0 m × 3.0 mの東西に長い、長方形を呈する。壁周溝は、北東隅の一部で確認できた。東辺の中央やや南寄りに、焼土の痕跡があり、カマドの存在が想定される。主柱穴は不明である。南東隅にある小穴が貯蔵穴であろうか。

出土遺物には、土師器甕数点がある。なお、遺構内の北西では、当遺構より新しい土坑S K 1453が、南では遺構の下層から縄文時代の集石炉S F 1454が検出された。

S H 1450 (第102図) 第10次調査南区の南西側で検出した竪穴建物である。北西隅や南辺などが他の遺構と重複するが、規模は、一辺約5 m四方で、ほぼ正方形を呈する。壁周溝は東辺で若干途切れるが、ほぼ四辺で確認できた。北辺の中央に焼土の痕跡があり、カマドが想定されるが、主柱穴ははっきりとはしない。中央部分には、焼土混じりの径1.5 mの土坑がある。屋内土坑であろうか。貯蔵穴と思

われる土坑は2基ある。南東隅に1.4 m × 1.1 mの楕円形の土坑、北東隅に径0.5 mの円形の土坑である。

北東隅の土坑からは、完形の須恵器杯H蓋(666)、杯H身(667)の他、土師器小型甕(668・669)が出土した。

S H 1496(第103図) 第10次調査北区の東側で検出した竪穴建物である。規模は、一辺3.7 m × 3.6 mで、正方形を呈する。中央部の大半が攪乱により削平されるため、支柱穴、貯蔵穴などは判然としない。なお、平面的には判らなかつたが、東西方向の土層断面の観察で、焼土粒や炭化物の残存からカマドは東側に存在していた可能性が考えられる。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(670)、土師器甕(671～673)、製塩土器(674)がある。

S H 701(第103図) 第10次調査南区の南東側、東環の第7次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。大半が第10次調査区内で、南隅の一部が第7次調査区に含まれる。風倒木や攪乱などと多く重複するが、壁周溝の残存状況は、概ね良い。支柱穴は4つ確認した。南東辺の中央やや北寄りに焼土の痕跡があり、カマドの存在が想定される。カマドの右側に2基の土坑がある。埋土に炭化物や焼土ブロックが含まれる。貯蔵穴になるうか。

出土遺物には、須恵器高杯(587)、鉢?(588)、壺(589)、土師器甕(590～592)がある。

S H 1515(第104図) 第11次調査南区の西側で検出した竪穴建物である。一辺4.8 m四方で、正方形を呈する。壁周溝は、概ね西側半分が残存している。支柱穴は4つ確認したが、径約40cm程度と大きく、方形に近いものもある。南東隅には、直径0.9 mの円形の土坑があり、貯蔵穴の可能性はある。なお、カマドは、貯蔵穴の左側にあることが多いため、南東辺に想定される。この辺の中央に2つ並ぶ小穴が、その痕跡の一部になるうか。

貯蔵穴から須恵器杯H蓋(675)の他、須恵器杯H身(676)、土師器数点がある。

S H 1516(第104図) 第11次調査南区の西側で検出した竪穴建物である。遺構の東側が風倒木等により削平を受けるため、残存状況はあまり良くないが、一辺約5 m四方の正方形を呈すると思われる。支柱穴は、4つ確認した。東側に焼土の痕跡があるた

め、カマドの存在が想定される。1.0 m × 0.6 mの楕円形をした貯蔵穴が南東隅にあり、土師器甕(677)片が、ややまとまって出土した。

S H 1562(第105図) 第11次調査南区のほぼ中央で検出した竪穴建物である。東西5.55 m × 南北5.1 mと若干東西に長い。壁周溝は明瞭ではないが、壁柱穴の可能性のある小穴が一部確認できる。支柱穴は、南東部分の土坑と重複している以外の3つは確認できた。北辺の中央にカマドが構築されており、東側の袖部分が若干残存している。カマド内のほぼ中央にある小穴は、支柱石の痕跡であろうか。北東隅に貯蔵穴S K 1573があるが、形状はやや歪である。2つの土坑が重複しているか、作り直しをしている可能性もある。なお、遺構の南側でS K 1567・S K 1568・S K 1572と重複しているが、新旧関係は、S H 1562の方が古いと思われる。

出土遺物には、貯蔵穴S K 1573から土師器甕(680)、砥石(684)が、その他に須恵器高杯(678)、隰(679)、土師器甕(683)、敲石(1578)などがある。
S H 1598(第105図) 第11次調査南区の中央東側で検出した竪穴建物である。後世の耕作溝などにより全体的に削平を受けており、確認できたのは支柱穴と貯蔵穴と思われる土坑だけである。4つの支柱穴は、東西間3.45 m、南北間3.0 mであり、他の竪穴建物から推測すると、規模は6.9 m × 6.0 m位で、東西に長い、長方形を呈すると想定できる。北東隅に当たる場所の貯蔵穴は、形状が歪であり、S H 1562同様に作り直しをしている可能性もある。

貯蔵穴からは、土師器甕(685)などが出土した。
S H 1714(第106図) 第11次調査南区の東隅で検出した竪穴建物である。南北4.1 m × 東西3.7 mと、若干南北方向に長い。大きな削平を受けておらず、30cm程度の深さが残存する。若干南北方向に長い形状で、全周する壁周溝内の一部に壁柱穴と思われる小穴が存在する。壁立ちの建物と思われる。カマドは、珍しく西辺の中央やや北よりに構築される。北西隅の小穴が貯蔵穴になるうか。また、支柱穴は存在せず、全面に貼床が認められる。

出土遺物には、須恵器杯蓋g(947)、杯蓋g(948・949)、無台杯(950)、杯(951・952)、壺(953)、甕(954)、土師器甕(955～958)などがある。特に、

須恵器の杯蓋にはツマミが付くものがあり、他の
堅穴建物と比べて、新しい要素を持つ遺物が認め
られる。

S H 1606 (第 106 図) 第 12 次調査区の南東側で
検出した堅穴建物である。一辺約 4 m 四方で、正方
形状を呈する。掘立柱建物 S B 1612・S B 1636 と
重複し、新旧関係は S H 1606 → S B 1612 → S B
1636 である。床面にはいくつもの柱穴が認められ
るため、主柱穴は明確ではないが、四隅に近い柱穴
の内、南西以外の 3 つが相当するものと思われる。
壁周溝は、北東隅のみに残る。東辺の床面にみられ
る焼土は、カマドの跡と考えられる。袖部分などは
残存していないが、断面観察により、壁周溝を掘削
した後に、カマドを構築したことがわかる。また、
カマドの北側には、若干高い貼床の痕跡も見られ
る。なお、南東隅の貯蔵穴の平面形は円形で、径は
80cm、深さは 25cm である。貯蔵穴からは、土師
器甕 (687) が出土した他、須恵器杯 H 蓋 (686) が
出土した。周囲の遺構と比べて廃絶時期は古く、古
墳時代後期の可能性がある

S H 1607 (第 107 図) 第 12 次調査区の東側で検
出した堅穴建物である。一辺 3.6 m 四方、正方形
形状を呈する。壁周溝は、南辺と南西隅で確認され
た。主柱穴は 4 つ確認できた。カマドは東辺中央で確
認され、南東隅に貯蔵穴を伴う。カマド袖の基部は、
にぶい黄色砂質土である。カマド周辺の床面は硬
化しており、床面から土師器甕 (693・694) が、主
柱穴から須恵器杯 H 身 (689) が出土した。その他、
須恵器杯 H 蓋 (688)、高杯蓋 (691)、平瓶 (692)
などが出土した。なお、南東隅で S K 1609 と重複
するが、この堅穴建物の方が古い。

S H 1617 (第 107 図) 第 12 次調査区の中央東側
で検出した堅穴建物である。谷に近いので、土砂の
流出によって大幅に削平されており、壁周溝や主柱
穴の残りは悪い。規模は一辺 4.5 m 四方で、正方形
形状を呈している。主柱穴の位置は、他の堅穴建物と
比べると四隅に近い場所にある。カマドの痕跡と思
われる床面の焼土は西辺中央に見られ、カマドに向
かって右手の北西隅に貯蔵穴がある。概ね中央部分
の床面が、褐色のシルト質の細砂で、硬化している。
建物内北側に、1.3 m × 0.6 m、長方形の屋内土坑

と思われる遺構がある。

床面直上から須恵器提瓶 (701) が出土した他、
須恵器高杯 (698)、壺 (699)、横瓶 (700)、杯 H 身 (696・
697)、杯 H 蓋 (695)、土師器甕 (702・703) などが
出土した。

S H 1624 (第 108 図) 第 12 次調査区の中央東側
で検出した堅穴建物である。規模は 3.9 m × 3.6 m、
若干東西に長い長方形形状を呈する。一部に壁周溝が
残存しているが、遺構の上端から掘削されているの
ではなく、内側に巡るように確認された。建物のほ
ぼ中央付近、主柱穴 4 つの内側の床面は硬化してい
る。カマドは南東隅にあり、袖部の残存状態は良い。
また、支柱石が備え付けられた状態で検出できた点
が特筆される。カマドの袖は黄褐色土で、支柱石よ
り手前の床面が被熱している。貯蔵穴は確認できな
かった。

床面直上から、須恵器杯 H 蓋 (704・705)、杯 H 身
(706 ~ 710)、高杯蓋 (711)、高杯 (712)、壺瓶類 (713)、
土師器甕 (714 ~ 720)、把手 (721) などが出土して
いる。特に、須恵器杯 H 身 (707) は、底面に「×」
のヘラ記号と、朱書きが施されており注目に値する。

S H 1628 (第 108 図) 第 12 次調査区の中央東側
で検出した堅穴建物である。若干東西方向に長く、
一辺約 6 m と比較的大型で、長方形形状を呈する。床
面の中央が深く、二段に掘削されている。2 棟の堅
穴建物の重複か、壁際にテラス状を設けるような堅
穴建物かは、定かではない。主柱穴は 3 つ、カマド
は東辺のやや北寄りで確認された。にぶい黄褐色シ
ルト質土の基部が僅かに残存する。長辺 20cm の支
柱石が残存するものの、床面に被熱痕は見られない。
なお、カマドに向かって左手手前付近の床面は硬化
している。カマド付近で出土した土師器甕は、崩落
上の上面であるため、カマドの構造材ではないと考
えられる。

出土遺物には、須恵器甕 (722)、杯身片、土師器
片の他、弥生土器甕 (1602) などがある。

S H 1631 (第 109 図) 第 12 次調査区の中央東側
で検出した堅穴建物である。平面形は平行四辺形状
を呈する。主柱穴は 3 つしか検出できなかったが、
配置も平行四辺形状をする。北辺の中央にカマドが
あり、壁周溝はカマドを構築した後に掘られている。

床面の被熱は、カマド内部のほか、建物東半部に二箇所、建物北東隅に一箇所見られる。貯蔵穴は、カマドに向かって右手の土坑が相当すると考えられるが、建物南東隅にある土坑からも、土師器甕などの遺物が多く出土した。床面の硬化範囲は、建物西半に集中する。

北東隅の土坑から土師器甕(739)、南東隅の土坑から須恵器杯H身(724)、高杯(736)、土師器甕(741)などが出土した。また、床面直上から、須恵器杯H蓋(723)、杯H身(725～734)、高杯(735)、甕?(737)、土師器甕(738・740・742～745)、把手(746・747)、甕(748・749)などが出土した。

S H 1648 (第110・111図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。南東部の大半がS H 1649と、南辺部がS H 1662・S H 1678と重複する。S H 1649のカマドがS H 1648内に残っていたことから、S H 1648が埋没した後に、S H 1649が造られたことがわかる。S H 1648は一辺7.8m四方で、竪穴建物の中では大きい。北辺の中央にカマドが備え付けられており、床面が被熱している。カマド基部は褐色極細粒砂で、両袖がしっかりと残存する。カマドの支柱石は倒れた状態で出土した。支柱石は長さ30cm程で、他の住居と比べて大きな川原石を用いており、上面が平らになるよう加工してある。貯蔵穴はカマドに向かって右手にあり、建物の隅というよりはカマドに近接して設けられている。

出土遺物には、須恵器杯H身(750)、土師器甕(751)や甕(752)の他、弥生土器甕(1594・1599)、壺(1605)、高杯(1608)などがある。

S H 1649 (第110・111図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。規模は6.6m×6.0m、若干南北に長い、長方形を呈する。S H 1648と重複しており、この建物の方が新しい。北辺中央にカマドが備え付けられており、床面が被熱している。カマドの基部は黄褐色極細粒砂で、袖が僅かに残存する。カマドの支柱石は、地面に刺すため先端が尖っており、原位置に残る。1.5m×1.2mの楕円形をした貯蔵穴が、カマドに向かって右手、建物の北東隅にある。

建物内の南側中央のピットから、須恵器杯H身(754)が出土した他、須恵器杯H身(755・756)、杯

H蓋(753)、壺(757)、甕(758)、土師器把手(759・760)などが出土した。

S H 1650 (第112図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。規模は、4.8m×4.2mと南北に長い長方形を呈する。東辺の中央やや北寄りにカマドがあり、灰黄褐色粗砂混じりシルトの基部が残存する。カマドの支柱石が原位置で残っており、前面の床が被熱によって硬化している。貯蔵穴は、カマドの左右に2基確認され、北側の貯蔵穴はカマドから壁面まで大きく、南側の貯蔵穴は建物隅に小さく設けられている。なお、北辺中央の床面にも被熱痕が確認されており、もう一つカマドの存在が想定される。北側の貯蔵穴は、この北辺のカマドに伴うもの、南側の貯蔵穴は東辺に残存しているカマドに伴うもので、付替えられた可能性が考えられる。建物の全面に、にぶい黄褐色シルト質土の貼床が確認され、建物中央からカマド周辺が硬化していた。貼床の下にある2.3m×2.8mの楕円形の浅い土坑状の窪みは、貼床下土坑に相当する可能性が高い。また、建物の西辺には直径約1mの土坑2基がある。この建物に伴うものと思われるが、用途はわからない。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(761・762)、杯H身(763～765)、土師器高杯(766)、甕(767～770)、石匙(1584)、砥石(1586)などがある。

S H 1651 (第112図) 第12次調査区の中央、やや西側で検出した竪穴建物である。規模は6.0m×4.9m、長方形を呈する。床面の硬化は、4つの支柱穴と貯蔵穴を結んだラインの内側に見られた。支柱穴と貯蔵穴は小さく深い。建物のほぼ中央には、焼土の痕跡が見られた。

なお、遺構の北西から南西にかけて、別の遺構が重複しており、土層断面の観察からも2つの遺構が確認できる。おそらく深く掘削された弥生時代後期の竪穴建物の後、古墳時代の遺構は浅かったのであろう。出土遺物には、須恵器杯H蓋(771・772)、杯H身(773)、壺?(774)、土師器高杯(775)、把手(776)、弥生土器甕(1601)などがある。弥生時代後期の竪穴建物の可能性もある。

S H 1652 (第113図) 第12次調査区の北西隅で検出した竪穴建物で、一辺約4m四方とやや小型で

ある。東辺の中央南寄りに、盛土によって構築されたカマドがある。その基部はほとんど残っていないが、床面の被熱範囲から位置を推定できる。支柱石は、原位置で倒れた状態で出土した。貯蔵穴はカマドに向かって右手側の建物隅に設けられている。壁周溝は南東辺のみにみられた。

出土遺物には、須恵器杯H身(777・778)、土師器高杯(779)、把手(780)、甕(781)などがある。

S H 1659 (第114図) 第12次調査区の北西端、第13次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。遺構の東側3分の2程度が、第12次調査区に含まれる。規模は、5.1 m × 4.8 m、東西に長い長方形を呈する。遺構埋土には、焼土ブロックや炭片が多く混じる。カマドは北辺の中央東寄りに設けられ、そのカマドに向かって右手側に貯蔵穴がある。壁側にはカマドの基部が残存しており、ややオーバーハング気味に立ち上がる。カマド袖の位置は、床面の被熱範囲から推測できるが、支柱穴と近接している点の特筆される。支柱石は原位置で直立しており、上面は平らに加工している。

貯蔵穴の中から、須恵器杯H蓋(782)、杯H身(784)が出土した。その他には、須恵器杯H身(783・785)、甕(786)、土師器甕(787～790)が出土した。

S H 1660 (第115図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。S H 1689・S H 1690・S B 1691・S B 1697と重複する。S H 1660は、残りが悪く、西側の半分程度の残存である。カマドの位置は判らず、焼土面や貯蔵穴も見られない。竪穴建物3棟の中では、S H 1689が最も新しい建物で、カマドが良好に残存する。S H 1690の北辺中央の床面には、カマドの痕跡と思われる焼土面が見られるが、基部そのものは残っていない。これは、S H 1689を造る際に削平されたものと考えられるため、S H 1689はS H 1690より新しいことになる。ただし、埋土の堆積が不明瞭であるため、S H 1690とこのS H 1660の新旧関係を推測することは難しい。また、掘立柱建物2棟の柱列は、竪穴建物の上面で検出できたことから、S B 1691・S B 1697は竪穴建物3棟が埋没後に建ったことがわかる。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(792)、杯H身(793)、高杯蓋?(794)、土師器甕(795)の他、弥生土器

壺(1604)などがある。

S H 1662 (第110図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。規模は7.2 m × 6.3 m、南北に長い長方形を呈する。S H 1648・S H 1649・S H 1678と重複する。土層断面の観察から、S H 1649・S H 1678の埋没後に、S H 1662が造られたと考えられる。東辺中央の床面にある焼土は、カマドの痕跡と考えられるが、基部や支柱石は残っていない。カマドの左右には、貯蔵穴の可能性のある土坑がある。

カマドの左手で北側の土坑から須恵器杯H蓋(796)、土師器高杯(804)が、カマドの右手で南側の土坑から須恵器壺(799)、杯H身(798)、土師器甕(801・802)が出土した。他に須恵器杯H身(797)、土師器甕(800)などが出土した。

S H 1663 (第113図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。遺構の西側3分の1程度は、後世の攪乱溝によって削平を受けるが、一辺4.8m四方の正方形となろうか。カマドは北辺中央のやや東寄りに備え付けられていたと考えられるが、床面の被熱痕や崩落土は確認できなかった。カマドに向かって右手側の建物隅に貯蔵穴がある。

出土遺物には、須恵器杯H身(805)、土師器甕(806)、移動式竈?(807)がある。

S H 1664 (第116図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。規模は5.1 m × 4.8 mで、若干南北に長い長方形を呈する。壁周溝は北辺、西辺で検出したが、遺構上端ラインより内側であり、断面観察ではテラス状になる部分が確認できる。カマドは東辺中央にあり、床面に焼土が確認できる。カマド基部は黄褐色粗砂混じりシルトである。支柱石は原位置で転倒しており、石自体にも被熱痕が見てとれる。貯蔵穴の位置は、カマドに向かって右手側の建物隅である。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(808～810)、杯H身(811～814)、隼?(815)、壺(816)、土師器甕(817)、縄文土器深鉢(1570)がある。

S H 1672 (第116図) 第12次調査区の西側で検出した竪穴建物である。規模は4.8 m × 4.2 m、若干東西に長い長方形を呈している。カマドの位置は短辺側の西側にある点が、特徴的である。カマド

の南側袖は地山を削り出して残しており、北側袖も僅かに地山を山状に残した後、にぶい黄褐色シルト質土でカマド基部を盛り上げている。支柱石は原位置に立ち、石の平坦面を建物内に見せるように配置されている。支柱石は川原石のようで、小ぶりで丸みを帯びており、加工はしていない。支柱石の下には深さ5cm、径10cm程度の穴が確認され、これは石を支えるためのものと考えられる。なお、カマドの右側隅で通例検出される貯蔵穴は、はっきりとはしない。

出土遺物には、土師器甕(818)、把手(819)がある。

S H 1674 (第117図) 第12調査区の西端、第13次調査区にまたがって検出した堅穴建物である。遺構の東側の一部は第12次調査区で、大半は第13次調査区に含まれる。一辺約8m四方、正形状を呈する大型のものである。北辺の中央に焼土痕跡があり、カマドの存在が想定される。貯蔵穴は、東辺の中央やや北寄り、もしくは、南辺東寄りにある土坑のいずれかであろうか。

南辺の土坑からは、土師器高杯(830)が出土した他、須恵器杯H蓋(820・821)、杯H身(822～825)、高杯蓋(826)、高杯(827)、壺(828)、甑把手(829)、土師器甕(831～833)、甑(834)、把手(835・836)、土錘(837～840)、石製紡錘車(841)、縄文土器片、石鏃(1583)などがある。これらの遺物には、6世紀代のものがある。

S H 1675 (第118・119図) 第12次調査区の南西部で検出した堅穴建物である。規模は一辺6m四方で、正形状を呈する。南東部分でS H 1676やS H 1694と重複する。新旧の関係は、S H 1694→S H 1676→S H 1675で、南東から北西に向かって建て替えを行っており、3棟の中で最も時期が新しい。壁周溝は北西辺と南西辺などで検出され、壁柱穴も若干確認できる。カマドの位置は、北東辺の中央で、カマドに向かって右手側の建物隅に貯蔵穴がある。支柱石は細長い川原石で、上面は平坦になるよう加工しており、床面で直立する。カマドの基部は黄褐色砂質土である。また、建物のほぼ中央で検出した直径約1mで、深さ約10cmの土坑は、貼床下土坑の可能性もある。

貯蔵穴から、須恵器壺(852)、土師器甕(857)、台付椀(858)が出土した。その他、須恵器杯H身(843～850)、高杯(851)、鉢?(853・854)、甕(855)、土師器甕(856)、砥石?(859)が出土した。

S H 1676 (第118・119図) 第12次調査区の南西隅で検出した堅穴建物である。一辺4.8m四方の正方形である。重複するS H 1675より古い。カマドの位置は南東辺の中央やや北寄りで、カマドに向かって右手側の建物隅に貯蔵穴がある。カマドの基部はにぶい赤褐色土で、カマドの内側は被熱で硬化する。支柱石は原位置に直立し、周囲に焼土面が広がる。支柱石は川原石で、四角柱状の石の上下両端が平坦になるよう加工している。

貯蔵穴からは、須恵器杯H身(861・862)、土師器甕(865)が出土した。他には、須恵器杯H蓋(860)、土師器甕(863・864・866・867)がある。

S H 1678 (第110図) 第12次調査区の西側で検出した堅穴建物である。東側の大半がS H 1662と重複し、新旧の関係はS H 1678の方が古い。一辺約6.5mの方形であること、また、西辺の中央やや南寄りに焼土が残存し、カマドの存在が想定されることから、堅穴建物と判断したが、S H 1662に付属する施設である可能性もある。なお、壁周溝や支柱穴は確認されなかった。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器片がある。

S H 1680 (第120図) 第12次調査区の南西隅、第13次調査区にまたがって検出した堅穴建物である。概ね半分ずつの確認で、第12次調査では土坑と認識していたが、第13次調査の結果、一辺約5.2m四方の堅穴建物と判断した。S H 1688・S H 1846と重複しているが、新旧の関係は、S H 1680が一番古い。なお、支柱穴やカマド、貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物には、須恵器杯H身(868)、土師器甕(869)がある。

S H 1681 (第121図) 第12次調査区の西側で検出した堅穴建物である。東側部分で、S H 1682と重複している。全体的に削平を受けているため、2棟の前後関係は判然としないが、土層断面から、S H 1681の方が新しいと思われる。カマド、貯蔵穴の位置ははっきりしない。壁面も不明瞭で、西壁が支柱穴と近接しすぎるため、建物の範囲はもう少し

し西側に広がる可能性がある。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器甕(870)がある。
S H 1682 (第 121 図) 第 12 次調査区の西側で検出した竪穴建物である。一辺 4.8 m 四方の正方形である。南西側の辺の中央にカマドが備え付けられる。カマド内面の床面は被熱しており、にぶい黄褐色シルトのカマド基部が残存する。支柱石は被熱によって一部変色しているが、大きな川原石を半分に分けて四角錘状にしたものを使用しており、尖らせた先端を床面に刺し、上面は平坦になるよう加工してある。カマドに向かって左手側に貯蔵穴がある。

貯蔵穴の埋土は黒褐色シルトで、須恵器杯 H 身(871)の他、美濃地域の土師器甕(872～876・878・880～886)、長胴甕(877・879)、鍋(887)が出土した。また、建物内の北辺内側に建物に並行する浅い溝があるが、性格は不明である。

S H 1684 (第 119 図) 第 12 次調査区の南西部で検出した竪穴建物である。一辺約 4 m 四方で、若干東西方向に細長い。壁周溝が、北西辺から南西辺にかけて残存しており、壁柱穴の可能性のある小穴も確認できる。支柱穴は 4 つ検出した。北東辺の中央にカマドが構築され、カマドに向かって右手側の建物隅に貯蔵穴がある。カマドは、灰黄褐色粗砂混じりシルトの基部が残り、内面と床面が被熱する。なお、この遺構外の北東部に、この竪穴建物よりも新旧関係の古い遺構があるが、竪穴建物かどうかは不明である。

貯蔵穴から土師器甕(899・901)が出土した。その他、須恵器杯 H 蓋(888・889)、杯 H 身(890～893)、鉢?(894)、甕(895～897)、土師器甕(898・900)、把手(902)、不明土製品(903)が出土した。

S H 1685 (第 122 図) 第 12 次調査区の南西隅、第 9 次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。大半は第 12 次調査区に含まれる。上部はほぼ削平されており、残存状況が悪い。平面的には北東部分のみの検出であるが、支柱穴は 4 つ確認できた。4 つの支柱穴を結ぶと、平行四辺形状を呈する。焼土は床面中央付近に二箇所認められるが、カマドの痕跡は見られなかった。貯蔵穴が建物の隅に設けられる平面プランである。

出土遺物には、須恵器杯(904)、杯 H 身(905)、

甕(906・907)の他、土師器甕片がある。

S H 1688 (第 120 図) 第 12 次調査区南西隅、第 13 次調査区にまたがって検出した竪穴建物である。S H 1680 と重複し、新旧関係は S H 1680 より新しい。なお、床面下から S H 1846 を検出したが、竪穴建物か貼床下土坑かは、はっきりしない。支柱穴は第 13 次調査区内で 2 つは確認できた。東辺のほぼ中央に、残存状況の悪いカマドの痕跡がある。四角柱状の川原石である支柱石は、原位置で直立した状態で検出できた。カマドに向かって右手側に貯蔵穴があり、須恵器杯 H 蓋(908)、甕(916)、土師器甕(921・922)が出土した。その他、須恵器杯 H 蓋(909)、杯身(910・912～915)、杯 H 身(911)、甕(916・917)、甑(918)、土師器碗(919)、甕(920・923～927)、台付甕(928)、把手(929)、土錘(930・931)、砥石(932～934)、弥生土器甕(1596)が出土した。

S H 1689 (第 115 図) 第 12 次調査区の西側で検出した竪穴建物である。S H 1660・S H 1690・S B 1691・S B 1697 と重複するが、その新旧関係は、S H 1660 の項を参照されたい。竪穴建物の 3 棟の中で最も残りが良い。北辺中央にカマドが構築され、カマドに向かって右手側に貯蔵穴をもつ。カマド中央には支柱石が直立している。支柱石は、元々四角錘状で、地面に刺しやすいよう一端が尖っているものを選んでおり、上面のみ平らに加工してある。カマドの基部はにぶい黄褐色砂質土で、土器片を少量含んでいる。なお、支柱穴と考えられる柱穴の並びは悪い。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋(935)や土師器甕(936・937)がある。

S H 1690 (第 115 図) 第 12 次調査区の西側で検出した竪穴建物である。S H 1660・S H 1689・S B 1691・S B 1697 と重複する。北辺中央の床面に焼土面が見られることから、おそらく北側にカマドが存在していたと推測される。カマドに向かって右手側に貯蔵穴がある。なお、重複する S H 1660 と S H 1689、S H 1690 の 3 棟の竪穴建物の平面形は、支柱穴の位置関係から判断すると、いずれも若干南北方向に長く、長方形を呈するものと思われる。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋(938)、土師器甕

(939・940)、砥石 (941) などがある。

S H 1694・S H 1696 (第 122 図) 第 12 次調査区の南西部で検出した竪穴建物である。S H 1696 は、S H 1694 を北東方向に拡張するように増築されている。カマドの焼土面・支柱穴・貯蔵穴はそれぞれ 2 棟に対応する数が見てとれる。北東辺の中央に設けられたカマドは、基部は削平されるが、S H 1696 の支柱石は残存する。支柱石は三角柱状の細長い石を地山に突き刺すように直立させており、加工痕は見られない。貯蔵穴は、カマドに向かって右手の建物隅に設けられている。

出土遺物には、須恵器甕片、杯身、杯蓋、土師器甕片がある。

S H 1805 (第 123 図) 第 13 次調査区の北東部で検出した竪穴建物である。壁周溝の南西部分しか検出できなかったが、支柱穴を 4 つ確認できた。規模は、一辺約 4.5 m 四方に復元できそうである。貯蔵穴と思われる土坑が 2 基、北東隅と南東隅で検出されたが、カマドは不明である。

北東隅の土坑から須恵器杯 H 身 (960・962・963)、南東隅の土坑から須恵器杯 H 蓋 (959)、須恵器杯 H 身 (961)、土師器甕・壺? (964・965) が出土した。

S H 1808 (第 124 図) 第 13 次調査区の北東部で検出した竪穴建物である。形状は、一辺 5.1 m 四方の正方形を呈する。支柱穴は 4 つ確認できた。北西辺の中央に焼土があり、カマドの存在が想定される。被熱痕跡より壁際で、長さ約 20cm の支柱石が直立した状態で確認された。北東辺の中央やや南に、土坑があり、貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (966)、土師器甕 (967～972)、把手 (973) などがある。

S H 1813 (第 125 図) 第 13 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。一辺約 6 m 四方だが、若干東西に長い形状である。壁周溝ははっきりしないが、壁柱穴の痕跡が西辺、南辺の一部に見受けられる。支柱穴は 4 つ確認できた。カマドは東辺の中央やや南寄りに構築され、両袖部分も残存する。カマドのほぼ中央には、長さ約 20cm の支柱石が若干手前に傾くが、直立状態で検出された。貯蔵穴はカマドの右側隅にある。中央北西部には遺物が多く含まれる土坑があり、須恵器杯 H 身 (985)、甕 (993) の他、

砥石 (1010) が出土した。また、カマドから土師器甕 (1005)、鍋 (1006) が出土した。その他、須恵器杯 H 蓋 (974～982)、杯 H 身 (983・984・986～990)、隼 (991・992)、土師器鉢 (994)、甕 (995～1003)、把手 (1004)、鍋 (1007)、砥石 (1008・1009)、縄文土器深鉢 (1573・1574) が出土した。

S H 1814 (第 126 図) 第 13 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。一辺 5.1 m 四方で、平面形はやや菱形を呈する。壁周溝は南西部、南東部以外は確認でき、壁柱穴の痕跡も一部にみられる。支柱穴は 4 つ、カマドは南西辺の中央やや南寄りで確認できた。袖部分など残存状況は良い。また、カマド左側隅には、貯蔵穴がある。

カマド周辺から、須恵器杯 H 身 (1013)、土師器甕 (1020・1024) が出土した。貯蔵穴から、須恵器杯 H 身 (1014)、甕 (1016)、土師器椀 (1017)、甕 (1019・1021・1023・1025～1028)、把手 (1031) が出土した。その他、須恵器杯 H 身 (1011・1012)、横瓶 (1015)、土師器甕 (1018・1022)、甕 (1029)、把手 (1030・1032)、砥石 (1033・1034) が出土した。

S H 1818 (第 126 図) 第 13 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。一辺 7.2 m × 6.0 m の長方形を呈する。支柱穴は 4 つ確認した。カマドは北西辺の中央に構築されるが、残存状況はあまり良くない。カマド中央に長さ 20cm 程度の支柱石が直立して検出された。貯蔵穴は、南東辺の中央やや北寄りで検出され、須恵器杯 H 身 (1043・1046)、土師器甕 (1064・1065) が、カマド周辺から須恵器杯 H 身 (1047)、土師器甕 (1061) が出土した。その他、須恵器杯 H 蓋 (1035～1040)、杯 H 身 (1041・1042・1044・1045・1048～1052)、壺 (1053・1054)、横瓶 (1055)、土師器椀 (1056)、高杯 (1057)、甕 (1058～1060・1062・1063・1066)、砥石 (1067)、弥生土器壺 (1607) が出土した。

S H 1820 (第 127 図) 第 13 次調査区の東側で検出した竪穴建物である。規模は、一辺約 4.5 m 四方で、若干東西に長い長方形を呈する。南東部には貼床の痕跡が見られ、支柱穴は 4 つ確認した。南辺の中央やや東寄りに焼土痕跡があり、カマドが存在していたものと思われる。煙出し穴の一部が残存しており、焼土との間では土師器甕 (1076) が横倒しの状

態で見つかった。また、南東隅には貯蔵穴があり、土師器甕(1074)が出土した。また、その北東にある土坑からは、須恵器杯H蓋(1068)、杯H身(1069)、砥石(1079)が出土した。その他、須恵器杯H身(1070・1071)、高杯?(1072)、甕(1073)、土師器甕(1075)、台石(1077)、砥石(1078・1080)が出土した。

S H 1821 (第123図) 第13次調査区の中央東側で検出した竪穴建物である。規模は一辺4.5m×3.9mで、長方形を呈する。主柱穴を4つ確認し、中央には焼土痕跡がある。貯蔵穴は、南隅に設けられる。

出土遺物には、土師器甕片がある。古代の遺構としたが、はっきりしない。

S H 1831 (第128図) 第13次調査区の東側で検出した竪穴建物である。全体的に大きく削平を受け、南西側はS H 1832と、北東側は風倒木と重複しており、残存状況は悪く、北西隅が若干分かる程度である。主柱穴は4つ確認した。また、南辺の中央やや東寄りに焼土痕跡と、その左側に貯蔵穴を検出した。それらの位置関係から、規模は4.35m×4.2m位に推定できる。

貯蔵穴から、須恵器甕片、杯H身(1081)、土師器甕(1082)、把手(1083)が出土した。

S H 1832 (第128図) 第13次調査区の東側で検出した、一辺8mを超える大型の竪穴建物である。主柱穴の並ぶ方向と遺構全体の方向に、若干ズレがある。全体的に削平を受けており、南西部分は隅が分かる程度である。壁周溝は北辺の東側半分しか確認できない。主柱穴は4つ確認した。また、北辺の中央やや西寄りで、焼土とカマド袖部の痕跡を確認した。なお、カマドの左右両側に近接して、径50cm程度の土坑3基、また、南辺の東にも土坑がある。いずれの土坑が貯蔵穴かは不明である。

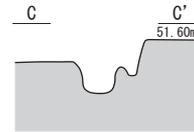
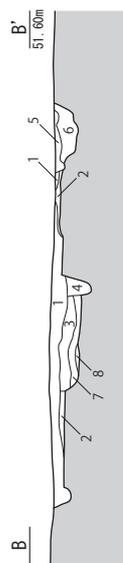
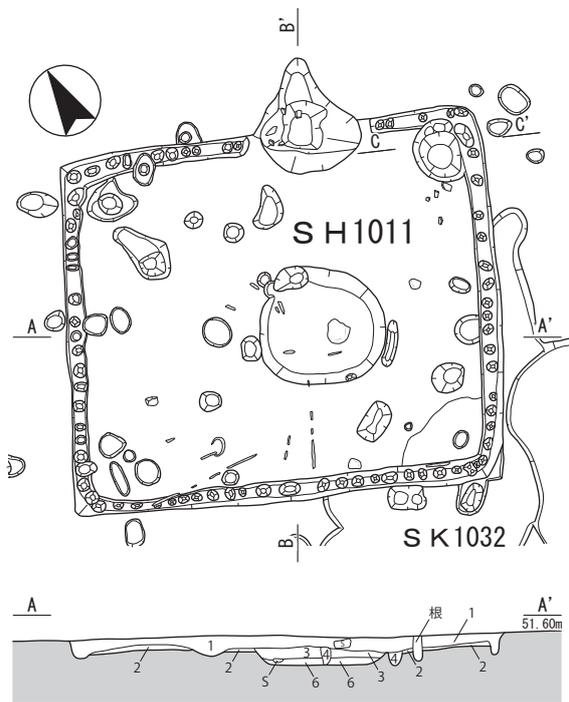
出土遺物には、須恵器杯H蓋(1084～1086)、杯H身(1087)、壺(1088)の他、土師器甕(1089・1090)がある。

S H 1834 (第129図) 第13次調査区の中央で検出した竪穴建物である。規模は一辺7.5m×7.2m、若干南北に長い長方形を呈する。主柱穴は4つ確認した。また、北西辺の中央にはカマドが設けられる。壁周溝ははっきりしないが、一部で壁柱穴が

見られる。なお、カマド右側のS K 1837は、カマドより新しく6世紀半ばの須恵器杯H身(1535)が出土している。また、南東辺中央のやや北側にはS K 1839があり、貯蔵穴の可能性もある。この貯蔵穴からは、土師器甕(1104・1105・1107)、把手(1111)が出土した。その他、須恵器杯H蓋(1091～1095)、杯H身(1096)、杯H(1097)、高杯(1098)、土師器甕(1099～1103・1106・1108・1109)、把手(1110)などがあり、カマドの左側に近接した場所で、特に多く見られる。なお、床面直上に、5世紀後半から6世紀前半の遺物が含まれる。

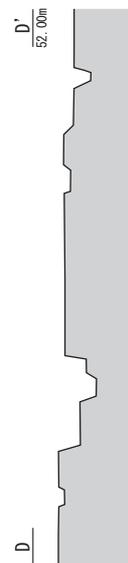
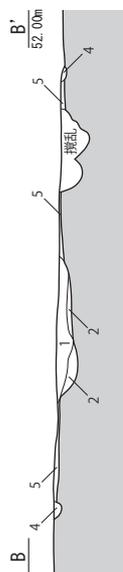
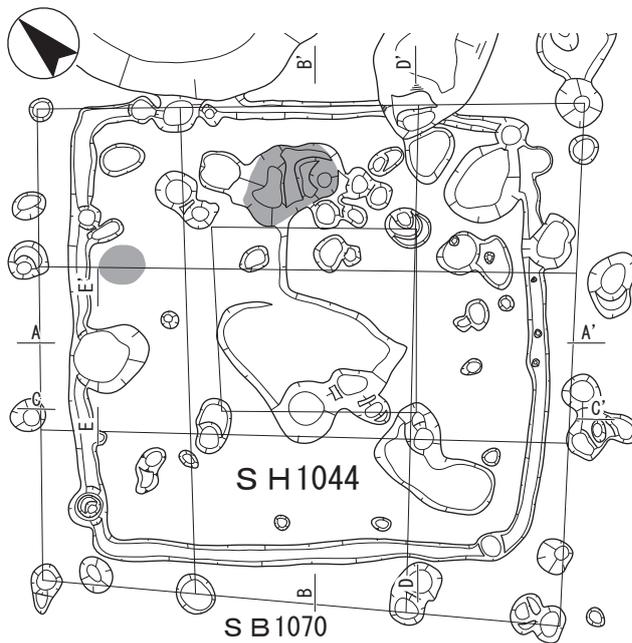
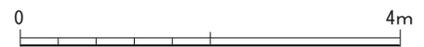
S H 1846 (第120図) 第13次調査区の東端で検出した竪穴建物である。第12次調査区では確認できなかったが、第13次調査でS H 1688の床面下で検出した。S H 1688の床下土坑の可能性もある。

出土遺物には、土師器甕片がある。



【SH1011】

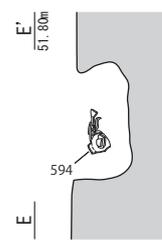
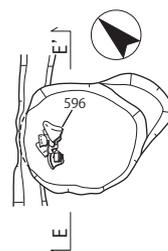
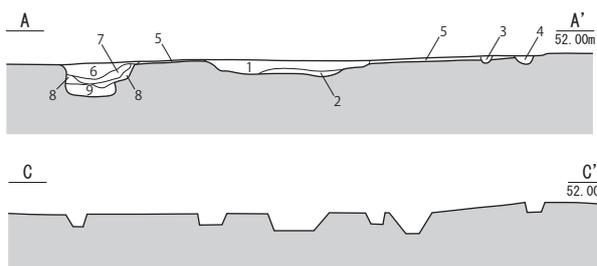
- 1 暗褐色土 (炭化材含)
- 2 暗褐色土 (黄褐色ブロック 50%含)
- 3 暗褐色粘質土 (黄褐色土粒含・炭含)
- 4 暗褐色土 (黄褐色土粒少量含)
- 5 暗褐色土 (炭化物含)
- 6 暗褐色土 (土器・焼土多含)
- 7 黒褐色土 (黄色土含)
- 8 黒黄褐色粘質土



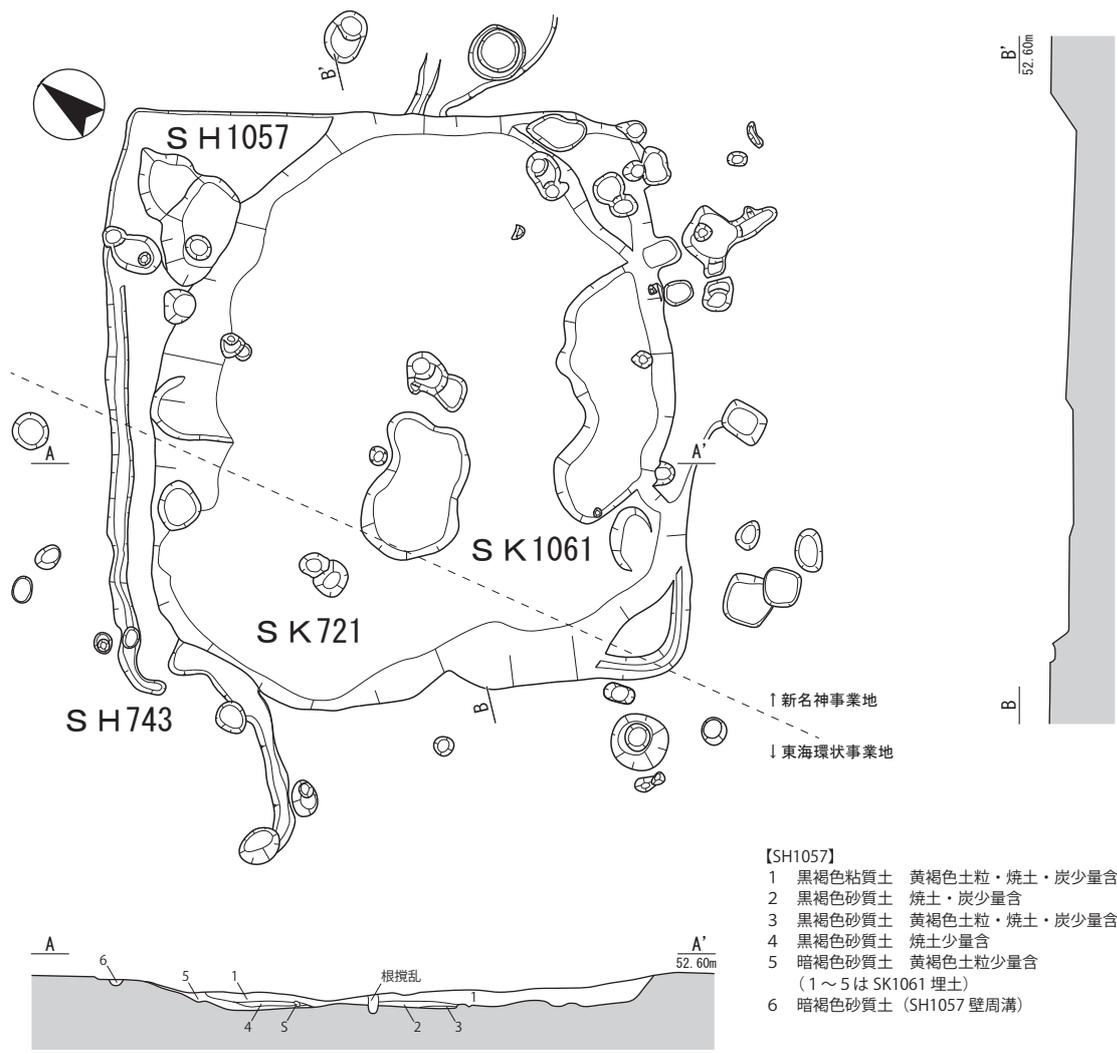
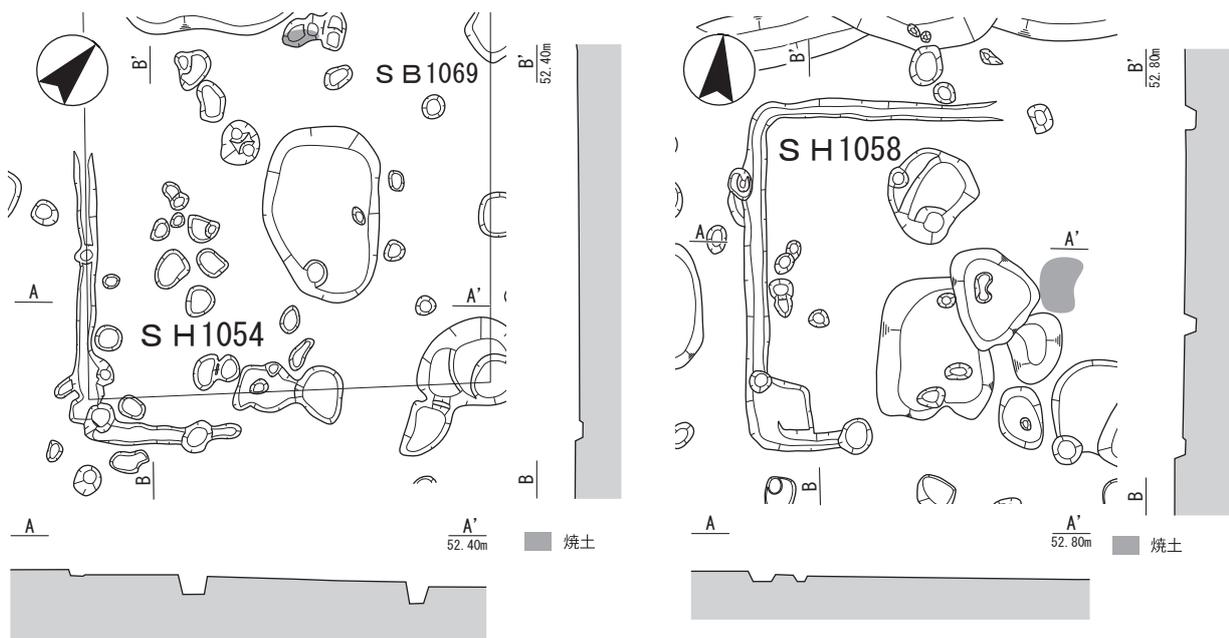
【SH1044】

- 1 暗褐色粘質土 (炭・焼土含)
- 2 暗黄褐色粘質土 (炭・焼土含)
- 3 暗褐色砂質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗黄褐色粘砂土
- 6 黒色粘質土 (炭・焼土含)
- 7 にぶい赤褐色粘質土 (焼土多含)
- 8 黒褐色粘質土 (黄褐色粘質ブロック含)
- 9 褐灰色粘質土 (焼土・炭少量含)

■ 焼土



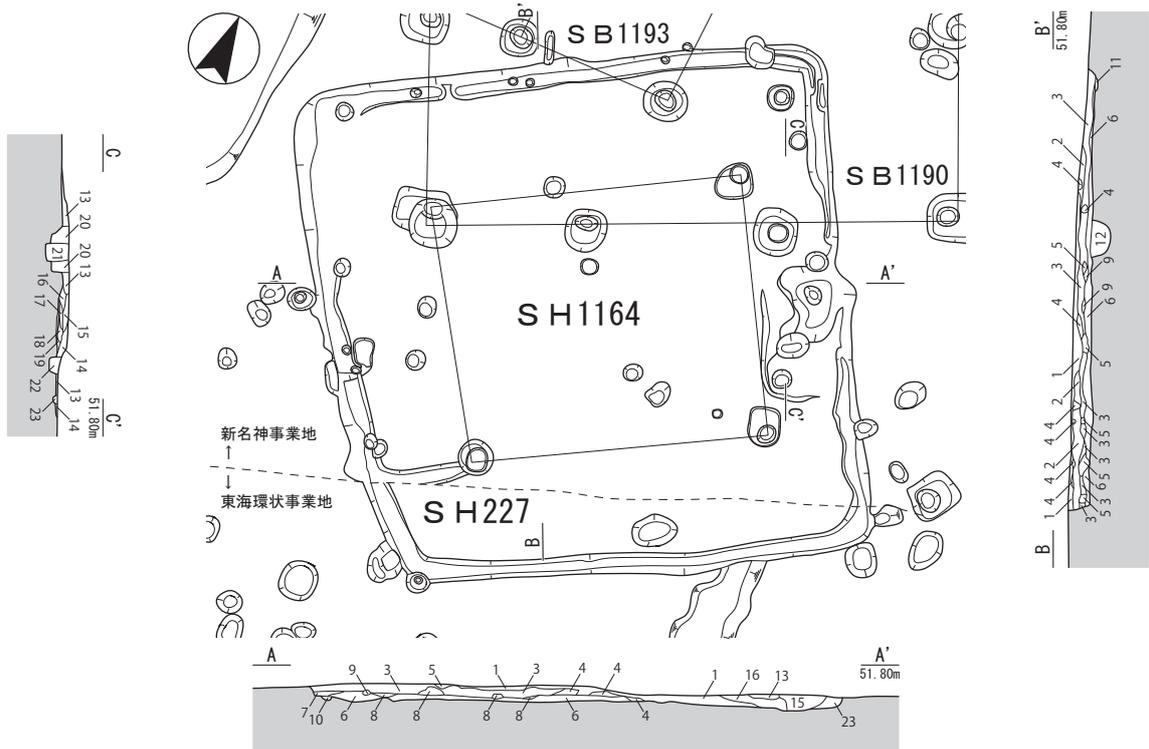
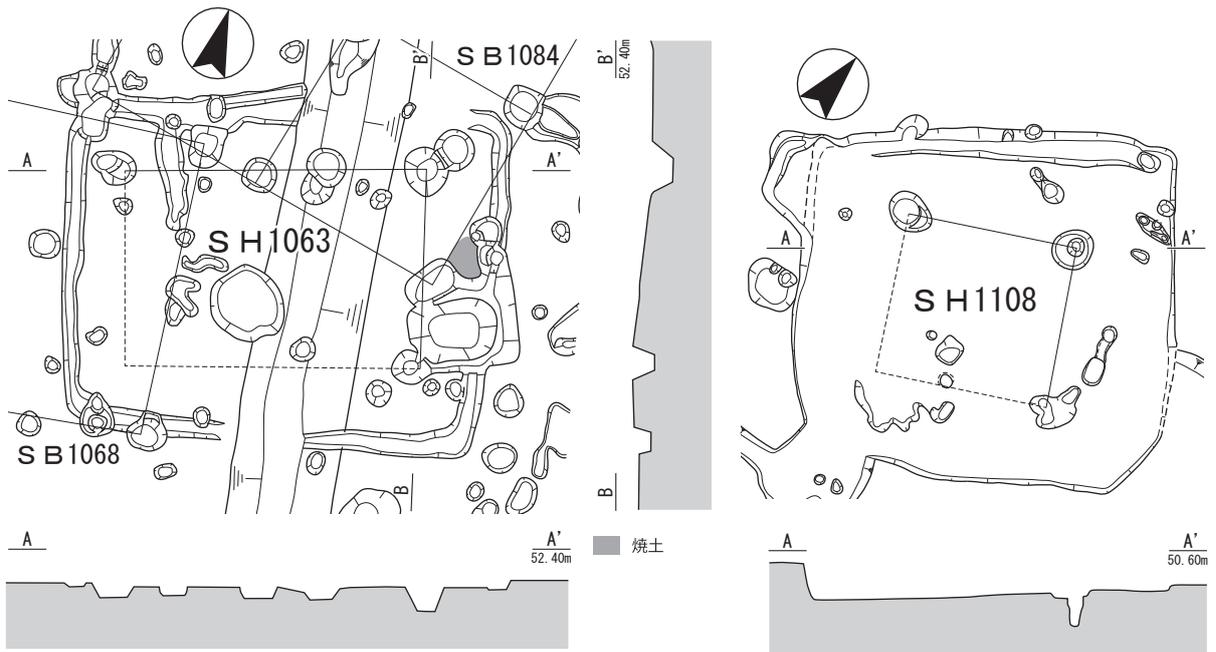
第 92 図 SH 1011・1044・貯蔵穴実測図 (1 : 40・1 : 80)



- 【SH1057】
- 1 黒褐色粘質土 黄褐色土粒・焼土・炭少量含
 - 2 黒褐色砂質土 焼土・炭少量含
 - 3 黒褐色砂質土 黄褐色土粒・焼土・炭少量含
 - 4 黒褐色砂質土 焼土少量含
 - 5 暗褐色砂質土 黄褐色土粒少量含
(1～5はSK1061埋土)
 - 6 暗褐色砂質土 (SH1057壁周溝)



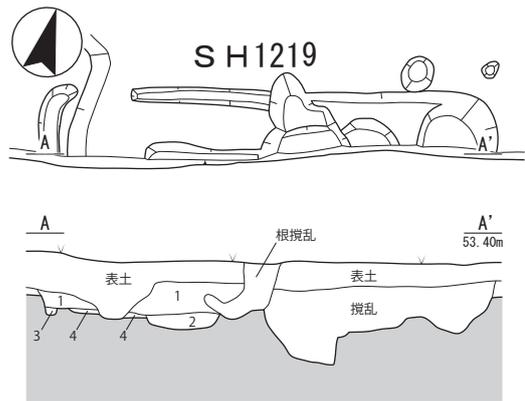
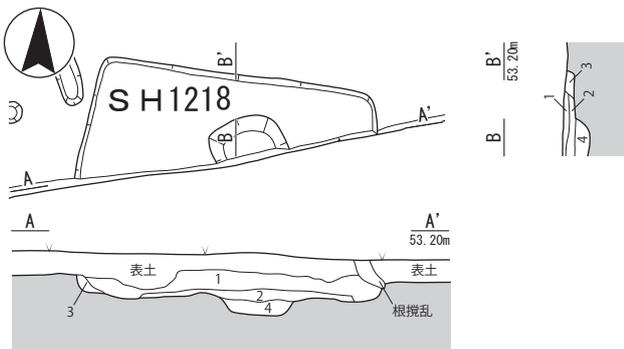
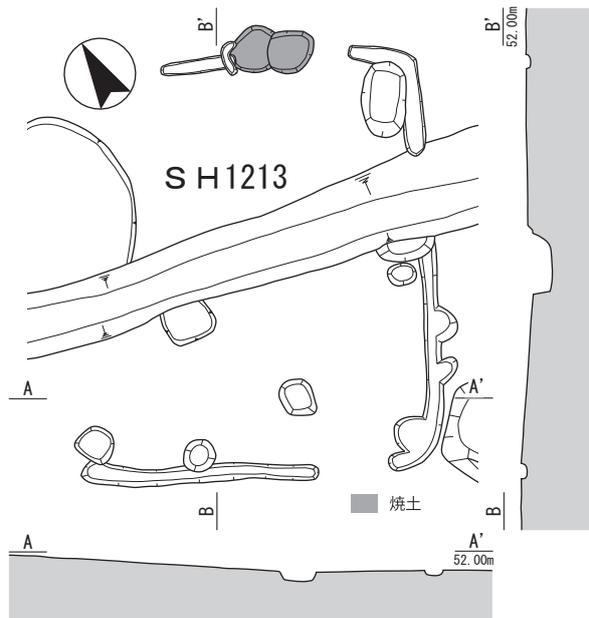
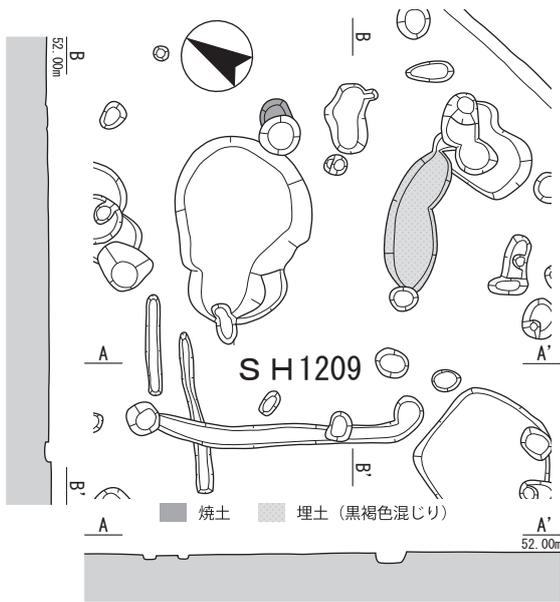
第93図 SH1054・1057・1058実測図(1:80)



[SH1164]

- | | | | | | |
|----|---------|--|----|---------|--------------------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 (焼土微量含・φ 1~2mm白色小礫多含) | 13 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (焼土・明黄褐色土斑状含) |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粘質土・φ 1~3mm白色小礫少量含) | 14 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (焼土斑状含) |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色粘質土 (焼土若干含・炭化物微量含) | 15 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (2.5YR6/8 橙色焼土ブロック多量含) |
| 4 | 10YR6/6 | 明黄褐色粘質土 (10YR3/2 黒褐色粘質土・φ 1~3mm白色小礫多量含) | 16 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (焼土ブロック・炭化物含) |
| 5 | 10YR6/6 | 明黄褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含) | 17 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (焼土ブロック含) |
| 6 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粘質土・φ 1~2mm白色小礫少量含) | 18 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (焼土斑状多含) |
| 7 | 10YR2/2 | 黒褐色粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粘質土微量含) | 19 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (焼土少量含) |
| 8 | 2.5Y3/2 | 黒褐色粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粘質土微量含) | 20 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 (明黄褐色土斑状多含) |
| 9 | 10YR2/1 | 黒色粘質土 (焼土微量含) | 21 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 (明黄褐色土少量含) |
| 10 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 (焼土微量含・10YR6/6 明黄褐色粘質土少量含) | 22 | 10YR4/1 | 褐灰色粘質土 (φ 1~3mm白色小礫少量含) |
| 11 | 10YR4/1 | 褐灰褐色粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粘質土とφ 1~3mm白色小礫少量含) (壁周溝) | 23 | 10YR4/1 | 褐灰色粘質土 |
| 12 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粘質土・炭化物・φ 1~4cm礫含) | | | |

第 94 図 SH 1063・1108・1164 実測図 (1 : 80)

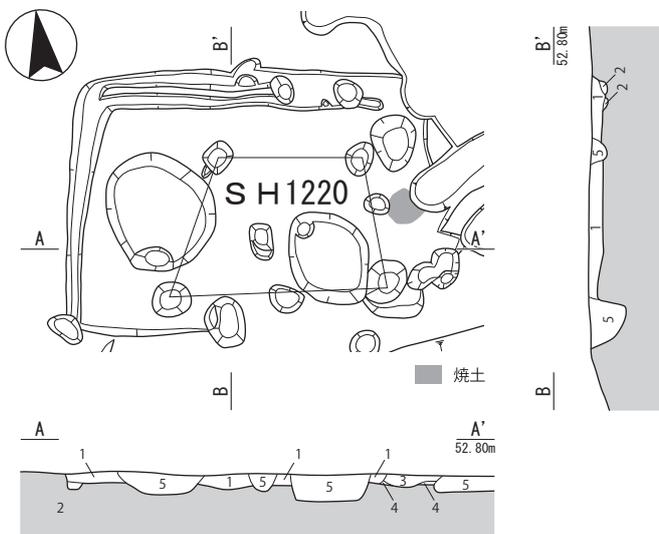


【SH1218】

- 1 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 (黄褐色土粒少量含)
- 2 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色土粒・ブロック含・焼土・炭化物少量含)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 (黄褐色土粒・ブロック少量含)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック多量含・φ 5 ~ 20 mm焼土ブロック含)

【SH1219】

- 1 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色土粒微量含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック多量含)
- 3 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック含)
- 4 7.5YR4/3 褐色粘質土 (黒色ブロック・黄褐色ブロック含)

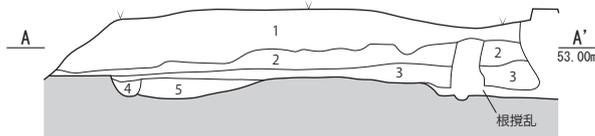
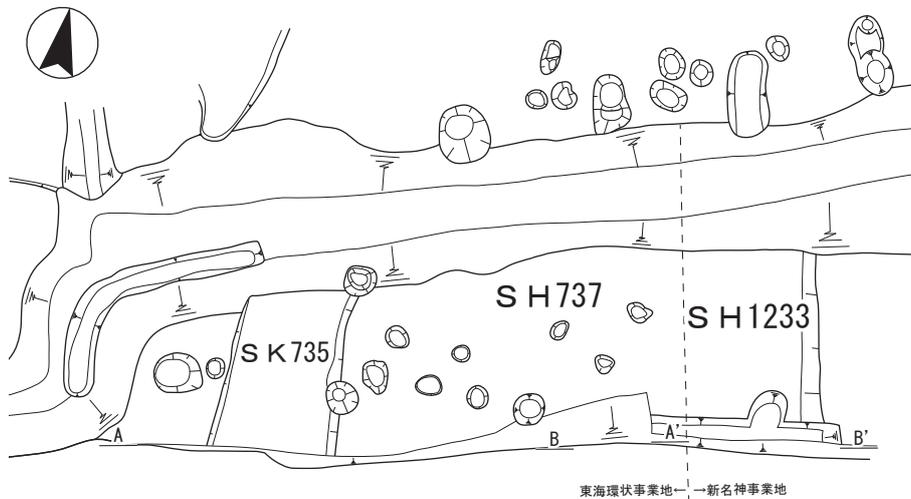
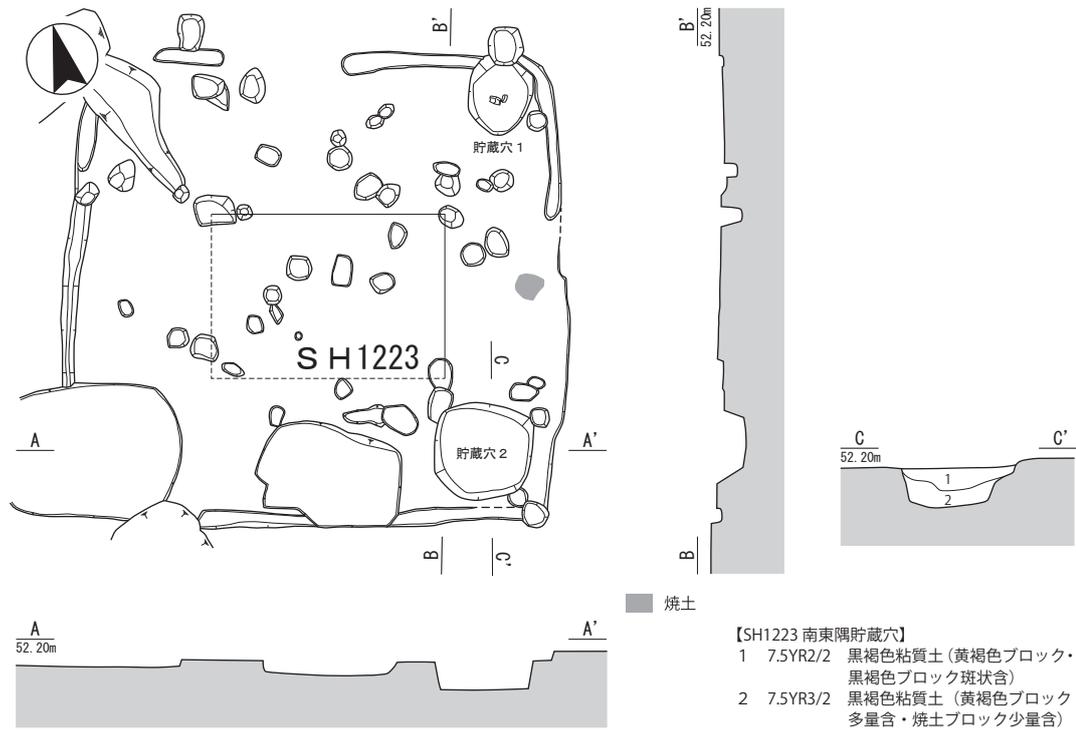


【SH1220】

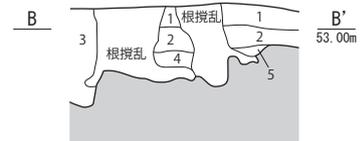
- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 (黄褐色土粒含・黄褐色ブロック少量含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック多量含)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (焼土ブロック多量含・黄褐色ブロック含)
- 4 黄褐色粘質土 (黒褐色ブロック含)
- 5 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック少量含)



第95図 SH 1209・1213・1218・1219・1220 実測図 (1 : 80)



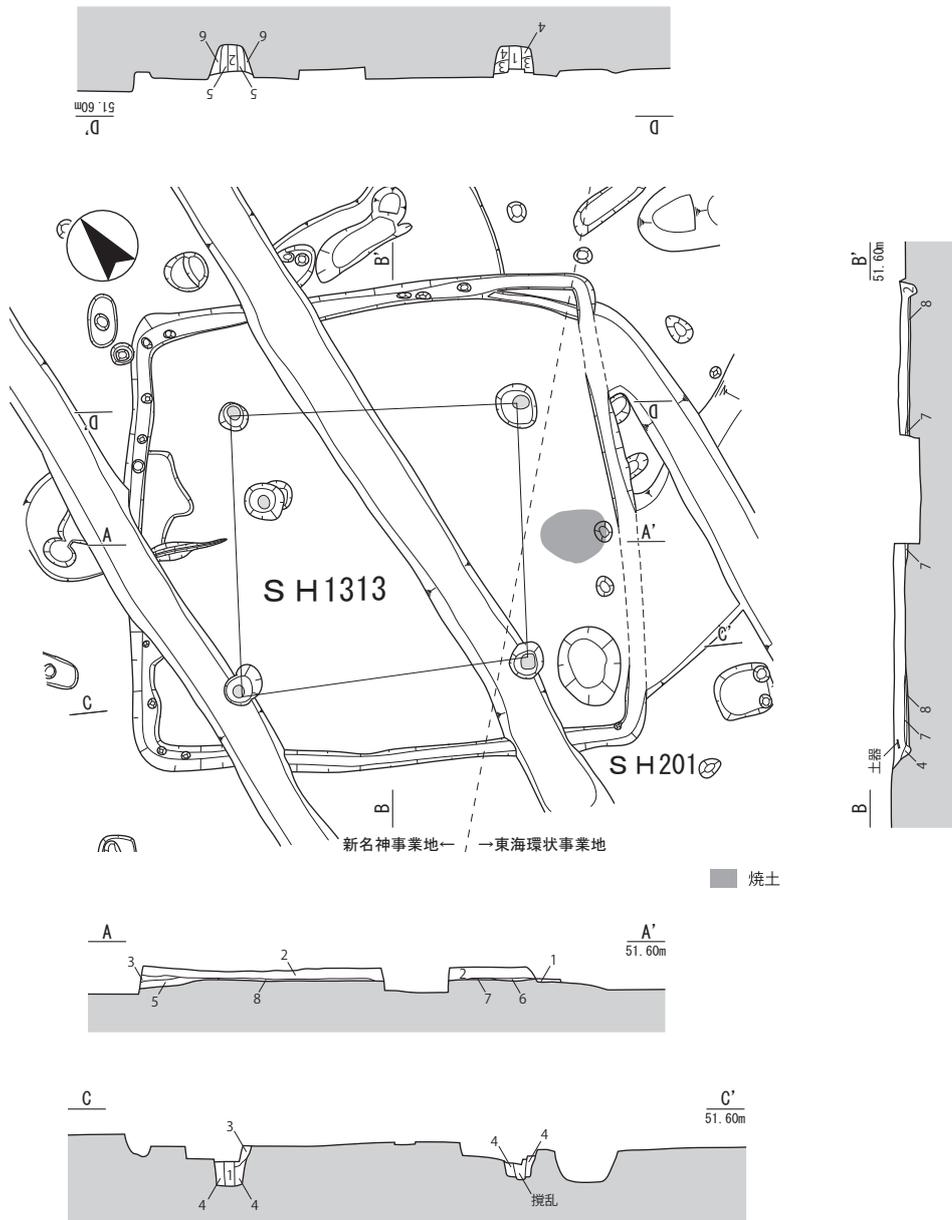
- 【SH737】
- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 (表土)
 - 2 2.5Y2/1 黒色シルト (旧表土)
 - 3 10YR2/3 黒色シルト (SH737 埋土)
 - 4 10YR3/3 暗褐色シルト (周壁溝の可能性あり)
 - 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック混じる (SK735)



- 【SH1233】
- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
 - 2 2.5Y2/1 黒色シルト
 - 3 10YR2/2 黒褐色シルト (黄褐色土粒・ブロック含)
 - 4 10YR2/1 黒色シルト
 - 5 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色土粒・焼土小ブロック少量含)



第 96 図 SH 1223・貯蔵穴・1233 実測図 (1 : 80)



【SH1313 A-A'・B-B'】

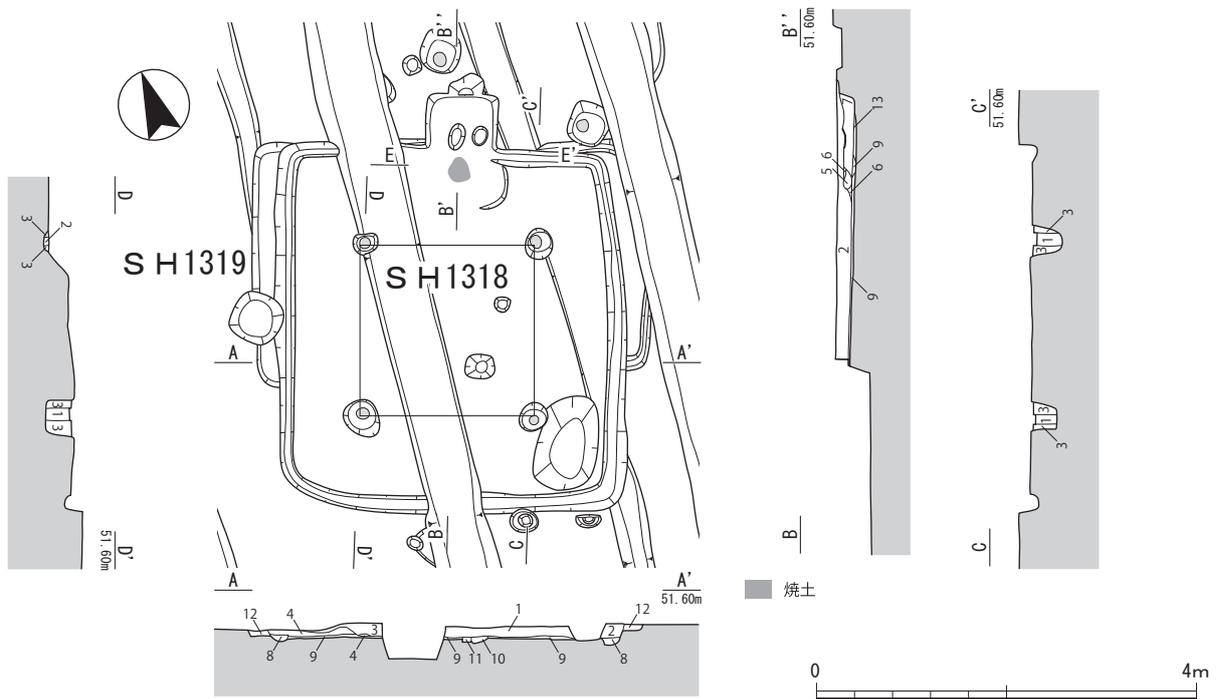
- 1 昨年度調査埋戻し土
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・φ 2~5 cm礫含・焼土少量含)
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト含極細砂 (細礫・黄褐色シルト小ブロック少量含)
- 4 10YR3/3~4 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック多含)
- 5 10YR4/4 褐色シルト多く含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック多含)
- 6 10YR2~3/3 黒褐色シルト含極細砂 (細礫少量含)
- 7 8.75YR5/6 明褐色中砂~粗砂多含シルト・10YR2/3 黒褐色シルト含極細砂混土層 (細礫多含)
- 8 10YR4/4 褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・黒褐色極細砂小ブロック多含)

【SH1313 主柱穴 C-C'・D-D'】

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック含)
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (7.5YR5/6 明褐色極細砂含シルト含)
- 3 7.5YR4/4 褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック・暗褐色極細砂小ブロック含)
- 4 7.5YR4/4 褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック多含・暗褐色極細砂小ブロック少量含)
- 5 7.5YR3/2~3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック含)
- 6 7.5YR4/6 明褐色細砂シルト



第 97 図 SH 1313 実測図 (1 : 80)



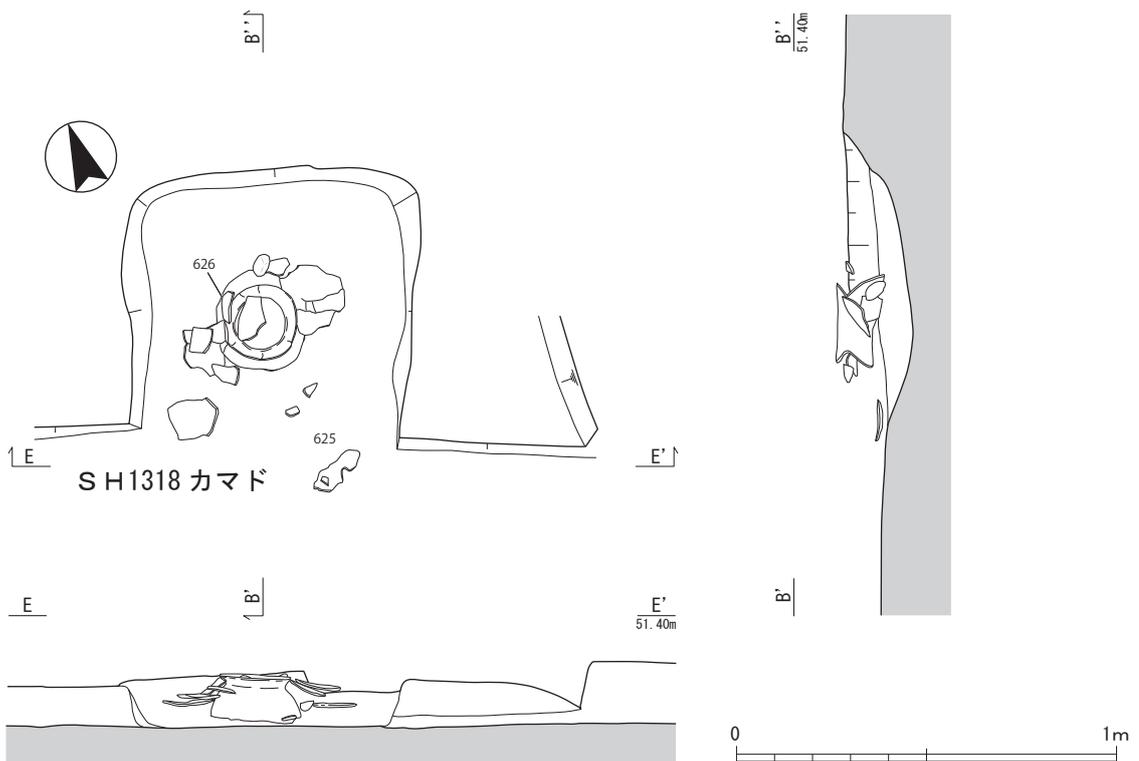
【SH1318・1319 A-A'・B-B'】

- 1 10YR3/3 暗褐色細礫含極細砂
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト少量含極細砂 (細礫多含)
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルトブロック多含)
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック少量含)
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト少量含極細砂
- 6 7.5YR3/2 暗褐色シルト含極細砂 (炭化物多含・細礫少量含)
- 7 7.5YR3/4 暗褐色シルト含極細砂 (φ 5cm焼土ブロック・黄褐色シルトブロック多含)
- 8 1.75YR3/3 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含)

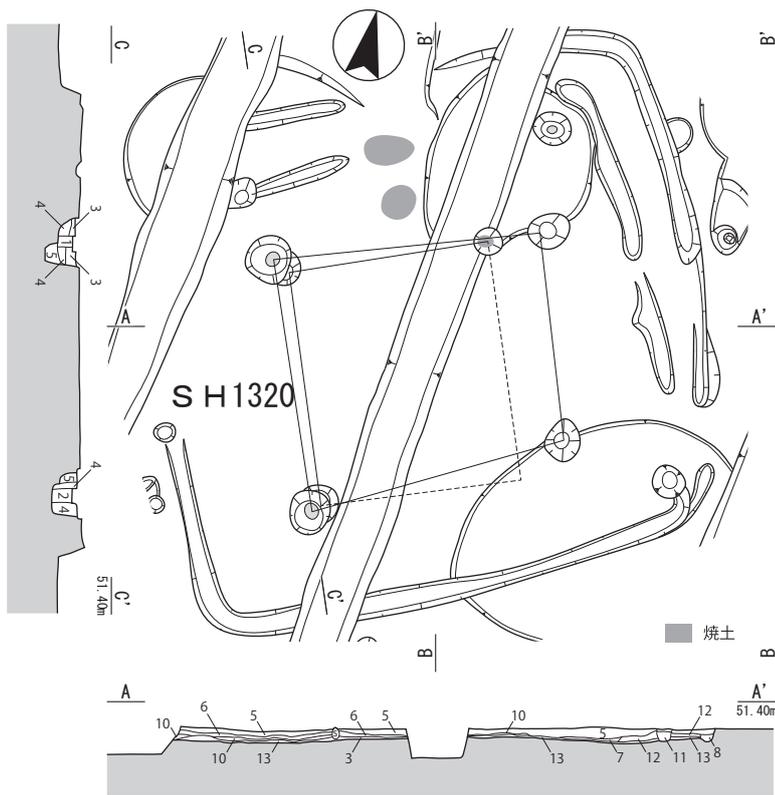
- 9 10YR5/6 黄褐色極細砂含シルト (暗褐色極細砂ブロック多含)
- 10 10YR3/3 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含)
- 11 10YR4/6 褐色細礫多く含シルト (黒褐色極細砂ブロック多含)
- 12 10YR3/2~3 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・細礫含)
- 13 7.5YR5/6 明褐色粗砂~細砂少量含シルト

【SH1318 主柱穴 C-C'・D-D'】

- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・細礫含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト極細砂 (明褐色シルトブロック・細礫多含)
- 3 7.5YR5/8 明褐色極細砂シルト (暗褐色極細砂ブロック多含・細礫少量含)



第98図 SH 1318・1319・1318 カマド実測図 (1 : 20・1 : 80)

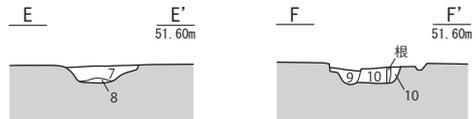
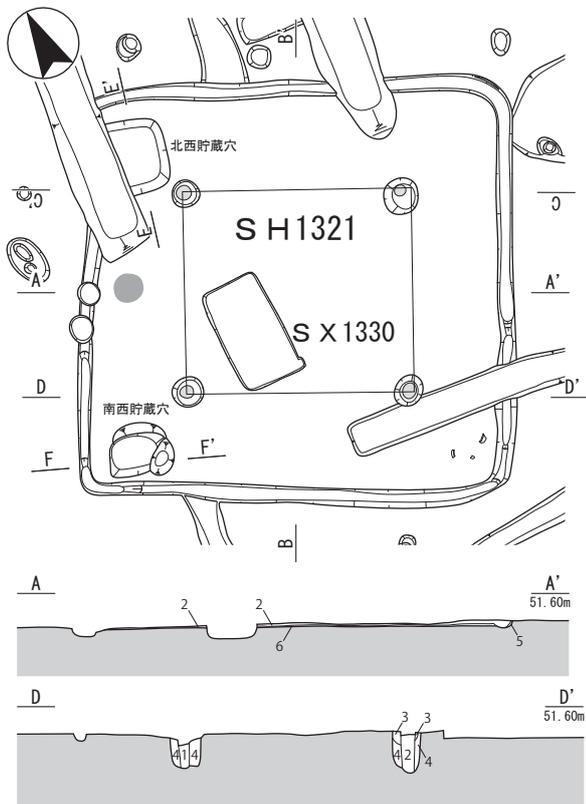


【SH1320 A-A'・B-B'】

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂含極細砂 (細礫多含)
- 2 10YR5/6 黄褐色極細砂少量含シルト (暗褐色極細砂ブロック含)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫含極細砂 (黄褐色シルトブロック多く含)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫含極細砂 (黄褐色シルト大ブロック含)
- 5 7.5YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト多く含極細砂 (細礫・黄褐色シルトブロック少量含)
- 6 10YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト少量含極細砂 (細礫・黄褐色シルト小ブロック少量含)
- 7 7.5YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含・細礫少量含)
- 8 10YR3/4 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック多含)
- 9 7.5YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (焼土粒多含・炭化物・細礫少量含)
- 10 10YR4/6 褐色細砂~極細砂含シルト (暗褐色極細砂ブロック多含)
- 11 10YR3/2 ~ 3 暗褐色シルト少量含極細砂 (炭化物・黄褐色シルト小ブロック多含)
- 12 7.5YR3/2 ~ 3 暗褐色シルト少量含極細砂 (炭化物・黄褐色シルトブロック~細礫少量含)
- 13 10YR4/6 褐色極細砂含細砂 (φ 1mm小礫含)

【SH1320 主柱穴 C-C'】

- 1 7.5YR4/3 褐色シルト多く含極細砂 (細礫・明褐色シルト小ブロック少量含)
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト多く含極細砂 (細礫・明褐色シルト小ブロック含)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック多含)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・黒褐色極細砂小ブロック少量含)
- 5 7.5YR4/4 褐色シルト含細砂~極細砂



【SH1321】

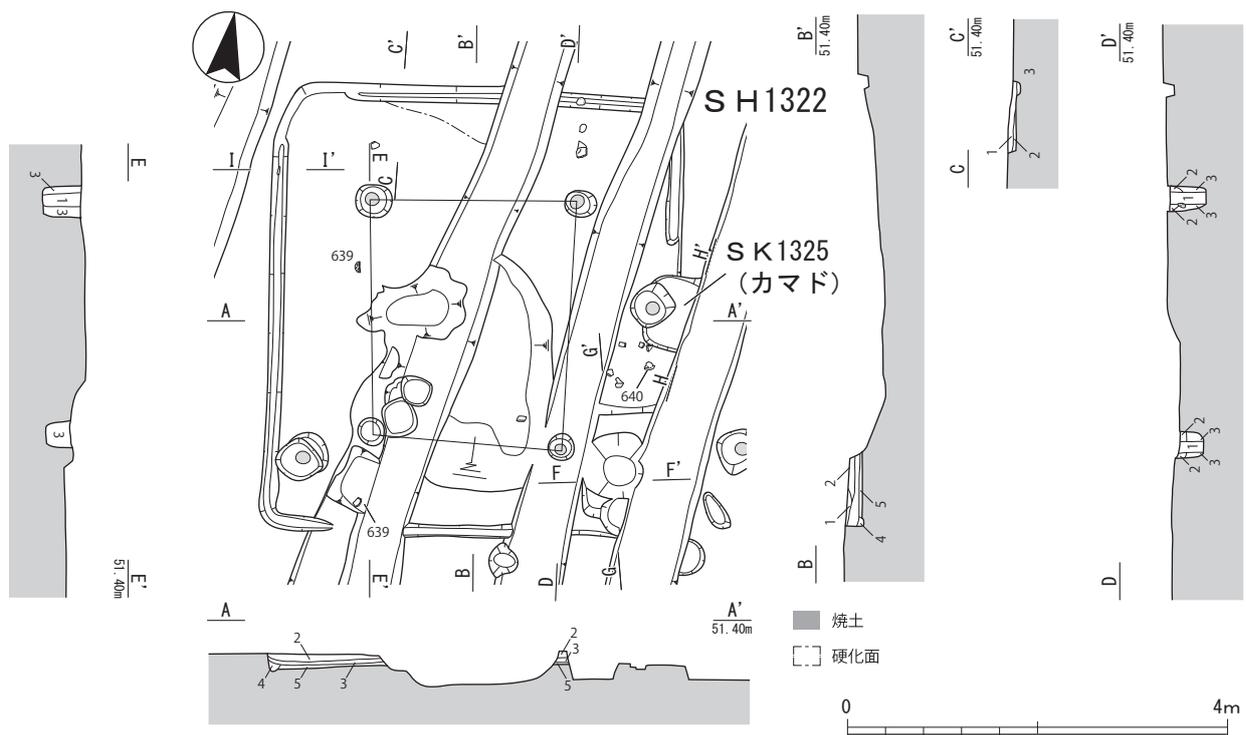
- 1 10YR4/4 褐色シルト少量含極細砂 (炭化物・黄褐色シルト小ブロック・細礫少量含)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト少量含極細砂 (細礫少量含)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (炭化物・黄褐色シルト小ブロック少量含)
- 4 10YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト多く含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含)
- 5 10YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト多く含極細砂 (黄褐色シルトブロック多含)
- 6 10YR3/2 黒褐色シルト含極細砂 (明褐色細砂斑状含・φ 1mm小礫含)
- 7 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・細礫含)
- 8 7.5YR4/3 褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック多・細礫少量含)
- 9 10YR4/4 褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルトブロック含)
- 10 10YR3/3 ~ 4 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・細礫少量含)

【SH1321 主柱穴 C-C'・D-D'】

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト多含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含)
- 2 10YR3/2 ~ 3 黒褐色シルト多含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック少量含)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト多含極細砂
- 4 10YR5/6 黄褐色細礫含シルト (黒褐色・暗褐色極細砂ブロック多含)



第 99 図 SH 1320・1321 実測図 (1 : 80)



【SH1322 A-A'・B-B'】

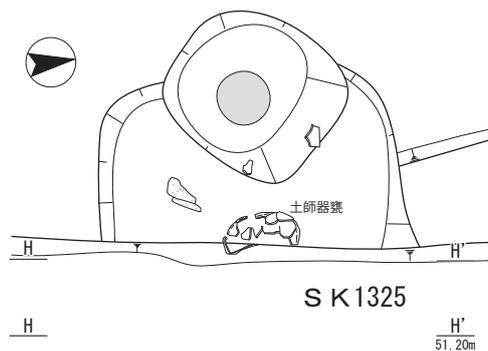
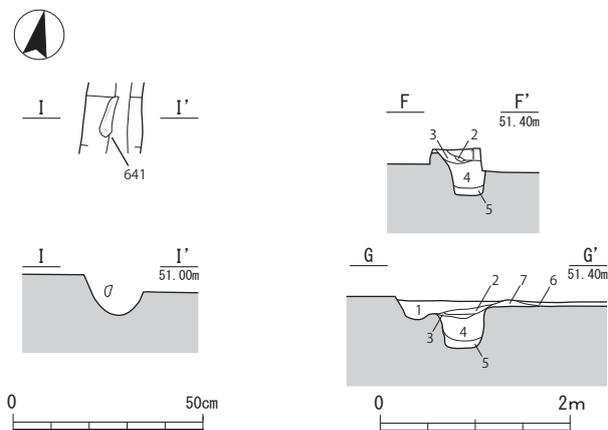
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト少量含極細砂 (細礫少量含)
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (細礫と黄褐色シルト小ブロック含)
- 3 10YR2/2 ~ 2/3 黒褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック少量含)
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック含)
- 5 7.5YR5/6 明褐色粗砂含シルト (φ 1 ~ 3mm小礫含)

【SH1322 C-C'】

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂
- 2 10YR3/3 黒褐色シルト質極細粒砂 (黄褐シルトブロック少量含)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂

【SH1322 主柱穴 D-D'・E-E'】

- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (明褐色シルト小ブロック多含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (明褐色シルトブロック少量含)
- 3 7.5YR5/6 明褐色粗砂 ~ 細礫含シルト (暗褐色極細砂ブロック・黄褐色シルトブロック多含)



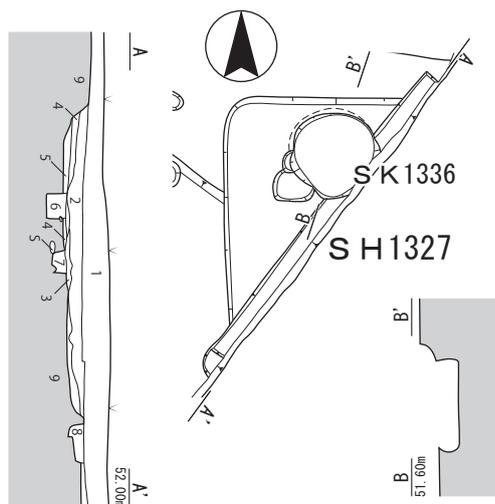
【SH1322 南東貯蔵穴 F-F'・G-G'】

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト含極細砂 (横褐色シルトブロック・細礫多含)
- 2 10YR4/4 褐色シルト含細砂 (暗褐色極細砂ブロック多含)
- 3 10YR4/4 暗褐色シルト含極細砂 (炭化物多含・黄褐色シルトブロック・細礫少量含)
- 4 7.5YR4/4 褐色シルト含細砂 (黄褐色シルト小ブロック多含・細礫少量含)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂含シルト (細礫多含)
- 6 10YR4/4 褐色シルト含細砂 (黄褐色シルト小ブロック・細礫・炭化物少量含)
- 7 7.5YR5/6 黄褐色細礫多含シルト (炭化物約 1cm厚層状含)

【SH1322 カマド (SK1325)】

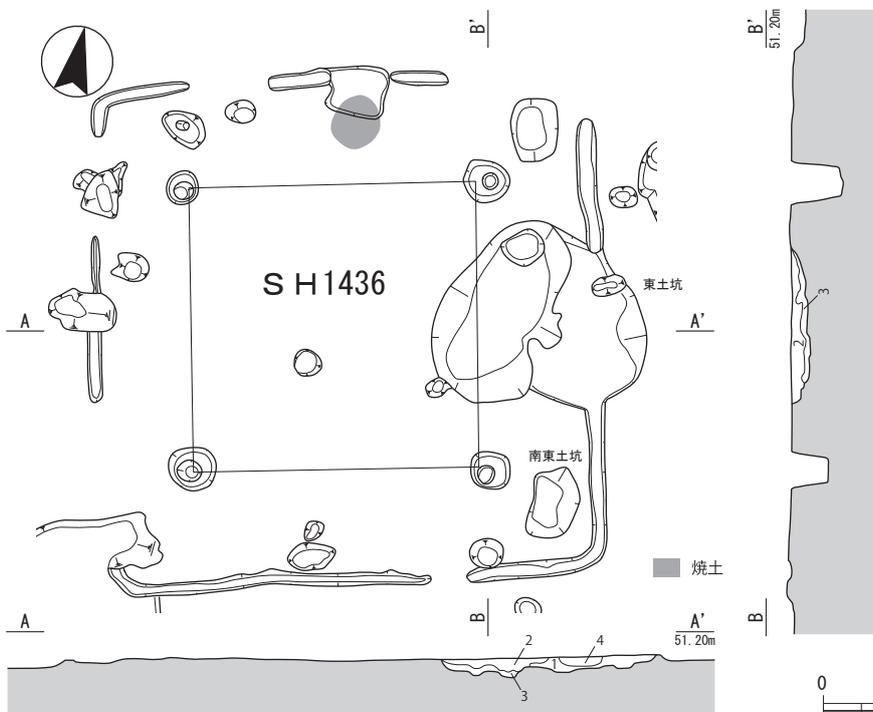
- 1 7.5YR4/3 褐色細砂 ~ シルト
- 2 7.5YR3/2 黒褐色細砂 ~ シルト (φ 1cm 焼土粒 5% 含 炭化物 5% 含)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色細砂 ~ シルト (φ 0.5 ~ 3cm 焼土粒 20% 含)
- 4 7.5YR3/2 黒褐色細砂 ~ シルト (ベース含)

第 100 図 SH 1322・カマド (SK 1325)・貯蔵穴・砥石出土状況実測図 (1 : 20・1 : 80)



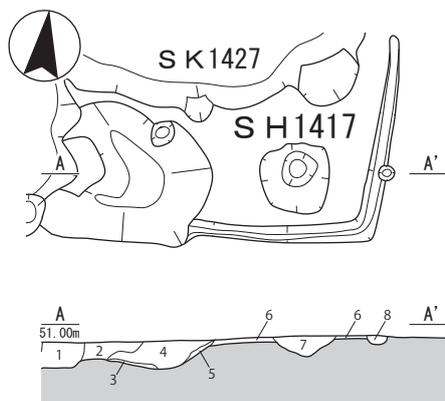
[SH1327・SK1336]

- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～中粒粘砂土
- 2 7.5YR2/2 黒褐色シルト～細粒粘砂土 (φ～2cm礫1%未満含)
- 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト～細粒粘砂土
- 4 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～中粒粘砂土 (7.5YR4/3 褐色シルト～中粒粘砂土斑状含)
- 5 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR4/2 灰褐色シルト～中粒粘砂土斑状含) (φ1～3mm礫1%未満含)
- 6 Pit (縄文土器含)
- 7 Pit
- 8 他のPit
- 9 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ0.1～10cm礫含)



[SH1436]

- 1 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロック10%含・φ1～2cm礫極微量含)
- 3 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 4 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/6 明赤褐色焼土ブロック多含)

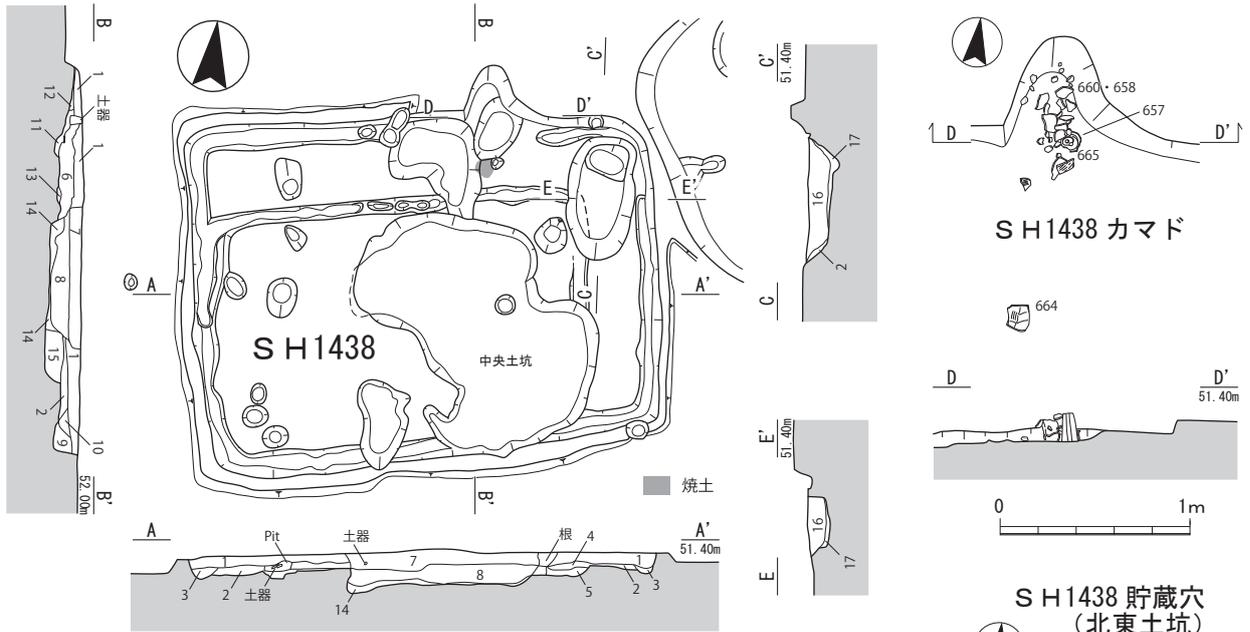


[SH1417]

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 黄褐色ブロック10%含)
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 黄褐色ブロック斑状50%含)
- 4 7.5YR2/1 黒色シルト～細粒粘砂土 (φ10cm礫微量含)
- 5 7.5YR3/1 黒褐色シルト～細粒粘砂土
- 6 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 7 10YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土
- 8 10YR2/2 黒褐色シルト～中粒粘砂土



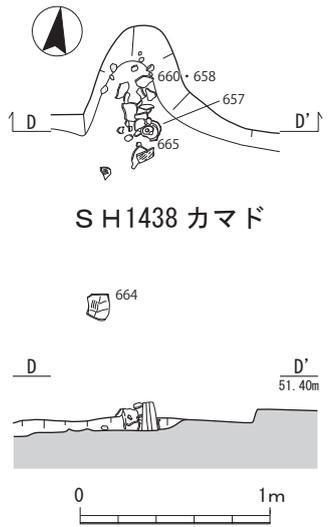
第101図 SH1327・1417・1436実測図(1:80)



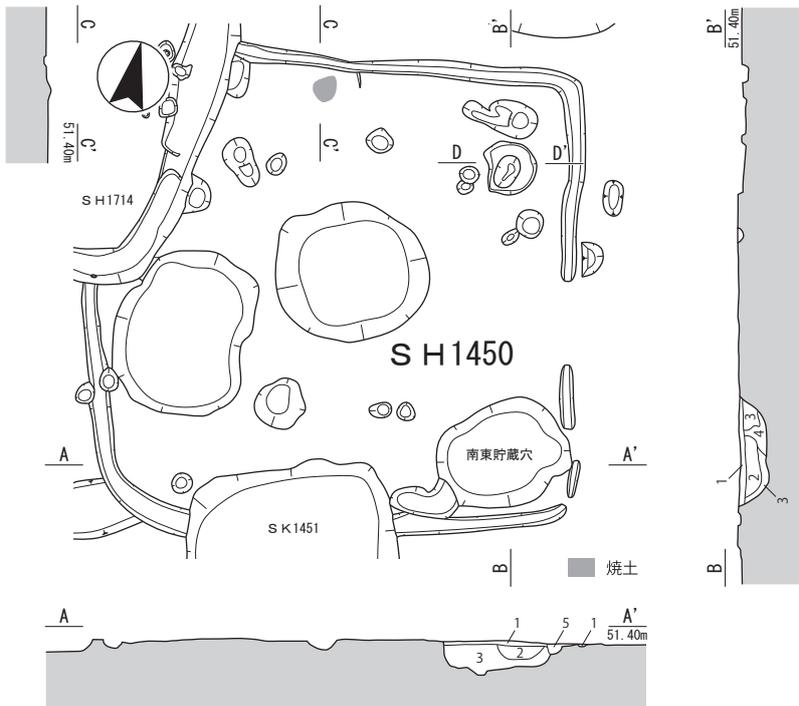
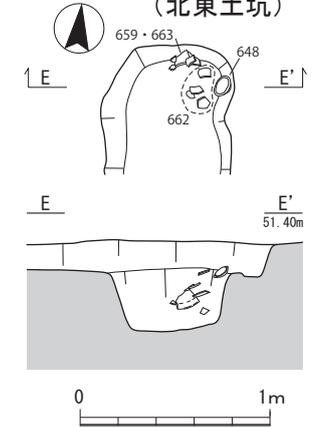
【SH1438】

- 1 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒砂 (φ 1cm礫微量含)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒砂 (7.5YR5/6 にぶい明褐色ブロック斑状 30%含)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロック斑状微量含)
- 4 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/3 にぶい褐色ブロック斑状 20%含)
- 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロック斑状 40%含)
- 6 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR6/8 橙色焼土ブロック微量含)
- 7 7.5YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1cm礫微量含)
- 8 7.5YR3/1 黒褐色シルト～中粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロック斑状微量含)
- 9 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロック斑状微量含)
- 10 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 11 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR6/8 橙色焼土ブロック 10%含)
- 12 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒砂 (焼土ブロック微量・炭化物多含)
- 13 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 14 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロック斑状少量含)
- 15 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/4 にぶい褐色ブロックを斑状 40%含・1mm炭化物少量含)
- 16 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR4/4 褐色ブロック斑状 5%含)
- 17 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR4/4 褐色ブロック斑状 10%含)

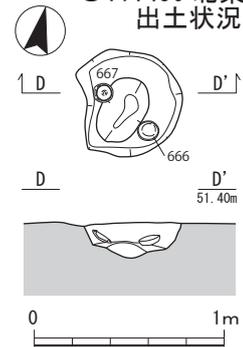
SH1438 カマド



SH1438 貯蔵穴
(北東土坑)



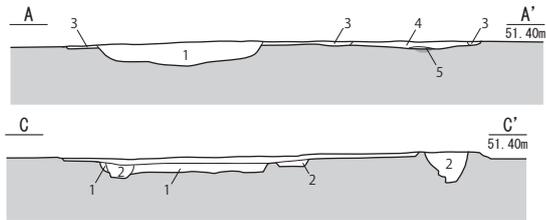
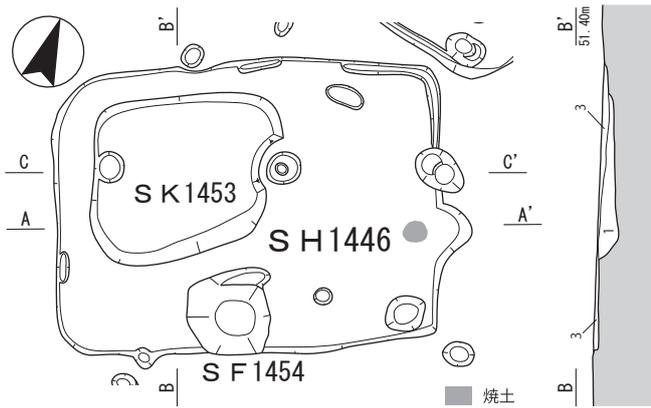
SH1450 北東土坑
出土状況



【SH1450】

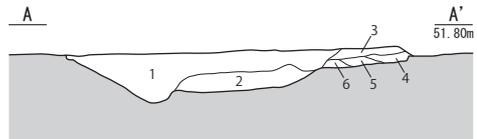
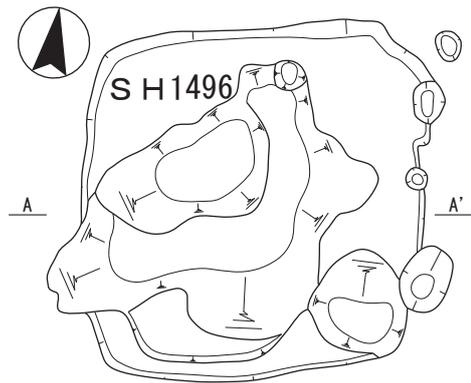
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR4/8 赤褐色焼土ブロック斑状 5%少量含)
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR4/8 赤褐色焼土ブロック斑状 10%含)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR4/4 褐色ブロック 5% 7.5YR2/1 黒色土 10%斑状含)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/6 黄褐色ブロック斑状 30%含)
- 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土

第 102 図 SH 1438・カマド・貯蔵穴・1450・北東土坑実測図 (1 : 40・1 : 80)



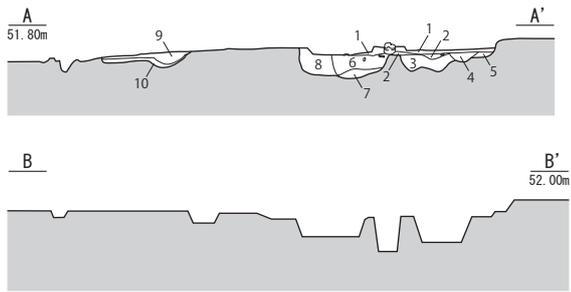
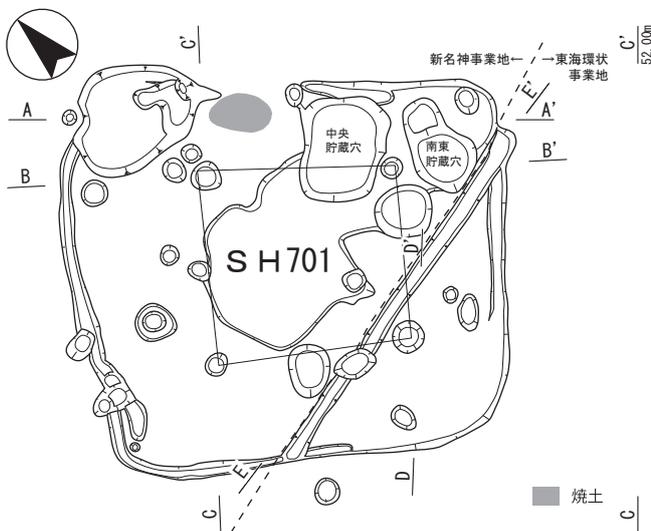
[SH1446・SK1453・SF1454]

- 1 7.5YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR4/4 褐色ブロック斑状 10%含)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～中粒粘砂土
- 3 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 3～5 cm礫微量含)
- 4 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (2.5YR4/6 赤褐色シルト～細粒砂 30% 含・φ 1～5 mm炭化物多含)
- 5 2.5YR4/6 赤褐色シルト～細粒粘砂土



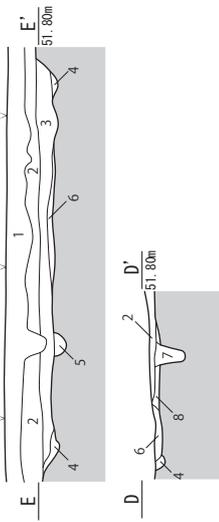
[SH1496]

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (褐灰色土ブロック斑状含)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粗砂 (礫多含)
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 4 10YR4/1 褐灰色粘質土 (焼土粒・炭化物少量含)
- 5 10YR2/1 黒色粘質土 (炭化物微量含)
- 6 10YR5/8 黄褐色粘質土 (黒褐色土含)



[SH701 A-A']

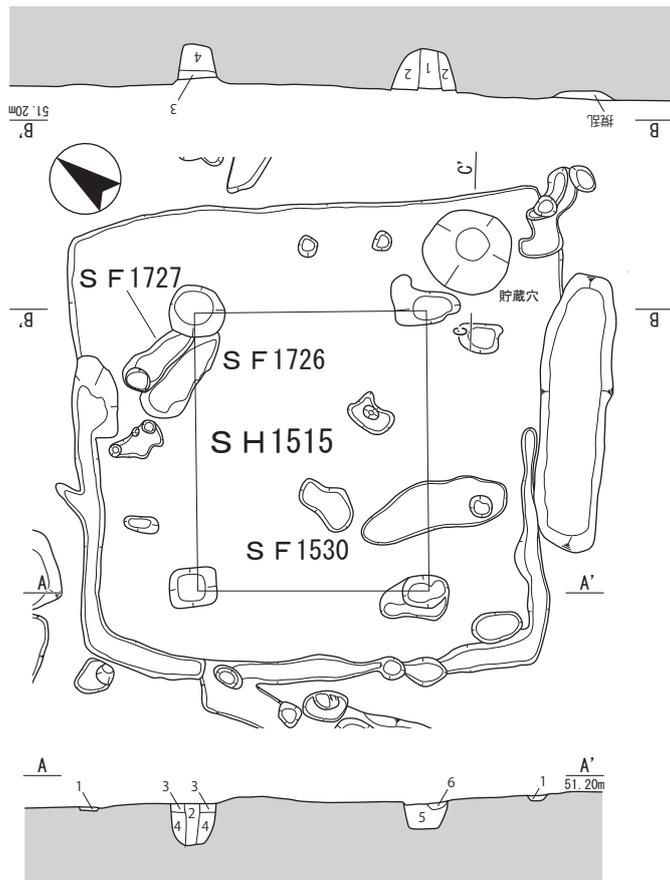
- 1 7.5YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土 (φ 1 cm炭化物多含・7.5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック多含)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/8 明赤褐色焼土ブロック多含・φ 4 cm炭化物ブロック含)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ 0.2～2 cm炭化物微量含)
- 4 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック少量含)
- 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 6 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～5 mm炭化物微量・φ～3 mm焼土ブロック微量含)
- 7 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～3 mm炭化物・φ～3 mm焼土ブロック斑状微量含)
- 8 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ～3 mm炭化物・φ～3 mm焼土ブロック斑状微量含)
- 9 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 10 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土



[SH701 D-D'・E-E']

- 1 2.5Y3/2 黒褐黒砂質土 (現表土)
- 2 2.5Y2/1 黒色シルト (旧表土)
- 3 10YR2/1 黒色シルト (土師器細片・炭片・須恵器片含) (埋土1)
- 4 10YR3/2 黒褐色砂質土 (10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック含) (壁周溝)
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト (ピット)
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック含) (埋土2)
- 7 10YR3/1 黒褐色砂礫混じりシルト (主柱穴)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (床土か)

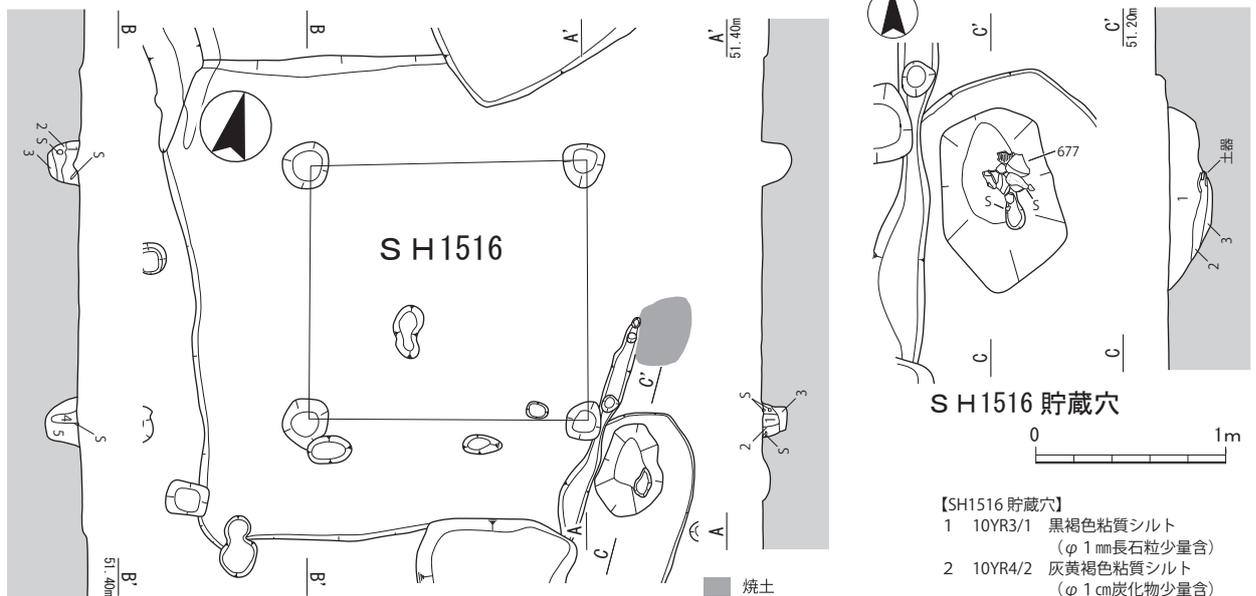
第 103 図 SH 701・1446・1496 実測図 (1 : 80)



- 【SH1515 主柱穴 A-A'】
- 10YR3/4 暗褐色粘質シルト
 - 10YR1.7/1 黒色粘質シルト (上部黄褐色極小粒粗砂 10%・下部4の土混)
 - 7.5YR4/3 褐色粘質シルト
 - 7.5YR4/6 褐色粘質シルト (極小粒粗砂)
 - 10YR3/4 暗褐色粘質シルト (小～中粒状粗砂 5%・10YR3/3 暗褐色粘質シルト 2%含)
 - 10YR2/3 黒褐色粘質シルト

- 【SH1515 主柱穴 B-B'】
- 10YR3/1 黒褐色よわい粘質シルト (小粒状粗砂 2%・大丸石含)
 - 10YR4/6～10YR4/3 褐色粘質シルト～にぶい黄褐色粘質シルト (極小粒細砂含・小～中粒状礫 7～15%)
 - 10YR3/4～10YR3/3 暗褐色粘質シルト～暗褐色粘質シルト (小～中粒状礫 2～5%)
 - 7.5YR4/4 褐色粘質シルト

- 【SH1515 貯蔵穴 C-C'】
- 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト (黄褐色小～中粒状粗砂 2%)

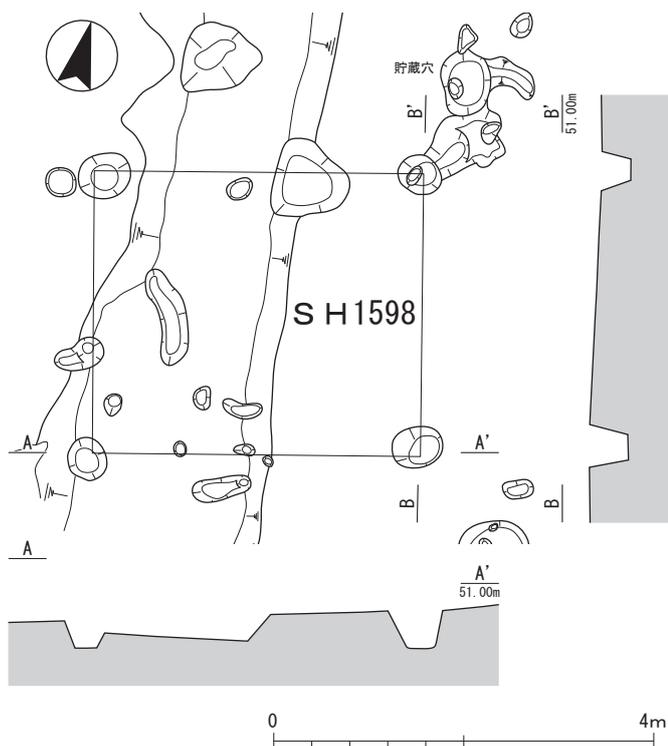
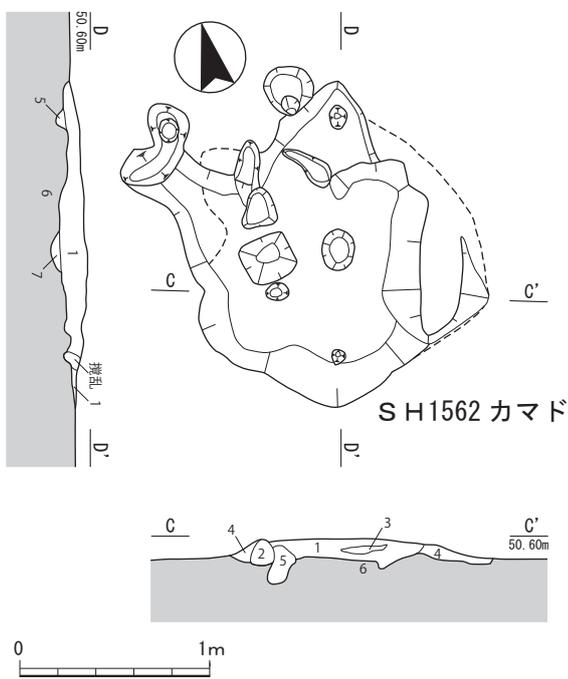
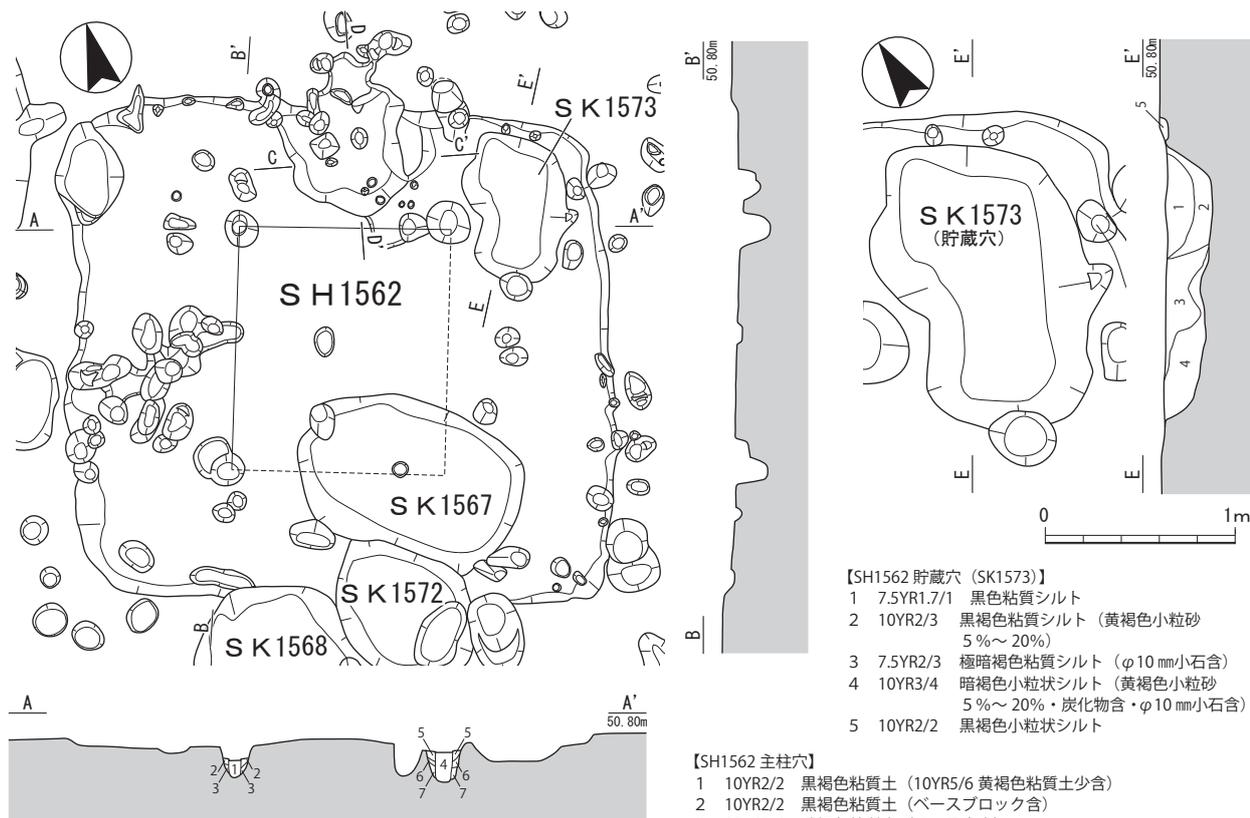


- 【SH1516 貯蔵穴】
- 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
 - 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cm炭化物少量含)
 - 10YR7/4 にぶい黄褐色砂質シルト

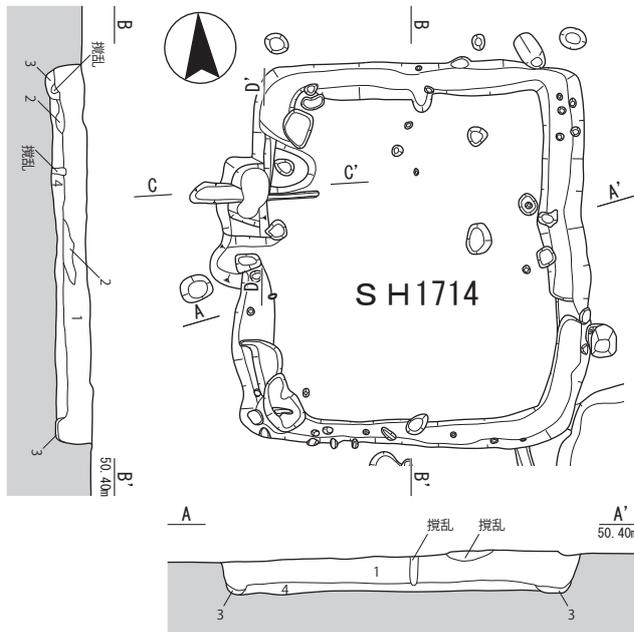
- 【SH1516 主柱穴 A-A'】
- 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 1cm 10YR3/1 黒褐色砂質ブロック含)
 - 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (φ 3cm角礫含)
 - 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 2mm長石粒 7%程度含)

- 【SH1516 主柱穴 B-B'】
- 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
 - 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 2cm礫多含)
 - 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
 - 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
 - 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 2mm長石粒少量含)

第 104 図 SH 1515・1516・貯蔵穴実測図 (1 : 40・1 : 80)

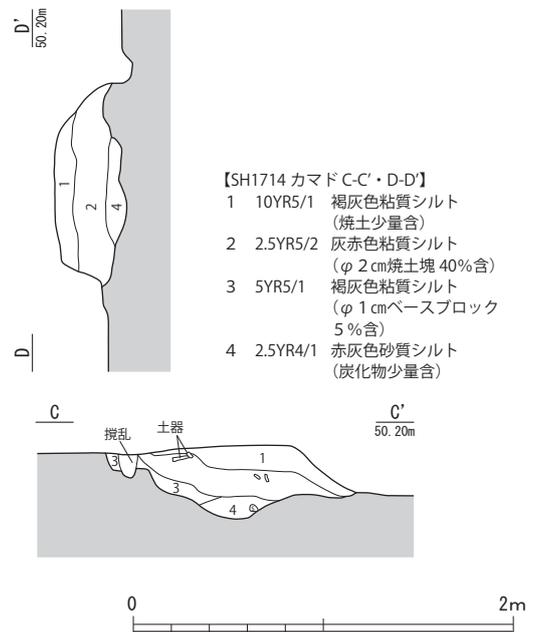


第105図 SH1562・貯蔵穴 (SK1573)・カマド・1598 実測図 (1:40・1:80)



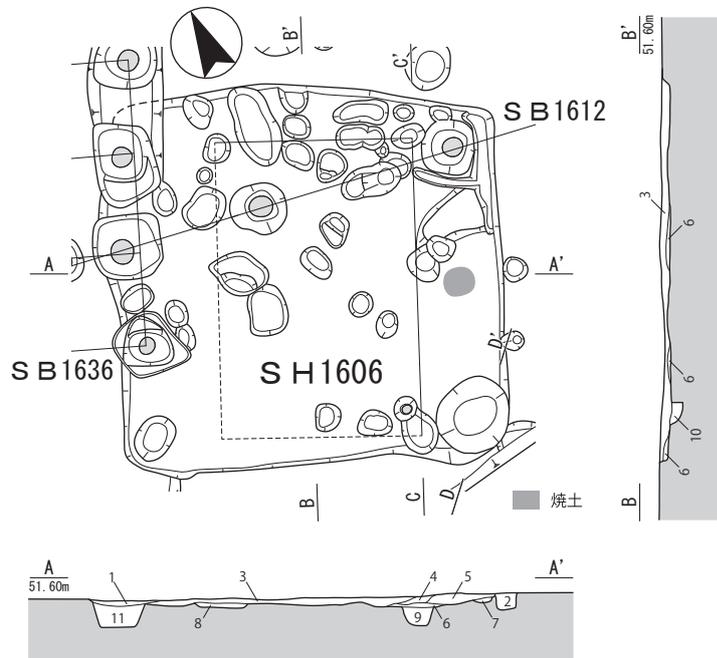
【SH1714 A-A'・B-B'】

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1 cm 焼土ブロック少量含)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (φ 0.5 cm ベースブロック斑状含)
- 4 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト (φ 2 cm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック 40% 含)



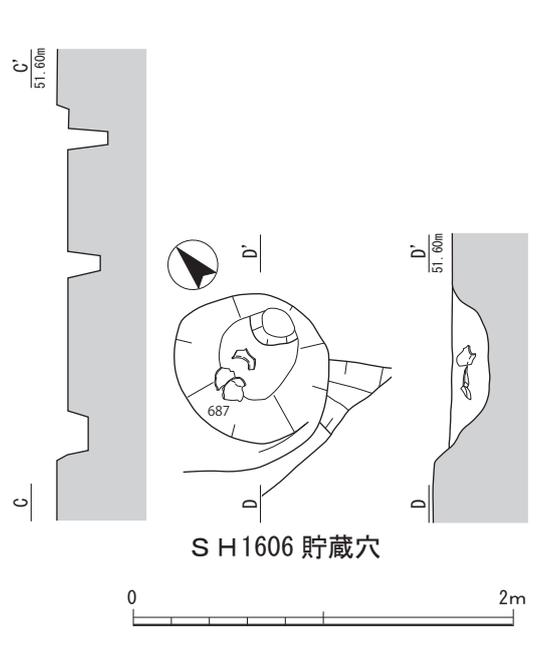
【SH1714 カマド C-C'・D-D'】

- 1 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (焼土少量含)
- 2 2.5YR5/2 灰赤色粘質シルト (φ 2 cm 焼土塊 40% 含)
- 3 5YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 1 cm ベースブロック 5% 含)
- 4 2.5YR4/1 赤灰色砂質シルト (炭化物少量含)



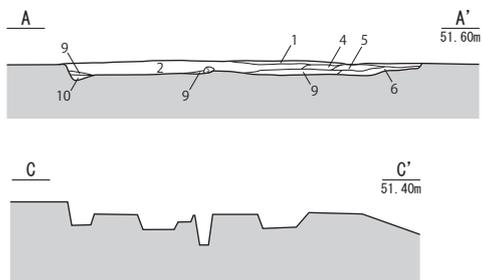
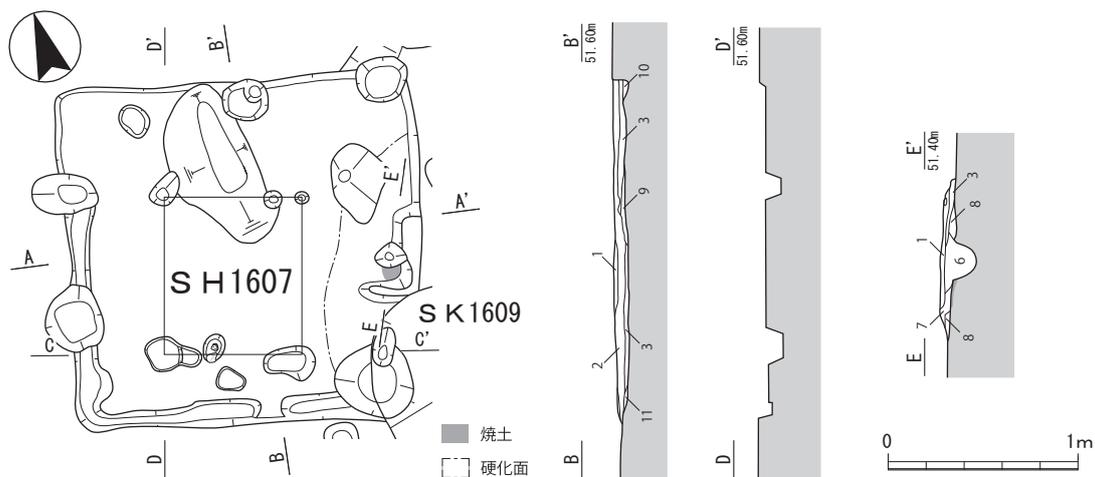
【SH1606】

- 1 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 (カクラン溝)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- 3 5Y4/1 灰色シルト
- 4 10YR5/1 褐灰色土
- 5 10YR4/1 褐灰色粘質土 (焼土含)
- 6 10YR4/4 褐色土 (炭・ベースブロック含)
- 7 10Y5/1 灰白色土
- 8 10YR3/2 黒褐色土
- 9 10YR3/1 黒褐色土
- 10 10YR3/2 黒褐色土
- 11 10YR3/2 黒褐色シルト質土



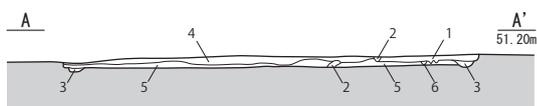
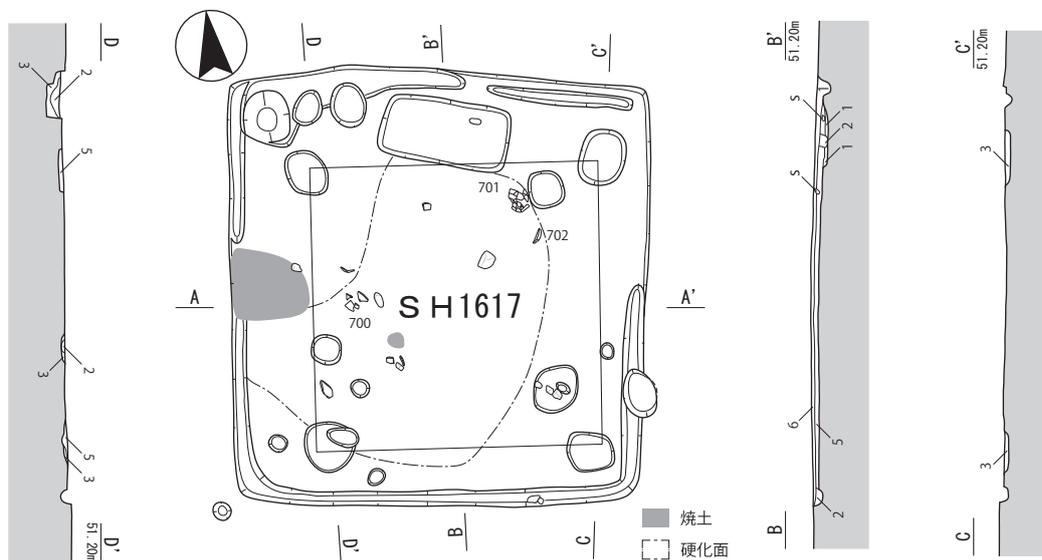
SH1606 貯蔵穴

第 106 図 SH 1714・1606・貯蔵穴実測図 (1 : 40・1 : 80)



[SH1607]

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土 (黒ボク土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (土器・炭少量含)
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂含シルト (土器・焼土含)
- 5 2.5Y6/2 にぶい黄色シルト質土 (土器・小礫含)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (炭多量含)
- 7 10YR5/6 黄褐色土
- 8 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土 (オリーブ褐色細粒砂含)
- 9 10YR5/6 黄褐色土
- 10 10YR5/2 灰黄褐色
- 11 10YR3/1 黒褐色土

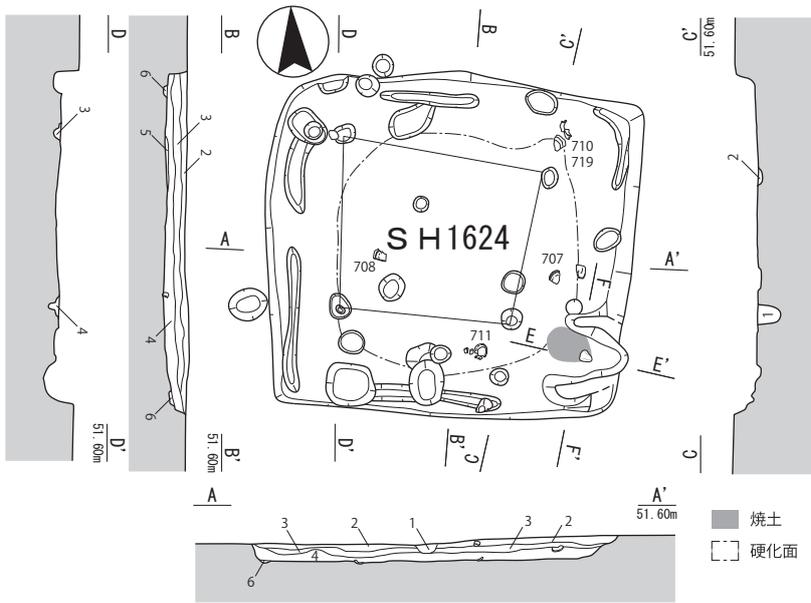


[SH1617]

- 1 5YR5/8 明赤褐色極細粒砂
- 2 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂
- 3 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト質細砂
- 4 7.5YR5/6 明褐色細粒砂
- 5 7.5YR4/4 褐色シルト質細砂
- 6 7.5YR3/2 黒褐色極細粒砂



第107図 SH1607・1617実測図 (1:40・1:80)

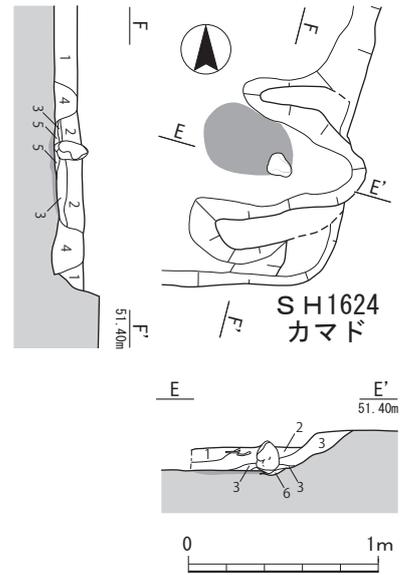


【SH1624】

- 1 10YR5/1 褐灰色砂質土
- 2 7.5YR3/2 黒褐色土（細粒砂含）
- 3 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 4 7.5YR3/4 暗褐色シルト（土器・炭少量含）
- 5 7.5YR5/6 明褐色極細粒砂
- 6 7.5YR5/2 灰褐色土

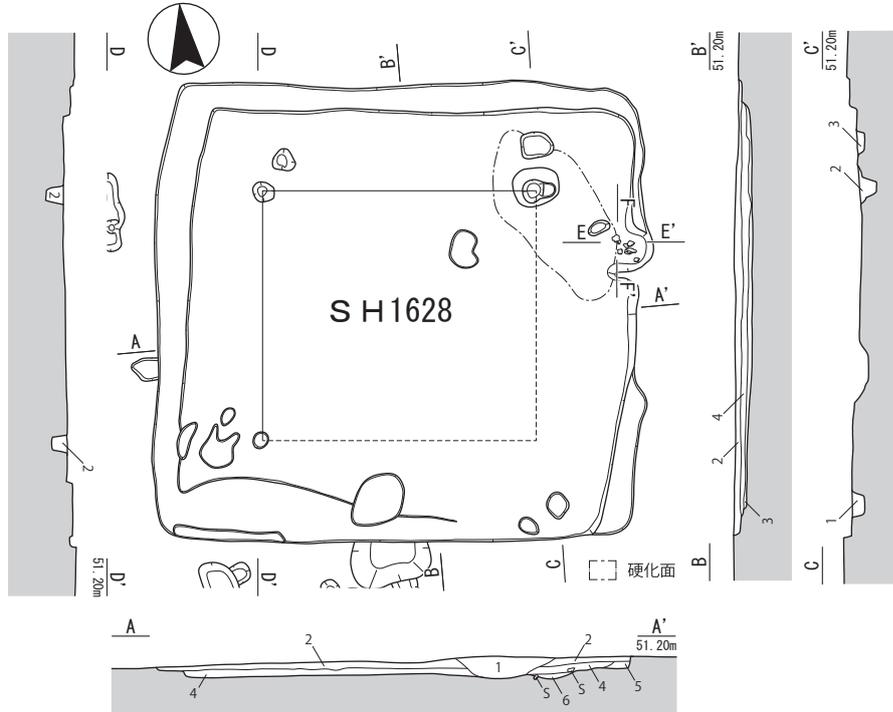
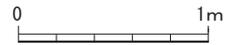
【SH1624 主柱穴 C-C'・D-D'】

- 1 10YR3/2 黒褐色土（しまりあり）
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂質シルト



【SH1624 カマド】

- 1 7.5YR3/4 暗褐色シルト（しまりなし）
（土器片・炭極微量含）
SHの4層と対応
- 2 7.5YR4/6 褐色土（焼土・炭多含）
- 3 7.5YR3/4 暗褐色土（焼土・炭ブロック含）
- 4 2.5Y/3 黄褐色土（土器多含）
- 5 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 6 7.5YR5/6 明褐色シルト

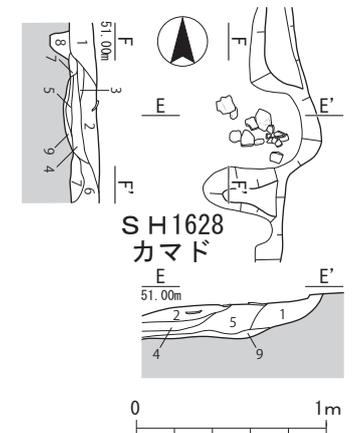


【SH1628】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂
- 2 7.5YR4/3 褐色中粒砂
- 3 7.5YR4/6 褐色シルト質細粒砂
- 4 10YR3/4 暗褐色シルト質細粒砂
- 5 7.5YR3/4 暗褐色シルト質細粒砂
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂

【SH1628 主柱穴 C-C'・D-D'】

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR2/2 黒褐色土
- 3 10YR4/4 褐色シルト

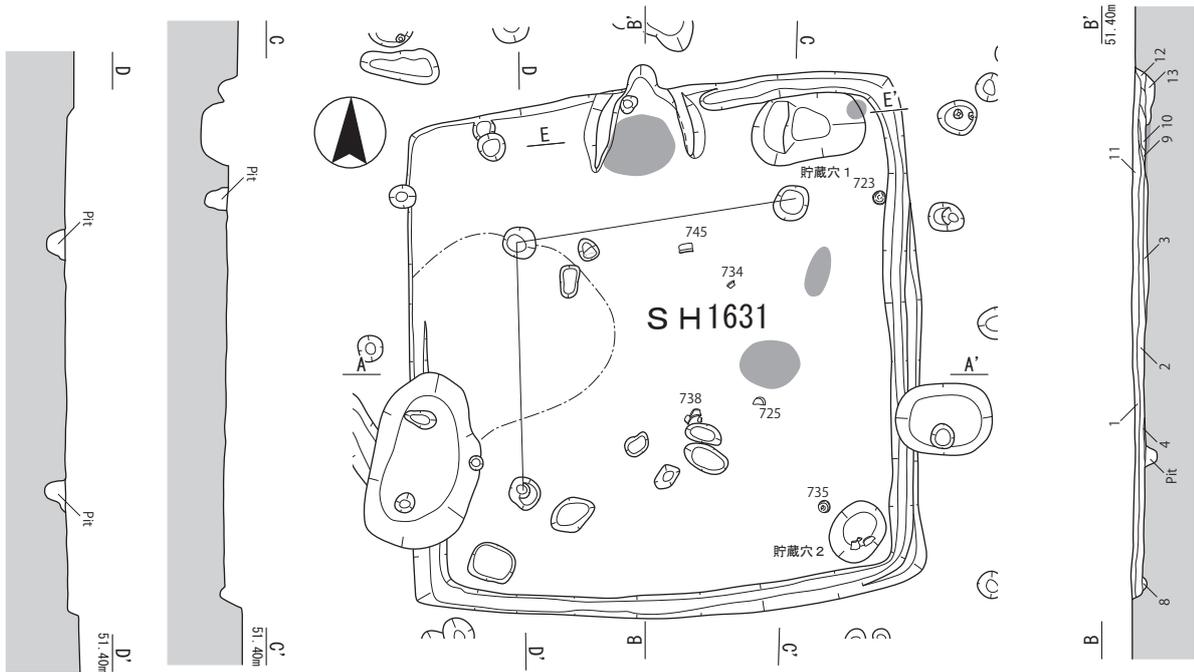


【SH1628 カマド】

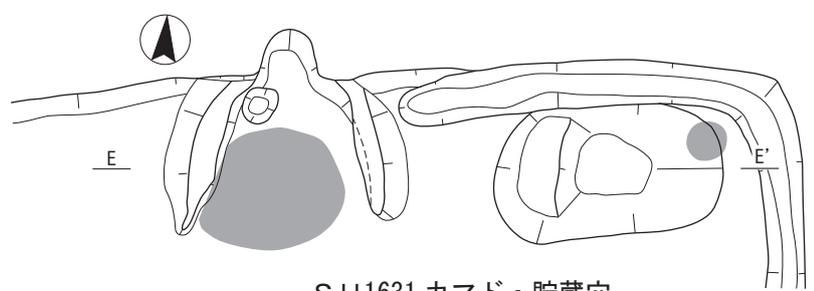
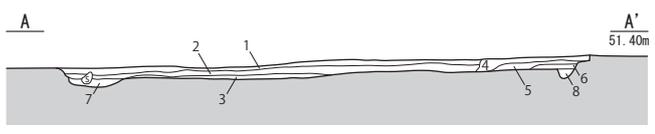
- 1 7.5YR4/1 褐灰色シルト質
- 2 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂含シルト
（焼土 30%含）（土器多量含）
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト質土
- 4 10YR4/2 灰黄褐色土
- 5 10YR5/6 黄褐色土（炭 30%含）
- 6 10YR5/1 褐灰色シルト
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土
- 8 10YR4/4 褐色シルト
- 9 10YR5/8 黄褐色極細粒砂



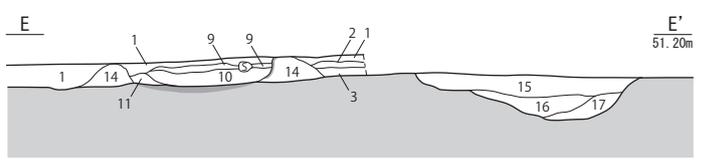
第 108 図 SH 1624・カマド・1628 実測図（1 : 40・1 : 80・1 : 100）



■ 焼土
□ 硬化面



SH1631 カマド・貯蔵穴



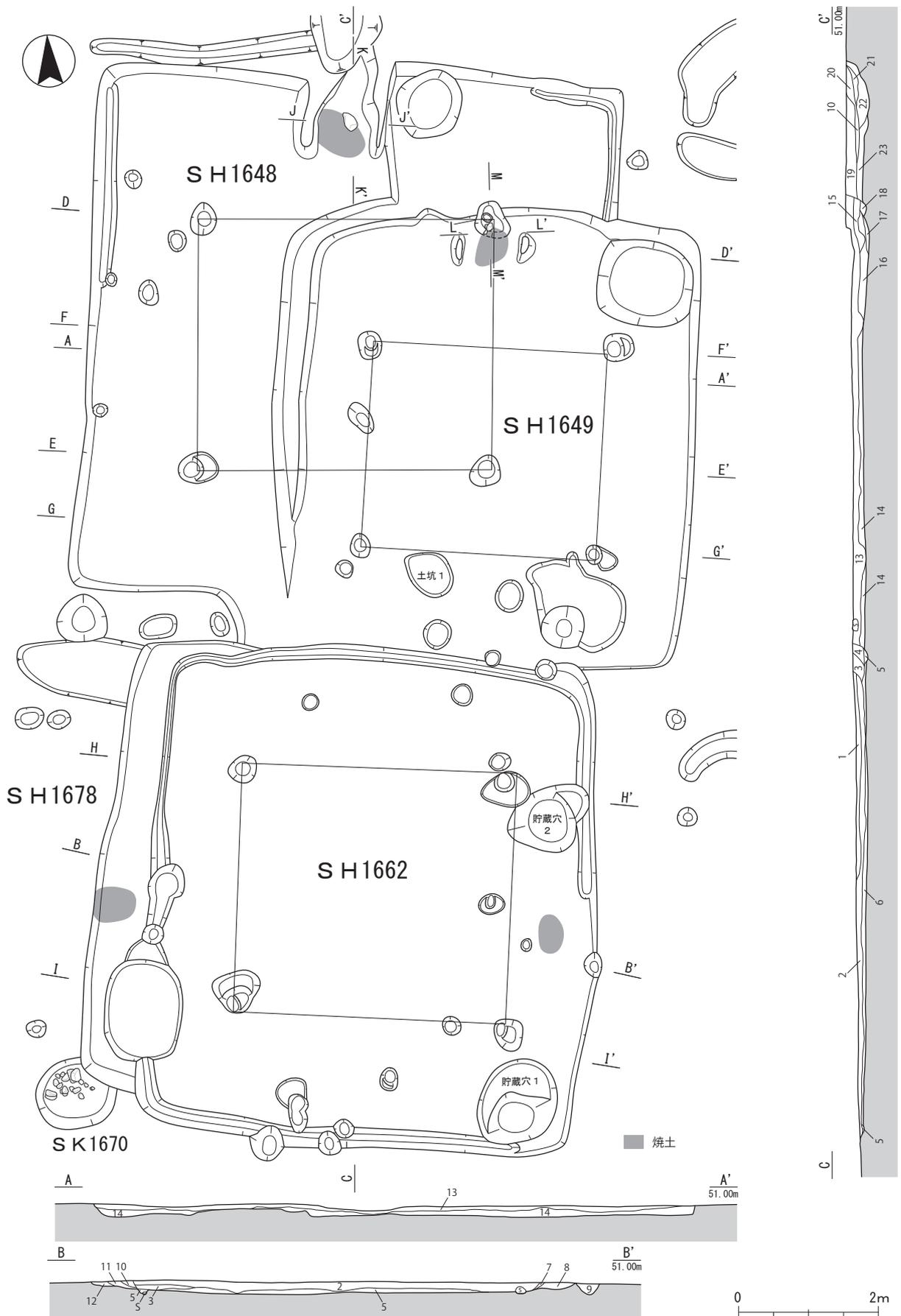
【SH1631】

- | | |
|------------------------------|------------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色極細粒砂含シルト | 12 10YR4/4 褐色土 (焼土・炭 10%含) |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (土器含) | 13 10YR3/2 黒褐色シルト含土 (ベースブロック 5%含) |
| 3 7.5YR5/6 明褐色細粒砂含シルト | 14 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂含シルト |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト | 15 2.5Y3/3 暗オリーブ色土極細粒砂含シルト (炭 3%含) |
| 5 10YR5/4 にぶい黄褐色 (焼土・炭 10%含) | 16 10YR4/1 褐灰色シルト (土器少量含) |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト (焼土 5%含) | 17 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト |
| 7 7.5YR4/1 褐灰色細粒砂 | |
| 8 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | |
| 9 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂含土 | |
| 10 5YR3/2 暗赤褐色土 (焼土 15%含) | |
| 11 7.5YR3/2 黒褐色土 | |

【SH1631 主柱穴 C-C'・D-D'】

- | |
|----------------------------|
| 1 7.5YR4/3 褐色シルト |
| 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト (中粒砂まじり) |

第 109 図 SH 1631・カマド・貯蔵穴実測図 (1 : 40・1 : 80)



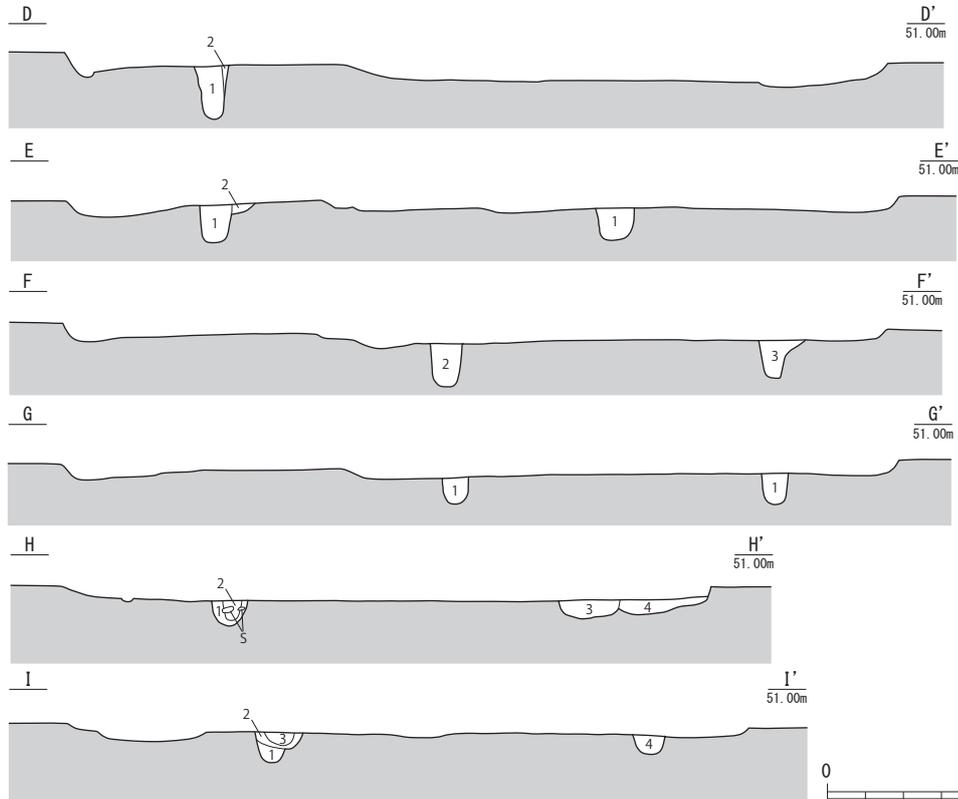
第110图 SH1648・1649・1662・1678 実測 (1:80)

【SH1648・1649・1662・1678 A-A' B-B' C-C'】

- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 2 2.5Y4/2 暗黄灰色シルト
- 3 2.5Y5/2 暗黄灰色細粒砂含シルト
- 4 2.5Y3/1 黒褐色土
- 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト (黄褐色シルトブロック 3%含)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂含シルト
- 7 5YR5/6 明赤褐色砂質土 (焼土ブロック 50%含)

- 8 10YR5/2 灰黄褐色シルト (炭 7%含)
- 9 2.5Y4/1 黄灰色粗砂含シルト
- 10 7.5YR4/2 灰褐色粗砂含シルト
- 11 7.5YR4/3 褐色シルト (焼土 7%含)
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
- 13 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 14 2.5Y4/1 黄灰色粗砂含シルト (ベースブロック 7%含)
- 15 2.5Y3/1 黒褐色シルト土

- 16 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 (焼土・炭 3%含)
- 17 2.5Y3/2 黒褐色土
- 18 10YR4/1 褐灰色シルト土
- 19 10YR4/2 灰黄色シルト (黄褐色細粒砂 3%含)
- 20 7.5YR4/3 褐色細粒砂含シルト
- 21 10YR3/4 暗褐色土 (焼土・炭 7%含)
- 22 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (焼土・炭 20%含)
- 23 2.5Y4/1 黄灰色土 (黄褐色ブロック 15%含)



【SH1648 主柱穴 D-D' E-E'】

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2 2.5Y5/4 黄灰色極細粒砂

【SH1649 主柱穴 F-F' G-G'】

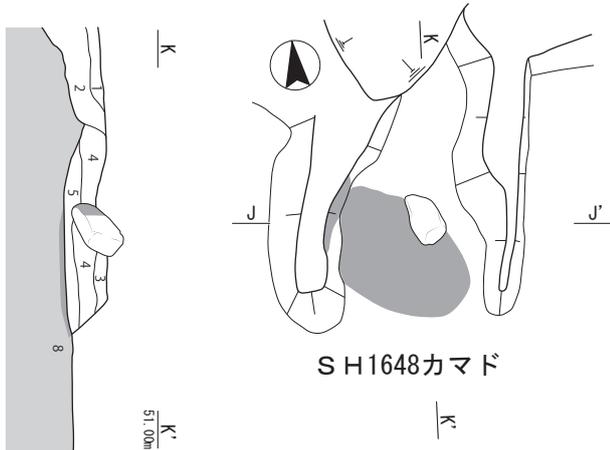
- 1 2.5Y4/ 黄灰色細粒砂含シルト
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト

【SH1662 主柱穴 H-H'】

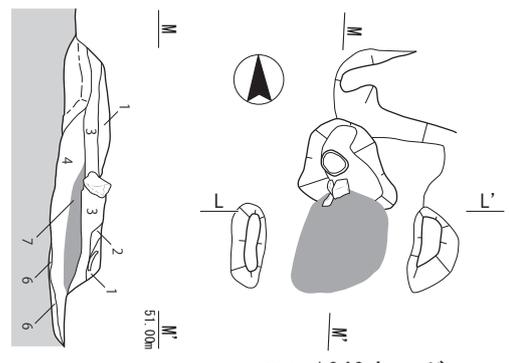
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂
- 2 10YR5/6 黄褐色細粒砂
- 3 10YR4/6 褐細粒砂 (小石含)
- 4 10YR3/4 暗褐色細粒砂

【SH1662 主柱穴 I-I'】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
- 2 10YR6/6 明黄褐色細粒砂
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂
- 4 10YR5/6 黄褐色細粒砂



SH1648カマド



SH1649カマド

■ 焼土

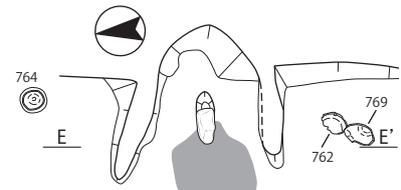
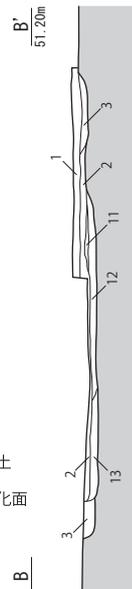
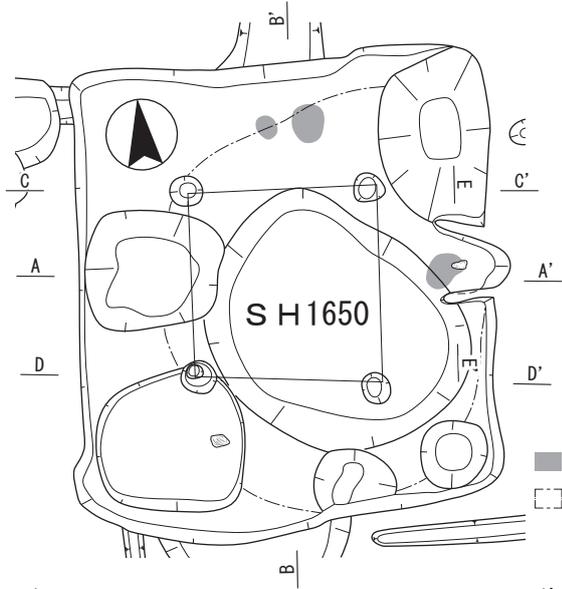
【SH1648 カマド】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト質細粒砂 (埋土)
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト質細粒砂 (カマド崩落土)
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 6 10YR7/8 黄橙色細粒砂
- 7 10YR4/6 褐色極細粒砂
- 8 10YR5/6 黄褐色シルト

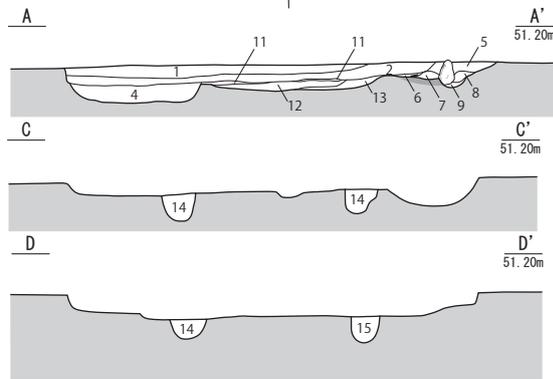
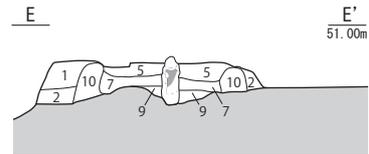
【SH1649 カマド】

- 1 10YR4/1 褐灰色土
- 2 5YR4/6 赤褐色シルト (焼土ブロック 50%含)
- 3 7.5YR4/3 褐色土 (焼土ブロック 15%含)
- 4 7.5YR4/1 褐灰色シルト含土
- 5 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂含土
- 6 10YR5/8 黄褐色極細粒砂
- 7 5YR5/6 明赤褐色極細粒砂 (被熱)

第111図 SH1648カマド・1649カマド実測図 (1:40・1:80)



SH1650 カマド

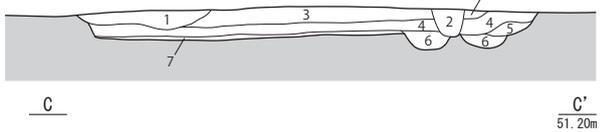
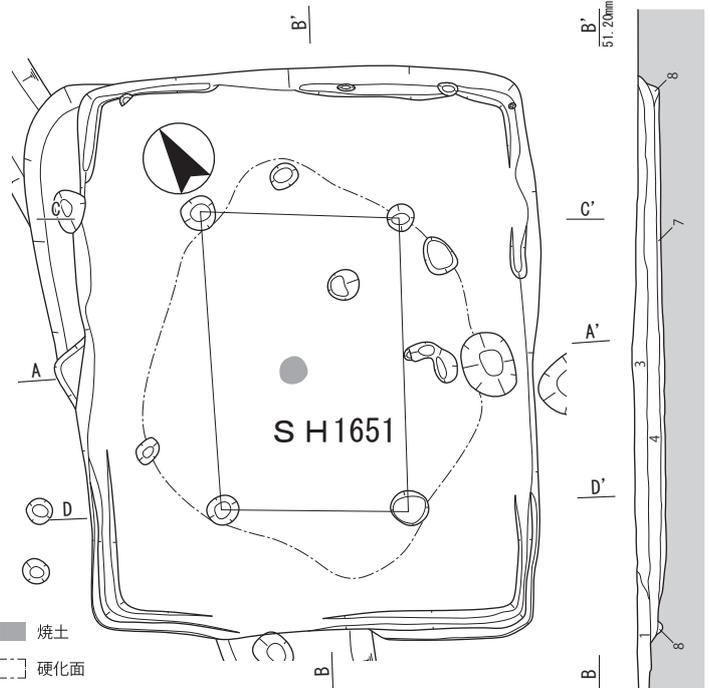


【SH1650】

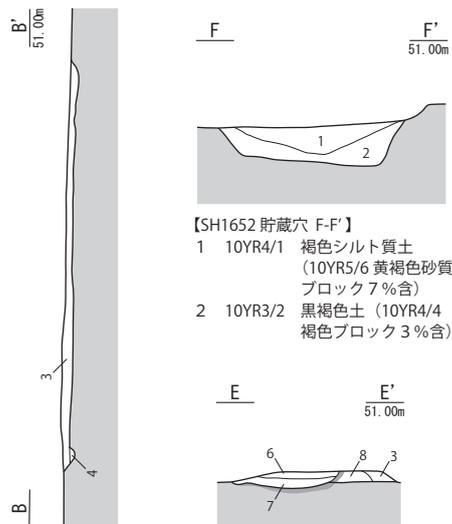
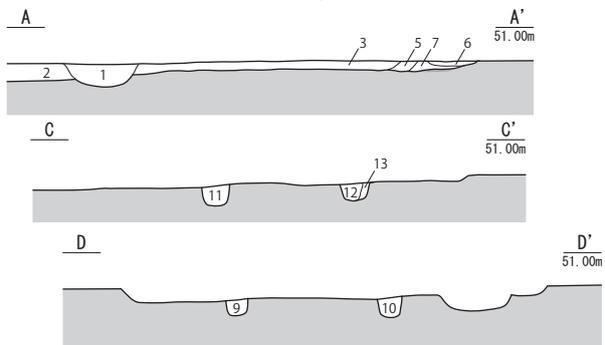
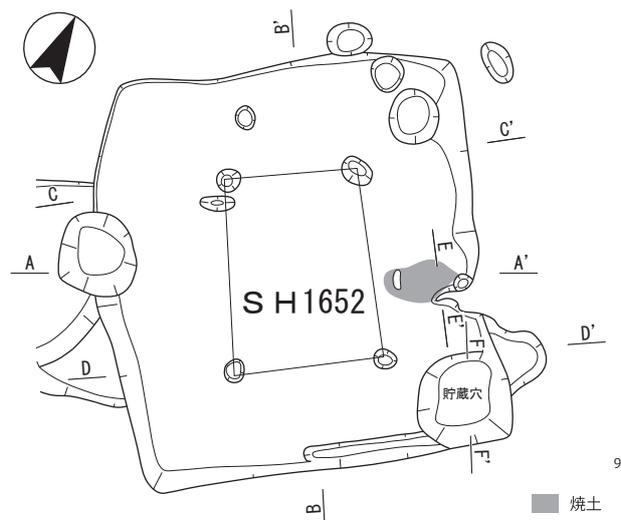
- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト質土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂含シルト
(黄褐色砂質土ブロック 30%含)
- 5 5YR4/2 灰褐色極細粒砂含土 (焼土 15%含)
- 6 5YR4/1 褐灰色土
- 7 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (焼土 50%含)
- 8 7.5YR4/1 褐灰色シルト質土
- 9 10YR5/1 褐灰色細粒砂含土
- 10 10YR4/2 灰黄褐色粗砂含シルト
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土
- 12 10YR3/1 黒褐色土
- 13 10YR3/2 黒褐色シルト質土
- 14 10YR3/2 黒褐色土
- 15 10YR3/2 黒褐色土 (カマド焼土少量含)

【SH1651】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土
- 2 10YR4/1 褐灰色土
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト質土
- 4 10YR2/1 黒褐色土
- 5 10YR4/2 灰黄褐色土
- 6 10YR5/1 褐灰色土 (土器少量含)
- 7 7.5YR4/4 褐色土 (ベースブロック 40%含)
- 8 10YR5/1 褐灰色土
- 9 10YR4/1 黒褐色シルト
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色土
- 11 10YR4/1 褐灰色土 (土器・炭含)
- 12 10YR3/2 黒褐色土 (炭含)



第 112 図 SH 1650・カマド・1651 実測図 (1 : 40・1 : 80)

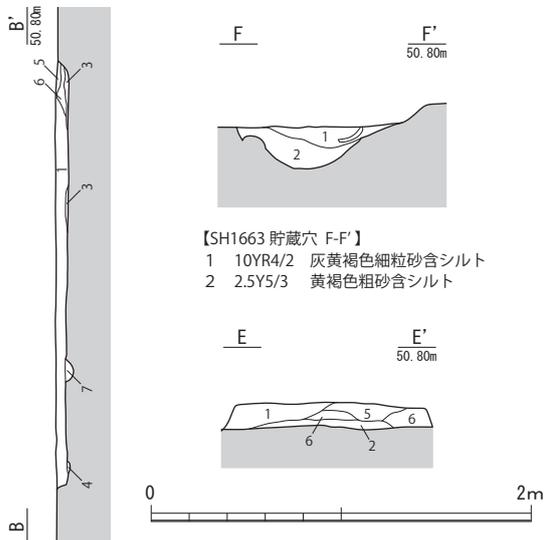
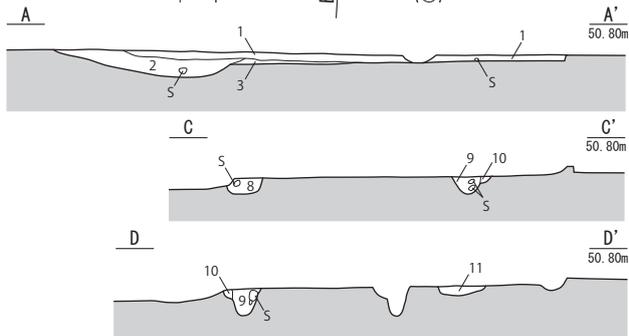
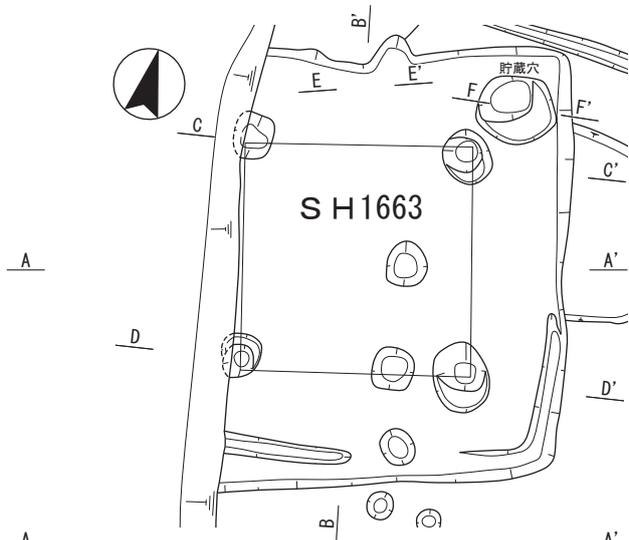


【SH1652 貯蔵穴 F-F'】

- 1 10YR4/1 褐色シルト質土 (10YR5/6 黄褐色砂質ブロック7%含)
- 2 10YR3/2 黒褐色土 (10YR4/4 褐色ブロック3%含)

【SH1652】

- 1 10YR3/1 黒褐色土
- 2 10YR3/2 黒褐色土 (極細粒砂含)
- 3 7.5YR5/2 灰褐色シルト
- 4 7.5YR4/1 褐灰色砂質土
- 5 5YR4/1 褐灰色土 (炭3%含)
- 6 7.5YR4/2 灰褐色シルト (焼土40%含)
- 7 2.5YR4/1 赤灰色極細粒砂含シルト (焼土20%含)
- 8 2.5Y5/6 黄褐色細粒砂含土
- 9 10YR4/1 褐灰色土
- 10 10YR4/1 褐灰色シルト
- 11 10YR5/1 褐色シルト
- 12 10YR4/1 褐灰色シルト質土
- 13 7.5YR5/4 にぶい褐色土



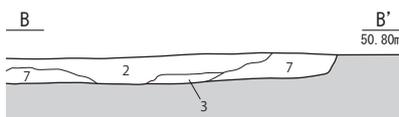
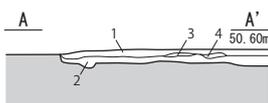
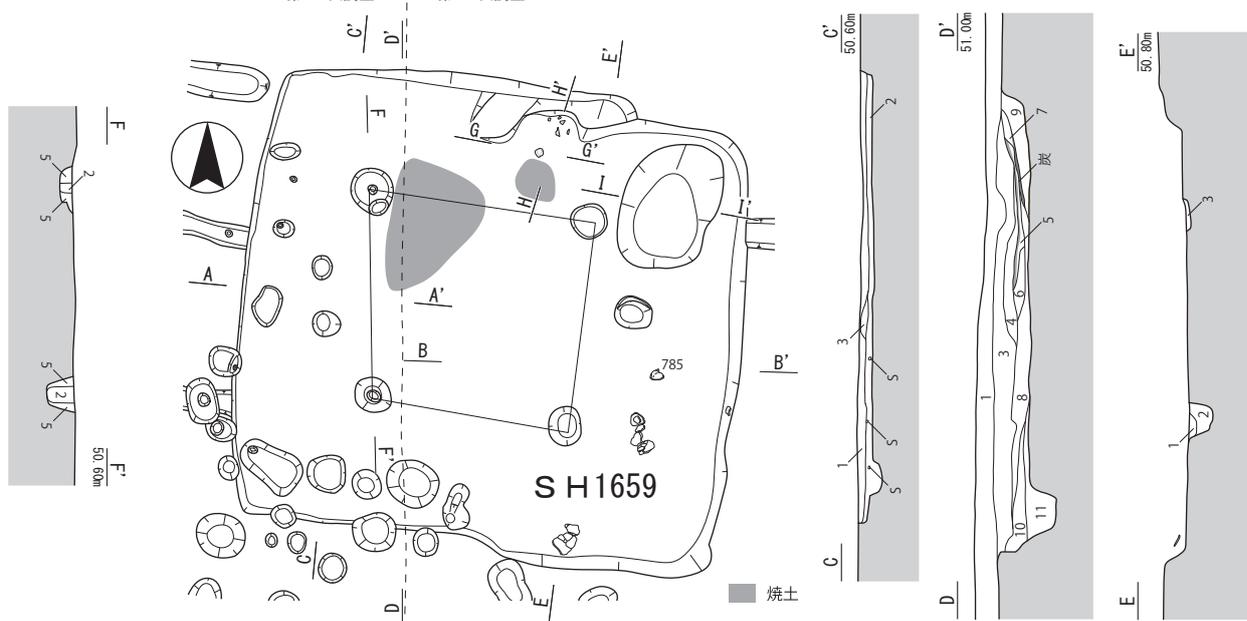
【SH1663 貯蔵穴 F-F'】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂含シルト
- 2 2.5Y5/3 黄褐色粗砂含シルト

【SH1663】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (黄褐色砂質ブロック30%含)
- 3 2.5Y5/4 黄褐色粗砂含シルト
- 4 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
- 5 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂含シルト
- 6 7.5YR4/3 褐色シルト (焼土30%含)
- 7 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂含シルト
- 8 2.5Y4/1 黄灰色粗砂含シルト
- 9 2.5Y4/1 黄灰色粗砂含シルト
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂含シルト
- 11 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト

第113図 SH1652・1663実測図 (1:40・1:80)



【SH1659 A-A'・C-C'・F-F'】

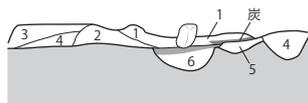
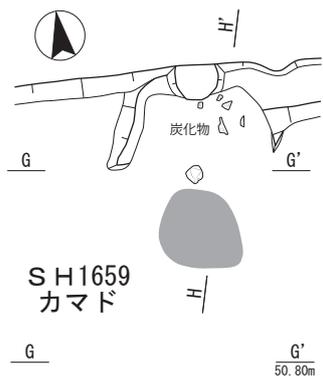
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（褐色ブロック微量含）
- 3 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土（焼土ブロック微量含）
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（褐色ブロック 30%含）
- 5 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土（黒褐色粘質土少量含）

【SH1659 主柱穴 E-E'】

- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色土
- 3 2.5Y5/1 黄灰色シルト

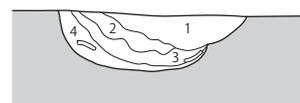
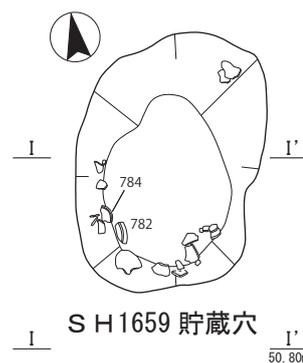
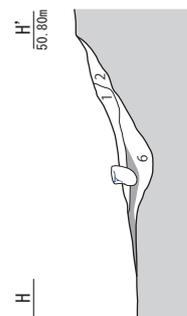
【SH1659 B-B' D-D'】

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色細粒砂含土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土
- 4 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂含シルト（焼土・炭 5%含）
- 5 5YR4/2 灰褐色砂質土（焼土 50%含）
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色土
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト（炭 30%含）
- 8 10YR3/3 暗褐色シルト
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 10 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭 3%含）
- 11 2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト



【SH1659 カマド】

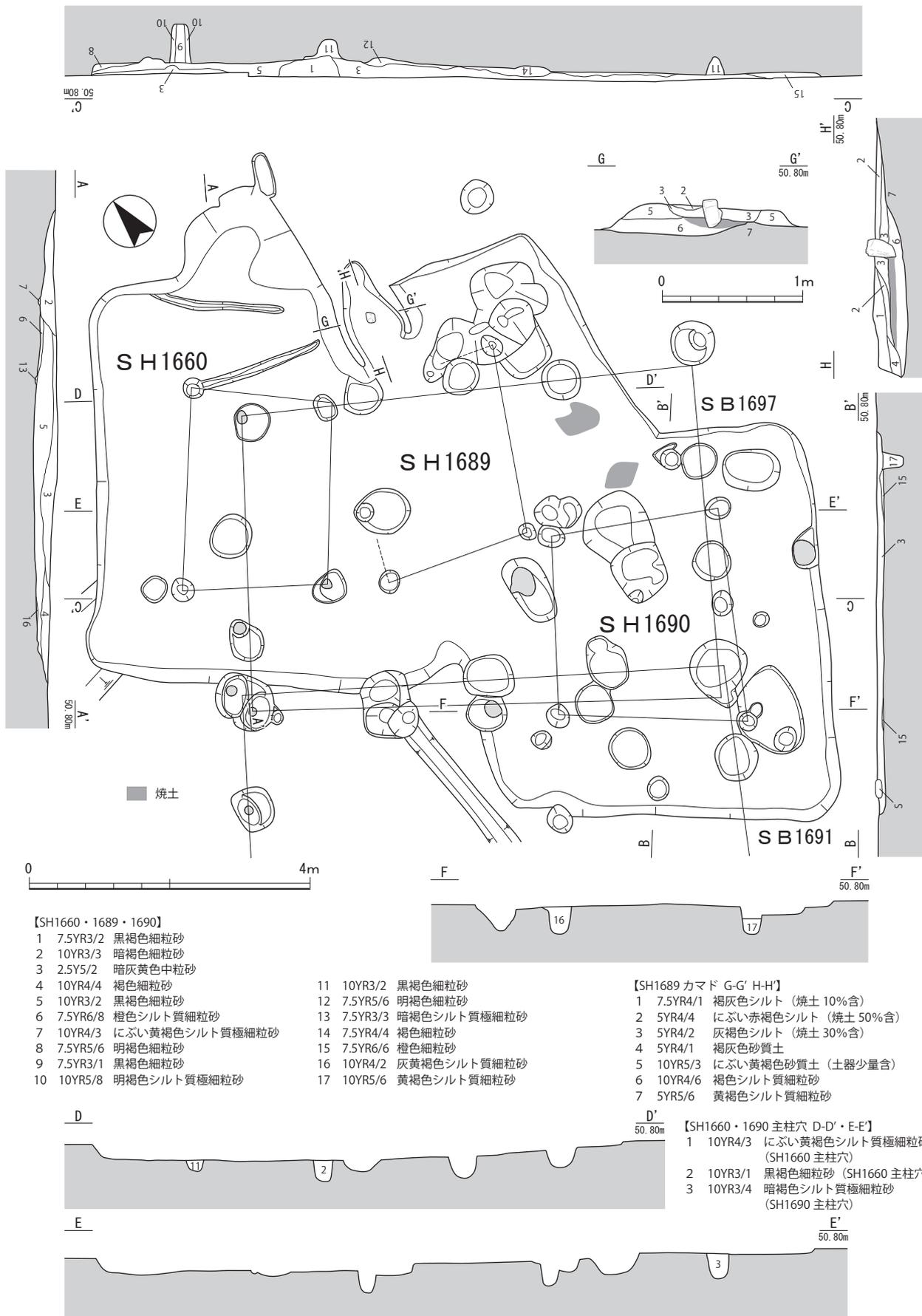
- 1 7.5YR4/2 灰褐色土（焼土ブロック 50%・炭層状含）
- 2 10YR4/6 褐色シルト質土（黄灰色極細粒砂 7%含）
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト（焼土 20%・炭少量含）
- 4 10YR4/4 褐色シルト質土
- 5 10YR4/6 褐色シルト
- 6 7.5YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂



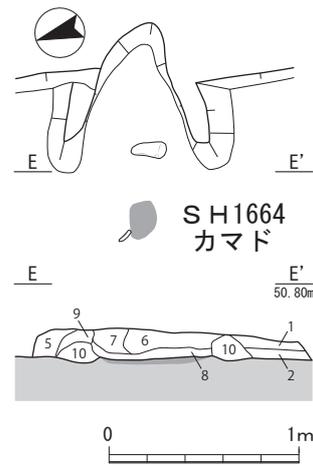
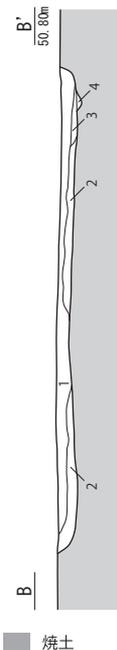
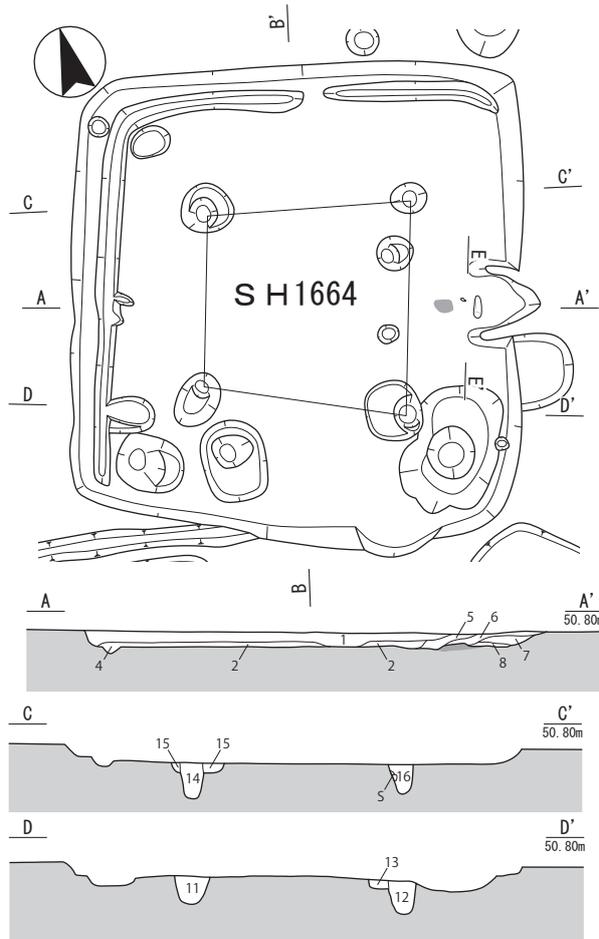
【SH1659 貯蔵穴】

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト（炭・焼土少量含）
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土（焼土少量含）
- 3 10YR4/1 褐灰色土（焼土 20%・黄灰色砂質ブロック 15%含）
- 4 2.5Y5/4 黄灰色土（焼土少量含）

第 114 図 SH 1659・カマド・貯蔵穴実測図（1：40・1：80）

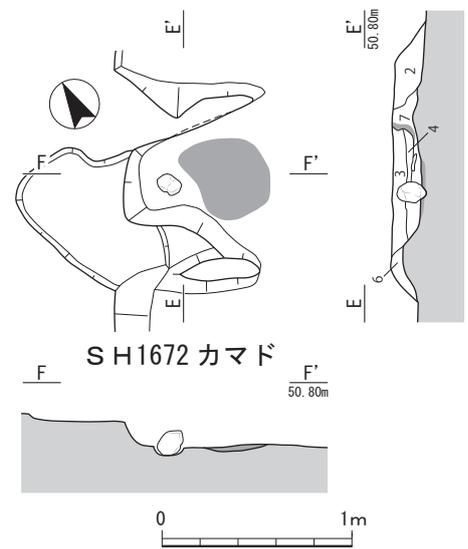
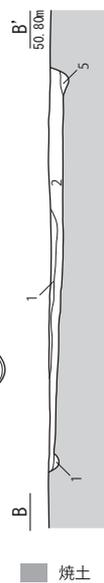
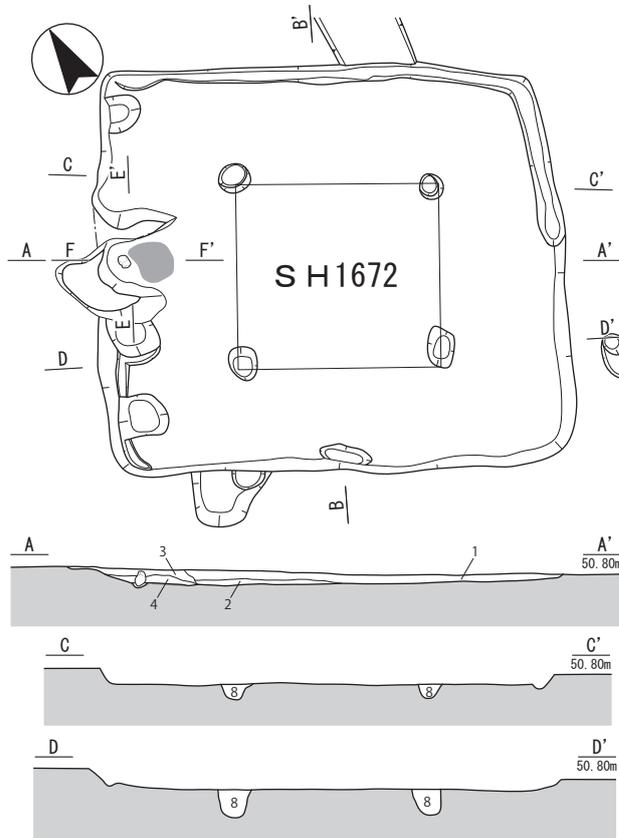


第115図 SH1660・1689・1690・カマド実測図 (1:40・1:80)



【SH1664】

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂含シルト (炭少量含)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土 (焼土・炭5%含)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土
- 4 10YR4/1 褐灰色シルト質土 (壁周溝)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色土 (炭少量含)
- 6 7.5YR4/1 褐灰色 (焼土7%含)
- 7 7.5YR3/1 黒褐色極細粒砂含シルト (焼土30%含)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色土
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色粗粒砂含シルト
- 10 2.5Y5/3 黄褐色粗粒砂含シルト
- 11 2.5Y3/1 黒褐色土
- 12 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土
- 13 10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂含シルト
- 14 10YR4/1 褐灰色シルト質土
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂含シルト
- 16 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土

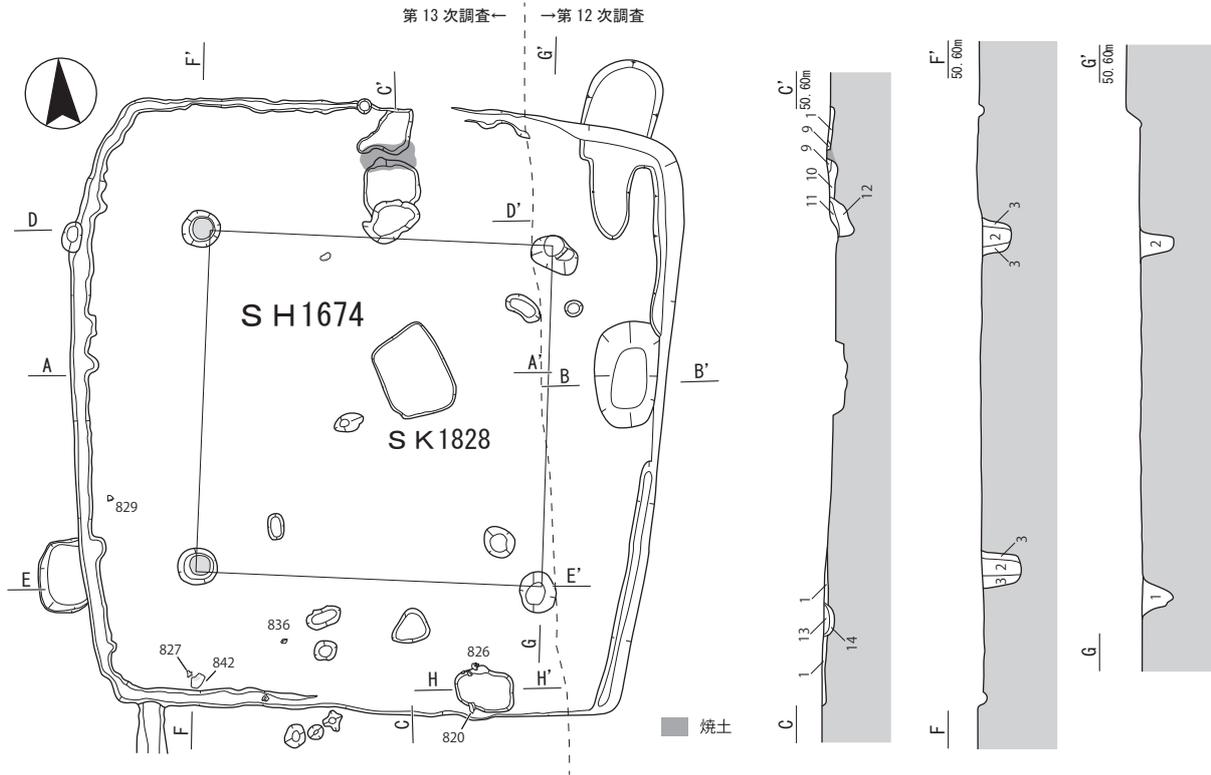


【SH1672】

- 1 10YR4/6 褐色細粒砂
- 2 10YR4/4 褐色細粒砂
- 3 7.5YR4/3 褐色細粒砂 (焼土3%含)
- 4 7.5YR5/6 明褐色シルト質細粒砂
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂
- 6 黄褐色シルト質土
- 7 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 (炭少量含)
- 8 10YR4/6 褐色細粒砂含シルト

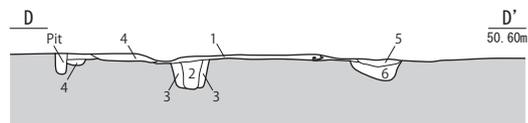


第116図 SH1664・カマド・1672・カマド実測図 (1:40・1:80)



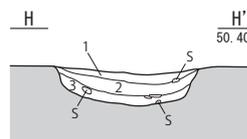
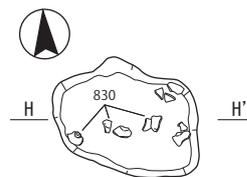
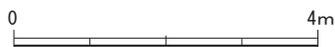
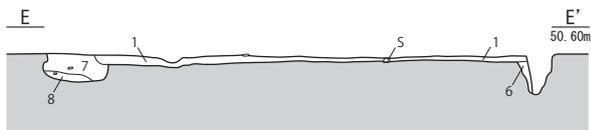
【SH1674 主柱穴 G-G'】

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (炭含)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト (炭含)



【SH1674 東土坑 B-B'】

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト質土 (炭少量含)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 3 2.5Y5/3 黄褐色シルト (10YR5/6 黄褐色砂質土ブロック 30%含)



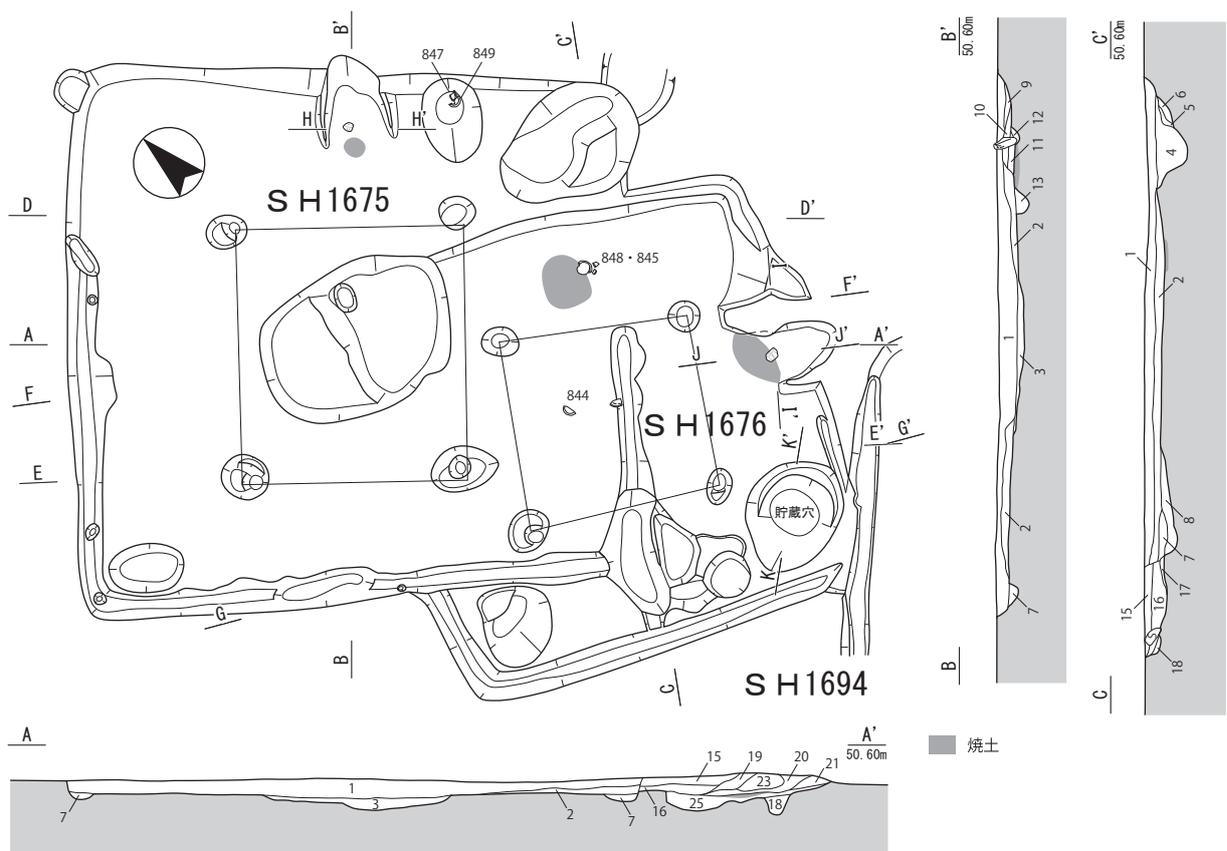
【SH1674 南東土坑】

- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック 30%含)
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (炭化物極微量含)

【SH1674】

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト～粗粒粘砂土
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック 40%含)
- 4 10YR4/1 褐灰色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック 30%含)
- 5 10YR4/1 褐灰色シルト～粗粒粘砂土 (焼土斑状 30%含)
- 6 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 7 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ0.1～1cm炭化物少量含)
- 8 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 9 5YR5/8 明赤褐色シルト～粗粒粘砂土
- 10 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック少量含)
- 11 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック 30%含)
- 12 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土
- 13 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 14 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土

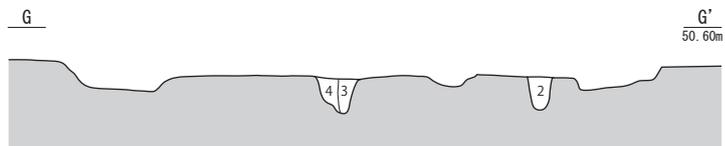
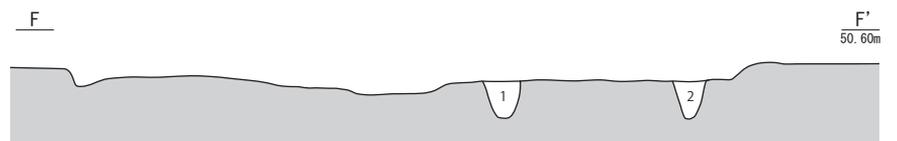
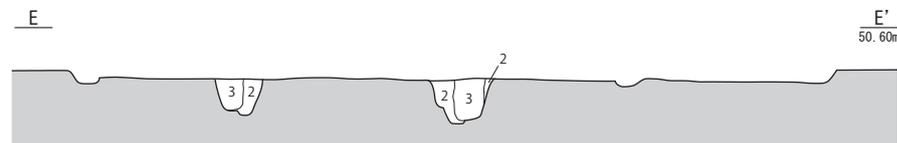
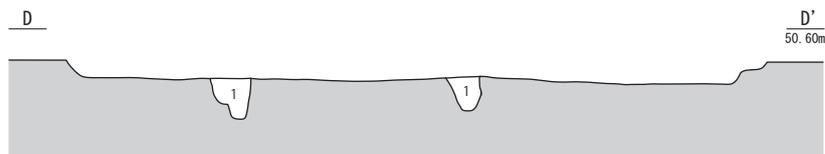
第117図 SH1674・南東土坑実測図 (1:40・1:100)



【SH1675・1676 A-A'・B-B'・C-C'・H-H'・I-I'・J-J'】

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト質土
- 2 10YR3/2 黒褐色土
- 3 不明 (貼床下土坑)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂含シルト
- 5 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 6 10YR5/6 黄褐色シルト
- 7 2.5Y5/4 黄褐色粗砂含シルト
- 8 10YR4/1 褐灰色細粒砂含シルト (炭3%含)
- 9 7.5YR4/2 灰褐色土 (焼土3%含)
- 10 10YR4/2 灰黄褐色土
- 11 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (焼土30%含)
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂

- 13 10YR4/6 褐色シルト質極細粒砂
- 14 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
- 15 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
- 16 2.5Y3/1 黒褐灰色シルト質土
- 17 2.5Y5/6 黄褐色土
- 18 2.5Y5/1 黄灰色シルト質土
- 19 2.5Y5/3 黄褐色粗砂含シルト
- 20 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (焼土50%含)
- 21 7.5YR 灰褐色シルト
- 22 5YR5/1 褐灰色砂質土
- 23 7.5YR5/3 にぶい赤褐色土
- 24 10YR4/6 褐色シルト
- 25 7.5YR4/4 褐色シルト



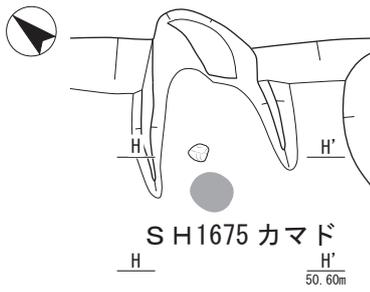
【SH1675 主柱穴 D-D'・E-E'】

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト

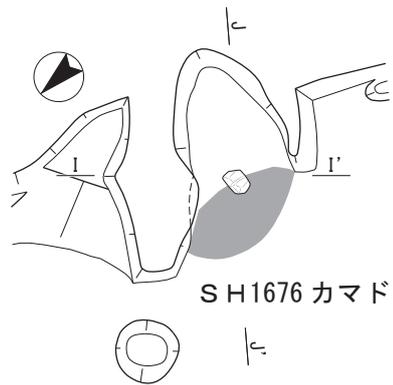
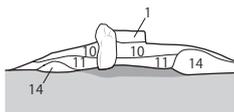
【SH1676 主柱穴 F-F'・G-G'】

- 1 7.5YR3/1 黒褐色極細粒砂含シルト
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト (土器少量含)

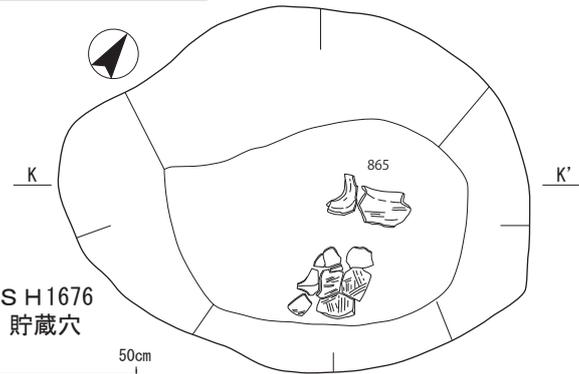
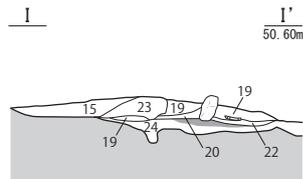
第118図 SH1675・1676 実測図 (1:80)



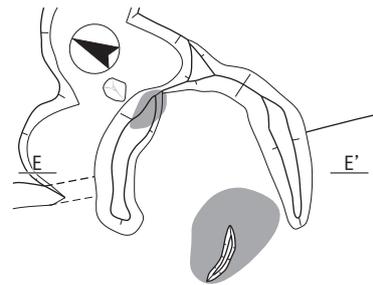
SH1675 カマド



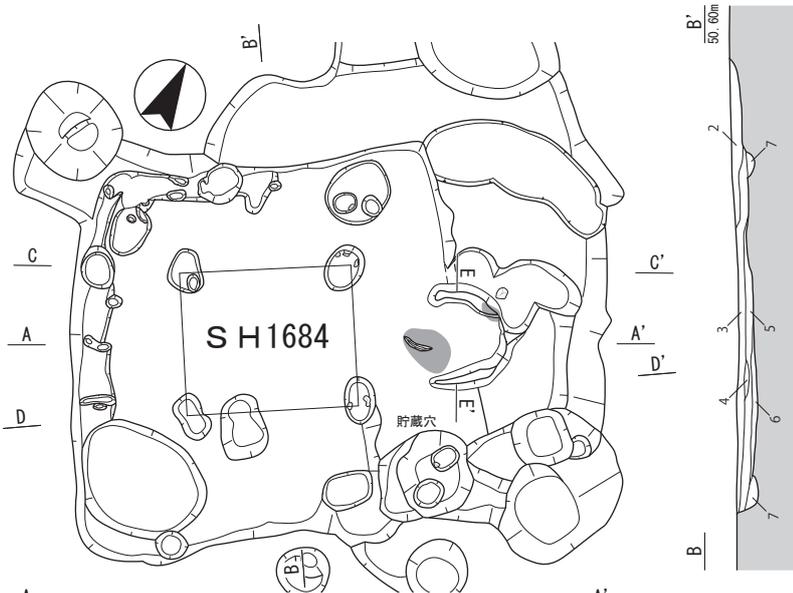
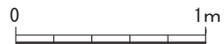
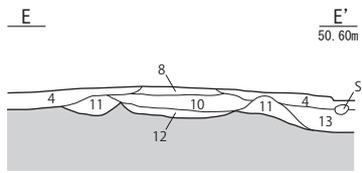
SH1676 カマド



SH1676 貯蔵穴



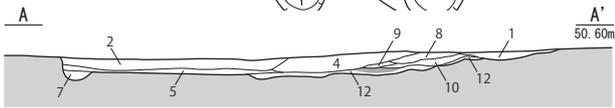
SH1684 カマド



SH1684

貯蔵穴

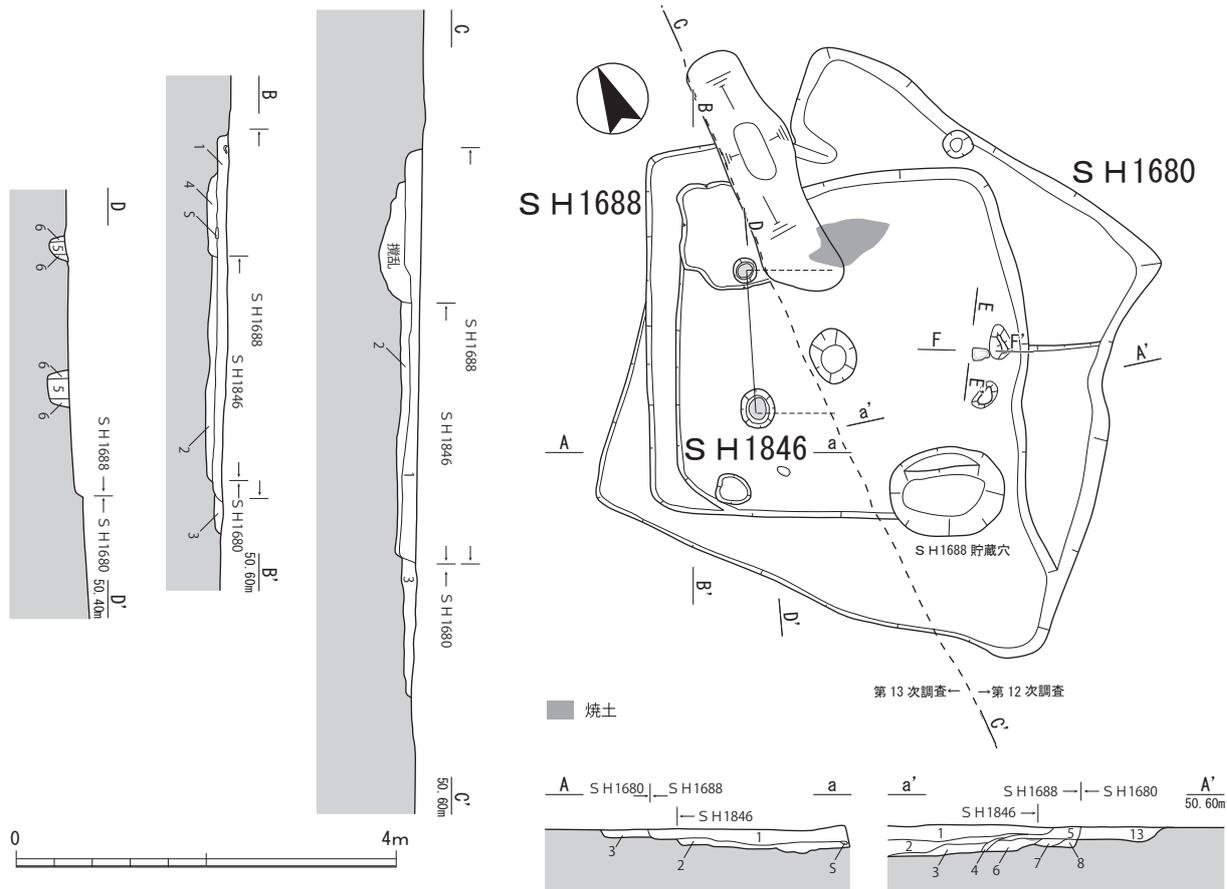
■ 焼土



- 【SH1684】
- 1 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
 - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂含シルト
 - 5 10YR4/4 褐色シルト含土
 - 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質土 (ベースブロック 30% 焼土・炭 3%含)
 - 7 10YR4/1 褐灰色シルト
 - 8 7.5YR4/2 灰褐色シルト (焼土 3%含)
 - 9 7.5YR4/1 褐灰色シルト (焼土 3% 炭 7%含)
 - 10 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (焼土 50%含)
 - 11 10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂含シルト
 - 12 7.5YR4/3 褐色シルト質極細粒砂
 - 13 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
 - 14 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭少量含)
 - 15 10YR4/1 褐灰色
 - 16 10YR4/2 灰黄褐色土
 - 17 2.5Y5/4 黄褐色シルト (褐灰色砂質ブロック含)



第119図 SH1675 カマド・1676 カマド・貯蔵穴・1684・カマド実測図 (1:20・1:40・1:80)

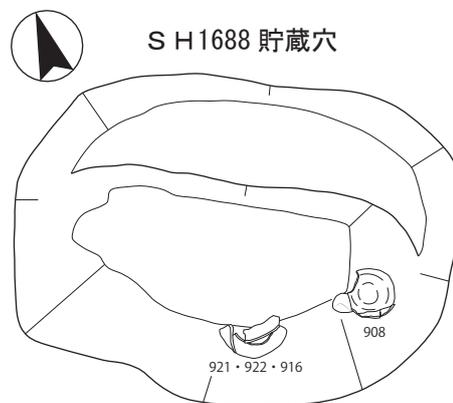
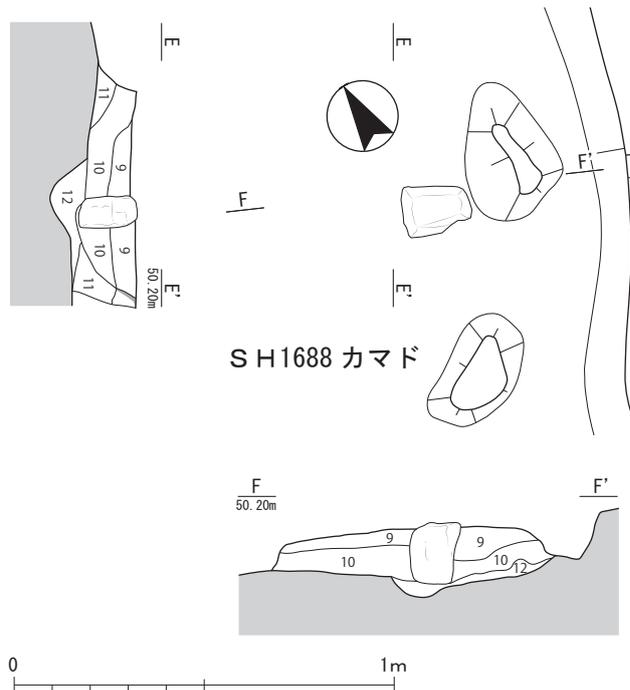


【SH1680・1688・1846 第13次調査 C-C'・B-B'・D-D'】

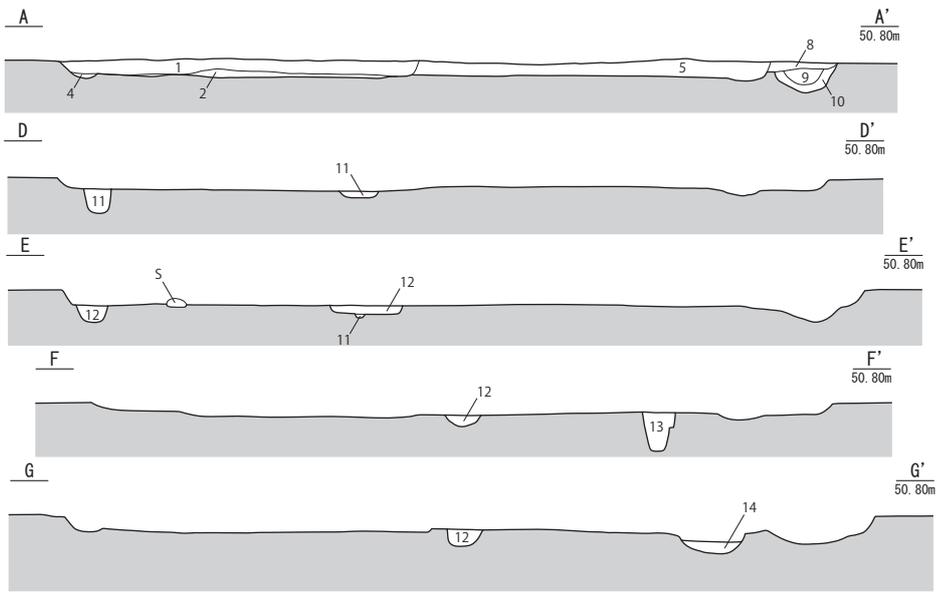
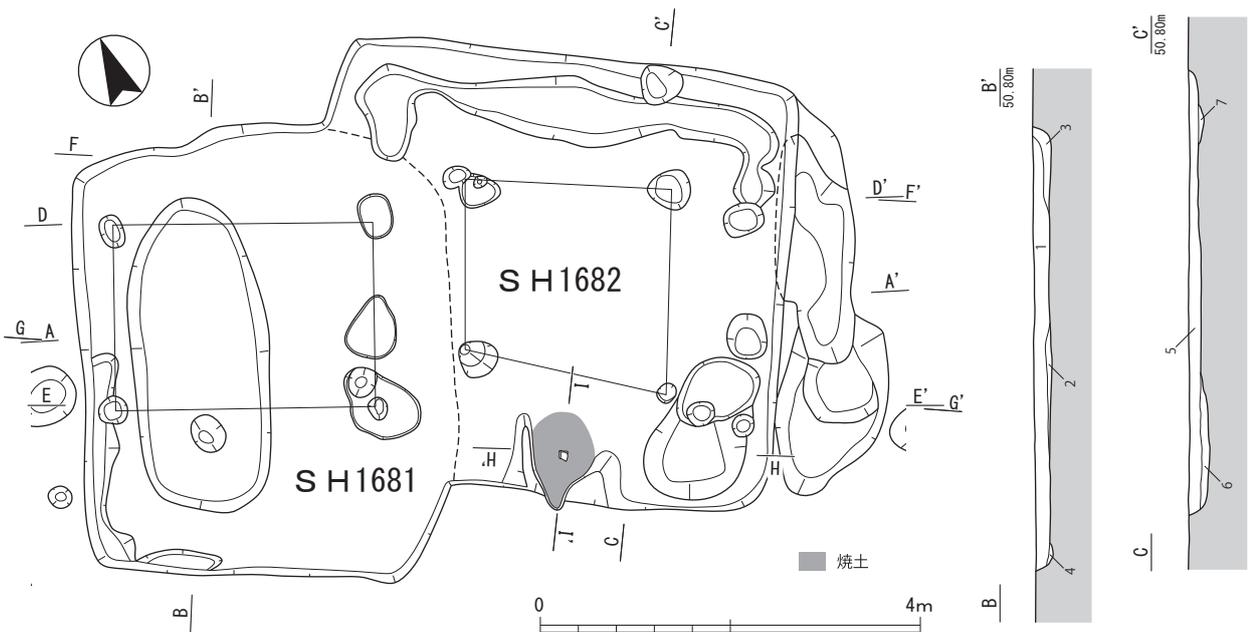
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック極微量含)
- 2 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 4 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック 20%含)
- 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック極微量含)
- 6 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂質土 50%含)

【SH1688 A-a・a'-A'・E-E'・F-F'】

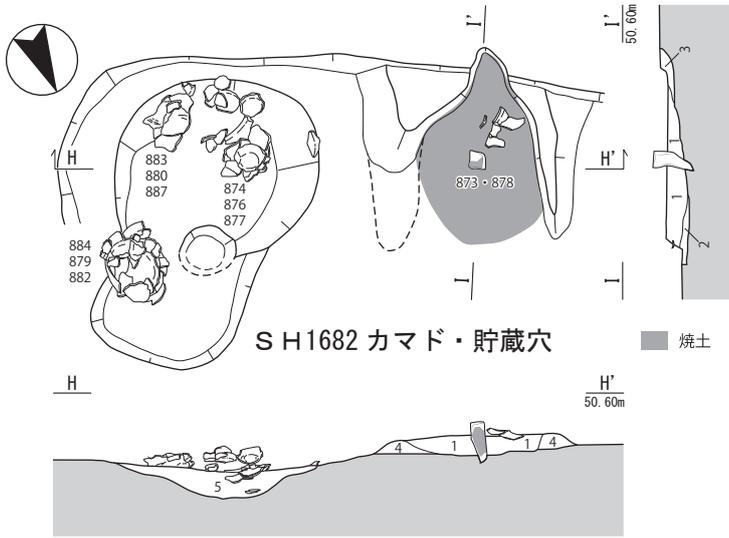
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂含シルト (焼土 15%含)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト含土 (焼土・炭 7%含)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト含土 (焼土含)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂含土
- 5 7.5YR4/2 灰褐色シルト (焼土 30%含)
- 6 7.5YR4/1 褐灰色シルト (焼土 50%含)
- 7 7.5YR4/2 褐灰色シルト
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色土
- 9 5YR4/2 灰褐色シルト (炭・焼土 3%含)
- 10 7.5YR4/3 褐色砂質土 (焼土 5%)
- 11 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂含シルト
- 12 10YR5/6 黄褐色シルト質細粒砂
- 13 10YR4/6 褐色シルト



第120図 SH1680・1688・1846・1688 カマド・貯蔵穴実測図 (1:20・1:80)

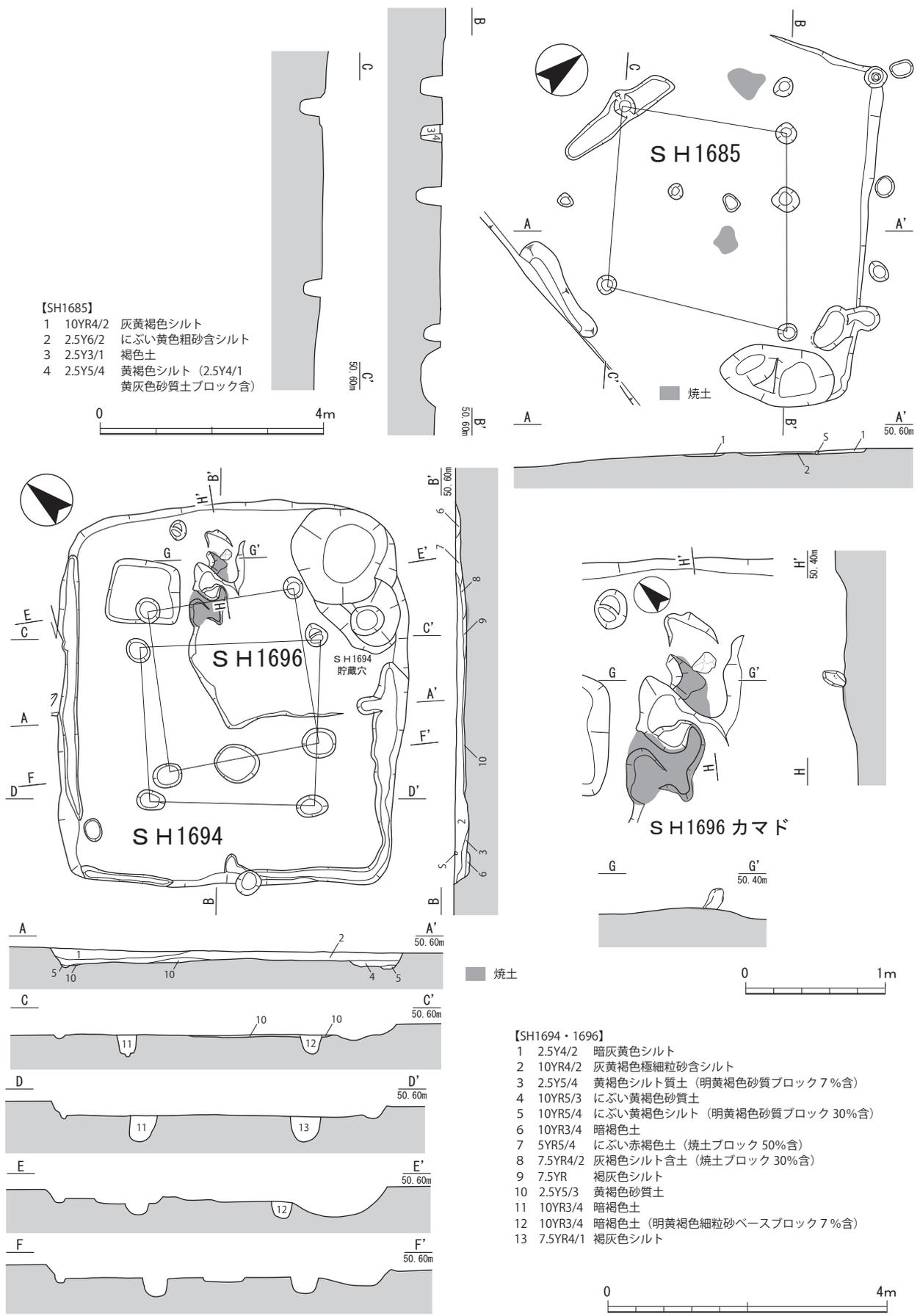


- 【SH1681・1682】
- 1 10YR3/2 黒褐色細粒砂含シルト
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
 - 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (明黄褐色砂質土ブロック含)
 - 4 10YR5/1 褐灰色シルト
 - 5 10YR3/1 黒褐色シルト (土器含)
 - 6 5YR4/1 褐灰色粗粒砂含シルト (焼土ブロック7%含)
 - 7 7.5YR3/1 黒褐色シルト
 - 8 10YR5/2 灰黄褐色シルト
 - 9 10YR3/2 黒褐色細粒砂含シルト
 - 10 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂含シルト
 - 11 10YR3/2 黒褐色シルト
 - 12 10YR4/1 褐灰色シルト
 - 13 10YR3/2 黒褐色シルト (炭・焼土3%)
 - 14 2.5Y4/2 暗灰黄色粗粒砂 (土器多含)

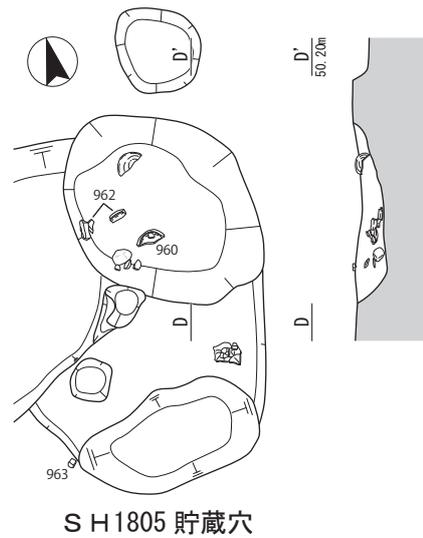
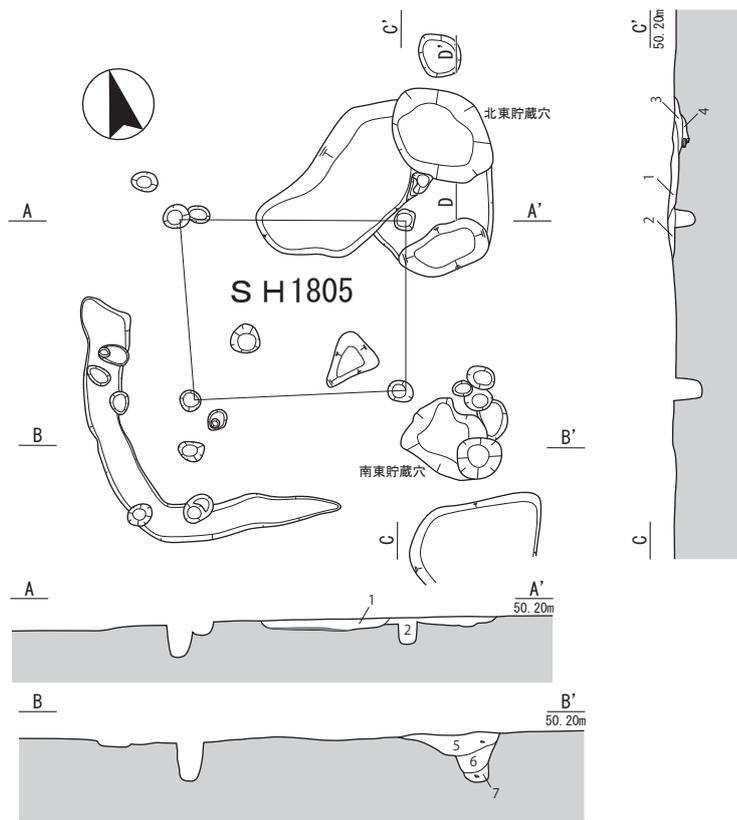


- 【SH1682 カマド・貯蔵穴】
- 1 5YR3/3 暗赤褐色土 (焼土30%含)
 - 2 5YR3/6 暗赤褐色粗砂含土
 - 3 10YR4/4 褐色シルト
 - 4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
 - 5 10YR3/2 黒褐色シルト (明黄褐色砂ブロック含)

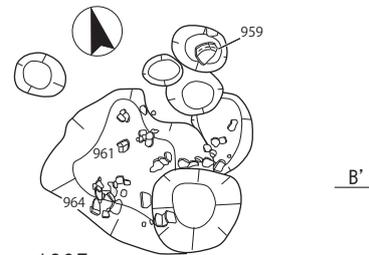
第121図 SH1681・1682・カマド・貯蔵穴実測図 (1:40・1:80)



第122図 SH1685・1694・1696・カマド実測図 (1:40・1:80・1:100)



S H 1805 貯蔵穴

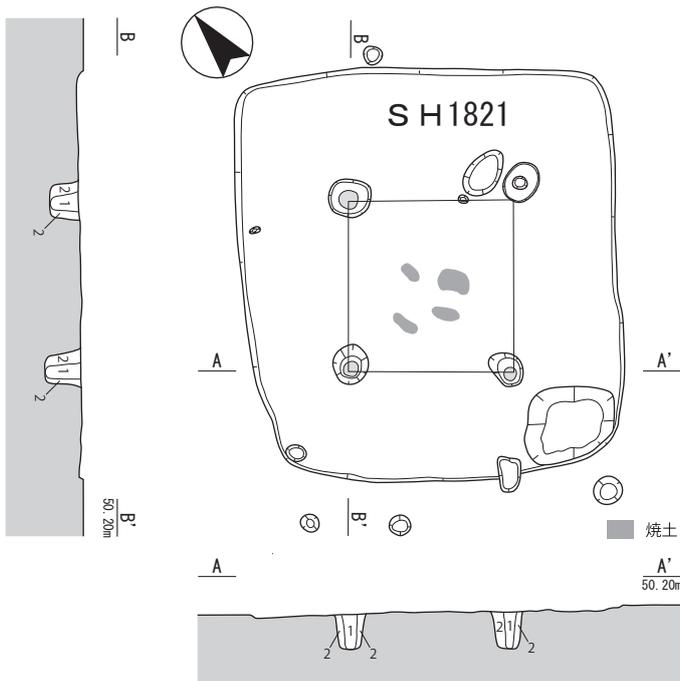


S H 1805
遺物出土状況



【SH1805】

- | | |
|---|-------------------------|
| 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 | 4 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 |
| 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 | 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 |
| 3 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(φ 5mm焼土ブロック 10%含) | 6 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 |
| | 7 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 |

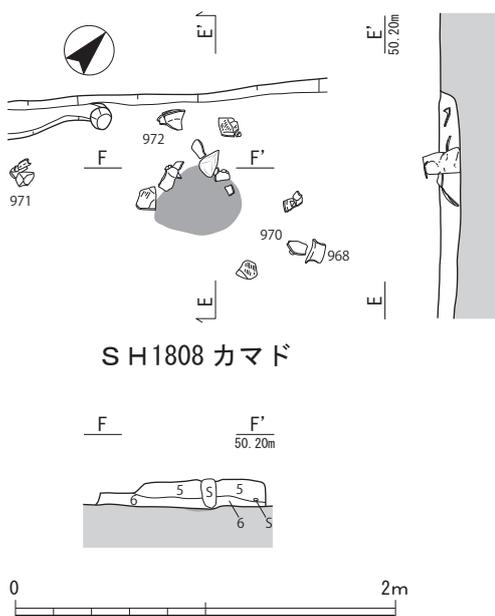
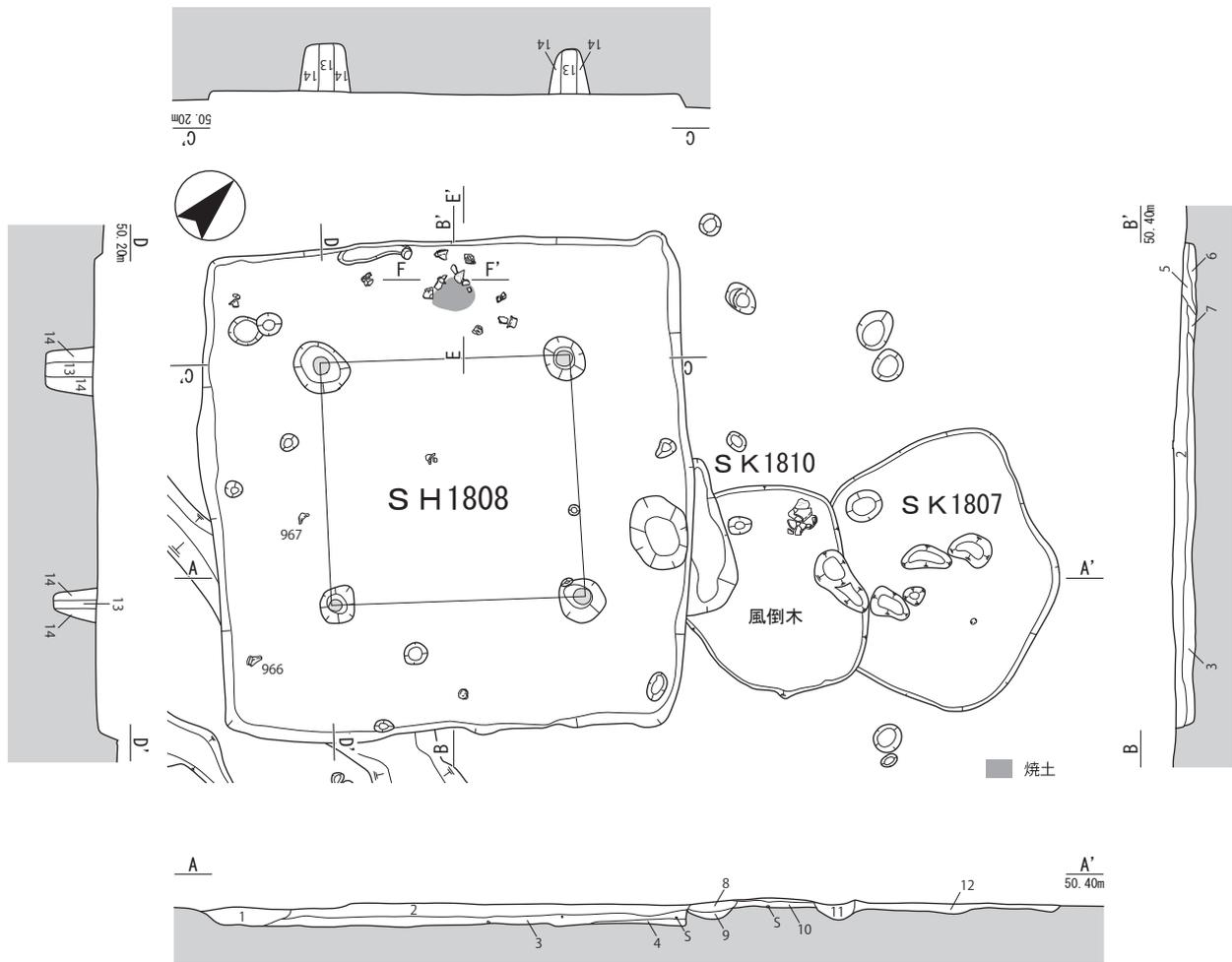


【SH1821 支柱穴】

- | |
|---|
| 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 |
| 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
(褐色ブロック 20～30%含) |



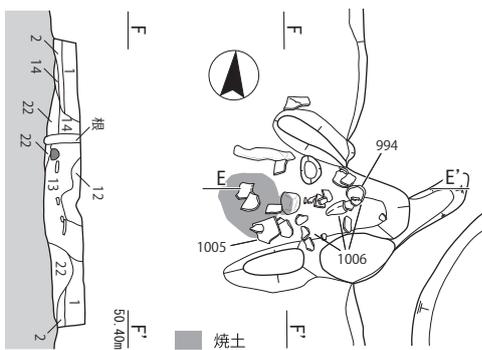
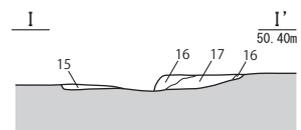
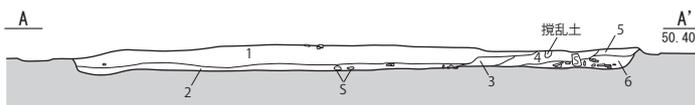
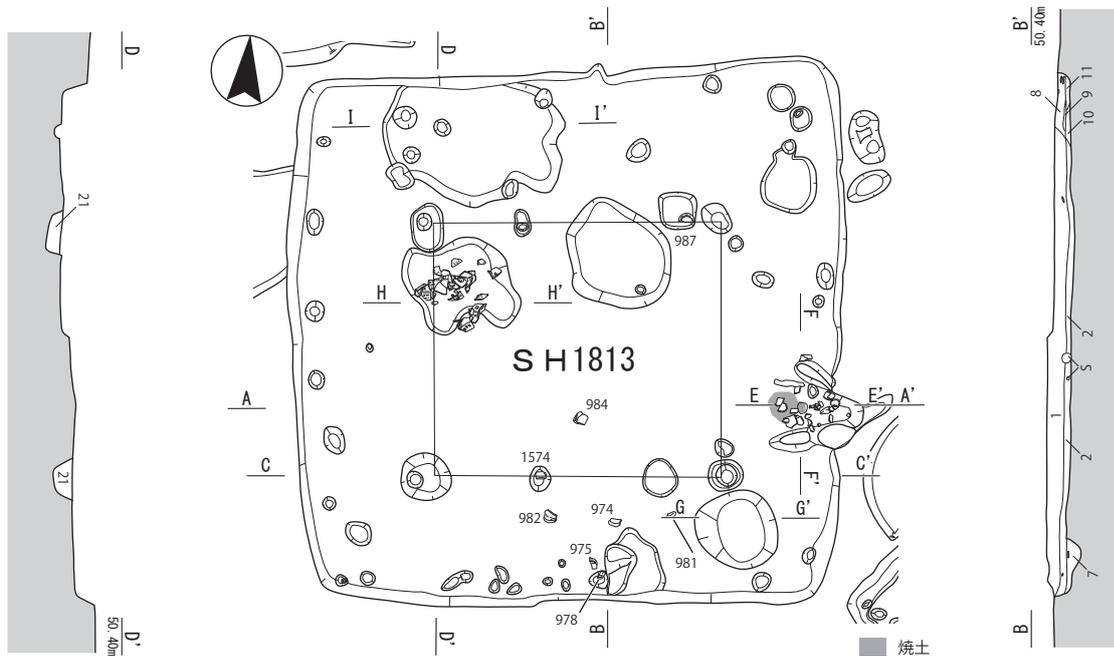
第 123 図 S H 1805 ・貯蔵穴 ・遺物出土状況 ・1821 実測図 (1 : 40 ・ 1 : 80)



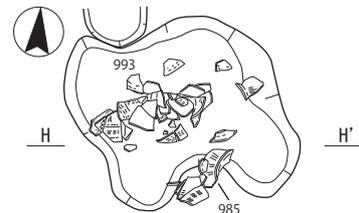
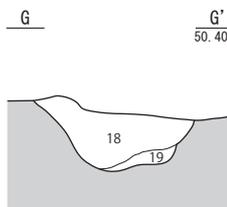
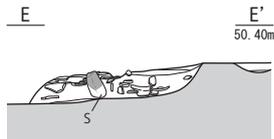
【SH1808・SK1807・1810】

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(褐色ブロック斑状微量含)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
(褐色ブロック斑状40%含)
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
(焼土ブロック微量含)
- 6 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
(焼土ブロック斑状10%含)
- 7 7.5YR4/4 暗褐色ブロック土
- 8 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 9 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
(褐色ブロック斑状30%含)
- 10 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土
(風倒木)
- 11 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 12 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 13 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 14 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土
(黒褐色粘質土・礫少量含)

第124図 SH1808・カマド実測図(1:40・1:80)



SH1813 カマド

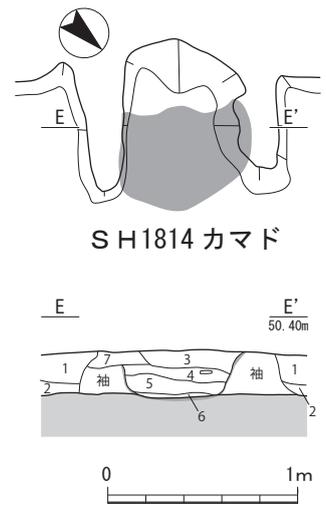
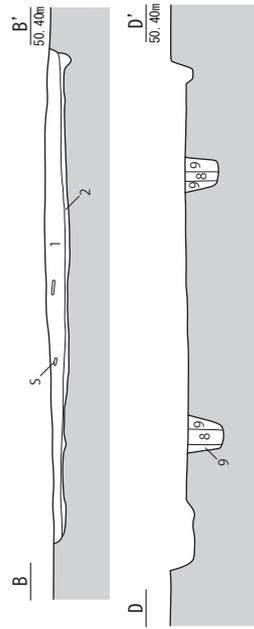
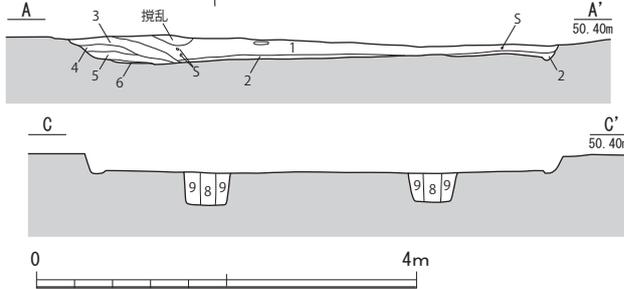
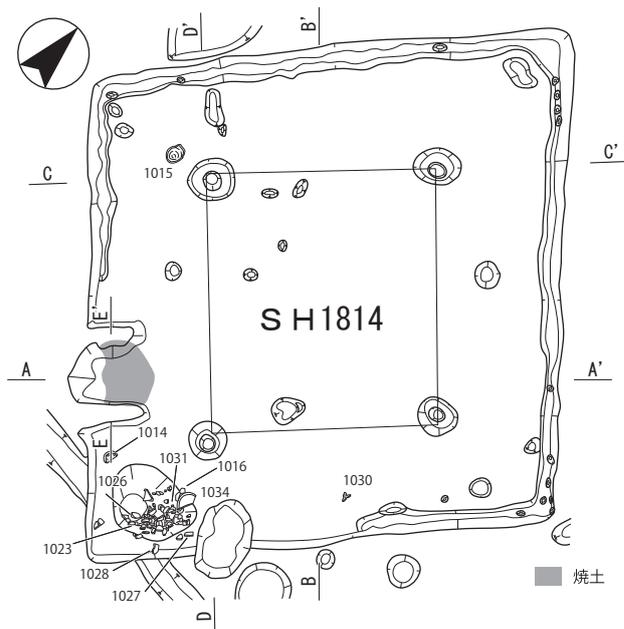


SH1813 北西土坑

【SH1813】

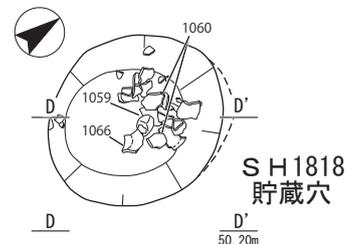
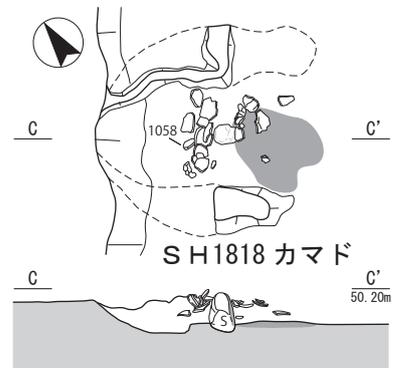
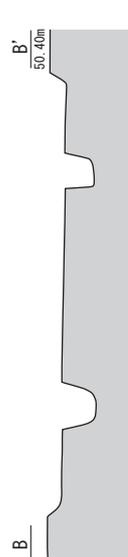
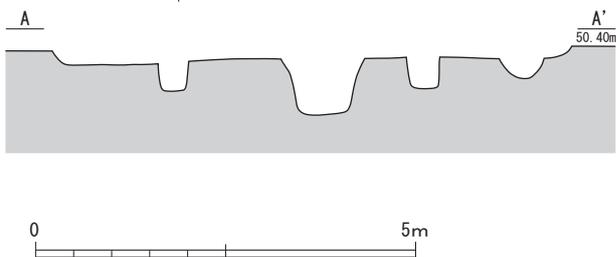
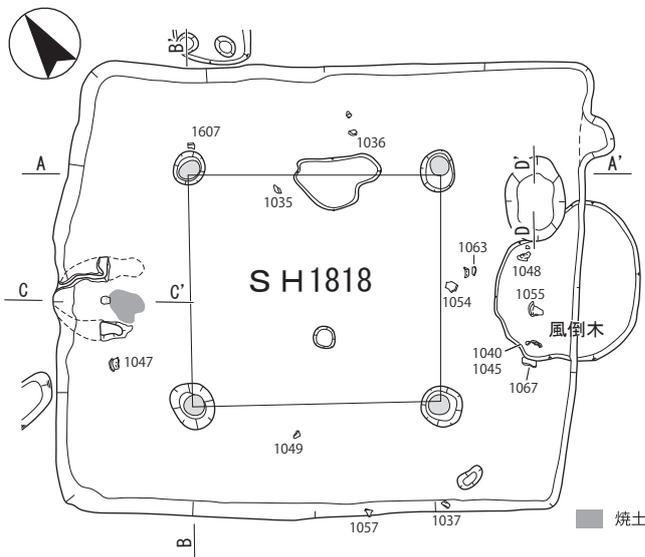
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ0.5～3cm炭化物微量含)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック斑状5%含)
- 3 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック・焼土ブロック・φ1mm炭化物極微量含)
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック・焼土ブロック微量含)
- 5 10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック30%含)
- 6 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック40% φ3～18cm炭化物含)
- 7 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック斑状20%・φ5mm炭化物微量含)
- 8 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック斑状40%含)
- 9 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/8明褐色焼土ブロック帯状60%含)
- 10 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土70%含)
- 11 7.5YR3/3 明褐色シルト～粗粒粘砂土 (φ3cm焼土ブロック微量含)
- 12 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 13 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土80%・炭化物微量含)
- 14 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック40%含)
- 15 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 16 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック30%・炭化物少量含)
- 17 10YR5/6 黄褐色シルト～粗粒粘砂土 (16含)
- 18 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 19 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (黄褐色ブロック20%含む)
- 20 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 21 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (暗褐色粘質土・礫少量含)
- 22 7.5YR3/3 暗褐色 (黄褐色ブロック斑状10%含)

第125図 SH1813・カマド・北西土坑実測図 (1:40・1:80)



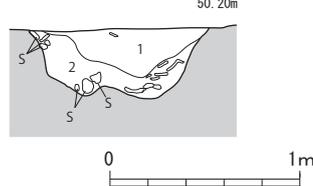
【SH1814】

- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック微量含)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック 20%・焼土ブロック微量含)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック 30%含)
- 5 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック微量炭化物微量含)
- 6 5YR3/4 暗赤褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土多含)
- 7 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック微量含)
- 8 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 9 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (暗褐色粘質土・礫少量含)

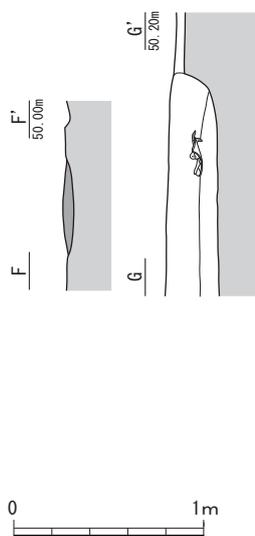
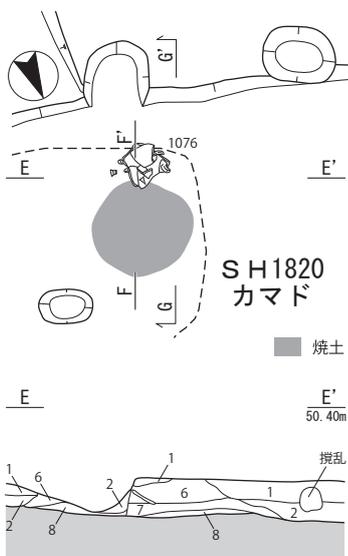
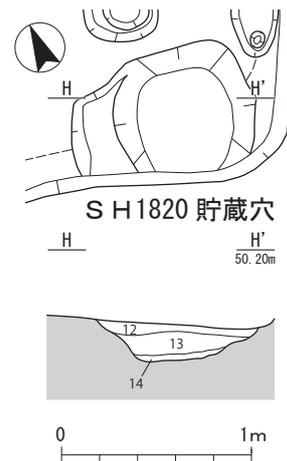
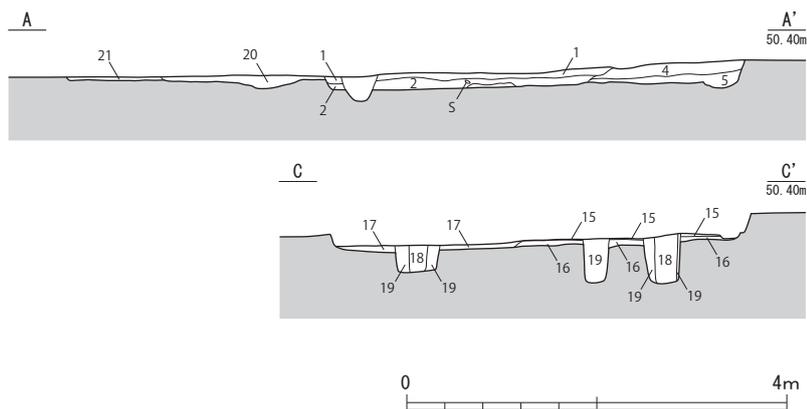
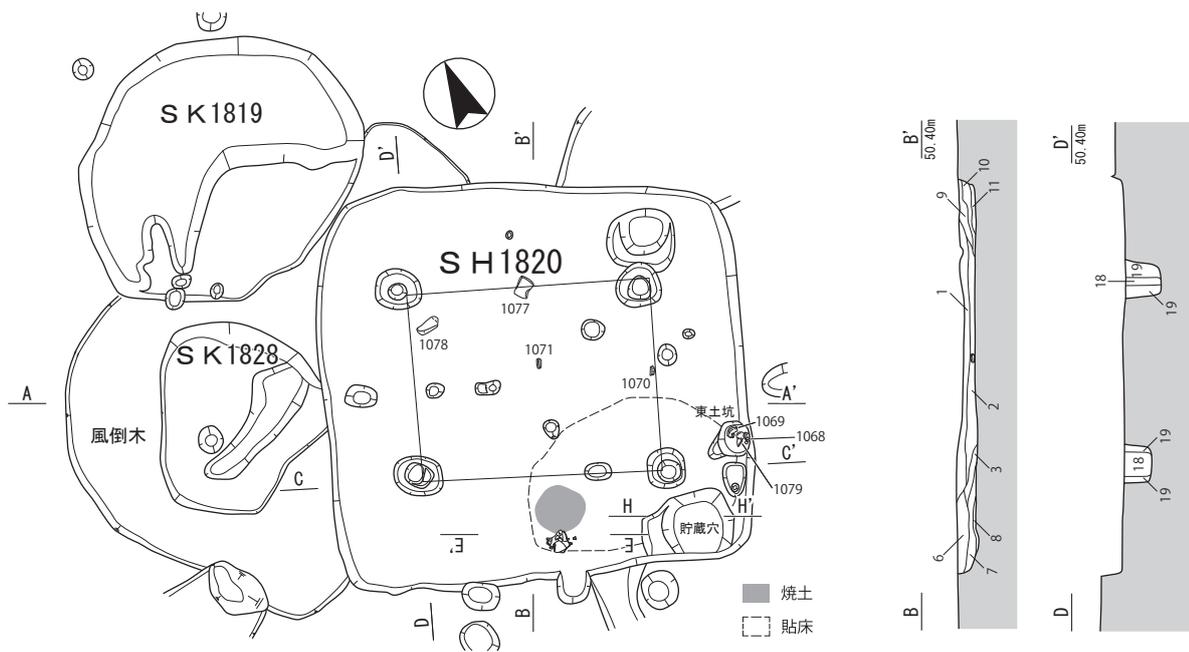


【SH1818 貯蔵穴】

- 1 7.5YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (炭化物・焼土少量含)
- 2 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (炭化物・焼土・ベースブロック 10%含)



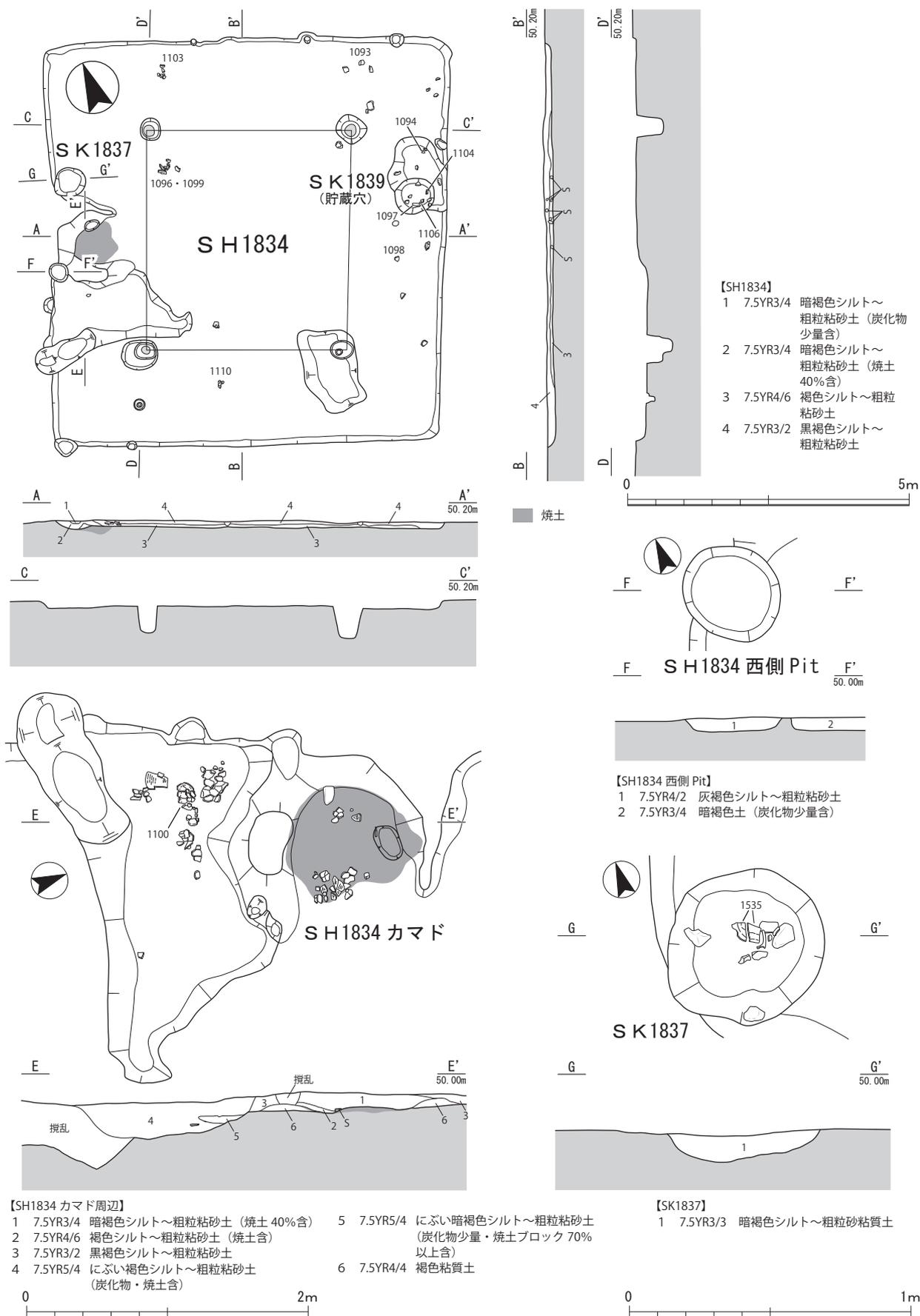
第 126 図 SH 1814・カマド・1818・カマド・貯蔵穴実測図 (1 : 40・1 : 100)



【SH1820】

- 1 10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック斑状少量含)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (5YR5/6 明褐色焼土ブロック・炭化物 30%含)
- 4 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 5 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック少量含)
- 6 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (2.5YR4/6 赤褐色焼土ブロック 30%含)
- 7 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (2.5YR4/6 赤褐色焼土ブロック 20%・炭化物 5%含)
- 8 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (2.5YR4/6 赤褐色焼土ブロック 20%・5YR5/6 明褐色焼土ブロック微量含)
- 9 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック微量含)
- 10 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック 10%・炭化物微量含)
- 11 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (炭化物層状 90%含)
- 12 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
- 13 7.5YR4/2 灰褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック微量含)
- 14 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック 30%・炭化物極微量含)
- 15 10YR5/6 黄褐色シルト～粗粒粘砂土 (貼床)
- 16 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 [整地土]
- 17 10YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (黄褐色土 40%斑状含)
- 18 10YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 19 7.5YR4/4 褐色シルト～粗粒粘砂土 (暗褐色粘質土・礫少量含)
- 20 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘質土 (褐色ブロック少量含)
- 21 風倒木

第127図 SH1820・カマド・貯蔵穴実測図 (1:40・1:80)



第129図 SH1834・カマド・西側Pit・SK1837実測図（1：20・1：40・1：100）

イ 掘立柱建物・柱列

当該期の掘立柱建物を 97 棟、柱列を 2 列検出した。柱穴の形状は、大半が円形であるが、中には規模も大きく、隅丸形状を呈するものもある。側柱建物の多くは桁行が 3 間か 4 間であるが、5 間を超えるものも含まれる。また、桁行の中央の柱間が広がるもの、四隅の柱穴が建物の軸方向から約 45 度振れる方向に掘削されるものなどもある。

建物の方位がある程度一致し、柱筋の通りが一直線になるものもあり、場所によっては規則的な配置をとるようなものも見受けられる。

S B 1045 (第 130 図) 第 4 次調査区の西側で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (4.2 m) × 梁行 3 間 (3.6 ~ 3.8 m) の東西棟である。棟方位は、N 2° E である。柱間は、桁行が 1.4 m の等間、梁行が東側は 1.2 m の等間、西側は若干不等間である。東柱の内、北東部分と南西部分の 2 つは確認されなかった。なお、桁行中央の柱穴が、南北ともに若干外に飛び出る位置に存在する。

出土遺物には、土師器数点と縄文土器深鉢 (1575) があるが、混入であろう。

S B 1065 (第 130 図) 第 4 次調査区の南西隅で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.9 m) × 梁行 3 間 (4.35 m) の南北棟である。棟方位は、N 31° W である。柱間は、桁行が 1.65 m と 1.8 m、梁行が 1.35 m と 1.5 m とばらつき、等間ではない。

出土遺物には、土師器甕 (1112・1113) の他、土師器数点がある。

S B 1066 (第 131 図) 第 4 次調査区の西側で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (5.25 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の南北棟である。棟方位は、N 50° W である。桁行の柱間は、北側の 2 間分が 1.8 m、南側 1 間分は 1.65 m である。梁行の柱間は、西側が広く 2.25 m、東側が 1.65 m と狭い。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1067 (第 131 図) 第 4 次調査区の西側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.7 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の南北棟である。棟方位は、N 40° W である。桁行の柱間は、北から 1.65 m + 2.25 m + 1.8 m で、中央の柱間が広いのが特徴である。梁行の柱間は 1.95 m の等間であるが、妻柱に当たる柱穴は、若干

外側に飛び出る位置にある。

出土遺物には、須恵器片の他、北西隅の柱穴から土師器甕 (1114)、土師器数点がある

S B 1068 (第 132 図) 第 4 次調査区の南側で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (4.8 m) × 梁行 2 間 (3.0 m) の東西棟である。棟方位は、N 5° W である。柱間は、桁行 1.2 m の等間、梁行 1.5 m の等間である。建物の東側で、S H 1063 と S B 1084 と重複する。新旧関係は、S H 1063 → S B 1084 → S B 1068 である。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1069 (第 132 図) 第 4 次調査区の南側で検出した側柱建物である。この建物の周辺には、多くの柱穴や、風倒木、攪乱、竪穴建物 S H 1054 などが重複している。なお、南側には S B 1083 が存在し、柱穴が重複していると考えていたが、具体的にどの柱穴を採用するのか判然としない。柱間や並びなどの検討を行い、今回 2 棟別々の建物ではなく、S B 1069 の 1 棟として報告し、S B 1083 は欠番とする。桁行 4 間 (7.2 m) × 梁行 2 間 (4.35 m) の南北棟で、棟方位は N 44° W である。柱穴の大きさや柱間にばらつきもあるが、柱穴の新旧関係から S H 1054 よりは新しい。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点がある。

S B 1070 (第 133 図) 第 4 次調査区の中央西側で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (5.4 ~ 5.7 m) × 梁行 3 間 (4.95 ~ 5.4 m) の南北棟である。棟方位は、N 42° W である。柱穴の大きさにややばらつきがあり、東柱の柱穴では、直線的に並ばない部分もある。柱間は、桁行、梁行ともに等間ではなく、中央の 1 間分が広い。なお、前述した S H 1044 の平面形に概ね重なり、何らかの関係性が考えられようか。S B 1081 と重複する柱穴があり、新旧関係は、この S B 1070 の方が古い。

出土遺物には、土師器片が多数ある。

S B 1071 (第 133 図) 第 4 次調査区の中央南側で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.6 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟である。棟方位は、N 10° E である。桁行の柱間は 1.65 m の等間、梁行の柱間は 2.1 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1072 (第 134 図) 第 4 次調査区の中央南端、第 8 次調査区に大半が含まれる位置で検出した側柱建物である。棟方位は、N 8° W である。桁行 4 間 (7.8 m) × 梁行 3 間 (5.4 m) の東西棟である。柱間は、桁行が 1.95 m の等間、梁行が 1.8 m の等間である。なお、柱掘方の形状は、概ね方形で、比較的大きい。また、四隅の柱穴は、建物の軸方向から約 45 度振れる方向に掘削されているのが、特徴である。

出土遺物には、土師器数点と、南西隅の柱穴からは、須恵器杯 B (1115) が出土した。

S B 1081 (第 134 図) 第 4 次調査区のほぼ中央で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.85 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の南北棟である。棟方位は、N 14° W である。柱間は桁行、梁行ともに 1.95 m の等間である。柱穴の大きさは、東側が大きく、西側がやや小さい。S B 1070 と重複するが、新旧関係としては、この S B 1081 の方が新しい。

出土遺物には、土師器甕 (1116) の他、土師器数点が、多くの柱穴から出土している。

S B 1082 (第 135 図) 第 4 次調査区の西側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (3.3 m) × 梁行 2 間 (3.0 m) の南北棟である。棟方位は、N 3° E である。梁行の柱間は、1.5 m の等間であるが、桁行は柱間がばらつき、柱通りも悪い。建物としても小型である。

出土遺物はない。

S B 1084 (第 135 図) 第 4 次調査区の中央南側で検出した、桁行 2 間 (4.2 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の総柱建物である。棟方位は、N 12° E である。柱間は桁行、梁行ともに 2.1 m の等間である。南側で S H 1063、S B 1068 と重複するが、新旧関係は、S H 1063 → S B 1084 → S B 1068 である。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1085 (第 135 図) 第 4 次調査区の南側で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (6.6 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の南北棟である。棟方位は、N 18° W である。周辺に柱穴が多く、他の掘立柱建物との重複がある。現地調査時や概報では、3 間 × 3 間の総柱建物と考えられていたが、東側列の柱穴が明瞭でないため、梁行 2 間として報告する。柱間は、桁行が北から 2.4 m + 2.1 m + 2.1 m、梁行が西から 1.65 m + 1.95 m である。

出土遺物はない。

S B 1086 (第 136 図) 第 4 次調査区の南側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (6.3 m) × 梁行 2 間 (4.5 m) の東西棟である。棟方位は、N 8° E である。建物周辺には多くに柱穴や攪乱などがあり、S B 1085 や S B 1071 など複数の掘立柱建物との重複もある。柱間は、梁行が 2.25 m の等間であるが、桁行は不等間である。

出土遺物はない。

S B 1087 (第 136 図) 第 4 次調査区の南側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.85 m) × 梁行 3 間 (4.8 m) の南北棟である。棟方位は、N 10° W である。柱間は桁行、梁行ともに不等間で、建物とするのに若干疑問が残る。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1088 (第 137 図) 第 4 次調査区の南西隅に当たり、西側は東環の第 7 次調査区にまたがって検出した。桁行 3 間 (4.95 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の総柱建物で、南北棟である。棟方位は、N 11° W である。建物西側の柱穴は、はっきりしない。桁行の柱間は、1.65 m の等間である。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点がある。

S B 1089 (第 137 図) 第 4 次調査区の南西隅に当たり、第 8 次調査区にまたがって検出した側柱建物である。第 8 次調査で S B 1232 とした柱穴をこの建物に採用したため、S B 1232 は欠番とした。柱掘方は、方形でやや大きい。桁行 3 間 (6.6 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟である。棟方位は、N 10° W である。柱間は桁行、梁行ともに不等間であるが、桁行の中央 1 間分が広いのが特徴である。

出土遺物には、須恵器杯 (1117)、土師器数点がある。

S B 1090 (第 138 図) 第 4 次調査区の中央南端、大半は第 8 次調査区に含まれる側柱建物である。桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (3.75 m) の東西棟である。棟方位は、N 5° W である。柱掘方は、方形が多い。柱間は、桁行が 1.8 m の等間、梁行が北から 1.95 m + 1.8 m である。建物西側で、S B 1091 と重複しており、柱穴の新旧関係から、この S B 1090 の方が古い。

出土遺物には、須恵器杯蓋 b (1118・1119)、蓋 (1120)、盤 (1121)、土師器数点がある。

S B 1091 (第 138 図) 第 4 次調査区の南西隅、大半は第 8 次調査に含まれる側柱建物である。桁行 3 間 (5.55 m) × 梁行 3 間 (4.95 m) の東西棟である。棟方位は、N 20° W である。この周辺には、S B 1089 や S B 1090 など東西棟の側柱建物が多く存在する。

出土遺物には、北東隅の柱穴から須恵器盤 (1122) の他、土師器数点がある。

S B 1092 (第 139 図) 第 4 次調査区の中央西側、東環の第 7 次調査区に大半が含まれる側柱建物で、S H 704 に北側がほぼ重なる。桁行 4 間 (6.15 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の南北棟である。棟方位は、N 40° W である。桁行の柱間は、北側 3 間分が 1.5 m 等間、南側 1 間分が 1.65 m である。梁行の柱間は、1.95 m の等間である。なお、梁行の妻柱に当たる、中央の柱は、南北ともに若干外に飛び出る位置に存在する。

出土遺物には、須恵器片、土師器片がある。

S B 1187 (第 139 図) 第 5 次調査南区の東側で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の東西棟である。棟方位は、N 19° E である。桁行の柱間は、西から東へ 1.05 m + 1.2 m + 1.35 m と徐々に広がるが、梁行の柱間は、1.65 m の等間である。なお、東柱の 2 つの柱穴は、軸線より若干北側にズレ、大きさもやや小さい感がある。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1188 (第 140 図) 第 5 次調査南区の中央で検出した総柱建物で、桁行 2 間 (3.0 m) × 梁行 2 間 (2.7 m) の東西棟である。棟方位は、N 11° E である。柱間は、桁行 1.5 m の等間、梁行 1.35 m の等間である。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点があり、多くの柱穴から出土した。

S B 1189 (第 140 図) 第 5 次調査南区の南端、東環の第 2 次調査区にまたがって検出した側柱建物で、桁行 4 間 (7.8 m) × 梁行 3 間 (5.7 m) の東西棟である。棟方位は、N 11° E である。柱間は、桁行の両端 1 間分が 1.8 m、中央の 2 間分が 2.1 m の等間で広い。また、梁行は北側 1 間分が 2.1 m、南側 2 間分が 1.8 等間である。柱穴の掘方は方形を呈し、規模も大きい。

出土遺物には、土師器片、鉄滓片がある。

S B 1190 (第 141 図) 第 5 次調査南区の中央南側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟である。棟方位は、N 20° W である。柱間は、桁行が 1.8 m の等間、梁行が 2.1 m の等間である。柱掘形は方形で、大きい。S H 1164 や S B 1193 と重複しているが、新旧関係は、遺構検出段階での確認で、S B 1164 が古く、次に S B 1193 で、S B 1190 が一番新しいことがわかる。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1191 (第 141 図) 第 5 次調査南区の東側南端、東環の第 3 次調査区にまたがって検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の東西棟である。棟方位は、N 34° E である。柱穴の掘方は、方形で大きい。柱間は、桁行の両端 1 間分が 1.5 m、中央の 1 間分は 2.4 m と広い。梁行は 1.8 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1192 (第 142 図) 第 5 次調査南区の南東隅で検出した総柱建物である。桁行 2 間 (2.1 m) × 梁行 2 間 (1.8 m) と、規模の小さい東西棟の建物である。棟方位は、N 10° W である。柱間も狭く、桁行が 1.05 m の等間、梁行が 0.9 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1193 (第 142 図) 第 5 次調査南区の中央南側で検出した総柱建物で、桁行 2 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の東西棟である。棟方位は、N 0° である。柱間は、桁行が 1.8 m の等間、梁行が 1.65 m の等間である。建物中央の東柱は、やや軸線からズレ、大きさも小さい。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点がある。

S B 1194 (第 142 図) 第 5 次調査南区の北西、第 12 次調査区にまたがって検出した側柱建物である。桁行 3 間 (6.3 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟で、棟方位は、N 33° E である。桁行 3 間としたが、第 12 次調査区での柱穴ははっきりとはせず、調査区境界の攪乱溝などで削平されている可能性もある。柱間は桁行、梁行ともに 2.1 m の等間である。

出土遺物には、土師器片がある。

S A 1195 (第 143 図) 第 5 次調査南区の南西で検出した L 字状の柱列である。南北方向に 4 間

(5.4 m)、東西方向に2間(2.1 m)分を確認した。柱筋はある程度一直線に通る。柱穴も小さく、円形や楕円形が混じる。

出土遺物には、須恵器数点、土師器片がある。

S B 1196 (第143図) 第5次調査南区の南西隅、大半が東環の第2次調査区に含まれる側柱建物である。桁行4間(8.4 m) × 梁行2間(4.5 m)の南北棟である。棟方位は、N 12° Eである。柱間は、桁行の両端1間分が1.8 m、中央の2間分が2.4 mと広い。梁行は2.25 mの等間である。柱穴は方形で、規模も大きい。

出土遺物はない。

S B 1201 (第143図) 第8次調査区の北側中央で検出した3間(4.2 m) × 3間(4.2 m)の総柱建物である。棟方位は、N 46° Eである。柱穴の大きさにばらつきがあり、東柱の柱穴は、やや小さい感がある。柱筋通りも若干悪い。なお、北西側、南西側の柱穴のいくつかに新旧関係が確認されるため、建て替えを行った可能性も考えられる。柱間は、北西隅の柱穴から南東方向と南西方向ともに、1.5 m + 1.35 m + 1.35 mである。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1226 (第144図) 第8次調査区の南西隅で検出した建物で、2間(2.7 m) × 1間(1.5 m)分の柱穴を確認した。棟方位は、N 5° Eである。この建物の南側に、攪乱溝が東西方向に走っているため定かではないが、おそらく南北方向にもう1間分伸びて、2間 × 2間の総柱建物であったと思われる。柱穴の掘方は、方形で大きい。

出土遺物には、須恵器杯蓋 b (1123・1124)、杯 B (1125・1126)、杯 (1127 ~ 1129)、甕 (1130)、土師器数点がある。

S B 1309 (第144図) 第9次調査区の中央南端で検出した側柱建物で、桁行5間(9.3 m) × 梁行2間(3.0 m)以上の東西棟である。棟方位は、N 4° Wである。南側の調査区外へ伸びる建物のため、梁行の規模は定かではない。また、東側柱穴は、後世の削平のためか、確認されなかった。柱穴は方形で大きい。柱間は、桁行が西から1.8 m + 1.95 m + 1.95 m + 1.8 m + 1.8 m、梁行は1.5 m等間である。

出土遺物はない。

S B 1314 (第144図) 第9次調査区の北東隅、大半は第12次調査区に含まれる桁行2間(3.3 m) × 梁行2間(3.3 m)の総柱建物である。棟方位は、N 25° Eである。柱間は桁行、梁行ともに1.65 mの等間である。S B 1612と重複する柱穴があり、新旧関係はS B 1314の方が古い。

北西隅の柱穴から、須恵器杯H蓋(1131)、杯H身(1132)のセットが出土した。

S B 1317 (第145図) 第9次調査区の北東隅で検出した側柱建物である。建物の南東側の柱穴のいくつかは確認できていないが、桁行6間(11.1 m) × 梁行2間(4.5 m)の東西棟であると思われる。ただし、北東隅の柱穴に対応する南東隅の柱穴が確認できないため、桁行を5間と考えることも可能である。いずれにしても、長大な東西棟の掘立柱建物である。棟方位は、N 43° Eである。梁行の柱間は2.25 mの等間で、西側の棟持柱に当たる柱穴は、軸線より若干外に出る位置にある。なお、桁行が長い建物であるため、建物内のいくつかの柱穴を間仕切りの柱穴と考えることもできそうである。また、北東側の桁行柱穴のいくつかには、新旧関係が確認できるものがあるため、建て替えか、あるいは、複数の建物が重複している可能性も考えられる。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1324 (第145図) 第9次調査区の東側で検出した総柱建物である。この建物周辺に存在する複数の耕作溝のため、全ての柱穴は確認できなかったが、桁行3間(4.05 m) × 梁行2間(3.9 m)の南北棟と思われる。棟方位は、N 38° Wである。柱間は、桁行が1.35 mの等間、梁行が1.95 mの等間である。S H 1322と重複しているが、新旧関係はS B 1324の方が新しい。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1326 (第146図) 第9次調査区の東隅、東環の第2次調査にまたがって検出した側柱建物である。建物の南側は、調査区外になるためはっきりしないが、桁行4間(6.3 m)以上 × 梁行2間(3.0 m)以上の東西棟である。棟方位は、N 30° Eである。桁行の柱間は、西から1.65 m + 1.65 m + 1.5 m + 1.5 mである。梁行の柱間は、1.5 mの等間である。新旧関係を示す柱穴がいくつか確認できるため、この

建物は建て替えを行った可能性がある。

出土遺物はない。

S B 1328 (第 146 図) 第 9 次調査区の東側で検出した東西棟の側柱建物である。棟方位は、N 16° W である。桁行は 4 間であるが、梁行は西側が 2 間、東側が 3 間という変則的な柱間の建物である。しかも、平面形は平行四辺形状を呈する。桁行は北側が 5.55 m で、柱間は西から 1.2 m + 1.65 m + 1.5 m + 1.2 m、南側が 5.7 m で、西から 1.35 m + 1.5 m + 1.5 m + 1.35 m である。いずれも中央の 2 間分が若干広い。また、梁行は 4.5 m であるが、柱間の西側は 2.25 m の等間、東側は 1.5 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1332 (第 147 図) 第 9 次調査区の中央東側で検出した総柱建物で、桁行 2 間 (4.2 m) × 梁行 2 間 (3.3 ~ 3.6 m) の南北棟である。棟方位は、N 2° W である。柱筋の通りは、あまり良くなく、平面形も台形状を呈する。柱間は、桁行が 2.1 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1426 (第 147 図) 第 10 次調査南区の中央北側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (6.0 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の南北棟である。棟方位は、N 34° W である。柱間は、桁行の南北両側が 1.95 m の等間、中央の 1 間分は 2.1 m とやや広い。梁行の柱間は、1.95 m の等間である。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1440 (第 148 図) 第 10 次調査南区の中央東側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (4.95 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の東西棟である。棟方位は、N 17° E である。柱間は、梁行が 1.65 m の等間、梁行が東西ともに南側が 2.1 m、北側が 1.8 m と、北側が広い。なお、柱穴の大きさには、ばらつきがある。

南東隅の柱穴から、須恵器短頸壺 (1133) の体部片が出土した。

S B 1443 (第 148 図) 第 10 次調査南区の中央西側で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (5.7 m) × 梁行 3 間 (5.55 m) の南北棟である。棟方位は、N 15° W である。南西隅に当たる柱穴は、S K 1445 と重複しており確認できなかった。柱間は、桁行が北から 1.95 + 1.8 m + 1.95 m、梁行が西から 1.8 m +

1.8 m + 1.95 m である。また、一部の柱穴には、概ね南側に重複が見られるため、建て替えを行った可能性もある。なお、この建物の北側、約 3 m と近接した場所に、ほぼ方向を同じにする S H 1436 があり、何らかの関連性が考えられる。

多くの柱穴から、須恵器数点、土師器数点が出土した。

S B 1504 (第 149 図) 第 11 次調査区の西端で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (3.8 m) × 梁行 2 間 (3.2 m) の東西棟である。棟方位は、N 27° W である。柱間は、桁行が西から 1.1 m + 1.3 m + 1.4 m と不等間、梁行は 1.6 m の等間である。柱穴の大きさにばらつきがあり、柱通りもあまり良くない。

出土遺物はない。

S B 1522 (第 149 図) 第 11 次調査区の西側で検出した側柱建物で、桁行 2 間 (2.4 m) × 梁行 1 間 (2.25 m) の東西棟で、建物規模は小さい。棟方位は、N 45° E である。桁行の柱間は、1.2 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1523 (第 150 図) 第 11 次調査区の西側で検出した側柱建物で、桁行 2 間 (2.4 m) × 梁行 1 間 (2.25 m) の東西棟である。棟方位は、N 19° W である。前述の S B 1522 と建物方位に違いはあるものの、建物規模、柱間は同じである。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点がある。

S B 1539 (第 150 図) 第 11 次調査区の西側の南端、一部が東環の第 3 次調査区にまたがって検出した側柱建物である。桁行 4 間 (4.6 m) × 梁行 1 間 (3.3 m) の東西棟で、棟方位は、N 14° E である。桁行は、北側が 4 間、南側が 3 間としたが、北側中央の柱穴をこの建物に伴わないとすれば、桁行中央の柱間が広い 3 間 × 1 間の側柱建物となる。

北東隅の柱穴から、土師器長胴甕 (1134) が出土した。

S B 1540 (第 150 図) 第 11 次調査区の西側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (4.5 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の東西棟である。棟方位は、N 10° E である。建物の北東隅の柱穴は、土坑 S K 1538 と重複しているため、確認することができなかった。柱間は、梁行が 1.8 m の等間、桁行が東西両側は 1.1 m ~ 1.3 m であるが、中央の柱間は広く、約 2 倍の長さである。なお、この桁行の広がる 2 つの柱穴は、柱通

りから若干外へ飛び出る位置にみられる。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1551 (第 151 図) 第 11 次調査区のほぼ中央で検出した側柱建物で、桁行 2 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) である。棟方位は、N 13° E である。東柱の位置で柱穴が確認できなかったため、側柱建物とした。柱間は、桁行梁行ともに 1.8 m の等間である。後述する S B 1558 と一部柱穴の重複が見られ、新旧関係としては、S B 1551 が古く、S B 1558 が新しい。

出土遺物はない。

S B 1557 (第 152 図) 第 11 次調査区の中央南隅で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.1 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の南北棟である。棟方位は、N 6° E である。柱間は、桁行が南北両側の 2 間分は 1.2 m で、中央は 2.7 m と広い。なお、東側桁行の中央に小穴があり、この建物に関係する可能性も考えられる。梁行は、1.65 m の等間である。北東部で S B 1576 と重複しているが、新旧関係は S B 1557 が古く、S B 1576 が新しい。

桁行西側の南から 2 つ目の柱穴から、須恵器杯 H 蓋 (1135) が出土している他、土師器数点がある。

S B 1558 (第 151 図) 第 11 次調査区のほぼ中央で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の南北棟である。棟方位は、N 33° W である。前述した S B 1551 と北側部分で重複するが、新旧関係は S B 1558 の方が新しい。柱間は、桁行が南北両側の 2 間分は 1.5 m、中央は 2.4 m と広い。梁行の柱間は、北側と南側とで違いが見られる。

北東隅の柱穴から鉄滓が出土した他には、土師器片が出土した。

S B 1571 (第 152 図) 第 11 次調査区のほぼ中央で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟である。棟方位は、N 13° W である。柱間は、桁行が東西両側の 2 間分は 1.5 m、中央は 2.4 m と広い。梁行は、2.1 m の等間である。建物の北東部分で、後述する S B 1574 と重複するが、柱穴の新旧関係から、この S B 1571 の方が古い。

北東隅の柱穴から土師器甕 (1136) の他、土師器片が出土した。

S B 1574 (第 153 図) 第 11 次調査区のほぼ中央

で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.6 m) × 梁行 3 間 (4.5 m) の東西棟である。棟方位は、N 10° W である。桁行西側の柱穴は、S K 1569 により削平を受けたため定かではないが、梁行規模は東側に比べると広くなり、平面形としては、台形状を呈する。柱間は、桁行が 1.65 m の等間、梁行が 1.5 m の等間である。

南東隅の柱穴から土師器甕 (1137)、南側桁行の東から 3 つ目の柱穴から、土師器甕 (1138) が出土した。また、須恵器片、土師器片が多く柱穴から出土した。

S B 1575 (第 153 図) 第 11 次調査区の中央で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の東西棟である。棟方位は、N 8° E である。桁行の北側柱間は、西から 1.2 m + 2.7 m + 1.5 m、南側は西から 1.5 m + 2.7 m + 1.2 m と非対称であるが、ともに中央が 2.7 m と広い。梁行は、1.65 m の等間である。

北西隅の柱穴から、土師器甕 (1141) と須恵器杯 H 身 (1139)、桁行の北側の西から 2 つ目の柱穴から、須恵器杯 H 身 (1140) が出土した。この杯身は、同一個体の可能性もある。他には須恵器片、土師器数点が出土した。

S B 1576 (第 154 図) 第 11 次調査区の中央南端、東環の第 3 次調査区にまたがって検出した側柱建物で、大半は新名神の調査区内に含まれる。桁行 4 間 (6.0 m) × 梁行 3 間 (5.1 m) の東西棟である。棟方位は、N 19° W である。柱間は、桁行が 1.5 m 等間、梁行が 1.65 m + 1.8 m + 1.65 m である。北西隅の柱穴は、S B 1557 と重複しており、新旧関係はこの S B 1576 の方が新しい。

出土遺物はない。

S B 1577 (第 154 図) 第 11 次調査区の中央南側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (6.6 m) × 梁行 3 間 (5.1 m) の東西棟である。棟方位は、N 7° W である。柱間は、桁行が東西両側の 2 間分は 1.8 m、中央は 3.0 m と広い。梁行は東西で違いがあり、西側は北の 1 間分が、東側は南の 1 間分が 1.5 m で、その他は 1.8 m の等間である。

桁行の西側の北から 2 つ目の柱穴から、須恵器甕 (1142) の他、須恵器片、土師器片が出土した。

S B 1578 (第 155 図) 第 11 次調査区のほぼ中央

で検出した総柱建物で、桁行2間(3.9m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方位は、N 25° Wである。柱間は、桁行が1.95mの等間、梁行が1.8mの等間である。

出土遺物はない。

S B 1703 (第155図) 第11次調査区の東側で検出した側柱建物で、桁行4間(6.75m)×梁行2間(4.2m)の東西棟である。棟方位は、N 5° Eである。柱穴の大きさにややばらつきがあり、柱間も桁行、梁行ともに対をなしていない。

桁行の南側、東から2つ目の柱穴から弥生土器甕底部片(1598)が出土した。

S B 1704 (第156図) 第11次調査区の東側で検出した側柱建物で、桁行4間(6.9m)×梁行3間(5.1m)の東西棟である。棟方位は、N 4° Wである。柱間は、桁行が東西両側の1間分がともに1.8m、中央の2間分は1.65mの等間である。桁行の柱間は、西側は北から1.8m+1.5m+1.8m、東側は北から1.5m+1.8m+1.8mで違いがある。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点がある。

S B 1708 (第156図) 第11次調査区の東側で検出した側柱建物で、桁行4間(6.6m)×梁行3間(4.35m)の東西棟である。棟方位は、N 35° Eである。柱間は、桁行が1.65mの等間である。梁行については、西側の南から北へ1間分に相当する位置の柱穴は検出できなかった。東側の柱間は、北から1.5m+1.5m+1.35mである。

桁行の北側中央の柱穴から、土師質の土錘(1150)が出土した。その他、土師器片、須恵器片が出土した。

S B 1710 (第157図) 第11次調査区の南西側で検出した側柱建物で、桁行2間(4.2m)×梁行2間(3.9m)の東西棟である。棟方位は、N 10° Wである。東柱に位置する柱穴が確認されなかったため、側柱建物とした。柱間は、桁行が2.1mの等間、梁行が1.95mの等間である。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1729 (第157図) 第11次調査区の中央南側で検出した側柱建物で、桁行4間(6.6m)×梁行3間(4.95m)の東西棟である。棟方位は、N 15° Wである。南側の桁行の東から1間分と、東側の梁行の南から1間分に位置する柱穴は検出できなかった。

た。柱間は桁行、梁行ともに1.65mの等間である。建物の南半分がS B 1730と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物には、須恵器杯H身(1151)、土師器片がある。

S B 1730 (第157図) 第11次調査区の中央南側で検出した側柱建物で、桁行4間(6.45m)×梁行2間(3.3m)の東西棟である。棟方位は、N 13° Wである。柱間は、桁行の東側1間分が1.5m、その他は1.65mの等間である。梁行は、1.65mの等間である。建物の南東部分に当たる場所は攪乱のため、柱穴は検出できなかった。なお、建物内の中央西側に、やや小さめの柱穴が存在する。間仕切りの柱穴の可能性も考えられる。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1604 (第158図) 第12次調査区の南東側で検出した。桁行5間(8.25m)×梁行3間(5.55m)の東西棟で、比較的大型の側柱建物である。棟方位は、N 20° Eである。柱穴の平面形は隅丸方形で、他の建物に比べて大きい。柱間は、桁行の東西両外側1間分はともに1.8mで、中央の3間分はやや狭い。また、中央に位置する柱穴は、長辺約1mの長方形を呈しており、2本分の柱痕跡が確認される。これは重複や建て替えではなく、同時に用いられていたものと考えられる。北に向かって西側の柱穴は、他の柱間と間隔が合わないことから、支え柱的な役割をしていたものではなかろうか。梁行は北側の1間分が1.95m、南側の2間分が1.8mの等間である。建物の西側でS B 1619と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1612 (第158図) 第12次調査区の南東隅で検出した側柱建物である。桁行5間(10.8m)×梁行2間(4.2m)の東西棟で、南東部分は東環の第2次調査区に含まれる。棟方位は、N 12° Eである。柱間は、桁行の東側から2間目だけ2.4mと広く、その他の柱間は2.1mである。梁行は、2.1mの等間である。S H 1606、S B 1314、S B 1636と重複するが、新旧関係はS H 1606、S B 1314が古く、次にこの掘立柱建物S B 1612、それより新しいのがS B 1636である。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1613 (第 159 図) 第 12 次調査区の南東側で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (7.05 m) × 梁行 3 間 (5.55 m) の東西棟である。棟方位は、N 19° W である。柱間は桁行、梁行ともに 1.65 m、1.8 m、1.95 m の 3 種類が採用されるが、対にはならない。

南西隅の柱穴から須恵器杯 H 身 (1143) が出土した。その他、土師器数点が出土した。

S B 1614 (第 159 図) 第 12 次調査区の南東側で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.6 m) × 梁行 3 間 (5.55 m) の南北棟である。棟方位は、N 15° E である。柱間は、桁行より梁行の方が広いものが多いが、いずれも対にはならない。

桁行の南から 2 つ目の柱穴より土師器把手 (1144)、が出土した。また、須恵器数点、土師器数点、ほとんどの柱穴から出土した。

S B 1618 (第 160 図) 第 12 次調査区の北東側で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (5.25 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の東西棟である。棟方位は、N 15° E である。柱間は、桁行が西から 1.5 m + 2.1 m + 1.65 m と中央が広い。梁行は、1.65 m の等間である。

出土遺物には、須恵器片がある。

S B 1619 (第 160 図) 第 12 次調査区の南東側で検出した総柱建物で、桁行 2 間 (3.75 m) × 2 間 (3.3 m) の南北棟である。棟方位は、N 21° E である。柱間は、桁行が北から 1.8 m + 1.95 m、梁行が 1.65 m の等間である。柱穴の平面形は、方形と円形が混在している。S B 1604 と重複しているが新旧関係は不明である。

出土遺物はない。

S B 1620 (第 161 図) 第 12 次調査区の南東側で検出した、梁行 2 間 (3.45 m) × 桁行 2 間 (3.45 m) の総柱建物である。棟方位は、N 30° E である。柱間は、西側と南側の 1 間分が 1.8 m と若干広く、東側と北側は 1.65 m である。柱穴の平面形は、方形と円形が混在している。S B 1621 と重複するが、新旧関係はわからない。

出土遺物はない。

S B 1621 (第 161 図) 第 12 次調査区の南東で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.0 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の東西棟である。棟方位は、N 17° E である。

柱間は、桁行の両側 2 間分が 1.05 m と狭く、中央 2 間分は 1.95 m と広く、2 倍近くある。梁行は、1.8 m の等間である。

出土遺物はない。

S B 1626 (第 162 図) 第 12 次調査区の中央で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.6 m) × 梁行 3 間 (4.95 m) の東西棟である。棟方位は、N 7° E である。柱間は、桁行が 1.65 m の等間である。梁行は中央の 1 間分が狭く、2 つの柱穴は、建物の柱通りの軸線より若干外側へ飛び出す位置にある。

出土遺物はない。

S B 1627 (第 162 図) 第 12 次調査区の南東で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (5.7 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の南北棟である。棟方位は、N 19° E である。柱間は、桁行が 1.05 ~ 1.65 m、桁行も 1.8 ~ 2.1 m と不揃いで、柱穴の大きさにもばらつきがある。

出土遺物には、土師器数点がある。

S B 1632 (第 163 図) 第 12 次調査区の南東で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (4.65 m) × 梁行 2 間 (4.05 m) の東西棟である。棟方位は、N 0° である。柱間は、桁行の中央 1 間分がやや広く 1.65 m、東西の両側はともに 1.5 m である。梁行は、北側 1 間分が 1.95 m、南側 1 間分が 2.1 m である。柱穴の平面形は丸い。

出土遺物はない。

S B 1636 (第 163 図) 第 12 次調査区の南東で検出した総柱建物で、桁行 3 間 (4.2 m) × 梁行 3 間 (3.0 m) の東西棟である。棟方位は、N 21° E である。柱間は、桁行の東西両側は 1.35 m 等間、中央の 1 間分は 1.5 m と広い。梁行の南北両側は、1.05 m の等間、中央の 1 間分は 0.9 m と狭い。柱穴の径が 55 ~ 80 cm と他に比べて大きく、一部に布堀状を呈する部分もある。柱穴の大きさに対して、各柱間が狭い感を受ける。

出土遺物には、須恵器片や土師器片がある。

S B 1637 (第 164 図) 第 12 次調査区中央東側で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.0 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の東西棟である。棟方位は、N 6° W である。柱間は、桁行の中央 2 間分が広く、東西両側は狭い。梁行は 1.8 m と 2.1 m であるが、対にはならない。柱穴は円形で、径は 20 ~ 30 cm 程度である。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1638 (第 164 図) 第 12 次調査区のほぼ中央で検出した総柱建物で、桁行 2 間 (3.0 m) × 梁行 2 間 (2.7 m) の東西棟である。棟方位は、N 3° E である。柱間は、桁行が 1.5 m の等間、梁行は 1.35 m の等間である。柱穴の径は 20cm と比較的小さく、平面形は円形で、柱通りはやや悪い。

出土遺物はない。

S B 1642 (第 165 図) 第 12 次調査区の中央北側で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.6 m) × 梁行 3 間 (4.8 m) の東西棟である。棟方位は、N 3° W である。柱間は、桁行が 1.65 m の等間、梁行は中央 1 間分が 1.5 m と狭く、南北両側の 1 間分は 1.65 m の等間である。柱穴の径は 40 ~ 50cm と比較的大きいが、平面形はしっかりとした方形ではなく円形に近い。なお、桁行の柱穴で、中央の 3 つの位置は、建物の柱通りの軸線より若干外側になる。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1665 (第 165 図) 第 12 次調査区の北西で検出した側柱建物で、桁行 3 間 (4.8 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の東西棟である。棟方位は、N 20° E である。柱間は、桁行が東西両側の 1 間分は 1.2 m の等間、中央の 1 間分は 2 倍の 2.4 m と広い。梁行は、1.8 m の等間である。柱穴の平面形は、円形で径約 50cm である。なお、建物内には、若干柱筋が通らないが、束柱に当たる位置に 2 つの柱穴がある。総柱建物の可能性も考えられる。

出土遺物には、須恵器片、土師器数点がある。

S B 1666 (第 166 図) 第 12 次調査区の北西で検出した側柱建物で、桁行 2 間 (4.8 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の東西棟である。棟方位は、N 28° E である。2 間 × 2 間の建物は、総柱建物になる場合が多いが、S B 1666 の内部で、束柱に当たる位置に柱穴は見られない。柱間は、桁行が 2.4 m の等間、梁行が 1.8 m の等間である。なお、桁行中央の柱穴は、東西ともに、若干外側に飛び出る位置に存在する。柱穴の平面形は、円形で径約 50cm である。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1667 (第 166 図) 第 12 次調査区の北西で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.0 m) × 梁行 3 間 (4.65 m) の東西棟である。棟方位は、N 12° E である。

柱間は、桁行が東西両側の 1 間分が 1.2 m、中央の 2 間分は 1.8 m の等間と広い。梁行も南北両側の 1 間分が 1.5 m、中央の 1 間分は 1.65 m と若干広い。また、梁行の東側南から 2 つ目の柱穴は、後世の樹木と重なり確認はできなかった。なお、建物内の、桁行の東西中央の柱穴を結ぶ柱筋通りに 2 つの柱穴がある。この建物に伴う可能性が考えられる。柱穴の平面形は、円形で径約 50cm である。

出土遺物には、須恵器片、土師器片が多数ある。

S B 1691 (第 167 図) 第 12 次調査区の西側中央で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.75 m) × 桁行 3 間 (4.2 m) の東西棟である。棟方位は、N 36° E である。柱間は、桁行が南北で対にはならないが、西側 1 間分がやや広い。梁行も東西で対にはならないが、南側 1 間分がやや狭い。柱穴の平面形は、若干楕円形を呈し、径も約 70cm と大きい。この建物北側の桁行と、後述する S B 1697 南側の桁行が重複している。新旧関係としては、S B 1697 の方が古く、S B 1691 の方が新しい。

北東隅の柱穴から土師器甕 (1145)、磨製石斧 (1585)、南西隅の柱穴から土師器甌把手 (1146) が出土した。その他、須恵器片や多くの土師器片が出土した。

S B 1697 (第 167 図) 第 12 次調査区の西側中央で検出した側柱建物で、桁行 4 間 (6.45 m) × 梁行 3 間 (4.65 m) の東西棟である。棟方位は、N 35° E である。柱間は、桁行の東西両側の 1 間分が 1.8 m と広い。梁行は東西で対にならず、東側では南側が、西側では北側が広い。柱穴の平面形は、円形を呈し、径は約 60cm、S B 1691 に比べると、若干小さい感がある。新旧関係を前述したように、S B 1697 の方が古く S B 1691 の方が新しいが、2 棟の一辺が重複していることから、あまり時間を置かずに建て替えられたものと考えられる。なお、S H 1660・S H 1689・S H 1690 と重複する。これらの新旧関係については、S H 1660 の項を参照されたい。

梁行西側の北から 2 つ目の柱穴より、須恵器杯 H 身 (1148) と土師器甌? (1149)、桁行南側の東から 2 つ目の柱穴より、須恵器杯 H 身 (1147) が出土した。その他、多くの土師器片が出土した。

S B 1698 (第 168 図) 第 12 次調査区の中央西端、

建物の大半は、第13次調査区に含まれる位置で検出した側柱建物である。桁行3間(5.55m)×梁行2間(3.45m)の南北棟である。棟方位は、N13°Eである。柱間は、桁行の南北両側の1間分が1.95mの等間、中央の1間分が1.65mと狭い。梁行は西側が1.95m、東側が1.5mと不等間である。後述するSB1843と重複するが、新旧関係は不明である。

北西隅の柱穴から、須恵器片、土師器片が出土した。**SB1801**(第168図) 第13次調査区の北東隅、一部が第12次調査区に含まれる位置で検出した側柱建物である。桁行4間(6.6m)×梁行3間(5.4m)の東西棟である。棟方位は、N29°Eである。柱間は、桁行が南北で対にならず、1.5～1.8mと不等間、梁行は、1.8mの等間である。ともに柱通りはあまり良くない。柱穴は円形で、径30～40cm程度である。なお、この建物の南西側に1.65m離れて、並行して3間分の径20cm程度の小穴が並ぶ。SA1842としたが、この建物に伴う柵か、目隠し塀のような機能の可能性が考えられる。

出土遺物はない。

SB1812(第169図) 第13次調査区の中央北隅で検出した総柱建物で、桁行3間(4.65m)×梁行3間(4.5m)の東西棟である。棟方位は、N22°Eである。柱間は、桁行の西側1間分が1.65mと若干広く、その他は1.5mの等間である。梁行は、1.5mの等間である。なお、前述した第4次調査区のSB1072のように、四隅の柱穴が建物の軸方向から約45度振れる方向で掘削されている感があり、特に、北東隅と南西隅の柱穴が顕著である。

出土遺物はない。

SB1817(第169図) 第13次調査区の中央東側で検出した側柱建物で、桁行3間(4.95m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方位は、N31°Eである。柱間は、桁行の東西両側の1間分が1.5mの等間、中央の1間分が1.95mと広い。梁行は、1.8mの等間である。

出土遺物には、土師器片がある。

SB1822(第170図) 第13次調査区のほぼ中央で検出した側柱建物で、桁行4間(7.05m)×梁行3間(5.25m)の東西棟である。棟方位は、N13°Eである。柱間は、桁行の東側1間分が1.65m、そ

の他は1.8m等間である。梁行は、南北の両側1間分が1.8mの等間、中央の1間分は1.65mと狭い。柱穴の形状は、隅丸方形が多く、一辺約50～60cmと大きい。後述するSB1824とSB1845と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物としては、桁行の北側中央の柱穴から土錘(1152)の他、土師器片が出土した。

SB1824(第170図) 第13次調査区のほぼ中央で検出した桁行2間(3.0m)×梁行2間(3.0m)の総柱建物である。棟方位は、N15°Eである。柱間は桁行、梁行ともに1.5mの等間である。柱穴は円形で、径は約30cm程度である。SB1822と後述するSB1845と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物はない。

SB1825(第171図) 第13次調査区の中央で検出した側柱建物で、桁行3間(5.55m)×梁行2間(3.6m)の南北棟である。棟方位は、N9°Eである。柱間は、桁行の南北両側の1間分は1.8mの等間、中央の1間分は1.95mと若干広い。梁行は、1.8mの等間である。柱穴の形状は、隅丸方形が多く、一辺約50～60cmと大きい。

桁行東側の北から2つ目の柱穴から、須恵器杯H蓋(1153)が出土した。その他、土師器数点が出土した。

SB1826(第171図) 第13次調査区の中央で検出した総柱建物で、桁行2間(3.6m)×梁行2間(3.3m)の南北棟である。棟方位は、N12°Eである。柱間は、桁行が1.8mの等間、梁行が1.65mの等間である。柱穴の形状は、概ね隅丸方形で、一辺約40cmである。

北西隅の柱穴から、須恵器短頸壺片が出土した。

SB1829(第171図) 第13次調査区の南東隅で検出した総柱建物で、桁行2間(3.6～3.8m)×梁行2間(2.4m)の東西棟である。棟方位は、N18°Eである。柱間は、北側桁行の西側が1.8m、東側が2.0m、南側桁行は1.8mの等間で、平面形は若干台形状を呈する。梁行は狭く、1.2mの等間である。柱穴は円形で、径20～30cmと小さい。

出土遺物には、土師器数点がある。

SB1833(第172図) 第13次調査区の中央南側で検出した側柱建物で、桁行4間(7.5m)×梁行

2間(3.6m)の東西棟である。棟方位は、N7°Eである。柱間は、桁行の西側2間分は1.8mの等間、東側2間分は1.95mの等間である。梁行は、1.8mの等間である。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺約50cmと大きい。

桁行北側中央の柱穴から須恵器杯H身(1155)、桁行南側中央の柱穴から土師器甕の口縁片(1156)、桁行南側の東から2つ目の柱穴より須恵器杯H蓋(1154)が出土した。その他、土師器片が多数出土した。**S B 1835**(第171図) 第13次調査区の南東で検出した総柱建物で、桁行2間(4.2m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方位は、N13°Eである。柱間は、桁行が2.1mの等間、梁行が1.8mの等間である。柱穴は円形で、径は約20cmと非常に小さい。

出土遺物には、土師器片、剥片がある。

S A 1842(第168図) 第13次調査区の北東隅で検出した3間分の径20cm程度の円形の小穴である。それぞれの距離は、西から1.5m、1.95m、1.8mと不揃いだが、一直線に並ぶ。前述したS B 1801の南西側に1.65m離れて、建物に並行しているため、この建物に伴う柵か、目隠し塀のような機能の可能性が考えられる。

出土遺物はない。

S B 1843(第168図) 第13次調査区の中央東隅、東側の一部は第12次調査区に含まれる側柱建物である。桁行3間(4.5m)×梁行2間(3.6m)の東西棟である。棟方位は、N21°Eである。梁行東側の棟持柱に当たる柱穴は、定かではない。柱間は、桁行が1.5mの等間、梁行が1.8mの等間である。柱穴は円形で、径約40cm程度である。S B 1698と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物には、土師器片がある。

S B 1844(第172図) 第13次調査区のほぼ中央で検出した総柱建物で、桁行2間(4.35~4.5m)×梁行2間(4.2~4.5m)の東西棟である。棟方位は、N15°Eである。柱間は、桁行梁行ともに、やや不等間で、建物の形状も平行四辺形状を呈する。柱穴も円形や隅丸方形があり、大きさもまちまちである。

出土遺物はない。

S B 1845(第170図) 第13次調査区のほぼ中央

で検出した総柱建物で、桁行2間(4.2m)×梁行2間(3.3m)の南北棟である。棟方位は、N5°Eである。柱間は、桁行が2.1mの等間、梁行は1.65mの等間である。柱穴は円形で、径約30cm程度である。前述のS B 1822とS B 1824と重複するが、新旧関係は不明である。

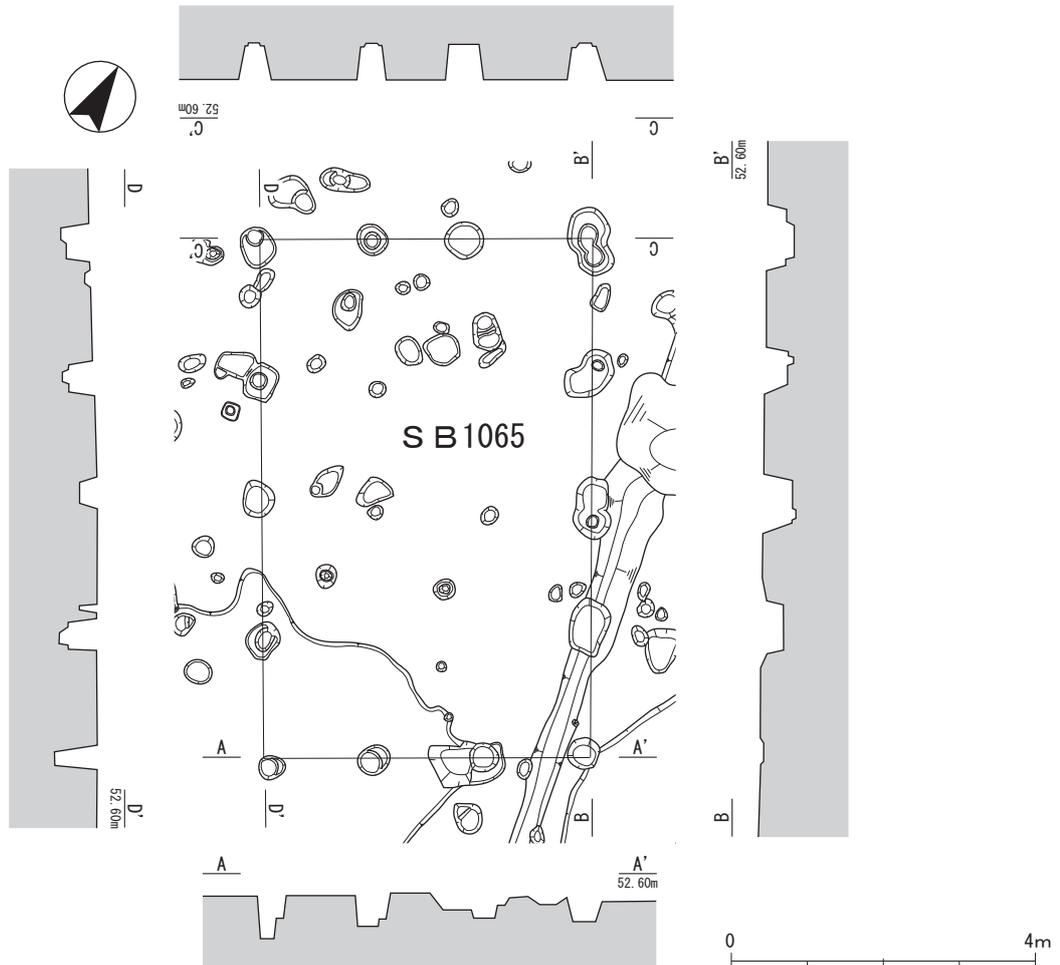
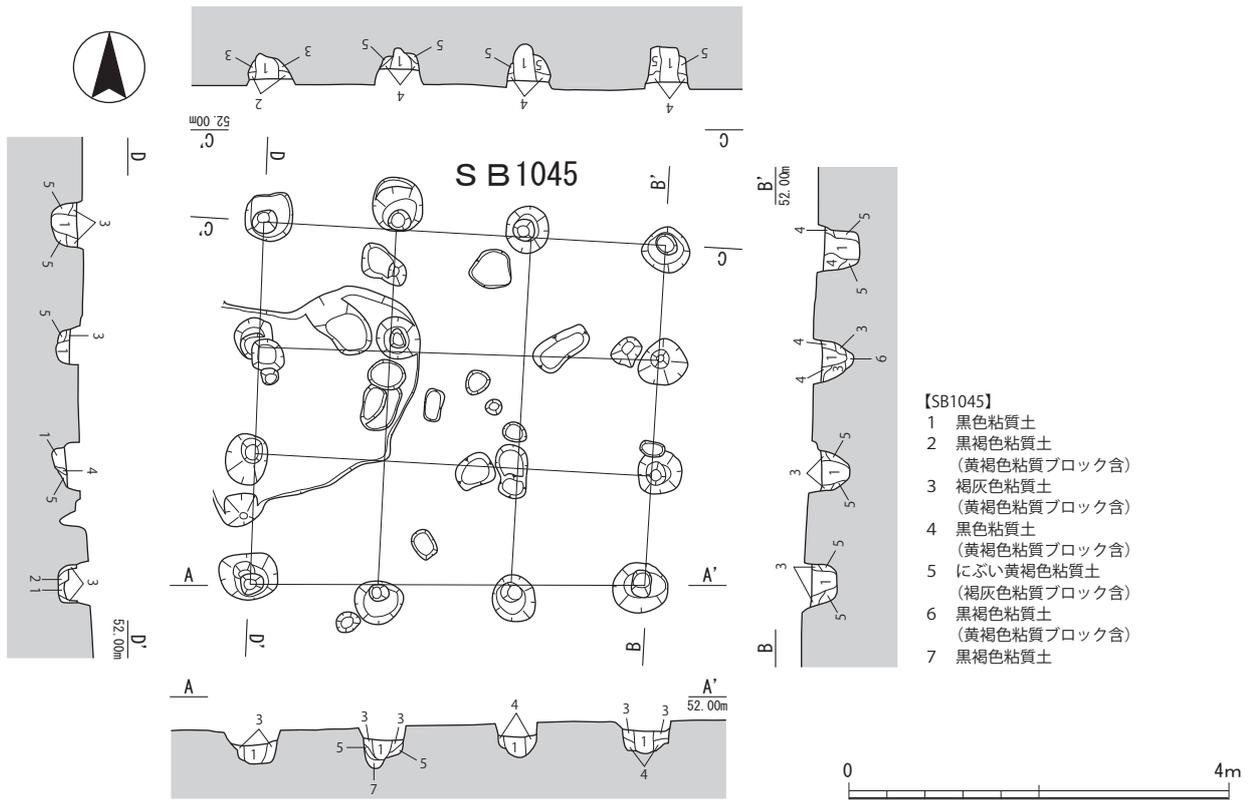
出土遺物はない。

S B 1847(第173図) 第13次調査区のほぼ中央で検出した側柱建物で、桁行3間(5.7m)以上×梁行4間(5.1m)の東西棟である。棟方位は、N31°Eである。東側以外の柱筋は、概ね一直線に通るが、いずれも柱間は不等間である。柱穴も円形や不定形が混じり、掘立柱建物とするのに、若干疑問は残る。

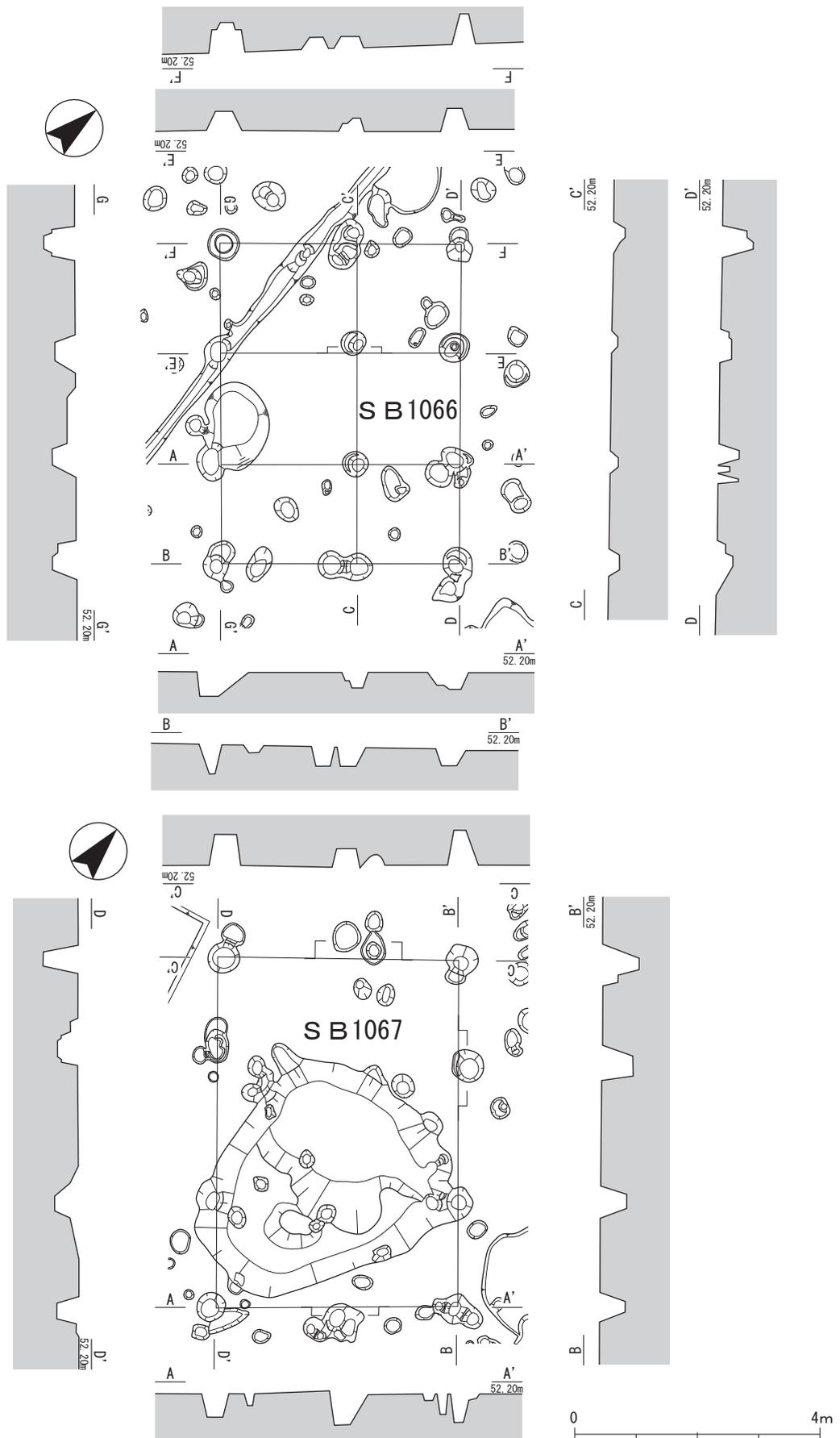
出土遺物はない。

S B 1848(第173図) 第13次調査区の中央北隅、大半が東環の第6次調査区に含まれる位置で検出した総柱建物である。桁行3間(6.9m)×梁行3間(5.85m)の東西棟である。棟方位は、N11°Wである。建物の南東隅の柱穴は、確認できなかった。柱間は、桁行の東側1間分が2.7m、その他は2.1mの等間である。梁行は南側1間分が1.65m、その他は2.1mである。この建物は、S B 601の総柱建物と重複する。

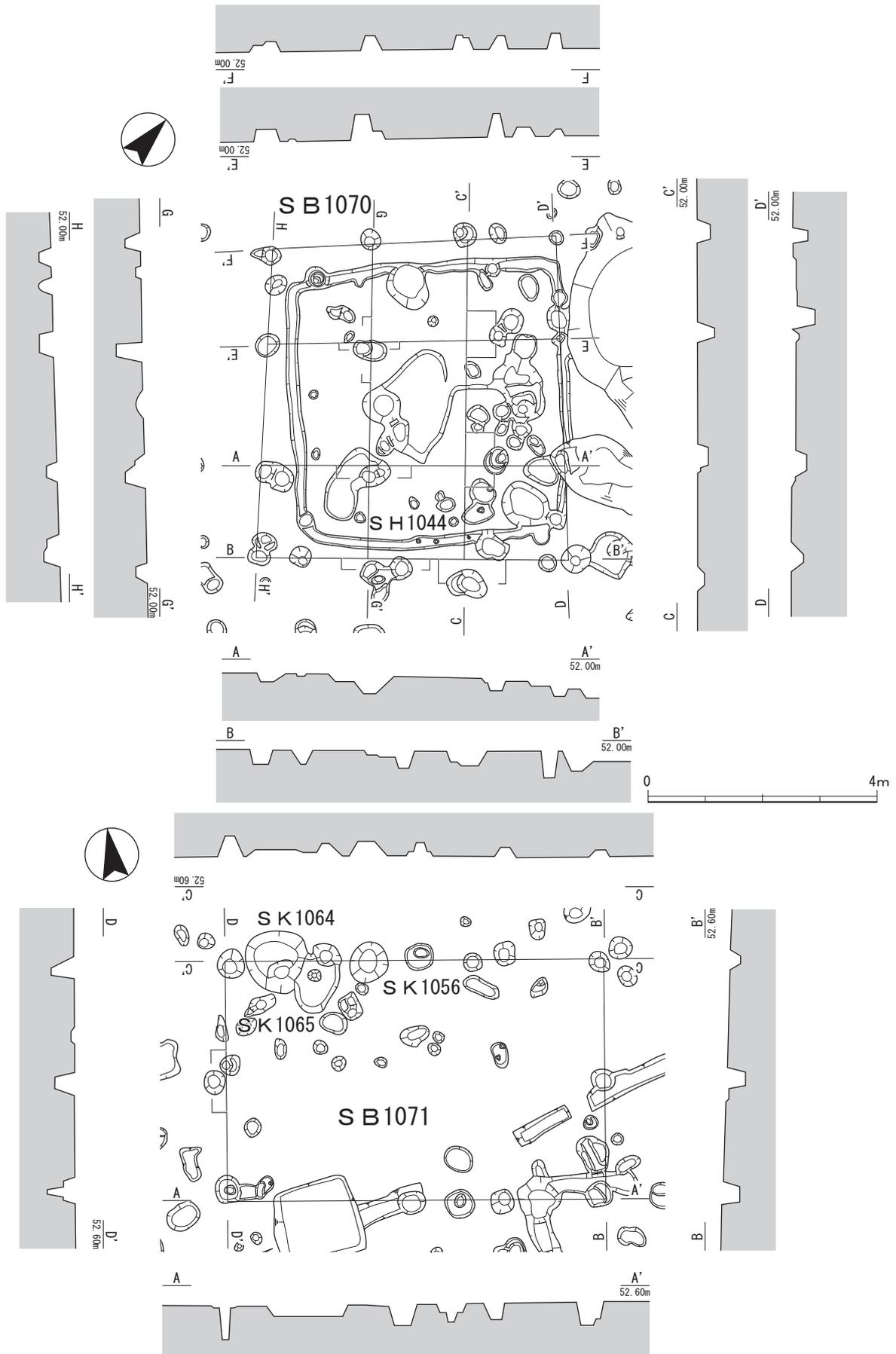
出土遺物には、土師器片がある。



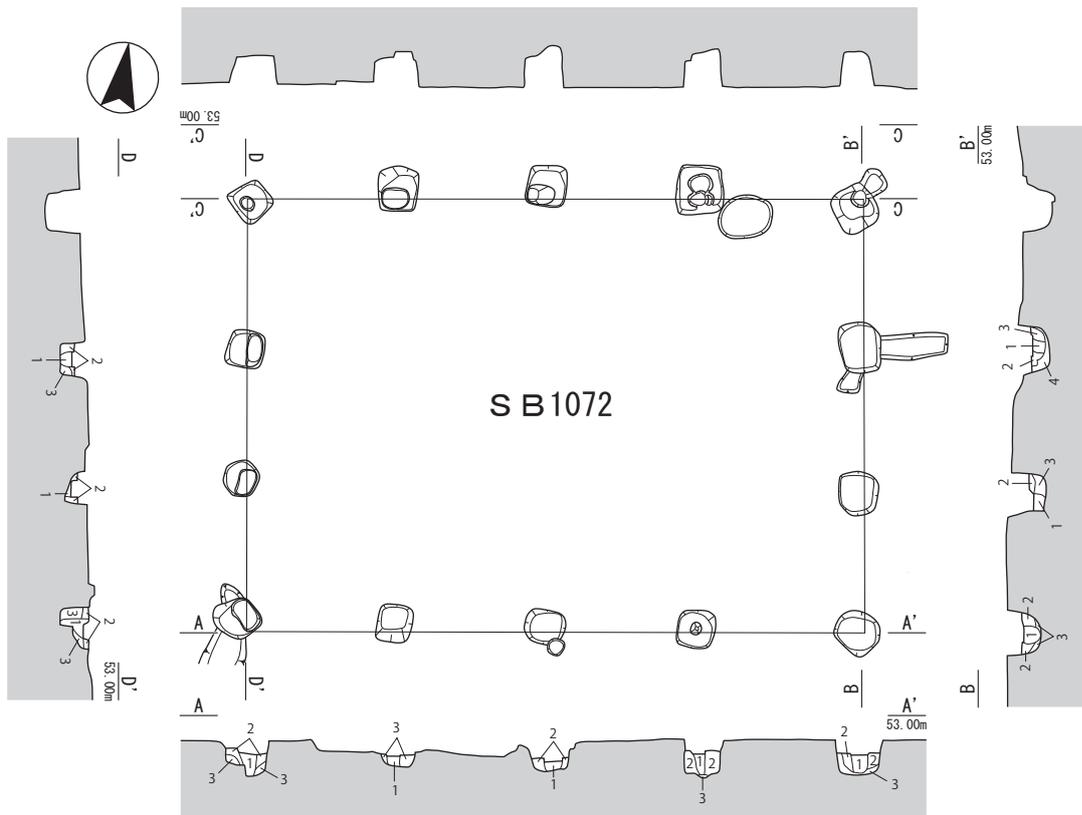
第130図 S B 1045・1065 実測図 (1 : 80・1 : 100)



第 131 図 S B 1066・1067 実測図 (1 : 100)

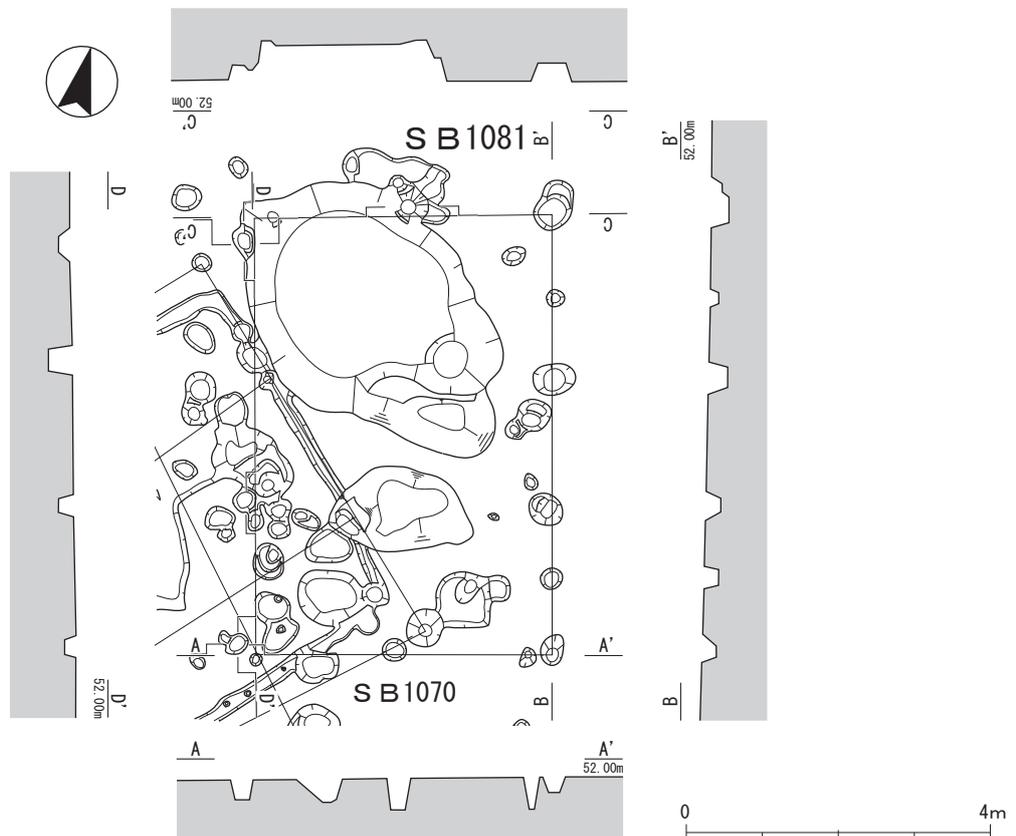


第 133 図 SB 1070・1071 実測図 (1 : 100)

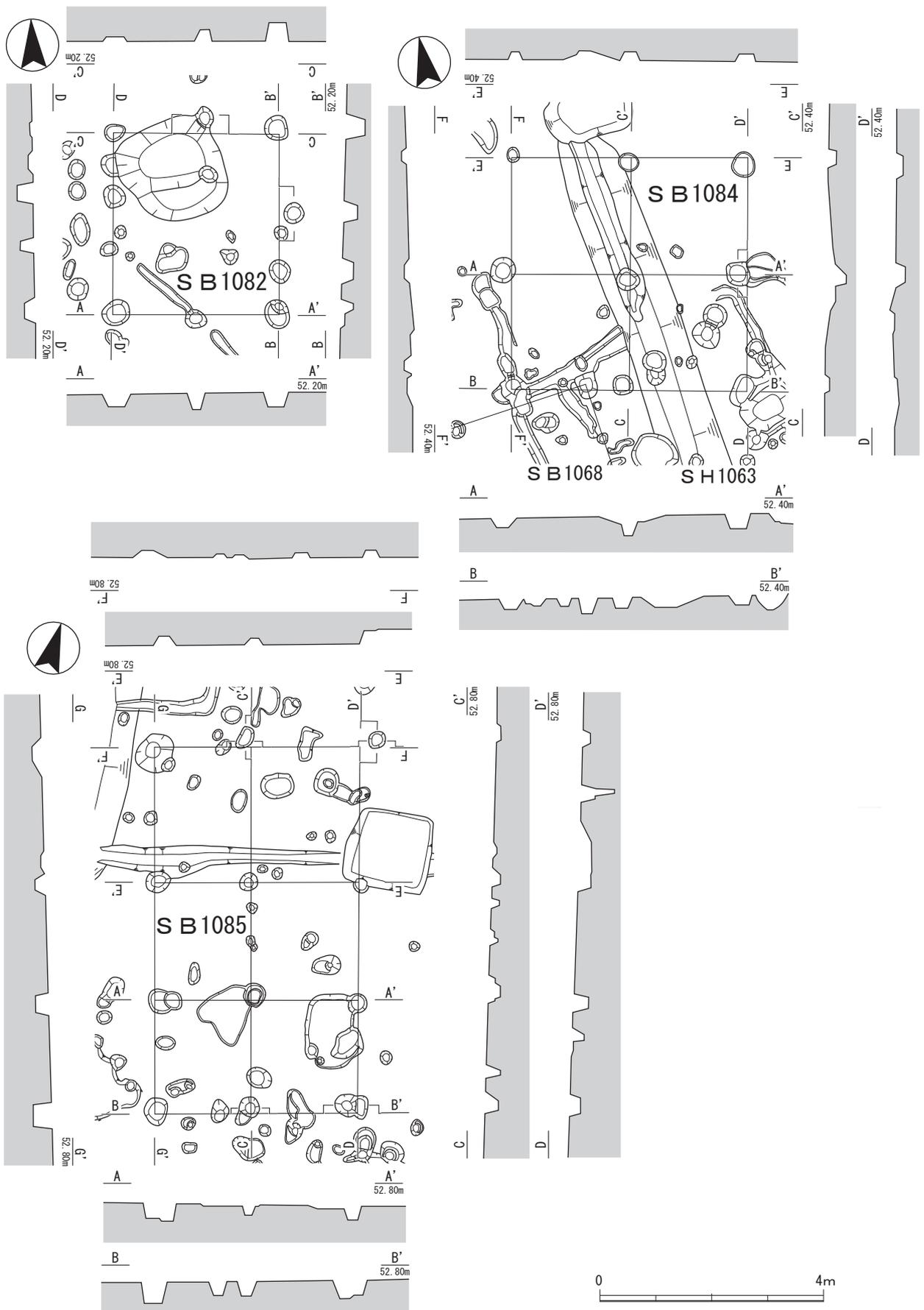


【SB1072】

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1 7.5YR1.7/1 黒色粘質土 (黄褐色土粒・ブロック少量含) | 3 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック含) |
| 2 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色土粒・ブロック少量含) | 4 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色ブロック多量含) |



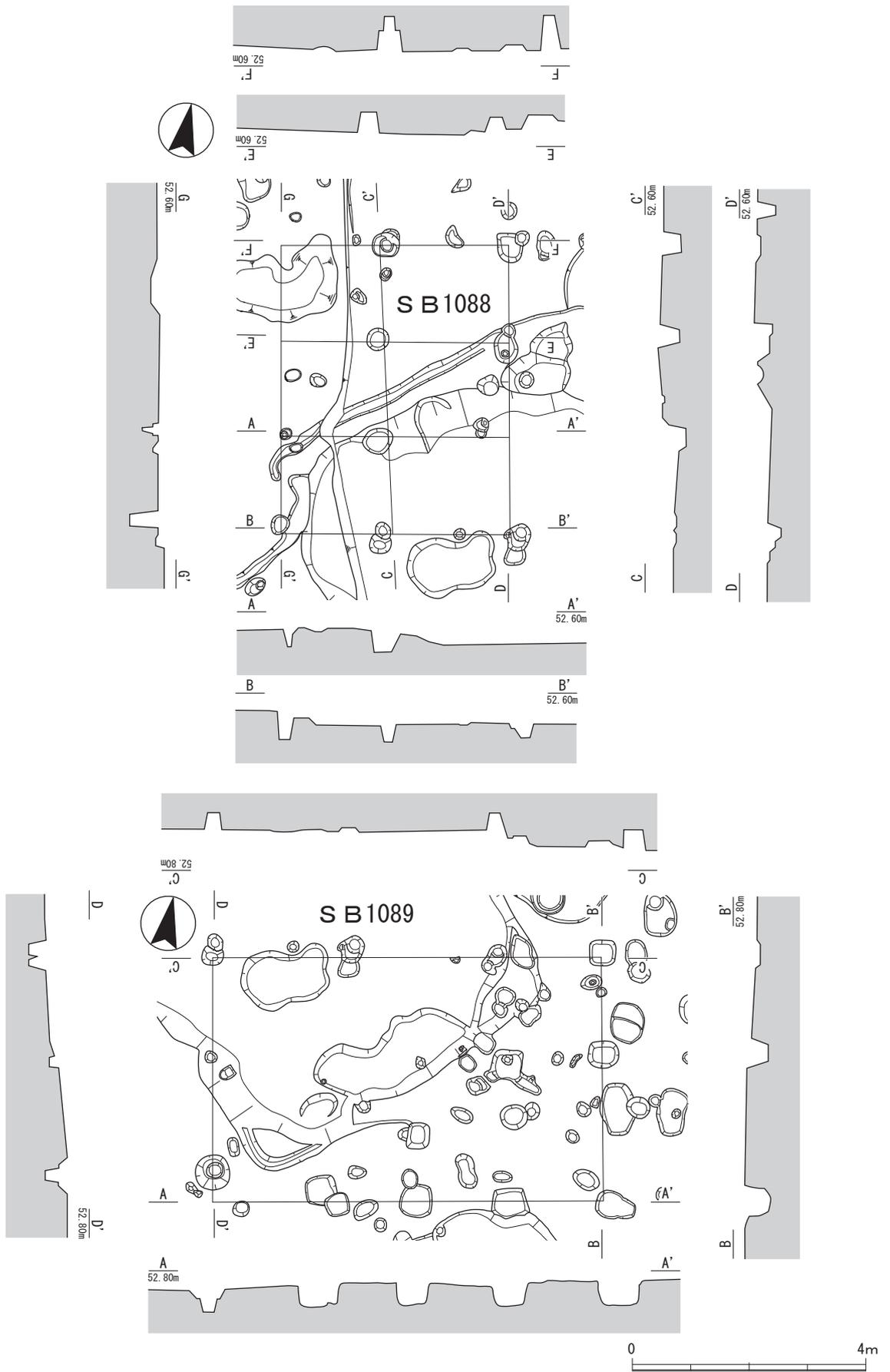
第134図 SB1072・1081実測図 (1 : 100)



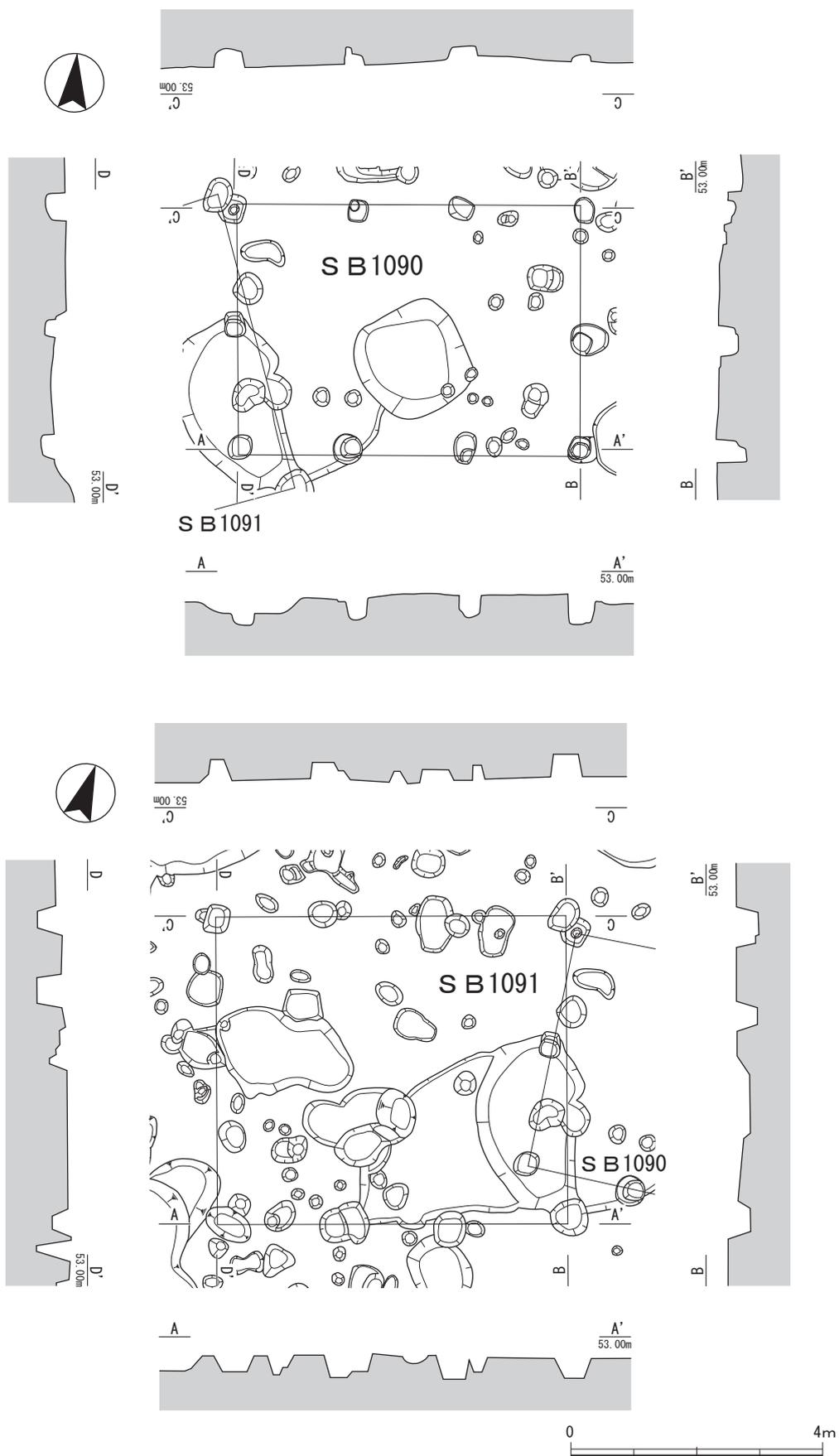
第 135 图 S B 1082 · 1084 · 1085 实测图 (1 : 100)



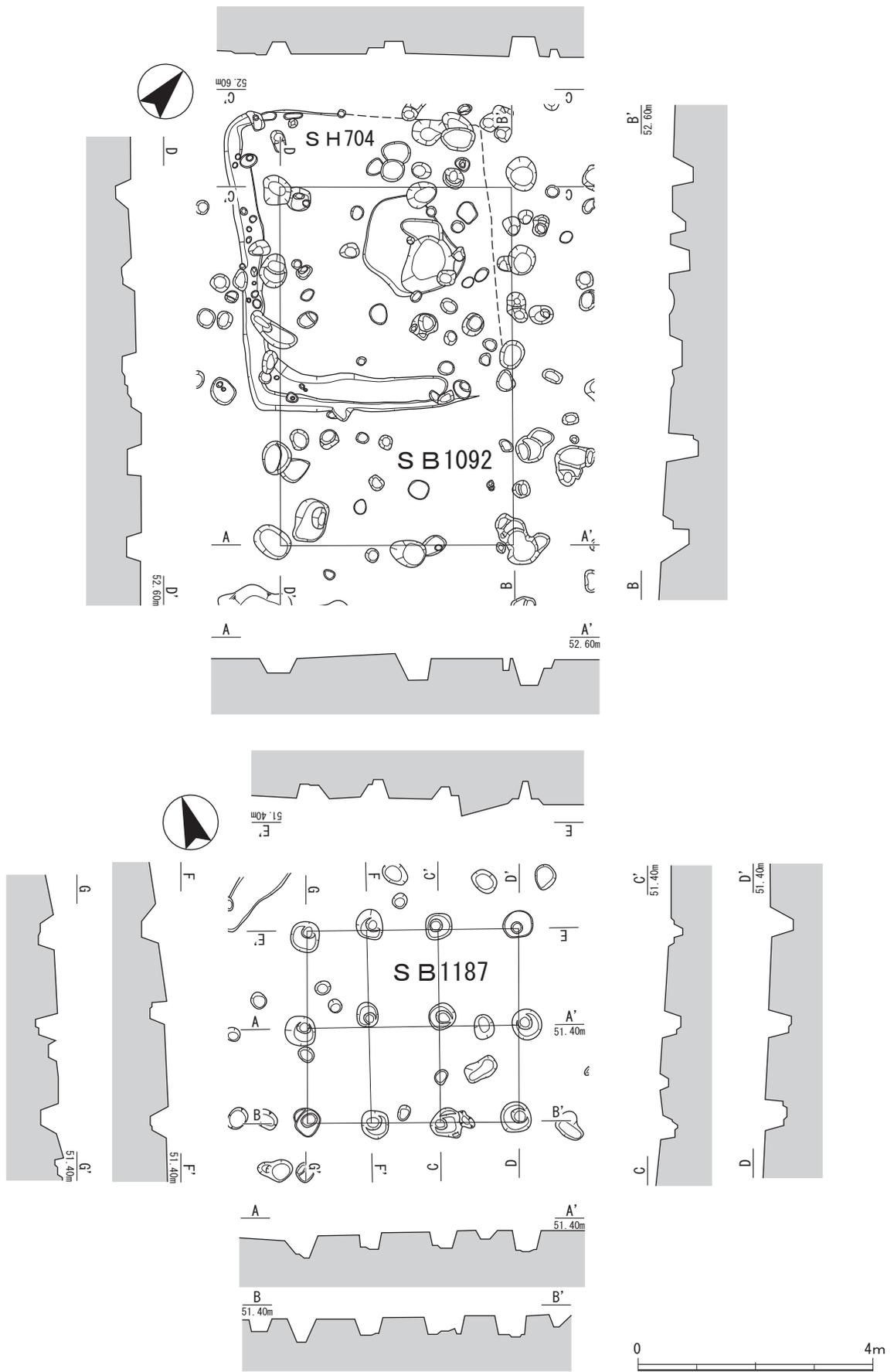
第 136 図 SB 1086・1087 実測図 (1 : 100)



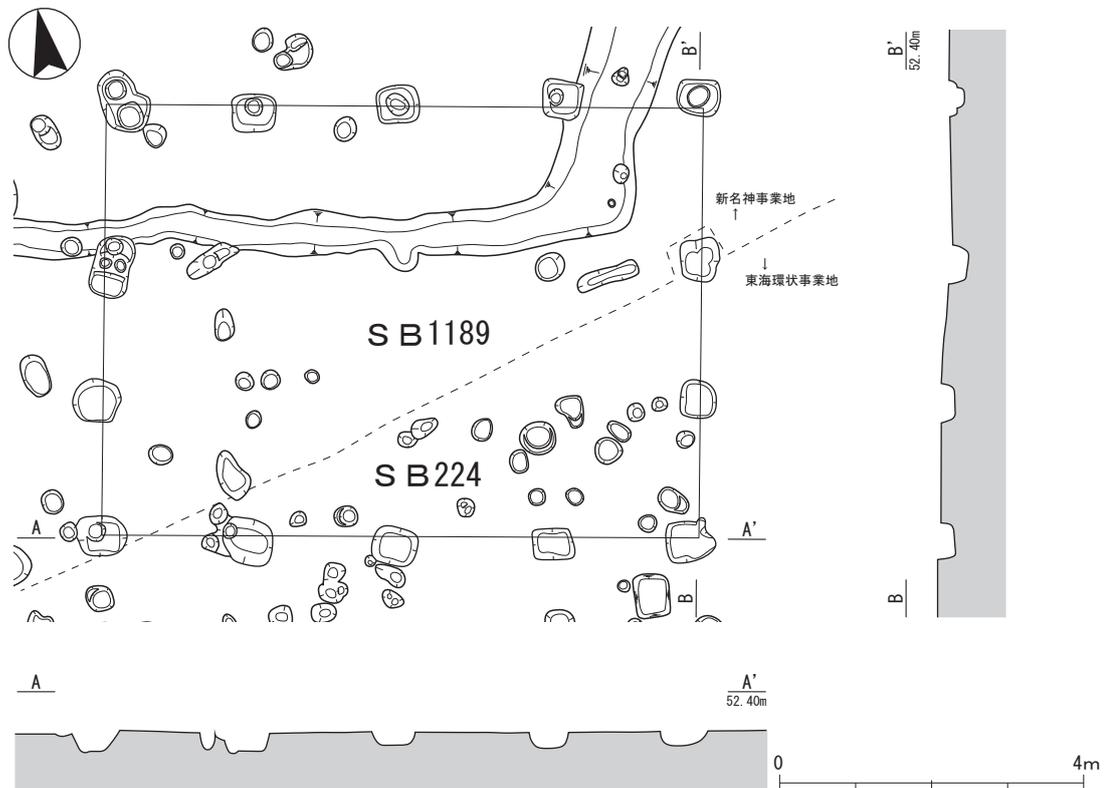
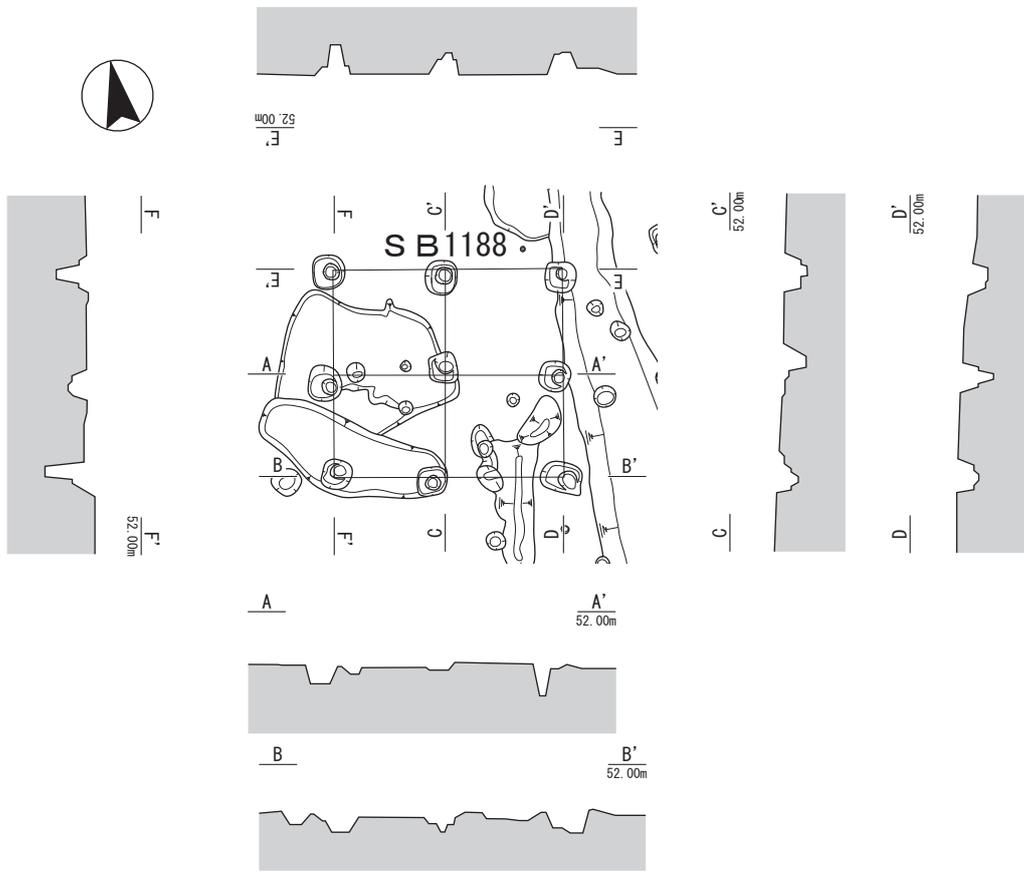
第 137 图 SB 1088・1089 实测图 (1 : 100)



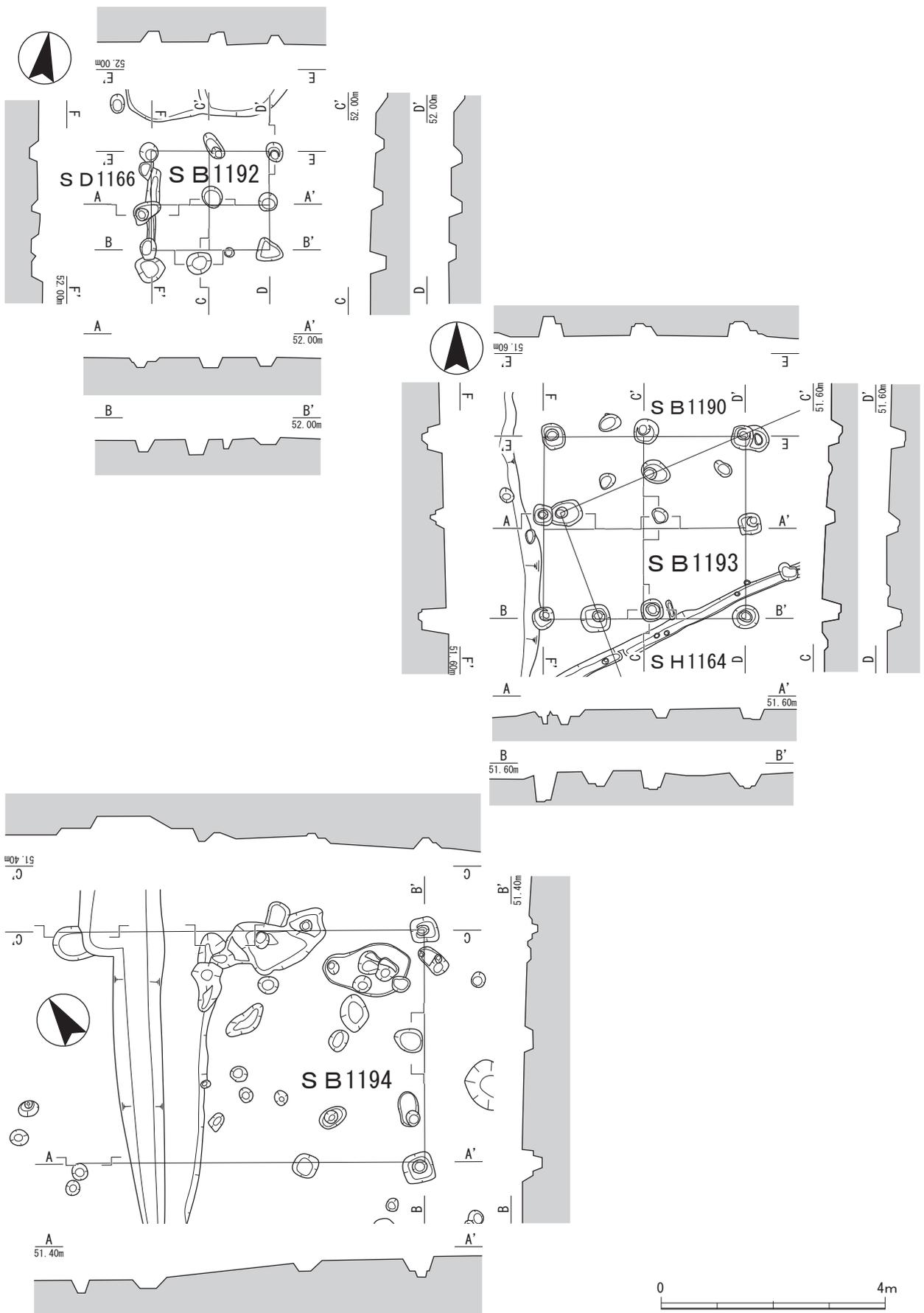
第 138 図 S B 1090・1091 実測図 (1 : 100)



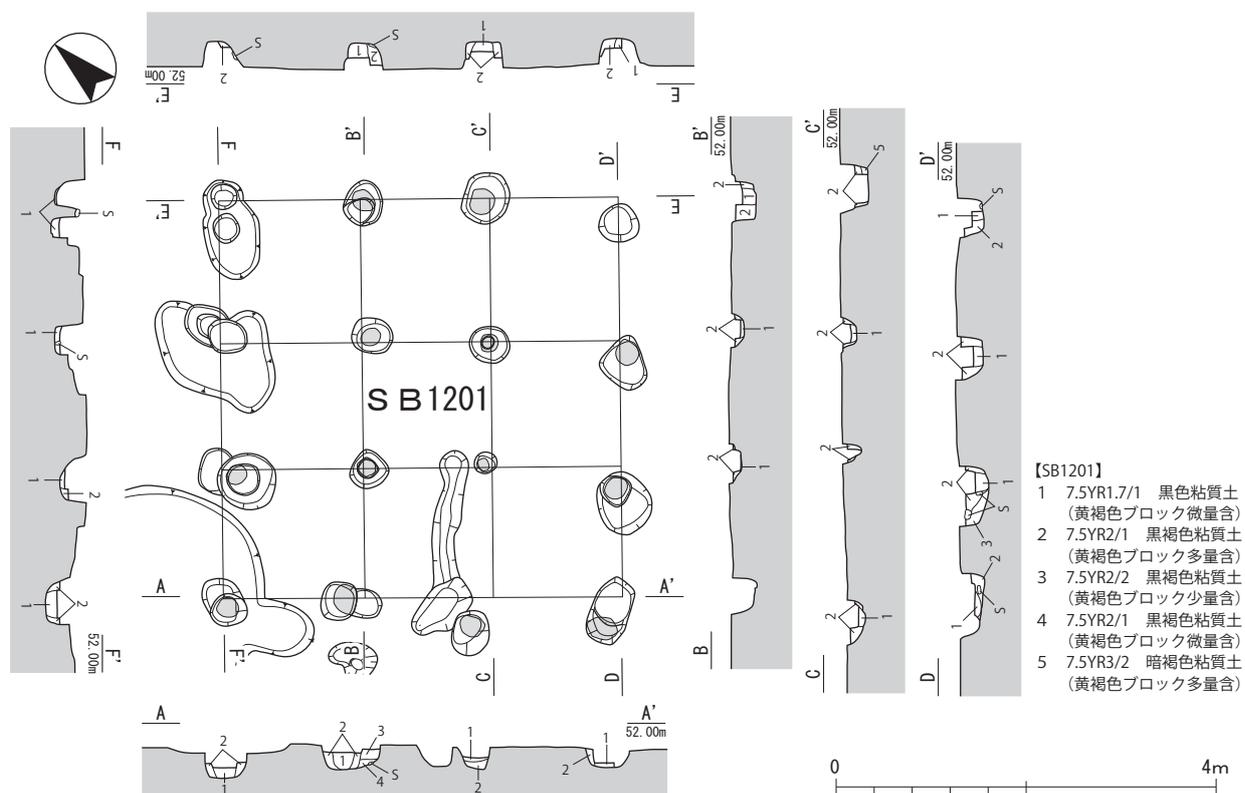
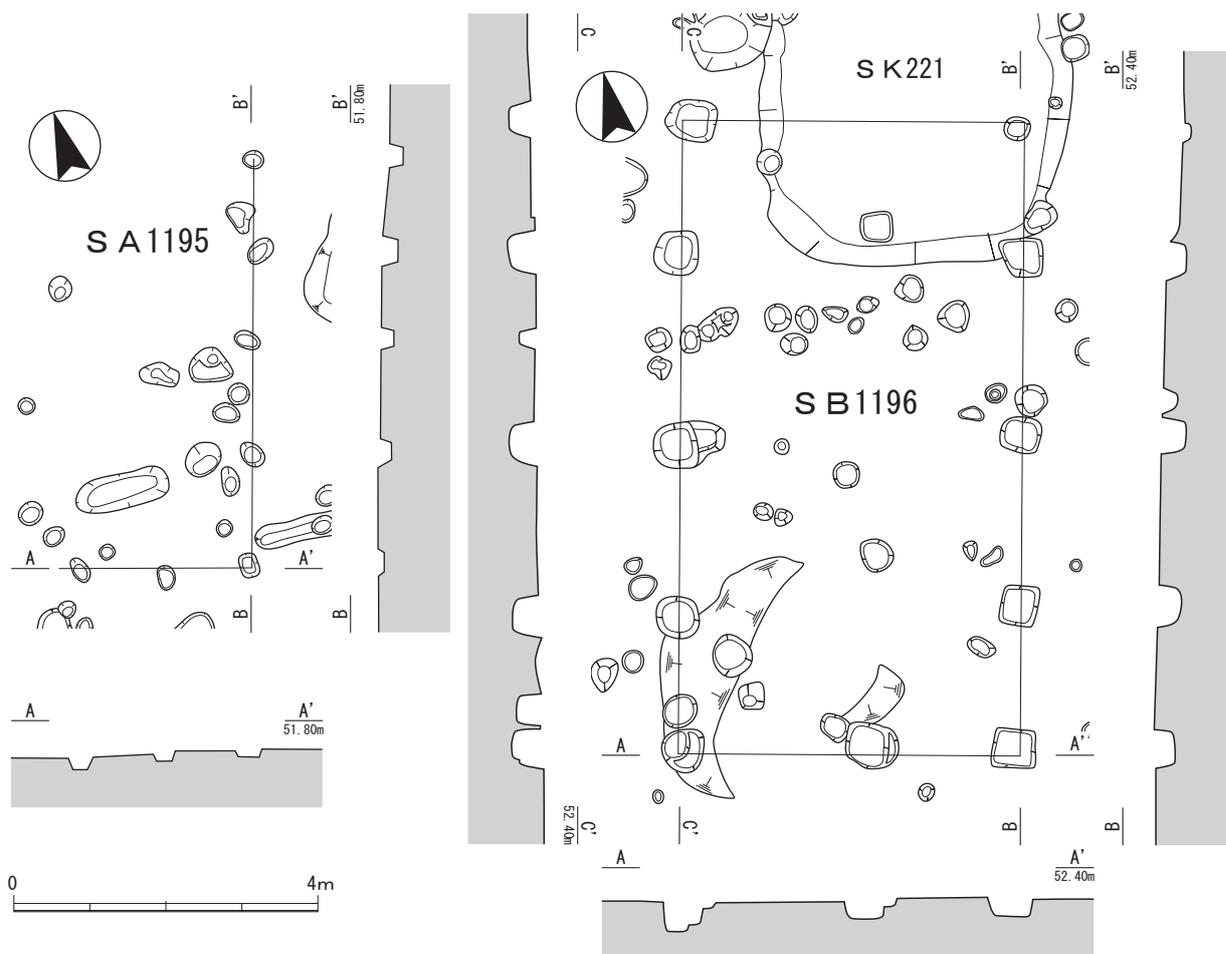
第 139 图 SB 1092・1187 实测图 (1 : 100)



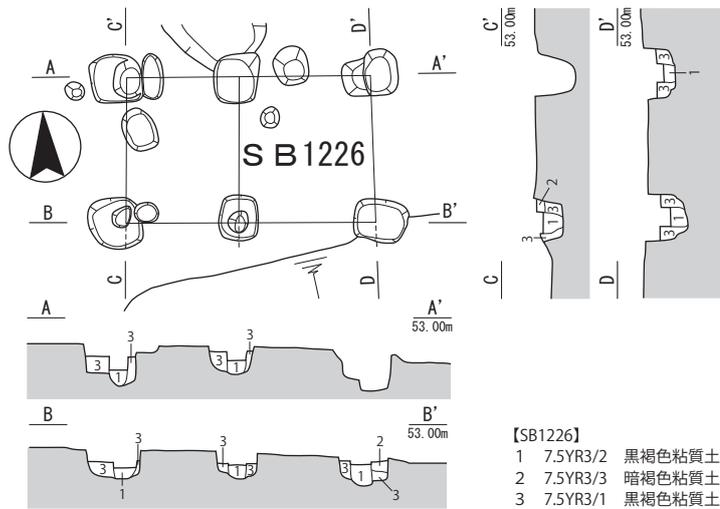
第140図 SB1188・1189実測図(1:100)



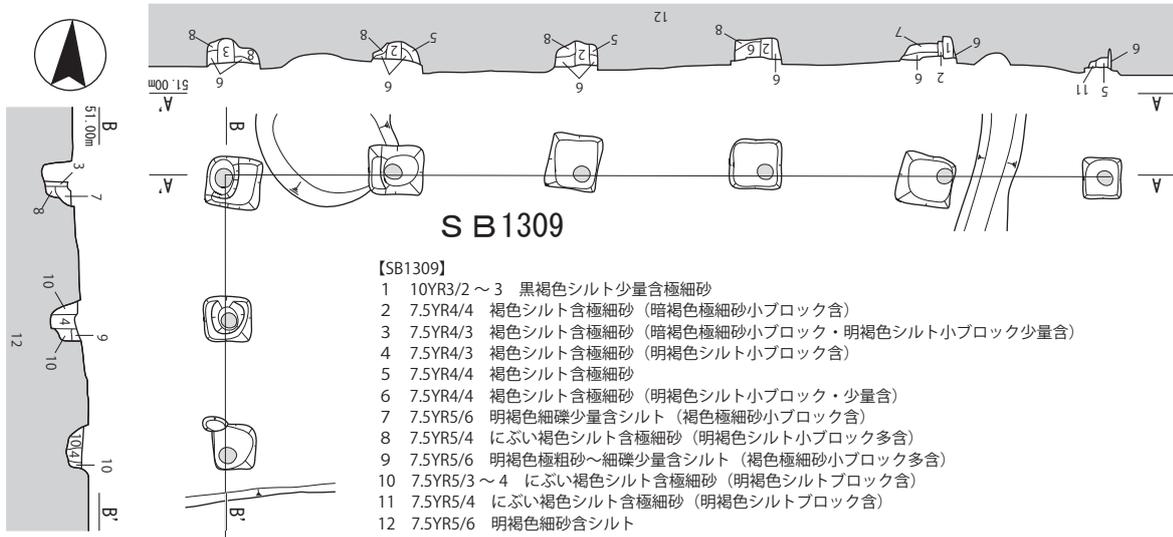
第 142 図 SB 1192・1193・1194 実測図 (1 : 100)



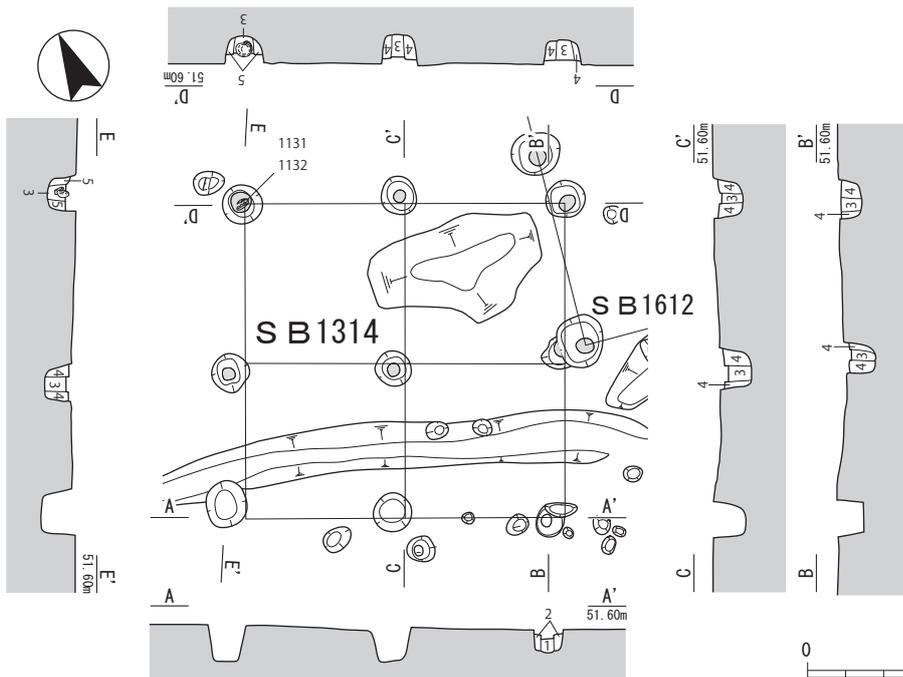
第 143 図 SA 1195・SB 1196・1201 実測図 (1 : 80・1 : 100)



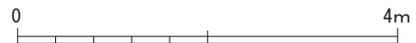
- 【SB1226】
- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘質土（黄褐色土粒・ブロック少量含）
 - 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質土（黄褐色ブロック含）
 - 3 7.5YR3/1 黒褐色粘質土（黄褐色土粒・ブロック多量含）



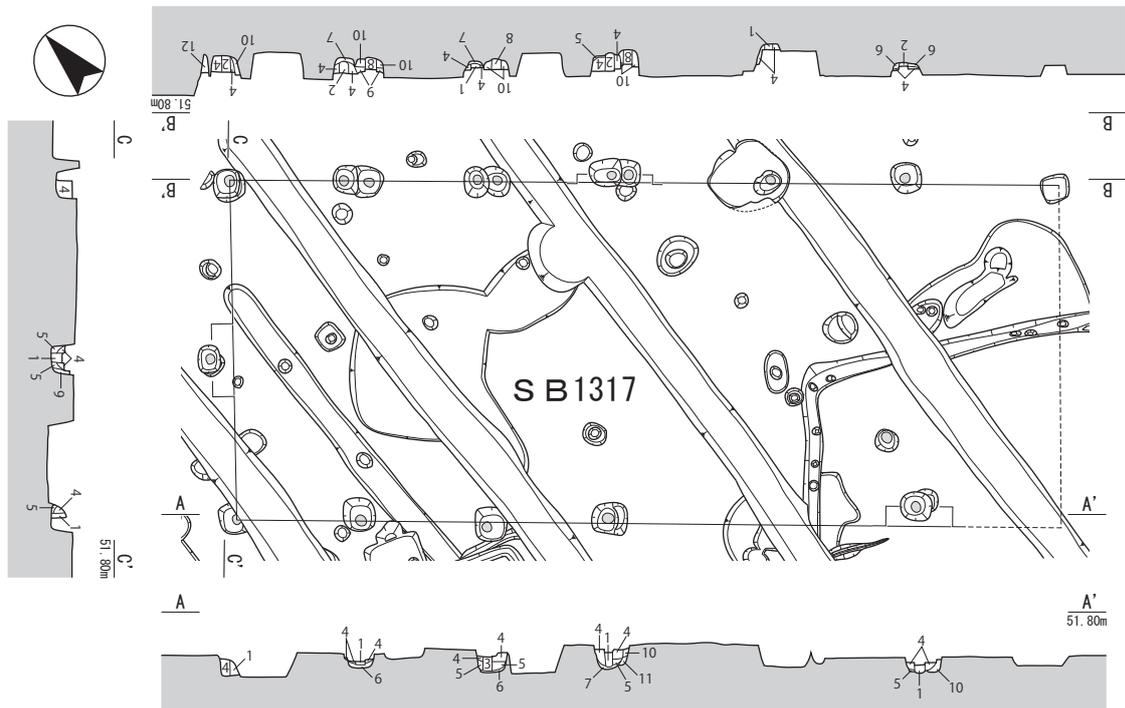
- 【SB1309】
- 1 10YR3/2 ~ 3 黒褐色シルト少量含極細砂
 - 2 7.5YR4/4 褐色シルト含極細砂（暗褐色極細砂小ブロック含）
 - 3 7.5YR4/3 褐色シルト含極細砂（暗褐色極細砂小ブロック・明褐色シルト小ブロック少量含）
 - 4 7.5YR4/3 褐色シルト含極細砂（明褐色シルト小ブロック含）
 - 5 7.5YR4/4 褐色シルト含極細砂
 - 6 7.5YR4/4 褐色シルト含極細砂（明褐色シルト小ブロック・少量含）
 - 7 7.5YR5/6 明褐色細礫少量含シルト（褐色極細砂小ブロック含）
 - 8 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト含極細砂（明褐色シルト小ブロック多含）
 - 9 7.5YR5/6 明褐色極粗砂～細礫少量含シルト（褐色極細砂小ブロック多含）
 - 10 7.5YR5/3 ~ 4 にぶい褐色シルト含極細砂（明褐色シルトブロック含）
 - 11 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト含極細砂（明褐色シルトブロック含）
 - 12 7.5YR5/6 明褐色細砂含シルト



- 【SB1314】
- 1 7.5YR2/2 黒褐色細砂含シルト
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色細砂含シルト（7.5YR5/6 明褐色ブロック5%含）
 - 3 5YR3/1 黒褐色シルト
 - 4 7.5YR4/4 褐色シルト
 - 5 7.5YR4/6 褐色シルト

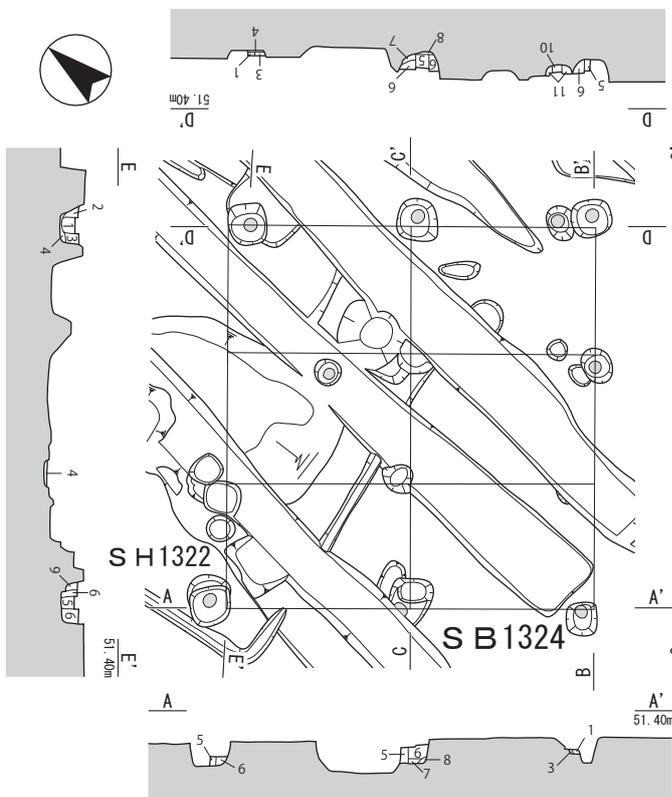


第144図 S B 1226・1309・1314 実測図（1 : 80）



【SB1317】

- | | | | | | |
|---|----------|------------------------------------|----|----------|--------------------------------------|
| 1 | 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (褐色極細砂小ブロックを少量含) | 7 | 10YR5/6 | 黄褐色細礫含シルト (黒褐色極細砂小ブロック含) |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック少量含) | 8 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (褐色極細砂・明褐色シルト小ブロック含) |
| 3 | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト含極細砂 (明褐色シルトブロック多含) | 9 | 10YR3/3 | 暗褐色極細砂多く含シルト (黒極細砂ブロックと明褐色シルト小ブロック含) |
| 4 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (明褐色シルト・暗褐色極細砂小ブロック少量含) | 10 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト少量含極細砂 (明褐色シルト小ブロック少量含) |
| 5 | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト含極細砂 (明褐色シルトブロック多含) | 11 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (明褐色シルトブロック多含) |
| 6 | 7.5YR5/6 | 明褐色細礫含シルト (黒褐色極細砂小ブロック含) | 12 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (明褐色シルト小ブロック含) |

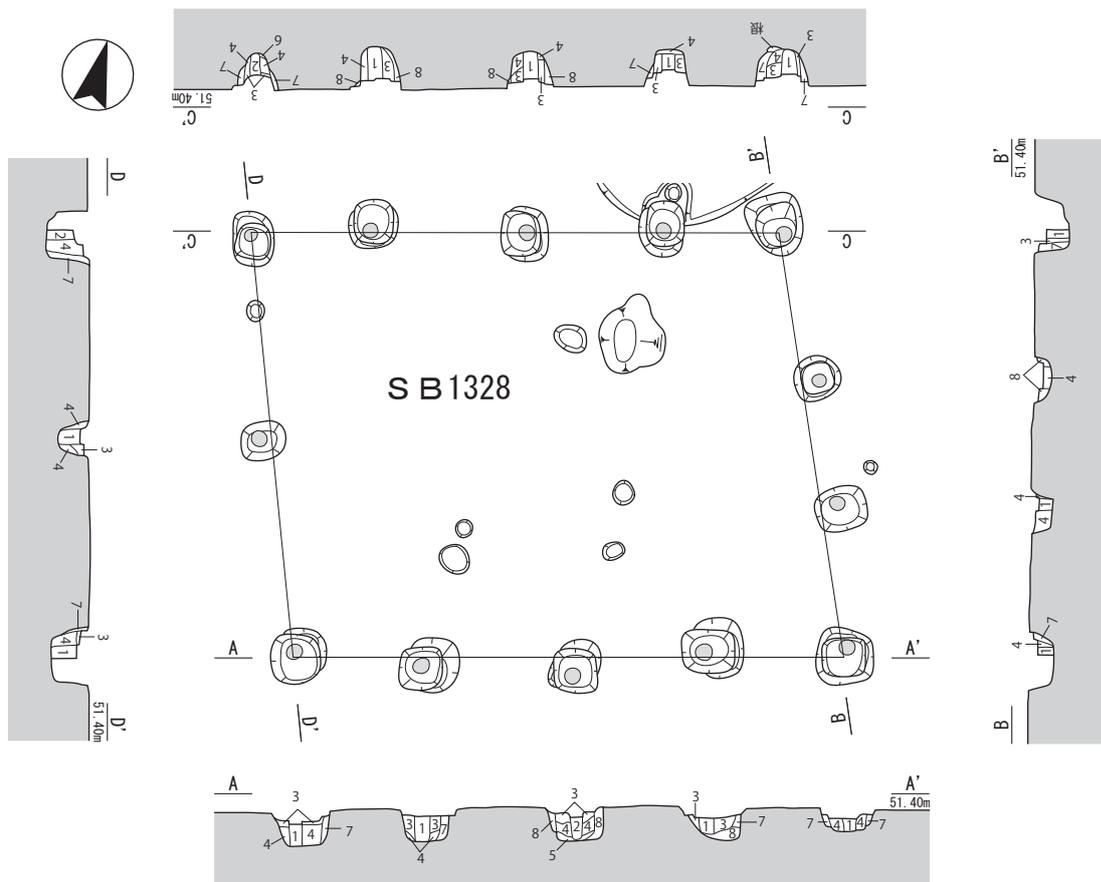
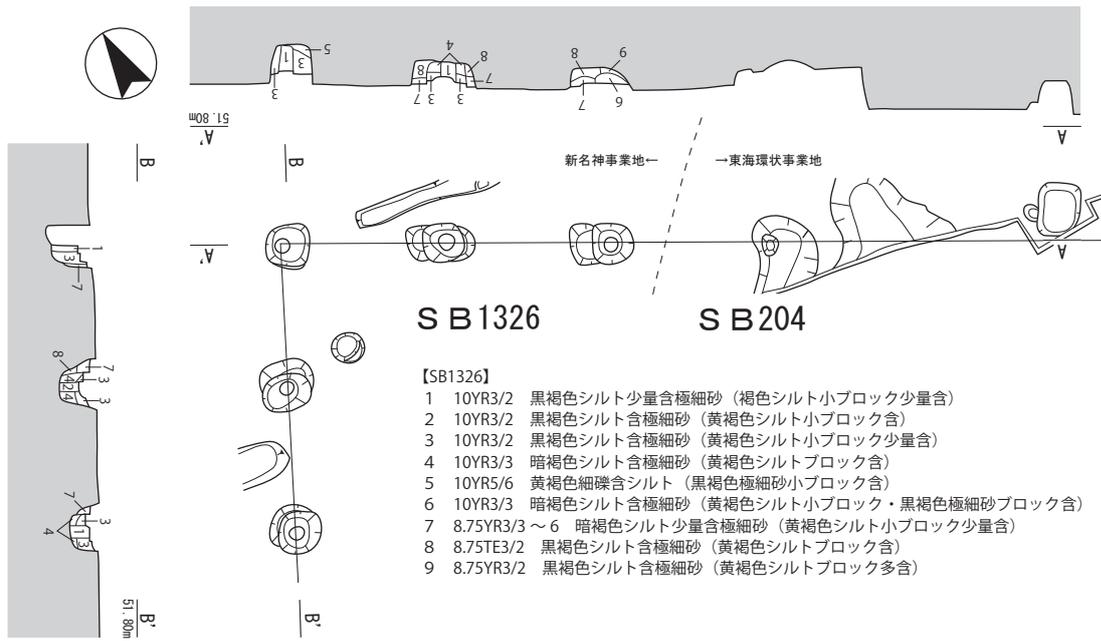


【SB1324】

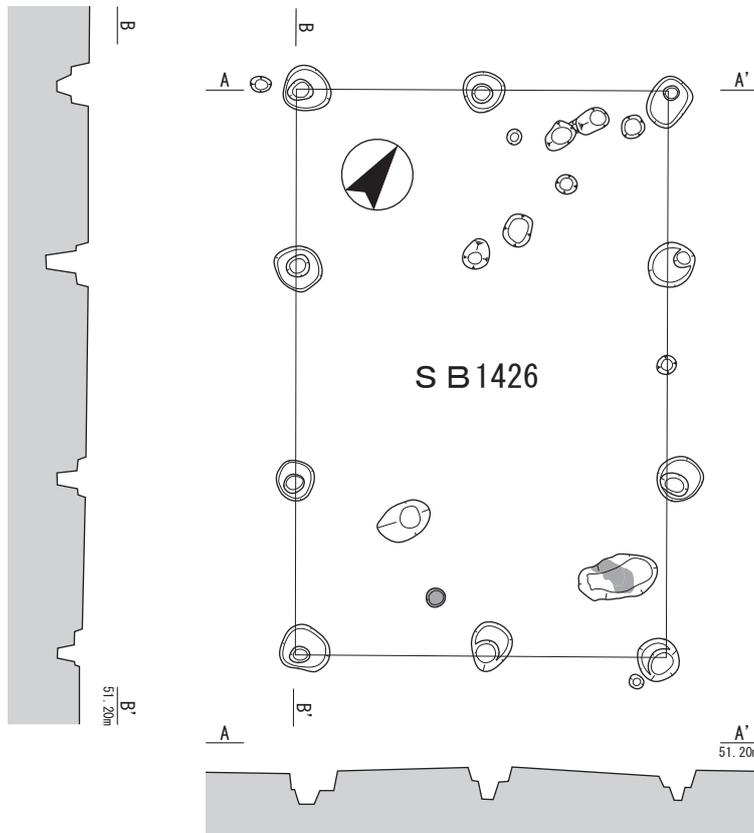
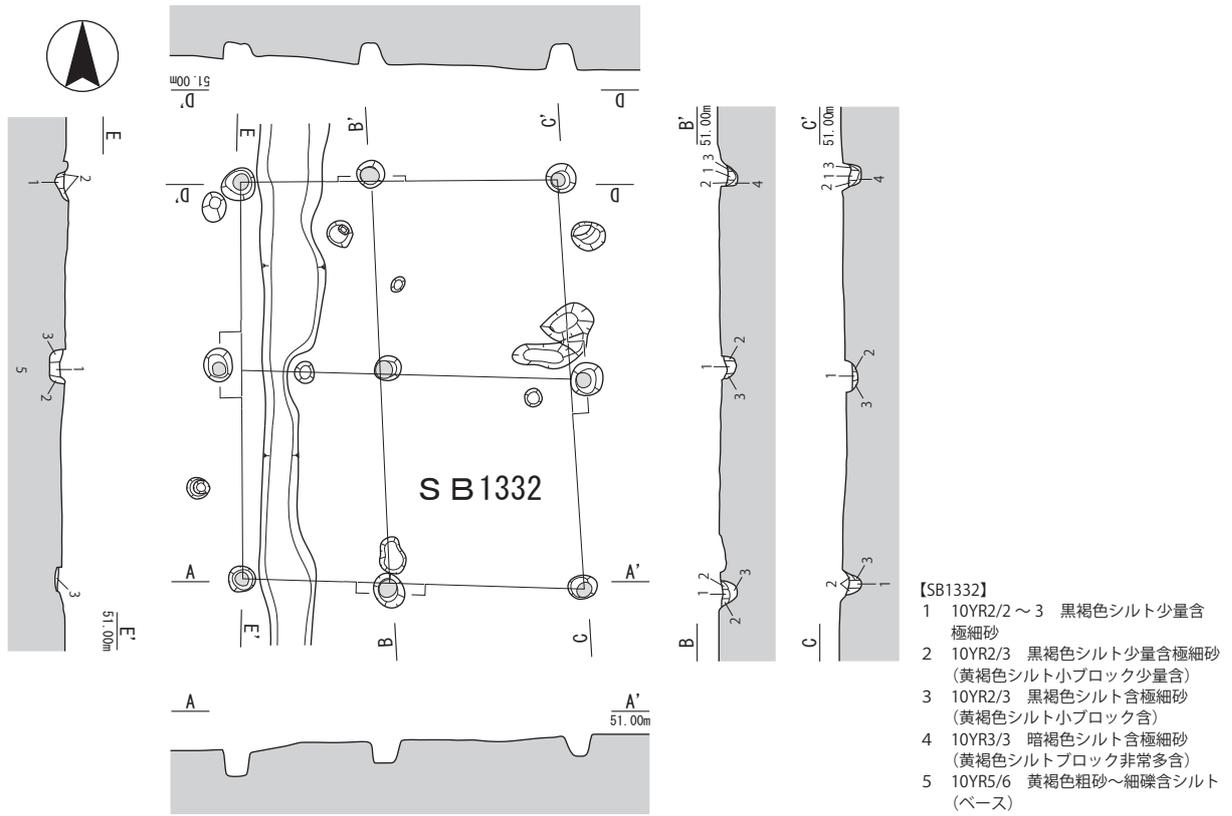
- | | | |
|----|-----------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック・焼土粒少量含) |
| 2 | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト含極細砂 (焼土ブロック多含・黄褐色シルト小ブロック少量含) |
| 3 | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック含) |
| 4 | 10YR4/3 | 褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック多含) |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック少量含) |
| 6 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルトブロック含) |
| 7 | 10YR3/2~3 | 黒褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト小ブロック少量含) |
| 8 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト含極細砂 (黄褐色シルト・褐色極細砂ブロック多含) |
| 9 | 10YR3/2~3 | 黒褐色シルト含極細砂 (細礫少量含) |
| 10 | 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト少量含極細砂 |
| 11 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト少量含極細砂 (黄褐色シルトブロック多含) |



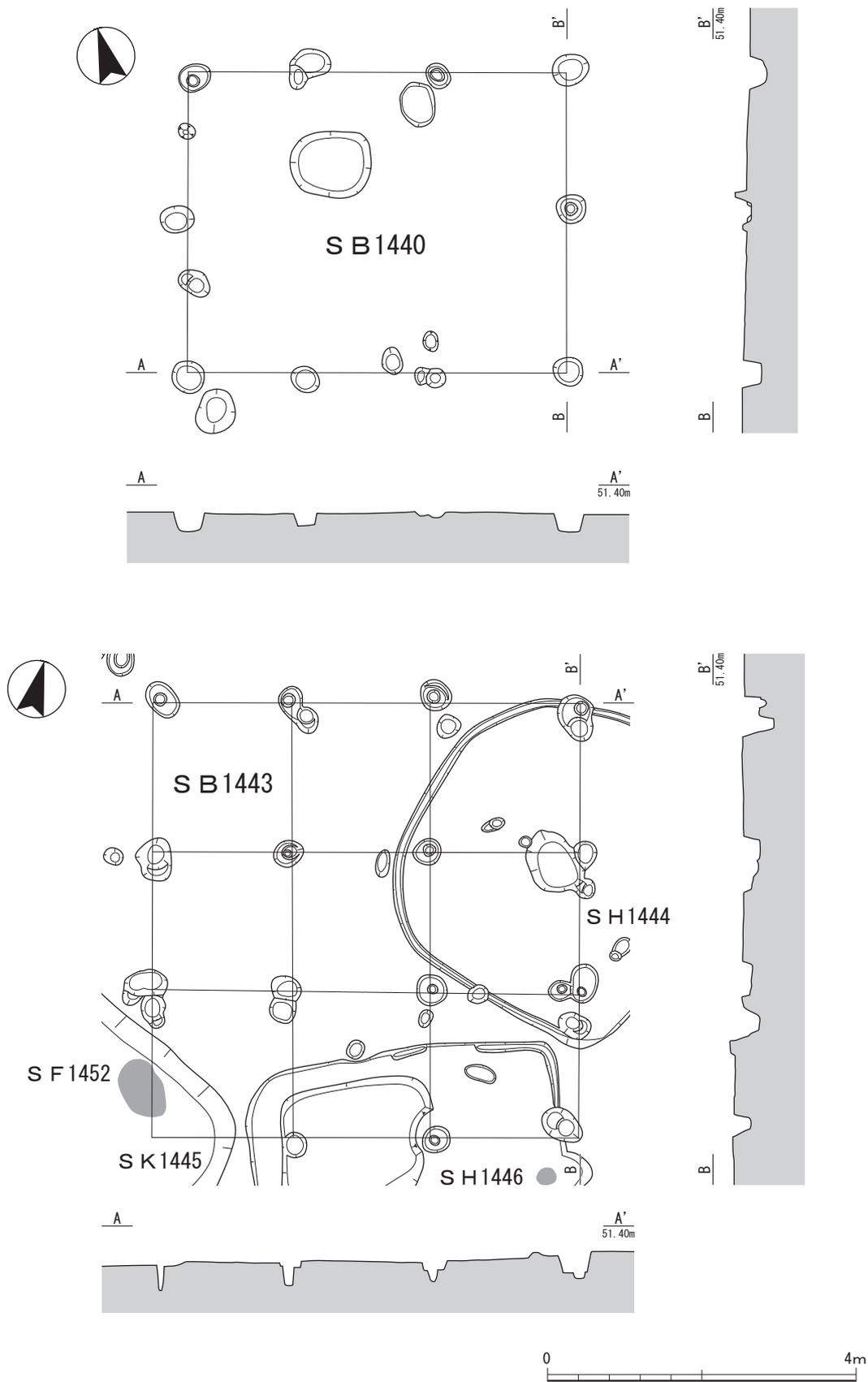
第 145 図 S B 1317・1324 実測図 (1 : 80・1 : 100)



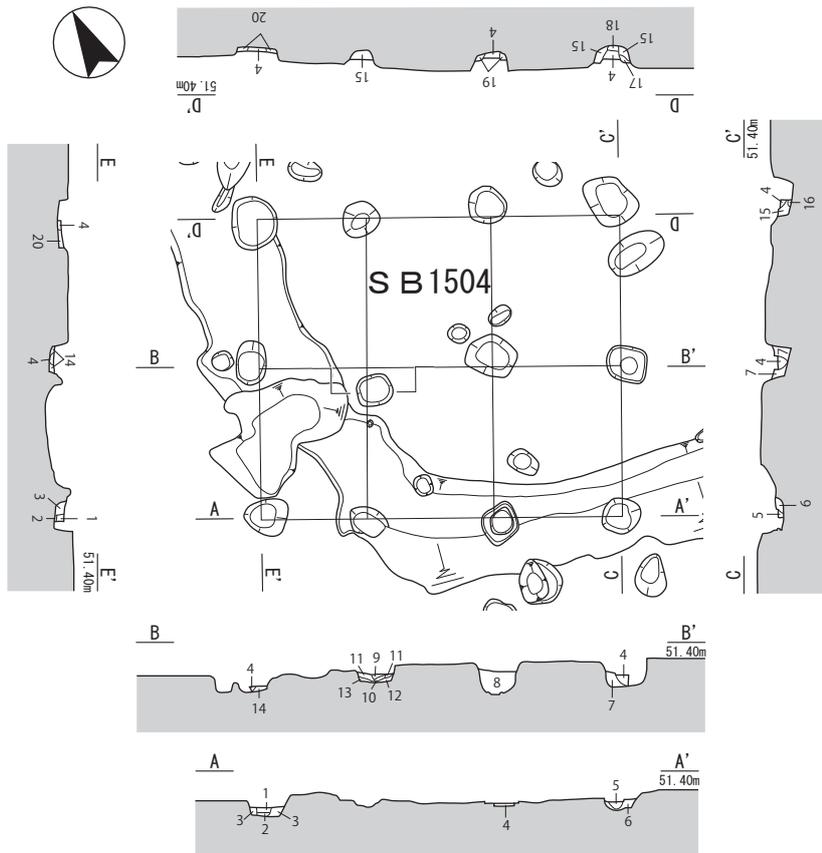
第 146 図 S B 1326・1328 実測図 (1 : 80)



第 147 図 S B 1332・1426 実測図 (1 : 80)

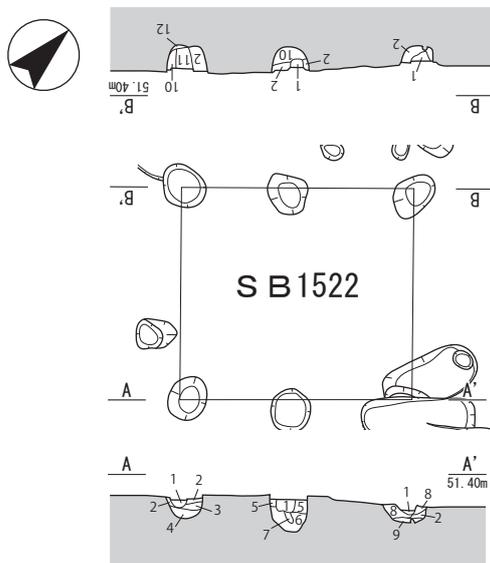


第 148 図 SB 1440・1443 実測図 (1 : 80)



[SB1504]

- | | |
|--|--|
| 1 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト | 11 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト (白色小粒状 5%) |
| 2 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト (白色極小粒 5%) | 12 7.5YR4/6 褐色粘質シルト (白色極小粒状 5%) |
| 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (黄褐色小粒状 2%) | 13 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト (黄褐色小粒砂 10%) |
| 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト | 14 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト (白色小粒状 5%) |
| 5 10YR2/2 黒褐色粘質シルト | 15 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト |
| 6 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (黄褐色小粒状 20%) | 16 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト (白色極小粒~大粒状 20%) |
| 7 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (黄褐色極小粒~大粒 20%) | 17 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (黄褐及び白極小粒~大粒 20%) |
| 8 7.5YR2/3 極暗褐色粘質シルト | 18 10YR4/3 にぶい黄褐色極小粒状砂 (白極小粒~大粒状 20%) |
| (10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト極小粒状 40%・φ10 ~ 20 mm石 1%含) | 19 7.5YR3/4 暗褐色粘質シルト |
| 9 10YR3/2 暗褐色粘質シルト (大粒状 40%) | 20 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト (7.5YR5/6 明褐色小粒状 20%) |
| 10 10YR3/4 暗褐色粘質シルト | |

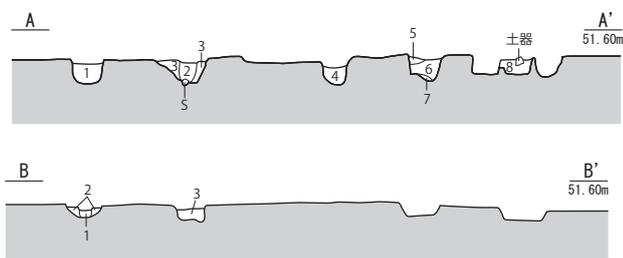
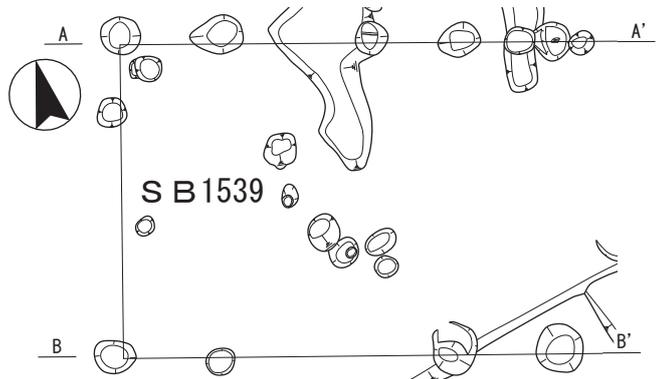
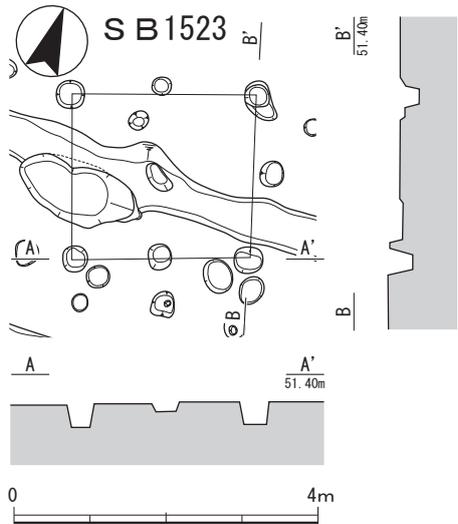


[SB1522]

- | |
|--|
| 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト |
| 2 10YR2/3 黒褐色弱い粘質シルト |
| 3 10YR2/3 黒褐色粘質シルト |
| 4 10YR2/3 黒褐色弱い粘質シルト
(10YR3/4 暗褐色弱い粘質シルト・極小粒状が中~大塊状含) |
| 5 10YR2/2 黒褐色粘質シルト
(黄褐色小粒粗砂 2~5%) |
| 6 10YR2/2 黒褐色粘質シルト
(黄褐色小粒粗砂 1%) |
| 7 10YR4/6 褐色粘質シルト
(10YR2/3 黒褐色粘質シルト小粒含) |
| 8 10YR2/3 黒褐色弱い粘質シルト (黄褐色小粒粗砂 2%) |
| 9 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト (黄褐色ブロック含) |
| 10 10YR2/3 黒褐色弱い粘質シルト
(10YR3/4 暗褐色弱い粘質シルト極小粒ブロック含) |
| 11 10YR2/2 黒褐色粘質シルト (φ10 mm小石含) |
| 12 10YR3/1 黒褐色粘質シルト |

0 4m

第 149 図 S B 1504・1522 実測図 (1 : 80)

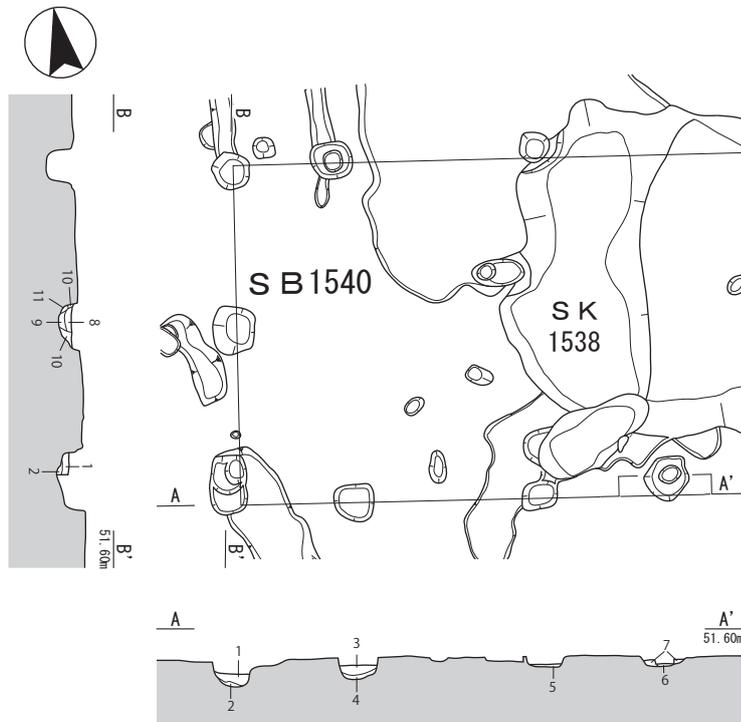


【SB1539 A-A'】

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (長石粒 5% 含)
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (ベースブロック 含)
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (ベースブロック 5% 含)
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (焼土少量 含)
- 5 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (ベースブロック 多 含)
- 6 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト (φ 3mm 長石粒 30% 含)
- 7 10YR4/1 褐灰色砂質シルト (ベースブロック 斑状に 含)
- 8 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (φ 1cm ベースブロック 25% 含)

【SB1539 B-B'】

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (10YR5/3 に ぶい 黄褐色 砂質シルトブロック 40% 含)
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (ベースブロック 60% 程度 含)

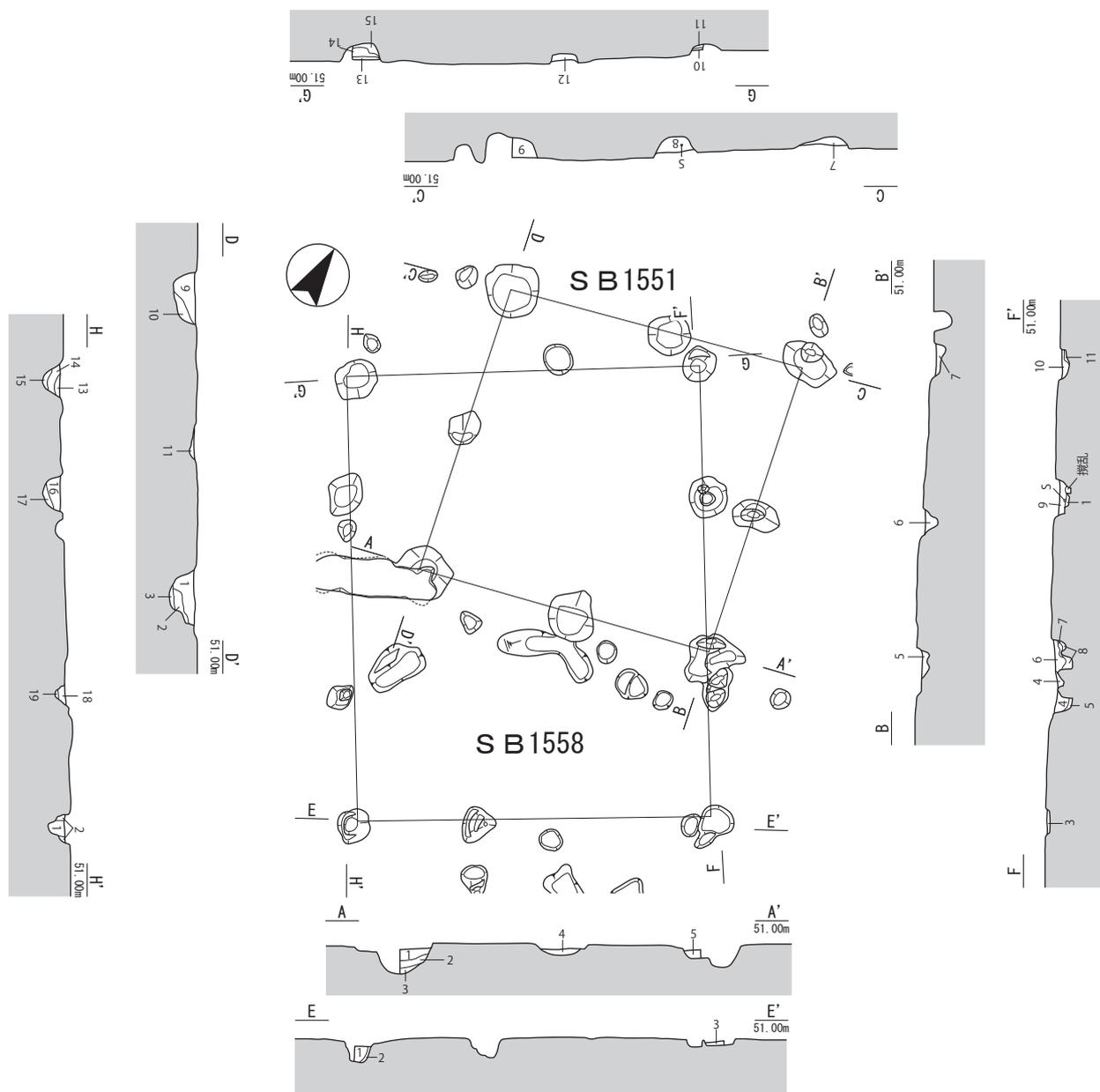


【SB1540】

- 1 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (小粒砂 5%)
- 2 10YR3/2 黒褐色細粒状シルト
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質シルト
- 4 7.5YR3/1 黒褐色細粒状シルト (細粒砂 3%)
- 5 10YR3/2 黒褐色弱い粘質シルト (白及び黄褐色細粒砂 7%)
- 6 7.5YR3/3 暗褐色粘質シルト
- 7 10YR3/2 黒褐色弱い粘質シルト (細粒砂 3%)
- 8 10YR2/3 黒褐色粘質シルト (小粒状砂 3%)
- 9 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (白及び黄褐色小粒砂 3~5%)
- 10 10YR3/2 ~ 10YR3/4 黒褐~暗褐色 (黄褐色ブロック 含・細粒状シルト小粒砂 3~5%・炭化物 含)
- 11 10YR5/4 に ぶい 黄褐色 (小~中粒砂 7%・細粒砂シルト 含)



第 150 図 SB 1523・1539・1540 実測図 (1 : 80・1 : 100)



【SB1551】

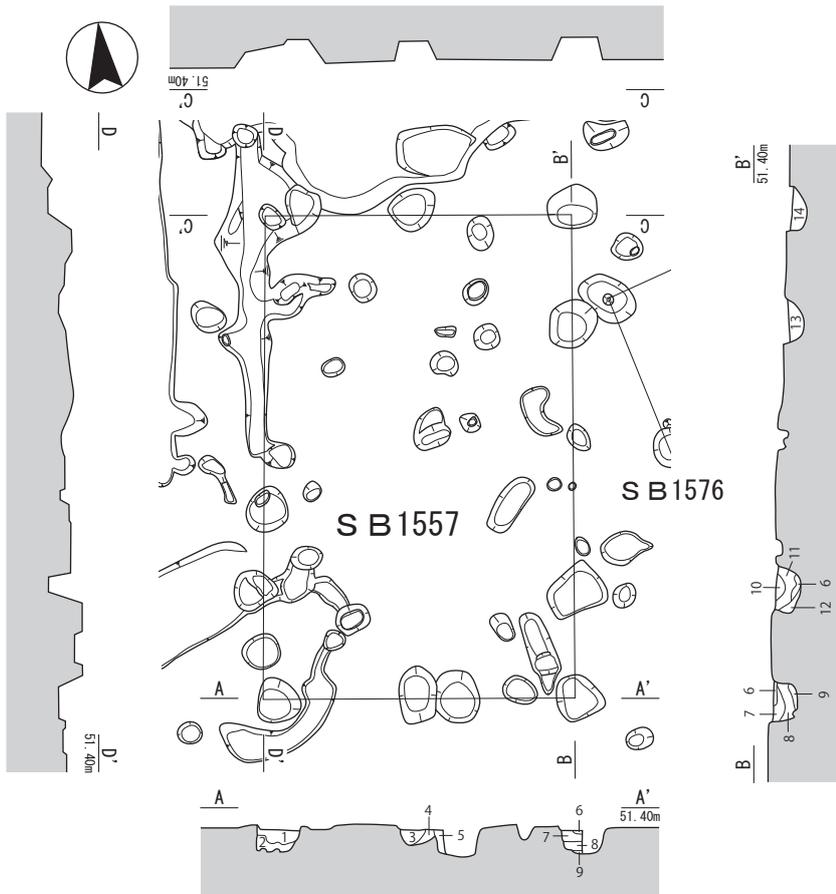
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 5cmベースブロック 20%含)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 2cmベースブロック斑状含)
- 3 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質シルト (炭化物少量含・焼土含)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cmベースブロック 30%含)
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 6cmベースブロック含)
- 7 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒 20%含)
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 2cm花崗岩礫含)
- 9 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (焼土少量含)
- 10 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 5mmベースブロック斑状含)
- 11 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2mm長石粒少量含)

【SB1558】

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト (φ 5mmベースブロック 5%含)
- 3 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 2cm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック多含)
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (ベースブロック斑状含)
- 6 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2mm長石粒少量含)
- 7 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1cm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック 30%含)
- 8 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック斑状含)
- 9 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1cmベースブロック少量含)
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 2cmベースブロック 20%含)
- 11 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1mm長石粒 30%含)
- 12 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 2cmベースブロック少量含)
- 13 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (φ 2cmベースブロック含)
- 14 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
- 15 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cmベースブロック斑状含)
- 16 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1mm長石粒 20%含)
- 17 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 8cmベースブロック含)
- 18 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1cmベースブロック斑状含)
- 19 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト

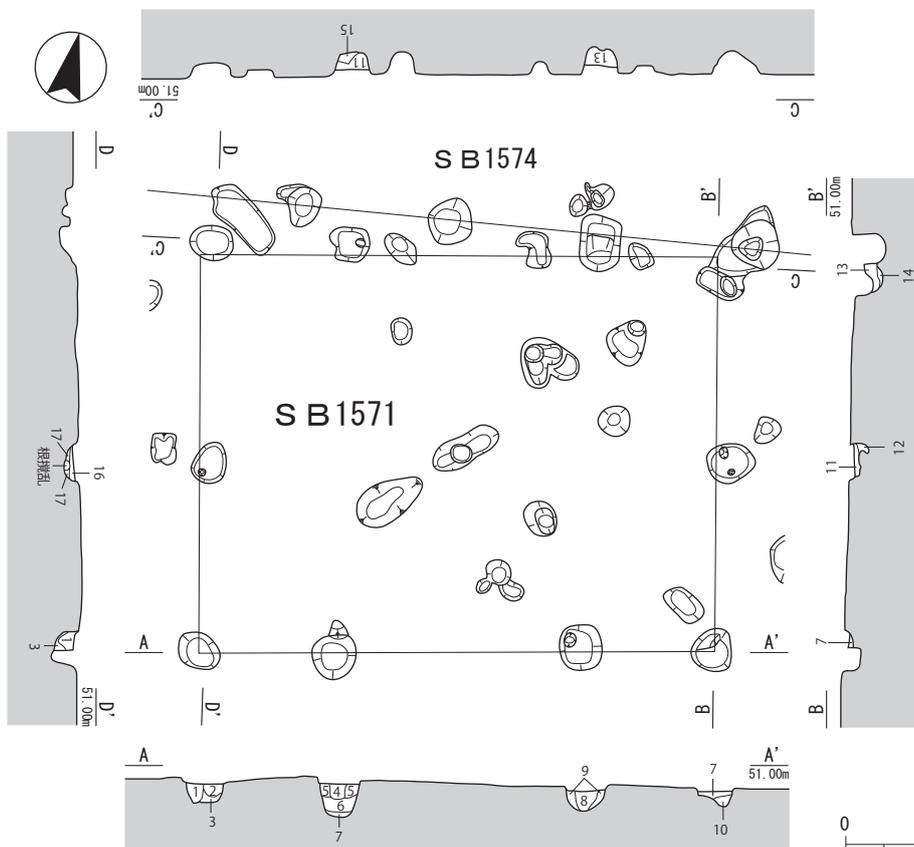


第 151 図 S B 1551・1558 実測図 (1 : 80)



【SB1557】

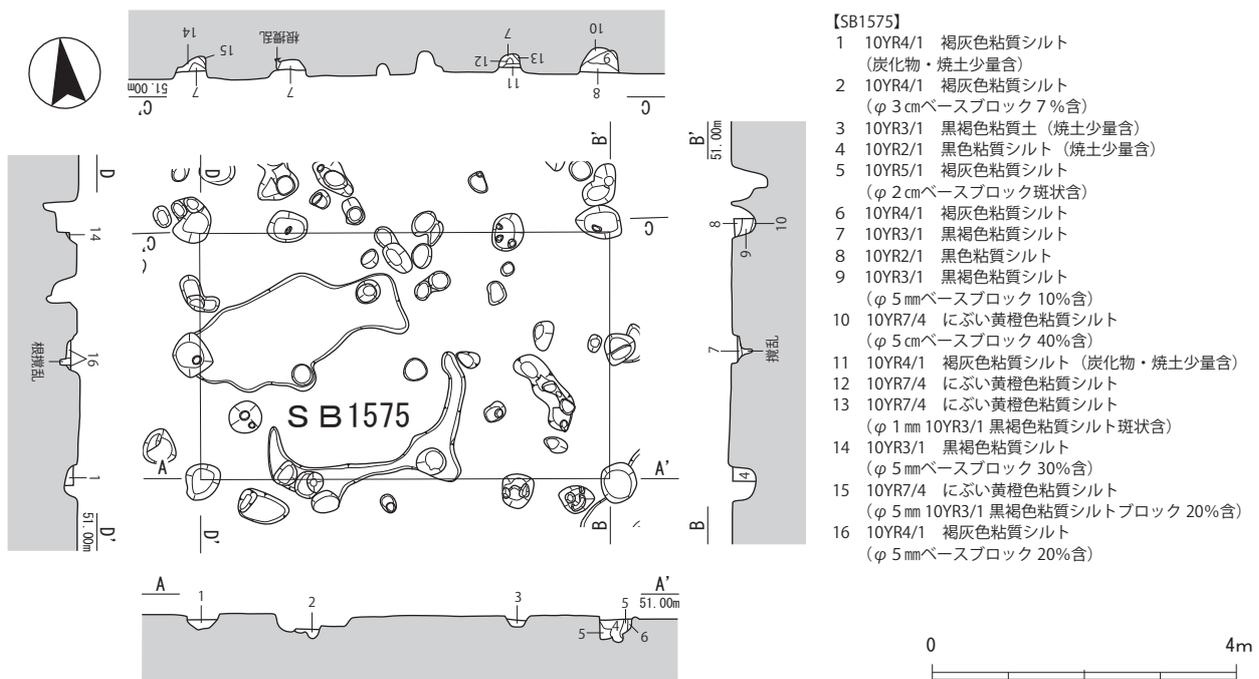
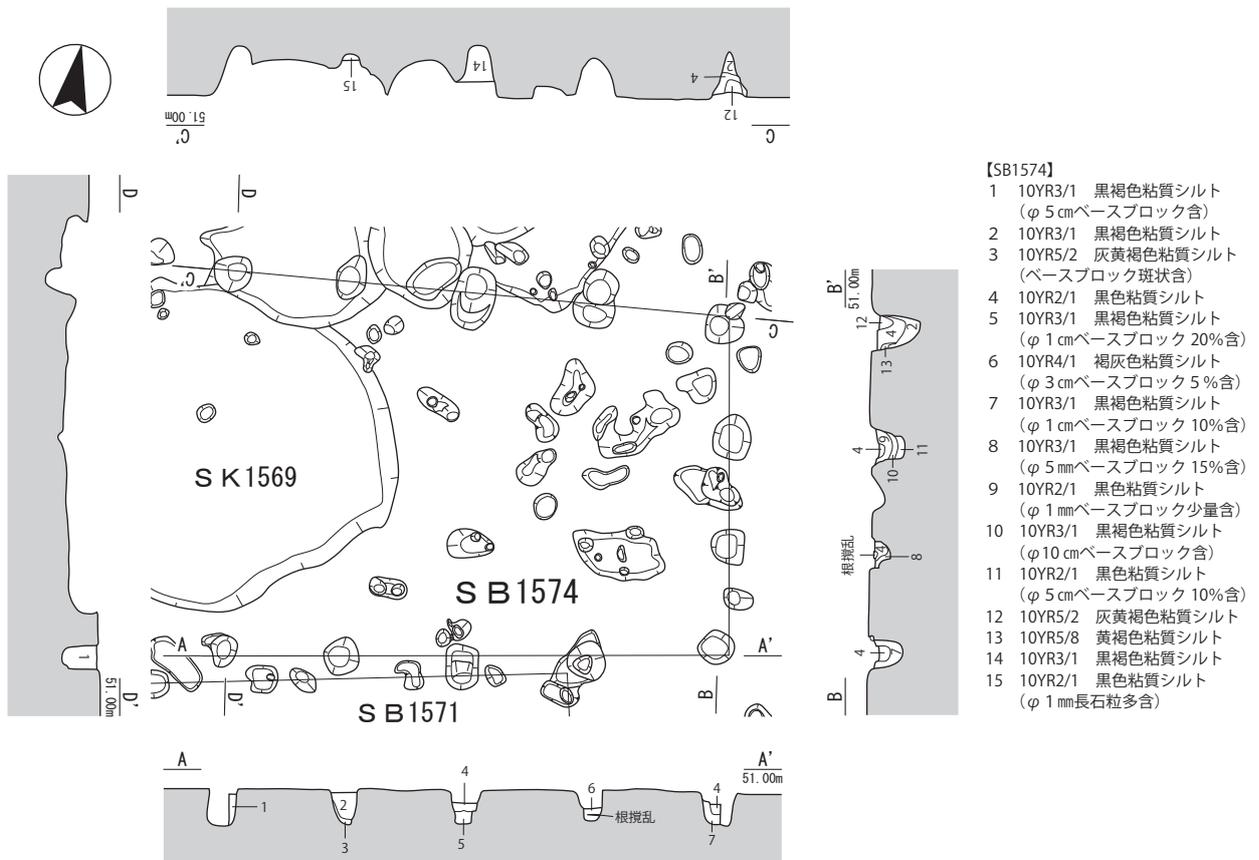
- 1 10YR2/1 黒色粘質土
(φ 1 cm焼土ブロック少量含)
- 2 7.5YR4/1 褐灰色粘質土
(φ 5 cm 10YR5/2 灰黄褐色粘質ブロック少量含)
- 3 10YR2/1 黒色粘質土
(φ 1 mm長石粒 10%含)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
(φ 1 mm長石粒 10%含)
- 5 10YR2/1 黒色粘質土
(φ 1 mm長石粒含)
- 6 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
(φ 3 cmベースブロック多含)
- 7 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
(φ 1 mm長石粒少量含)
- 8 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
(φ 1 cmベースブロック 20%含)
- 9 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
(φ 2 cm礫少量含)
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 11 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト
(φ 5 mmベースブロック 50%以上含)
- 12 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
- 13 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
(φ 2 cmベースブロック斑状含)
- 14 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
(φ 5 mm炭化物少量含)



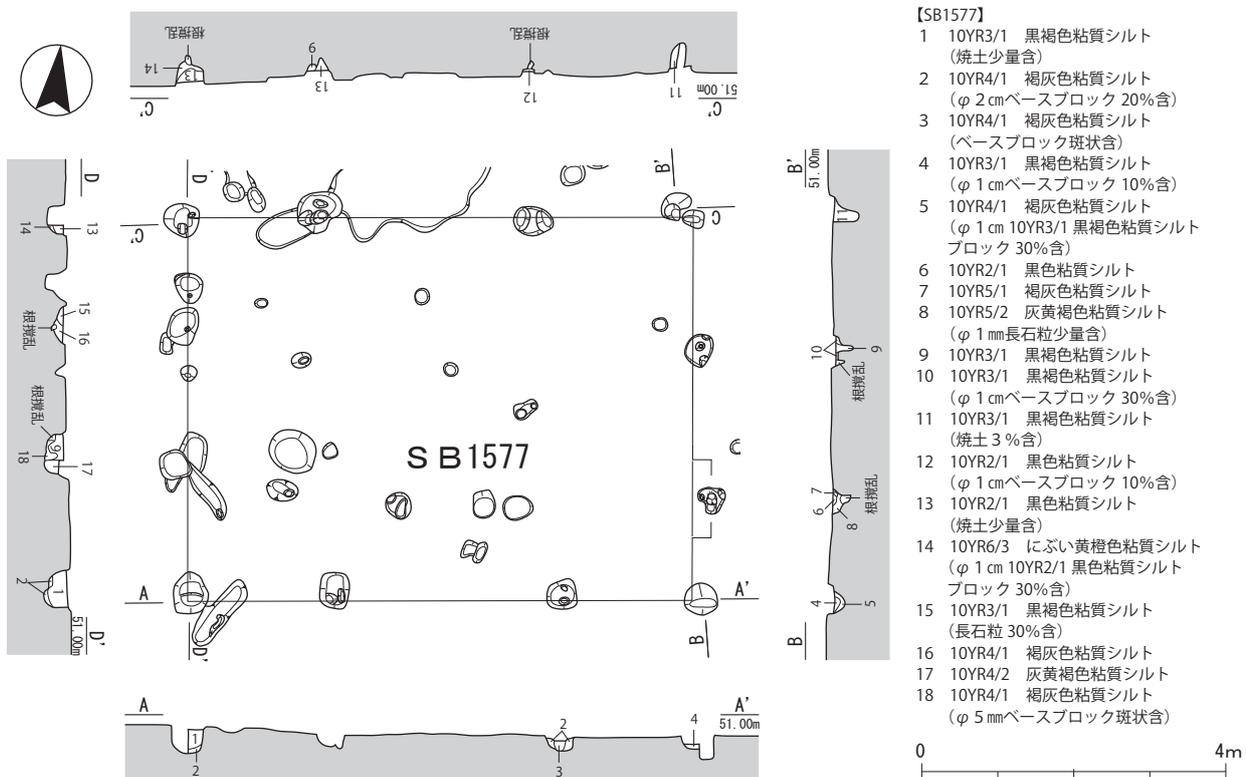
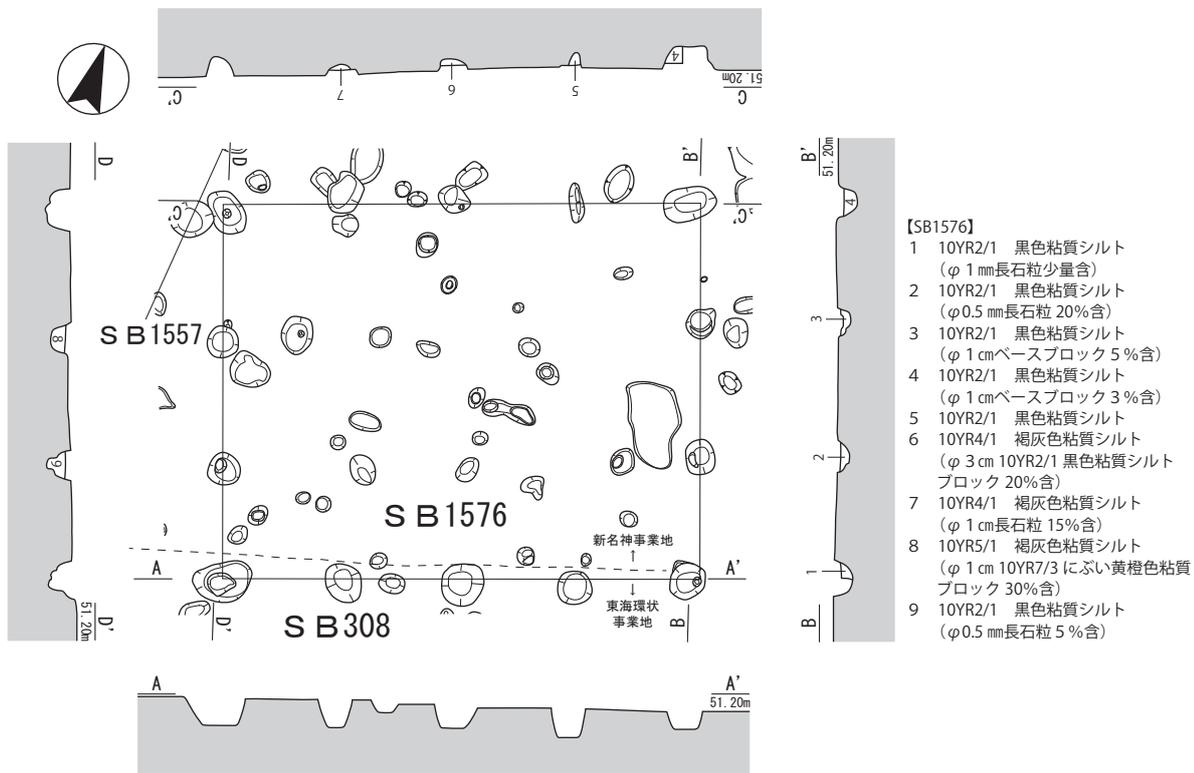
【SB1571】

- 1 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
- 2 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
(φ 1 cmベースブロック斑状含)
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
(φ 1 cmベースブロック 10%含)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
(φ 1 cm 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトブロック 10%含)
- 7 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
(φ 2 mmベースブロック 7%含)
- 9 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
(φ 3 cmベースブロック 40%含)
- 10 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
(φ 2 mmベースブロック斑状含)
- 11 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
(φ 1 mm長石粒少量含)
- 12 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
(φ 1 cmベースブロック 40%含)
- 13 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
(φ 1 cmベースブロック 15%含)
- 14 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
(φ 5 mmベースブロック 30%含)
- 15 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
(φ 5 cmベースブロック含)
- 16 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
(φ 3 cmベースブロック多含)
- 17 10YR6/4 にぶい黄灰色粘質シルト

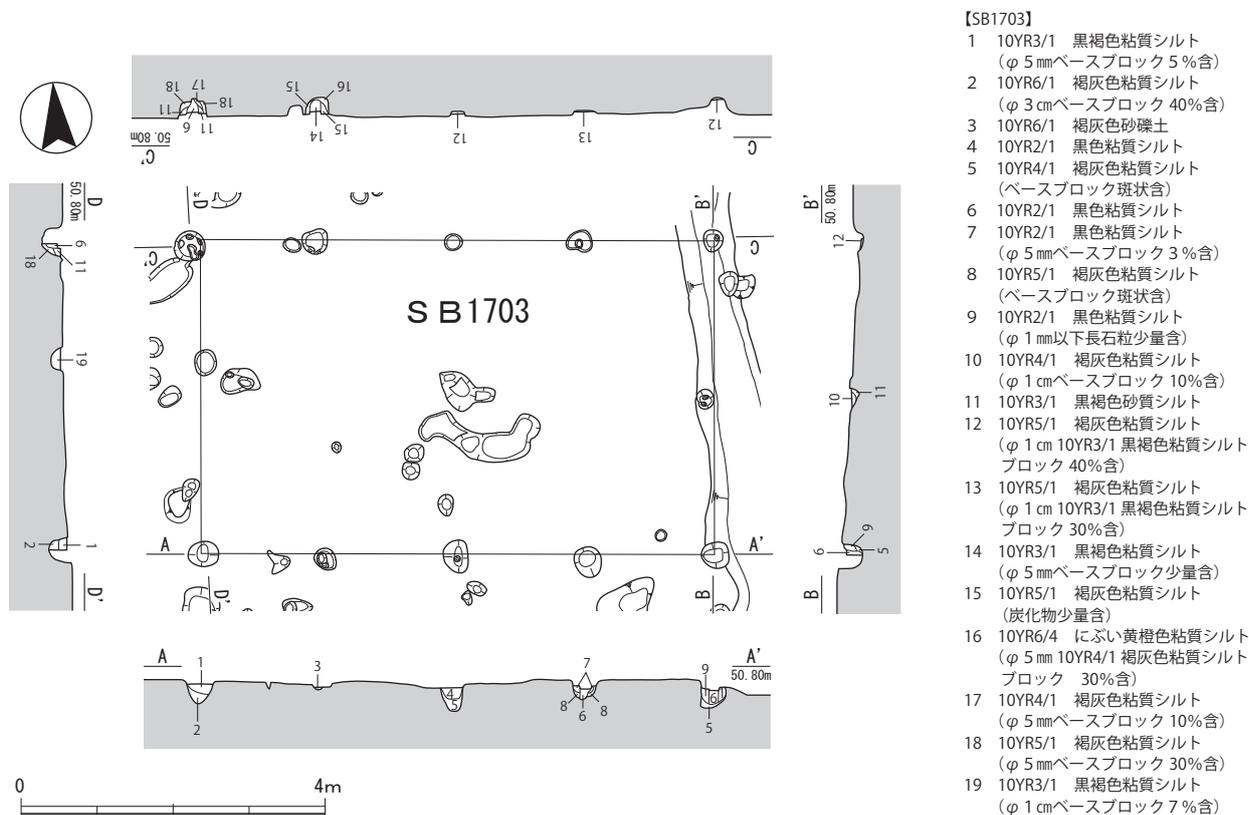
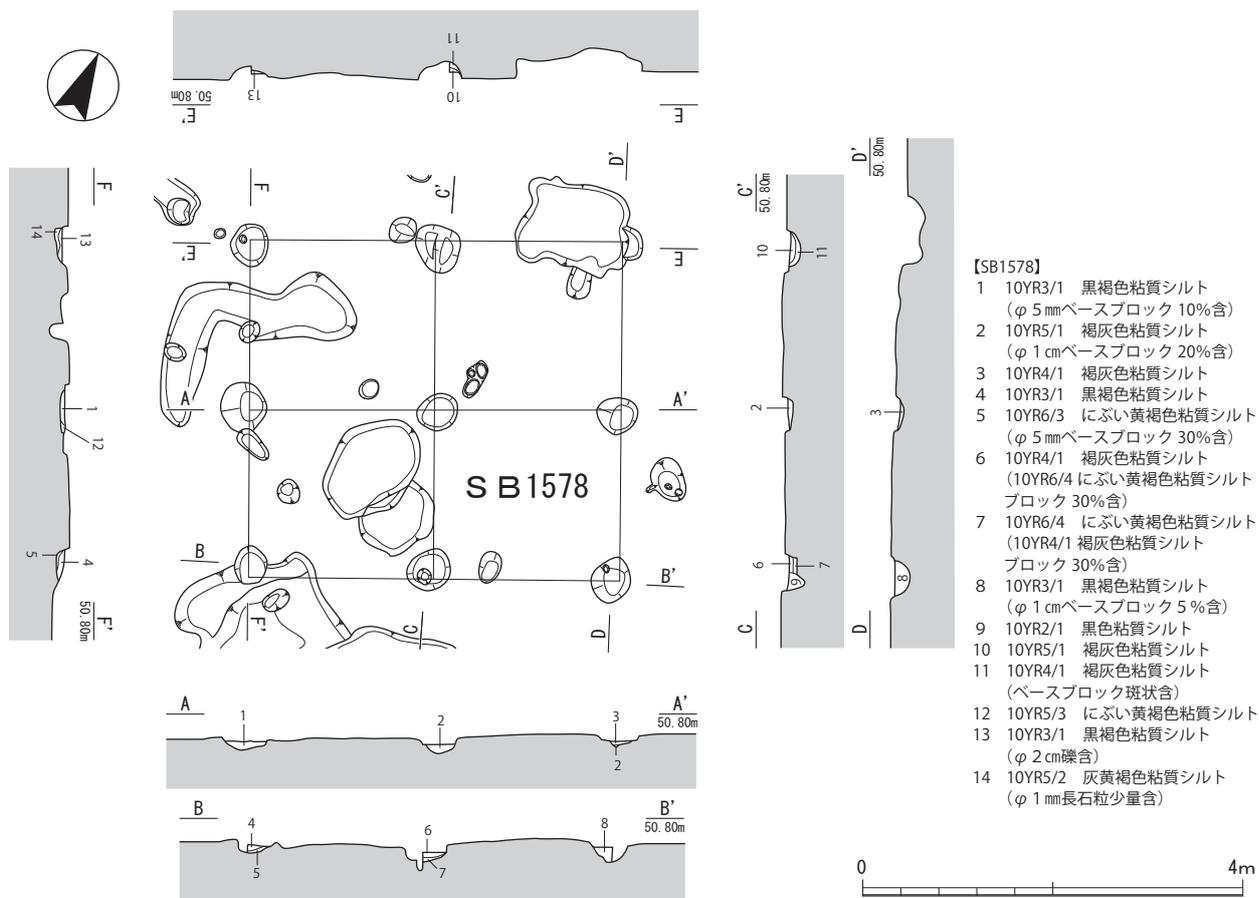
第 152 図 SB 1557・1571 実測図 (1 : 80)



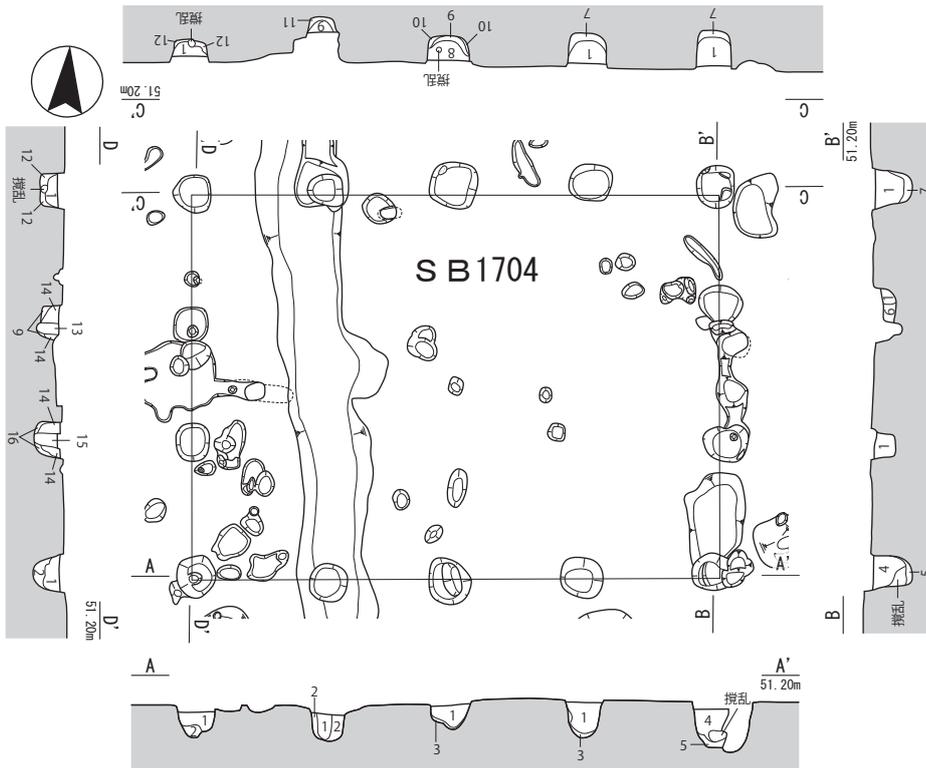
第 153 図 S B 1574・1575 実測図 (1 : 100)



第 154 図 SB 1576・1577 実測図 (1 : 100)

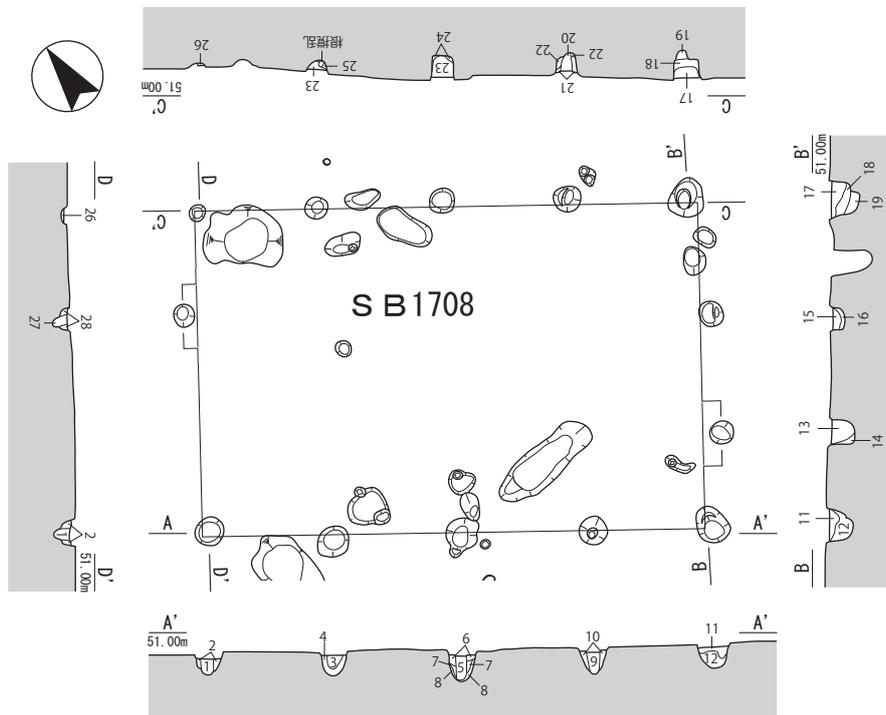


第 155 図 SB 1578・1703 実測図 (1 : 80・1 : 100)



[SB1704]

- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
- 2 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 30%含)
- 3 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 2 cm褐灰色粘質シルトブロック 10%含)
- 4 10YR2/1 黒色粘質シルト (φ 1 cm長石粒少量含)
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 2 cmベースブロック 20%含)
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 7 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 20%含)
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1 mm長石粒少量含)
- 9 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 30%含)
- 10 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 30%含)
- 11 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cm褐灰色粘質シルトブロック 10%含)
- 12 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (褐灰色粘質シルトブロック斑状含)
- 13 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 5 mmベースブロック少量含)
- 14 10YR2/1 黒色粘質シルト
- 15 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (ベースブロック少量含)
- 16 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 5 mm黒色粘質シルトブロック 30%含)



[SB1708]

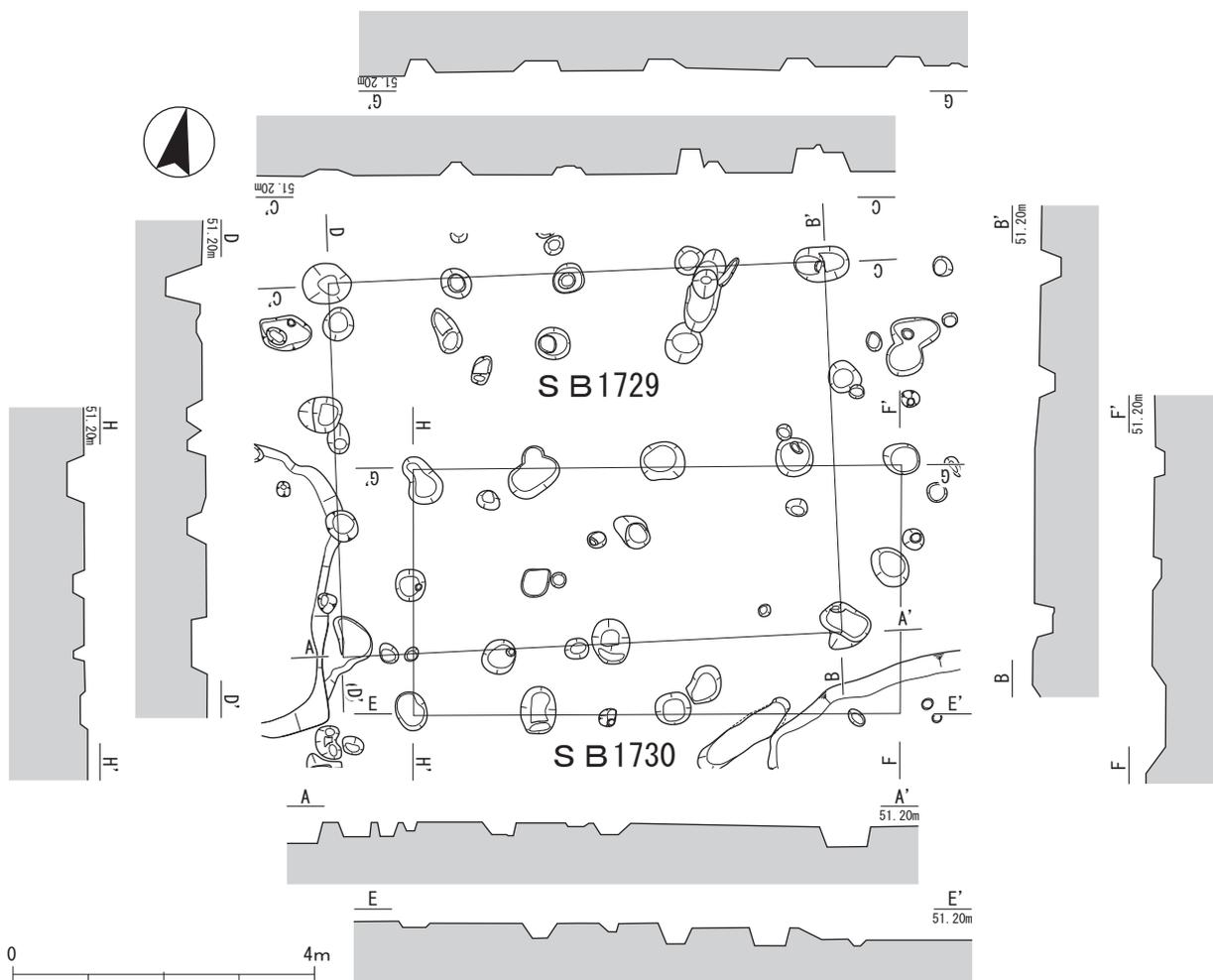
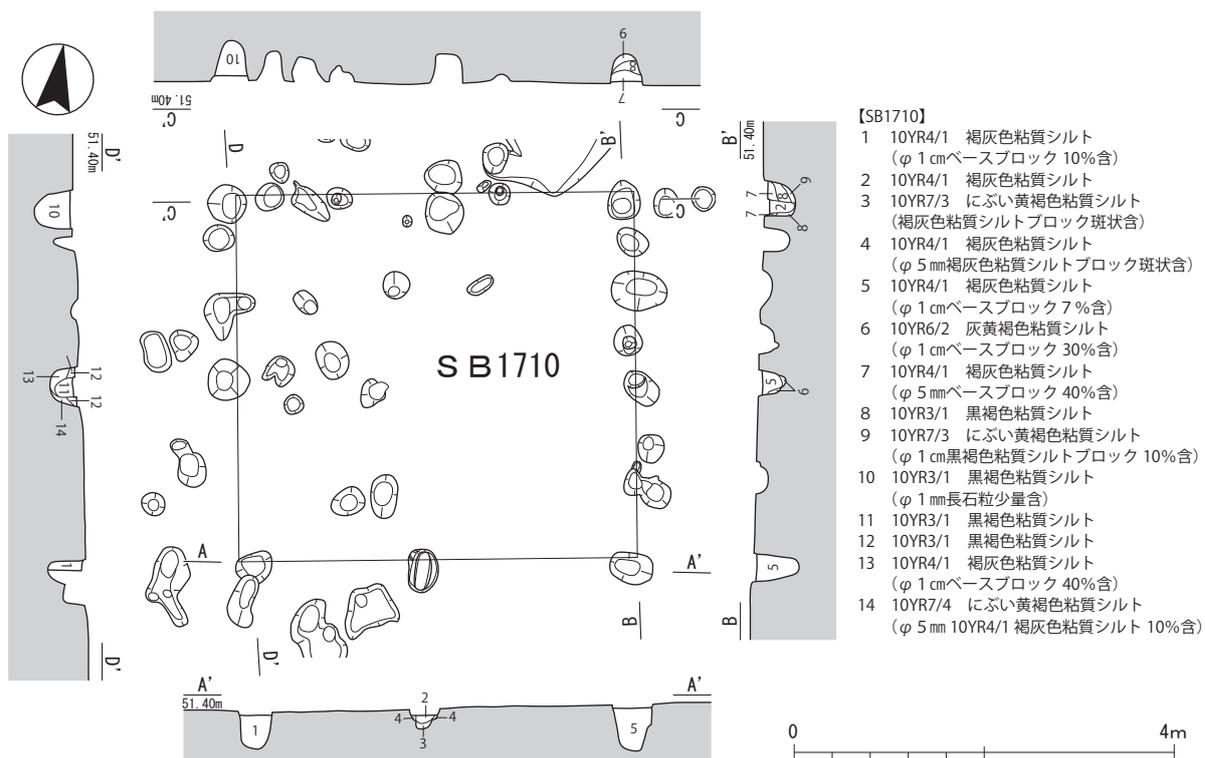
- 1 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cm 10YR4/1 褐灰色粘質シルトブロック 30%含)
- 2 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 2 cm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック 40%含)
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
- 4 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 20%含)
- 5 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2 cmベースブロック 5%含)
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 7 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 5 mmベースブロック 30%含)
- 8 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cm 10YR5/1 褐灰色粘質シルトブロック 30%含)
- 9 10YR6/1 褐灰色粘質シルト (焼土少量含)
- 10 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 10%含)
- 11 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 3 cmベースブロック 15%含)
- 12 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 2 cm 10YR6/1 褐灰色粘質シルトブロック 40%含)
- 13 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (焼土少量含)
- 14 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 5 mm 10YR5/1 褐灰色粘質シルトブロック 40%含)
- 15 10YR4/1 褐灰色粘質シルト

- 16 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cm褐灰色粘質シルトブロック 30%含)
- 17 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 2 cmベースブロック 10%含)
- 18 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (褐灰色粘質シルトブロック斑状含)
- 19 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 20%含)
- 20 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2 cmベースブロック 10%含)
- 21 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 22 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 1 cm黒褐色粘質シルトブロック 10%含)

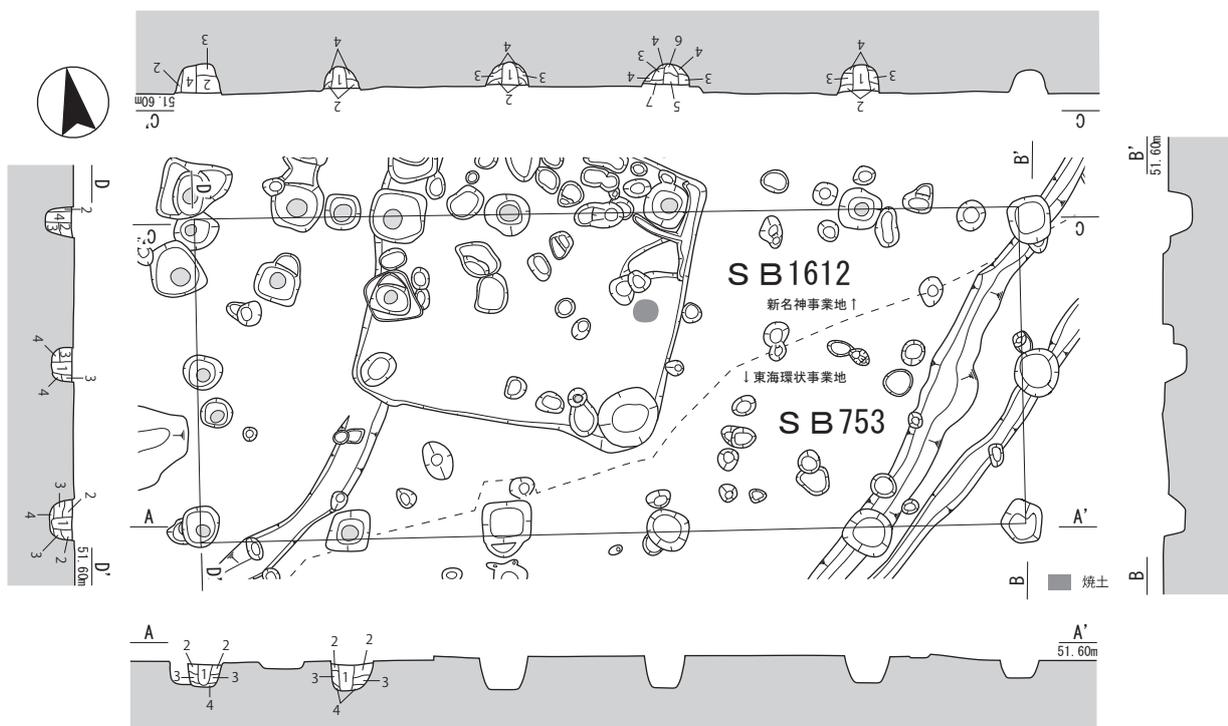
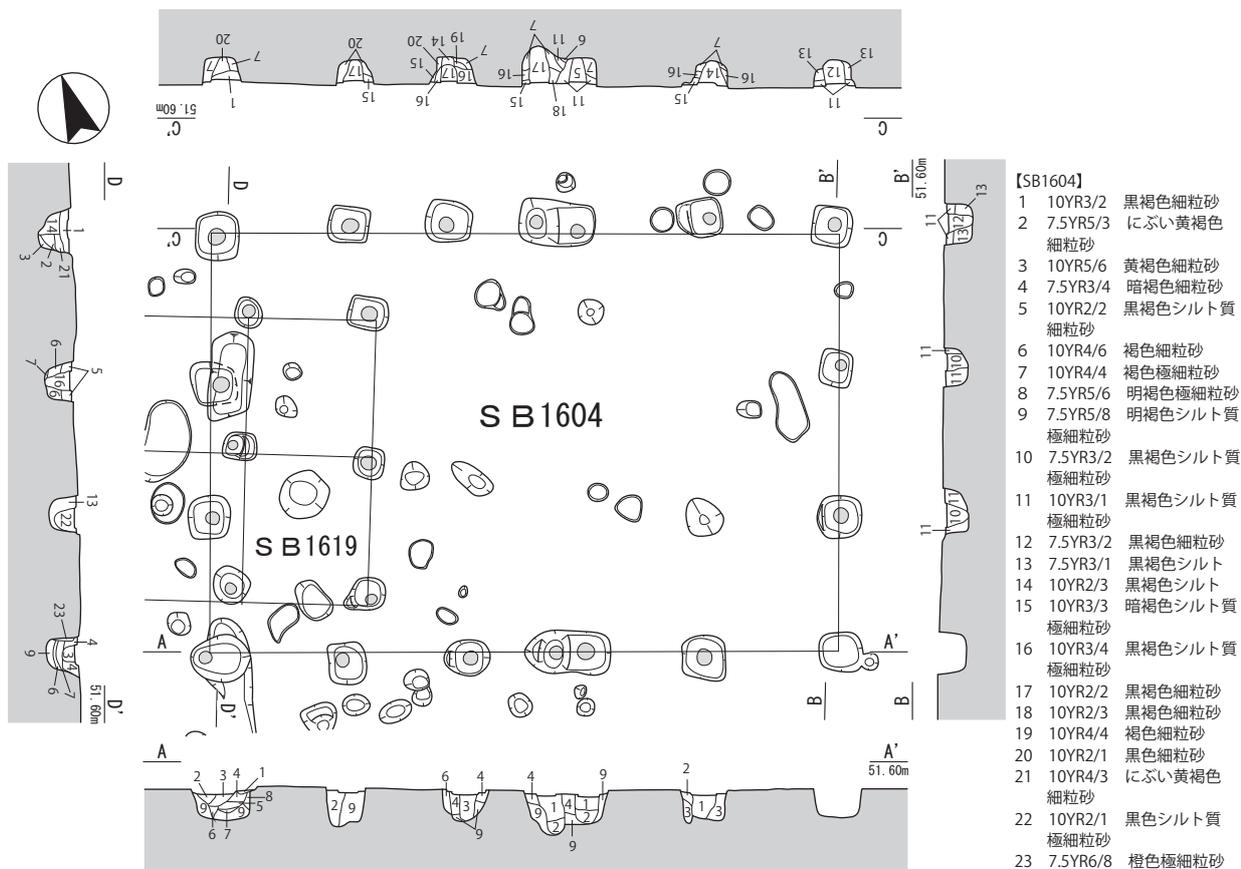
- 23 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック少量含)
- 24 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 5 mm 10YR4/1 褐灰色粘質シルトブロック 30%含)
- 25 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 5 mm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック 20%含)
- 26 10YR2/1 黒色粘質シルト
- 27 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 10%含)
- 28 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1 cmベースブロック 30%含)

0 4m

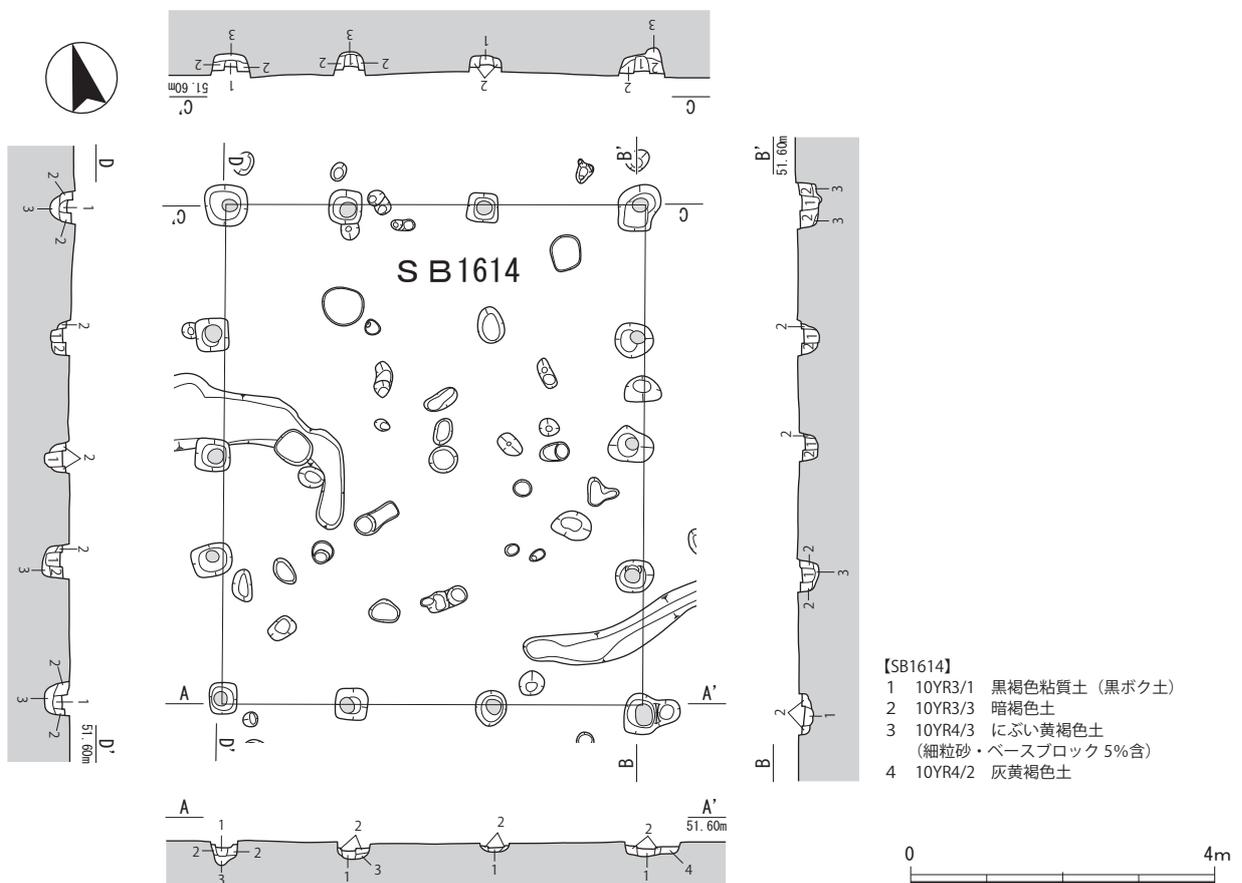
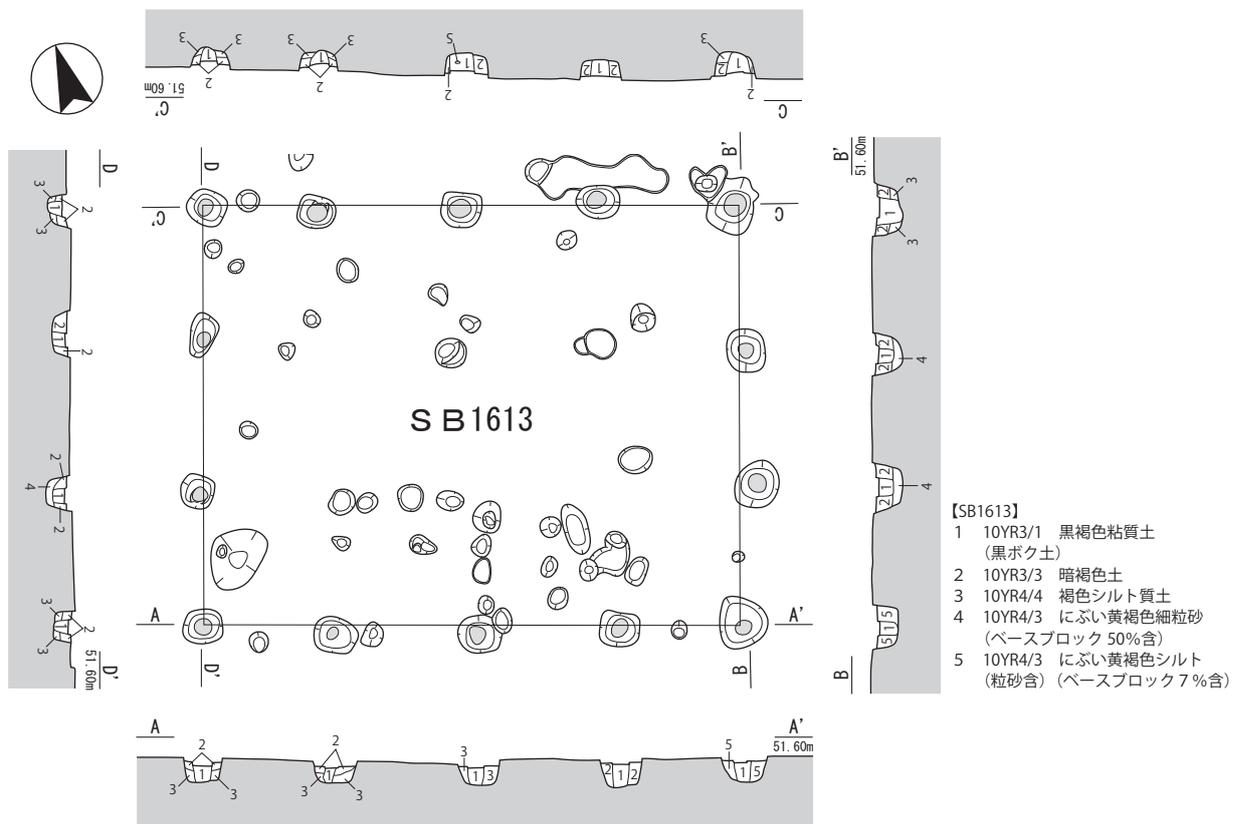
第 156 図 SB 1704・1708 実測図 (1 : 100)



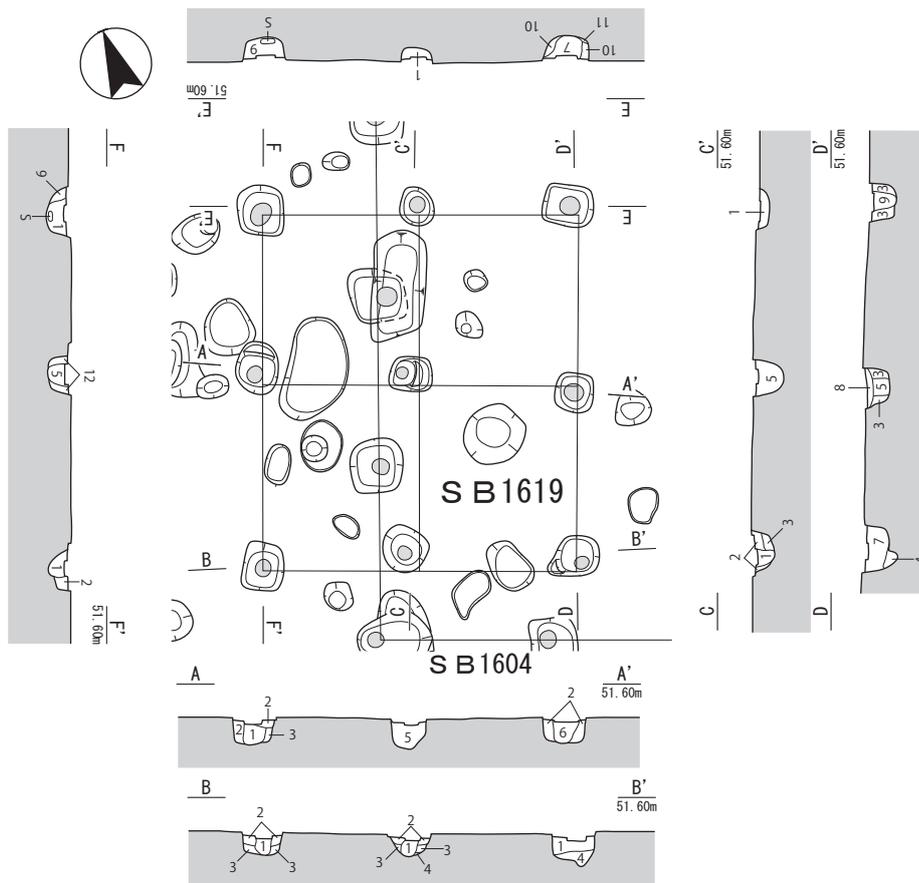
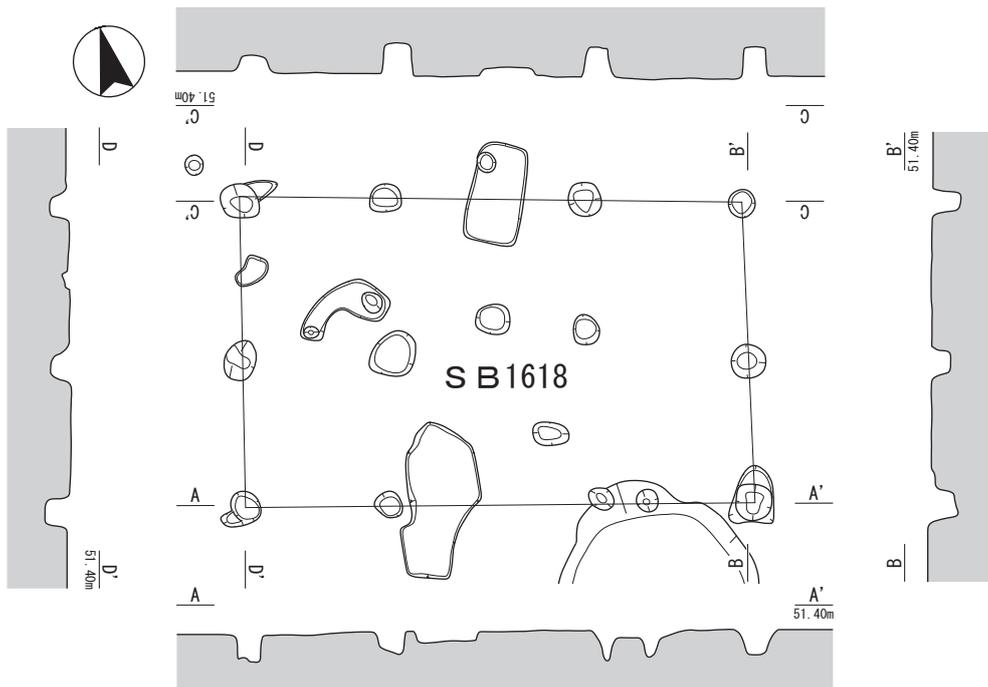
第157図 SB1710・1729・1730実測図 (1:80・1:100)



第 158 図 S B 1604・1612 実測図 (1 : 100)



第 159 図 S B 1613・1614 実測図 (1 : 100)



【SB1619】

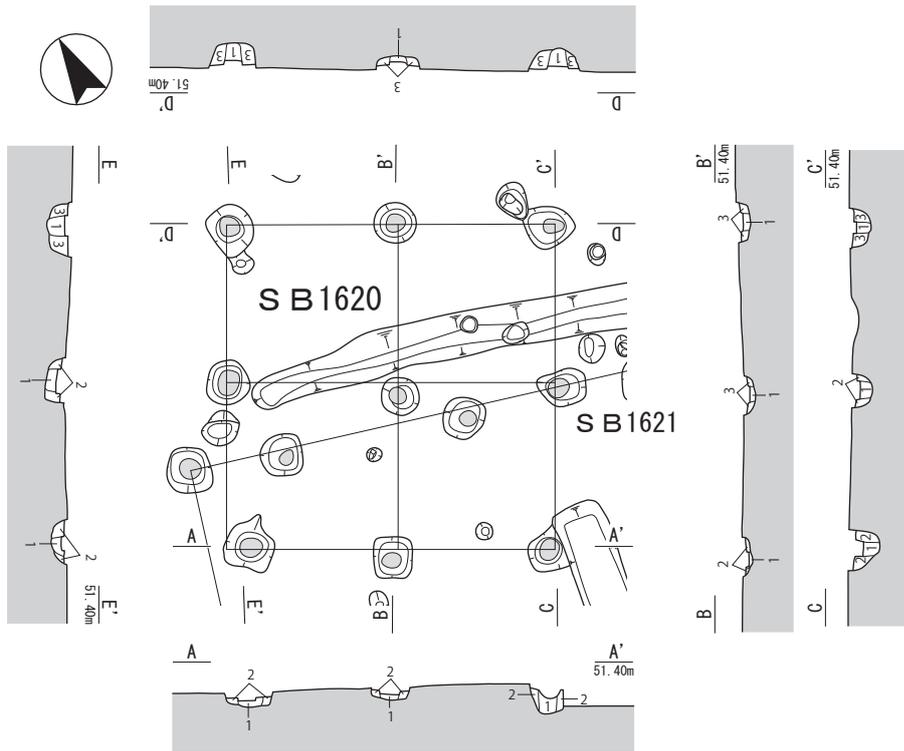
- 1 10YR4/2 灰色黄褐シルト質極細粒砂
- 2 10YR4/4 褐色極細粒砂
- 3 10YR5/6 黄褐色極細粒砂
- 4 10YR6/6 明褐色シルト質極細粒砂

- 5 7.5YR3/1 黒褐色細粒砂
- 6 7.5YR3/1 黒褐色シルト質極細粒砂
- 7 10YR3/1 黒褐シルト質極細粒砂
- 8 10YR2/2 黒褐色細粒砂

- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂
- 10 7.5YR5/6 明褐色極細粒砂含
- 11 7.5YR5/4 にぶい褐色細粒砂
- 12 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂

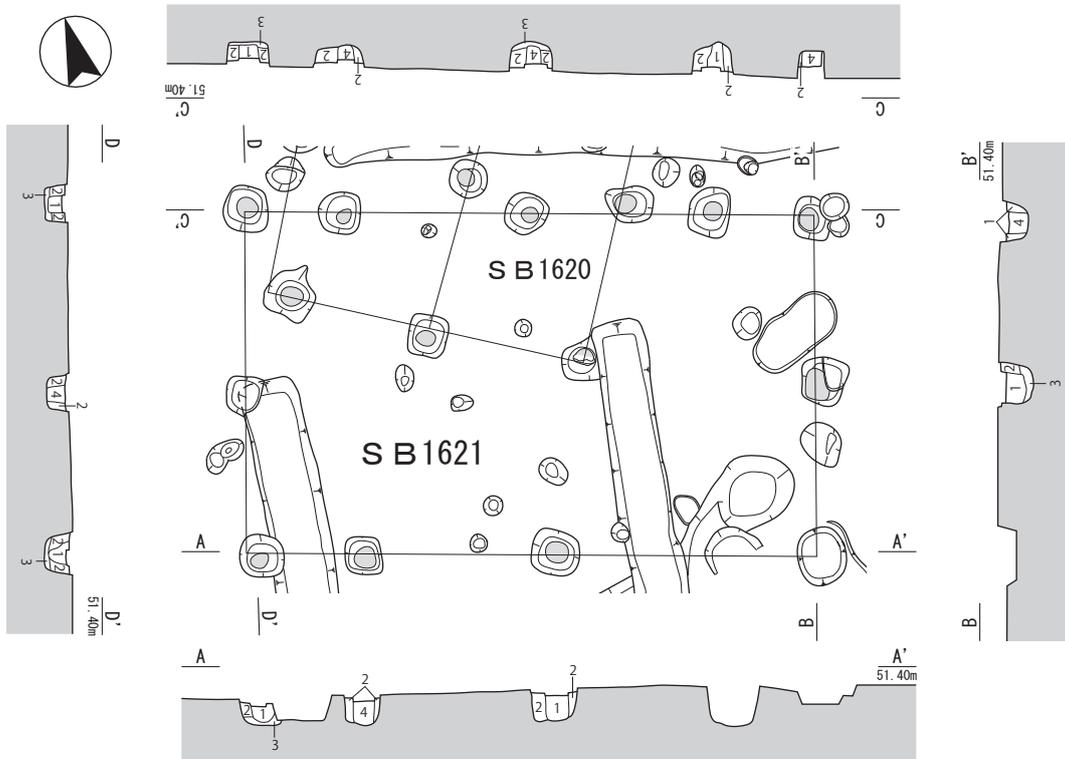


第160図 SB1618・1619実測図(1:80)



【SB1620】

- 1 10YR2/3 黒褐色粘質土（黒ボク土）
- 2 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
- 3 10YR4/6 褐色粗粒砂（ベースブロック5%含）

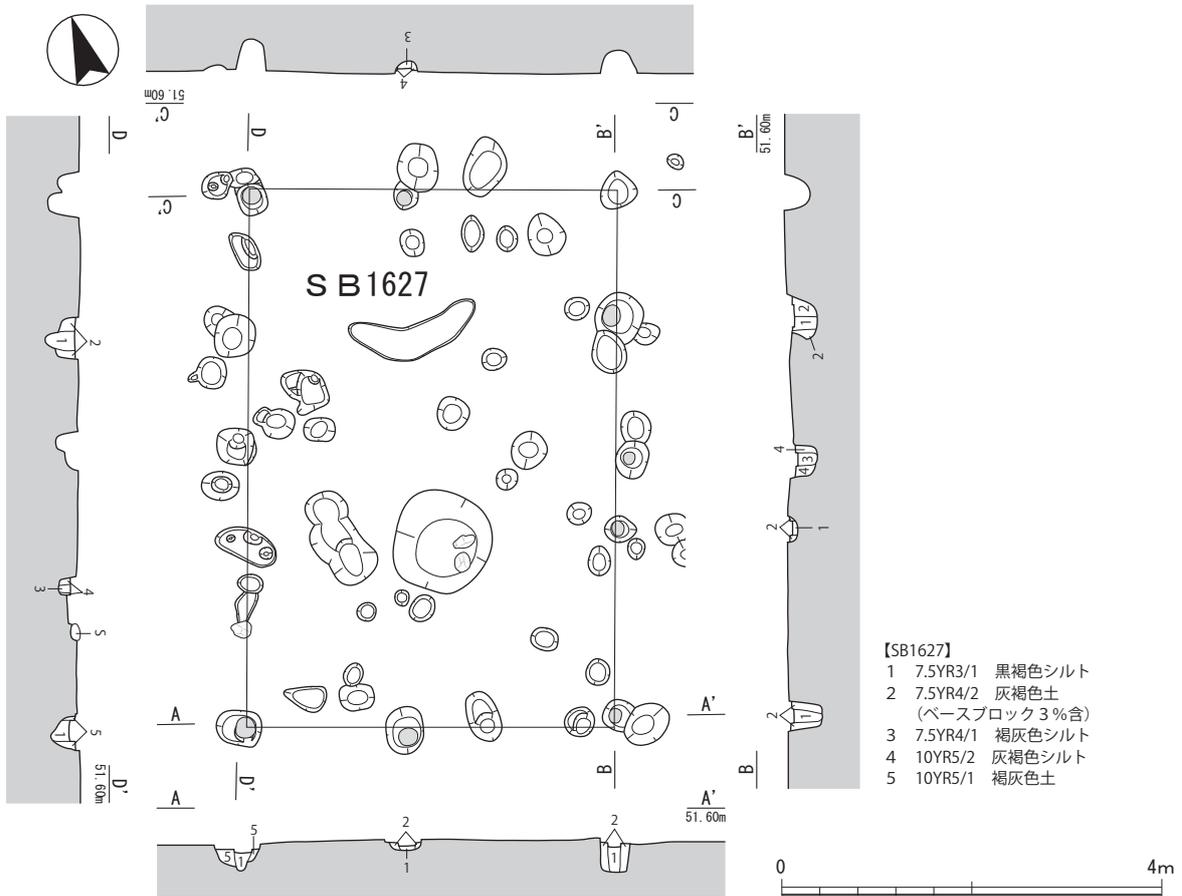
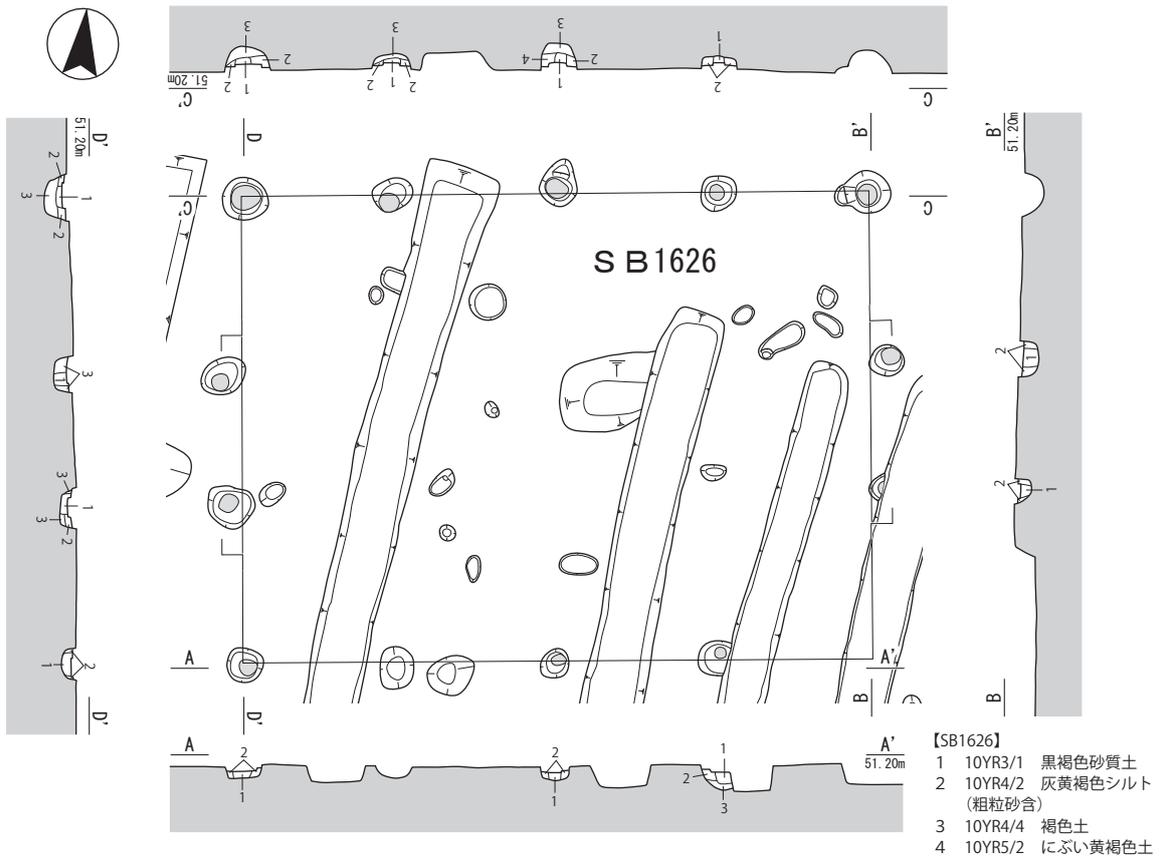


【SB1621】

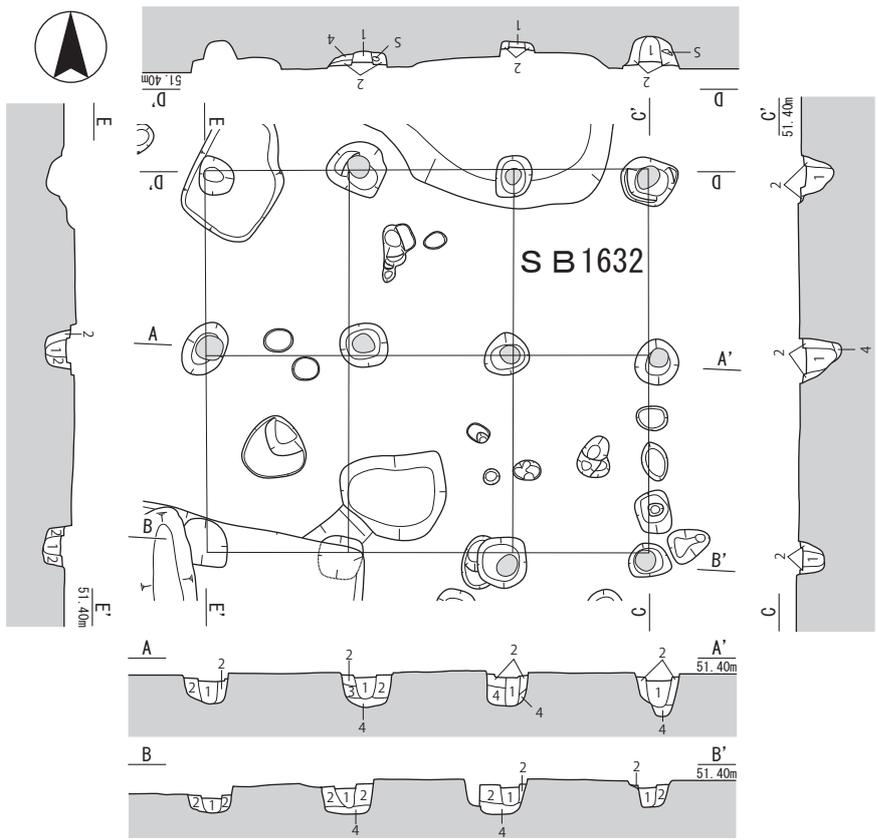
- 1 10YR2/3 黒褐色粘質土（黒ボク土）
- 2 10YR4/4 褐色細粒砂
- 3 10YR4/6 褐色粗粒砂
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細粒砂



第 161 図 S B 1620・1621 実測図（1 : 80）



第 162 図 S B 1626・1627 実測図 (1 : 80)

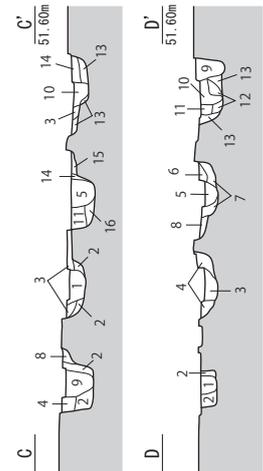
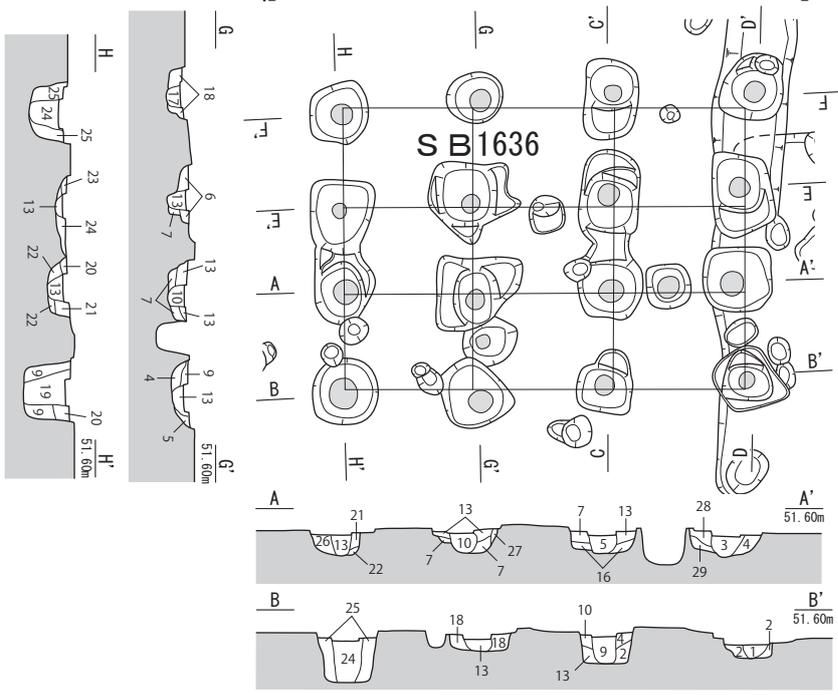
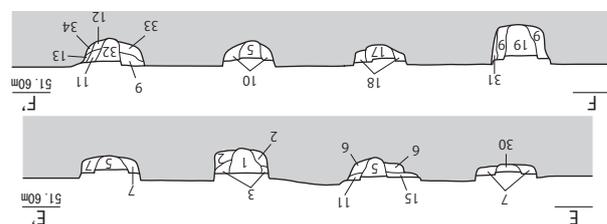


[SB1632]

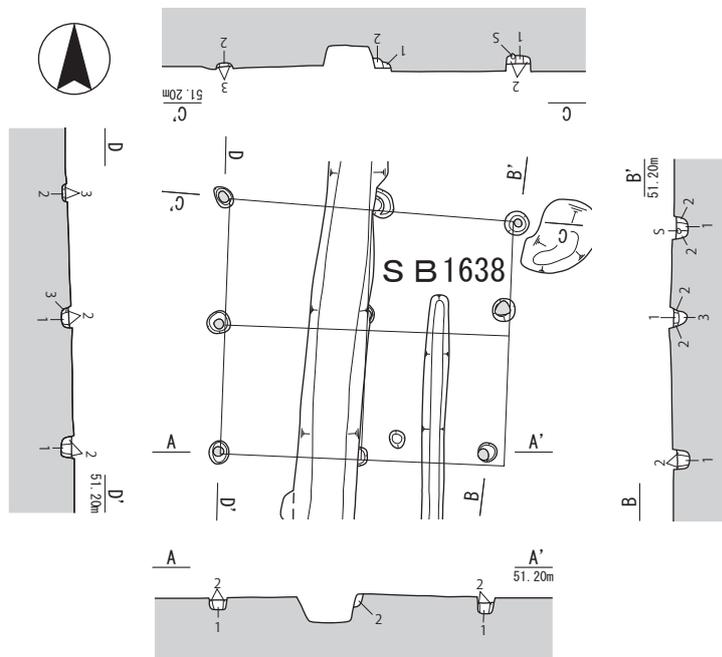
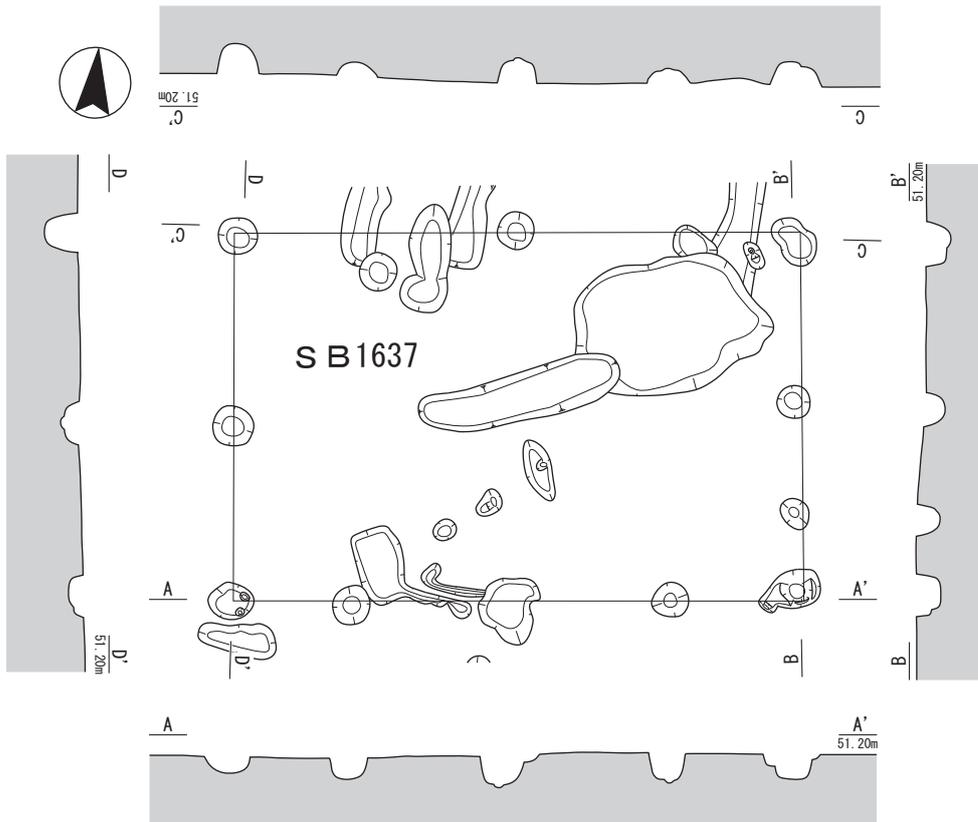
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (黒ボク土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂含シルト
- 3 10YR3/3 黒褐色シルト
- 4 10YR4/6 褐色シルト (細粒砂含)

[SB1636]

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂
- 2 10YR4/6 褐色シルト質極細粒砂
- 3 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂
- 5 10YR4/4 褐色シルト
- 6 7.5YR4/3 褐色細粒砂
- 7 10YR3/3 暗褐色細粒砂
- 8 10YR5/8 黄褐色細粒砂
- 9 10YR3/1 黒褐色細粒砂
- 10 10YR2/2 黒褐色シルト質極細粒砂
- 11 7.5YR3/1 黒褐色シルト質極細粒砂
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 13 10YR2/3 黒褐色シルト質極細粒砂
- 14 7.5YR3/3 暗褐色極細粒砂
- 15 7.5YR3/4 暗褐色極細粒砂
- 16 7.5YR3/2 黒褐色シルト
- 17 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂
- 18 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂
- 19 10YR2/2 黒褐色シルト質細粒砂
- 20 10YR4/2 灰黄褐色シルト質細粒砂
- 21 10YR2/3 黒褐色極細粒砂
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- 23 10YR3/3 暗褐色細粒砂
- 24 10YR3/1 黒褐色シルト
- 25 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- 26 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 27 10YR4/1 褐灰色極細粒砂
- 28 10YR4/2 黄褐色細粒砂
- 29 10YR4/2 黄褐色シルト
- 30 10YR2/3 黒褐色細粒砂
- 31 10YR5/8 黄褐色シルト
- 32 10YR2/2 黒褐色シルト
- 33 10YR2/3 黒褐色細粒砂
- 34 10YR5/6 黄褐色細粒砂



第 163 図 S B 1632・1636 実測図 (1 : 80)

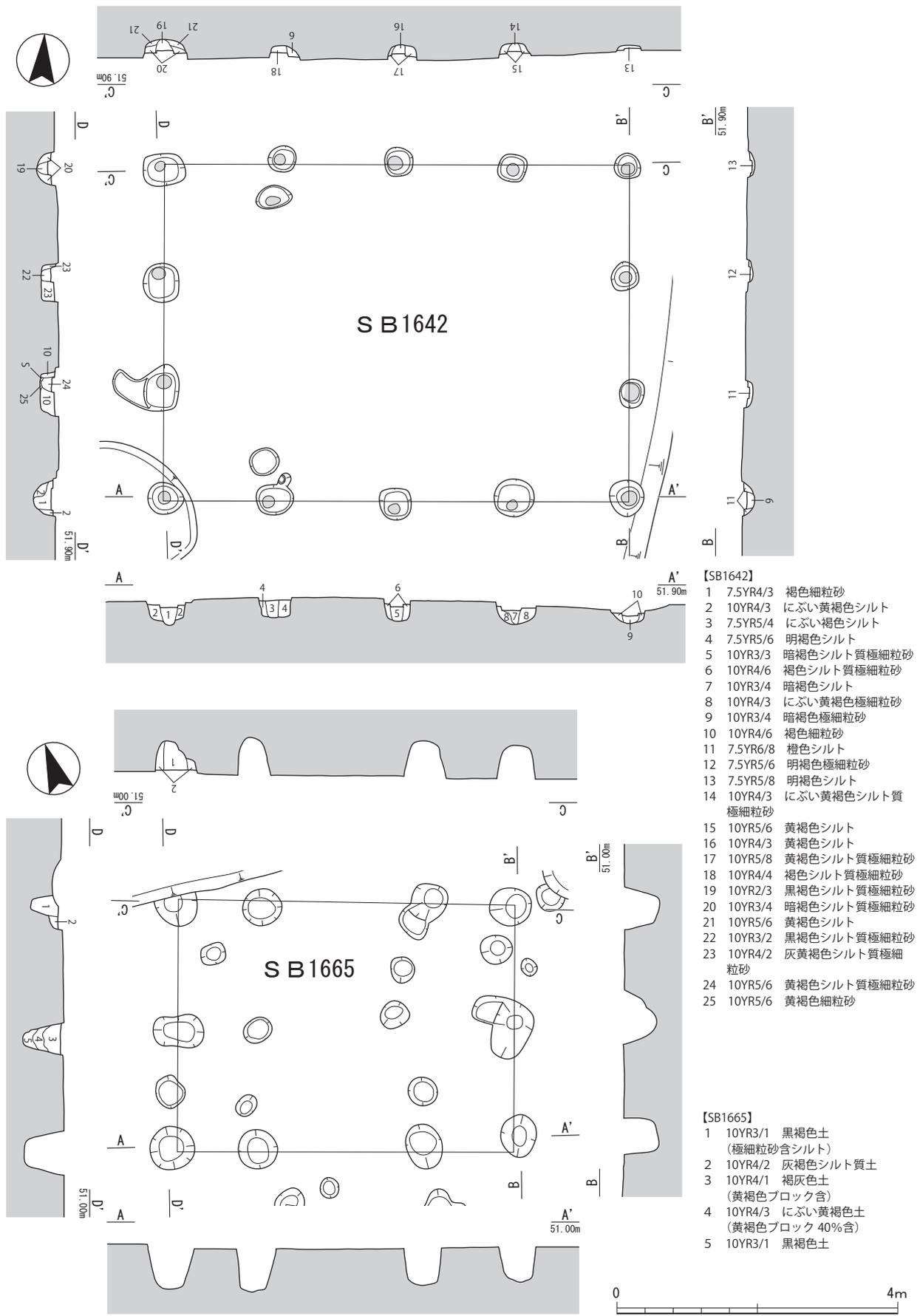


【SB1638】

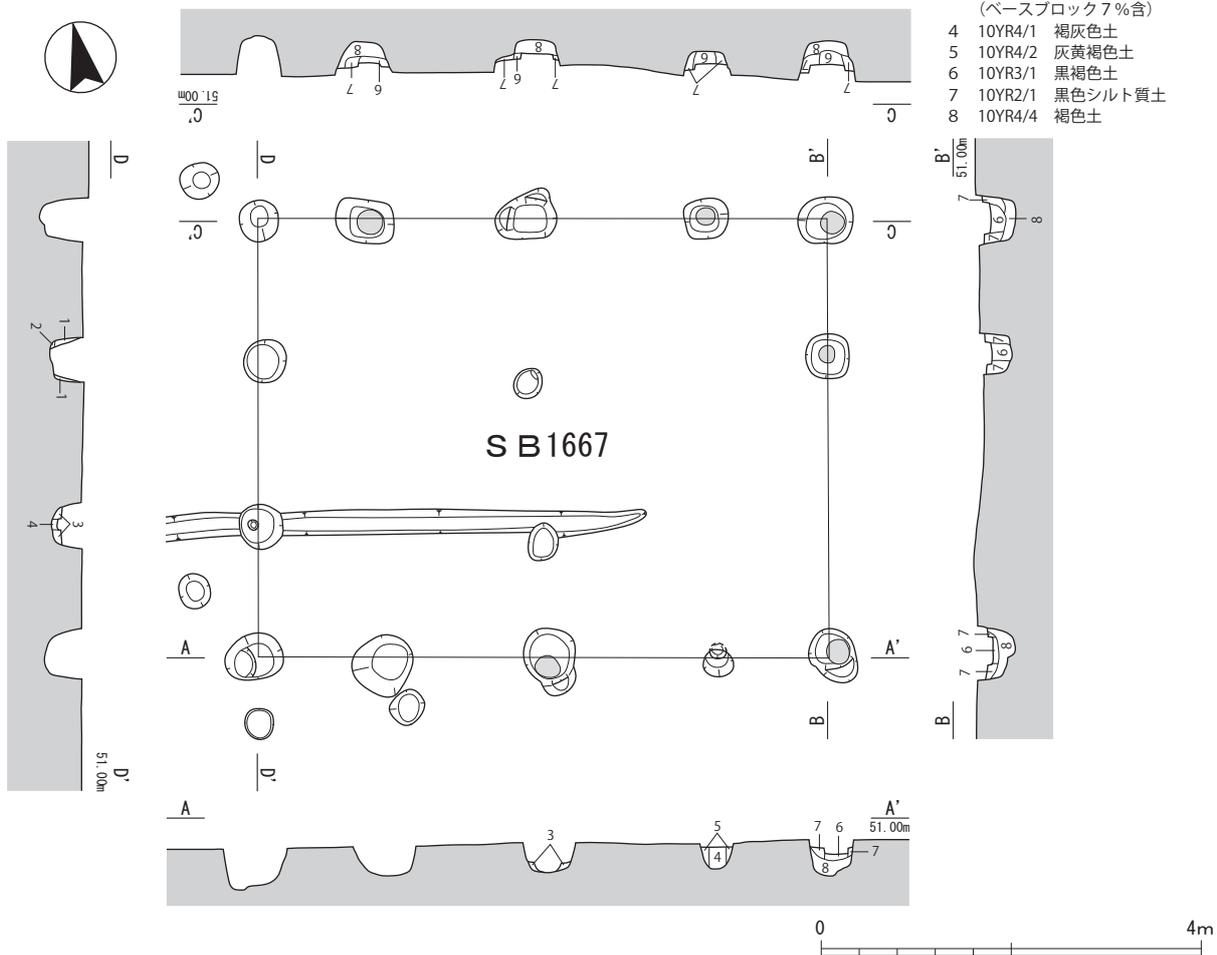
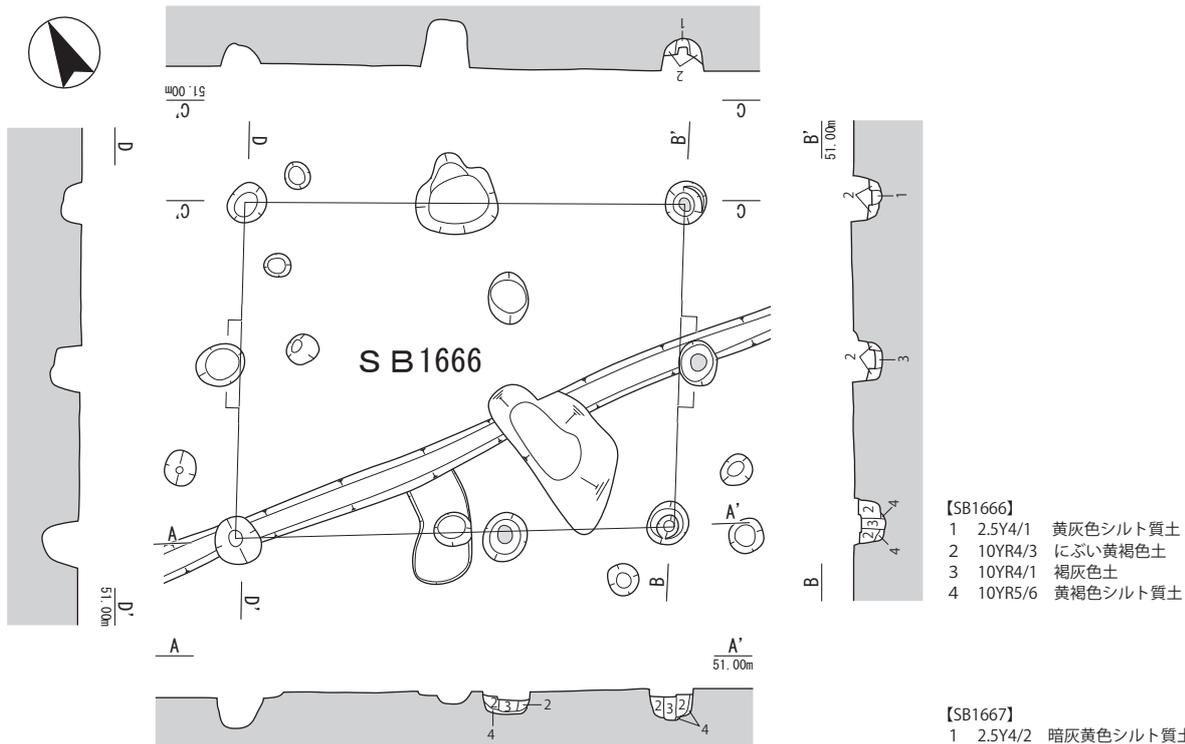
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト（ベース褐色土含）
- 3 10YR4/4 褐色シルト質土



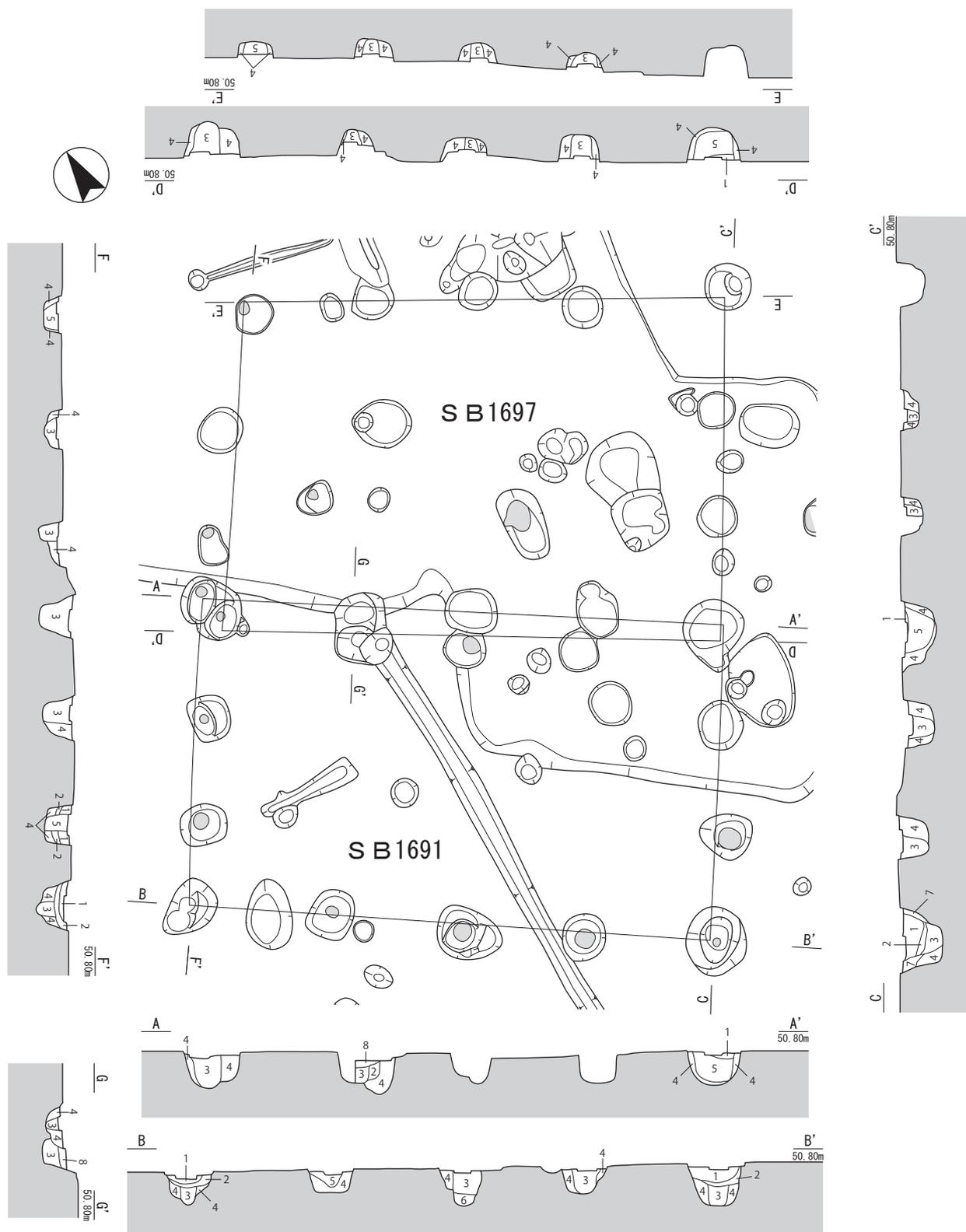
第 164 図 S B 1637・1638 実測図（1：80）



第 165 図 S B 1642・1665 実測図 (1 : 80)



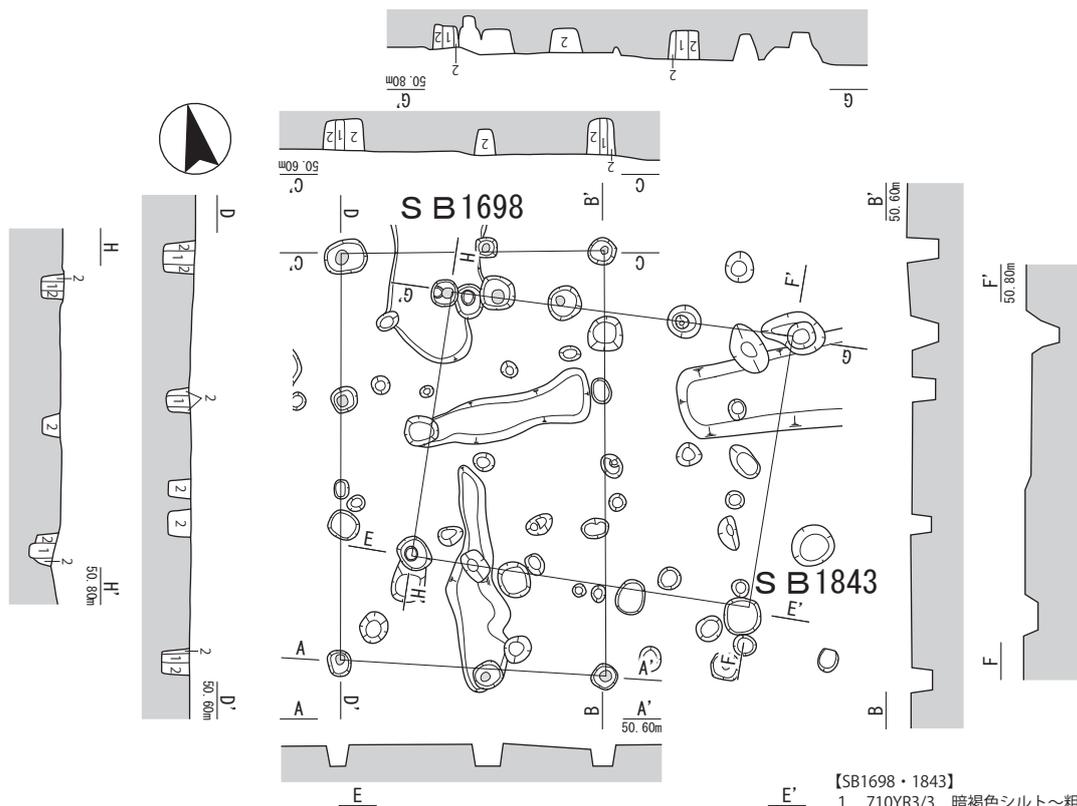
第 166 図 S B 1666 ・ 1667 実測図 (1 : 80)



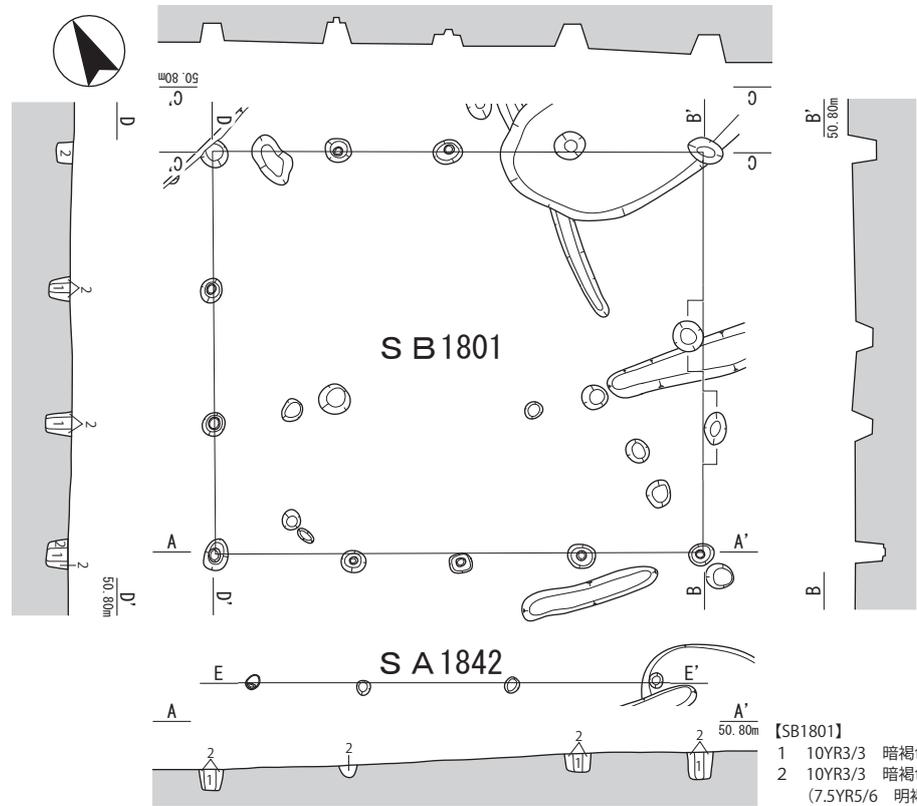
【SB1691・1697】

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 10YR5/1 褐灰色シルト (黄褐色細粒砂3%含) | 5 2.5Y4/2 暗灰黄シルト (黄褐色細粒砂3%含) |
| 2 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂含シルト | 6 2.5Y5/2 暗灰黄粗砂含シルト |
| 3 10YR4/1 褐灰色土 | 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色土 | 8 10YR3/2 黒褐色シルト |

第167図 SB1691・1697実測図 (1:80)



- 【SB1698・1843】
- 1 710YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (褐色ブロック少量含)

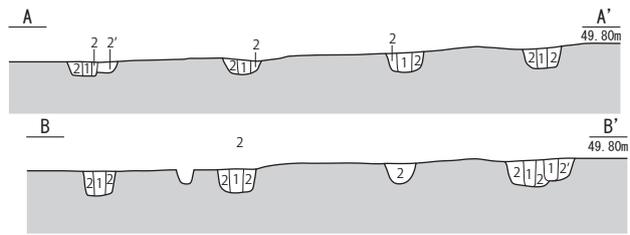
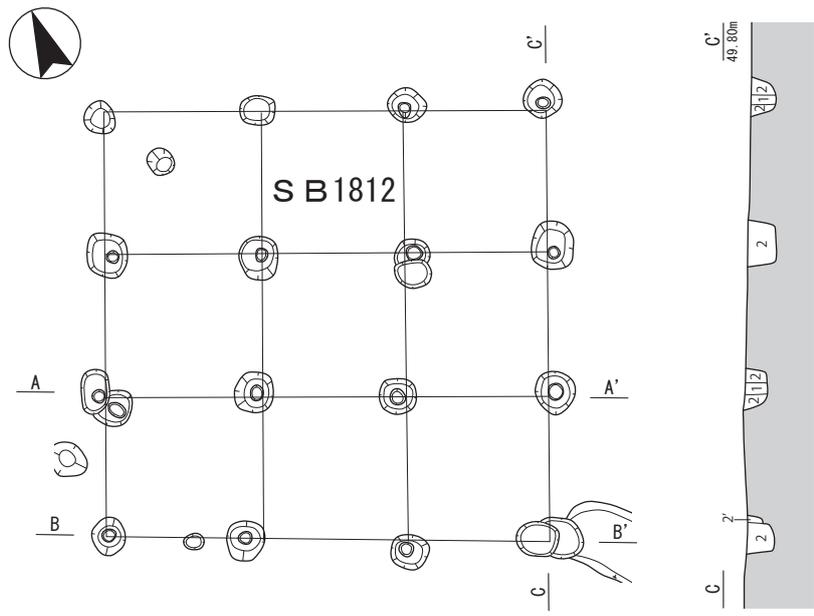


- 【SB1801】
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR5/6 明褐色土少量含)

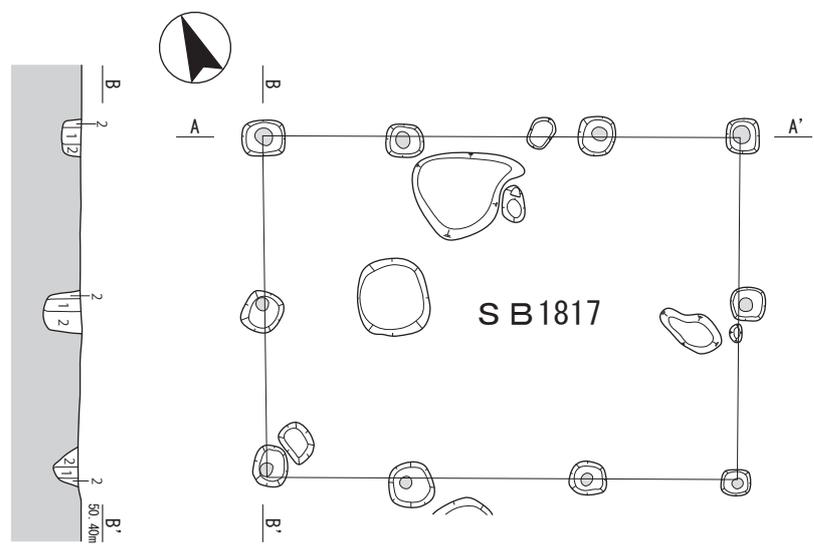
- 【SA1842 E-E'】
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (明褐色ブロック少量含)



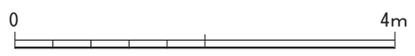
第168図 S B 1698・1843・1801・S A 1842 実測図 (1 : 100)



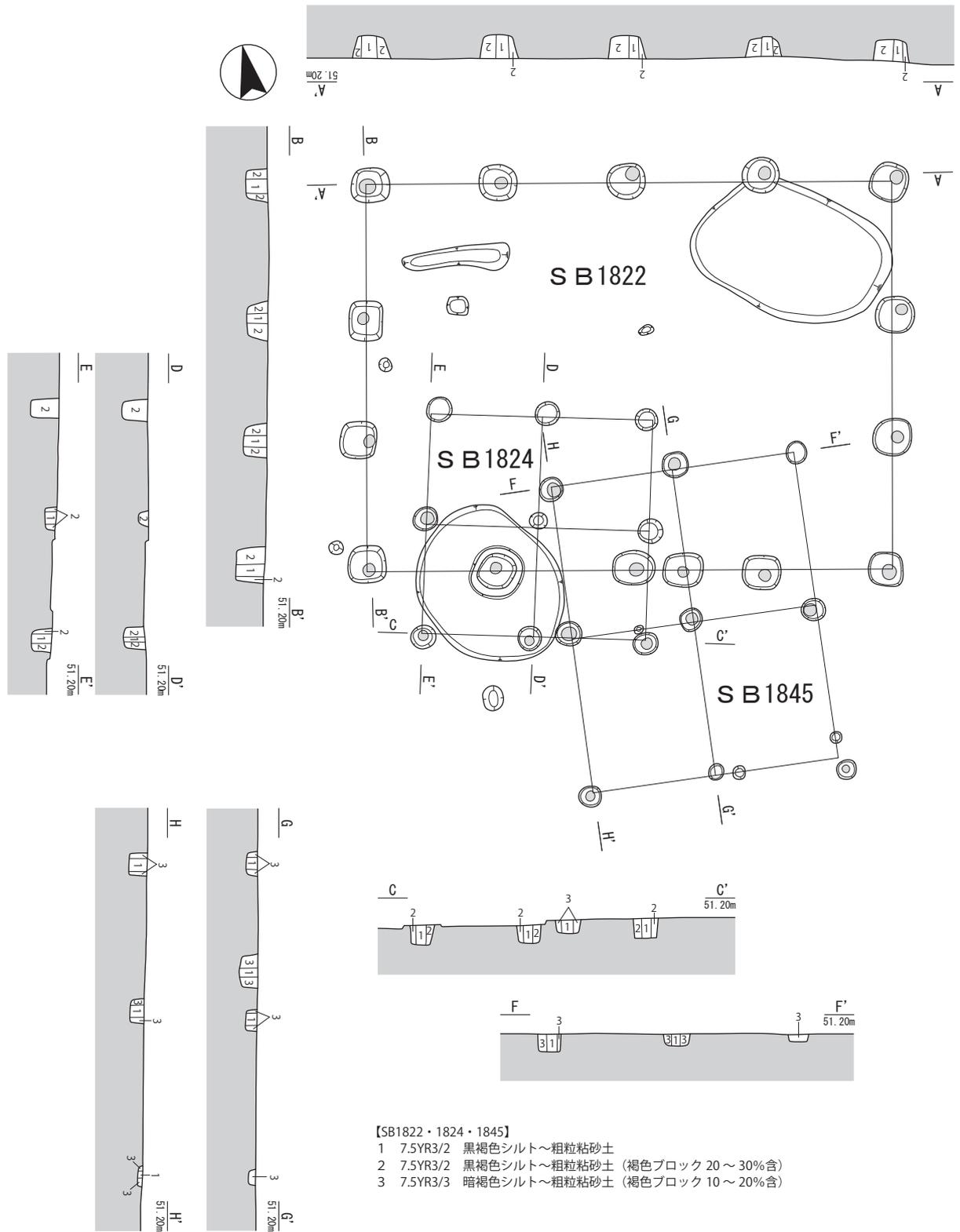
- 【SB1812】
- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
(褐色ブロック少量含)
 - 2' 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土



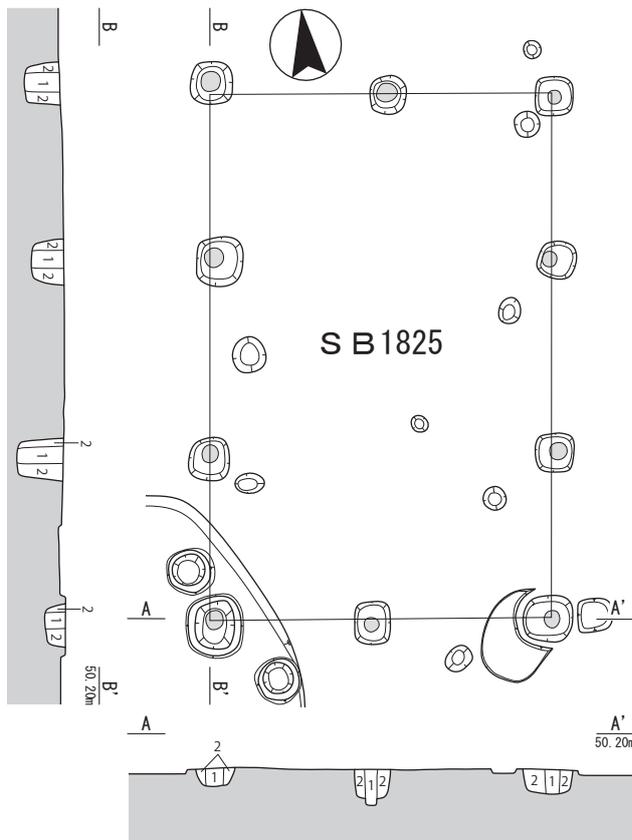
- 【SB1817】
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
 - 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
(7.5YR4/4 褐色ブロック斑状 10～20%含)



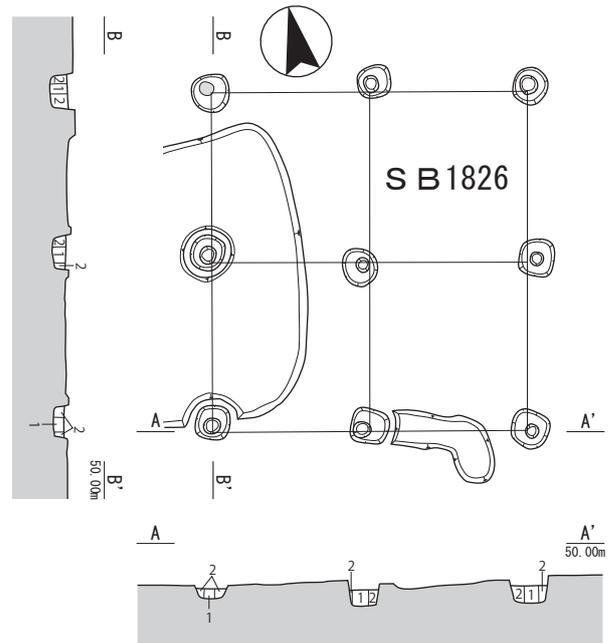
第 169 図 SB 1812・1817 実測図 (1 : 80)



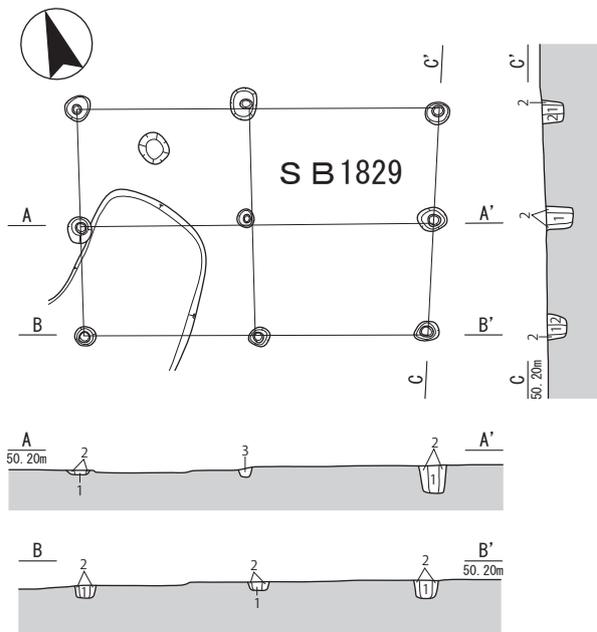
第 170 図 S B 1822・1824・1845 実測図（1 : 80）



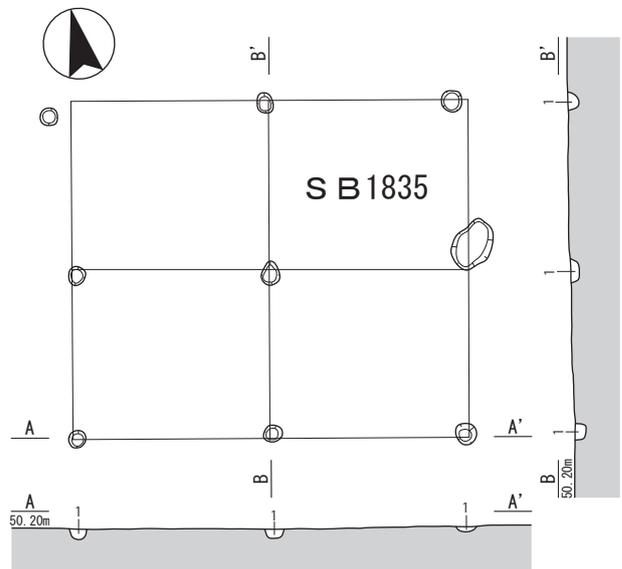
- 【SB1825】
 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土（褐色ブロック 10～20%含）



- 【SB1826】
 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土（褐色ブロック少量含）



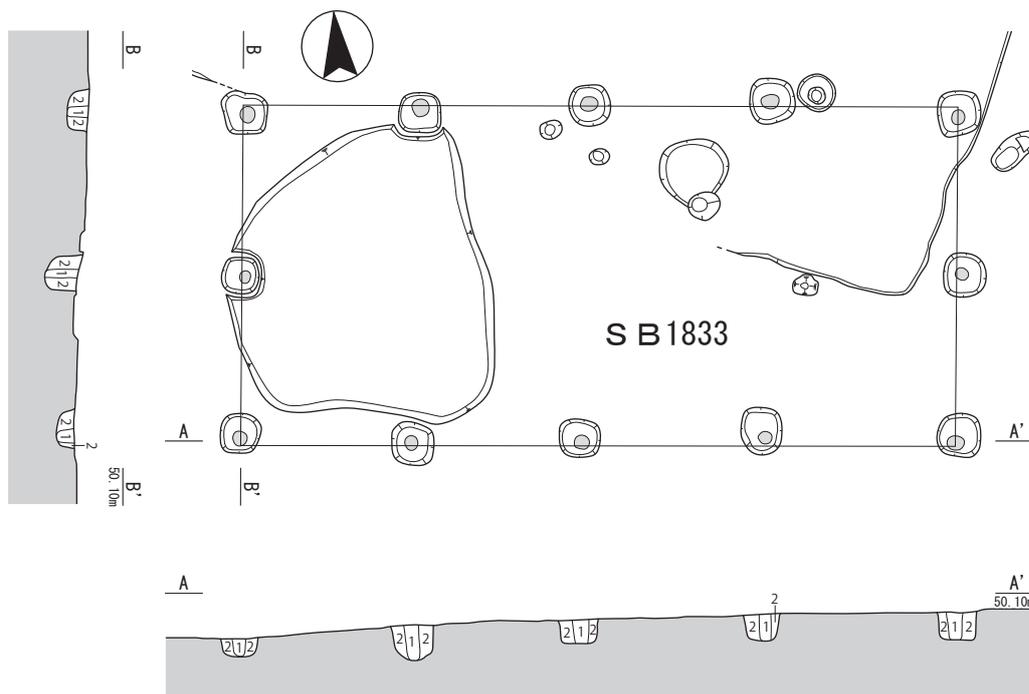
- 【SB1829】
 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土
 2 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土（褐色ブロック斑状少量含）
 3 7.5YR3/4 暗褐色シルト～粗粒粘砂土



- 【SB1835】
 1 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土（黄褐色ブロック少量含）

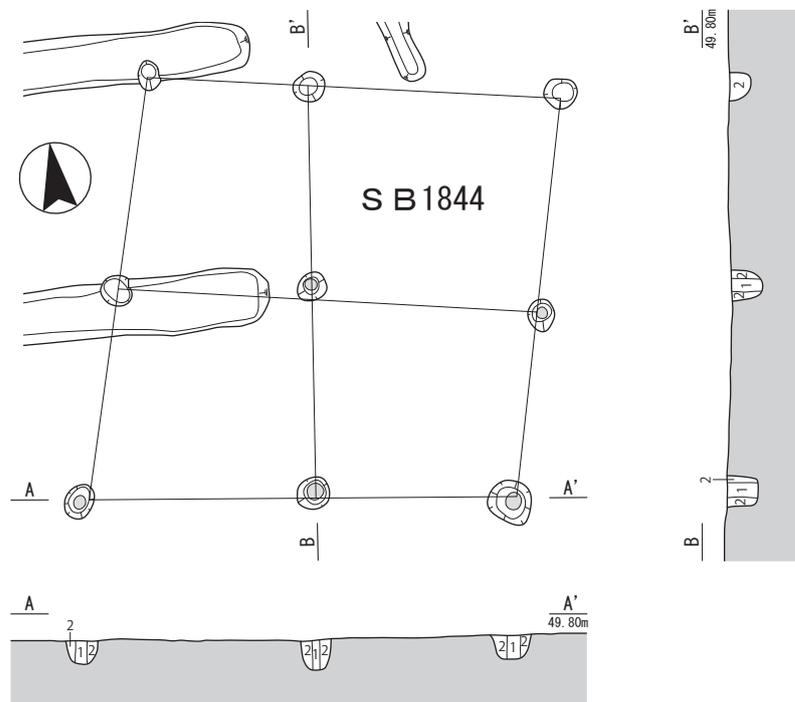


第 171 図 S B 1825・1826・1829・1835 実測図（1：80）



【SB1833】

- 1 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～粗粒粘砂土（褐色ベースブロック 10～20%含）
- 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト～粗粒粘砂土

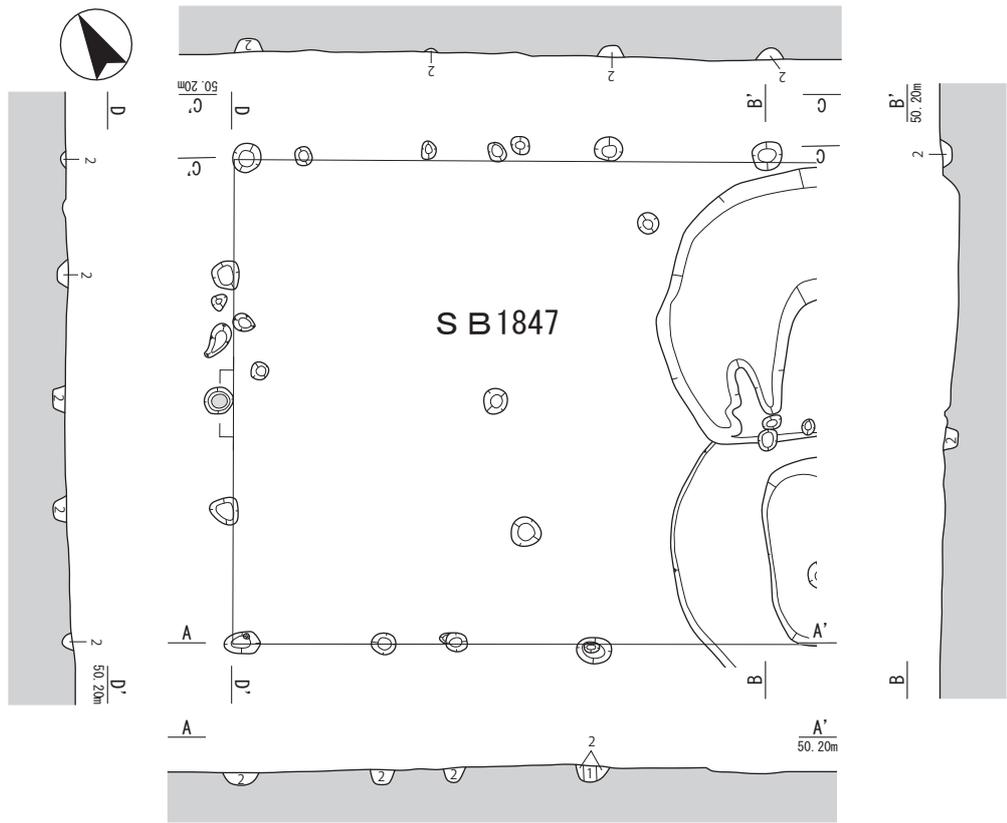


【SB1844】

- 1 7.5YR3/3 暗褐色土
- 2 7.5YR3/3 暗褐色土（ベースブロック 20%含）

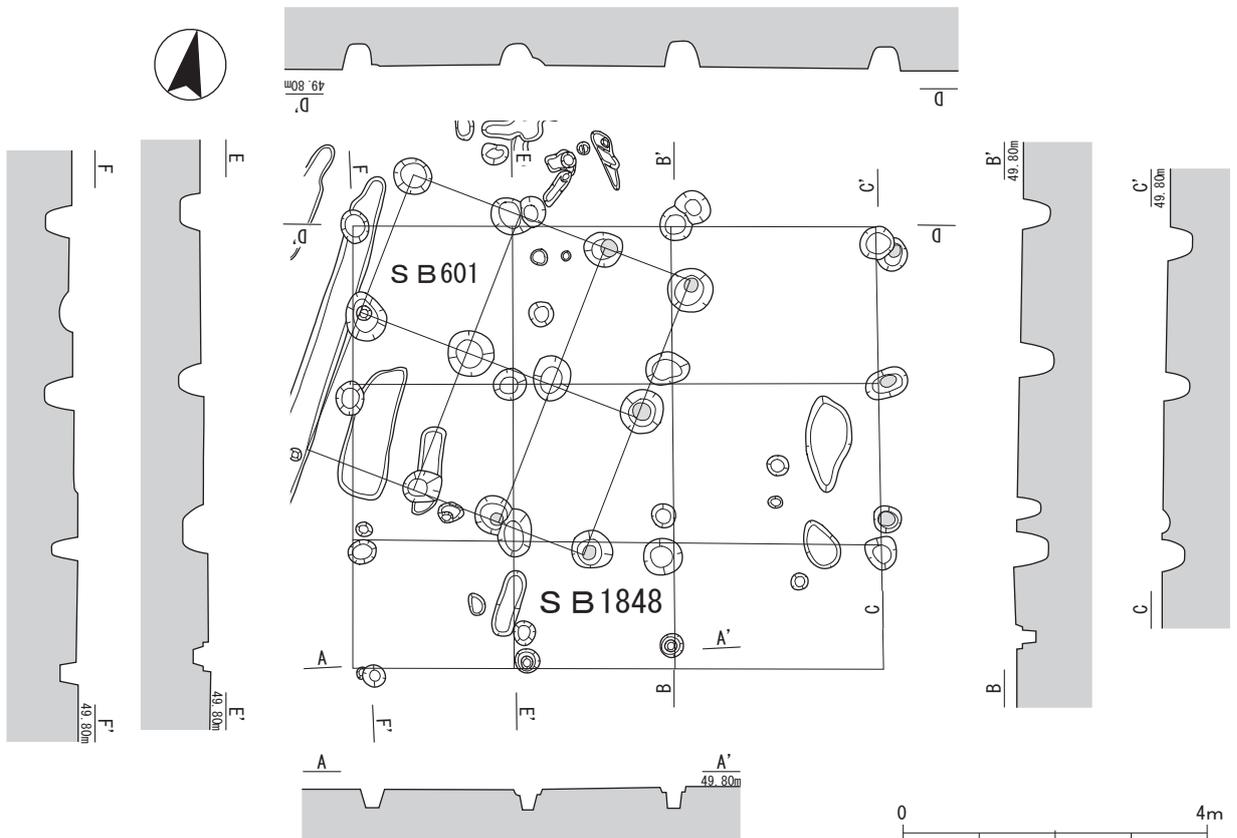


第 172 図 S B 1833・1844 実測図（1 : 80）



【SB1847】

- 1 7.5YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR4/3 褐色シルト～粗粒粘砂土（黄褐色ブロック少量含）



第173図 SB1847・1848実測図（1：80・1：100）

ウ 土坑

当該期の土坑を108基確認した。形状は、円形、楕円形、方形、長方形など様々であるが、複数の土坑が重複して、歪な形をするものも多い。規模も、1m足らずのものから、大きなものは6mを超えるものもある。その他、土坑の底面や壁面、周囲に複数ピットを伴うもの、埋土に焼土や炭化物などを含むもの、壁面が竪穴建物よりは緩やかに掘削されるものなどがある。なお、規模で、長さが2mを超えるものについては、大型土坑¹⁾として記述する。

SK 1017 (第174図) 第4次調査区の北側中央で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径2.3m×短径1.3mである。二段に掘削されており、南側が28cmとやや深い。

出土遺物には、土師器甕片がある。

SK 1032 (第174図) 第4次調査区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は不整形、竪穴建物のSH 1011と重複しているが、長径2.9m×短径2.1m以上である。残存の深さは10cmと浅い。

出土遺物には、土師器片がある。

SK 1036 (第174図) 第4次調査区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は概ね円形、長径2.3m×短径1.95mで、残存の深さは33cmである。

出土遺物には、土師器片が多数ある。

SK 1037 (第174図) 第4次調査区の中央西側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径4.1m×短径2.8mと、特に大型である。北側と西側が深く42cmあり、数段に掘削される。

出土遺物には、須恵器甕(1207)、土師器甕(1208)、土師器片が多数ある。

SK 1043 (第175図) 第4次調査区の中央西側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径4.0m×短径2.9mと、特に大型である。概ね垂直に掘削され、残存の深さも60cmと深い。

出土遺物には、須恵器杯身(1209)、高杯(1210・1211)、甕(1212)、土師器甕(1213～1220)、把手(1221)、須恵器片、土師器片が多数ある。

SK 1047 (第175図) 第4次調査区の中央西側で検出した土坑である。SH 1044のほぼ中央にあり、この竪穴建物に伴う可能性もあるが、土層断面観察により、重複する別遺構と判断した。埋土には、炭

や焼土が含まれる。形状は不整形、長径1.85m×短径1.5m、残存の深さは15cmである。

出土遺物には、須恵器片、土師器片がある。

SK 1051 (第175図) 第4次調査区の中央南側で検出した大型土坑である。形状は、概ね楕円形状を呈し、長径3.0m×短径2.4m、残存の深さは41cmである。

出土遺物には、須恵器杯H(1222)、須恵器片、土師器片がある。

SK 1052 (第175図) 第4次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は、楕円形状を呈し、長径4.1m×短径3.5m、残存の深さは45cmである。壁面や床面に複数のピットが存在する。

出土遺物には、須恵器杯H(1223)、甕(1224)、土師器甕(1225・1226)、須恵器片、土師器片、鉄滓片がある。

SK 1053 (第176図) 第4次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は不整形。長径2.8m×短径2.0m、残存の深さは38cmである。

出土遺物には、須恵器高杯(1227)、鉄滓片がある。

SK 1059 (第176図) 第4次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径4.1m×短径3.1mと、特に大型である。概ね垂直に掘削され、残存の深さも43cmと深い。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(1229・1230)、杯H身(1231・1232)、土師器甕(1234)、煮沸具(1233)、製塩土器(1235)がある。

SK 1060 (第176図) 第4次調査区の南西部で検出した土坑である。方形状を呈し、長辺1.5m×短辺1.0m、残存の深さは25cmである。

出土遺物には、土師器甕(1236～1240)がある。

SK 1061 (第93図) 第4次調査区の南西隅、東環の第7次調査区にまたがって検出した大型土坑である。遺構の南西部は東環事業地であるが、大半は新名神事業地内での確認である。竪穴建物SH 1057とほぼ重複しており、形状は不整形である。長径6.4m×短径5.4m、残存の深さは30cm程度である。埋土には焼土や炭化物を含んでいる。

出土遺物は多数あるが、SH 1057出土と厳密に分けることは難しく、遺物の実測図はSH 1057にまとめた。

S K 1161 (第 176 図) 第 5 次調査南区の南西隅、東環の第 2 次調査区にまたがって検出した大型土坑である。南側 3 分の 1 程度が東環の事業地、残り 3 分の 2 は新名神の事業地内での確認である。S B 220・S B 232 と重複しているが、新旧関係はこれらより古い。形状は楕円形状を呈し、長径 5.6 m × 短径 4.0 m と大型である。底面はほぼ平坦で、深さは 25cm 程度である。

出土遺物には、須恵器高杯 (1241)、土師器甕 (1242・1243) がある。

S K 1162 (第 177 図) 第 5 次調査南区の南西部で検出した土坑である。形状は概ね方形、長辺 1.25 m × 短辺 1.15 m で、残存の深さは 10cm である。

出土遺物には、須恵器甕 (1244)、土師器甕 (1245) がある。

S K 1165 (第 177 図) 第 5 次調査南区の南東部で検出した大型土坑である。形状はやや長方形を呈し、長辺 3.65 m × 短辺 3.15 m である。断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 10cm である。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (1246)、杯 H 身 (1247)、甕 (1248)、土師器甕 (1249)、把手 (1250) がある。

S K 1167 (第 177 図) 第 5 次調査南区の南東部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.0 m × 短径 2.85 m、残存の深さは 12cm である。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1168 (第 177 図) 第 5 次調査南区の中央で検出した土坑である。形状は不整形、長径 1.1 m × 短径 0.9 m である。断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 8 cm である。

出土遺物には、須恵器高杯、甕、土師器甕がある。

S K 1169 (第 178 図) 第 5 次調査南区の南西部で検出した土坑である。形状は長方形を呈し、長辺 1.05 m × 短辺 0.75 m である。残存の深さは 28cm で、規模の割にはやや深い。

出土遺物には、須恵器杯身、甕、土師器把手がある。

S K 1178 (第 178 図) 第 5 次調査南区のほぼ中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 0.9 m × 短径 0.75 m である。残存の深さは 23cm、規模の割には深く、垂直に掘削される。

出土遺物には、須恵器甕 (1251・1252) がある。

S K 1202 (第 178 図) 第 8 次調査区の北側中央で検出した土坑である。形状は方形を呈し、長辺 0.7 m × 短辺 0.6 m である。やや垂直に掘削され、残存の深さは 15cm である。

出土遺物には、土師器甕がある。

S K 1206 (第 178 図) 第 8 次調査区の中央で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 3.1 m × 短径 2.1 m である。垂直に掘削され、残存の深さは 54cm と深い。

出土遺物には、須恵器杯蓋 g (1253)、杯 (1254)、無台杯 (1255)、須恵質土管? (1256)、土師器甕 (1257～1259)、鞆羽口 (1260)、転用砥石 (1261)、砥石 (1262)、鉄製長頸鎌 (1263)、磨石、鉄滓がある。

S K 1208 (第 180 図) 第 8 次調査区の南東隅で検出した土坑である。形状は長楕円形状を呈しており、中央部分が後世の区画溝によって分断される。長径 1.8 m × 短径 0.75 m、残存の深さは 20cm である。

出土遺物には、須恵器無台杯 (1264)、高杯 (1265)、土師器杯 (1266)、甕 (1267) がある。

S K 1210 (第 179 図) 第 8 次調査区の南東部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 2.3 m × 短径 1.55 m である。後述する S K 1211 と重複しており、また S K 1211 は、さらに S F 1212 と重複している。なお、新旧関係は、S F 1212、S K 1211、S K 1210 の順に、東から西へ新しくなる。残存の深さは 43cm で、垂直に掘削される。

出土遺物には、土師器甕 (1268・1269)、転用砥石 (1270) がある。

S K 1211 (第 179 図) 第 8 次調査区の南東部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.0 m 以上 × 短径 3.55 m と、特に大型である。二段に掘削され、残存の深さは 43cm と深い。

出土遺物には、須恵器無台杯 (1274・1275)、杯 B (1276)、杯 (1277・1278)、平瓶? (1279)、長頸壺 (1280)、甕 (1281)、土師器皿 (1282)、甕 (1283～1289)、把手 (1290)、砥石 (1291) がある。

S K 1214 (第 180 図) 第 8 次調査区の南東部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 3.3 m × 短径 2.0 m、残存の深さは 45cm である。S K 1215 と重複しており、さらに S K 1215 は、

S K 1216 と重複している。3つの遺構が重複するが、新旧関係はS K 1216、S K 1215、S K 1214の順に新しくなる。前述のS F 1212、S K 1211、S K 1210の新旧関係と共通点がある。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器甕片が多数ある。
S K 1215 (第180図) 第8次調査区の南東部で検出した大型土坑である。南西部分は風倒木と重複しており定かではないが、形状は楕円形状を呈すると思われる。長径は7.2 mと、特に大きい。垂直に掘削され床面はほぼ平坦である。

出土遺物には、土師器甕片が多数ある。

S K 1216 (第180図) 第8次調査区の南東部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径6.9 m×短径3.45 mである。残存の深さは35 cmと、S K 1214とS K 1215と比べると若干浅い。

出土遺物には、須恵器杯H (1299)、無台杯 (1300)、土師器甕 (1301) がある。

S K 1221 (第180図) 第8次調査区の西側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径3.9 m×短径2.7 m、残存の深さは14 cmである。

出土遺物には、須恵器杯 (1302・1303)、不明土製品 (1304・1305)、弥生土器甕 (1591) がある。

S K 1224 (第181図) 第8次調査区の西側で検出した大型土坑である。形状は方形形状を呈し、長辺3.0 m×短辺2.25 m、残存の深さは16 cmである。

出土遺物には、須恵器杯 (1306・1307) がある。

S K 1225 (第181図) 第8次調査区の西側で検出した土坑である。形状は方形形状を呈し、長辺1.75 m×短辺1.7 m、垂直に掘削され、残存の深さは17 cmである。

出土遺物には、土師器甕 (1308) がある

S K 1227 (第181図) 第8次調査区の西側で検出した大型土坑である。形状は不整形、長径2.8 m×短径1.75 m、残存の深さは33 cmである。

出土遺物はない。

S K 1229 (第181図) 第8次調査区の西端で検出した土坑である。形状は概ね円形、南側が攪乱により削平を受けるが、径約1 m程度であろう。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器甕 (1309・1310)、袋状鉄斧 (1311) がある。

S K 1230 (第181図) 第8次調査区の西端で検出

した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径2.15 m×短径1.4 m、残存の深さは38 cmと深い。

出土遺物には、須恵器杯蓋b (1312)、杯 (1313～1317)、椀 (1318)・土師器甕 (1319～1322)、鉄鍬 (1323) がある。

S K 1231 (第181図) 第8次調査区の西端で検出した土坑である。形状は不整形、長径0.8 m×短径0.6 m以上、残存の深さは約10 cmである。焼土の痕跡が認められる。

出土遺物には、土師器甕 (1324) がある。

S K 1323 (第182図) 第9次調査区の東部で検出した土坑である。形状は細長い二等辺三角形形状を呈し、長径2.6 m×短径0.6 m、残存の深さは14 cmである。土坑として報告するが、出土遺物には土師器甕片が多数あり、形状から判断すると、土師器焼成坑の可能性もある。

S K 1427 (第182図) 第10次調査南区の北西部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径5.4 m×短径3.8 mである。垂直に掘削され、残存の深さは40 cmと深い。竪穴建物S H 1417やS K 1428、S K 1429と重複するが、新旧関係としては、これらの中で一番新しい。

出土遺物には、須恵器杯H身 (1326)、土師器甕 (1327・1328)、土錘 (1329・1330) がある。

S K 1428 (第182図) 第10次調査南区の北西部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径2.4 m×短径1.8 m以上である。垂直に掘削され、残存の深さ約36 cmである。

出土遺物には、土師器甕 (1331・1332) がある。

S K 1429 (第182図) 第10次調査南区の北西部で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径1.6 m以上×短径1.45 mである。断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは22 cmである。このS K 1429、S K 1428、S K 1427の順に新しく、規模も大きくなる。

出土遺物には、須恵器フラスコ瓶 (1333)、横瓶 (1334)、土師器甕 (1335) がある。

S K 1437 (第183図) 第10次調査南区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は長方形形状を呈し、長辺3.8 m×短辺2.8 mである。残存の深さは31 cmである。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器甕片が多数ある。
S K 1439 (第 183 図) 第 10 次調査南区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 3.6 m × 短径 3.4 m である。残存の深さは 30cm である。

出土遺物には、須恵器無蓋高杯 (1336)、甕片、杯身片、土師器杯 (1337)、甕片がある。

S K 1442 (第 182 図) 第 10 次調査南区の中央東側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 0.6 m × 短径 0.45 m、残存の深さは 14cm である。埋土には、炭化物や焼土が含まれる。

出土遺物には、須恵器杯蓋 (1338 ~ 1340)、無台杯 (1341・1342)、高盤か皿 (1343)、水瓶 (1344)、土師器甕 (1345・1346)、長胴甕 (1347)、志摩式製塩土器 (1348) などがある。須恵器杯蓋、杯身は、完形に近いものが多い。

S K 1445 (第 183 図) 第 10 次調査南区の中央西側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.7 m × 短径 3.0 m と、特に大型で、残存の深さは 38cm である。

出土遺物には、須恵器無台杯 (1349)、壺 (1350)、土師器甕 (1351・1352)、転用砥石 (1353) がある。

S K 1447 (第 183 図) 第 10 次調査南区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.0 m × 短径 2.5 m、残存の深さは 20cm である。

出土遺物には、須恵器杯蓋片、土師器甕片がある。

S K 1448 (第 184 図) 第 10 次調査南区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.2 m × 短径 2.6 m、残存の深さは 26cm である。

出土遺物には、須恵器杯蓋 g (1354)、無台杯 (1355)、甕 (1356)、壺 (1357)、土師器甕片がある。

S K 1449 (第 184 図) 第 10 次調査南区の中央南側で検出した土坑である。形状は円形、長径 2.5 m × 短径 2.4 m、残存の深さは 30cm である。

出土遺物には、須恵器杯蓋 b (1358)、土師器甕片がある。

S K 1451 (第 184 図) 第 10 次調査南区の南西部で検出した大型土坑である。形状は長方形形状を呈し、長辺 2.8 m × 短辺 2.3 m、残存の深さは 26cm である。

出土遺物には、須恵器杯蓋 g (1359)、杯蓋 b

(1360)、無台杯? (1361)、杯 (1362)、土師器杯? (1363) がある。

S K 1453 (第 184 図) 第 10 次調査南区の南西部で検出した大型土坑である。堅穴建物 S H 1446 と重複するが、土層断面観察により、堅穴建物に伴う遺構ではなく、新旧関係も新しい土坑と判断した。形状は長方形形状を呈し、長辺 2.1 m × 短辺 1.7 m、残存の深さは 28cm である。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1503 (第 184 図) 第 11 次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.3 m × 短径 3.0 m。断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 10cm である。壁面などに複数のピットが存在するため、簡易な屋根などが取り付けられていた可能性も考えられる。

出土遺物には、須恵器杯 H 身 (1364)、短頸壺 (1365) の他、須恵器片、土師器片がある。

S K 1505 (第 184 図) 第 11 次調査区の南西部で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 1.7 m × 短径 0.75 m、残存の深さは 40cm と大きさの割に深い。

出土遺物はない。

S K 1509 (第 185 図) 第 11 次調査区の西部で検出した大型土坑である。形状は方形形状を呈し、長辺 4.2 m × 短辺 3.85 m である。部分的に深く掘削されているが、概ね残存の深さは 35cm である。西側には隣接して S K 1510 があるが、新旧関係は不明である。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1510 (第 185 図) 第 11 次調査区の西部で検出した大型土坑である。形状は不整形形状を呈し、長径 5.4 m × 短径 4.45 m である。部分的に深く掘削されているが、概ね残存の深さは 30cm である。

出土遺物には、須恵器無台杯 (1366)、土師器甕 (1367) の他、土師器片が多数ある。

S K 1520 (第 185 図) 第 11 次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は円形状を呈する。長径 4.0 m × 短径 3.7 m、断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 20cm である。西側に隣接、重複して S K 1526 が存在する。壁面には複数のピットが、一定間隔で存在するため、簡易な屋

根などが取り付けられていた可能性も考えられる。

出土遺物に須恵器杯身(1368)、甕(1369)、土師器甕(1370)の他、須恵器片、土師器片がある。

S K 1524(第186図) 第11次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は方形、S K 1542と重複するが、新旧関係はS K 1524の方が新しい。長辺2.7 m以上×短辺2.6 m、残存の深さは20cmである。

出土遺物には、須恵器高杯(1371)、須恵器片、土師器把手(1372)がある。

S K 1526(第185図) 第11次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は長方形を呈し、長辺5.3 m×短辺4.95 mである。残存の深さは35cmである。

出土遺物には、須恵器片、土師器甕(1373)、土師器片がある。

S K 1531(第186図) 第11次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は長方形を呈し、長辺2.05 m×短辺1.3 m、残存の深さは10cmである。

出土遺物には、須恵器片、土師器把手(1374)、土師器片がある。

S K 1538(第186図) 第11次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は不整形、長径4.7 m×短径3.5 m、部分的に深く掘削されているが、概ね残存の深さは40cmである。

出土遺物には、須恵器杯H身(1375)、高杯(1376)、土師器甕(1377)、把手(1378)、転用砥石(1379)、弥生土器甕(1600)がある。

S K 1542(第186図) 第11次調査区の南西部で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径4.0 m以上×短径2.4 m、残存の深さは40cmと深い。前述のS K 1524と重複する。

出土遺物には、須恵器甕(1380)、弥生土器甕(1593)がある。

S K 1543(第186図) 第11次調査区の中央の南西側で検出した大型土坑である。形状は円形状を呈し、長径4.5 m×短径4.45 m、残存の深さは30cmである。壁面などに複数のピットが存在する。

出土遺物には、須恵器杯H蓋(1381～1385)、杯H身(1386～1391)、高杯(1392～1396)、瓶(1397)、甕(1398・1399)、フラスコ瓶(1400)、土師器甕(1401～1410)、把手(1411)、砥石(1412)がある。

S K 1545(第187図) 第11次調査区の中央西側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径6.45 m×短径4.1 m以上、残存の深さは10cmと浅い。

出土遺物はない。

S K 1560(第187図) 第11次調査区の中央西側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径1.35 m×短径0.9 m、残存の深さは15cmである。前述のS K 1545の北東部分にあり、別遺構とはしたが、同一部の可能性もある。

出土遺物はない。

S K 1563(第187図) 第11次調査区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は方形を呈し、長辺4.6 m×短辺4.4 mである。壁面や床面に複数のピットが存在し、深さも安定しないが、概ね残存の深さは30cmである。

出土遺物には、須恵器甕(1414)、須恵器片、土師器片がある。

S K 1566(第187図) 第11次調査区のほぼ中央で検出した土坑である。形状は不整形、長径1.4 m×短径1.0 m、残存の深さは45cmと規模の割に深い。

出土遺物はない。

S K 1567(第188図) 第11次調査区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径2.4 m×短径1.6 m、残存の深さは35cmとやや深く、壁面は垂直気味に掘削される。後述するS K 1572と重複しており、さらに南方向へS K 1568、S K 1569の順で、新旧関係は新しくなる。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1568(第188図) 第11次調査区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は概ね円形、長径2.5 m×短径2.15 m、残存の深さは40cmと深い。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1569(第188図) 第11次調査区のほぼ中央で検出した大型土坑である。形状は方形を呈し、長辺4.7 m×短辺4.3 m、残存の深さは40cmと深い。壁面も垂直に掘削され、床面は平坦である。当遺構の周囲にピットが複数確認され、何らかの関係性も考えられる。

出土遺物には、須恵器杯H(1415)、高杯(1416・1417)、土師器甕(1418～1420)がある。

S K 1572 (第 188 図) 第 11 次調査区のほぼ中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 1.8 m × 短径 1.3 m、残存の深さは 35cm と、規模の割には深い。

出土遺物には、須恵器片がある。

S K 1589 (第 188 図) 第 11 次調査区の中央北側で検出した土坑である。形状は概ね円形、長径 1.05 m × 短径 0.9 m、残存の深さは 25cm で、垂直に掘削される。

出土遺物はない。

S K 1591 (第 188 図) 第 11 次調査区の中央南側で検出した大型土坑である。形状は概ね円形、長径 2.0 m × 短径 1.8 m、残存の深さは 30cm である。壁面は垂直気味に、複数段に掘削される。

出土遺物には、須恵器片、土師器片がある。

S K 1709 (第 189 図) 第 11 次調査区の東側で検出した土坑である。形状は不整形を呈しており、長径 1.8 m × 短径 1.6 m、残存の深さは 20cm である。壁面は垂直気味に掘削され、床面は平坦である。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1711 (第 189 図) 第 11 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は不整形を呈しており、長径 2.2 m × 短径 2.1 m、残存の深さは 40cm と深い。壁面は垂直に、ややオーバハング気味に掘削される。S K 1712 と重複しており、新旧関係はこの S K 1711 の方が新しい。

出土遺物には、土師器甕 (1496) の他、土師器片、須恵器片、縄文土器深鉢 (1576・1577) がある。

S K 1712 (第 189 図) 第 11 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は不整形を呈しており、長径 2.7 m × 短径 2.0 m、残存の深さは 45cm である。この遺構も、前述の S K 1711 同様に、壁面は垂直に、ややオーバハング気味に掘削される。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1715 (第 189 図) 第 11 次調査区の東側で検出した土坑である。形状は不整形で、長径 1.65 m × 短径 1.4 m、断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 20cm である。

出土遺物はない。

S K 324 (第 189 図) 第 11 次調査区の南西隅、東環の第 5 次調査区にまたがって検出した大型土坑で

ある。形状は不整形を呈し、長径 4.0 m × 短径 3.8 m、残存の深さは 15cm である。底面には浅い窪みなどが多く、あまり平坦ではない。壁面や床面に複数のピットが存在する。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (1206) の他、土師器片、須恵器片がある。

S K 1601 (第 190 図) 第 12 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 6.4 m × 短径 3.65 m、断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 25cm である。また、当遺構の周辺には複数のピットが確認され、何らかの関係性も考えられる。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (1421 ~ 1427)、杯 H 身 (1428 ~ 1434)、高杯 (1436 ~ 1438)、壺 (1439・1441)、甑 (1440)、甕 (1442・1443)、土師器台付椀 (1444)、甕 (1445 ~ 1451)、甑 (1452)、把手 (1453・1454)、鞆羽口 (1455)、不明鉄製品 (1456) がある。特筆すべきは、須恵器杯 H 身 (1429・1430・1433・1434)、杯 H 蓋 (1426・1427) の外面には、「×」や「○」などの記号が、朱書きされていることである。

S K 1608 (第 189 図) 第 12 次調査区の東側で検出した土坑である。一辺 0.8 m 四方の方形である。残存の深さは 10cm である。南西隅に焼土の痕跡が見られ、中世墓の可能性もある。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1609 (第 190 図) 第 12 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は不整形で、長径 2.5 m × 短径 2.35 m、残存の深さは 25cm である。竪穴建物 S H 1607 と重複しており、新旧関係は S K 1609 の方が新しい。

出土遺物には、須恵器杯 H (1457) がある。

S K 1610 (第 190 図) 第 12 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 8.45 m × 短径 5.4 m と、特に大型であるが、残存の深さは 20cm と浅い。

出土遺物には、須恵器杯 H 身 (1458)、土師器把手 (1459)、土師器片がある。

S K 1615 (第 190 図) 第 12 次調査区の東側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 1.35 m × 短径 0.95 m、壁面はやや垂直に掘削され、残存の深さは 15cm である。

出土遺物には、須恵器杯H蓋? (1460)、杯H蓋 (1461)、壺 (1462)、土師器甕 (1463～1465) がある。

S K 1616 (第 190 図) 第 12 次調査区の東側で検出した土坑である。形状は円形、長径 0.9 m×短径 0.8 m、残存の深さは 10cm である。焼土の痕跡が見られる。

出土遺物はない。

S K 1622 (第 191 図) 第 12 次調査区の中央南側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 1.0 m×短径 0.75 m、残存の深さは 20cm である。埋土に炭や礫が含まれる。

出土遺物には、須恵器甕片、土師器片がある。

S K 1630 (第 191 図) 第 12 次調査区の西側で検出した土坑である。形状はほぼ円形、長径 1.0 m×短径 0.95 m である。壁面はやや垂直に掘削されるが、底面の中央部がさらに一段深くなり、約 45cm 程度になる。埋土には、拳より大きい礫が大量に集中して含まれる。出土遺物には、砥石 (1466) の他、土師器片がある。他の土坑と比べると、違和感のある遺構である。

このような礫を多量に含む遺構として、北山A遺跡の S K 68 がある。しかし、直径約 4 m と規模も大きく、礫に交じって円盤状や板状に破碎した灰釉陶器や須恵器の壺や甕、陶製の土管、石製加工円盤、砂岩性の砥石などを撒き散らしたように入るなど違いがある。形状などから、井戸のような性格も考えられるが、丘陵上に位置することや、深さも浅いためはつきりとはしない。

S K 1633 (第 191 図) 第 12 次調査区の東側で検出した大型土坑である。楕円形状を呈し、長径 2.1 m×短径 1.45 m である。残存の深さは 15cm である。

出土遺物には、須恵器杯H身 (1467)、土師器甕 (1468) がある。

S K 1634 (第 191 図) 第 12 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は長方形形状を呈し、長辺 3.9 m×短辺 3.3 m、残存の深さは 25cm である。

出土遺物には、須恵器片、土師器片がある。

S K 1658 (第 191 図) 第 12 次調査区の西側で検出した大型土坑である。形状は長方形形状を呈し、長辺 4.55 m×短辺 2.5 m である。壁面や床面に複数のピットが存在し、深さも安定しないが、残存の深さは 10cm と浅い。

出土遺物には、須恵器杯H身 (1469)、鉢? (1470)、土師器甕 (1471)、把手 (1472・1473) がある。

S K 1668 (第 192 図) 第 12 次調査区の西側で検出した大型土坑である。形状は細長い楕円形状を呈し、長径 6.2 m 以上×短径 2.1 m、残存の深さは 20cm である。

出土遺物には、須恵器杯H蓋 (1474)、高杯 (1475)、提瓶 (1476)、土師器甕 (1477～1480)、把手 (1481～1483) がある。

S K 1669 (第 192 図) 第 12 次調査区の西側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 6.2 m×短径 3.45 m である。残存の深さは 10cm と浅く、壁面や床面に複数のピットが存在する。

出土遺物には、須恵器杯身片の他、土師器甕 (1484) がある。

S K 1673 (第 191 図) 第 12 次調査区の西端、第 13 次調査区にまたがって検出した大型土坑である。形状は不定形、西側部分が後述する S K 1815 と重複するため、長径 3.65 m 以上×短径 3.25 m である。

出土遺物には、須恵器杯H蓋 (1485・1486)、杯H身 (1487～1490)、壺 (1491)、台付壺? (1492)、土師器把手 (1493・1494) がある。

S K 1687 (第 192 図) 第 12 次調査区の西側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 1.45 m×短径 0.75 m、残存の深さは 10cm である。

出土遺物には、土師器甕片が、床面から浮いた状態で、まとまって多数出土した。

S K 1699 (第 193 図) 第 12 次調査区の東端で検出した土坑である。形状は円形、径 1.2 m×1.15 m である。残存の深さは 25cm である。

出土遺物はない。

S K 1802 (第 193 図) 第 13 次調査区の北東側で検出した土坑である。形状は不整形、長径 1.8 m×短径 1.5 m である。残存の深さは 10cm である。

出土遺物には、土師器甕片がある。

S K 1803 (第 193 図) 第 13 次調査区の北東側で検出した土坑である。形状は概ね円形、長径 1.0 m×短径 0.9 m である。残存の深さは 10cm である。

出土遺物には、土師器片がある。

S K 1804 (第 193 図) 第 13 次調査区の北東側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径

0.7 m×短径0.5 mである。残存の深さは10 cmである。

出土遺物には、土師器高杯片、縄文土器片がある。
S K 1806 (第 193 図) 第 13 次調査区の北東側で検出した土坑である。形状は不整形、長径 1.5 m×短径 1.4 m である。残存の深さは 10 cm である。

出土遺物には、土師器把手 (1497)、甕片がある。
S K 1807 (第 193 図) 第 13 次調査区の北東側で検出した大型土坑である。遺構の西側は、風倒木と重複する。形状は不整形、長径 2.9 m×短径 2.6 m、残存の深さは 10 cm である。

出土遺物には、土師器甕片がある。
S K 1810 (第 193 図) 第 13 次調査区の北東側で検出した土坑である。遺構の西側は、竪穴建物 S H 1808 と重複する。形状は不整形、長径 1.7 m×短径 0.6 m 以上である。残存の深さは 15 cm である。

出土遺物には、土師器甕片がある。
S K 1811 (第 194 図) 第 13 次調査区の中央東側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 4.9 m×短径 3.8 m である。断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 15 cm である。床面に複数のピットが存在する。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (1498～1500)、杯 H 身 (1501～1505)、高杯蓋 (1506)、甕 (1507)、土師器甕 (1508～1511)、甗? (1512)、把手 (1513・1514)、土錘 (1515) の他、多数の小石がある。

S K 1815 (第 195 図) 第 13 次調査区の東端で検出した大型土坑である。形状は概ね長方形を呈し、長辺 4.9 m×短辺 3.3 m と東西方向に長い。西側の約半分が一段深くなり、残存の深さは 15 cm である。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (1516～1520)、杯 H 身 (1521)、土師器甕 (1522) がある。

S K 1816 (第 195 図) 第 13 次調査区の東端で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 3.45 m×短径 2.4 m である。断面の立ち上がりは緩やかに掘削され、残存の深さは 15 cm である。

出土遺物には、須恵器甕片、杯身片、土師器甕 (1523) がある。

S K 1819 (第 195 図) 第 13 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 3.25 m×短径 2.7 m である。北側が一段深く掘削され、残存の深さは 25 cm である。

出土遺物には、土師器甕 (1524)、須恵器甕片、杯身片、切目石錘 (1580)、石器の剥片がある。

S K 1823 (第 195 図) 第 13 次調査区の東側で検出した大型土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 2.0 m×短径 1.95 m である。残存の深さは 10 cm である。

出土遺物には、須恵器杯蓋片、杯身片、甕片、土師器甕片がある。

S K 1830 (第 195 図) 第 13 次調査区の東側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈し、長径 2.2 m 以上×短径 1.4 m である。西側が一段深く掘削され、残存の深さは 15 cm である。

出土遺物には、須恵器杯 H 蓋 (1525・1526)、杯 H 身 (1527)、甕片、土師器甕 (1528・1529)、甗? (1530・1531)、鍋・甗把手 (1532・1533)、砥石 (1534) がある。

エ 土器焼成坑

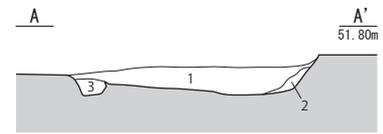
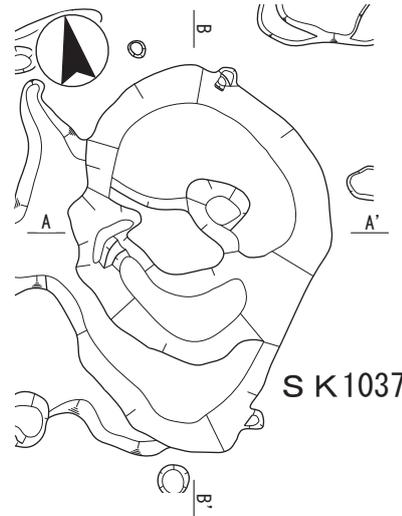
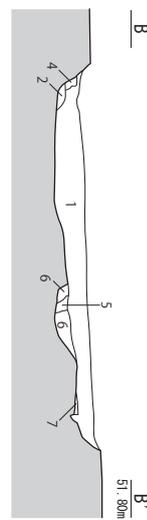
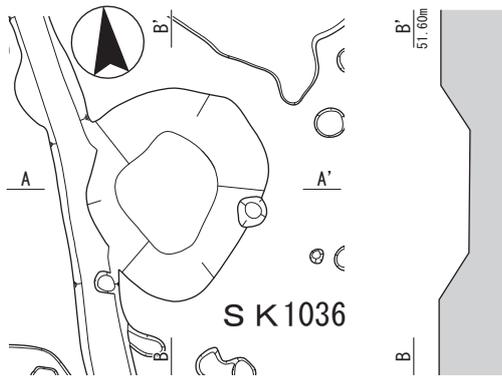
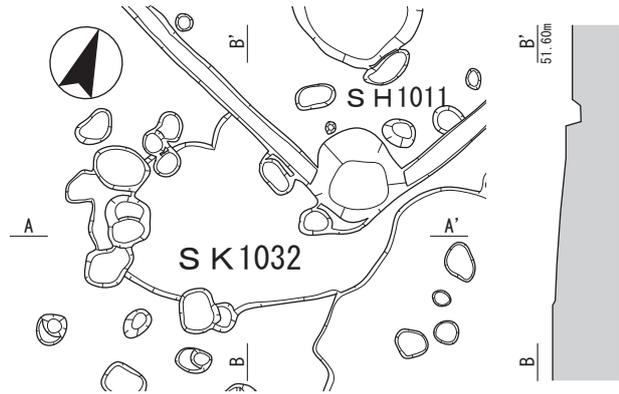
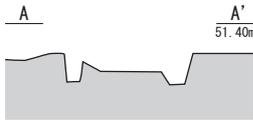
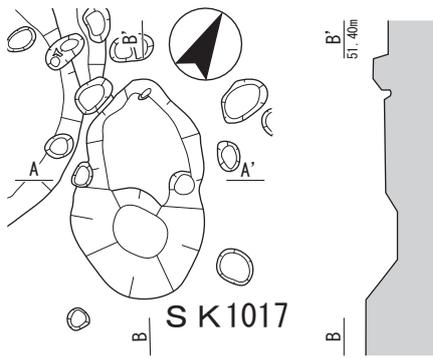
S F 1212 (第 179 図) 第 8 次調査区の南東部で検出した土坑である。前述の S K 1210 で記述したが、この S F 1212 から西方向へ S K 1211、S K 1210 の順で重複して新しくなる。平面形は判然としないが、規模が 2.8 m 以上×1.7 m、東壁面は緩やかに掘削されており、残存の深さは 28 cm である。

なお、検出段階の遺構上面や、掘削後の遺構下面に焼土範囲が見られ、壁面の一部に被熱痕跡も見られることなどから、東西方向に細長い土器焼成坑であった可能性が考えられる。

出土遺物には、土師器甕 (1292～1294)、須恵器無台杯 (1295) がある。

【註】

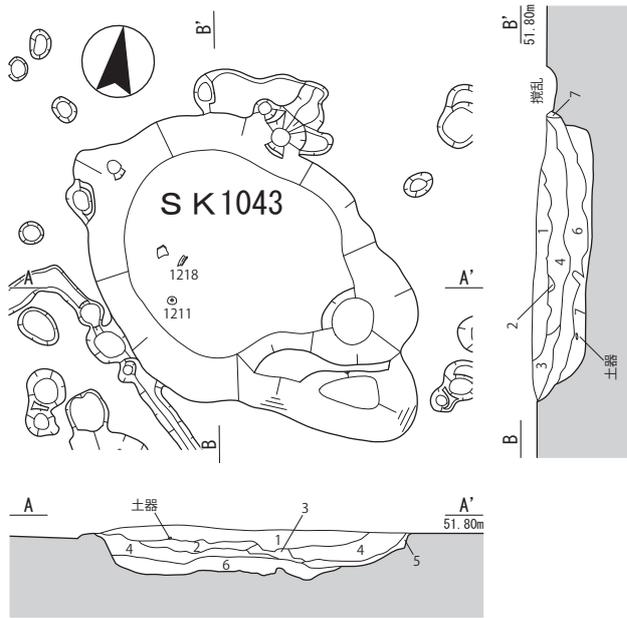
1) 東に隣接する同時期の遺跡である北山 A 遺跡で、長径 2 m を超えるものを大型土坑と呼称している。そこで、今回の報告でも比較検討を行い易くするため、同じく 2 m 以上のものを大型土坑とした。



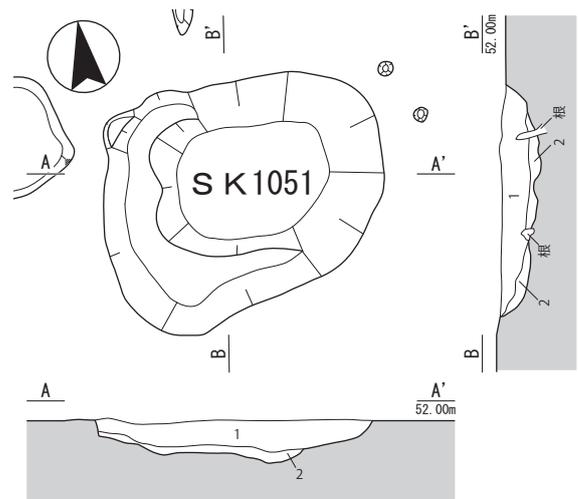
【SK1037】

- 1 黒褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 黒褐色粘質土 (灰黄褐色粘質土含)
- 4 暗褐色粘質土 (灰黄褐色粘質土含)
- 5 暗褐色粘質土 (2層より暗)
- 6 暗褐色粘質土 (灰黄褐色土粒少量含)
- 7 暗褐色粘質土 (灰黄褐色土少量含)

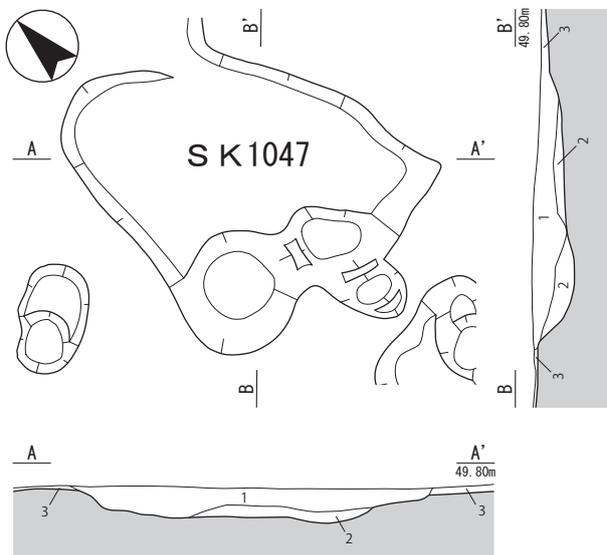
第174図 SK1017・1032・1036・1037実測図 (1:80)



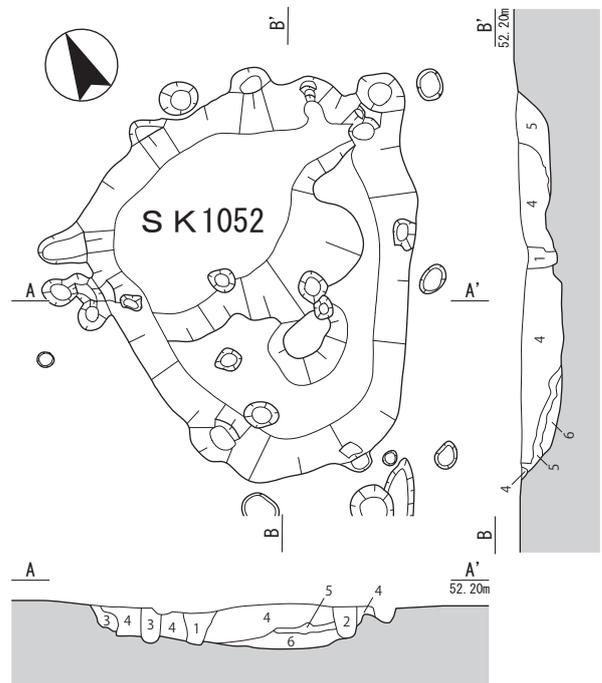
- 【SK1043】
- | | |
|----------------|----------------|
| 1 灰褐色土 (土器含) | 4 暗褐色粘質土 (土器含) |
| 2 黒褐色粘質土 (土器含) | 5 黒褐色土 (黄褐色土含) |
| 3 暗褐色土 | 6 黒褐色粘質土 |
| | 7 黒褐色土 (褐黄色含) |



- 【SK1051】
- 1 黒褐色砂質土
 - 2 暗灰褐色粘質土



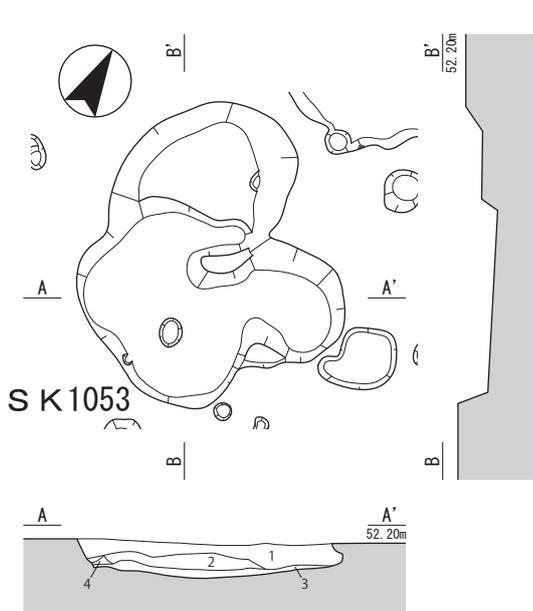
- 【SK1047】
- 1 暗褐色粘質土 (炭・焼土含)
 - 2 暗黄褐色粘質土 (炭・焼土含)
 - 3 暗黄褐色粘砂土



- 【SK1052】
- 1 黒褐色粘質土 (灰褐色粘質ブロック含)
 - 2 灰褐色粘質土
 - 3 灰褐色砂質土
 - 4 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック少量含)
 - 5 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック多含)
 - 6 黒褐色粘質土

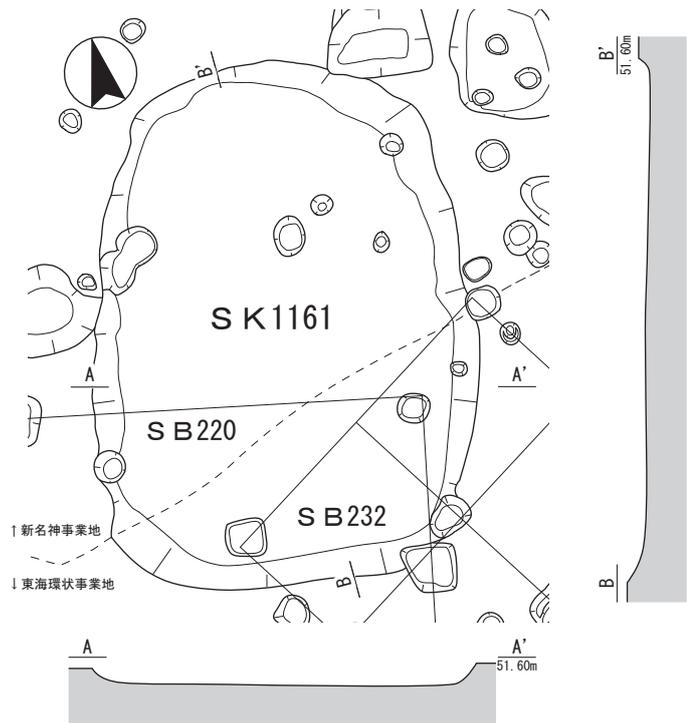


第 175 図 S K 1043・1047・1051・1052 実測図 (1 : 40・1 : 80)



【SK1053】

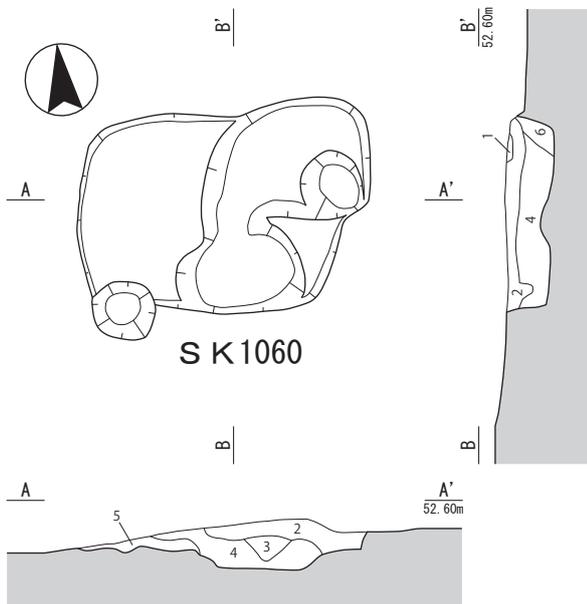
- 1 黒褐色砂質土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 暗灰褐色粘質土 (黄褐色ブロック含)
- 4 灰黄褐色粘質土



1 新名神事業地
2 東海環状事業地

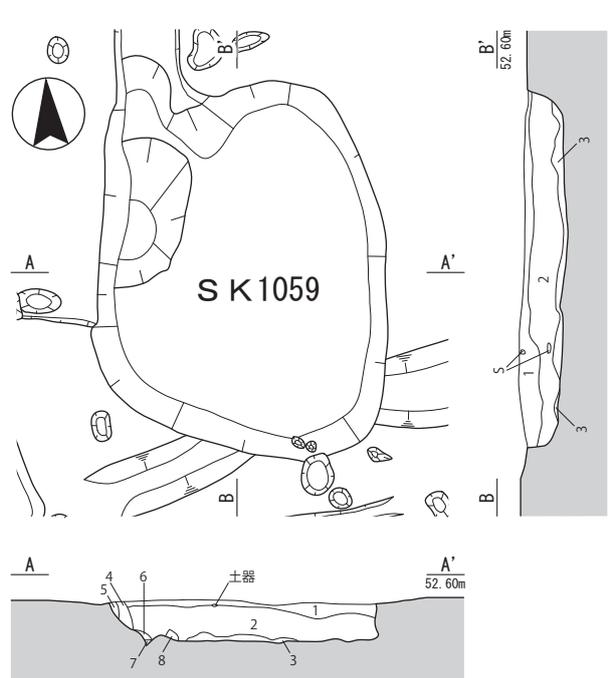
【SK1161】

1 黒褐色砂質土 (焼土・炭含)
2 黒褐色砂質土
3 黒褐色粘質土 (黄褐色土粒含)
4 暗灰褐色砂質土 (黄褐色土粒含)
5 暗黄褐色粘質土
6 黄褐色粘質土
7 灰褐色粘質土
8 暗褐色砂質土 (黄褐色土粒含)



【SK1060】

- 1 赤褐色土 (焼土塊)
- 2 暗褐色砂質土 (焼土粒・炭少量含)
- 3 黒褐色砂質土 (焼土粒少量含)
- 4 暗褐色砂質土 (焼土粒・黄褐色土粒中量含 炭少量含)
- 5 暗褐色砂質土 (焼土粒・炭少量含)
- 6 暗褐色砂質土 (焼土粒少量・黄褐色土粒大量含)

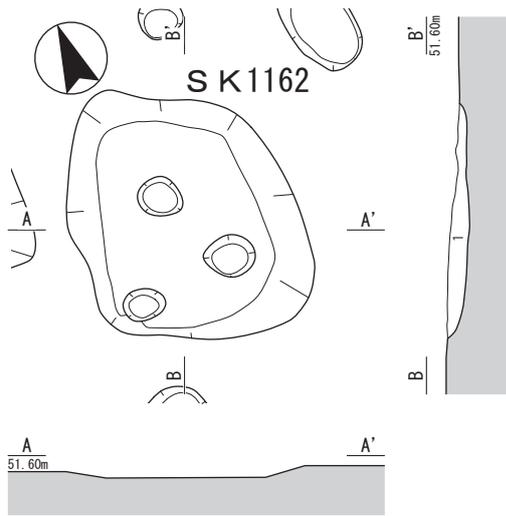


【SK1059】

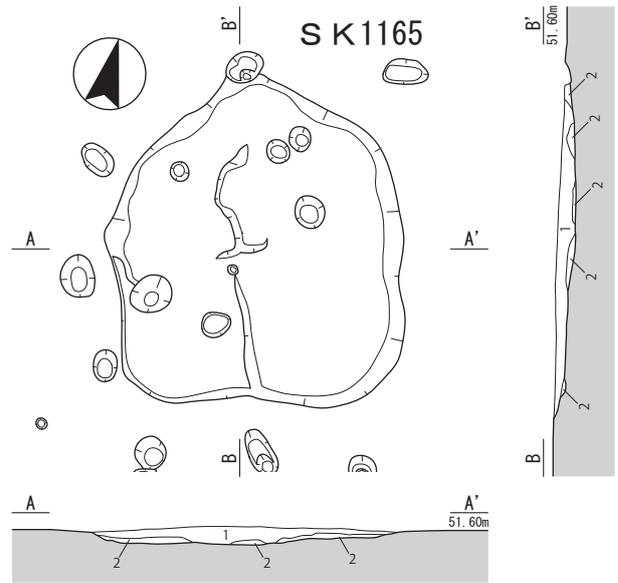
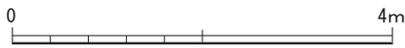
- 1 暗褐色砂質土 (焼土・炭含)
- 2 黒褐色砂質土
- 3 黒褐色粘質土 (黄褐色土粒含)
- 4 暗灰褐色砂質土 (黄褐色土粒含)
- 5 暗黄褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土
- 7 灰褐色粘質土
- 8 暗褐色砂質土 (黄褐色土粒含)



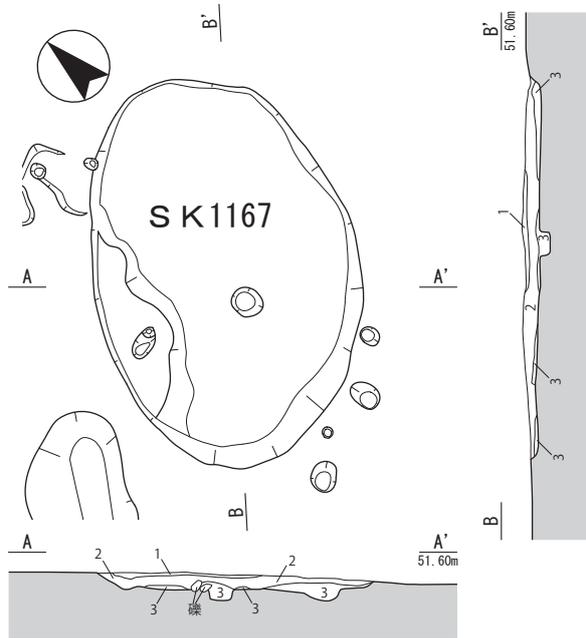
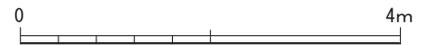
第176図 SK1053・1059・1060・1161 実測図 (1:40・1:80)



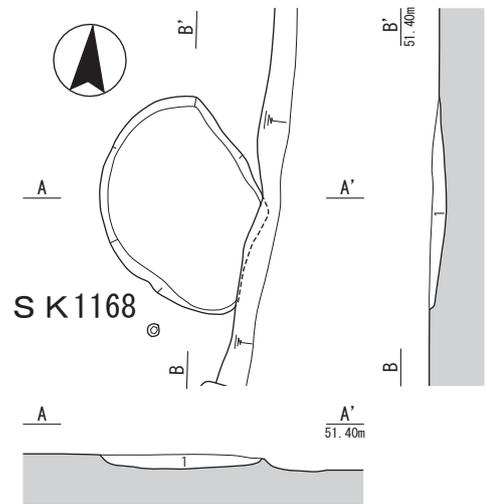
【SK1162】
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (φ 1~3mm白色小礫少量含)



【SK1165】
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含・φ 1~2mm白色小礫少量含)
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (7.5YR5/6 明褐色粘質土ブロック・φ 1~2mm白色小礫少量含)



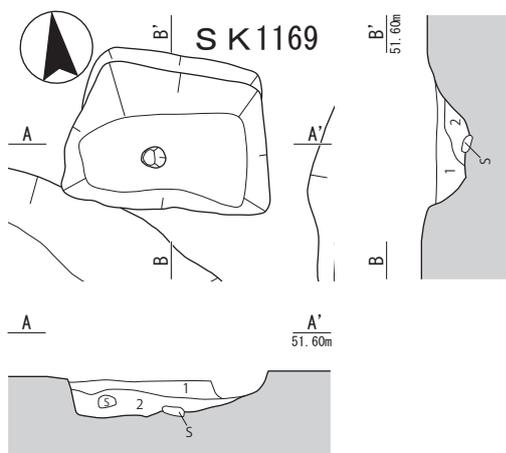
【SK1167】
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (焼土・φ 1~2mm白色小礫微量含)
2 10YR3/1 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含・φ 1~3mm白色小礫少量含)
3 7.5YR5/6 明黄褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土・10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土若干含)



【SK1168】
1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物・7.5YR5/8 明褐色粘質土ブロック多含・焼土微量含)

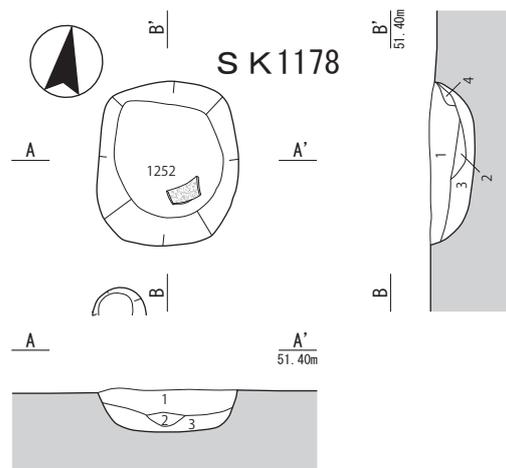


第 177 図 SK 1162・1165・1167・1168 実測図 (1 : 40・1 : 80)



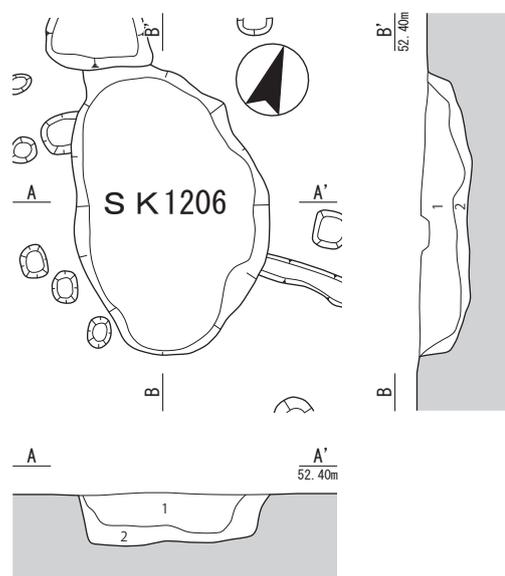
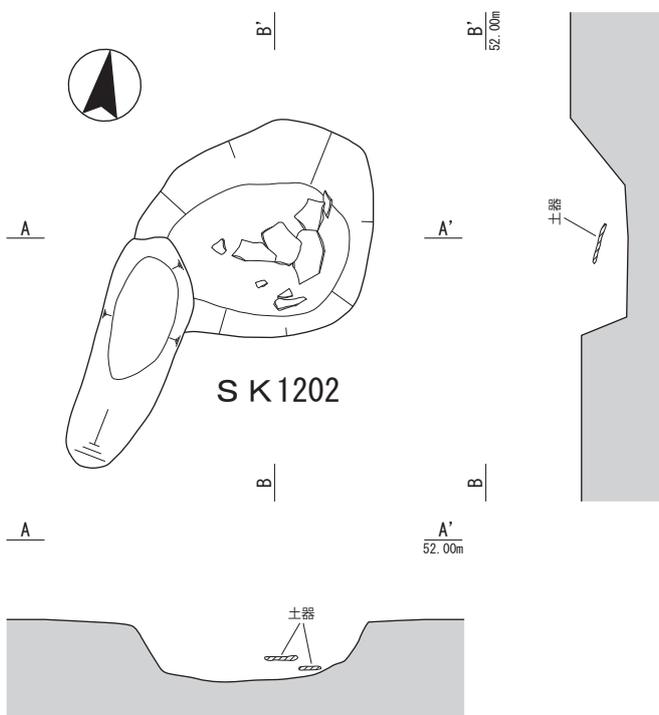
【SK1169】

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (φ 1~2mm白色小礫少量含)
- 2 10YR5/6 黄褐色粘質土 (φ 1~2mm白色小礫微量含)



【SK1178】

- 1 10YR2/3 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含)
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含・10YR5/8 黄褐色粘質土少量含)
- 4 10YR5/8 黄褐色粘質土 (10YR5/3 にぶい黄褐色粘質ブロック少量含)

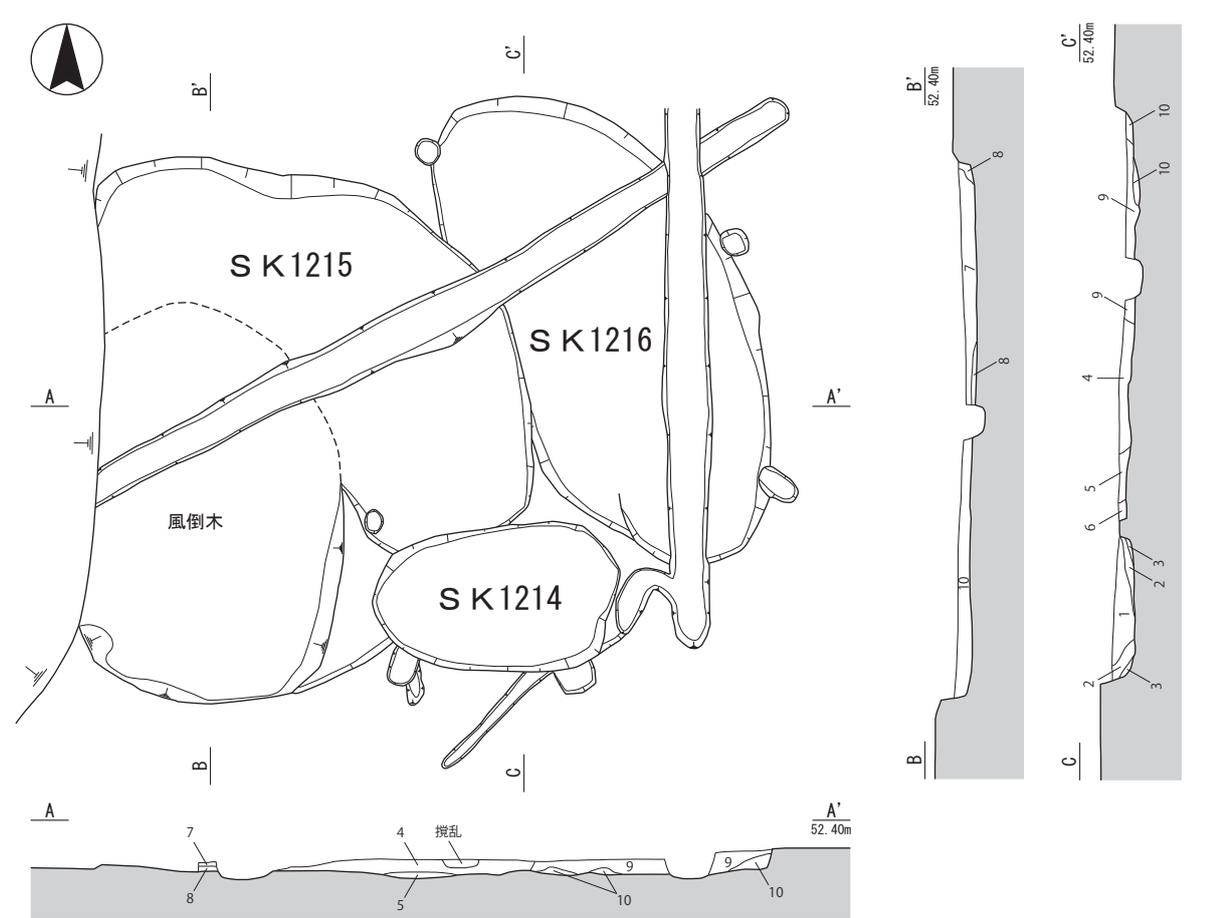
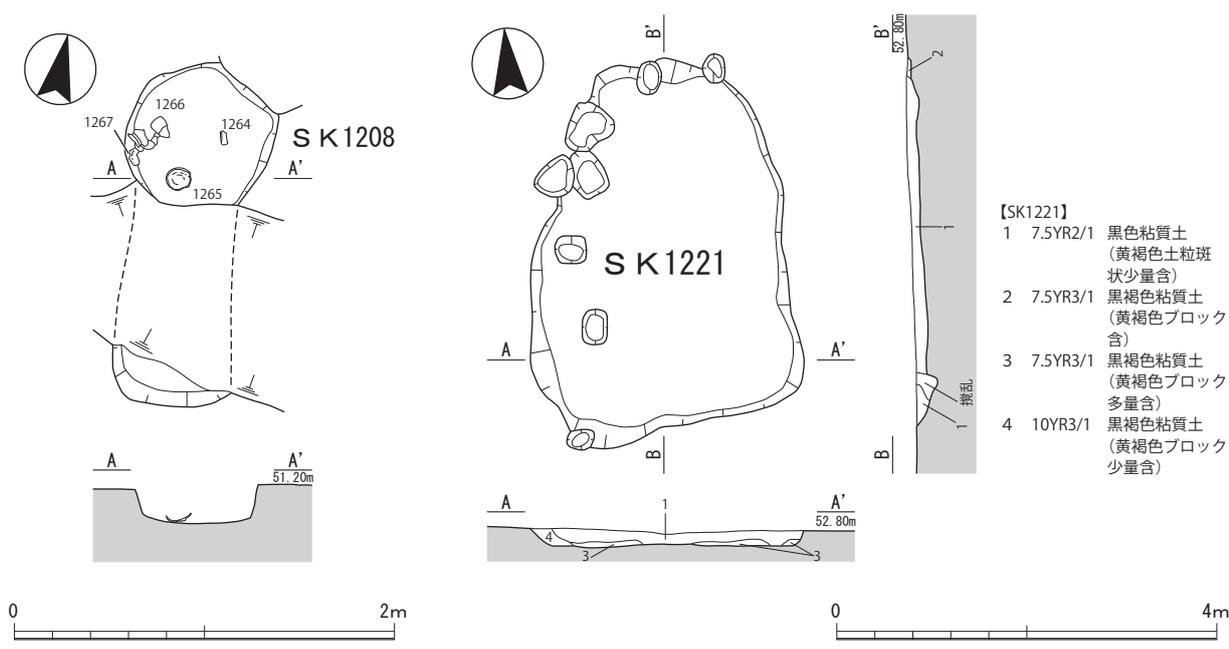


【SK1206】

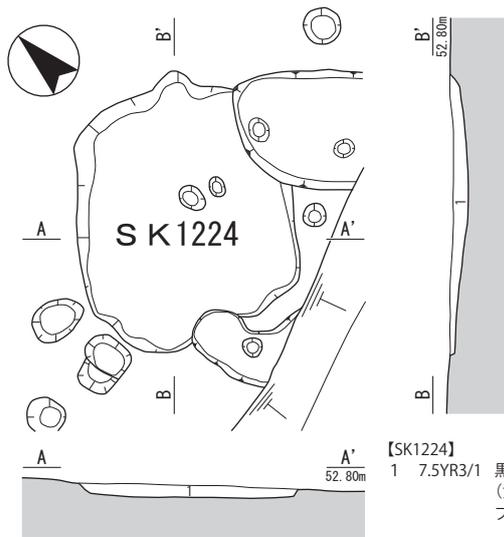
- 1 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色粘質土斑状含)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (黄褐色土多量含)



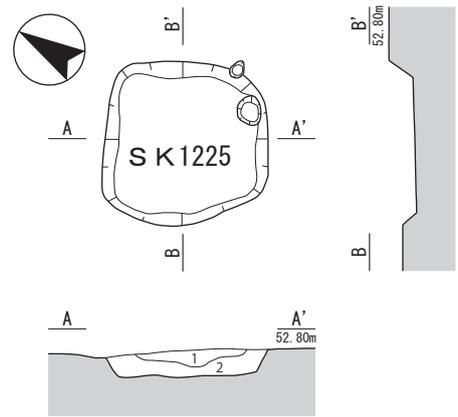
第178図 SK1169・1178・1202・1206実測図 (1:20・1:40・1:80)



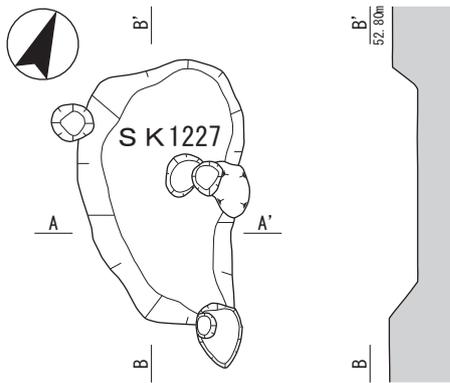
第 180 図 S K 1208 ・ 1214 ・ 1215 ・ 1216 ・ 1221 実測図 (1 : 40 ・ 1 : 80 ・ 1 : 100)



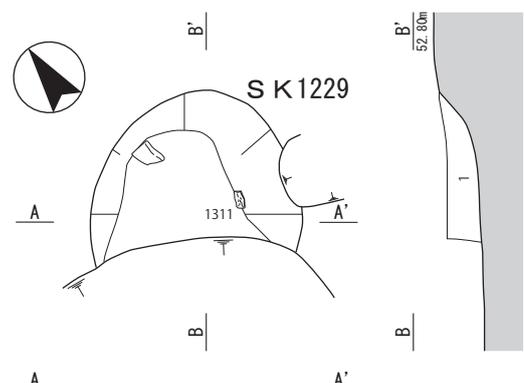
【SK1224】
1 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
(黄褐色土粒・
ブロック斑状含)



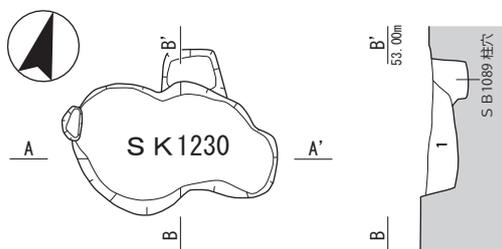
【SK1225】
1 7.5YR2/2 黒褐色粘質土
(黄褐色土粒・焼土ブロック少量含)
2 7.5YR2/1 黒色粘質土
(黄褐色土粒・ブロック含・焼土
ブロック斑状含)



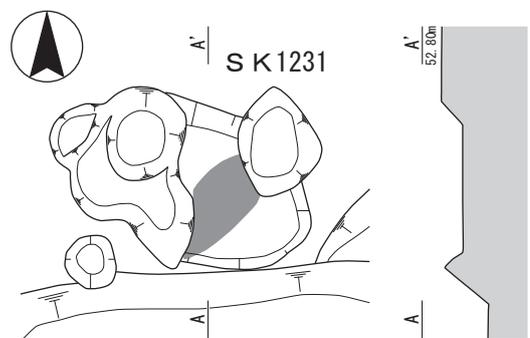
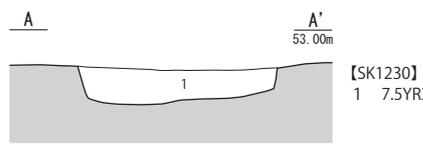
【SK1227】
1 7.5YR3/1 黒褐色粘質 (黄褐色土粒含・
黄褐色ブロック少量含・焼土
ブロック斑状含)
2 7.5YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色ブロック
含・焼土ブロック少量含)
3 10YR2/1 黒色粘質土 (黄褐色ブロック
多量含)



【SK1229】
1 7.5YR2/2 黒褐色粘質土
(黄褐色土粒・ブロック少量含・焼土ブロック微量含)



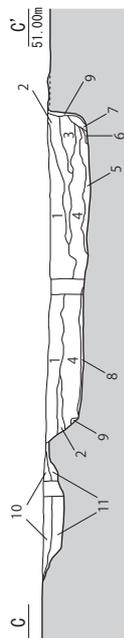
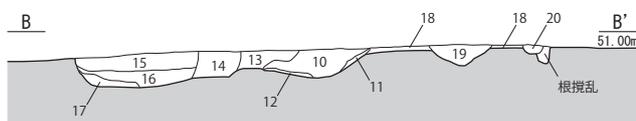
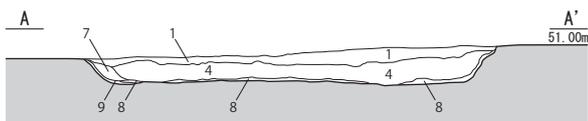
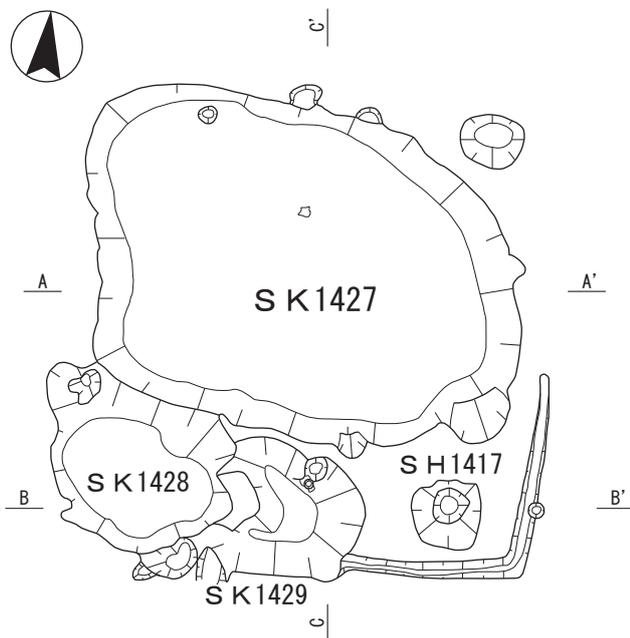
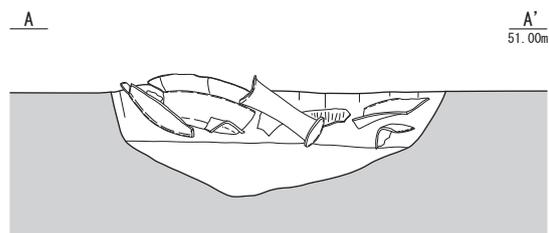
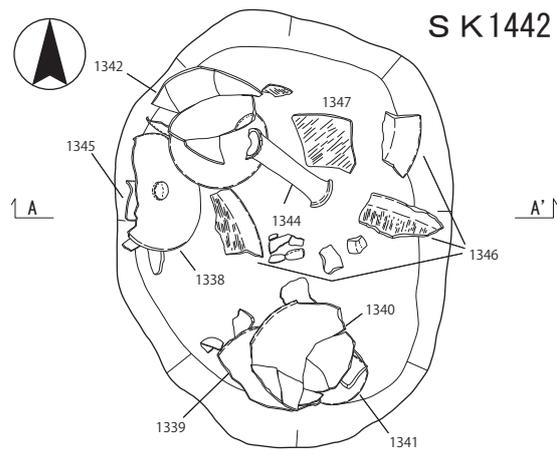
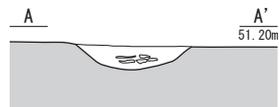
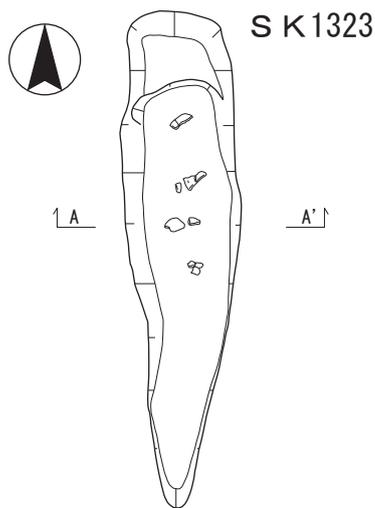
【SK1230】
1 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
(黄褐色土粒・
ブロック含)



■ 焼土



第181図 SK1224・1225・1227・1229・1230・1231 実測図 (1:40・1:80)

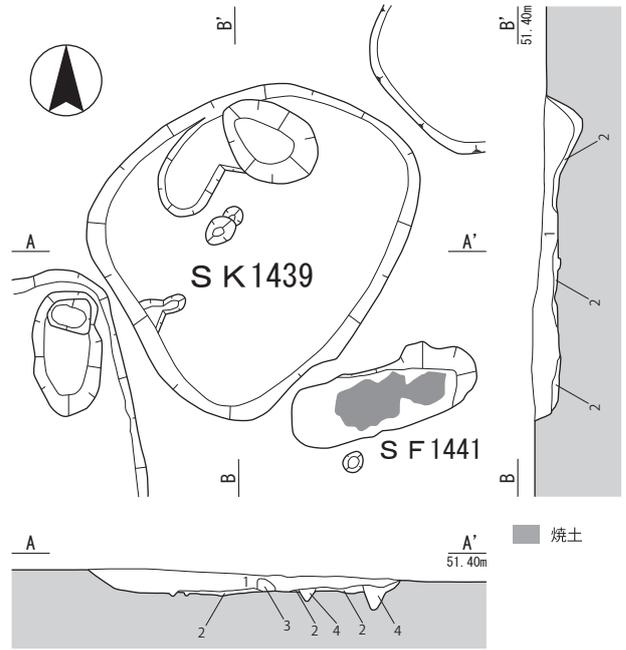
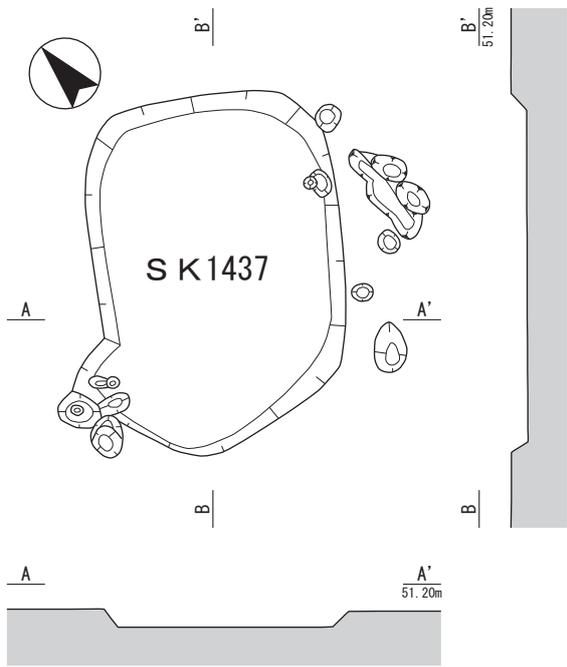


[SH1417・SK1427・1428・1429]

- 1 7.5YR2/1 黒色シルト～細粒粘砂土 (φ 3cm礫極微量含) (SK1427)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～中粒粘砂土 (7.5YR4/3 褐色ブロック斑状 60%含) (SK1427)
- 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト～細粒粘砂土 (SK1427)
- 4 7.5YR1.7/1 黒色シルト～細粒粘砂土 (SK1427)
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト～中粒粘砂土 (7.5YR4/3 褐色ブロック斑状 70%含) (SK1427)
- 6 10YR3/3 暗褐色シルト～中粒粘 (SK1427)
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒粘砂土 (SK1427)
- 8 7.5YR1.7/1 黒色シルト～細粒粘砂土 (10YR5/6 黄褐色土斑状 10%含) (SK1427)
- 9 10YR5/6 黄褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR3/1 黒褐色ブロック斑状 50%含) (SK1427)
- 10 7.5YR2/1 黒色シルト～細粒粘砂土 (φ 10cm礫微量含) (SK1429)
- 11 7.5YR3/1 黒褐色シルト～細粒粘砂土 (SK1429)
- 12 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 黄褐色ブロック斑状 50%含) (SK1429)
- 13 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (SK1429)
- 14 10YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 黄褐色ブロック 10%含) (SK1429)
- 15 10YR2/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (SK1428)
- 16 10YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状 20%含) (SK1428)
- 17 10YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (10YR5/4 にぶい黄褐色ブロック斑状 40%含) (SK1428)
- 18 10YR3/3 暗褐色シルト～粗粒粘砂土 (SH 1417)
- 19 10YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土 (SH 1417)
- 20 10YR2/2 黒褐色シルト～中粒粘砂土 (SH 1417)

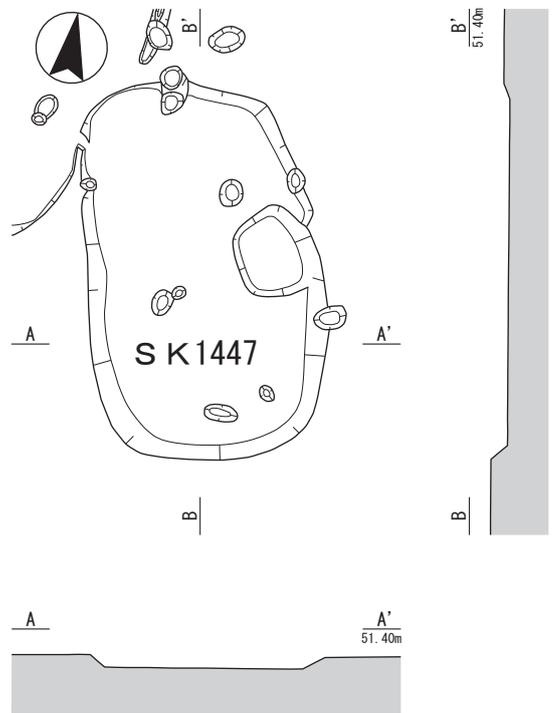
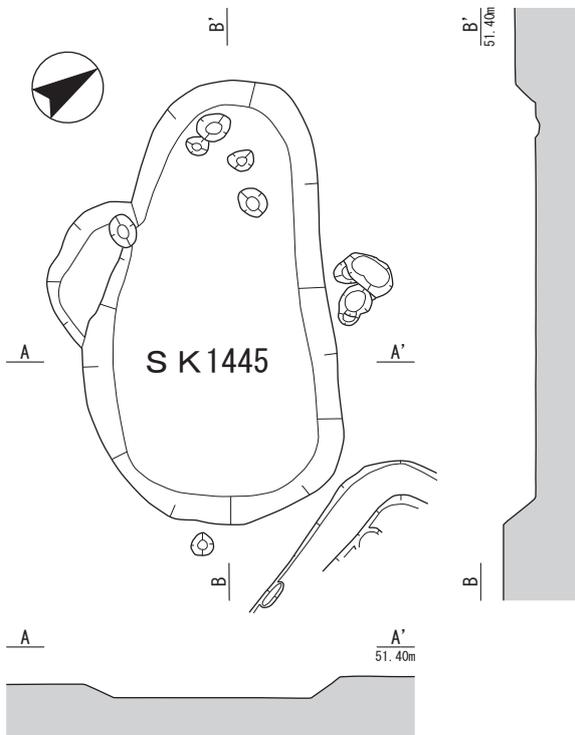


第 182 図 S K 1323 ・ 1427 ・ 1428 ・ 1429 ・ 1442 実測図 (1 : 10 ・ 1 : 40 ・ 1 : 80)

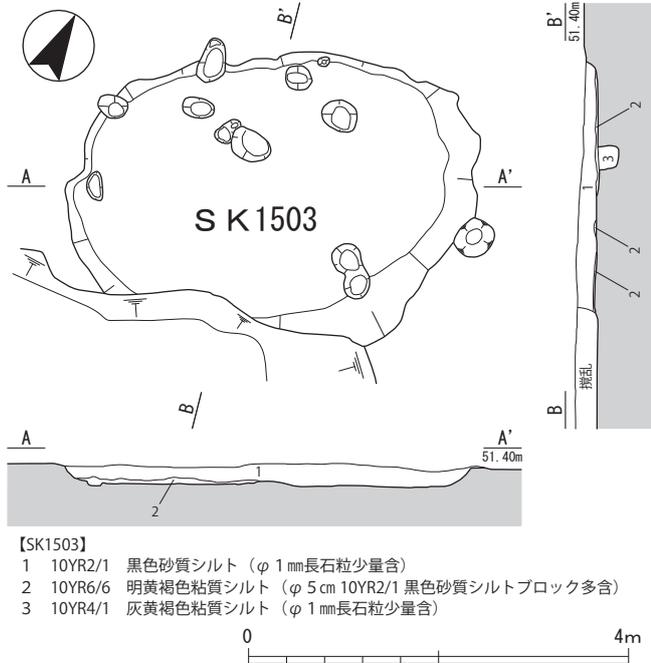
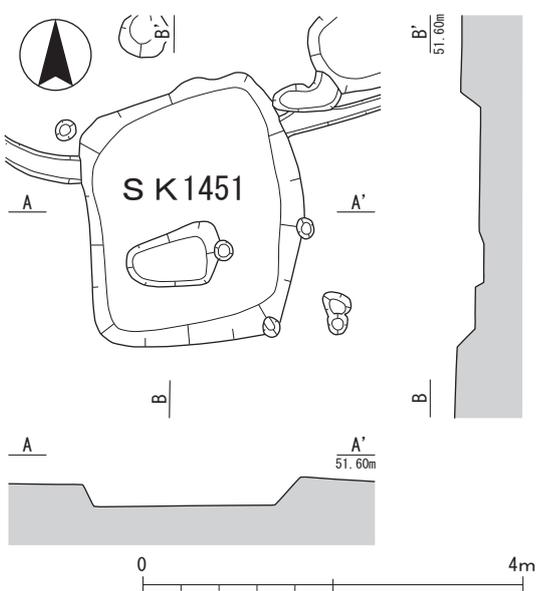
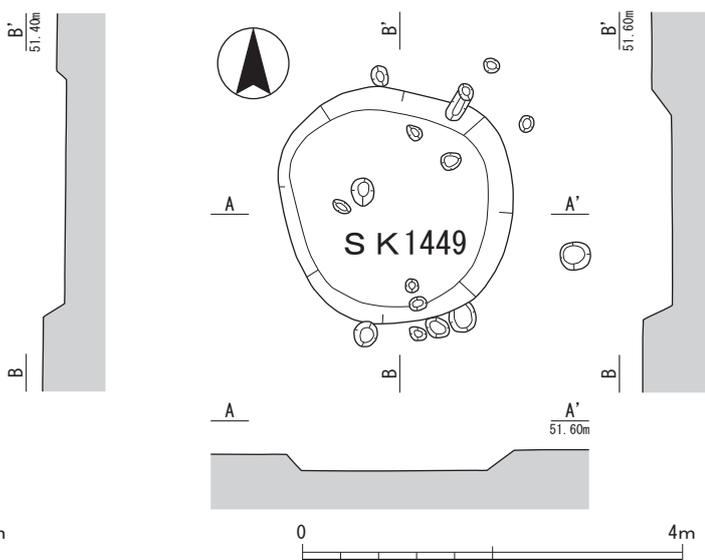
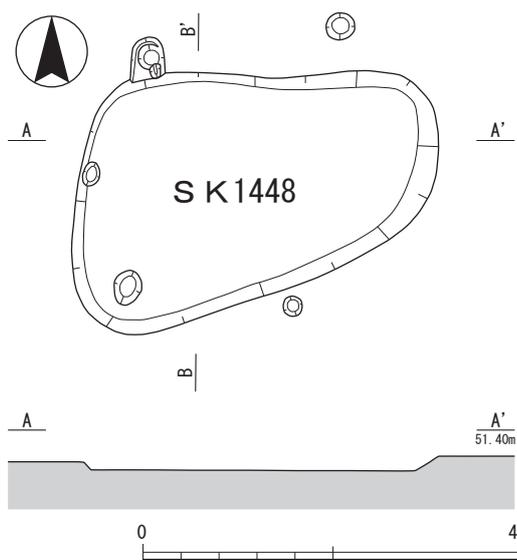


【SK1439】

- 1 7.5YR2/1 黒色シルト～細粒粘砂土
- 2 N3/ 暗灰色砂質土
- 3 2.5Y7/4 浅黄色粘質土 (7.5YR2/1 黒色シルト～細粒粘砂土含)
- 4 N2/ 黒色土

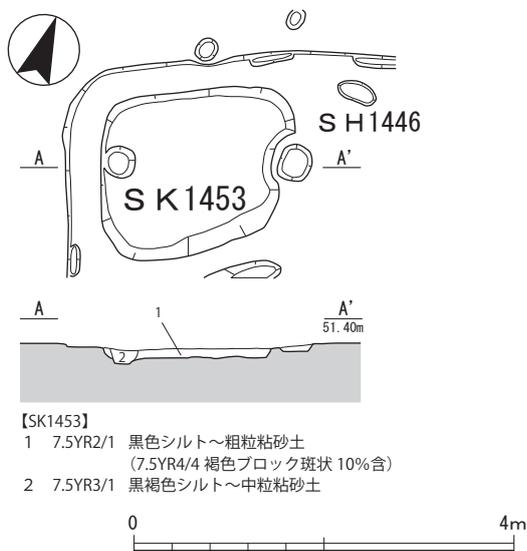


第 183 図 SK 1437・1439・1445・1447 実測図 (1 : 80)



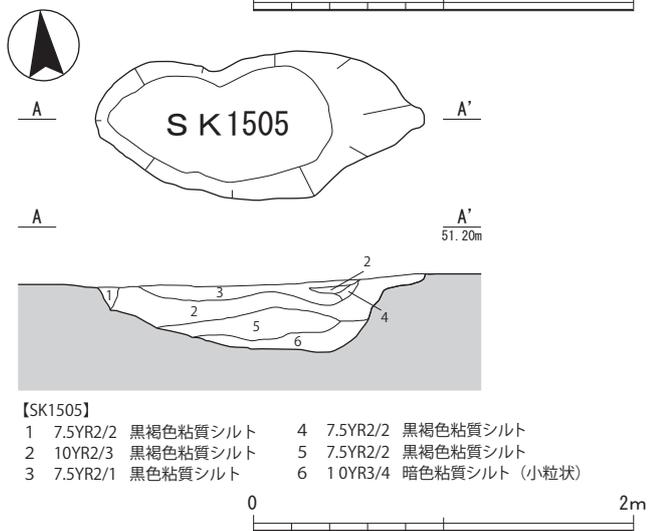
【SK1503】

- 1 10YR2/1 黒色砂質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト (φ 5cm 10YR2/1 黒色砂質シルトブロック多含)
- 3 10YR4/1 灰黄褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)



【SK1453】

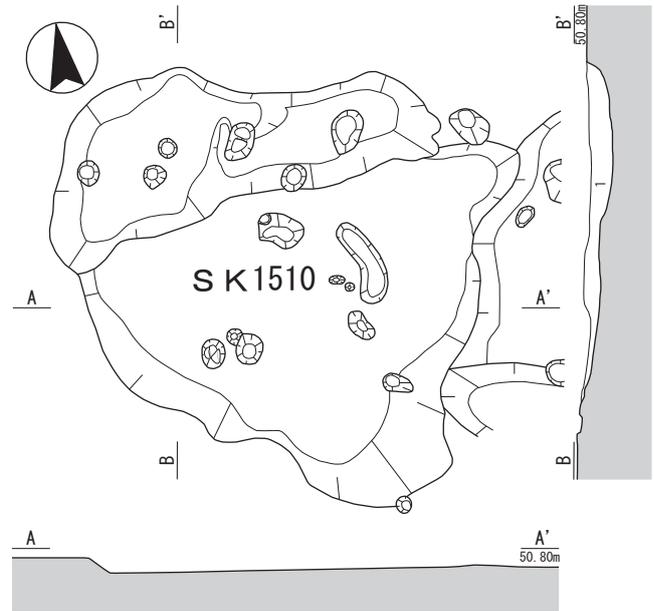
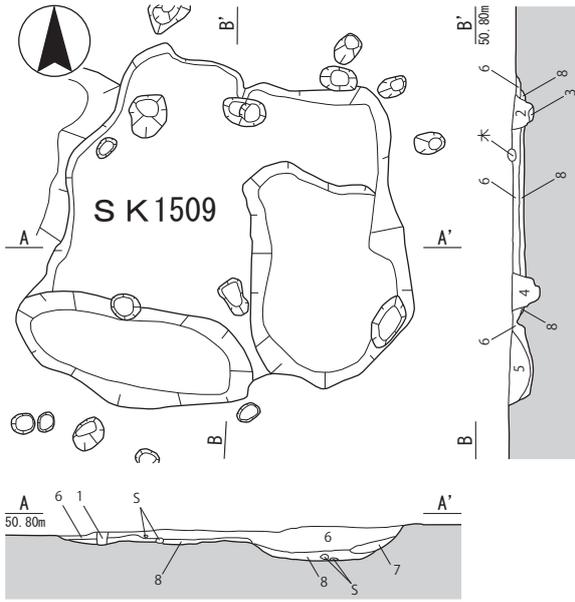
- 1 7.5YR2/1 黒色シルト～粗粒粘砂土 (7.5YR4/4 褐色ブロック斑状 10%含)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～中粒粘砂土



【SK1505】

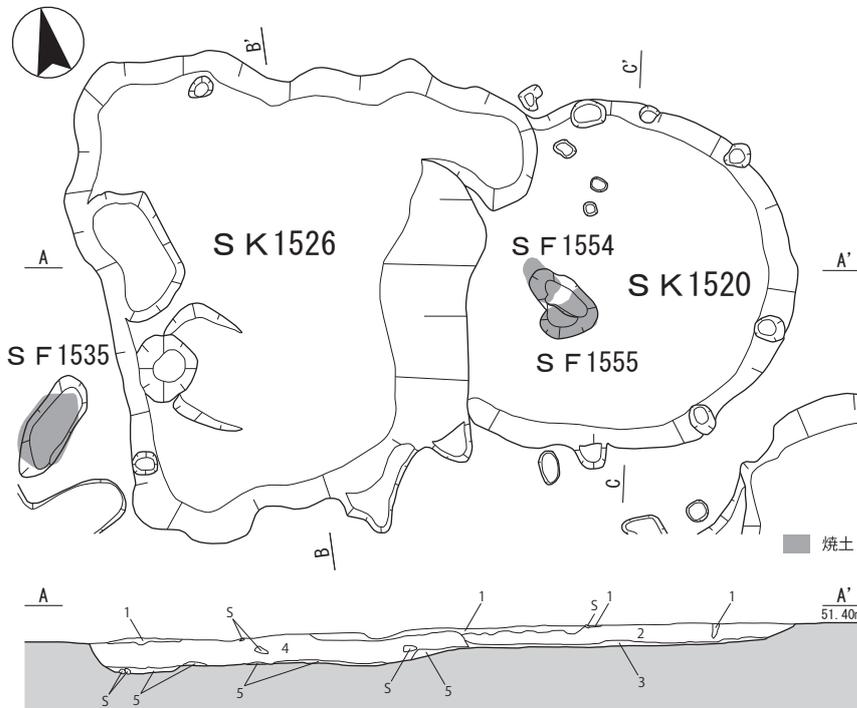
- 1 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質シルト
- 3 7.5YR2/1 黒色粘質シルト
- 4 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト
- 5 7.5YR2/2 黒褐色粘質シルト
- 6 10YR3/4 暗色粘質シルト (小粒状)

第 184 図 S K 1448 ・ 1449 ・ 1451 ・ 1453 ・ 1503 ・ 1505 実測図 (1 : 40 ・ 1 : 80)



- 【SK1509】
- 1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
 - 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2cmベースブロック 30%含)
 - 3 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト (φ 2cm 10YR6/1 褐灰色砂質シルト斑状含)
 - 4 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 3cmベースブロック 25%含)
 - 5 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 3cmベースブロック 35%含)
 - 6 10YR6/1 褐灰色粘質シルト (φ 2mm長石粒多含)
 - 7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 3cmベースブロック 40%含)
 - 8 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 3cmベースブロック 50%・φ 5mm炭化物少量含)

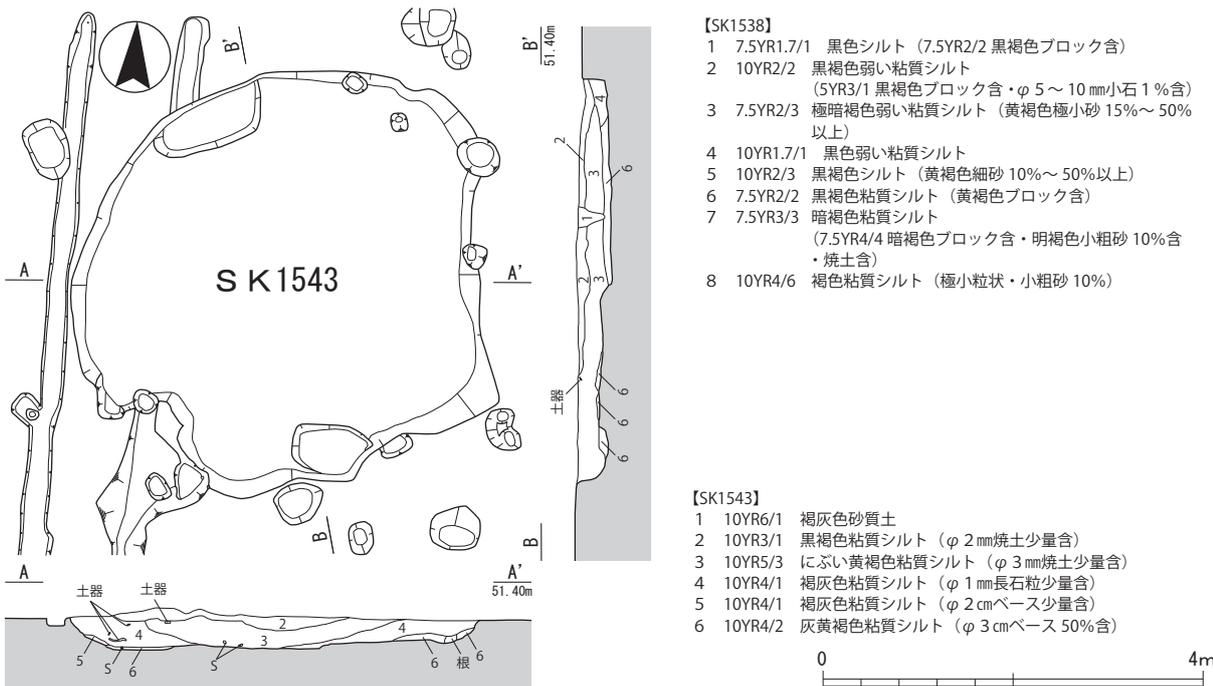
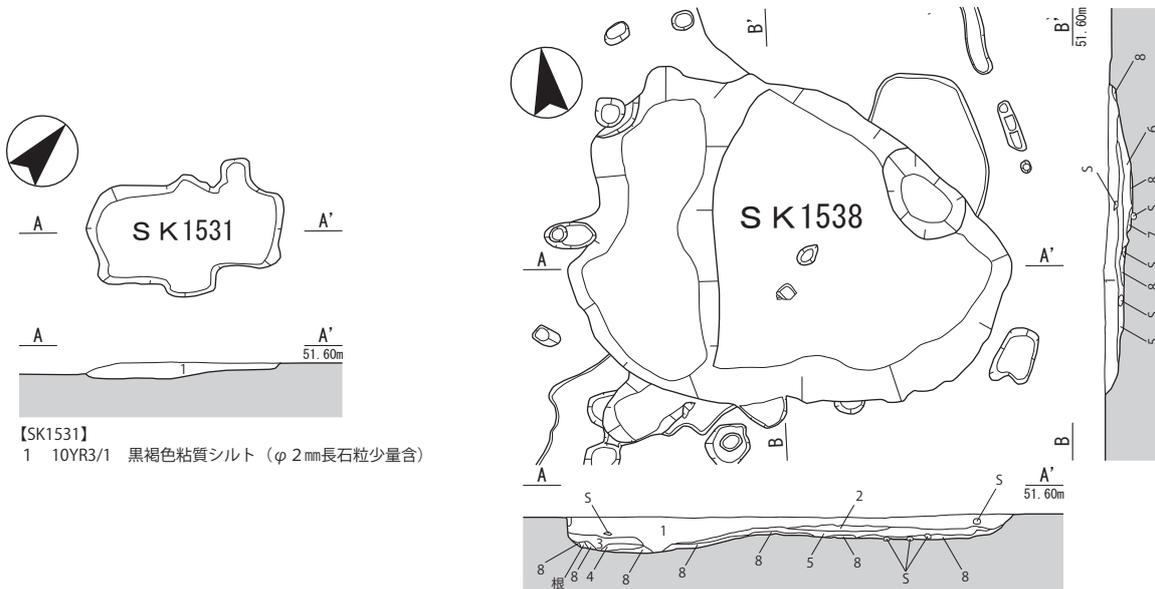
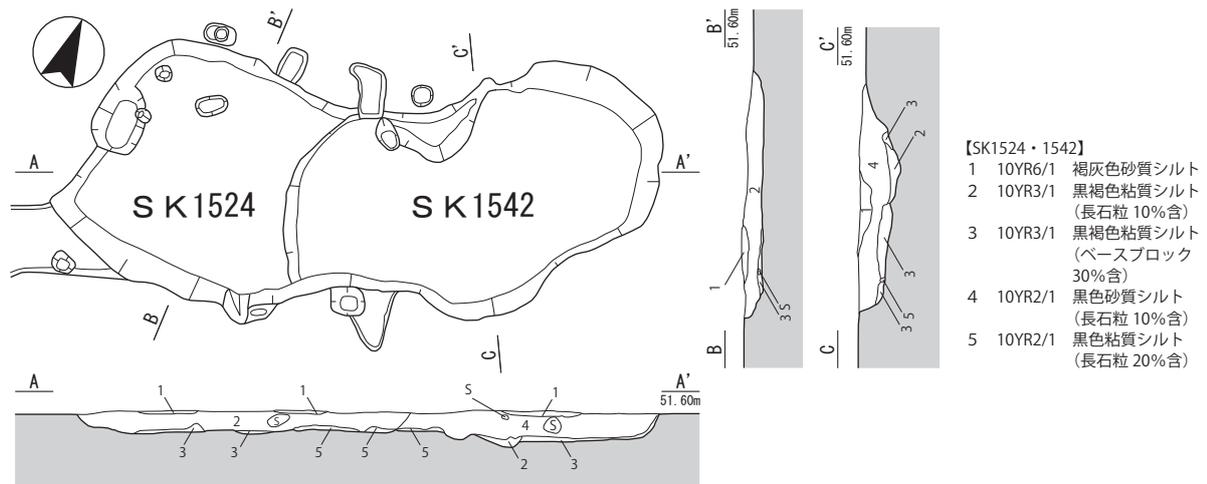
- 【SK1510】
- 1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト (φ 2mm炭化物少量含)



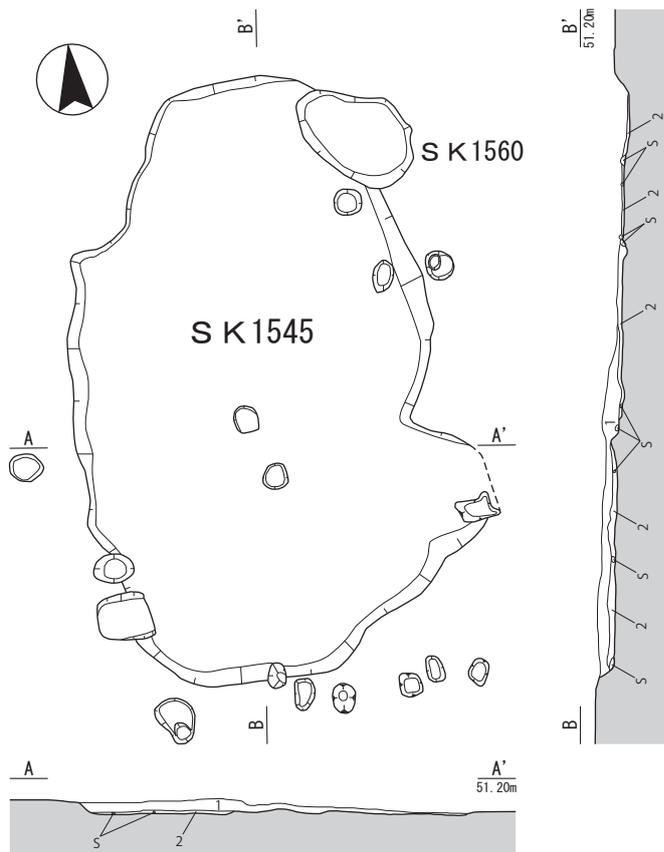
- 【SK1526・1520】
- 1 10YR6/1 褐灰色砂質シルト (φ 1cm礫少量含)
 - 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1mm長石粒 10%含・にぶい黄褐色粘質シルトブロック土少量含)
 - 3 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒 20%含)
 - 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (にぶい黄褐色粘質シルトブロック少量含)
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒 20%含)



第 185 図 SK 1509・1510・1520・1526 実測図 (1 : 80)

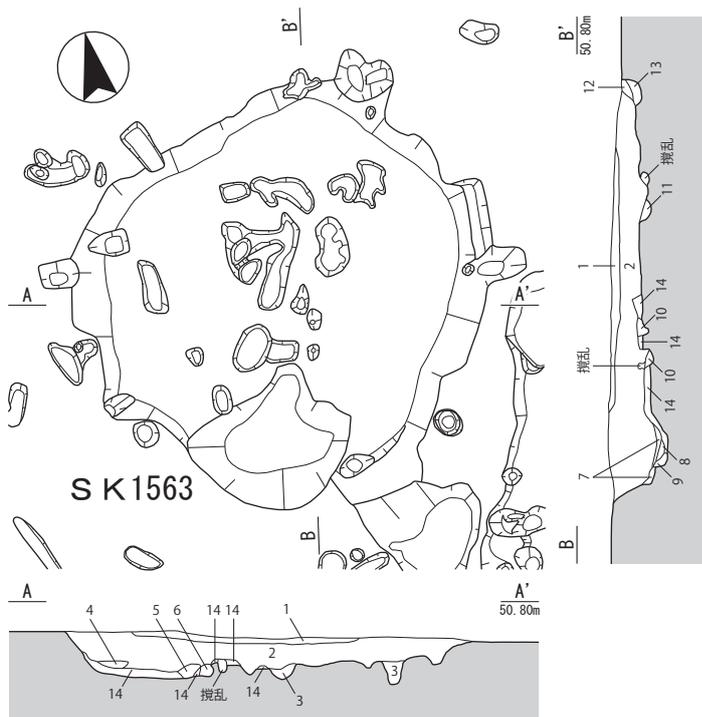


第186図 SK1524・1531・1538・1542・1543 実測図 (1:80)

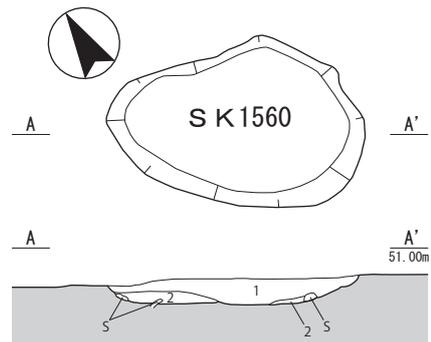


【SK1545】

- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
- 2 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (ベースブロック 60%含)

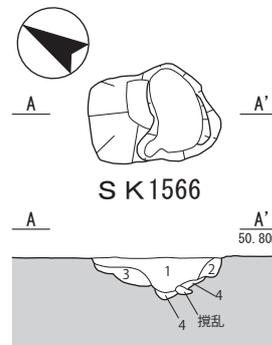


第 187 図 S K 1545・1560・1563・1566 実測図 (1 : 40・1 : 80)



【SK1560】

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 3cm礫含)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 5cm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック含)



【SK1566】

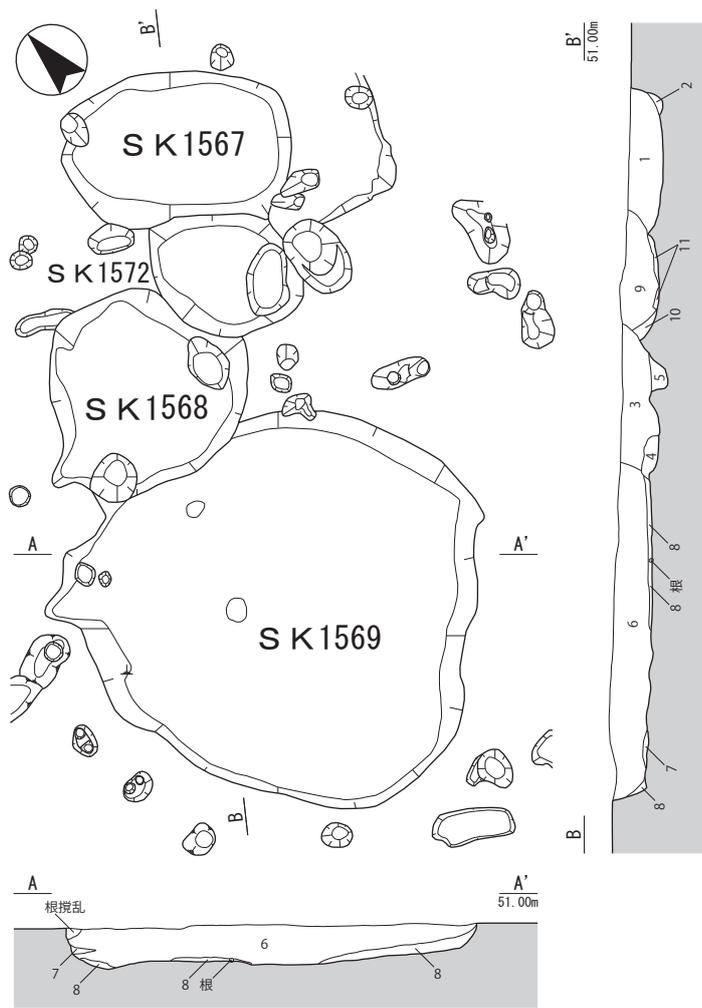
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
- 2 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 2cm 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック 25%含)
- 3 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 2cm 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック 30%含)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cm 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック斑状含)



【SK1563】

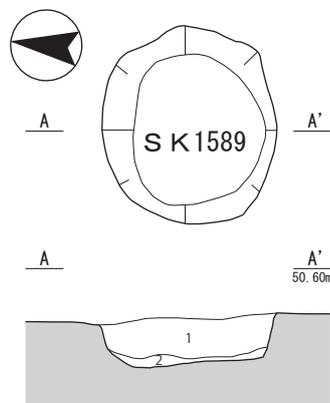
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1cm焼土ブロック含)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 2mm長石粒 5%含)
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2mm長石粒 30%含)
- 4 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cmベースブロック 40%含)
- 5 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
- 6 10YR5/1 褐灰色砂質シルト (φ 3cmベースブロック含)
- 7 2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルト
- 8 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (ベースブロック斑状含)
- 9 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト (長石粒斑状含)
- 10 10YR6/1 褐灰色砂質シルト
- 11 10YR6/1 褐灰色粘質シルト (φ 1mm長石粒 30%含)
- 12 10YR6/1 褐灰色粘質シルト (φ 3cmベースブロック少量含)
- 13 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (ベースブロック斑状含)
- 14 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1mmベースブロック 20%含)





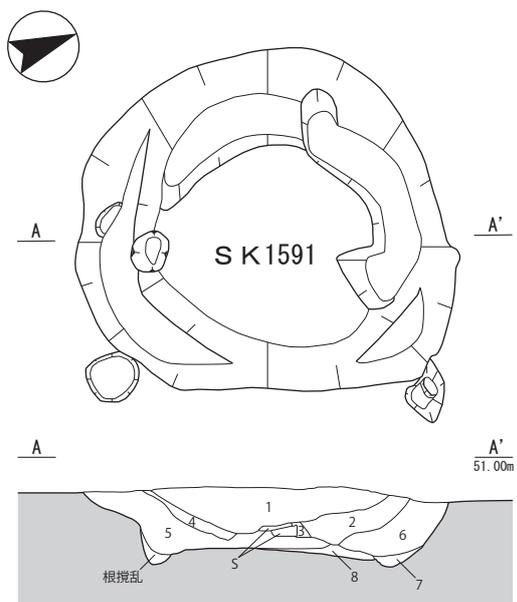
【SK1567・1568・1569・1572】

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 1mm長石粒 10%含)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (ベースブロック斑状含)
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト (φ 1mm長石粒 5%含)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (ベースブロック少量含)
- 5 10YR2/1 黒色粘質シルト (φ 1cmベースブロック 10%含)
- 6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 7 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (φ 3cmベースブロック含)
- 8 10YR7/4 にぶい黄橙色 (10YR3/1 黒褐色粘質シルト土 50%含)
- 9 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 3cm 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質シルトブロック 5%含)
- 10 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 11 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト (10YR4/1 褐灰色粘質シルトブロック斑状含)



【SK1589】

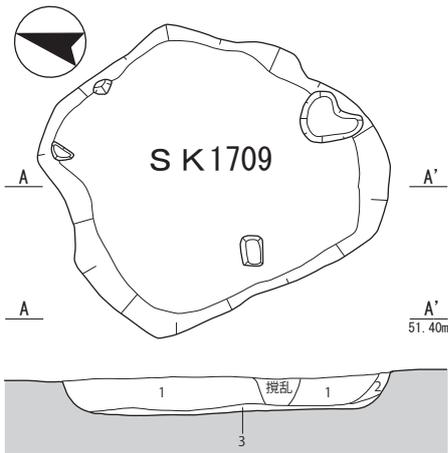
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 5mm長石粒少量含)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 2cmベースブロック 20%含)



【SK1591】

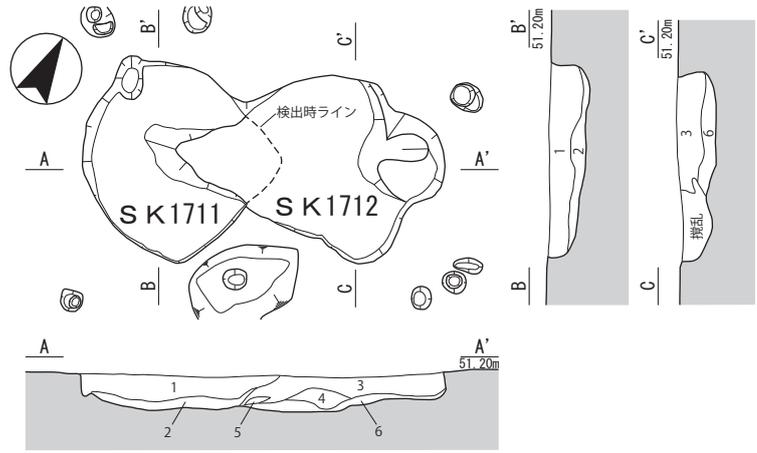
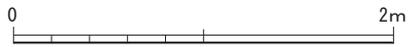
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2cm黒褐色粘質シルトブロック・ベースブロック 30%含)
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 5cmベースブロック含)
- 3 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質シルト (φ 5mm 10YR3/1 黒褐色粘質シルトブロック斑状含)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 5 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 3cmベースブロック・φ 1cm 10YR3/1 黒褐色ブロック 30%含)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 2cmベースブロック 30%含)
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 1cm灰黄褐色粘質シルトブロック 20%含)
- 8 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質シルト

第 188 図 S K 1567・1568・1569・1572・1589・1591 実測図 (1 : 40・1 : 80)



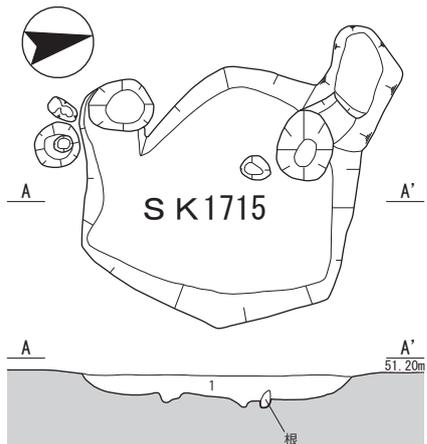
【SK1709】

- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト (φ 1mm長石粒 5%含)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cmベースブロック 10%含)
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト (φ 2cmベースブロック 30%含)



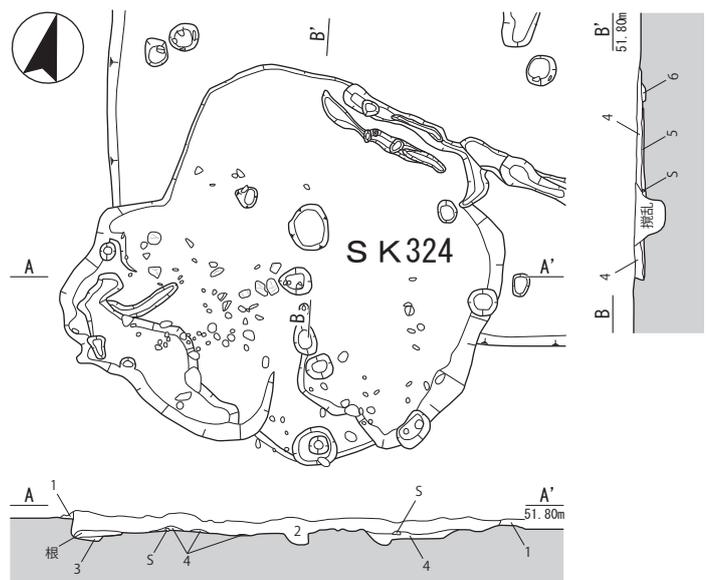
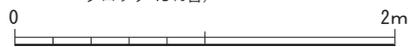
【SK1711・1712】

- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 1mm長石粒少量含)
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 3cmベースブロック 30%含)
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 4 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (φ 2cmベースブロック 5%含)
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ 3cmベースブロック 40%含)
- 6 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 1cmベースブロック斑状含)



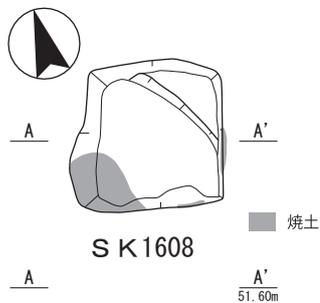
【SK1715】

- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (φ 3cmベースブロック 15%含)



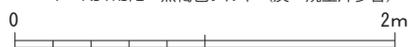
【SK324】

- 1 10YR3/2 黒褐色 (10YR2/1 黒色少量混) 粗砂含 (黒ボク)
- 2 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑状少量混) (φ 10mm~1mm位の石含 粘性有)
- 3 10YR2/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色多混) 粗砂含 粘性有
- 4 10YR2/1 黒色砂質シルト
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 5mm 10YR2/1 黒色砂質シルト斑状含)
- 6 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルト (φ 2cm 10YR4/1 褐灰色砂質シルトブロック少量含)

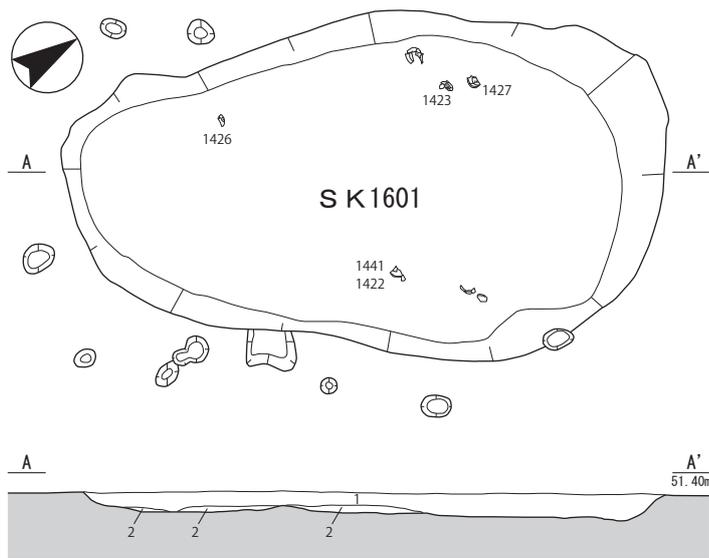


【SB1608】

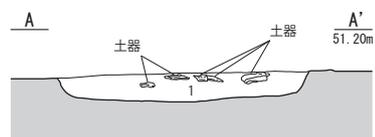
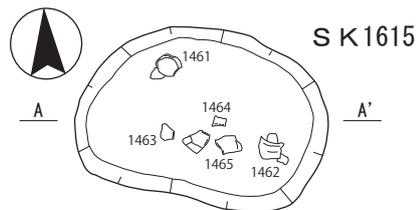
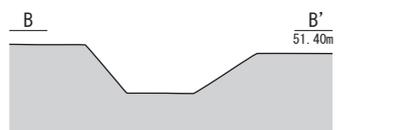
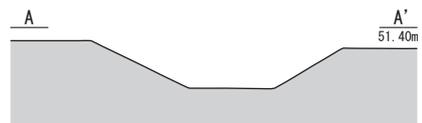
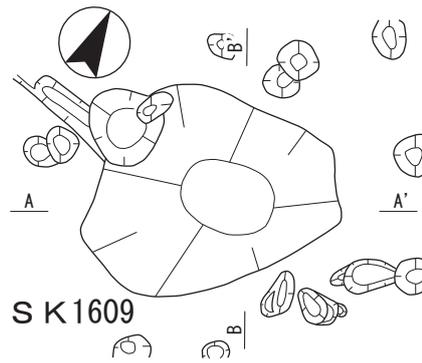
- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト (炭・焼土片多含)



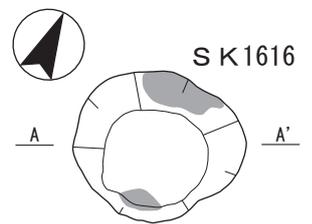
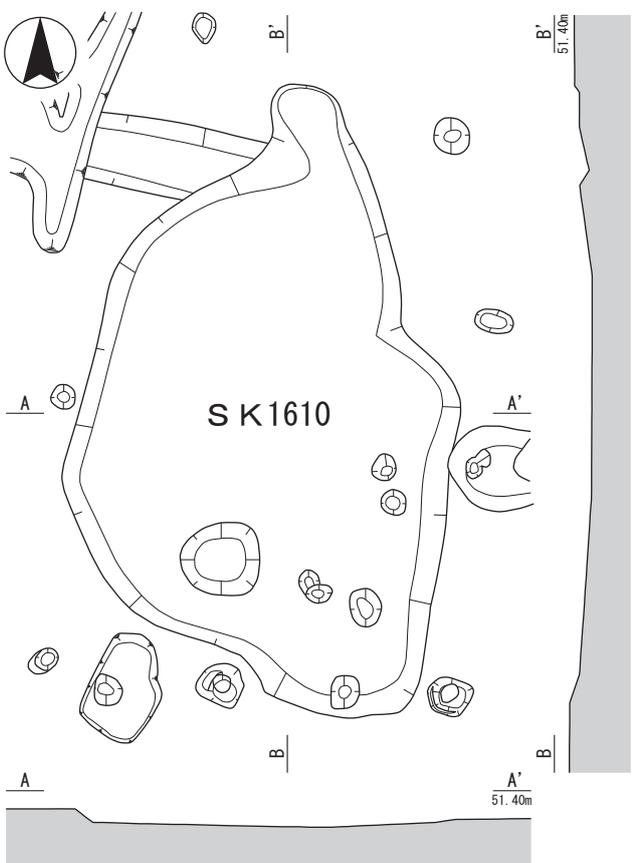
第 189 図 SK 324・1608・1709・1711・1712・1715 実測図 (1 : 40・1 : 80)



【SK1601】
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色（ベースブロック 50%含）
 2 10YR3/1 黒褐色シルト（炭・土器多含）



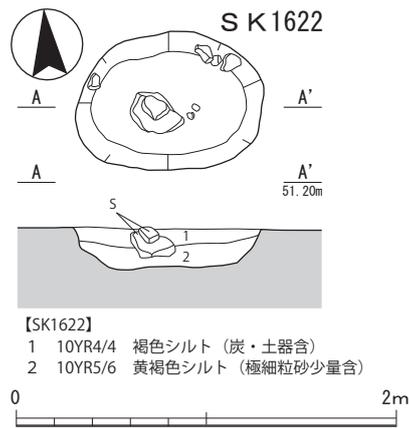
【SK1615】
 1 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂含シルト（炭・焼土少量含）



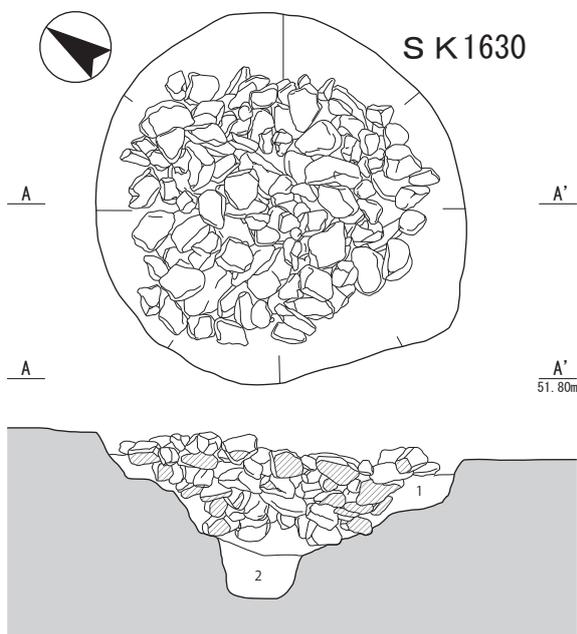
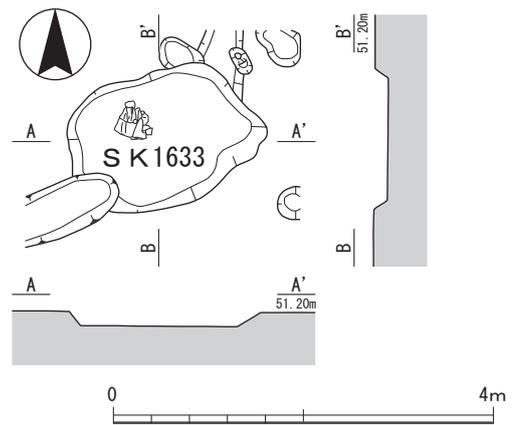
【SK1616】
 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト（炭・焼土多含）



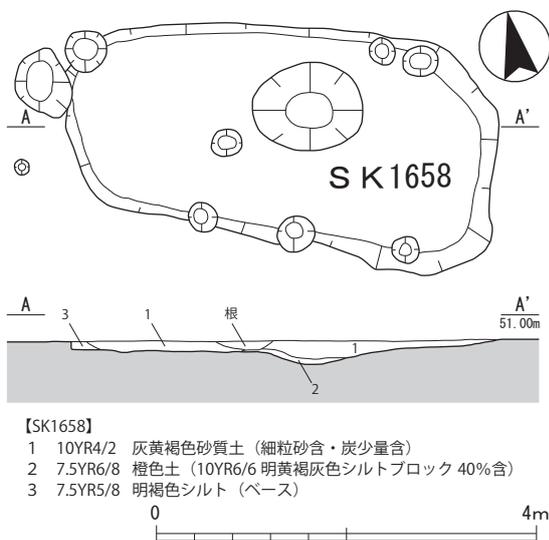
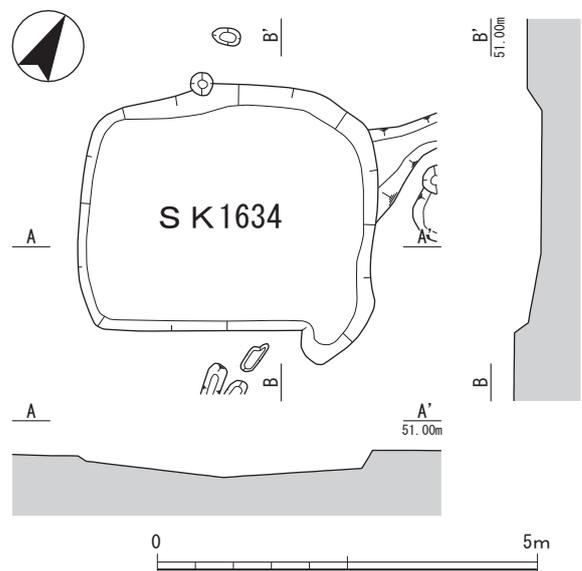
第 190 図 S K 1601・1609・1610・1615・1616 実測図（1：40・1：80・1：100）



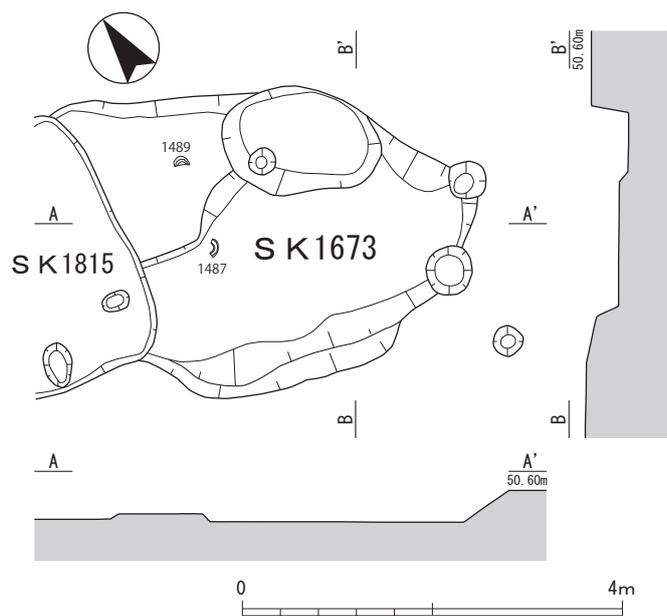
- 【SK1622】
 1 10YR4/4 褐色シルト（炭・土器含）
 2 10YR5/6 黄褐色シルト（極細粒砂少量含）



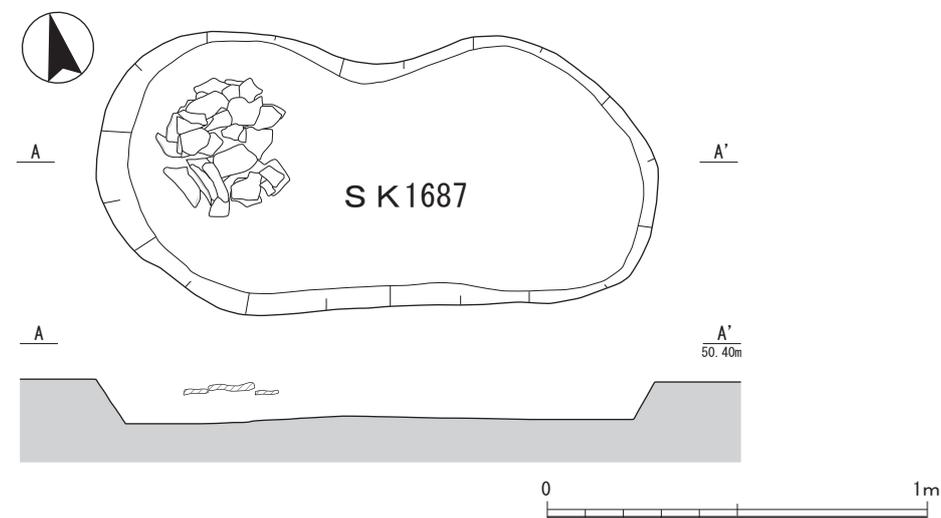
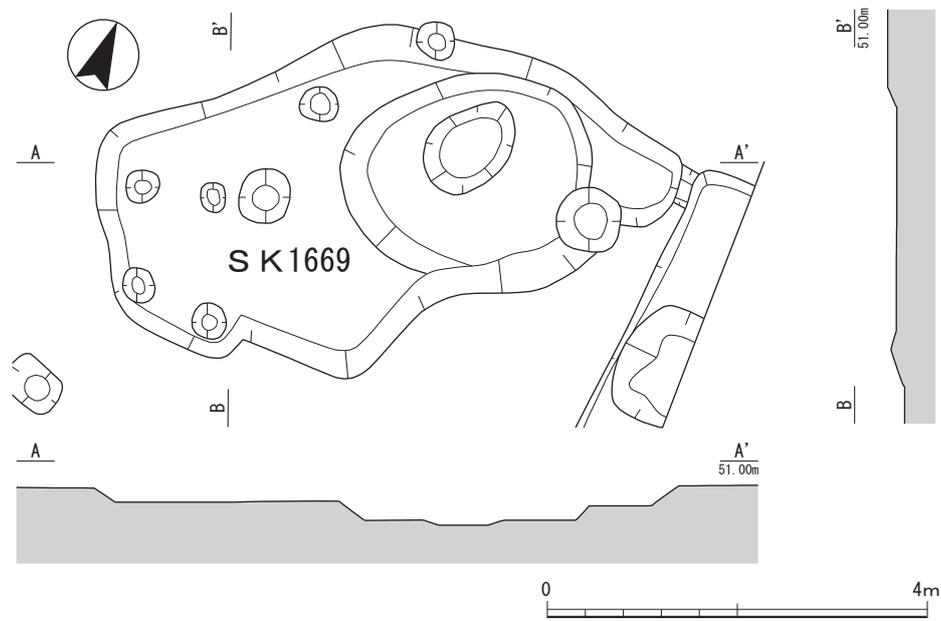
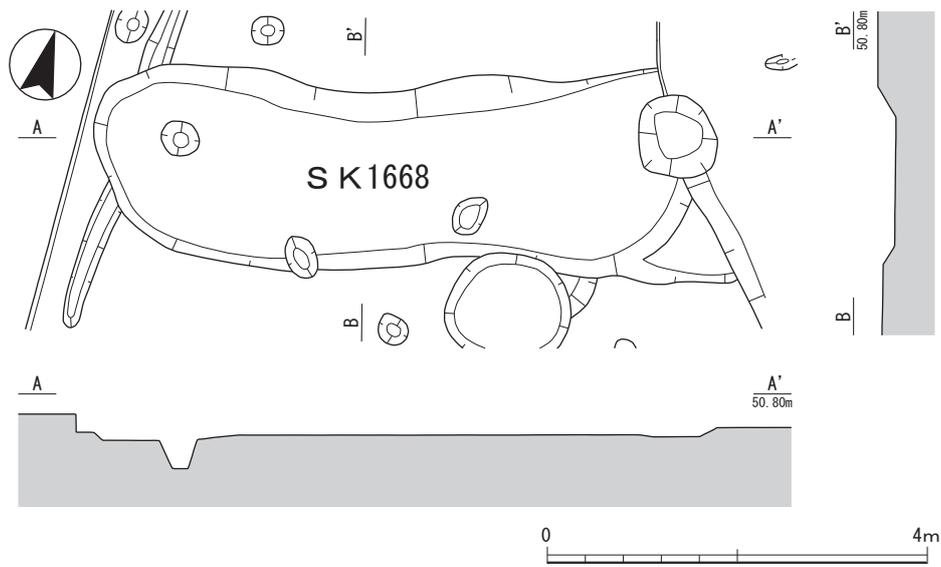
- 【SK1630】
 1 オリーブ褐色粗砂混シルト
 2 黄褐色極細粒砂



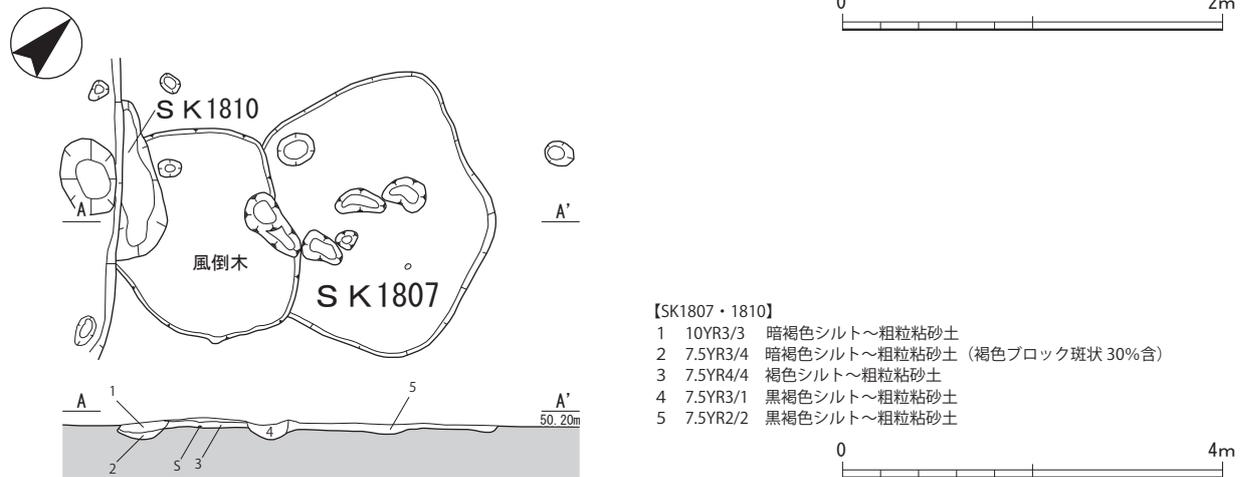
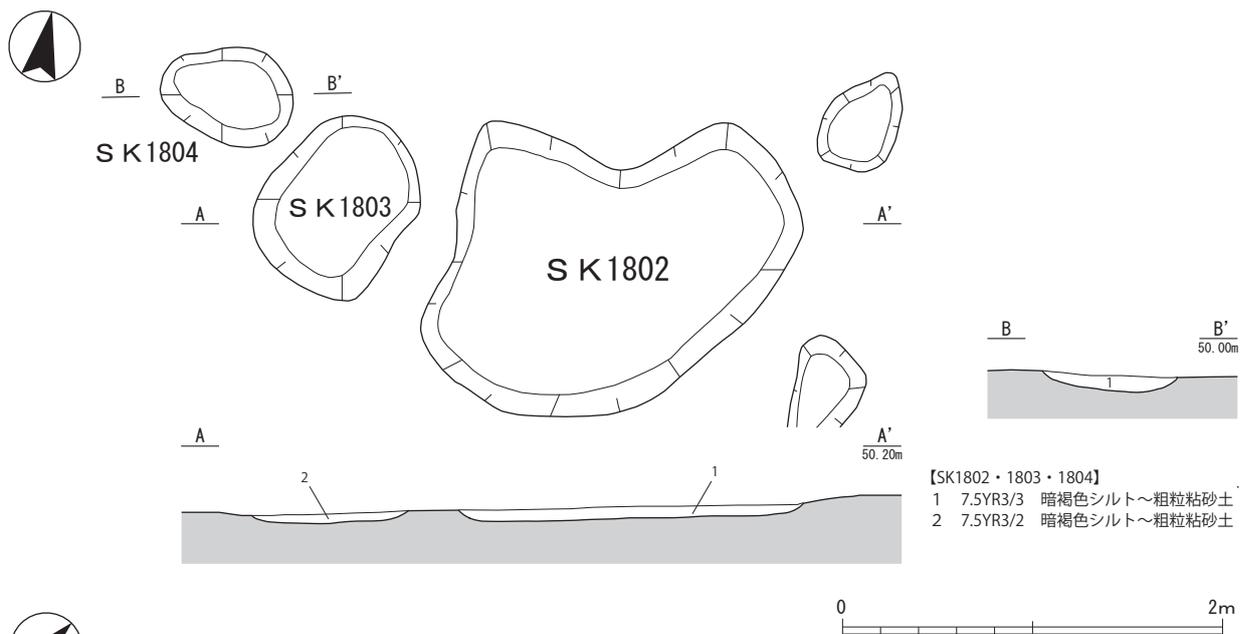
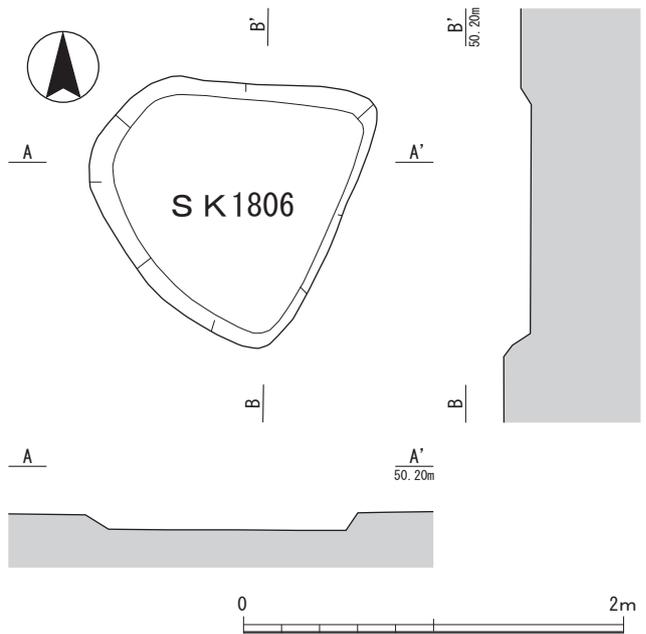
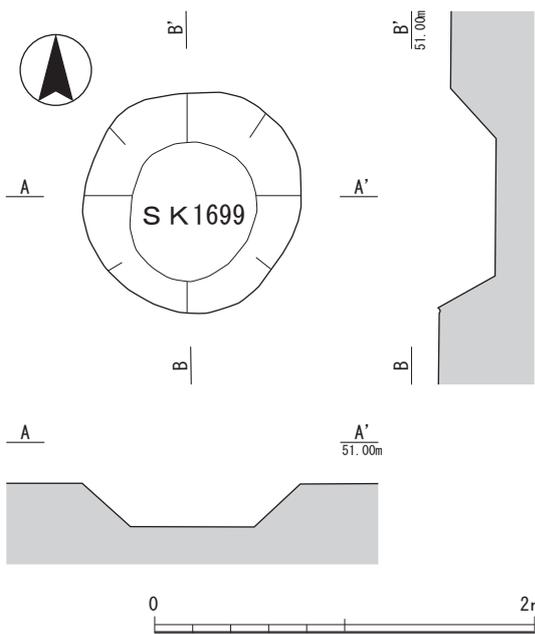
- 【SK1658】
 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質土（細粒砂含・炭少量含）
 2 7.5YR6/8 橙色土（10YR6/6 明黄褐灰色シルトブロック 40%含）
 3 7.5YR5/8 明褐色シルト（ベース）



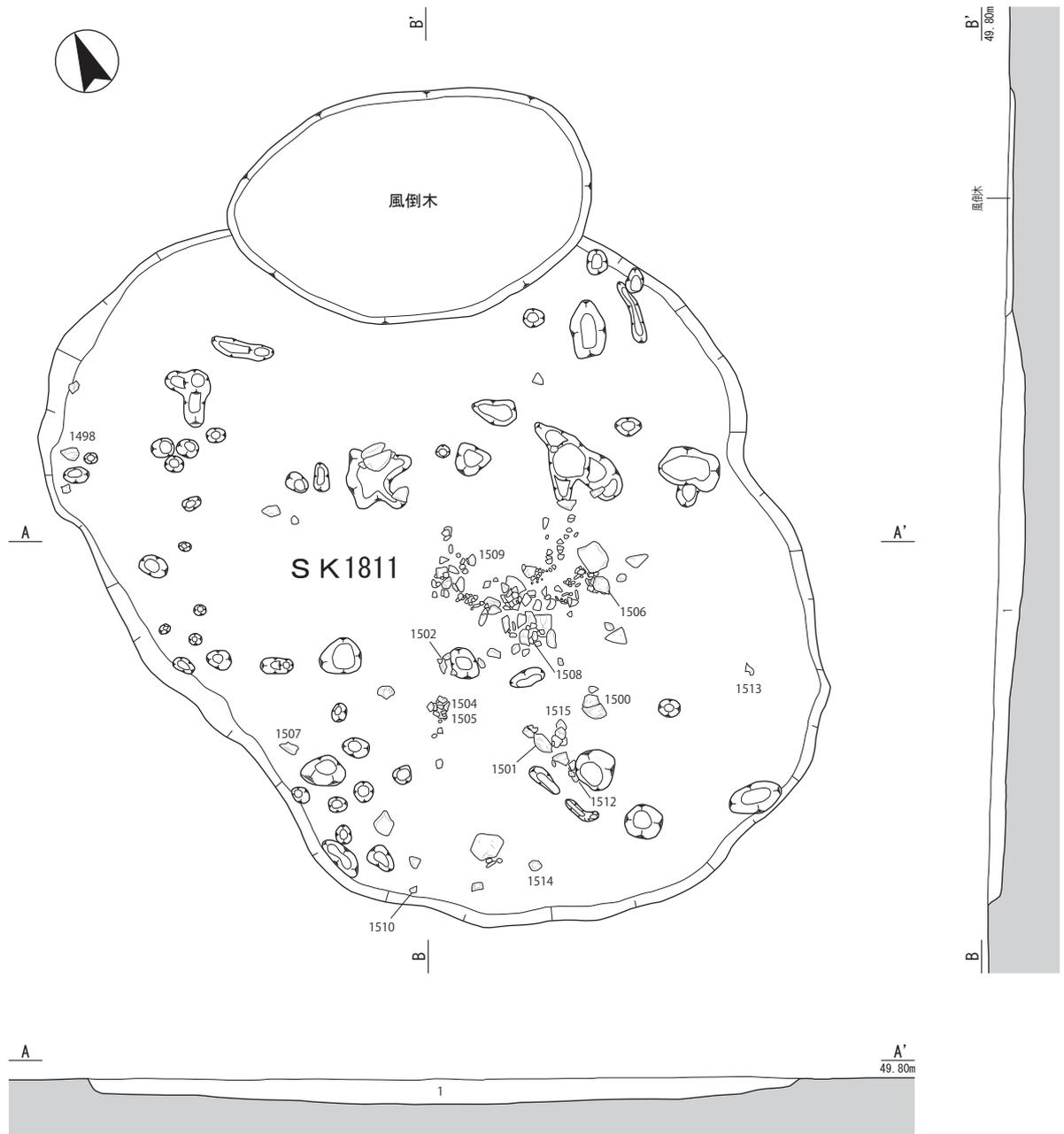
第 191 図 S K 1622・1630・1633・1634・1658・1673 実測図（1：20・1：40・1：80・1：100）



第 192 図 S K 1668・1669・1687 実測図 (1 : 20・1 : 80)



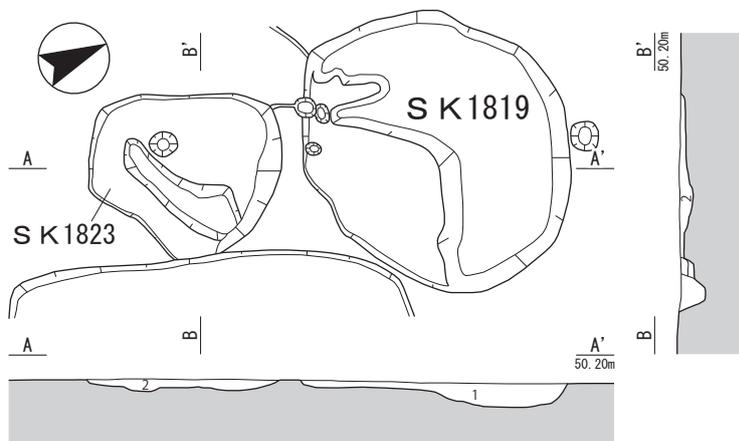
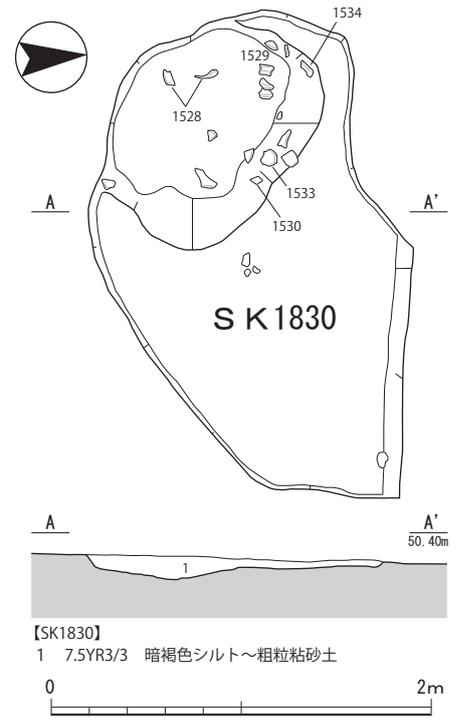
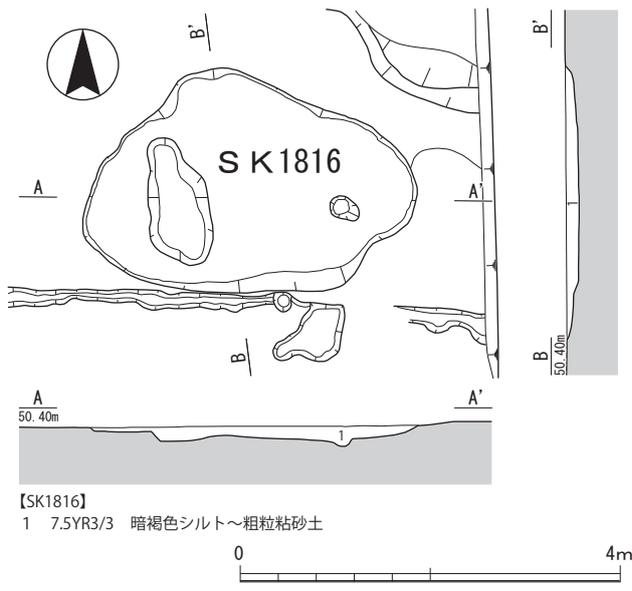
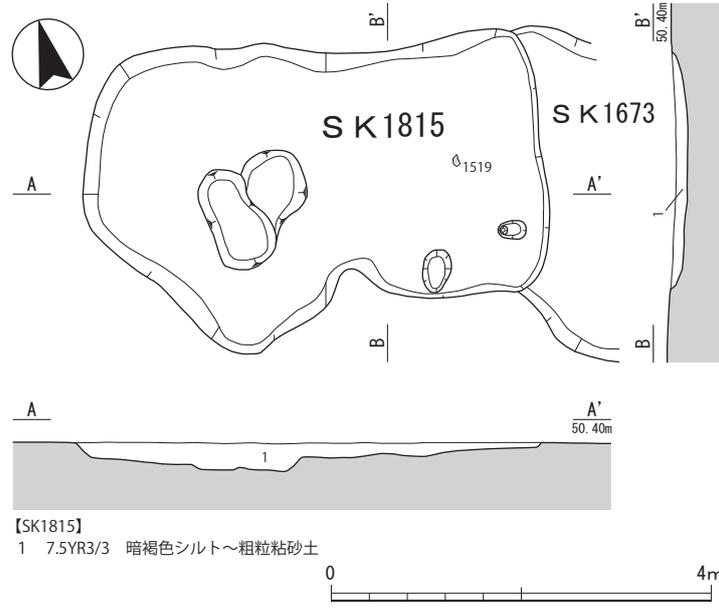
第 193 図 S K 1699・1802・1803・1804・1806・1807・1810 実測図 (1 : 40・1 : 80)



【SK1811】
 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト～粗粒粘砂土



第 194 図 SK 1811 実測図 (1 : 40)



第195図 SK1815・1816・1819・1823・1830実測図(1:40・1:80)

4 中世

中世の墓を4基検出した。4基の内、後述するS X 1039とS X 1040の2基は近接するが、他の2基はそれぞれ偏ることなく単独で存在している。

ア 墓

S X 1039 (第196図) 第4次調査区の南東側で検出した中世墓である。形状は長方形を呈し、長辺0.85 m×短辺0.65 m、概ね垂直に掘削されており、残存の深さは12cmである。埋土には炭化物や焼土が多く含まれる。

出土遺物には、土師器片がある。

S X 1040 (第196図) 第4次調査区の南東側で検出した中世墓である。形状は長方形を呈し、長辺0.75 m×短辺0.5 m、概ね垂直に掘削されており、残存の深さは11cmである。埋土には炭化物や焼土が含まれる。

出土遺物はない。

S X 1330 (第196図) 第9次調査区の東側で検出した中世墓である。形状は長方形を呈し、長辺1.2 m×短辺0.65 m、概ね垂直に掘削されており、残存の深さは10cmである。埋土には、炭化物や細かい礫が多く含まれる。

出土遺物には、土師器片とU F (1588)がある。

S X 1828 (第196図) 第13次調査区の東端で検出した中世墓である。形状はやや歪な長方形を呈し、長径1.2 m×短径0.9 m、概ね垂直に掘削されており、残存の深さは15cmである。床面や壁面の一部に被熱痕が認められ、埋土に少量の炭化物が含まれる。形状や被熱痕の状況から、中世墓と判断した。

出土遺物には、須恵器杯蓋、甕片があるが、古代の竪穴建物S H 1674と重複しているため、混入したのであろう。

5 時期不明

各調査区で複数確認した。遺物が含まれていないものが多く、時期は不明である。しかし、埋土に焼土や炭化物が含まれたりするものについては、形状から判断すると、縄文時代の煙道付炉穴の可能性も考えられる。

ア 土坑

S K 1031 (第197図) 第4次調査区の中央北側で検出した土坑である。形状は隅丸の長方形を呈する。規模は、長辺3.7 m×短辺2.6 m、残存の深さは18cmである。

出土遺物には、石鏃(1582)がある。

S K 1033 (第197図) 第4次調査区の北西側で検出した土坑である。形状は隅丸の方形状を呈する。規模は、長辺1.0 m×短辺0.8 m、残存の深さは21cmである。

出土遺物はない。

S K 1035 (第197図) 第4次調査区の北西側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は、長径1.4 m×短径0.85 m、残存の深さは39cmである。二段に掘削され、南側が深く掘り窪められている。

出土遺物はない。

S K 1111 (第198図) 第5次調査北区の中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は、長径0.7 m×短径0.55 m、残存の深さは12cmである。

出土遺物はない。

S K 1117 (第198図) 第5次調査北区中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は、長径0.9 m×短径0.6 m、残存の深さは7cmである。

出土遺物はない。

S K 1119 (第198図) 第5次調査北区の中央で検出した土坑である。形状は細長い楕円形状を呈する。規模は、長径1.8 m×短径0.7 m、残存の深さは15cmである。

出土遺物はない。

S K 1124 (第199図) 第5次調査北区の中央で検出した土坑である。形状は隅丸の方形状を呈する。規模は、長径0.75 m×短径0.6 mである。概ね垂直に掘削されており、残存の深さは17cmである。

出土遺物はない。

S K 1127 (第198図) 第5次調査北区の東側で検出した土坑である。形状は細長い楕円形状を呈する。規模は、長径1.1 m×短径0.45 m、残存の深さは11cmである。

出土遺物はない。

S K 1128 (第 199 図) 第 5 次調査北区の東側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は、長径 1.5 m × 短径 0.8 m、残存の深さは 15cm である。

出土遺物はない。

S K 1174 (第 199 図) 第 5 次調査南区の北側で検出した土坑である。形状は長方形を呈する。規模は長辺 1.5 m × 短辺 0.55 m である、概ね垂直に掘削されており、残存の深さは 36cm である。埋土に焼土と炭化物が若干混じる。

出土遺物はない。

S K 1176 (第 200 図) 第 5 次調査南区の中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は長径 2.2 m × 短径 1.1 m、概ね垂直に掘削され、残存の深さは 63cm と深い。埋土には焼土や炭化物が含まれる。

出土遺物はない。

S K 1177 (第 199 図) 第 5 次調査南区の中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は長径 1.1 m × 短径 0.7 m、残存の深さは 21cm である。

出土遺物はない。

S K 1182 (第 200 図) 第 5 次調査南区の北側で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は長径 1.2 m × 短径 0.7 m。概ね垂直に掘削され、残存の深さは 25cm である。埋土には焼土や炭化物が含まれる。

出土遺物はない。

S K 1185 (第 200 図) 第 5 次調査南区の中央で検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は長径 1.0 m × 短径 0.6 m、残存の深さは 20cm である。二段に掘削され、西側が深くなる。埋土には焼土や炭化物が含まれる。

出土遺物はない。

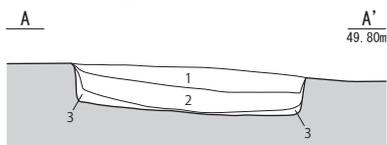
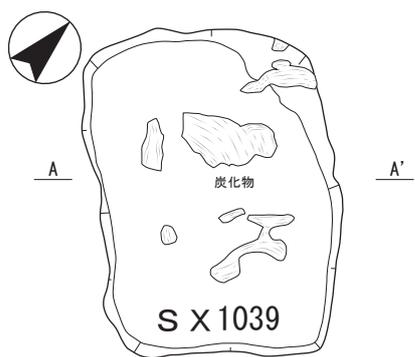
S K 1334 (第 200 図) 第 9 次調査区の東側で検出した土坑である。形状は円形状を呈する。規模は長径 0.7 m × 短径 0.6 m、残存の深さは 10cm である。二段に掘削され、東側が深くなる。埋土には焼土や炭化物が含まれる。

出土遺物はない。

S K 1588 (第 200 図) 第 11 次調査区の北東側で

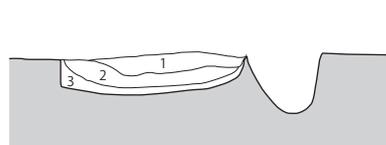
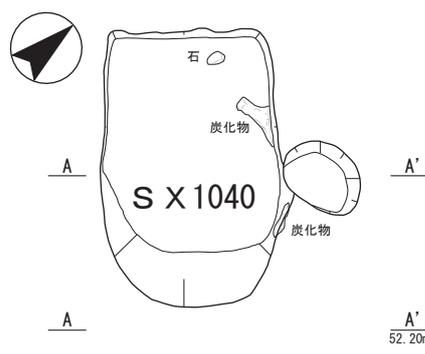
検出した土坑である。形状は楕円形状を呈する。規模は長径 1.1 m × 短径 0.9 m、残存の深さは 15cm である。埋土には炭化物が含まれる。

出土遺物はない。



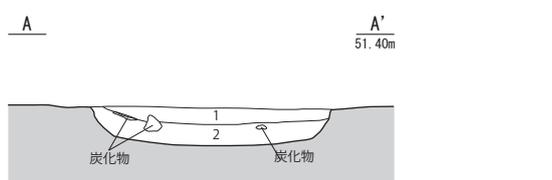
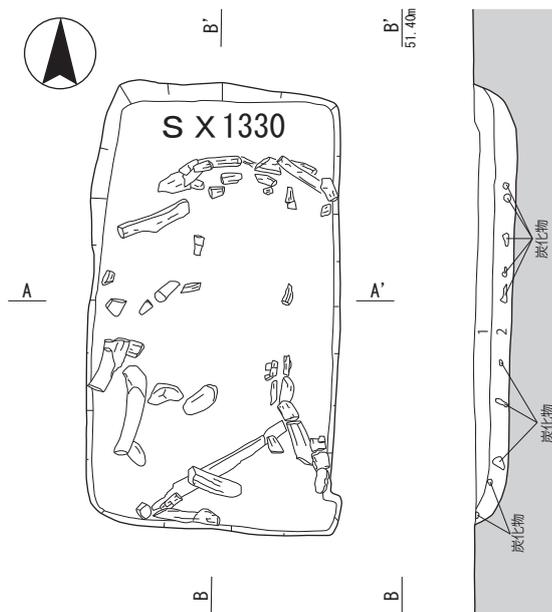
【SX1039】

- 1 7.5YR4/1 褐灰色粘質砂 (炭・焼土多量含)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色粘質砂 (炭・焼土多量含)
- 3 7.5YR4/1 褐灰色粘質砂 (炭・焼土少量含)



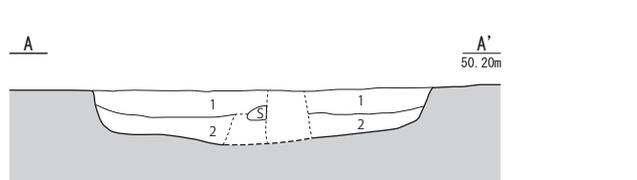
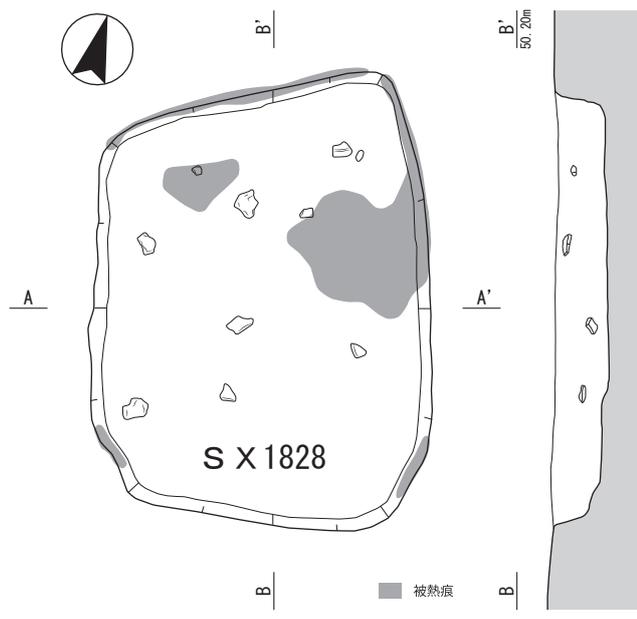
【SX1040】

- 1 7.5YR4/1 褐灰色粘質砂 (炭・焼土少量含)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色粘質砂 (炭・焼土多量含)
- 3 10YR7/6 明黄褐色粘質土 (ベース)



【SX1330】

- 1 10YR4/4 暗褐色シルト含極細砂 (炭化物・黄褐色シルト小ブロック・細礫少量含)
- 2 10YR3/3 黒褐色細砂含極細砂 (炭化物多含・黄褐色シルトブロック・細礫少量含)

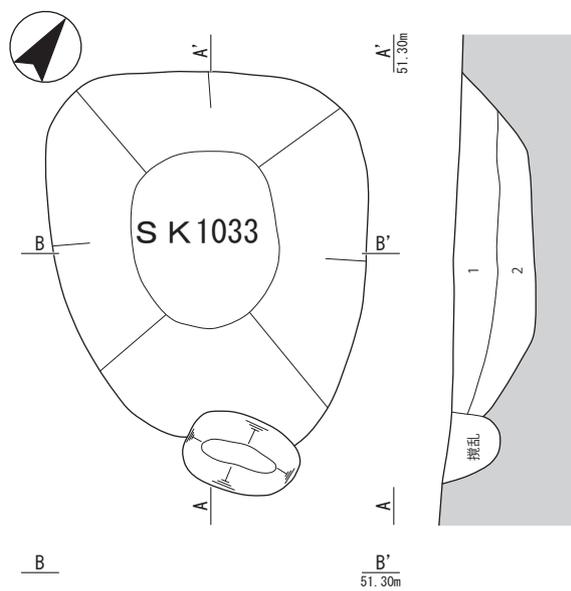
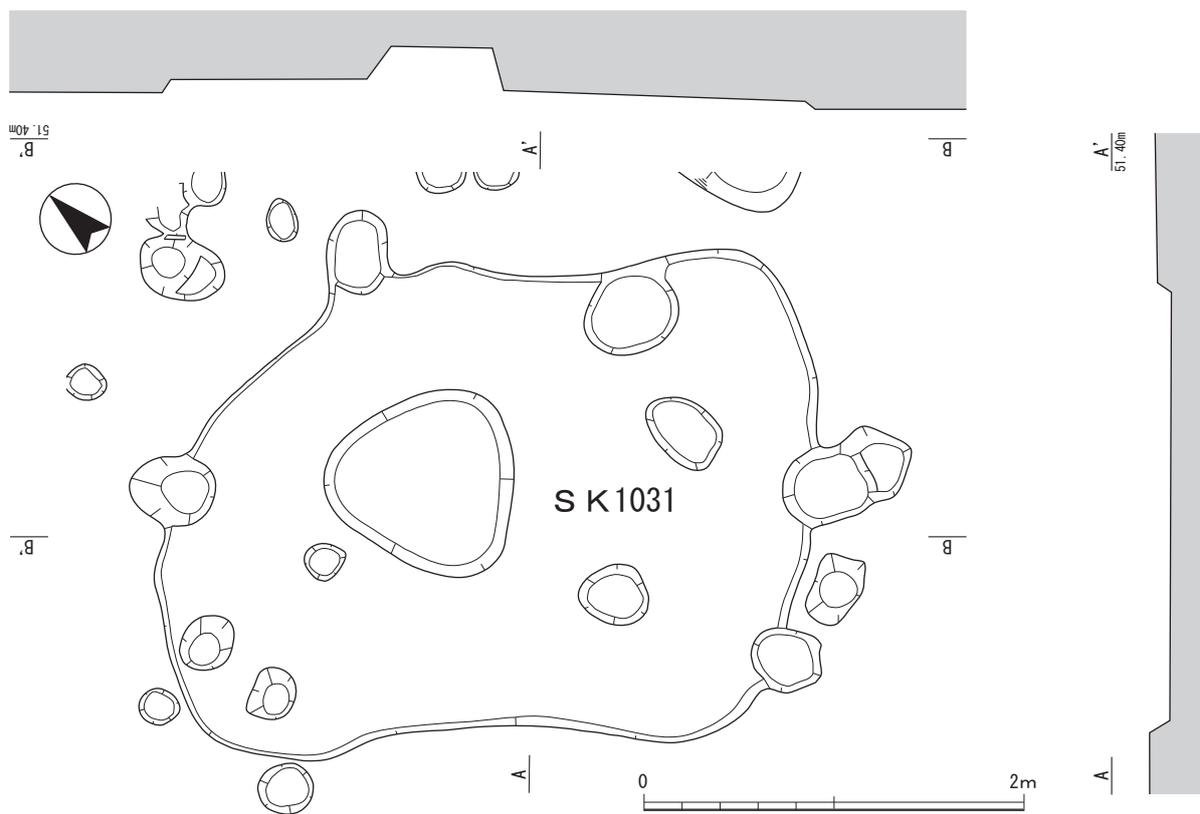


【SX1828】

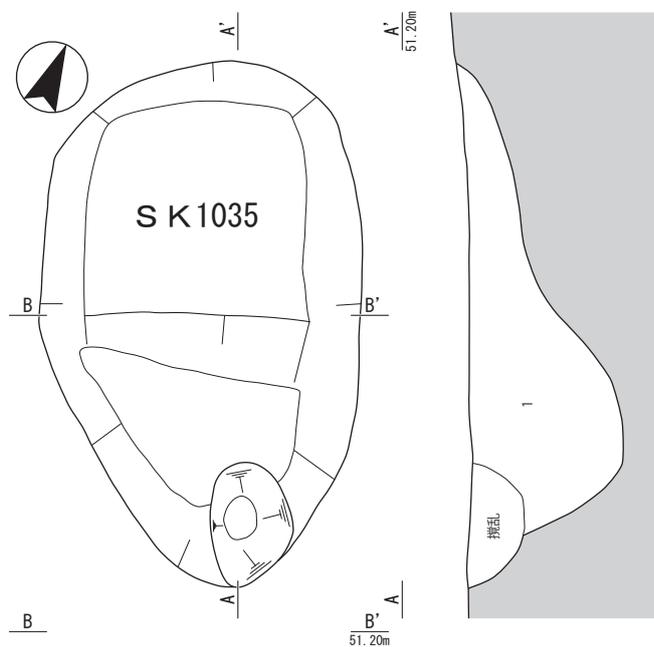
- 1 7.5YR3/2 暗褐色シルト～粗粒粘砂土
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗粒粘砂土 (焼土ブロック斑状 10%・φ0.1～3cm炭化物少量含)



第 196 図 S X 1039・1040・1330・1828 実測図 (1 : 20・1 : 40)

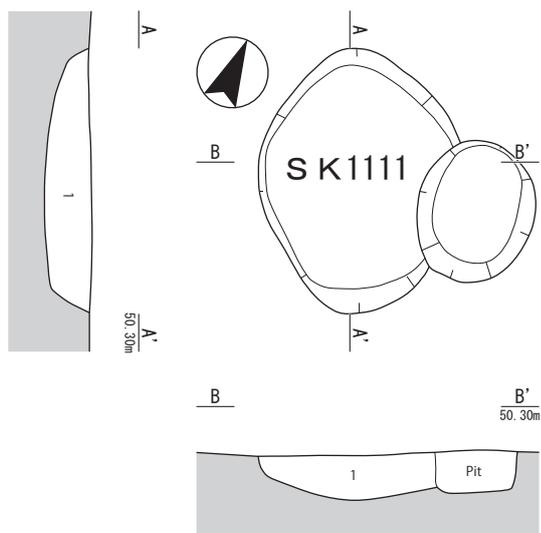


【SK1033】
 1 暗褐色土（黒褐色ブロック含）
 2 暗黄褐色粘質土

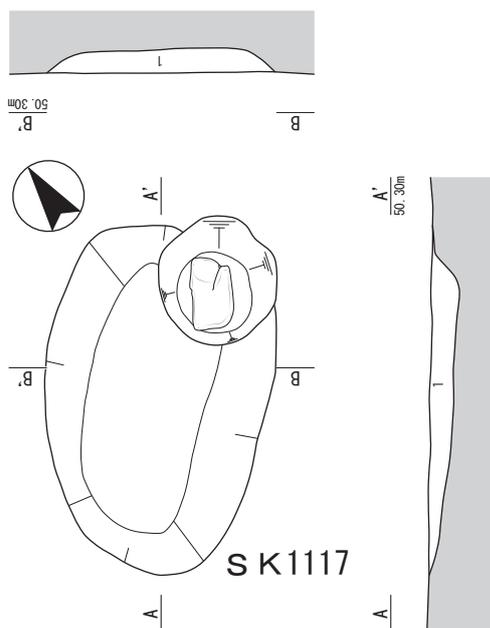


【SK1035】
 1 灰褐色粘質土

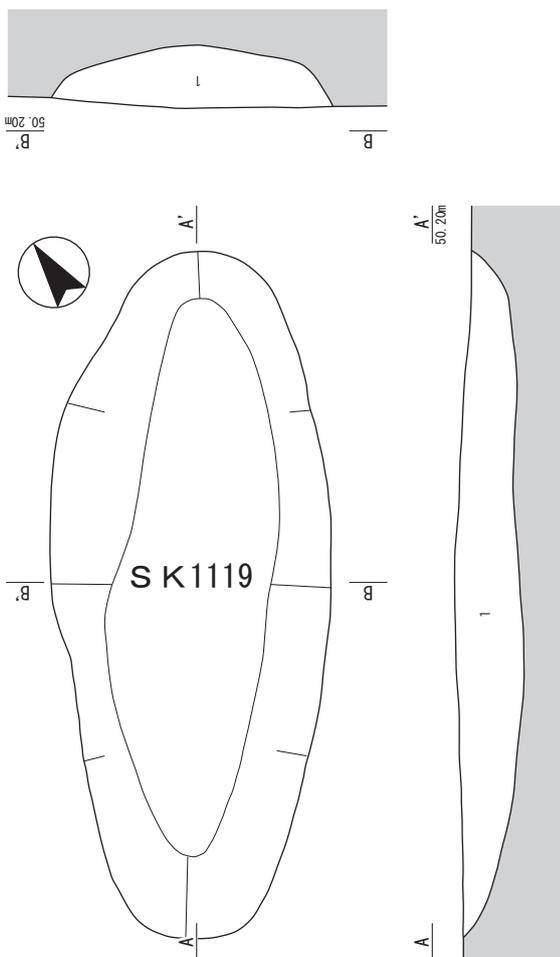
第 197 図 S K 1031・1033・1035 実測図（1：20・1：40）



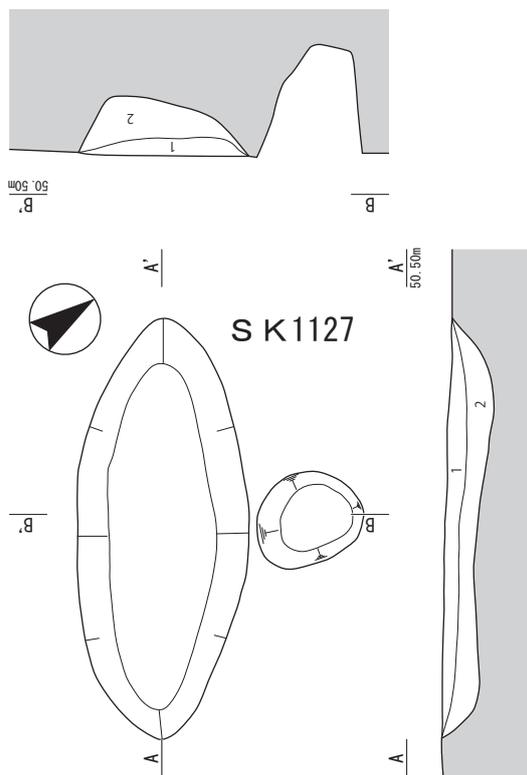
【SK1111】
1 10YR4/6 褐色粘質土



【SK1117】
1 7.5YR4/3 褐色粘質土（黒褐色ブロック含）



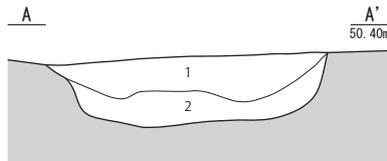
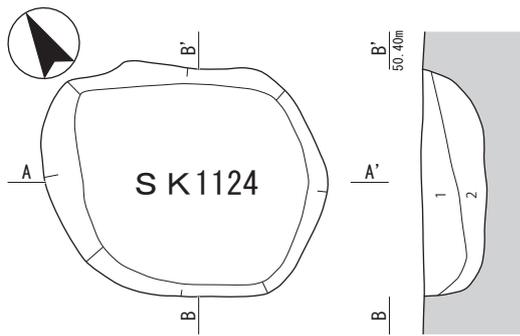
【SK1119】
1 10YR4/4 褐色粘質土（黒褐色ブロック含）



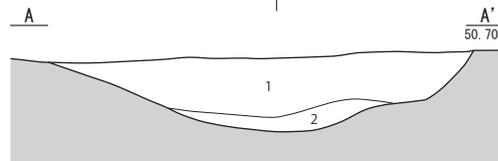
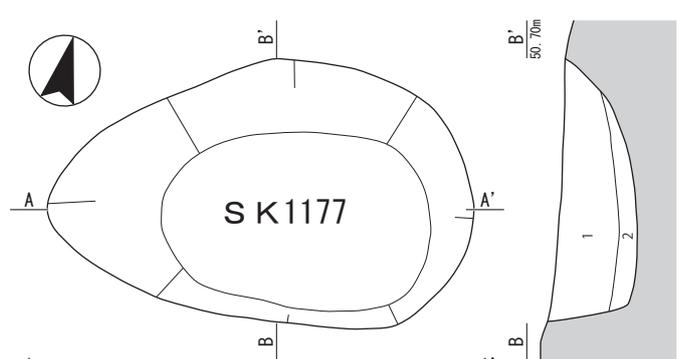
【SK1127】
1 7.5YR4/4 褐色粘質土（黒褐色ブロック含）
2 7.5YR4/6 褐色粘質土



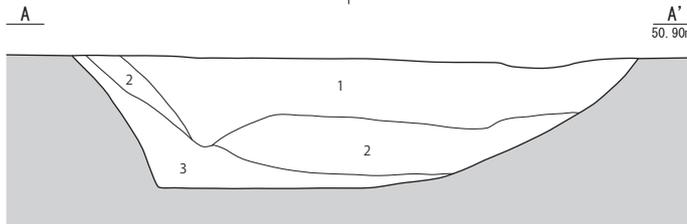
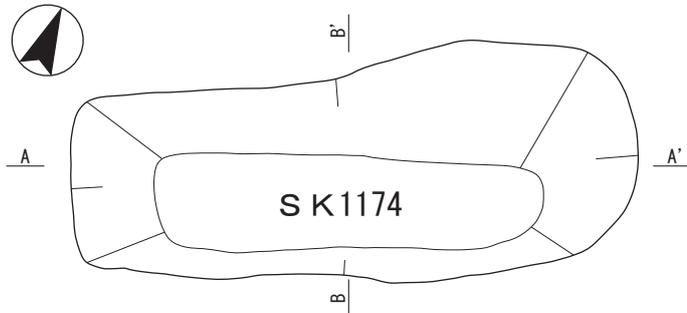
第198図 SK1111・1117・1119・1127実測図（1：20）



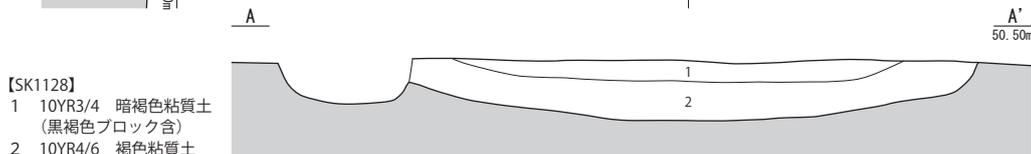
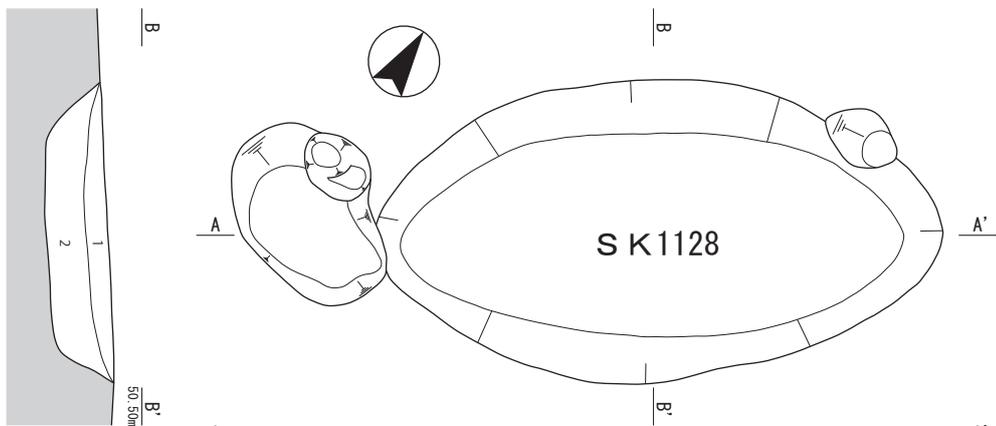
- 【SK1124】
 1 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
 2 7.5YR4/2 灰褐色粘質土



- 【SK1177】
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (焼土粒・炭化物若干含)
 2 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土 (焼土粒・炭化物微量含)

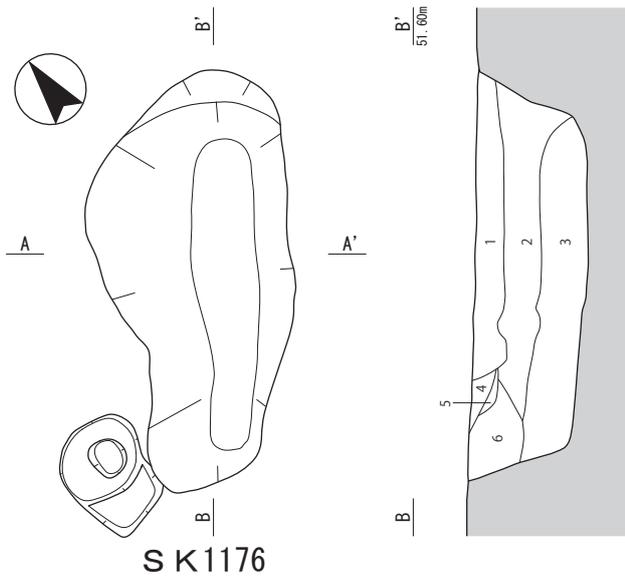


- 【SK1174】
 1 10YR4/2 黄褐色粘質土 (焼土・炭化物微量含
 ・φ 1~2mm白色小礫少量含)
 2 10YR5/4 にぶい黄橙色粘質土 (φ 1~2mm
 白色小礫微量含)
 3 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土 (φ 1~2mm
 白色小礫微量含)

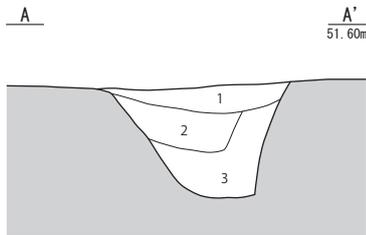


- 【SK1128】
 1 10YR3/4 暗褐色粘質土
 (黒褐色ブロック含)
 2 10YR4/6 褐色粘質土

第 199 図 SK 1124・1128・1174・1177 実測図 (1 : 20)

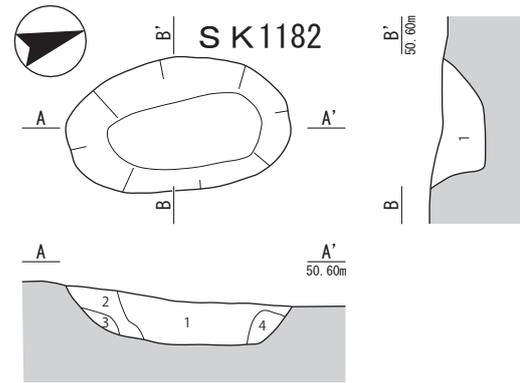


S K 1176



【SK1176】

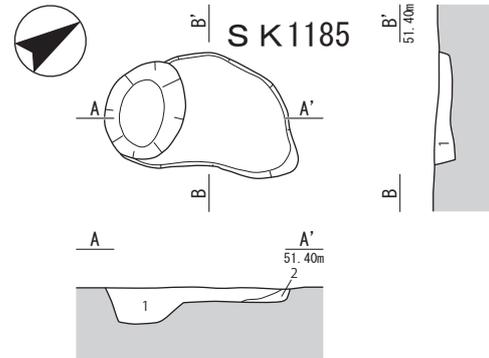
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（焼土・炭化物微量含・φ 1～2mm白色小礫若干含）
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土（焼土・炭化物微量含）
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土（10YR6/6 明黄褐色粘質土少量含）（ベース）
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土（φ 1～2mm白色小礫少量含）
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック多含）
- 6 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（10YR6/6 明黄褐色粘質土多含）



S K 1182

【SK1182】

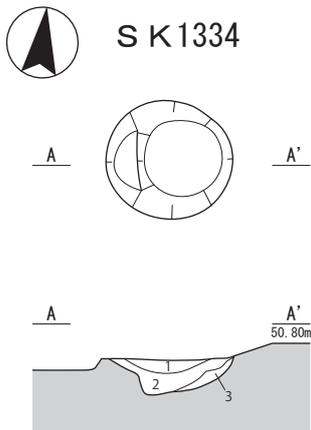
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（焼土・炭化物微量含）
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（焼土・炭化物微量含）
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（焼土・炭化物微量含）
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土（炭化物微量含）



S K 1185

【SK1185】

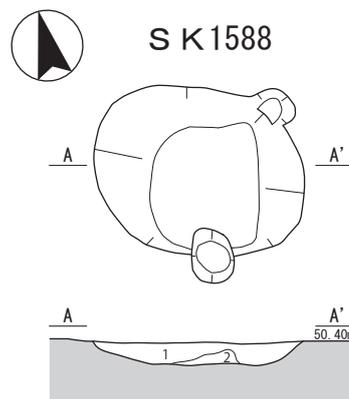
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物微量含）
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質土（焼土微量含・10YR6/6 明黄褐色粘質土多含）



S K 1334

【SK1334】

- 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト（炭化物・焼土含・7.5YR4/4 褐色ブロック少量含）
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト（7.5YR4/4 褐色ブロック少量含）
- 3 7.5YR5/6 明褐色中粒砂含細砂



S K 1588

【SK1588】

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（+5.0mm程度の炭化物3%含）
- 2 7.5YR6/2 灰黄褐色砂質シルト



V 遺物

縄文時代から鎌倉時代の遺物がコンテナケースに311箱分ほど出土した。縄文時代では、早期・中～後期の土器片や石器、晩期の埋設土器が約500点、また弥生時代では中期の土器や石器が約100点出土している¹⁾。凶化しうる遺物の大半は古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の土師器や須恵器で、土製品と少量の鉄製品、砥石などを含み、1,667点を掲載した。遺構出土遺物については、出土した遺構の時代順に遺構ごとに記述し、包含層、表土出土遺物は遺構外として最後に一括してまとめた。

1 縄文時代

(1) 早期竪穴建物 (第201図)

S H 1009 (1～7) 図示できた土器は小片で、深鉢の破片と思われる。1の外面は押型文、内面はナデ調整し、2の外面には縄文を施し、内面はナデを施す。いずれも胎土には1.5～2.0mmの砂粒を含む。3は磨石で、扁平な長楕円形であったと思われるが、一端を欠損している。平坦面の一面のみ使用痕が認められる。4・5は砂岩の石皿片。平坦面の一面のみ使用痕が認められる。6は緑色岩の楔形石器。7は使用痕のあるユーズドフレイク (以下、UF) である。青色系のチャートで、刃部に刃こぼれが見られる。S H 1009出土の石皿、磨石は残存デンプン粒分析を実施しており、5の石皿から検出したデンプン粒は、コナラ属の可能性が高いとの結果が報告されている²⁾。

S H 1012 (8～10) いずれも深鉢の小片。9には押型 (山形) 文、8・10の外面には縄文が施され、10の縄文原体は無節縄文L。

S H 1013 (11～17) 11～16は深鉢片。11は無文、12・14は風化しており文様の有無が不明瞭である。13・15は横位にごく低い押型 (山形) 文が施されているように見えるが不明瞭である。16には無節縄文が施文される。17は磨石で、砂岩である。端部の一端に敲打痕、平坦面の一部に使用痕が残る。

S H 1025 (18～32) 18～24は深鉢片。18は口

縁部片、24は胴部片で、浅い押型 (山形) 文が施される。19は口縁部片で、押型 (斜格子) 文かと思われるが、文様が浅く不明瞭。20も口縁部片であるが、風化が著しく施文は不明瞭である。21は口縁部片で口縁端部から1.5cm幅のヨコナデ下に、横2段の押型 (平行四辺形) 文を施す。23は胴部片で、幅2.0cmの無文帯下に、ごく浅い押型 (山形) 文を帯状に施す。25～27は磨石。25は火砕岩類のいずれかで、側縁部と端部の一端に使用痕が残る。また26・27は砂岩である。25は残存デンプン粒分析を行った結果、コナラ属とユリ科鱗茎に由来する残存デンプン粒が確認された。28・29は石皿片で砂岩。30の剥片および31の楔形石器はホルンフェルス、32の礫器は緑色岩である。

S H 1701 (S H 370) (33) 33は深鉢胴部片で、押型 (ネガティブ楕円形) 文を縦に施す。

(2) 早期煙道付炉穴 (第202～206図)

S F 1005 (34・35) 34は深鉢の胴部片で、2.0cmほどの小片。上半に押型 (山形) 文、下半に無文帯が見られる。35は礫器で、石皿の転用かと思われる。
S F 1006 (36) 深鉢の胴部片で、上半にわずかに押型 (斜格子) 文かと思われる施文が施され、下半は無文である。

S F 1008 (37・38) 37は赤チャートの剥片、38は磨石で砂岩である。

S F 1015 (39) 砂岩の石皿。使用痕は一面のみ確認できる。

S F 1016 (40～52) 40～51は深鉢片である。口縁部片は40・41のみで、他は胴部片である。40は押型 (山形) 文を縦に施す。41は押型 (山形もしくは矢羽根状) 文を横に施す。42には浅い押型 (山形) 文が横に、44には同じく押型 (山形) 文が縦と横に施されており、同一個体の可能性がある。43には浅い押型 (山形) 文が横に施される。45には、上半に押型 (山形) 文が縦に、下半で押型 (山形) 文が横に施されるが、いずれの施文も浅い。46は押型 (山形) 文が斜めに、47では押型 (山形) 文が横に施される。48・49は押型 (山形) 文が横に、49では上半に押型 (山

形)文が横に、下半で押型(平行四辺形)文が縦に施される。50には、小振りの押型(格子目)文を挟んで上下に押型(斜格子)文を横に、その下に押型(山形)文が横に施される。51では3条単位の粗い押型(山形)文が横に、その下で押型(山形)文を縦・横に施す。52は泥岩の剥片である。

S F 1018 (53) 押型(山形)文を横に施し、直下に無文帯を配する。

S F 1019 (54) 砂岩の磨石で約1/2残存。

S F 1024 (55~57) 55は砂岩の磨石、56は楔形石器で安山岩である。57は礫器で、石材はホルンフェルス。

S F 1029 (58~60) 58・59はいずれも深鉢口縁部片である。58は押型文であるが詳細は不明で、59は押型(山形)文が横に施される。60は、礫器で石材は緑色岩である。

S F 1062 (61) 深鉢の胴部片で、押型(格子目)文が横に施される。

S F 1074 (62) 深鉢の胴部片で縄文(単節縄文か)が施されるが小片で詳細は不明。

S F 1110 (63) 隅丸方形の対角線の角を欠損する石皿で、二面に使用痕が残る。火砕岩類のいずれか。

S F 1133 (64・65) 深鉢の胴部片で、斜めの沈線状の施文があるが、いずれも小片のため、詳細不明。

S F 1135 (66・67) 深鉢の胴部片で、66には押型(格子)文かと思われる浅い施文が、67に押型文はなくヨコナデのみ観察できる。

S F 1203 (68) 礫器で火砕岩類のいずれかである。

S F 1030 (69~75) 69は深鉢の胴部片で、浅い押型(平行四辺形)文が縦に施されたものか。70はUFで青チャート、71は約14cm方形の石皿で、砂岩である。一面に使用痕と裏面中央に敲打痕が残る。72は磨石片で、砂岩で、約1/4残存する。73は敲石、74は石皿で、いずれも砂岩。75は礫器で、石皿からの転用かと思われる。

S F 1116 (76・77) 76は砂岩の石皿、77は深鉢の胴部片で、浅い押型(格子目もしくはネガティブ楕円形)文が施され、外面に煤が付着する。

S F 1402 (78~82) 78~81は深鉢片で、78のみ口縁部片である。78の口縁端部に円棒状具による刺突文が施される。79~81の胴部には押型(格子目)

文が施され、78では縦に、また81ではやや右下がりに、79・80では左下がりに施文される。82は楕円形の磨石で一端をわずかに欠く。砂岩である。

S F 1408 (83) 楕円形の磨石で約1/2残存し、砂岩である。残存する端部に敲打痕が残る。

S F 1410 (84) 深鉢の胴部片で、押型(山形)文が斜めに施される。

S F 1412 (85~89) 85・86は深鉢の胴部片。85は押型(山形)文が横に施され、86は縄文で施文されたと思われるが詳細は不明である。87~89は石皿片で、いずれも砂岩。

S F 1415 (90~92) 90・91は深鉢片でいずれも口縁部片である。90は口縁外面に無文帯、その下に押型(山形)文が横に施される。91は押型文で施文されたかと思われるが詳細不明。92は石皿片で砂岩。被熱痕がある。

S F 1419 (93・94) 93は石皿片で約1/2残存する。砂岩である。94は礫器で、石皿からの転用か。

S F 1421 (95) 約22cmの略方形の石皿で、一辺をわずかに欠損する。砂岩である。

S F 1425 (96~98) 96・97は深鉢の胴部片で、96には押型文が施文される。形状は楕円形に見えるが不明瞭。97は無文である。98は砂岩の礫器で、一辺10cm前後の三角形を呈する。

S F 1430 (99・100) 99の石皿は、長方形で一角を欠く。砂岩で、被熱痕が認められる。100は礫器。片面加工で、「V」字状に刃部を作り出す。

S F 1441 (101・102) 101は深鉢の胴部片で、幅0.5cmの無文帯の下に押型(格子目)文、以下に別の文様が続くように見られるが、欠損するため詳細は不明。102は磨石で砂岩である。

S F 1457 (103) チャートの石核。

S F 1458 (104) 磨石で約1/2残存するものとみられ、火砕岩類のいずれかである。

S F 1471 (105) 深鉢の胴部片で、押型(斜格子)文を縦に施文したものかと思われる。

S F 1474 (106・107) 深鉢の胴部片で、106は押型(斜格子)文かと思われるが風化が著しく不明瞭。107は2条の押型(山形)文を幅約1cmの無文帯を挟んで上下に配するものか。

S F 1480 (108・109) 108は磨石、109は石皿で、

いずれも砂岩である。109には被熱痕が見られる。

S F 1481 (110・112) 110・111は深鉢で、110は口縁端部、111は胴部片である。いずれも押型(山形)文かと思われるが110は不明瞭。112は礫器と思われる、鈍角に刃部を作り出す。

S F 1484 (113・114) 113・114はいずれも深鉢胴部片で、113は押型(格子目)文で格子目が長方形を呈する。114は押型(山形)文が施される。

S F 1488 (115) 磨石で砂岩である。側縁部と平坦面の一部に使用痕がある。

S F 1489 (116～120) 116・117は深鉢で、116は口縁部片、117は胴部片である。116には押型(斜格子)文が縦に施され、口縁端部直下に穿孔がある。117の押型(格子目)文は格子目が長方形で、縦に施文されたものかと思われる。119は石皿で、一面に使用痕、裏面に敲打痕がある。120は磨石で、砂岩である。

S F 1501 (121・122) 121は深鉢口縁端部片で、短斜線列状の押型文が口縁直下に、その下にも文様があるが、欠損により不明である。122は石皿で、砂岩である。

S F 1508 (123) 深鉢の胴部片で、押型(ネガティブ楕円形)文が縦に施される。

S F 1513 (124・125) 124・125は深鉢の胴部片で、124は格子目が長方形の押型(格子目)文か、低い山の押型(山形)文とみられ、縦に施文される。125は横長格子目の押型(格子目)文か、低い山の押型(山形)文が横に施文されたものとみられる。

S F 1541 (126～128) いずれも深鉢の胴部片で、126は押型(ネガティブ楕円形)文が縦に施される。127は細長い押型(平行四辺形)文が施文される。128は押型(ネガティブ楕円形)文が施されるが剥離が著しく詳細不明。

S F 1547 (129) 深鉢の胴部片で、楕円が小径な押型(ネガティブ楕円形)文が施される。

S F 1549 (130) 深鉢の胴部片で、破片左半は無文、右半に押型(ネガティブ楕円形)文が縦に施されたものかと思われるが施文方向は不明瞭。

S F 1564 (131) 磨石で約1/3ほどを欠損するかと思われる。砂岩である。

S F 1581 (132) 深鉢の胴部片で、押型(斜格子)

文を縦に施文する。

S F 1594 (133) 深鉢の口縁部片で、押型(ネガティブ楕円形)文が縦に施される。

S F 1702 (134・135) いずれも深鉢の胴部片で、134は押型(山形)文を横に施文する。原体は縦方向に刻目を入れたものか。135には右下がりの押型(ネガティブ楕円形)文を施す。

S F 1706 (136) 磨石で約1/3を欠損。砂岩である。

S F 1583 (137) 砂岩の石皿である。

S F 1713 (138～143) 138～142は深鉢の胴部片。138・139・141には押型(格子目)文が、140には押型(ネガティブ楕円形)文が施文される。142は無文。143は底部片でわずかに押型文がみられ、尖底部は無文である。内面に炭化物の付着がある。

S F 1724 (144) 深鉢片で、外面に条痕が施されている。条痕は板による施文かと思われるが不明瞭。

S F 1728 (145・146) 145は深鉢の尖底部片。わずかにネガティブの押型文が認められるが、残存がわずかで形状は不明。146は砂岩の石皿である。

(3) 早期集石炉(第207～209図)

S F 1010 (147) 砂岩の石皿である。

S F 1022 (148～159) 148～154は深鉢の胴部片である。148・149は押型(山形)文で横に施文されたと思われる。150の上半は無文帯、下半には押型(山形)文が横に施文される。151には押型(山形)文が施されるが施文が浅く、下半は摩滅する。152～154も押型(山形)文で、横に施文されたと思われる。155・156は磨石、157・159は石皿で、いずれも砂岩。両石皿からは、ユリ科鱗茎由来のデンプン粒が検出される。158は礫器で顕著な片面加工。二方向に刃部を作り出す。

S F 1023 (160～166) 160・161は深鉢の胴部片で、160には押型(山形)文かと思われる施文が認められるが風化が著しい。161は無文である。162は磨製石斧未成品で、砂岩。163は砂岩の打製石斧。未成品か。164はリタッチドフレイク(以下、RF)で石材はホルンフェルス。165は石皿で被熱痕がある。166は砂岩製の礫器。自然面を残し、二方向に刃部を作り出す。

S F 1479 (167～171) 167・168は深鉢の胴部片で、167は押型(格子目)文、168は格子目の押型

を右下がりに施す。169・171は剥片、170はUFで、169・171は砂岩、170はチャートである。

S F 1404 (172～174) 172・173は深鉢である。172は口縁部片で、細い単節縄文(RL)が上半に、下半は無文かと思われる。173は胴部片で押型(山形)文、以下には押型(格子目)文が続く可能性があるが小片のため不明確である。174は礫器で砂岩である。縁辺部に自然礫面を残し、二方向の鈍角な階段状剥離を伴う刃部を作る。

S F 1454 (175) 石皿で砂岩である。二面に使用痕が認められる。

S F 1490 (176) 砂岩の礫器である。一端に自然礫面を残し、長軸方向の両側面に、向きの異なる鈍角の刃部を作り、両刃部には階段状剥離痕を残す。

S F 1492 (177・178) いずれも自然礫面を残す片面加工の礫器であり、鈍角の刃部をもち、砂岩と思われる。

S F 1544 (179) 石皿で砂岩である。一端を欠いており、一面に使用痕が認められる。

S F 1546 (180) 石皿で砂岩である。もとは長方形であったかと思われるが、斜めの端部は破面、もう一端は礫器として鈍角の刃部を作り出しており、石皿底部から打ち欠きを施し、階段状剥離が認められる。

S F 1570 (181～183) いずれも石皿で、181・182は砂岩、183は花崗岩である。181は二面、182は一面の使用痕がある。183は長径30.6cmの大型のもので、重量が5.5kgもあるため、一面の使用痕はあるものの台石とする方が適しているかもしれない。

S F 1493 (184) 深鉢の胴部片で、長方形の押型(格子目)文が縦に施されたかと思われる。

(4) 早期土坑・Pit (第209図)

S K 1028 (185) 深鉢の胴部片で、小振りでも正方形の押型(格子目)文が斜めに施される。

S K 1075 (186) 深鉢の胴部片で、押型文が施されるが格子目文かと思われるが不明瞭。

S K 1078 (187) 深鉢の胴部片で、浅い正方形の押型(格子目)文が施される。

S D 1021 (188) 細い単節斜縄文が施される。

Pit (189～191) 189・190はF-W21のPit2から出土した深鉢の胴部片で、189は浅い押型(斜格子目)文を縦に施す。190にはやや崩れた押型(市松)

文が施される。191は深鉢の胴部片で、押型(斜格子?)が施される。

S K 1722 (192～196) 192は深鉢の胴部片。押型(ネガティブ楕円形)文が縦に施されたと思われる。193～196は石皿片で、すべて砂岩である。

(5) 中期～後期初頭堅穴建物

(第210～218図)

S H 1103 (197～356) 197～349が深鉢片、350～356が石製品である。197～202は口縁端部片で、内外面ともナデ調整される。203も同じく内外面ともにナデ調整されるが、口縁端部に隆帯が付される。204にも203と同様に隆帯が付されていたと考えられるが剥離している。205の上端には条線、下端に隆帯が付される。隆帯直上にやや太い沈線が施される。206は内外面ともにナデ調整される。207は隆帯の剥離片で、山形の沈線が施される。連弧文の一部か。208は胴部片で縄文RLが見られる。209は波状口縁の深鉢口縁部片で、端部に低い隆帯が付される。210の深鉢片には上部に斜行沈線、隆帯が貼り付けられ、隆帯下部に刻目が施される。211の深鉢片外面には、一見、撚糸あるいは縄文に見える施文があるが、いずれの原体でも施文単位・方向に疑問が残る。貝殻等を使った回転押圧による圧痕(疑似縄文)が施されたものとみられる。212は小片で、わずかな円孔と沈線の痕跡が残る。213の深鉢の胴部片には、上部をナデ、破片中央に隆帯の剥離痕跡があり、下部に条線がみられる。214・215はともに胴部片で内外面ともナデの無文と思われる。216・217・218・222は同一個体の可能性が考えられる深鉢の口縁端部片で、いずれも内外面はオサエ後ナデ、口唇部に幅1.0cm前後の押圧による凹み不定間隔で施文される。219の深鉢口縁端部片は、内外面ともにナデ、口唇部の幅いっぱい押圧による凹みが施される。220の深鉢の口縁部片は、端部がやや肥厚し、棒状具の先端による三日月状の刺突が斜めに施される。その直下に斜行する沈線が確認できる。221は小片で、口縁端部もしくは山形突起の剥離片かと思われる。ヨコナデされた端部の下に棒状具による先端刺突が施される。223は深鉢の口縁端部片で、ヨコナデされる端部の直下に棒状具先端による刺突が施される。刺突は220のものに酷似する。224は深鉢の

口縁端部片で、内外面をナデ、口唇部をヨコナデし、口縁端部直下に刺突が施される。破片下部に沈線の末端が残る。225は深鉢の口縁端部片で、内面をナデ、口唇部はやや肥厚させてヨコナデし、口縁外面直下に太い沈線で円弧を描き、沈線内部に細かい刺突列を施す。226・227は同一個体と思われる深鉢片で、内外面ともにナデで、角頭口縁の外面直下に円形刺突列が一行配される。228は深鉢口縁端部片。太い沈線で渦巻文を描いたものと思われ、沈線内部には斜行沈線を施す。229は深鉢の口縁で、小波状口縁になるものと思われる。内面はナデ調整と思われるが風化が著しい。口唇部から口縁外面にかけて縄文を施したように見えるが単位は不明瞭。波頂部に太い沈線による区画を描き、内部に斜行沈線を描く。沈線区画直下に低い隆帯を付す。230は深鉢の口縁端部片。内面はナデ、口縁端部はやや摩滅し、外面に太い沈線による区画を描いたものと思われる。沈線下部には櫛状具による斜条線を施す。231は深鉢の口頸部片で、内面はナデ、外面には平行する2条の太い沈線で区画を描いたものと思われ、内部を櫛状具による斜条線で埋める。沈線区画以下はナデのみの無文となる、232は深鉢口縁端部片。内面ナデ、口唇部をヨコナデ、外面を5条程度の櫛状具による条線を横方向に上下2段に施す。この2段の条線は、破片の左方で楕円形文を描いていた可能性もある。233は深鉢口縁端部片で、内面ナデ、口唇部ヨコナデし、外面は太い弧を描く沈線上下に縄文（RLか）を施す。234は深鉢の口縁端部片で、やや肥厚させた口縁内面に太い沈線を巡らせ口縁内部に段をつける。外面には櫛状具による斜行条線を施す。235は深鉢口縁端部片で、内面はナデ、口唇部をヨコナデ、外面に縄文を地文とし、太い沈線で破片両端に区画を構成する。沈線を強く施したため、器壁内面側に凸部が生じている。236は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面は太い沈線2条で連弧文を描く。破片上端にも同じく太い沈線の断片と、斜行沈線を施したものが確認できる。237は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には比較的幅広で浅い2条の垂下沈線を施し、垂下沈線両脇は斜縄文（RLか）を描出する。238は深鉢の胴部片。内面をナデ、外面には太い沈線で区画を作り、内部を4・5条の櫛状具によ

る斜条線で埋める。239は深鉢の胴部片で、内面はナデ、外面には幅広の浅い垂下沈線が1条と沈線による円弧が残存し、垂下沈線の脇および円弧内部には櫛状具による斜条線が見られる。240・241・244は深鉢の胴部小片。内面をナデ、外面には櫛状具による斜条線が見られる。241・244には沈線の一端がわずかに見られる。242は深鉢胴部片で、太い沈線で区画を作り、内外に条線を施す。243は深鉢の胴部片。内面をナデ、外面は太い沈線2条で区画を作り、内部を櫛状具による斜条線で埋める。沈線以下はナデである。245は深鉢の胴部片。低い隆帯を付け、その両側に羽状沈線を配する。246～249・251・252は深鉢の胴部片で、247・249には櫛状具による条線、他も斜条線が見られる。250・254の深鉢の口縁端部片には、垂下沈線の一部と、櫛状具による条線が羽状に施される。253・256・259・261の深鉢の胴部片には、2条ないし3条の垂下沈線と蛇行沈線、間に櫛状具で斜行条線を施文する。257の深鉢の胴部片には、2条の沈線による円形区画を描き内部に櫛状具で斜条線を施す。260の深鉢の胴部片では、比較的幅広の沈線による区画の一端が残り、内部を斜縄文（無節）で埋める（充填縄文）。262は小波状口縁となる深鉢の口縁部片。波頂部下に太い凹線で渦巻文を配し、渦巻文下位には1条の波長の緩い連弧文、さらにその下に2条の平行沈線を巡らす。渦巻文を描く凹線内には、刺突を連続して施す。渦巻文と緩い波状の連弧文間は、斜行沈線で埋める。263も小波状口縁の深鉢の口縁部片で、低い隆帯で区画を作り、隆帯上に刻目を施す。胴部にかけては垂下する沈線を挟み、両側に羽状沈線を配する。264は深鉢の口頸部片で、内部をナデ、外面に水平に凹線を配し内部に連続刺突を施す、その下に浅い沈線を斜方向に描く。265は角頭水平口縁の深鉢で、口縁から胴部下半までの比較的残存率の良い個体である。内面はオサエとナデで調整される。外面には、口縁直下に浅い凹線が緩やかに波打ちながら配される。その下には同じく浅い凹線で2条の連弧文を描きつつ、先端を渦巻文として描き、凹線内部に連続した刻目を施す。連弧文と渦巻文間は、斜行条線で埋める。連弧文以下には5条ほどの櫛状具により斜行条線が描かれる。266は深鉢の口縁部片。内面はナデ、

外面には太い凹線で渦巻文が描かれる。267も深鉢の口縁部片。内面をナデ、口唇部をヨコナデ、口縁外面に凹線2条を水平に配し、以下をナデとする。268はやや内弯する深鉢の口縁部片で、5条の凹線をほぼ水平に描く。269は深鉢の口縁部片で、口唇部をわずかに欠く。内面はナデ、外面に2条の平行する沈線を約3.0cmの間隔で水平に描き、その間に縄文を配したように見えるが不明瞭である。口縁端部はやや肥厚する。270は深鉢の口縁端部片で、内面をナデ、外面には弧を描く沈線2条が施される。271は端部をやや肥厚させた小波状口縁の深鉢片。内面をナデ、外面には沈線による円形文、円弧文、鉤状区画を描く。272は小波状口縁深鉢片。内面をナデ、外面波頂部には、沈線による渦巻状文の一部が確認できる。273は深鉢の口縁端部片で、内面から口唇部にかけてナデ、外面には垂下する2条の沈線と棒状具による刺突が一箇所認められる。274は小波状口縁深鉢片。凹線で口縁外形に沿った弧線を描き、波頂部に凹点による浅い刺突が施される。275はやや内弯する深鉢の口縁端部片。内面をナデ、外面には沈線2条と沈線による区画が描かれたものと思われるが、小片のため区画形状は不明である。276は角頭口縁の深鉢の口縁片。内面をナデ、口唇部をヨコナデ、外面には口縁端部直下に2条の平行沈線を施し、以下をナデ調整する。277は深鉢の口縁端部片で、緩やかに内弯し、端部を肥厚させる。内面はナデ、口唇部をヨコナデし、外面には沈線による円弧文あるいは楕円形文による区画を描く。278は端部を肥厚させた深鉢の口縁部片で、内面をナデ、口唇部をヨコナデ、外面には水平方向の条線を施し、以下をナデ調整する。279は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には沈線による綾杉文が描かれる。280は波状口縁の深鉢片。内面をナデ、口唇部に縄文を施し、外面にはナデ後垂下する沈線4条と棒状具先端による刺突を施す。281の深鉢の胴部片は、内面を横方向のケズリで調整し、外面には沈線4条を綾杉状に配する。282は小波状口縁の深鉢片。口縁外形に沿った凹線2条を弧状に巡らせ、波頂部に凹点および下段の凹線先端を渦巻文とする。渦巻文下位にも凹線で連弧文を描き、上下の連弧文間に櫛状具による斜行条線を施す。283は、内面を

ナデ、外面に沈線で弧線を描く。立体装飾部の一部かと思われる。284は胴部小片で、内面をナデ、外面はナデ後、2条の沈線で弧線を描く。285は胴部片。内面をナデ、外面には沈線で渦巻文を描いたものと思われる、沈線間には縄文が施される。286は胴部片で、内面をナデ、外面には1条の垂下沈線と斜行沈線4条が施される。287は、胴部片で、内面をナデ、外面には沈線により円弧文と斜行沈線を描く。288は深鉢片で、沈線による4条の連弧文と、渦巻文あるいは横位のS字状文様の一部が認められる。289は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には2条の沈線による連弧文と水平方向に描いた沈線間に、渦巻文あるいは横位S字状文様の先端が認められる。290は深鉢の立体装飾部片と思われる小片で、円窓状の外形線に沿って2条の沈線を巡らせる。291は胴部片で、内面は風化が著しく調整不明、外面には幅広の沈線で弧線が描かれる。292の深鉢片は、橋状部の一部かと思われる小片で、沈線による葉状文様が描かれる。293は深鉢の胴部片で、内面はナデ、外面には沈線による弧線と渦巻文が描かれる。294は深鉢の胴部片で、内面はナデ、外面には2条単位の沈線で弧線が描かれ、平行沈線間に連続刺突文が施される。295は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には沈線による連弧文と渦巻文の一部が認められる。296は深鉢の透かし円孔部片と思われる小片で、円孔外形線に沿って1条の沈線を描き、その外側に2条の平行沈線を配する。297は台付深鉢片で、内面はナデ、外面には隆帯を貼り付け、隆帯上を一定間隔で押圧し、指頭大の凹部が連続する。298は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には凹線が4本描かれるが文様は不明である。299は深鉢の胴部片。外面には幅広の沈線で渦巻文を描いたものか。外面に櫛状具による条線が見られる。300は深鉢の胴部片で、幅広の沈線で文様を描いたものと思われるが、形状は不明である。301は深鉢胴部片で、内面をナデ、外面には浅い沈線が4～5条施されるが文様の形状は不明である。302は296・290と同じく立体装飾部かと思われる小片で、透かし円孔の外形線に沿って2条の沈線とその外側に1条の沈線を施す。303は深鉢胴部片で、内面をナデ、外面には幅広で浅い垂下沈線と、羽状文が描かれたものかと思われる。沈

線間に棒状具による刺突が施される。304は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には幅広で浅い沈線により垂下沈線が2条と斜行沈線が施される。305は深鉢の胴部片で、内面はナデ、外面には沈線で花卉状の文様が描かれる。306は深鉢の小波状口縁端部片で、内面をナデ、口唇部に疑似縄文、外面には垂下沈線2条で区画を描き、棒状具の先端による刺突を施す。307は橋状把手片で、内面をナデ、外面には連続刺突を施す。308は、深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には幅広で浅い2条の垂下沈線と、その両側に棒状具による先端刺突が施される。309は深鉢片で、低い隆帯を貼り付け、直上に円棒状具先端による刺突を施す。310は、深鉢胴部片で、内面をナデ、外面には幅広の沈線を施した両側に、円棒状具による先端刺突を施す。311は、深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面に円棒状具あるいは竹管を斜めに刺突する。施文具先端径の中央の粘土が盛り上がる箇所が数か所認められる。312・313は、深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面に円棒状具もしくは竹管による先端刺突が施され、311と同じく、刺突された文様の中央に粘土の盛り上がり箇所が認められる。314は深鉢の胴部片。内面をナデ、外面は円棒状具による浅い刺突で施文する。315は、緩く内弯する深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には垂下する浅い沈線2条と垂下沈線左側の区画に斜行沈線、右区画に円棒状具による先端刺突を施す。破片の天地が不明瞭で逆位の可能性もある。316は深鉢の小波状口縁端部片で、隆帯上に4～5条の沈線を描き、波頂部に浅く大きな楕円形の凹点をつくる。317は、深鉢の立体装飾部片で、隆帯を貼り付けその直下に凹線を巡らせ、凹線内に刻目文を施す。318は、深鉢の立体装飾部片で、立体瘤の一部とみられる。貼り付けた粘土を渦巻状に捻っている。319も同じく深鉢の立体装飾部片で、円孔窓の一部であろうか。320も深鉢の立体装飾部片で、貼り付けた隆帯を立体的に捻る装飾が施された部位だが一部しか残存していないため、装飾形状は不明である。321は深鉢橋状部の基部にあたる小片かと思われる。内面をナデ・ヨコナデ、外面には沈線による円弧文と蕨手文が施される。322は、深鉢の口縁～胴部にかかる破片で、内面はオサエ後ナデ、外面には浅い沈線によ

るU字状区画を描き、区画内外を円棒状具あるいは竹管による先端刺突で埋める。323は、深鉢の口縁の橋状部片。外形線に沿った沈線を巡らせ、橋中央に蕨手文を配する。324も橋状部かと思われる小片であり、外面には外形線に沿って浅い沈線が施される。325は橋状部あるいは立体装飾部片と思われる小片。粘土を貼り付け、立体装飾の基部のみが残存するが、小片のため装飾形状不明。326は深鉢片で、沈線による連弧文と、横位に配した蕨手文かと思われる文様が描かれる。327は深鉢の頸部～胴部片で比較的大きな破片が残存する。内面はオサエ後ナデ調整され、粘土帯の接合箇所が明瞭である。外面には細かい隆沈線で渦巻文と楕円区画を配し、楕円区画内外には羽状沈線あるいは斜行沈線で埋める。菰野町・鈴山遺跡³⁾でも同様のモチーフの深鉢片が出土する。底部は欠損するが、台付深鉢となる可能性がある。328は立体装飾部片で、円孔透かし孔の外形線に沿って沈線を巡らせる。破片上端に連続刺突が施される。329も立体装飾部小片。円孔透かし孔の外形線に沿って沈線を巡らせる。330も立体装飾部片で、円孔透かし孔を多用していて、孔の外形線に沿って沈線を巡らせ、橋状部には蕨手文が配される。331も立体装飾部橋状部片と思われるが、器壁が荒れていて調整・文様ともに不明瞭である。外面には浅い沈線で弧線を描いている。332～341は深鉢の底部片。平底で2.0mm大の砂粒を多く含む。342は深鉢胴部～底部片で、外面立ち上がりにオサエ後ナデ調整、胴部から内面にかけてはナデ調整する。343～349は台付深鉢の台部片で、343を除き、円孔透かし孔が多用される。344では円孔透かし孔以外に、長方形透かし孔の痕跡が1箇所残る。346では円孔透かし孔が段違いに配される。349には長方形の透かし孔が1孔あるほか、長方形の凹部箇所を確認できる。350はチャートの石鏃。無基で切先を極端に細く尖らせる。351はチャートの楔形石器。三辺に刃部を作る。352はRFでサヌカイトである。一面にスポンジ状自然面を残している。353は砂岩のUF。弧状を描く突出部に使用痕が認められる。354は石皿片。355は一部を欠損するが、比較的全体形を留めた砂岩の石皿。使用痕は一面のみである。356は花崗岩の石皿。使用面はわずかではあるが、二面に

認められ、石皿としての利用が考えられるが、厚い石材で重量感があるため、台石と見た方が適切かもしれない。

S H 1104 (357 ~ 378) 357 は波状口縁の深鉢の口縁~胴部片である。波頂部に沈線による円形文、波頂部間に二重楕円を沈線で描き、楕円区画内を斜行沈線で埋める。この区画の下位に楕円区画の円弧に沿った二重の連弧文を描き、弧線の山部を波頂部の円形文下に配する。この連弧文以下、胴部はナデのみの無文である。358 は深鉢の口縁端部片。内面をナデ、口唇部をヨコナデ、口縁外面に縄文を施し、幅広の浅い沈線1条を巡らせる。359 はやや内弯する深鉢口縁端部片。内面はナデ、口唇部をヨコナデ、外面は2条の平行する沈線と、弧を描く沈線端がわずかに残る。360 は、口唇部をわずかに欠くが深鉢の口縁端部片で、内面をナデ、外面には、V字を描く沈線と山形の沈線が相対位置に描かれ、その右側に円弧を描いた沈線端部が残るが、文様の形状は不明である。361 は、緩やかな小波状口縁となる深鉢の口縁部片で、内外面ともにナデ調整するのみの無文である。口縁端部は他の個体に比べて薄い。362・363 は、無文の深鉢で、362 は口縁端部片、363 は胴部片である。内面をオサエ後ナデ、外面をナデ調整する。362 の口縁端部は肥厚させており、362・363 ともに外面に炭化物が付着する。364 は深鉢の胴部片で、内面はナデ、外面にはわずかに条線が見えるが不明瞭である。365 は深鉢の胴部片で、内面はナデ、外面には5.0mm間隔で垂下方向に沈線が施される。366 は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面には間隔がランダムな斜行沈線が施される。367 は、深鉢の胴部片。内面をナデ、外面には地文に条線を施し、垂下沈線2条を配する。368 は、深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面にはやや幅のある施文具によるランダムな沈線が描かれる。外面の一部にわずかながら炭化物の付着が認められる。369・370 は、深鉢の胴部片。内面をナデ、外面には櫛状具による条線を施した上に、ごくわずかに蛇行する垂下方向の沈線が1条見られる。371 は深鉢の底部に近い破片で、内面をナデ調整し、外面には垂下沈線の末端がわずかに見られる。372 は深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面はナデ後縄文を施す。373 は、深鉢の胴部片で、

内面をナデ、外面には小片ながら羽状沈線が明瞭に残る。374・375 は、深鉢の胴部片。内面をナデ調整、外面はナデ後、櫛状具による条線を施す。375 の外面には炭化物の付着が認められる。376 は、台付深鉢の底部~台部片。円形透かし孔が3箇所と底部に垂下沈線の末端がわずかに残る。377 は深鉢の胴部~底部片である。平底の底部は完存し、内面をナデ調整、外面はナデ後に縄文を施す。全体的に小振りな深鉢となる。378 は砂岩の凹石で1/2を欠損する。残存部に二面の使用痕が認められる。デンプン粒分析を試みたがデンプン粒は検出されなかった。

S H 1679 (379 ~ 385) 379 は立体装飾付き深鉢の口縁端部か橋状把手の小片かと思われる。口唇部に刺突による深い凹部が作られ、外面には縄文が施されたかのような痕跡があるが、胎土が粗く、摩擦も著しいため不明瞭。380 は、内弯する深鉢の口縁端部片で、内面はオサエ後ナデ調整し、外面には口縁直下に水平沈線を1条、その下に右下がりの斜行沈線を施す。381 は、深鉢の柱状突起部を伴う口縁端部片。頂部に長径約1.0cmの先端工具による刺突を施す。柱状突起両脇から内傾する沈線を描いている。382 は、深鉢の波状口縁端部片。内面をオサエ後ナデ調整、外面は、縄文を施した脇に太く浅い沈線2条で弧線を描く。383 は台付深鉢の台部片。楕円形孔の一部が残り、垂下方向に低い隆帯を配している。384 は深鉢の底部片である。平底で底面には凹部がある。2.0 ~ 3.0mm大の砂粒を多く含む。385 は、サヌカイトの剥片である。

S K 1693 (S H 1679 屋内炉) (386 ~ 395) 同一個体の深鉢の胴部片で、口縁及び底部は残存しない。内面はナデ調整、外面には垂下する2条の沈線を挟んで両脇に1条の蛇行沈線を配し、これらの沈線間には櫛状具による条線が施されている。胴部下位にあたる391・393では、沈線が弧線あるいは花卉状に曲線を描くようである。屋内炉の底部に敷設されていたもので被熱により赤変する。

(6) 中期末~後期初頭土坑・Pit

(第219 ~ 220 図)

S K 1311 (396) 磨石で、裏面は剥離する。残存する平坦面と側面二面に使用痕が認められる。

S K 1312 (397 ~ 402) 397 ~ 401 は深鉢の胴部片

で、いずれも内面はナデ調整、外面には条線が施される。402は切目石錘片で、残存する一端に擦切による一文字の溝がわずかに残る。

S K 1336 (403) 深鉢の胴部片で、内面をナデ、外面にはわずかに櫛状具による条線が残る。

S K 1565 (404・405) いずれも深鉢口縁片である。404には口縁外面の端部から2.0cm下に低い隆帯が横位に貼り付けられ、その上下には円棒状具もしくは竹管で斜め方向に刺突が施される。405は無文の口縁片で内外面ともにナデ調整をする。外面には破片下端に薄く炭化物の付着が認められる。

S K 1656 (406～415) 406は鉢の口縁片である。内面をナデ、外面には比較的幅広で深い沈線により、口縁直下に水平線を描き、下位に配置する渦巻文の上方で口縁端部へ向けて折り上げて区画をつくる。渦巻文内部には細かい縄文を施す。407も鉢の口縁端部片。口縁直下に垂下する沈線を1.0～1.5cm間隔で配する。その下に垂下沈線より幅が狭い沈線で弧線を描く。408の鉢口縁片では、端部内面側を肥厚させる。外面には沈線による弧線が施される。409は深鉢の口縁端部片かと思われる。内外面ともにオサエ後ナデ調整されており、残存する範囲に施文は見られない。410は鉢口縁片。外面の口縁端部直下に2条の隆帯を巡らせる。下段の隆帯の方が幅広く、断面が緩い「M」字状となる。隆帯間には炭化物の付着が認められる。411は深鉢の口縁片で、端部がやや内傾し内面をナデ、外面には条線が見られる。412は深鉢の口縁付近の破片。やや浅い沈線で弧線を描いて区画をつくり、区画内に縄文を施す。413は深鉢の胴部片。内外面ともにオサエ後ナデ調整し、外面にはヘラ状具で垂下方向に沈線を描く。414は深鉢の底部片で、接地面に圧痕等は認められない。415は、暗赤褐色のチャート剥片である。

S K 1670 (416) 砂岩の磨石である。側縁の使用痕のほか、端部と平坦面中央にも敲打痕があり、敲石としても利用されていた可能性が考えられる。

S K 1692 (417～424) 417は波状口縁の深鉢の口縁片である。波頂部から垂下方向へ隆帯を貼り付け、その両側に弧を描く幅広で深い沈線を配する。隆帯上には横方向の刻目を6～7箇所入れる。両側の沈線間は隆帯上に細かい縄文を施す。418は鉢の胴部

片。内面は指オサエ、外面にはヘラ状具による垂下方向の沈線を描く。420～422は深鉢胴部片。いずれも内面をオサエ後ナデ調整し、外面には垂下沈線を2条描き、沈線間に斜行縄文を施す。423も同じく深鉢の胴部片で、内面をナデ調整、外面に2条の弧を描く沈線で区画をつくる。沈線間は無文で、沈線外側に縄文が認められる。424はサヌカイトの剥片。平面形が鏝形にも見えるが、厚みが極端に薄く、製品とは認めがたいため剥片と判断した。

S K 1695 (425・426) 425は深鉢の口縁端部片で、内外面ともにナデ調整し、無文である。426は深鉢の口縁片で、外面には平行する2条の深い沈線とその下位に文様を描く沈線がもう1条平行に施される。器壁の風化が著しく、沈線間の縄文の有無など施文の詳細は不明である。

S K 1807 (427) 片麻岩の切目石錘。両端に浅い擦切溝が見られる。

S K 1809 (428) 深鉢の口縁端部片で、端部をわずかに欠損する。外面の口縁端部直下に幅3.0mmほどの細く浅い沈線で鉤状に区画を描き、内部に細かい縄文を施すが、器壁の摩耗により不明瞭である。

S K 1823 (429) 石英斑岩の磨石である。側縁部に線状痕が認められる。

S K 1827 (430～432) 430は深鉢の口縁部片で、2片に接点はないが同一個体とみられる。口縁片には水平方向の沈線2条が見られるが、下段の沈線位置で割れるため不明瞭である。口縁下方の破片には鉤状に曲がる沈線が描かれる。431は緩い波状口縁となる深鉢の口縁端部片で比較的深い沈線で波底部に方形区画を描き、内部を縄文で埋める。波頂部に向けて口縁外形線に沿った弧線を描き、渦巻文になるとと思われる弧線の一端が残る。渦巻文内部は縄文が施されたものと思われるが不明瞭である。432は深鉢の胴部片。外面には鉤状に曲がる沈線で区画が描かれていると思われる。区画内には縄文を施したとみられるが不明瞭。

S K 1840 (433・434) 433は無文の深鉢の口縁片。内外面ともにナデ調整されたものとみられるが、器壁の風化が著しく不明瞭である。434は波状口縁の深鉢口縁片。内外面ともにナデ調整し、外面には、波頂部へ向かう沈線4条が描かれ、沈線は口唇部に

及ぶ。沈線間には縄文が施される。

S K 1841 (435) 扁平な楕円形で、両端に擦切溝をもつ切目石錘である。

S K 1657 (436～453) 土器はいずれも深鉢で、436～442が口縁部片、443～451は胴部片である。436は緩い波状口縁となる口縁片で、口縁波状に沿った連弧文は口唇部に達し、波頂部の口唇部にも沈線を刻む。波頂部下には渦巻文を配する。437・438も同じ文様構成をもつ。436の胎土には砂粒が多く、沈線内部に縄文があるかに見えるが不明瞭。内外面の器壁が暗褐色で断面が黒褐色を呈しており、同一土坑内から同じ特徴をもつ破片(437・439・441・442・445・447・448・449)が出土する。439は口縁端部から口唇部に小突起を付け、両脇を迫り上げる意匠をもつ小片で、外面には比較的浅い沈線で弧線を描く。440・441はやや肥厚させた口縁の外面に、緩い弧を描く沈線を配するもので、440には1条、441では2条の沈線が確認できるが、胎土に砂粒が多く、縄文の有無等詳細は不明である。442は波状口縁端部片で、口唇部から伸びる沈線2条は、蛇行して垂下する文様を描くものかと思われる。破片右端では口縁の波状に沿った弧線が伸びてきて口唇部に至る。蛇行する垂下沈線間には縄文が施される。443の胴部片外面には垂下する沈線が3条確認できる。444の胴部片には比較的幅広で浅い沈線が施される。445も同じく胴部片で、比較的幅広の浅い沈線で区画が描かれる。446の胴部片には、沈線による渦巻文の一端と、その下に平行する2条の沈線区画が描かれ、沈線間には無節縄文が施される。一部で、沈線間に施された縄文が、下段の沈線より下にはみ出す箇所が確認される。破片の下半には煤の付着が認められる。447・448は胴部片で、いずれも浅い沈線で区画が描かれる。449の胴部片には、ごく浅い沈線で区画が描かれ、規矩状に折れ曲がる沈線以下に縄文が施されているのが確認できる。450も胴部小片で、浅い沈線で「厂」字状の区画を描き、区画内に縄文を施す。451の胴部片にも、2条の沈線で区画を描き、区画内に縄文を施す。外面には部分的に煤が付着する。452は磨石で、縁辺の一部を欠損する。掲載図の平面に残る使用痕のほか、反対側の一面には敲打痕が残る。砂岩である。

453はサヌカイトのUFである。掲載図下方の鈍角の端部に使用痕が認められる。

S K 1838 (454～462) 454～456は波状口縁片で、台形の波頂部を筒状に作り、口縁外形に沿った沈線とその内側に連弧となる沈線を描き、沈線間を縄文で充填する。457は緩やかな波状口縁の深鉢口縁片で、口唇部に凹部を作る。波頂部へ向けて浅い弧状の沈線を描き、沈線区画内に縄文を施す。458は器壁が比較的薄い胴部破片で、沈線で描いた連弧文の一部が認められる。縄文の有無は不明瞭である。459も深鉢の胴部破片で、ごく浅い沈線が3条施され、上位2本の沈線間に縄文が施された可能性があるが、器壁が風化しており不明瞭である。460・461は深鉢の底部片で、460の底部外面は剥離が著しく、敷物等の圧痕有無は不明である。全体的にオサエ・ナデ調整される。461の底部外面は板圧痕のように真っ平らで、工具ナデによる砂粒の動きが明瞭である。462は、凹石。両面とも使用するが、いずれもなだらかな凹みを持ち、一面には敲打痕もある。溶結凝灰岩である。

(7) 晩期埋設土器(第221～222図)

S X 1109 (463) 全体形が図上で復元できる突帯文の深鉢である。内面はオサエ後ナデ調整し、口縁部を外方へ短く折り曲げヨコナデ、外面の口縁端部直下に横方向、頸部に突帯を貼り付け、指頭で刻目を入れる。突帯以下は斜方向に条痕を施し、底部から上方へ向けて板状工具による削り上げが部分的に見られる。胴部の条痕文には、条痕の上からヨコナデを施す箇所も見られる。内面底部には炭化物の付着があり、炭素・窒素同位体比分析を行っている⁴⁾。

S X 1118 (464・465) 464は深鉢小片。465は深鉢底部片。底面中央がやや凹む。胎土に砂粒が多く、器壁が風化するため、工具による上方へのケズリが部分的に確認できるのみである。内面に炭化物の付着は認められない。

S X 1517 (466・467) 466・467は同一個体の深鉢胴部から底部にかけての破片である。底部から上方へのケズリ、内外面ともにオサエ後ナデ調整する。器壁には粘土接合痕が顕著に表れる。底面の圧痕は、胎土に砂粒が多く、器壁風化のため不明である。

S X 1590 (468・469) 468は深鉢で、口縁外面に

横方向から斜方向の板状具による条痕が施される。下半には底部から上方へ向けて板状具によるケズリが行われる。口縁外面に煤の付着があり、また内面底部には炭化物の付着と、ベンガラと思われる赤色顔料が認められた。炭化物については炭素・窒素同位体比分析を行い、内容物の同定を試みた。469は1条の刻目突帯をもつ深鉢。突帯下では横方向、胴部中位で斜方向に転じる条痕が施される。底部では上方への工具によるケズリが行われる。胴部下方の部品を欠するが、小径の平底底部は完存する。

(8) 中期～晩期 Pit (第223図)

Pit (470～487) 470は深鉢の胴部片で、きわめて浅い沈線1条で区画文が描かれ内側に無節縄文の施文が見られる。471は12次調査J-N14Pitから出土した深鉢の口縁破片。器壁が厚く、緩やかに内弯する。外面に沈線で緩やかに弧を描く。472～475は5次調査E-U23Pitから出土した深鉢片である。472は口縁片で、円棒状具で描く渦巻文の一部と、2条の連弧文の一端が残る。473は深鉢胴部片で、外面には押型で施文された文様があったと思われるが、傷が多く文様は不明である。474・475は深鉢の胴部片で無文である。476は深鉢の胴部片で、平行する沈線とその上部に斜行縄文が施される、477は深鉢胴部片で、外面には垂下する沈線1条と同じく垂下方向の条線を施す。478は深鉢の胴部片。外面に円棒状具による刺突文が二つ見られる。479は深鉢の胴部片で、外面に水平方向に隆帯が付され、隆帯下部には工具によるナデが施される。480は11次調査M-G11Pit出土の深鉢の胴部片。外部一面に条痕文が施される。481は11次調査M-F6地区のPitから出土した、晩期後半の浅鉢の口縁破片である。口縁外帯に緩い連弧文が2条あり、その下に三分岐二段の網状文を描く。また口唇部にも1条の沈線を巡らせ、内面は丁寧なナデ後ミガキを施す。482は12次調査J-W17Pit出土の深鉢の底部片。胎土に砂粒を多く含み、底部外面の圧痕等の有無は不明である。483は、J-O21のPit1から出土したサヌカイトの石匙である。484は13次調査J-Y7Pit出土のサヌカイト剥片である。485は13次調査J-U9Pitから出土した泥岩の切目石錘である。擦切溝は浅い。486は5次調査E-X12Pitから出土したチャートの石鏃である。基部

の挟りが浅い。逆刺の一方を欠損している。切先も欠いており、厚みも薄いことから、実用品とみるには疑問が残る。487は13次調査J-X7Pit出土のUF。半円形に刃部を作り出し、刃こぼれが認められる。

2 弥生時代

(1) 中期～後期堅穴建物(第224～225図)

SH 1026 (488～496) 488は広口壺の口縁片。内外面ともにヨコナデ調整する。内面の端部から約1.0cm内側のところに、瘤状突起を貼付けたと思われる装飾の剥離痕跡が残る。489は太頸壺の口縁小片。外反する口縁外面直下に半截竹管による直線文が4～5条施され、以下はナデ調整されたものと思われるが、胎土に砂粒が多く、器壁の風化により不明瞭である。490は太頸壺の口縁から頸部にかけての破片で、口縁外面に工具によるナデかと思われる調整があり、頸部に1条の沈線を巡らす。残存部片全体に、二次焼成を受けた被熱赤変が認められる。491は壺の頸部から体部上半にかけての破片で、体部に4条単位の直線文が描かれる。492～494は甕の口縁小片。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整され、492・494の口唇部には、刻目文が施される。495は完形の小型方柱状片刃石斧である。基部から装着部にかけての石材角を面取りしている。496は砂岩の石皿片。使用痕は一面しかなく、縄文時代のものを転用したものか。デンプン粒分析を行ったが、残存デンプンは検出されなかった。

SH 1305 (497・498) 497は壺の口縁小片。器壁の風化が著しく、調整不明。胎土は密である。498は渦巻状土製品である。幅約1.4cmの板状粘土を渦巻状に巻き締めて土師質に焼成したものである。

SH 1331 (499・500) 499は受口状口縁壺の口縁小片。口縁外面に櫛状工具による刺突を施す。500は受口状口縁甕口縁小片。口縁直下を極端に屈曲させ、上面には櫛状工具による刺突を細かい間隔で連続施文する。頸部直下には6～7本単位のハケ目を施す。煤の付着が頸部まで及ぶ。

SH 1333 (501・502) 501は土師器甕で、混入する古代遺物。胎土が粗く、砂礫が多く含まれる。502は弥生土器壺底部。外面の立ち上がりからミガキが丁寧に施される。内面にハケ状工具によるナデ

痕跡が薄く残るが、調査時の傷等で不明瞭である。

S H 1444 (503 ~ 505) 503は甕の底部片。外面立ち上がりに細かいハケ目が残る。胎土に2.0 ~ 3.0 mm大の砂粒を多く含む。504は壺の頸部片。内外面ともに丁寧なナデ調整をし、外面には櫛描直線文を描く。505は壺の頸部片。外面には櫛描直線文を描く。内面は器壁の風化が著しく砂粒が多く表出し、調整不明瞭。

S H 1639 (506 ~ 509) 506は壺の口縁小片。内外面ともにハケ調整された痕跡があるが、器壁の風化が著しく不明瞭。外面から内面へ向けて、径0.4cmの孔が2.0cm間隔で並列して穿孔される。507は壺の口縁で、口縁部のみ完存する。口縁端部がほぼ直立して立ち上がり、屈曲部まではタテハケ、直立する部分ではヨコハケに向きを変える。内面には短いピッチでヨコハケを施す。508は高杯の脚柱部。外面にはミガキを施したと思われるが、器壁の風化で不明瞭である。内部には、ヘラ状工具の圧痕が残る。509はSH1639に混入した須恵器杯身片。外面下半はロクロケズリ、上半から受部および内面見込みはロクロナデ、口縁部はヨコナデする。

S H 1641 (510) 高杯の脚柱部。外面のみ残る剥離片である。外面にはミガキ後1.5cm間隔で沈線を3条施す。

S H 1644 (511 ~ 519) 511は甕の口縁部片。内面から口縁部にかけてヨコナデし、口縁内面にヨコハケ、外面はタテハケを施す。512は壺の口縁部片。残存部全体にナデ調整された後、口縁内面に櫛状工具による刺突文を1条巡らせ、その下にタテハケを施す。513は壺の底部片。厚みのある底部から、外面への立ち上がりにかけて工具によるナデもしくはミガキが施されたものとみられるが、器壁の摩耗で不明瞭。内面は指オサエかと思われる。514は高杯の脚柱部片で、焼成不良で器壁の摩耗が著しいため調整が不明瞭であるが、外面中央に、直線文がかすかに残る。515は高杯の脚柱部片。外面はナデ、脚部内面はわずかに指オサエ後ナデで調整されているのが確認できる。516は高杯の脚柱部片で、全体的に摩耗が著しく、柱状部の断面が楕円形を呈する。外面には工具による縦方向のナデ、内面はナデ調整後、部分的に工具による横方向のナデが施される。

517は砥石で長さ11.2cmほどの不整五角形の柱状である。長軸方向の側面三面と端部の平坦面に使用痕が認められる。518・519はS H 1644混入の須恵器片で、518は蓋天頂部、519は身の口縁~受部破片である。

S H 1646 (520 ~ 528) 520は受口状口縁の甕口縁部片である。口縁外面に櫛状工具による刺突文が施されるが、器壁の摩耗が著しく調整が不明瞭である。521は壺口縁端部片で、大きく外反する口唇部に沈線4条を施す。口縁内面には櫛状工具により刺突を施し綾杉文を描く。522は小型壺で頸部以上を欠損する。器壁が摩耗しており不明瞭ながらも、全体的に工具ナデ後に体部上半に横方向のミガキおよび赤彩を施す。内面には、一部にハケ状に工具ナデの痕跡を残し、頸部へ向けてのシボリ痕も部分的に見られる。底部外面は、中央が凹み、粘土紐を巻いた不整六角形の原形を残している。523は壺の頸部~体部にかけての破片で、外面には9本単位のタテハケを全体に施した後、竹管による沈線6条で直線文を描く。直線文以下に、赤彩が部分的に施される。524は厚みのある壺底部片。外面立ち上がりにはハケ状工具による調整痕、内面見込み部には指オサエ・ナデ、立ち上がりにかけてヘラ状工具によるナデが施されるが、全体的に器壁の摩耗が著しい。525は壺の体部片。外面には不定方向のハケが残り、ハケを施した後にナデ調整されたものか。内面にもヨコハケが部分的に見られるが、外面以上に風化が著しく、調整不明瞭である。526は高杯の脚柱部片。外面は縦方向のミガキ後櫛描直線文を3段描く。内面はナデ調整する。527は脚付壺の台部片かと思われる。内面にわずかにハケ目を残すが、全体的に摩耗が著しく調整不明瞭である。528は磨製石斧かと思われる。断面が楔形で未成品であろうか。刃部の一端をわずかに欠損する。

S H 1645 (529 ~ 550) 529は受口状口縁の甕口縁部片。口縁外面に櫛状工具による刻目文が施される。530は甕口縁部片。外面はタテハケ後ナデ、内面は指オサエ後ナデ調整される。外面器壁に残る粘土接合痕が顕著で、この辺りまで煤が付着する。531は甕で口縁端部を欠損するが、頸部にかけてのヨコナデ、体部にはタテハケを施す。内面はヨコハケで調

整する。532は台付甕の台部片で、全体的に指オサエ後ナデ調整する。533・534は甕底部片で、外面の立ち上がりに、ごく一部ではあるがタテハケが明瞭に残る。533の内面にはヘラ状工具によるナデ調整が見られる。534の内面はナデ調整したものと思われるが残存部がわずかであり、不明瞭である。535の甕の底部片は全体的に器壁の摩耗が著しく調整不明である。536の甕底部片では、外面をタテハケ、内面は指オサエ後ナデ調整される。537は壺の口縁。頸部に細かいタテハケを施した後、突帯を貼り付け、突帯の上下に、竹管による刺突文を1列3段に配する。口縁内面には、櫛状工具による刺突で羽状文を巡らせ、その下に簾状文を施したかと思われるが器壁の摩耗により不明瞭。538は広口壺の口縁で、口縁部をヨコナデ、外面にタテハケ、内面には工具による横方向のナデを施し、口唇部に沈線1条を巡らす。539は壺の体部片。内面は器壁の摩耗により不明瞭ながらもオサエ後ナデ調整されたものかと思われる。外面には、頸部直下に竹管による刺突を1条、その下に6～7本単位の櫛状工具による直線文、さらにその下に5～6本単位の櫛状工具による波状文が描かれる。540は壺底部片。内面はオサエ後ナデ、外面はヘラ状工具によるナデで調整される。541は高杯の口縁部片。ヨコナデ後外面には横方向のミガキ、内面には縦方向のミガキを施したものとみられるが、器壁の風化により不明瞭である。胎土は精緻で、外面に鋭い稜をもつ。542は高杯の脚柱部片。内面はナデ調整、外面には縦方向のミガキをした後、半截竹管先端による刺突列を、2条の沈線を挟んで1列ずつ配し、その下に3条の沈線による直線文を施す。543は高杯の脚柱部片で、内面にはシボリ痕とナデ調整がみられる。外面には縦方向のミガキの後、櫛描直線文を2段施す。破片端部に透かし孔と思われる円孔の断片が1箇所確認できる。544・545は高杯の脚柱部片で、いずれも内面にはシボリ痕とナデ調整が、また外面には縦方向のミガキを施した後に、5～6本単位の櫛描直線文を3段配する。546はサヌカイトの凹基無茎鏃で、切先を欠損する。547～550はSH 1645混入の須恵器・土師器。547は須恵器蓋で口縁部片、548は須恵器隰の体部片で注口部以上を欠損する。549は須恵器

壺の口縁部、550は土師器甕の口縁部片である。

SH 1647 (551) 砂岩の砥石。展開する三面に顕著な使用面がみられ、裏面には自然礫面を残す部分もあるが、一部には使用面も認められる。

SH 1661 (552～554) 552は甕の底部片。器壁が摩耗するが内面はナデ、外面をハケ状工具によるナデとする。被熱による赤変が認められる。553は受口状口縁の壺口縁部。口縁外面に櫛状工具による刺突文を施し、以下には細かい櫛状工具による縦方向のハケ目を施す。内面は端部をナデ後、櫛状工具により、屈曲部までを縦方向、以下は横方向のハケ目を施す。554は小振りの壺で頸部以上を欠損する。器壁の剥落が著しく不明瞭であるが、外面は工具ナデ後にミガキを施したものとみられる。内面は見込み部から体部下半まで斜め方向のハケ、その直上を横方向の工具ナデ、頸部へ向けてシボリ痕を残しながらもナデ調整する。外面の下半に黒斑がある。

SH 1683 (555) 甕の底部片である。内面はオサエ後ナデ、外面はハケ状工具によるナデ調整をする。被熱による赤変が見られる。

SH 394 (556～559) 556は壺の口縁片。器壁の風化が著しく、調整不明である。557は壺の底部片。内面はオサエ後工具によるナデ、底部外面は指頭大に凹ませ、立ち上がりにはハケ状工具による斜め方向にナデ上げて調整する。558は高杯の杯部片。風化が著しく不明瞭であるが、内外面ともにハケ状工具によるナデの後、ミガキを施したものとみられる。559は高杯の脚柱部片。器壁の風化が著しく、内外面ともにハケ目の一部が見られるが詳細は不明である。

(2) 中期土坑・溝・Pit (第226図)

SK 1027 (560～563) 560は壺の口縁小片。ナデ後、外面には3～4本単位の櫛描直線文を施すが、胎土が粗く器壁の風化も著しいため調整・文様等の詳細は不明である。561も壺の口縁小片で、ナデ後、外面にはタテハケ、内面には4～5本単位の櫛描直線文を施した後、3段の波状文を描く。口唇部にも櫛状工具により押しきした文様が見られる。562は甕の口縁片。オサエ後ナデ調整し、外面には4本単位のタテハケを施し、口唇部に刻目文を入れ、内面には頸部から口縁にかけてヨコハケを施す。外面の口

縁直下まで煤の付着が確認できる。563は打製石斧の未成品かと思われる石製品である。一面は分割破面で、上下端部に叩いて加工した痕跡を残す。

S K 1038 (564・565) 564は壺の体部小片。内面はオサエ後ナデ、外面はハケ目を施す。565は壺の底部片である。内面はオサエ後ナデ、外面もナデかと思われるが、胎土に砂粒を多く含み、器壁が風化しているため調整が不明瞭である。

S K 1050 (566) 566は泥岩の磨製石斧の刃部片である。破面以外の各面は丁寧に研磨されており、石材の層理が表出する。

S K 1418 (567～569) 567は壺の頸部片である。内面はナデ、外面には4本単位の櫛描直線文が4段、その下に波状文が描かれる。568は甕の底部片。底部外面はナデ、立ち上がりに櫛状工具によるタテハケ、内面はオサエ後ナデ調整される。569は壺の体部破片。内面はナデ、外面には櫛描直線文が施される。

S K 1653 (570～573) 570は厚口鉢の口縁端部片。内面はオサエ後ナデ調整し、指頭圧痕を明瞭に残す。外面には櫛描直線文を施し、部分的にナデ消す。571は壺の口縁小片。内外面ともナデ調整し、口唇部に刻目文を施す。572は壺頸部片。内面はオサエ後ナデ、外面にはタテハケ後4本単位の櫛描直線文を施す。573は壺の底部片。内面はオサエ後ナデ、外面立ち上がりには縦方向のハケ目後ナデ調整される。

S K 1654 (574) 壺の頸部から体部上半にかけての断片的な破片。内面はオサエ後ナデ、外面はハケ目後にミガキを施し、頸部と体部上半には櫛描直線文を描く。

S D 1042 (575～578) 575は細頸壺の口縁片。内面はナデ、外面はナデ後4～5本単位の櫛状工具による波状文を2段施し、その下に櫛描直線文を描く。576は壺の体部片。内面はオサエ後、上半は横方向のハケ目、下半は工具ナデ、外面はハケ目後ナデ調整し、5本単位の櫛描直線文を上下2段に描く。577は壺の底部片。内面はナデ、外面はナデ後一部にミガキかと思われる調整が見られるが、残存部位がわずかで不明瞭である。578は壺の体部から底部にかけての断片的な破片を図上復元する。内面はオサエ後ナデ、外面の底部は工具ナデ、立ち上がりはナデ後縦方向のミガキ、体部では横方向のミガキに

転じ、櫛描直線文を3段施す。そのうち、上2段の櫛描直線文上には、2本単位の櫛状工具による連弧文を4セット施文する。

Pit (579～586) 579は甕もしくは壺の口縁片。内面はナデ、外面には粗い斜め方向のハケ目の上に、横方向の櫛状工具による直線文が3単位描かれる。口縁外面は大きく剥離欠損し、口縁内面に瘤状突起の剥離痕跡が残る。全体的に被熱による赤変が見られる。580は壺の口縁で、全体的に器壁が剥落しており、調整が不明瞭である。口唇部に刻目文を入れたと思われる凹みがわずかに確認できる。581は壺の口縁片で、器壁の風化が著しく調整が不明瞭である。口縁内側に瘤状突起が付される。582は壺の口縁。内面はナデ、外面にはタテハケ後、半截竹管による横線文を2段施す。口唇部には櫛状工具による刺突文を入れる。583は壺体部片。内面はナデ、外面にはナデ後半截竹管による直線文を2段描く。584は壺の頸部から体部にかけての破片。内面はオサエ後ナデ、外面はタテハケ後ナデを施し、半截竹管による直線文を7条描く。585は壺の体部片。内面はオサエ後ナデ、外面には丁寧にナデの後、櫛描直線文を施す。586は甕の口縁片。内面をナデ、口縁部をヨコナデ、外面にはタテハケ後口縁直下に半截竹管による沈線を4条描く。

3 古墳時代後期以降

ここでは、古墳時代後期以降の遺構出土遺物について、遺構の種類ごと（堅穴建物・掘立柱建物・土坑など）に、番号順に報告する。堅穴建物出土遺物には、カマド・支柱穴・周溝の出土品を含めたほか、調査時にその建物の貯蔵穴・関連遺構と認識されていた土坑や検出時の出土品も関連遺物として一部提示した。掘立柱建物や柵として纏まらない小土坑(Pit)の出土品については、掘立柱建物出土品の次に配し、明らかに紛れ込みと考えられる縄文時代や弥生時代の遺物については、次節の遺構外出土遺物に含めた。

(1) 堅穴建物 (第227～241図)

S H 701 (587～592) 主として貯蔵穴(中央東土坑と南東土坑)からコンテナケースに1箱ほど出土した。須恵器高杯(587)・鉢? (588)・壺(589)、

土師器甕 (590～592) などがある。587 は脚部中ほどに二重沈線が施された在地窯系⁵⁾ 無蓋高杯で、脚端部を欠く。図示した土師器甕はいずれも小型甕だが、長胴甕の破片も多くある。

S H 1011 (593) 砂岩製の砥石 (593) の他に、図化していないが土師器長胴甕の頸部や体部の破片が多数 (コンテナケース 1/3 箱ほど) ある。

S H 1044 (594～596) 須恵器杯・壺 (594)・甕 (595)、土師器甕 (596) などがある。594 は猿投窯産の短頸壺である。595 は軟質焼成で、外面にはタタキ目とカキ目、内面には同心円文当具痕が認められる。596 は口縁部断面が「く」の字状を呈する甕で、内面は剥落が激しいため調整不明だが、体部外面にはタタキ成形を思わせる工具痕の上にヨコハケのような痕跡が認められる。

S H 1057・S K 1061 (597～608) 須恵器杯H蓋 (597・598)・杯H身 (599)・甕 (600)・壺瓶類 (601～603)、土師器甕 (604～607)、轆羽口 (608) がある。時期を異にする2遺構からの出土品であるが、調査時に区別せず取り上げられた遺物が多く、竪穴建物 S H 1057 出土と特定できるものは須恵器杯H蓋 (597)・甕 (600)、轆羽口 (608)、土坑 S K 1061 出土と特定できるものは須恵器杯H身 (599)・壺 (601)、土師器甕 (604・607) である。各遺構出土と特定できる遺物の間に明確な時期差は認められない。

S H 1058 (609) 須恵器杯H蓋・杯H身、土師器甕 (609) がある。須恵器杯身は蓋受部径約 12.0cm と小さく、杯蓋も小型化が進んだものである。

S H 1063 (610) 土師器小型甕の小片 (610) がある。

S H 1164 (611・612) 須恵器高杯 (611)、土師器甕 (612) などがある。611 は在地窯系高杯脚端部の小片である。

S H 1209 (613) 在地窯系の須恵器無台杯 (613) が1点のみ出土した。

S H 1213 (614) 土師器甕 (614)、須恵器杯・甕などが出土した。614 の外面に施されたハケ目は比較的細かい。

S H 1220 (615) 土師器甕、須恵器杯H蓋・無台杯 (615)・甕などが出土した。615 は西ヶ谷2号窯出土品に似る。

S H 1223 (616～623) 遺物は、主として建物北

東隅の貯蔵穴1、南東隅の貯蔵穴2から出土したもので、貯蔵穴1出土品には、須恵器杯B蓋 (616)・杯 (617)、土師器甕 (618)、土錘 (622)、台石 (623)、貯蔵穴2出土品には、土師器甕 (619)・甕 (620) がある。ただし、貯蔵穴1は明らかに壁周溝と平面的に重複する形で検出されており、本来 S H 1223 に伴う貯蔵穴とは考えにくい。なお、橙褐色硬質の焼き上がりを示す 616 は、胎土の特徴から岡山1・2号窯⁶⁾ 産 (以下、岡山窯産と称する) とみられる。**S H 1318** (624～626) 須恵器杯H蓋 (624・625)・高杯、土師器長胴甕 (626)・小型甕などがある。624・625 は在地窯系の杯H蓋で、残存状態が悪く復元値の信頼度は低い、口径 13.0～13.5cm 程度と推定される。

S H 1320 (627～634) 須恵器杯H蓋・杯H身 (627・628)・提瓶 (629)、土師器甕 (630～634)・台付椀などがある。627 は H-44 号窯に類品が認められる猿投窯系、628 は在地窯系で岡山6号窯出土品に似る。

S H 1321 (635～638) 須恵器杯H蓋 (635)・杯H身 (636・637)、土師器甕 (638) などがある。635～637 はいずれも在地窯系の須恵器で、杯身の口縁部の立ち上がりが矮小化している。

S H 1322 (639～641) 須恵器杯H蓋 (639)・杯H身、土師器甕もしくは鍋 (640)、砥石 (641) などがある。639 は在地窯系須恵器で、口縁部の立ち上がりは矮小化しており、最大径は 12.8cm である。640 は土師器甕もしくは鍋の把手である。641 はよく使い込まれた砥石で、研ぎ減りした部分で折損している。

S H 1436 (642～645) 南東土坑から出土した土師器甕 (642) と東土坑から出土した製塩土器 (643～645) があるが、平面精査時に東土坑は S H 1436 の壁周溝を切る形で検出されている点で注意を要する。642 は内外面ともに細かなハケ目が認められる小型甕。643～645 は製塩土器の杯部で、器壁は非常に薄い。手づくね成形であることに加え、小破片であるため復元口径の信頼度は高くないが、口径が 6.0～7.0cm ほどであるため美濃式の可能性が高い⁷⁾。643・645 と 644 は胎土や焼け具合が異なるため、2個体はあると推測される。

S H 1438 (646～665) 須恵器杯H蓋 (646・647)・杯H身 (648・649)・杯B (650)・高杯 (651)・横

瓶・甕 (652)、土師器杯 (656)・甕 (657～664)、製塩土器 (653～655)、鞆羽口 (665) がある。建物と平面的に重複する北東土坑と中央土坑の出土品 (北東土坑：648・659・662・663、中央土坑：647・651・653・655) も合わせて提示しているが、北東土坑を貯蔵穴と見なしうるのに対し、土層断面で見ると中央土坑は建物よりも新しい点に注意を要する。須恵器には複数の産地の製品が含まれており、646・649 (・650) は猿投窯系、647・648 は湖西窯産、それ以外は在地窯系の製品とみられる。656 は内面に放射状暗文が施される杯の小破片である。土師器甕は小型甕 (657・658) と長胴甕 (659～664) があり、受口状の口縁形状を呈するいわゆる近江型の甕 (663) が含まれる。653～655 は製塩土器の杯部で、器壁は非常に薄い。手づくね成形であることに加え、小破片であるため復元口径の信頼度は高くないが、口径が 6.0～7.0cm ほどであるため美濃式の可能性が高い。665 は鞆羽口で、残存状態は非常に良いが、炉に取りつく先端は剥落しているためか、鉾滓等の付着は認められない。建物内の重複する遺構の新旧関係を整理しきれないが、それぞれに含まれる遺物に明確な時期差は認められない。

S H 1450 (666～669) 建物埋土や壁周溝から遺物の出土はないが、建物と平面的に重複する北東土坑から須恵器杯 H 蓋 (666)・杯 H 身 (667)、小土坑から土師器甕 (668・669) が出土した。666・667 は小型化が進んだ猿投窯系の杯 H で、H-16 号窯や I-17 号窯出土品に似る。668・669 はどちらも小型甕で、669 の内外面に認められるハケ目は細かい。

S H 1496 (670～674) 須恵器杯 H 蓋 (670)、土師器甕 (671～673)、製塩土器 (674) などがある。小型化し稜線の退化が進んだ 670 の特徴は、猿投窯の I-17 号窯出土品に似る。671 は口縁部内面のハケ目が細かいのに対し、体部内外面のハケ目は非常に粗い。672 は大型の甕で、残存状態が悪いため復元口径の信頼度は低いが、30cm を超える。674 は口縁部の歪みが大きく底部を欠くが、製塩土器の杯部とみられる。

S H 1515 (675・676) 須恵器杯 H 蓋 (675)、土師器甕などが少量ある。また、杯 H 身 (676) は表土掘削中に取り上げられているが、調査時には建物に

属する遺物と認識されていたようである。675・676 とも在地窯系の杯 H で、両者の間に顕著な時期差は認められない。

S H 1516 (677) 遺物は少なく、貯蔵穴出土の土師器甕 (677) 以外は、須恵器と土師器の小片が各 1 点のみである。677 は甕の下半部で、外面には底部まで細かなハケ目、内面にはハケ目が残る上部を除き、ヘラケズリ調整が認められる。

S H 1562 (678～684) 須恵器高杯 (678)・甕 (679)、土師器甕 (680・681)・甕 (682・683)、砥石 (684) がある。678・680・684 は建物床面で検出された貯蔵穴 (S K 1573 及び L-D21Pit2)、679・683 はカマド周辺からの出土品で、678・679 はいずれも極めて小さな破片である。683 は底部に半月状の穴が 2 つあけられた甕で、682 と胎土や焼け具合が似ている。

S H 1598 (685) 遺物は少なく、貯蔵穴出土の土師器甕 (685) を図示したが、小片である。

S H 1606 (686・687) 須恵器杯 H 蓋 (686)、土師器甕 (687) がある。686 は小片であるが、肩部に稜を有する特徴は猿投窯の H-15 号窯出土品に似る。687 は内外面のハケ目が細かい小型甕である。

S H 1607 (688～694) 須恵器杯 H 蓋 (688)・杯 H 身 (689・690)・高杯蓋 (691)・平瓶 (692)、土師器甕 (693・694) がある。688・690 は在地窯系杯 H である。690 は小片で復元口径の信頼度は低いが、杯蓋 688 と比べ口径が格段に大きいため、有蓋高杯の杯部である可能性も考えられる。689 は猿投窯系杯 H 身で、H-44 号窯や H-15 号窯出土品に似る。691 は内面に同心円文当具痕が残る高杯の蓋で、黒色粒が多量に含まれる粗い胎土の質感や、色調・焼成は岡山 6 号窯の製品に似る。

S H 1617 (695～703) 須恵器杯 H 蓋 (695)・杯 H 身 (696・697)・高杯 (698)・壺 (699)・横瓶 (700)・提瓶 (701)、土師器甕 (702・703) がある。猿投窯系の 701 以外は在地窯系の製品である。698 は三方透かしの高杯脚部で、外面の二重沈線は全周しない。701 は外面に平行タタキとカキ目調整が認められる大型の提瓶で、体部中央に沈線が施されており、自然釉の降下が目立つ。

S H 1624 (704～721) 須恵器杯 H 蓋 (704・705)・杯 H 身 (706～710)・高杯蓋 (711)・高杯 (712)・

壺瓶類 (713)、土師器甕 (714～720)・把手 (721) がある。須恵器杯Hには在地窯系 (704・706・708～710) と猿投窯系 (705・707) の製品が混在しており、705・707は、H-44号窯出土品に似る。707の底部外面にはヘラ記号のような十字線と、不明瞭な赤彩が認められる。714～720はいわゆる伊勢型の甕で、716のみ小型品の可能性がある。口縁部が薄いものと、肥厚するものが混在する。

S H 1628 (722) 須恵器杯・甕 (722)、土師器長胴甕などがある。722は在地窯系の甕の口縁部である。

S H 1631 (723～749) 須恵器杯H蓋 (723)・杯H身 (724～734)・高杯 (735・736)・甕? (737)、土師器甕 (738～745)・甌 (748・749)・把手 (746・747) がある。須恵器杯Hは在地窯系 (723～726) と猿投窯系 (727～734) の製品が混在しており、727～734はH-44号窯出土品に似る。735は在地窯系の高杯の杯部で、接合痕跡から脚部には三方透かしが施されていたことがわかる。杯部外面には中央の段の上下に工具による連続刺突文が施される。甕の口縁部と思われる737にも、同様の浅い連続刺突文が認められる。738～743はいわゆる伊勢型の甕で、口縁部が薄いものと、肥厚する形状のものが混在する。745は鉢とも呼ぶべき大型品である。甌 (748・749) と把手 (747) は胎土や色調が酷似しているため、同一個体かもしれない。

S H 1648 (750～752) 須恵器杯H身 (750)、土師器甕 (751)・甌 (752) などがある。750は在地窯系の杯身で、自然降灰のためやや不明瞭だが、底部外面にロクロケズリ調整の痕跡が確認できる。

S H 1649 (753～760) 須恵器杯H蓋 (753)・杯H身 (754～756)・壺 (757)・甕 (758)、土師器鍋もしくは甌の把手 (759・760) などがある。須恵器杯Hはいずれも在地窯系で、756はS H 1648出土の750と酷似する杯身片で、どちらも割れは新しい。

S H 1650 (761～770) 須恵器杯H蓋 (761・762)・杯H身 (763～765)、土師器高杯 (766)・甕 (767～770) がある。須恵器杯Hはすべて在地窯系で、形態の特徴はヲノ坪窯・内多窯出土品に似る。767・768は口縁部断面が短い「く」の字状を呈する土師器甕 (もしくは鉢) で、同一個体の可能性がある。

S H 1651 (771～776) 須恵器杯H蓋 (771・772)・

杯H身 (773)・壺 (774)、土師器高杯 (775)・把手 (776) がある。須恵器杯Hは在地窯系 (772・773) と猿投窯系 (771) が混在し、771はH-61号窯出土品に似る。775は土師器高杯の脚部で、内面には粘土紐を巻いた痕跡が明瞭に残る。

S H 1652 (777～781) 須恵器杯H身 (777・778)、土師器高杯 (779)・甕 (781)・把手 (780) があるが、いずれも破片は小さい。

S H 1659 (782～791) 須恵器杯H蓋 (782)・杯H身 (783～785)・甕 (786)、土師器甕 (787～790)・把手 (791) がある。須恵器杯Hはすべて在地窯系で、大口径であるが杯身の口縁部の立ち上がりはやや低い。787～789は口縁部の断面形状が「く」の字状を呈する。

S H 1660 (792～795) 須恵器杯H蓋 (792)・杯H身 (793)・高杯蓋? (794)、土師器甕 (795) がある。図示したものを含め小破片が多いが、残存度の高い793は在地窯系で、口径は大きい口縁部の立ち上がりは低い。

S H 1662 (796～804) 須恵器杯H蓋 (796)・杯H身 (797・798)・壺 (799)、土師器甕 (800～803)・高杯 (804) がある。貯蔵穴2出土の796と貯蔵穴1出土の798は明らかに時期が異なる。調査時に貯蔵穴とされた土坑と建物との関係は、土層断面図からは確定できないが、建物埋土出土797が796とはほぼ同時期のものであるため、貯蔵穴2を建物に伴う土坑とみなし、貯蔵穴1はS H 1662本体とは時期を異にする土坑と考えておく。

S H 1663 (805～807) 須恵器杯H身 (805)、土師器甕 (806)・竈? (807) がある。図化したものを含め小破片が多い。

S H 1664 (808～817) 須恵器杯H蓋 (808～810)・杯H身 (811～814)・壺類 (815・816)、土師器甕 (817) がある。811は猿投窯系杯身である。815は隼と思われるが、穿孔部を欠く。816は二条の沈線の間に櫛描波状文が施された壺の口頸部である。

S H 1672 (818・819) 須恵器杯、土師器甕 (818)・把手 (819) がある。図示したものを含め小破片が多い。

S H 1674 (820～842) 須恵器杯H蓋 (820・821)・杯H身 (822～825)・高杯蓋 (826)・高杯 (827)・壺 (828)・把手 (829)、土師器高杯 (830)・甕 (831

～833)・甌(834)・把手(835・836)、土錘(837～840)、石製紡錘車(841)、砥石(842)がある。825はS H 1682出土品と接合でき、同じくS H 1682出土の871も胎土・形状からみて同一個体である可能性は高いが、接合できない。828は在地窯系の壺で、S H 1821とS K 1673から出土した破片が接合できた。831は口縁断面が「く」の字状を呈するもので、833はいわゆる伊勢型だが肥厚しない口縁形状のものである。

S H 1675 (843～859) 遺物量はコンテナケース2箱と多く、図化できたものには、須恵器杯H身(843～850)・高杯(851)・壺(852)・鉢?(853・854)・甕(855)、土師器台付椀(858)・甕(856・857)、砥石?(859)がある。須恵器杯H身が多いのに対し、確実な杯H蓋は認められない。846は猿投窯系で、焼成不良の848もその可能性がある。在地窯系のものには内多窯出土品の類品(843・844)が含まれる。853・854はいずれもロクろ水挽き成形後、外面を縦方向に削り上げており、成型手法のみならず、胎土・色調・焼成も酷似するため、同一個体とみられる。鉢?としたが、両者の復元径は随分異なり、全体像は不明である。

S H 1676 (860～867) 遺物量はコンテナケース約1.5箱で、土師器甕の破片が多い。須恵器杯H蓋(860)・杯H身(861・862)土師器甕(863～867)がある。床下土坑出土の860はS H 1694貯蔵穴出土品と接合した。861は猿投窯系である。土師器甕は、いずれも口縁断面が「く」の字状を呈するが、胎土は863・865が比較的精良であるのに対して、864と底部の866・867は粗雑である。

S H 1680 (868・869) 重複する2棟の竪穴建物のうち、平成22年度のトレンチ調査で南側の建物(S H 1680)から出土したとされる遺物に、須恵器杯H身(868)・土師器甕(869)がある。ただし、S H 1680より古いとしていたS H 1688との新旧関係を、第12・13次調査では逆に認定しているため、これらの遺物が本来どちらの建物の埋土に含まれていたかは不明である。868はやや焼成不良気味の在地窯系杯H身である。869は口縁断面が「く」の字状を呈する長胴甕で、胎土は比較的緻密で黄橙色を呈する。

S H 1681 (870) 遺物は少なく、土師器甕(870)

の小破片があるにすぎない。

S H 1682 (871～887) 遺物量はコンテナケース2箱と多いが、須恵器は杯H身(871)などの破片が数点ある程度で、大半は土師器甕・鍋である。須恵器杯H身の口縁部の中には、S H 1674出土の825と接合できるものがあり、接合できない871も、同一個体とみられる。土師器甕・鍋は、いずれも口縁断面は「く」の字状を呈し、胎土は粗雑で器壁は厚いものが多い。

S H 1684 (888～903) 須恵器杯H蓋(888・889)・杯H身(890～893)・鉢?(894)・甕(895～897)、土師器甕(898～901)・把手(902)、棒状土製品(903)がある。緻密な胎土で丁寧な作りの888は、猿投窯産の可能性がある。土師器甕は、いずれも口縁断面が「く」の字状を呈するもので、胎土は粗雑で器壁は厚い。土師質焼成の903は、両端を欠いており具体的な器種はわからないため、棒状土製品としたが、土師器の把手かもしれない。

S H 1685 (904～907) 須恵器杯H(904・905)・隄(906・907)などがある。904は杯H蓋の天井部もしくは杯H身の底部の破片。905は杯H身で蓋受部を欠く。

S H 1688 (908～934) 須恵器杯H蓋(908・909)・杯H身(910～915)・甕(916・917)・甌(918)、土師器椀(919)・甕(920～928)・把手(929)、土錘(930・931)、砥石(932～934)がある。須恵器杯Hのうち、908～911は猿投窯系の製品で、908と910は組み合わせて焼成したと思われるほど、口径や焼け具合が似通っている。912・913は内多窯出土品に形態が類似する。917は外面に平行タタキ目、内面には細同心円文当具痕、器表には黄土の塗布が認められる甕で、猿投窯系の製品である。919は器壁が厚く、胎土が粗雑な土師器椀。920～928は土師器甕としたが、口縁部のみ的小片には壺が含まれているかもしれない。928は台付甕の台の部分で、著しく摩滅しているため、下端部は本来の形状を留めていないかもしれない。930は両端、931は片側の端部を欠くため全形は不明であるが、細長い形状の土錘としては大型品である。932～934は石皿や台石を転用したとみられる砥石。なお、S H 1680出土品として図示した868・869が本来S H 1688の埋土に含ま

れていた可能性については、既に述べた通りである。

S H 1689 (935～937) 須恵器杯H蓋(935)、土師器甕(936・937)などが少量ある。須恵器は細片ばかりだが、935は肩部の稜線の特徴から猿投窯系とわかる。936は胎土が比較的精良な小型甕で、胎土が粗雑な937は長胴甕とみられる。

S H 1690 (938～941) 須恵器杯H蓋(938)、土師器甕(939・940)、砥石(941)などが少量ある。須恵器は細片ばかりだが、938は肩部の稜線の特徴から猿投窯系とわかる。940は土師器長胴甕で、器表面が摩滅しているが、口縁端部の上端をやや摘み上げたような伊勢型甕に特徴的な形状の名残が認められる。941は磨石を転用した砥石。

S H 1694 (942～946) 須恵器杯H蓋(942・943)・杯H身(944・945)・甕(946)などがある。貯蔵穴から出土した須恵器杯H蓋の破片は、S H 1676床下土坑出土品(860)と接合できた。946はやや焼成が甘い須恵器甕で、猿投窯系の製品とみられる。

S H 1714 (947～958) 遺物量はコンテナケース約2箱で、土師器甕の破片が多い。須恵器杯蓋g(947～949)・無台杯(950～952)・壺(953)・甕(954)、土師器甕(955～958)などがある。小口径の947は杯蓋gとしたが、壺瓶類に伴うものかもしれない。また、950は杯H蓋との識別が難しい器形であるが、組み合うべき杯H身の破片がない一方で、杯蓋gは複数個体認められるため、杯身の可能性が高いと考えた。

S H 1805 (959～965) 遺構の残存状態が非常に悪く、調査時に関連遺構と認識された北東貯蔵穴と南東土坑からの出土品のみである。須恵器杯H蓋(959)・杯H身(960～963)・壺甕類、土師器壺甕類(964・965)、鞆羽口があり、北東貯蔵穴からは960・962・963、南東土坑からは959・961・964・965が出土した。960はやや瓦質に焼けた焼成不良品で、S H 1805北東貯蔵穴とS H 1814から半分ずつ出土したものが接合し、ほぼ完全な形に復元できた。

S H 1808 (966～973) 遺物量はコンテナケース3箱で、土師器甕の破片が多い。須恵器杯H蓋(966)・甕、土師器甕(967～972)・把手(973)などがある。966は内多窯出土品に形態が類似する。土師器甕は、口縁断面が「く」の字状を呈する甕(970・971)と

いわゆる伊勢型甕が混在するが、970は小破片で、971は器壁の摩耗が特に著しい。

S H 1813 (974～1010) 遺物量はコンテナケース約5箱と多い。須恵器杯H蓋(974～982)・杯H身(983～990)・甕(991・992)・甕(993)、土師器鉢(994)・甕(995～1003)・甌(1005)・鍋(1006・1007)・甌もしくは鍋(1004)、砥石(1008～1010)がある。須恵器杯Hには猿投窯系のもの(977・980・986)以外に在地窯系の複数産地の製品が含まれているようである。完形に近い993は在地窯系の甕で、体部外面には平行タタキ、内面には同心円文当具痕が認められる。タタキ目の上には何本もの弱い沈線が広範囲にみられるが、文様として施されたものか否かは判断がつかない。大量に付着した自然釉から、甕は正位置で置かれ、内部に径約14.0cmの器物を入れて重ね焼きしたことが知れる。土師器は、器壁が厚く粗雑な胎土の鍋・甕が多い。994は鉢としたが、器表面の摩耗が著しく、上端部も擬口縁の可能性があり。砥石3点は磨石や石皿などの転用品とみられる。

S H 1814 (1011～1034) 遺物量はコンテナケース5箱ほどで、土師器甕の破片が最も多い。須恵器杯H身(1011～1014)・横瓶(1015)・甕(1016)、土師器椀(1017)・甕(1018～1028)・甌(1029)・把手(1030～1032)、砥石(1033・1034)がある。須恵器杯Hには猿投窯系(1011)と在地窯系(1012～1014)のものがあるが、明らかに時期が異なる1011は混入品であろう。土師器は、器壁が厚く粗雑な胎土のものが大半を占める。1029は甕の下半部に似た形状で、器面が摩滅しているため不明瞭だが、底部中央の円孔は工具によってあけられたように見えることから甌とした。1032と胎土や焼成が似る。砥石2点は石皿の転用品とみられる。

S H 1818 (1035～1067) 遺物量はコンテナケース5箱ほどで、土師器(弥生土器片を含む)の破片が最も多い。須恵器杯H蓋(1035～1040)・杯H身(1041～1052)・壺(1053・1054)・横瓶(1055)、土師器椀(1056)・高杯(1057)・甕(1058～1066)、砥石(1067)などがある。須恵器杯蓋は猿投窯系製品は認められないが、壺と横瓶は3点とも猿投窯系とみられる。1054は肩部に沈線と櫛描波状文が施される壺で、一見初期須恵器のようにも見えるが、文

様は西山8号墳出土品⁸⁾よりも退化している印象を受ける。1055は大型の横瓶で、体部を成形時に円盤閉塞した部分の破片である。内面の閉塞部付近に自然釉が多く付着していることから、頸部を焚口に向け、残存部を下にして、立てる形で窯詰めして焼いたものらしい。1057は土師器高杯の屈曲する脚部である。土師器甕は、その多くは口縁断面が「く」の字状で端部は丸いが、1062・1063は端部に面をもつ。SH 1820 (1068～1080) 遺物量はコンテナケース2箱ほどで、土師器の破片が最も多いが、石製品が目立つ。須恵器杯H蓋(1068)・杯H身(1069～1071)・高杯?(1072)・甕(1073)、土師器甕(1074・1075)・甌(1076)、台石(1077)・砥石(1078～1080)などがある。図示した須恵器はすべて在地窯系で、杯Hはヲノ坪窯や内多窯出土品に似た特徴を有する。1072は全体像が不明だが、大型の無蓋高杯の杯部と考えた。外面に2条の稜が巡り、櫛描波状文のような工具による文様が施されているように見えるが、自然釉の剥離で器表面が荒れているため判断がつかない。土師器甕は、いずれも口縁断面が屈曲の緩やかな「く」の字状を呈するが、比較的緻密な胎土である。1076は把手が2つとも残存する甌で、底部の大半を欠くが、おそらく半月形の孔が2つあけられていたとみられる。

SH 1831 (1081～1083) 遺物は少なく、貯蔵穴とされる土坑から須恵器杯H身(1081)、土師器甕(1082)・鍋もしくは甌(1083)などが出土した。1081は在地窯系の焼成不良品で、外面にはロクロケズリ調整が広範囲に施されている。1082は小型甕。1083は把手。

SH 1832 (1084～1090) 須恵器杯H蓋(1084～1086)・杯H身(1087)・壺(1088)・甕、土師器甕(1089・1090)があるが、全体に残存状態は悪く、図化した遺物も小片ばかりである。須恵器はいずれも在地窯系で、杯Hにはヲノ坪窯出土品に似た特徴を有するもの(1084)がある。1088は壺瓶類の口縁部で、大きく歪んでいる。1089は胎土が緻密な小型甕で、1090は粗雑な胎土の甕である。

SH 1834 (1091～1111) 須恵器杯H蓋(1091～1095)・杯H身(1096)・杯H(1097)・高杯(1098)・甕、土師器甕(1099～1109)・鍋もしくは甌(1110・

1111)があり、図化したものの他に、非常に軟質に焼けた須恵器甕がある。西ヶ谷1号窯出土品に似た1095・1096は、他の須恵器杯Hよりも明らかに新しく、混入品である可能性が高い。断面実測した土師器甕のうち、1105・1106は1104と似た口径の小型甕である。

(2) 掘立柱建物など(第242～243図)

まず掘立柱建物の柱穴、次に建物として纏まらなかった柱穴状の小土坑(Pit)から出土した遺物について、実測図掲載分を中心に説明する。出土遺物の実測図を複数提示できる小土坑は先にまとめ、それ以外は遺物の種類ごとに配列した。掘立柱建物の個々の柱穴から出土した遺物の内容については、第31表を参照されたい。

SB 1065 (1112・1113) いずれも土師器甕の口縁部小片で、1112は小型甕、1113はいわゆる伊勢型の甕である。

SB 1067 (1114) 土師器甕の小片で、口縁部が肥厚するいわゆる伊勢型の甕である。

SB 1072 (1115) 岡山窯産とみられる須恵器の杯で、やや大型の杯Bであろう。

SB 1081 (1116) 土師器甕の口縁部小片で、橙色系で緻密な胎土である。

SB 1089 (1117) 須恵器杯類の小片で、岡山窯産の可能性はある。

SB 1090 (1118～1121) いずれも岡山窯産の可能性が高い須恵器で、1118～1120は杯蓋b、1121はおそらく盤の口縁部である。1120は壺類の蓋かもしれない。

SB 1091 (1122) 岡山窯産の可能性が高い須恵器で、口縁上端部に面を有する特徴から盤の口縁部と推定される。

SB 1226 (1123～1130) 須恵器杯蓋b(1123・1124)・杯B(1125・1126)・杯(1127～1129)・甕(1130)があり、岡山窯産の可能性が高いものが多い。

SB 1314 (1131・1132) 北西隅柱穴からセットで出土した、ほぼ完形の在地窯系須恵器杯Hである。柱穴に抜き取り穴が掘り込まれた痕跡は無いが、柱痕跡の埋土中位からの出土であるため、建物廃絶時に周囲を大きく乱すことなく柱を抜き去り、埋納したものと考えられる。

S B 1440 (1133) 須恵器短頸壺の肩部分の小破片で、猿投窯系の製品の可能性がある。

S B 1539 (1134) 土師器長胴甕の体部片である。橙色系の色調で、比較的精良な胎土である。

S B 1557 (1135) 在地窯系とみられる須恵器杯H蓋である。

S B 1571 (1136) 土師器甕の口縁部である。口縁部が肥厚するいわゆる伊勢型の小型甕で、内外面とも摩耗が著しい。

S B 1574 (1137・1138) どちらもいわゆる伊勢型土師器甕の口縁部である。1138は小破片のため、実測図の傾きの信頼度は低い。

S B 1575 (1139～1141) 1139・1140は猿投窯系とみられる須恵器杯H身で、異なる柱穴から出土していて接合できないが、同一個体の可能性が高い。1141は土師器長胴甕の口縁部で、外面のハケ目が比較的細かい。

S B 1577 (1142) 在地窯系須恵器甕の口縁部小片である。

S B 1613 (1143) 在地窯系須恵器杯H身の小片である。実測図の復元径の信頼度は低い。

S B 1614 (1144) 土師器鍋や甑の把手で、小型品である。他に、須恵器杯H身の小片も出土したが、S H 1631出土品(731)と接合できた。

S B 1691 (1145・1146) 1145はいわゆる伊勢型の土師器甕の口縁部小片、1146は甑の把手付近の体部片である。

S B 1697 (1147～1149) 1147・1148は在地窯系須恵器杯H身の蓋受部付近の小片。1149は甑とみられる土師器の口縁部小片である。

S B 1708 (1150) 土師質焼成の土錘で、細長い形状のもの。

S B 1729 (1151) 猿投窯系とみられる須恵器杯H身である。他に、須恵器杯H蓋の小片も出土したが、S K 1543出土品(1382)と接合できた。

S B 1822 (1152) 土師質焼成の土錘で、細長い形状のもの。残存状態は非常に悪い。

S B 1825 (1153) ヲノ坪窯出土品に似た須恵器杯H蓋で、瓦質に焼成されている。

S B 1833 (1154～1156) いずれも2.0cm四方程度の小片で、在地窯系の須恵器杯H蓋(1154)・杯H身

(1155)、いわゆる伊勢型の土師器甕(1156)とみられる。

K-R11Pit2 (1157・1158) どちらも猿投窯系須恵器で、1157は杯H身、1158は二段三方透かしの高杯脚部である。

M-L24Pit2 (1159・1160) 1159は岡山窯産とみられる須恵器杯蓋bで、1160は猿投窯系須恵器の大口径の皿である。

M-L24Pit4 (1161～1167) 1161は在地窯系須恵器杯蓋の鈕で、おそらく杯蓋bであろう。1162は岡山窯産とみられる須恵器無台杯で、同窯産と目される須恵器としては、他に盤B(1163)・横瓶(1164)がある。1164は横瓶の口頸部で、頸部を形作る際に粘土紐を体部に圧着した面に、体部を成形した時の平行タタキの痕跡が転写されて残る。1165・1166は体部が寸胴気味の土師器甕で、口縁部へ大きく開く形状が特徴的である。1165の内外面に認められるハケ目は細かい。1167は砥石。

M-L24Pit6 (1170～1174) 岡山窯産とみられる須恵器無台杯(1170)・杯B(1172)と、焼成不良のため産地不明の無台杯(1171)がある。1173・1174は土師器甕。1174は器表面が著しく摩耗しており、調整痕跡が見えないだけでなく、図示した上端部が口縁部か割れ口かの判断すら難しい。外面に二次被熱、内面にコゲの付着が認められることから、底部の押し出しが弱い小型甕と判断した。

M-L24Pit10 (1168・1169) ともに土師器甕である。器表面が摩耗していて不明瞭だが、1168の外面にハケ調整は施されていないように見受けられる。

N-I14Pit3 (1175・1176) ともに在地窯系の須恵器で、小型の杯のような形状である。1176は底部に丁寧なロクロケズリ調整が施されていることから、壺蓋の可能性もある。

N-J15Pit3 (1177・1178) ともに土師器甕で、内外面に施されたハケ目は比較的粗い。

Q-C15Pit2 (1179・1180) ともに在地窯系の須恵器杯H身で、接合しないが同一個体の可能性がある。

Q-E14Pit1 (1181・1182) 1181は在地窯系の須恵器杯H身で、1182は土師器の甕である。

その他 Pit (1183～1205) 1183～1193は須恵器。1190は在地窯系の無蓋高杯でほぼ完形である。1186～1189は岡山窯産、1191・1192は猿投窯系の

製品とみられる。1194～1199は土師器。1199は口縁部に油煙が付着する小皿で、燈明皿として使用されたもの。土器の注記には「表土掘削中」とあり、添付されている遺物ラベルとの間に記載の齟齬がある。1200は常滑陶器の甕底部で、いわゆる赤物に似た焼成のもの。1201は知多式製塩土器の棒状の脚部で、先端が欠損している。1202～1205は細長い形状の土錘で、土師質焼成のもの。

(3) 土坑など(第244～253図)

建物および柱穴状小土坑(Pit)以外の遺構から出土した遺物について、図化したものを中心に遺構番号順に説明する。遺構としては、土坑や土師器焼成坑の他に溝や中世墓があるものの、図化遺物はないため省略する。非図化分を含めた各遺構出土遺物の内容については、遺構一覧表等を参照されたい。

S K 324 (1206) 在地窯系須恵器杯H蓋の口縁部片である。

S K 1037 (1207・1208) 1207は猿投窯系須恵器甕の口縁部で、外面には沈線と櫛描列点文が施され、自然釉が付着している。1208は土師器甕の口縁部。いずれも小片である。

S K 1043 (1209～1221) 比較的遺物量が多く、コンテナケースに1箱以上あるが、須恵器甕(1212)や土師器甕(1213～1220)の破片が多くを占める。他に須恵器杯類の小破片(1209・1210)と高杯の脚部(1211)があり、1209・1210も高杯の杯部かもしれない。1210と1211は猿投窯系とみられるが、胎土や色調が異なるため別個体であろう。

S K 1051 (1222) 猿投窯系須恵器で、杯H蓋の天井部として図示したが、杯H身の底部かもしれない。

S K 1052 (1223～1226) 猿投窯系とみられる須恵器杯Hの蓋もしくは身(1223)・甕(1224)と、土師器甕の口縁部小片2点(1225・1226)がある。

S K 1053 (1227) 猿投窯系須恵器高杯の脚端部である。

S K 1056 (1228) いわゆる伊勢型土師器甕の口縁部小片である。

S K 1059 (1229～1235) 須恵器杯H蓋(1229・1230)・杯H身(1231・1232)、土師器甕(1234)、製塩土器(1235)などがある。須恵器杯Hには猿投窯系(1229)と在地系(1230～1232)が混在しており、

ともに小型化が進んでいるが、猿投窯系の方が一回り小さい。1233は煮沸具の口縁部付近の小片で、焼成前穿孔がある。1235は知多式製塩土器の脚部。

S K 1060 (1236～1240) 図示したのは、いずれも土師器甕の口縁部であるが、他に猿投窯系須恵器甕の体部片などもある。

S K 1161 (1241～1243) 1241は在地窯系須恵器の高杯脚部で、数は不明だが、方形の透かしがある。1242・1243は土師器甕の口縁部小片。

S K 1162 (1244・1245) 1244は猿投窯系の須恵器甕の体部小片、1245は土師器甕の口縁部小片である。

S K 1165 (1246～1250) 1246・1247は在地窯系の須恵器杯H、1248は猿投窯系の甕、1249は大口径の土師器甕(鉢?)、1250は土師器の小振りな把手片である。

S K 1178 (1251・1252) 1251は猿投窯系須恵器の甕口縁部、1252は在地窯系須恵器の甕体部である。他に土師器片と須恵器杯H身が各1点ある。

S K 1206 (1253～1263) 土師器と須恵器の他に鉄製品と石製品がある。須恵器はいずれも在地窯系で、残存状態が悪いため器形を判断しにくい。1253は鈕の形状から見て杯蓋gかとみられる。1255は無台杯である。1256は丸瓦のような形状であるが、内面に布目痕がないので、須恵質の土管としておく⁹⁾。1257～1259は土師器甕の口縁部片、1260は鞆羽口である。1261・1262は砥石で、1261は石皿を転用したものとみられる。1263は鉄鏝の茎部片で、再利用のための鉄素材(地金)であろうか。

S K 1208 (1264～1267) 土師器と須恵器があり、須恵器はいずれも在地窯系で、1264は無台杯、1265は高杯の杯部である。脚部の割れ口は著しく摩滅しており、人工的な作為を感じる。1266は土師器杯で、内面には放射状暗文が施されているが、口縁部付近は摩耗しているため、放射状暗文が一段か二段かは不明である。1267は土師器小型甕。

S K 1210 (1268～1270) 土師器長胴甕(1268・1269)と、石皿を転用した砥石(1270)がある。1268の口縁形状は、S K 1424出土品と類似する。

この他、S K 1210・1211の平面検出時に須恵器杯蓋gの小片(1271)と無台杯(1272)、転用砥石(1273)が出土している。

S K 1211 (1274 ~ 1291) 須恵器杯類 (1274 ~ 1278)・瓶類 (1279・1280)・甕 (1281)、土師器皿 (1282)・甕 (1283 ~ 1289)・把手 (1290)、砥石 (1291) などがある。須恵器無台杯 (1274・1275) は、岡山窯産とみられる。1291 は S K 1211・S F1212 の平面検出時の出土品 1296 と似る。いずれも縄文時代の敲石を転用した砥石と思われる。端部にわずかに敲打痕を残し、平坦面には砥石としての使用痕跡が認められる。

S F 1212 (1292 ~ 1295) 遺物量はコンテナケースに約 2 箱分で、在地窯系の須恵器無台杯 (1295) と猿投窯系杯 H 蓋の小片以外は土師器甕 (1292 ~ 1294) である。土師器焼成坑と推測された遺構ではあるが、1294 のように使用痕 (外面の煤) が認められる土師器甕を含んでおり、この焼成坑で焼かれた土師器を特定することは難しい。

S K 1216 (1299 ~ 1301) 土師器と須恵器がある。1299 は猿投窯系須恵器杯 H で、蓋か身かは断定できない。1300 は在地窯系須恵器の無台杯とみられる。1301 は土師器甕の口縁部小片。

その他に、検出時の遺物として須恵器無台杯 2 点 (1297・1298) があり、S K 1216 出土品と同時期のものであるが、この遺構を含め隣接する S K 1214・S K 1215 のいずれに属していたかは不明である。

S K 1221 (1302 ~ 1305) 須恵器杯 (1302・1303) と不明土製品 (1304・1305) の他、須恵器甕や土師器甕などがある。須恵器杯 (1303) は、高台の有無は不明であるが、岡山窯産とみられる。

S K 1224 (1306・1307) 須恵器杯 (1306・1307) のほか、土師器甕・杯、須恵器甕などがある。須恵器杯 (1307) は高台の有無は不明であるが、岡山窯産の深手の杯とみられる。

S K 1225 (1308) 土師器長胴甕である。全体に風化が著しく、口縁端部は摩滅している。

S K 1229 (1309 ~ 1311) 土師器甕 (1309・1310)、鉄斧 (1311) のほか、土師器杯皿類、須恵器杯類・甕などがある。図示した土師器甕はどちらも伊勢型の小型丸底甕である。1311 は鍛造の袋状鉄斧。基部から 6.5cm ほどを袋部として木柄を納めたもので、袋内部には柄の木質が錆着する。

S K 1230 (1312 ~ 1323) 須恵器杯蓋 b (1312)・

杯類 (1313 ~ 1317)・椀 (1318)・甕、土師器甕 (1319 ~ 1322)、土錘、鉄製品 (1323) などがある。須恵器は小片が多い。1317 は岡山窯産の無台杯で、1316 と同一個体の可能性がある。1318 は焼成不良の須恵器椀の底部で、回転糸切痕が明瞭に残る。土師器甕は著しく摩耗しているものが多い。1322 は接合できない破片を上下に並べて図示したため、見かけ上で器高が高くなっているが、小型丸底甕である。1320 と同一個体の可能性がある。1323 は鉄鍬の鍬身片。平造りで切先を欠く。再利用の鉄素材 (地金) か。

S K 1231 (1324) 土師器小型甕の口縁部である。内外面ともに器表面が摩耗している。

S K 1315 (1325) 表土掘削中に採集された参考資料であるが、土師器甕の口縁部小片がある。

S K 1427 (1326 ~ 1330) 猿投窯系須恵器杯 H 身 (1326)・フラスコ瓶、土師器甕 (1327・1328)、土錘 (1329・1330) などがある。1328 は口縁部中央が肥厚し、端部に面を持たないが、いわゆる伊勢型の甕と胎土・色調が共通する。フラスコ瓶や土師器甕の破片は、S K 1429 出土品 (1333・1335) と接合できた。

S K 1428 (1331・1332) どちらも土師器甕で、口縁部の断面形状は S K 1427 出土品 1328 に似る。1331 は添付の遺物ラベルには S K 1427 出土と記されており、注記との間に混乱が認められる。

S K 1429 (1333 ~ 1335) 猿投窯系須恵器のフラスコ瓶 (1333)・横瓶 (1334)、土師器甕 (1335) などがある。1335 は口縁部の断面形状が S K 1427 出土の 1328 に似る。

S K 1439 (1336・1337) 須恵器高杯 (1336)・杯・フラスコ瓶、土師器杯 (1337)・甕などがある。1336 は無蓋高杯の杯部で、1337 は内面に放射状暗文が施されている。

S K 1442 (1338 ~ 1348) 遺物量はコンテナケースに約 1.5 箱分で、須恵器杯蓋 b (1338 ~ 1340)・無台杯 (1341・1342)・高盤 (1343)・水瓶 (1344)、土師器甕 (1345 ~ 1347)、製塩土器 (1348) がある。須恵器は大半が岡山窯産の可能性が高い猿投窯系の製品だが、1343 は産地不明。杯蓋 b 3 点と無台杯 (1342) は橙色系の色調で、焼成はやや軟質である。杯蓋 b 3 点の器表面に認められる中心部と口縁部の色調の違いから、焼成時には蓋を上下逆にして杯と交互に

重ねたと推測できる。1343は須恵器の皿状の破片で、残存部に高台の接合痕跡は認められないので高盤と考えた。1344は体部と口頸部に分かれて出土した水瓶で、接合できないが明らかに同一個体である。頸部に2条一対の雑な沈線が二箇所認められる。土師器甕の口縁形状は、1345は伊勢型、1346は端面に沈線が巡るように見える。1348は志摩式の製塩土器で、粘土紐巻上痕が明瞭な口縁部の破片である。

S K 1445 (1349～1353) 須恵器杯 (1349)・壺類 (1350)・甕、土師器甕 (1351・1352)、砥石 (1353) の他、焼けた粘土塊がある。1349は無台杯とみられる在地系須恵器で、底部は大半が欠損しているが、ヘラ記号の一部が残る。土師器甕のうち1352は口縁部が受口状を呈するいわゆる近江型の甕である。1353は縄文時代の礫器を転用した砥石。端部に鈍角の階段状剥離を伴う刃部を作り出している。平坦面二面と側面の一面に砥石として使用された痕跡を残す。

S K 1448 (1354～1357) 須恵器杯蓋 g (1354)・無台杯 (1355)・甕 (1356)・壺 (1357) のほか、土師器甕などがある。須恵器はすべて在地窯系である。

S K 1449 (1358) 猿投窯系の須恵器杯蓋 b の小片である。他に須恵器無台杯や土師器甕などがある。

S K 1451 (1359～1363) 須恵器杯蓋 g (1359)・杯蓋 b (1360)・杯 (1361・1362)、土師器杯 (1363) のほか、須恵器フラスコ瓶・土師器甕などがある。また、S K 1448 出土の須恵器杯蓋 g (1354) に接合できる小破片も出土した。1360は猿投窯系の杯蓋 b の小片で、接合できないが S K 1449 出土の1358と同一個体の可能性がある。

S K 1503 (1364・1365) 在地窯系須恵器杯 H 身 (1364)・広口短頸壺 (1365) のほか、土師器甕の小片がある。

S K 1510 (1366・1367) 1366は在地窯系須恵器の無台杯。1367は伊勢型土師器甕の口縁部小片。

S K 1520 (1368～1370) 1368は在地窯系須恵器の杯 H 身の小片、1369は猿投窯系の甕、1370は土師器甕の口縁部小片である。

S K 1524 (1371・1372) 1371は在地窯系須恵器の高杯脚部で、三方透かしがあげられている。1372は土師器の鍋や甌などの把手で、小振りである。

S K 1526 (1373) いわゆる伊勢型の土師器小型甕の小片で、内外面だけでなく破面の摩滅も著しい。

S K 1531 (1374) 土師器の鍋や甌などの把手で、小振りである。

S K 1538 (1375～1379) 須恵器杯 H 身 (1375)・高杯 (1376)・甕、土師器甕 (1377)・把手 (1378)、砥石 (1379) などがある。1375は猿投窯系、1376は在地窯系で三方透かしがあげられた脚部である。1379は縄文時代の石皿を転用した砥石。平坦面二面に使用痕が残し、被熱による赤変も認められる。

S K 1542 (1380) 猿投窯系の須恵器甕の体部である。

S K 1543 (1381～1412) 遺物量はコンテナケースに約3箱分で、土師器甕の破片が多いが、須恵器も種類・量ともに充実している。須恵器はすべて猿投窯系とみられ、杯 H 蓋 (1381～1385)・杯 H 身 (1386～1391)・高杯 (1392～1396)・甕 (1398・1399)・平瓶 (1397)・フラスコ瓶 (1400)・甕などがある。杯類はすべて杯 H で、蓋の稜や身の立ち上がり形状、口縁部内側の沈線などの特徴は I - 101 号窯出土品に似る。土師器には甕 (1401～1410)・鍋や甌の把手 (1411) があり、甕はいわゆる伊勢型のものが多い。1412は砥石の小片で、二面に顕著な使用痕跡が残る。縄文時代の磨石を転用している可能性も考えられるが、小片のため断定はできない。

S K 1545 (1413) 在地窯系の須恵器横瓶である。S K 1572 出土の破片と接合できた。

S K 1563 (1414) 猿投窯系の須恵器甕の口頸部である。黄土の塗布が認められる。

S K 1569 (1415～1420) 須恵器杯 H (1415)・高杯 (1416・1417)、土師器甕 (1418～1420) の他、S K 1543 出土品 (1398) と接合できる須恵器甕の破片が出土した。1415・1416は猿投窯系、1417は在地窯系とみられる。土師器甕は伊勢型の口縁形状である。

S K 1601 (1421～1456) 遺物量はコンテナケースに約4箱分で、土師器甕の破片が多いが、須恵器の杯 H も比較的多く、鞆羽口 (1455) や金属製品 (1456) を含む。須恵器には、杯 H 蓋 (1421～1427)・杯 H 身 (1428～1434)・杯 H 蓋もしくは身 (1435)・高杯 (1436～1438)・壺 (1439・1441)・甕 (1442・1443)・甌 (1440) などがある。大半は在地窯系で、猿投窯系 (1421・1428) が少量混じる。猿投窯系杯

Hは、外面にロクロケズリ調整が施されており、蓋の稜や身の立ち上がりや蓋受部下の段の形状などはH-15号窯出土品に似る。在地窯系杯Hには、外面にロクロからの切り離し時の痕跡を残すものが多いが、1424・1430・1432にはロクロケズリ調整が施されている。1426・1427・1429・1430・1433・1434の天井部・底部外面には、「×」や「○」のような記号が赤彩で記されている。高杯（1436～1438）はすべて別個体だが、いずれも長脚で二段三方透かしのような形状である。土師器甕（1445～1451）はすべていわゆる伊勢型で、1445・1446は小型品。1444は残存状態が悪く断定できないが、台付椀とみられる。1452は土師器甕。1455は鞆の羽口先端片で、鈷滓が厚く付着している。1456は鉄素材（地金）と思われる板状製品で、熱変により歪曲する。

S K 1609（1457） 焼成不良の須恵器杯Hで、蓋か身かは断定できない。底部にヘラ切り痕跡が残る。

S K 1610（1458・1459） 1458は須恵器杯H身で、口縁端部の内側に明瞭な段が認められる。1459は土師器の鍋や甕などの把手で、小振りである。

S K 1615（1460～1465） 1460は猿投窯系須恵器の小片で、杯H蓋としたが高杯蓋の可能性はある。1461は在地窯系須恵器杯H蓋、1462は須恵器壺の口縁部小片。土師器甕のうち、伊勢型の長胴甕とみられる1464・1465は同一個体の可能性はある。

S K 1630（1466） 隣接する二面に使用痕が認められる砥石。

S K 1633（1467・1468） 1467は猿投窯系須恵器杯H身で、H-15号窯出土品に似る。1468は土師器甕で、底部を欠くが残存状態は比較的良い。

S K 1658（1469～1473） 1469は在地窯系須恵器杯H身の小片である。1470は在地窯系須恵器の甕または鉢で、S H 1684出土の894に似る。他に土師器甕（1471）、鍋や甕などの把手（1472・1473）がある。

S K 1668（1474～1483） 1474は猿投窯系須恵器杯H蓋で、H-15号窯出土品に似る。1475は在地窯系須恵器高杯で、割れ口は赤紫色を呈する。1476は猿投窯系須恵器提瓶で、頸部に二重沈線が施されている。土師器は甕の口縁部（1477～1480）や、鍋や甕などの把手（1481～1483）がある。

S K 1669（1484） いわゆる伊勢型の土師器甕の口

縁部小片で、端部の面は明瞭である。

S K 1673（1485～1494） 須恵器杯H蓋（1485・1486）・杯H身（1487～1490）・壺類（1491・1492）、土師器の鍋や甕などの把手（1493・1494）がある。1486は猿投窯系の杯H蓋で、H-61号窯出土品に似る。1492は底部から高台の破片で、外面には平行タタキが残る。在地窯系の製品とみられるが、内面は当具痕をナデ消しており、口が大きく広がる鉢のような器形かもしれない。1490は他と時期的な隔たりが大きいことから、新しい時期の遺物が混入したものとみられる。

S K 1687（1495） いわゆる伊勢型の土師器甕の口縁部で、端部の面は明瞭である。

S K 1711（1496） 土師器甕の口縁部片で、いわゆる伊勢型甕と同じ胎土である。

S K 1806（1497） 土師器の鍋や甕などの把手で、二次被熱が認められる。

S K 1811（1498～1515） 遺物量はコンテナケースに約2箱分で、図化できる須恵器が比較的多い。須恵器には杯H蓋（1498～1500）・杯H身（1501～1505）・高杯蓋（1506）・甕（1507）、土師器甕（1508～1511）・甕（1512）・把手（1513・1514）、土錘（1515）などがある。須恵器は大半が在地窯系で、猿投窯系（1502・1503）が少量混じる。猿投窯系杯H身は、外面にロクロケズリ調整が施されており、口縁部の立ち上がりや蓋受部下の段の形状などがH-61号窯出土品に似る。在地窯系杯Hも、基本的にはロクロケズリ調整が施されており、1498などヲノ坪窯出土品と共通する特徴を持つものがある。1509は土師器長胴甕の口縁部で、接合できないが同一個体とみられる体部片がまとまって出土している。1510は比較的精良な胎土の小片で、台杯甕の台の可能性はある。

S K 1815（1516～1522） 須恵器杯H蓋（1516～1520）・杯H身（1521）・甕、土師器甕（1522）がある。須恵器は大半が在地窯系であるが、1520は猿投窯系でH-61号窯出土品に似る。

S K 1816（1523） 土師器甕の口縁部小片である。

S K 1819（1524） 土師器甕もしくは鍋の口縁部片で、推測される口径は大きい。

S K 1830（1525～1534） 須恵器杯H蓋（1525・1526）杯H身（1527）・甕、土師器甕（1528・1529）・甕？

(1530・1531)・把手(1532・1533)、砥石(1534)などがある。須恵器はすべて在地窯系で、小片が多いが、1527はロクロケズリ調整の範囲が広い。土師器甕は、いわゆる伊勢型(1528・1529)で、端部に面を持たない口縁形状のもの(1530・1531)は甕?とした。1532・1533は鍋か甕の把手で、1532は差し込み接合。1533の接合方法は不明だが、接合部の補強用に多くの粘土を貼り付けている。1534は凝灰岩製の砥石で、よく使い込まれている。

S K 1837(1535) 猿投窯系須恵器の杯H身で、H-61号窯出土品に似る。他に遺物は無い。

4 遺構混入・遺構外出土遺物

(第254～256図)

主に包含層・表土等からの出土品である。遺構が特定できない一次調査時の出土品や、後世の遺構埋土に紛れ込んでいた縄文時代や弥生時代の遺物(1536～1667)もここへ含めた。

1536は11次調査の包含層から出土した押型(ネガティブ楕円形)文深鉢の胴部片。縦方向に施文したように見えるが、施文は浅い。1537は、4次包含層から出土した押型(格子目)文深鉢の胴部片。内面はナデ、外面には格子目文かと思われる押型文が縦位に施されたものか。1538は11次調査M-D10区検出中に出土した突帯文深鉢の胴部片。突帯を貼り付け、突帯上には水平に条痕(2枚貝か)を入れる。突帯下には、突帯状のよりも幅が狭い条痕を右から左方向へと施文する。1539は11次調査包含層出土の押型(ネガティブ楕円形)文深鉢片。縦位に施文されたものと思われ、1536に比べ、やや深い施文である。1540は5次調査E-U19の風倒木痕で出土した深鉢片。内外面はナデ、外面に縄文らしい痕跡があるように見えるが、器表面の風化が著しく、詳細不明。1541は8次調査M-L25落ち込みから出土した深鉢片。内面はナデ、外面はナデ後浅い沈線もしくは刺突があるが、小片のため不明瞭。1542は4次調査F-X22包含層出土の深鉢片。残存部上部は無文帯か。その下に浅い押型(山形)文が横位に施文される。1543は11次調査M-F3の切株切除中に出土の押型文深鉢片。押型は平行四辺形かと思われ、横位に施される。1544は深鉢片か。内面はナデ、外面には水平に隆帯貼り付けと、隆帯下半にヘラ状具による刺突

が施される。1545は11次調査M-E3内の根株攪乱坑から出土した深鉢の小片。内面はナデ、外面は押型(ネガティブ楕円形)文が横位に施文される。1546は11次調査表土出土の縄文土器の底部片。内外面ともナデ調整する。1547は11次調査M-B6内の風倒木痕出土の縄文深鉢の口縁片。器壁の風化は著しく、口縁端部外面に角棒状具で刺突を1条巡らせる。1548は4次調査N-C10包含層出土の有舌尖頭器。溶結凝灰岩で切先端部および逆刺の一端を欠損し、舌部の片面を剥離欠損する。表裏面ともに斜状平行剥離痕が明瞭に観察できる。1549は12次調査K-M24表土から出土した石匙。サヌカイトで、刃部の片側と握部の一面を剥離欠損する。1550は12次調査J-O12包含層出土の石鏃。小型で黒灰色チャートである。1551はL-I19内の切株切除中に出土した石鏃。乳白色のチャート製で、切先をわずかに欠く。1552は5次調査南区出土の石鏃。サヌカイトで、切先をわずかに欠く。1553は12次調査J-M24包含層出土の石鏃。サヌカイト製で切先および一方の肩部をわずかに欠く。1554は5次調査北区出土の打製石斧。基部を欠損し、刃部は片減りする。1555は一次調査トレンチ14付近で表採した切目石錘。扁平な楕円形の両端にごく浅い擦切溝を切る。1556は12次調査J-Q21包含層出土の磨石。先端に使用痕がわずかに認められる。また平坦面の両面に敲打痕も認められ敲石としても使用された可能性がある。1557は4次調査F-V25包含層出土の槌石とみられる。1558は10次調査F-U19包含層出土のUF。砂岩である。1559は4次調査F-U23包含層出土のRF。削器に近い刃部の調整が行われている。1560は4次調査F-V24包含層出土のRF。緑色岩か。1561は5次調査出土のチャート製火打石である。1562は5次調査E-U15谷部で出土したUF。赤褐色のチャート。1563は13次調査出土のサヌカイトのRF。上辺に新しい欠損部がある。1564は5次調査E-U15谷部出土の楔形石器。1565は4次調査煙道付炉穴付近出土の打製石斧未成品。溶結凝灰岩で、荒割板状成形のみで面取りや刃部の調整は行われていない。1566は4次調査F-V22包含層出土の石皿片。砂岩で残存する平坦面に使用痕が認められる。1567は8次調査M-M24根株痕から出土した石皿片。砂岩で残存する平坦面にわずか

に使用痕が認められるが、破面付近に筋状の研ぎ痕も残される。縄文時代の石皿を砥石として転用した可能性も考えられる。1568は4次調査F-X22包含層出土の石皿片で、砂岩。四辺とも破面であるが、平坦面の二面に使用痕が認められる。また、平坦面の一方には被熱による赤変が認められる。1569は4次調査G-U2包含層出土の石皿片で、花崗岩。使用痕は一面のみで、厚みもあるため台石として利用された可能性もある。

1570～1608は、古代の遺構へ混入した縄文～弥生時代の土器・石器、1609～1617は包含層・表土などから出土した弥生時代の土器である。

1570はS H 1664混入の縄文土器片。水平口縁の深鉢の口縁片と思われるが、風化が著しく、内外面ともナデかと思われるが詳細は不明である。1571はS H 1674混入の縄文土器片で、深鉢の口縁小片。2条の平行沈線と沈線間に縄文があるように見えるが、器壁の摩滅で不明瞭である。1572はS H 1834落ち込みへ混入した縄文土器の深鉢片。波状口縁と思われる口縁部片で、外面に円棒状具による刺突文が施される。1573・1574はS H 1813混入の縄文土器の深鉢片。1573では、内面はオサエ後ナデ、外面はナデ後隆帯を付け、隆帯に向けて斜めに棒状具による刺突列を横位に施す。1574は胴部片で、沈線による「J」字の区画を描き、区画内を粗い縄目の縄文で埋める。同じく深鉢片の1575はS B 1045の柱穴M-D22pit2掘形に混入した縄文土器の深鉢片で、内面はナデ調整、外面には幅広の水平沈線を施す。1576はS K 1711混入の縄文土器で深鉢の胴部片。器表面の風化が著しく、外面にわずかに条痕が残る。縦方向に羽状に施文されたようにも見えるが、不明瞭。1577はS K 1711混入の縄文土器である。突帯文深鉢の口縁部片。口縁端部は外方への折り返し、外面の口縁直下で薄く突帯を貼り付け、刻目を施す。突帯直下までは胴部から口縁へ向けて、上方へのケズリを施す。1578はS H 1562混入の敲石で約1/2残存か。砂岩製で残存する一端に敲打痕が認められる。1579はS K 1230へ混入した敲石。一側面に敲打痕が見られる。1580はS K 1819へ混入した切目石錘。擦切溝は浅い。1581はS H 1313混入の磨石で約1/4の破片である。残存する外表面全体

に使用痕がある。1582はS K 1031へ混入した石鏃。小振りであるが完形である。1583はS H 1674混入の石鏃である、サヌカイトで、凹部の挟りが浅い。1584はS H 1650カマドに混入した石匙で、刃部の一端を剥離欠損する。1585はS B 1691のJ-V21pit5へ混入した磨製石斧片。基部から約1/2が残る。砂岩製で、表面がわずかに剥離する。

1586は砂岩の砥石。S H 1650周辺で出土した。三面に使用痕が認められる。転用製品か専用砥石かは判断しがたい。出土地点がS H 1650内部ではなかったため、竪穴建物遺物と分けて取り上げた。1587はS H 1313混入のチャート剥片。一面に自然礫面を残す。1588はS K 1330へ混入したサヌカイトのUF。1589は5次北調査区のトレンチ11出土のUF。暗赤褐色のチャート。1590も同じく5次北調査区トレンチ11から出土したUFで、青灰色のチャート。1591はS K 1221混入の弥生土器甕の口縁片。内外面ともナデ調整、口唇部に刻目文を施す。1592はS H 1223貯蔵穴へ混入した、弥生土器甕の口縁片である。口唇部に刻目文を施す。1593はS K 1542へ混入した弥生土器甕の口縁片。内外面ともナデ調整、口唇部に刻目文を施す。1594はS H 1648混入の弥生土器甕の口縁片。口縁部を内外面ともにヨコナデする。1595はS H 1674南土坑混入の弥生土器甕の口縁片。内外面ともナデを施し、口唇部に刻目文を入れる。1596はS H 1688混入の弥生土器甕口縁片。内外面ともにナデ調整した後、外面には粗いタテハケを施す。1597はS K 1224混入の古式土師器かと思われる壺底部片。外面底部は未調整、立ち上がりはナデ調整、内面は剥離していて調整不明である。1598はS B 1703のF-Y7pit1へ混入した弥生土器甕の底部片。内外面ともにオサエ後ナデ、外面にわずかに煤の付着がある。

1599はS H 1648混入の弥生土器壺の底部小片。内面はオサエ後ハケ目、外面は摩耗により調整不明。1600はS K 1538混入の弥生土器甕もしくは壺底部片。内外面ともオサエ後ナデ調整するかと思われるが、風化が著しく不明瞭。1601はS H 1651混入の弥生土器甕の底部片。内面はナデ、外面はオサエ後ナデ調整し、底部外面にドーナツ状の粘土貼り付けによる低い台状部を有する。1602はS H 1628混入の台

付甕の台部。被熱により赤変する。1603はS K 1543混入の弥生土器壺の頸部片である。内面はナデ、外面には櫛描直線文を施す。1604はS H 1660混入の弥生土器壺底部片。摩耗が著しく調整不明瞭。1605はS H 1648混入の弥生土器壺の底部片。内面にはナデ後不定方向の細かいハケ目、外面にはケズリ後ミガキを施す。1606はS K 1836へ混入した弥生土器壺の底部片。内外面ともナデ調整したと思われるが、風化により調整不明である。1607はS H 1818混入の弥生土器壺の底部片。内面はオサエ後ナデ、外面は風化が著しく不明瞭であるが、ナデ調整かと思われる。1608はS H 1648混入の弥生土器高杯の脚柱部片。縦方向のミガキ後に櫛描直線文を描く。内面にはシボリ痕がわずかに確認できる。1609は11次調査M-E5切株切除中に出土した弥生土器壺の頸部片。内面ナデ、外面にタテハケ施した後に櫛描直線文を描く。1610は11次調査F-Y8内を遺構検出中に出土した弥生土器壺の体部小片。内面は器壁剥離のため調整不明。外面には櫛描直線文と、その下には櫛状具による刺突を施したかに見える施文が見られるが、器壁の風化により不明瞭。1611は8次調査M-M24根株痕から出土した弥生土器壺の体部小片。内面はナデ、外面にはヘラ描による施文、その下に粘土紐貼付、以下はナデ調整かと思われるが、砂粒が多く不明瞭である。1612は11次調査L-X8切株切除中に出土した弥生土器壺の頸部小片。内面には粗いヨコハケ、外面にはナデ後タテハケが施される。1613は11次調査L-F14切株切除中に出土した弥生土器壺の底部片。内面は工具ナデ、外面はオサエ後ナデ、立ち上がりにタテハケを施したものと思われるが、器壁の風化により不明瞭。1614は8次調査M-M24内の根株痕出土の弥生土器甕もしくは壺の底部片。内面はオサエ後ナデ、外面はナデ後タテハケを施す。いずれも器壁の風化が著しく不明瞭。1615は8次調査で表採の弥生土器壺口縁部片。内面はナデ、口唇部には刻目文を施す。外面にはタテハケ後ナデ調整し、頸部にはヨコハケを施す。1616は12次調査K-O13包含層出土の弥生土器壺の底部片。内面はナデかと思われるが、器壁の剥離により不明瞭。外面は、ナデの後に立ち上がりにかけて平滑な面があるのでミガキが施された可能性があるが風化が進んでいて不明瞭。

1617は11次調査F-W8の切株切除中に出土した弥生土器高杯の脚柱部片。内面にはオサエ後ナデ調整し、シボリ痕を残す。外面はナデ後先端刺突により列点文1条を巡らせる。

1618～1649は須恵器である。1618～1620は杯H蓋、1621～1625は杯H身、1626は杯蓋g、1627～1631は杯蓋b、1632～1641は杯、1642・1643は盤、1644は托、1645は高杯、1646～1648は壺、1649は甕である。1640・1641の底部には回転糸切痕が明瞭に残る。1644は岡山窯産とみられる小片で、排土から出土した高台の付かない托¹⁰⁾と同一個体の可能性がある。

1650～1658は土師器である。1650は椀、1651～1656は甕、1657は鍋もしくは甑の把手である。1658は中世の土師器鍋の口縁部で、穴は焼成前穿孔である。

1659～1665はいわゆる「山茶碗」である。すべて尾張系の製品で、長石の吹き出しが認められる1661・1664・1665は、瀬戸窯産であろう。

1666は土師質焼成の土鍾。1667は石製紡錘車である。

【註】

- 1) 縄文土器については、調査時点で泉拓良氏、千葉豊氏の指導を、石器については、久保勝正氏・大下明氏の指導を得ている。また、本報告の作成にあたり、奥義次氏に縄文土器および石器の指導を得た。記して感謝を表したい。
- 2) 二分冊Ⅵ章-5を参照されたい。
- 3) 三重県埋蔵文化財センター2018『鈴山遺跡(第2・3次)発掘調査報告』
- 4) 二分冊Ⅵ章-4を参照されたい。
- 5) 古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器には、主に伊勢在地窯系と猿投窯系の製品がある。在地窯系では、7世紀には岡山古窯跡群や西ヶ谷古窯跡群など、北勢地域を中心に生産を行っていた工人集団による製品が大半を占めるが、それ以前は中勢地域のヲノ坪窯や内多窯の特徴をもつ製品が目立つ。他に、湖西窯産とみられるものが少量含まれる。
- 6) 四日市市上海老町に所在する岡山窯は、総数7基のうち3基が須恵器窯であるが、岡山6号窯が7世紀に

北勢在地窯系須恵器を焼成していたのに対し、平安時代に築かれた岡山1・2号窯では、猿投窯系の工人集団によって生産活動が行われていた。(水橋公恵2005「古代須恵器工人の系譜—伊勢国・岡山古窯址群の場合—」『考古論集』川越哲志先生退官記念論文集 川越哲志先生退官記念事業会)

- 7) 豊田市教育委員会の森泰通氏のご教示による。
- 8) 三重県埋蔵文化財センター2020『西山古墳群・北山C遺跡(第2～7次)発掘調査報告』
- 9) 類品は北山A遺跡SK68(第80図286～288)から出土している。(三重県埋蔵文化財センター2017『北山A遺跡(第2・3・5・6次)発掘調査報告』)
- 10) 類品は岡山1号窯(第9図115)から出土している。(四日市市教育委員会1966『東日野弥生住居址群 岡山古窯址第1号窯』)

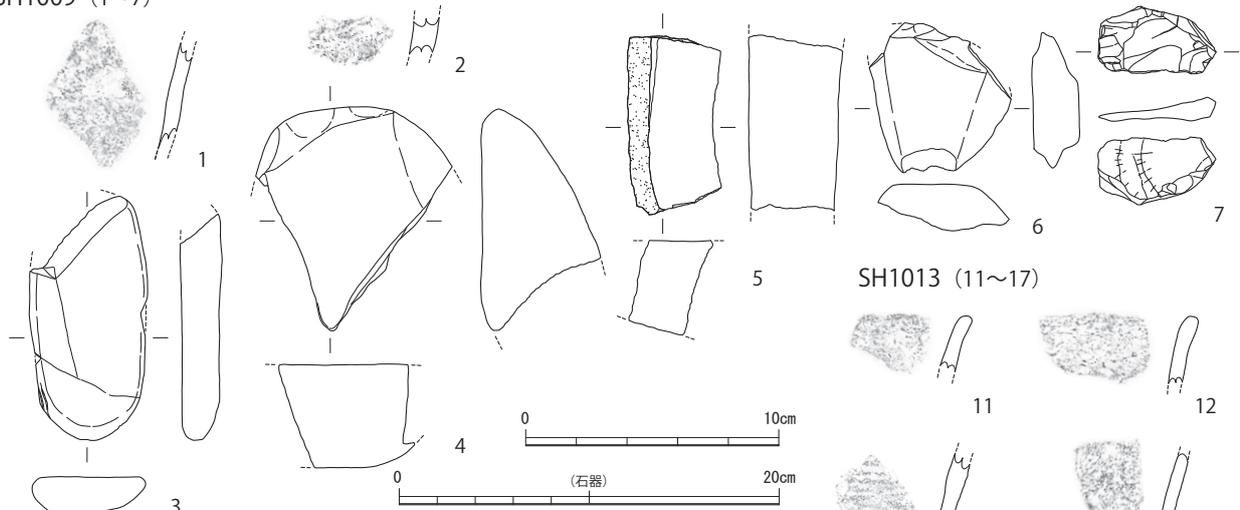
【類品出土窯】

- H-15号窯：尾野善裕1997「尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- H-16号窯：尾野善裕1997「尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- H-44号窯：名古屋市教育委員会1979『光真寺古窯跡発掘調査報告書』(名古屋市文化財調査報告Ⅶ)
- H-61号窯：斎藤孝正1986「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』第2号 名古屋大学総合研究資料館。名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室2010『東山61号窯発掘調査報告書』
- I-17号窯：愛知県教育委員会1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(I)』
- I-101号窯：尾野善裕1997「尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- 岡山1号窯：四日市市教育委員会1966『東日野弥生住居址群 岡山古窯址第1号窯』(四日市市埋蔵文化財調査報告1)
- 岡山2・6号窯：四日市市教育委員会1971『岡山古窯址群発掘調査報告』(四日市市埋蔵文化財調査報告5)
- 西ヶ谷1・2号窯：四日市市遺跡調査会1992『西ヶ谷古窯跡群』(四日市市遺跡調査会文化財調査報告Ⅷ)

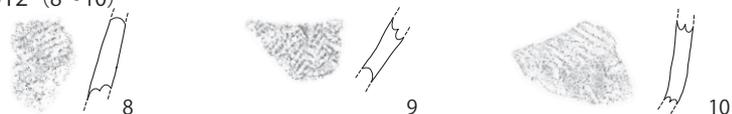
ヲノ坪窯：三重県埋蔵文化財センター1997『ヲノ坪窯跡発掘調査報告』

内多窯：津市埋蔵文化財センター2000「遺跡紹介⑩ 津市の窯跡」『埋文センターニュース』第12号

SH1009 (1~7)



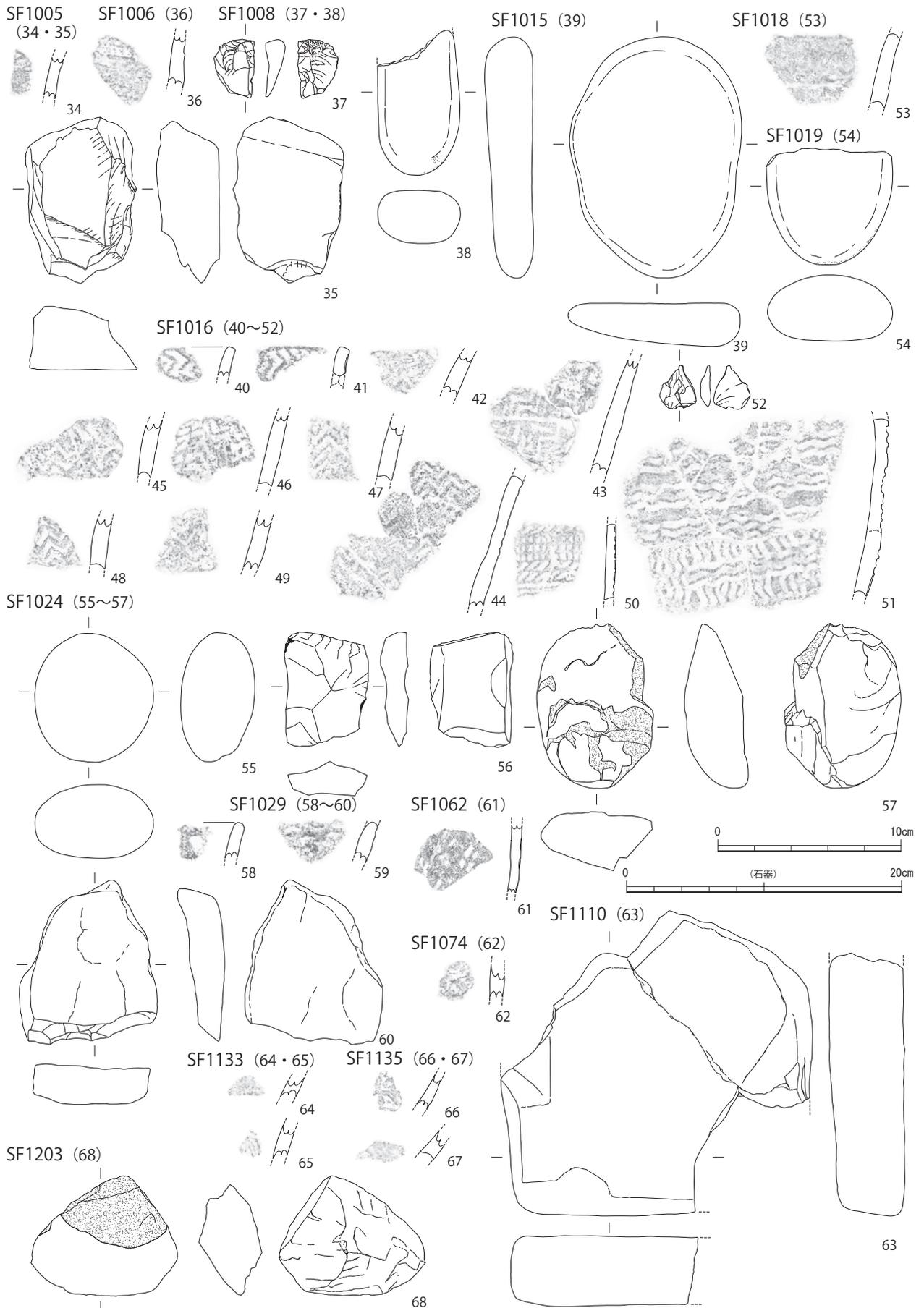
SH1012 (8~10)



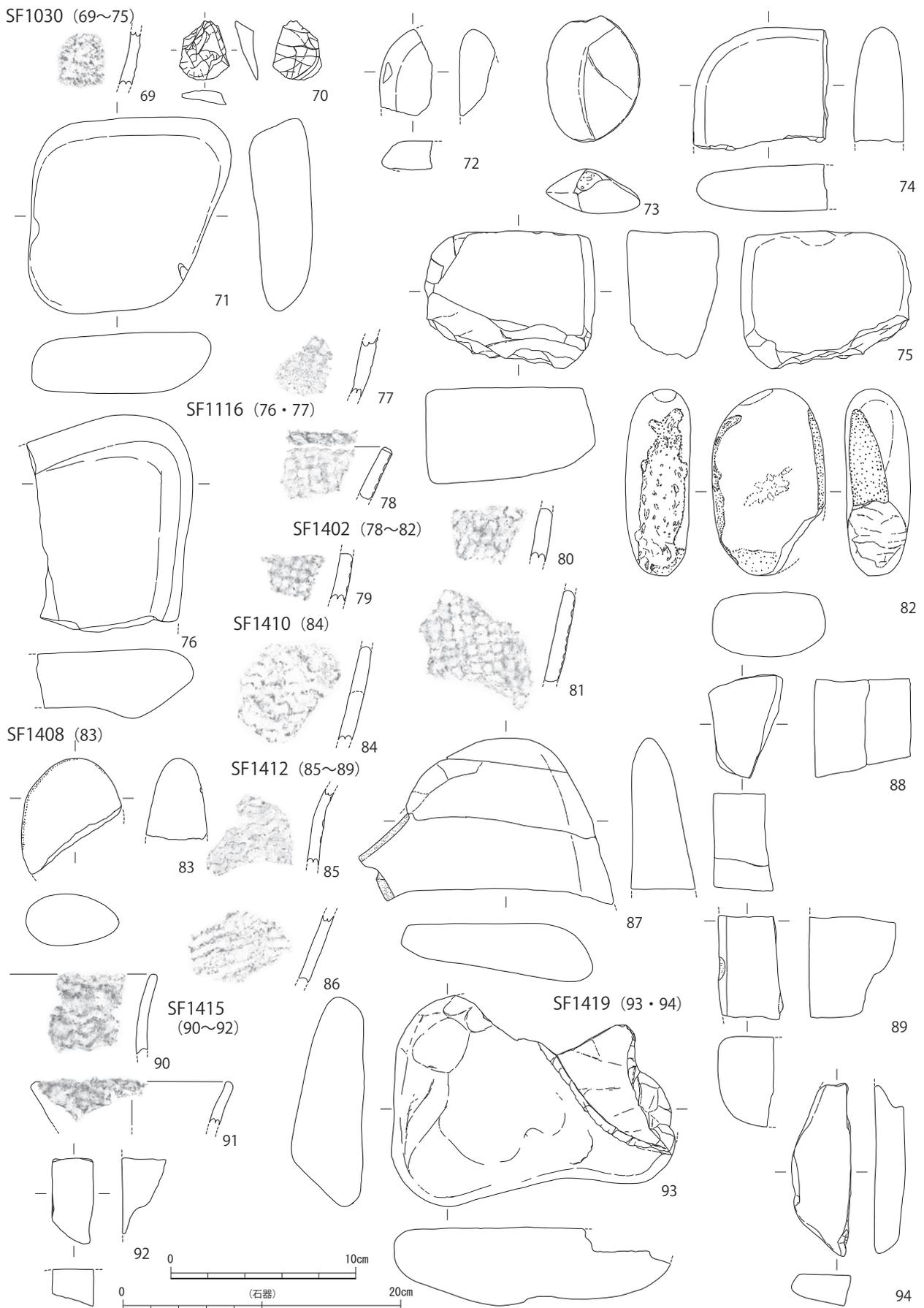
SH1025 (18~32)



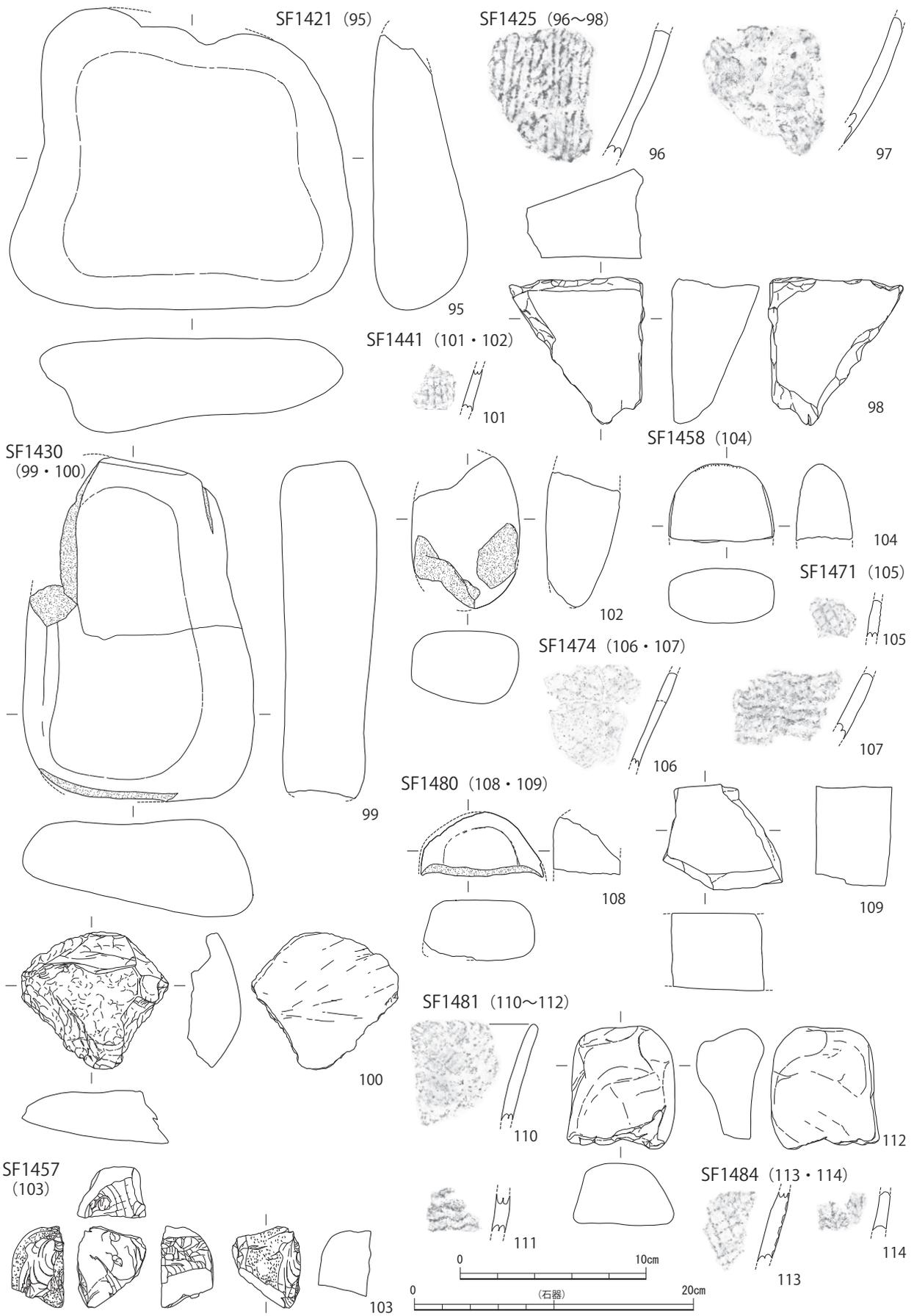
第 201 図 出土遺物実測図 1 (1 : 3 · 1 : 4)



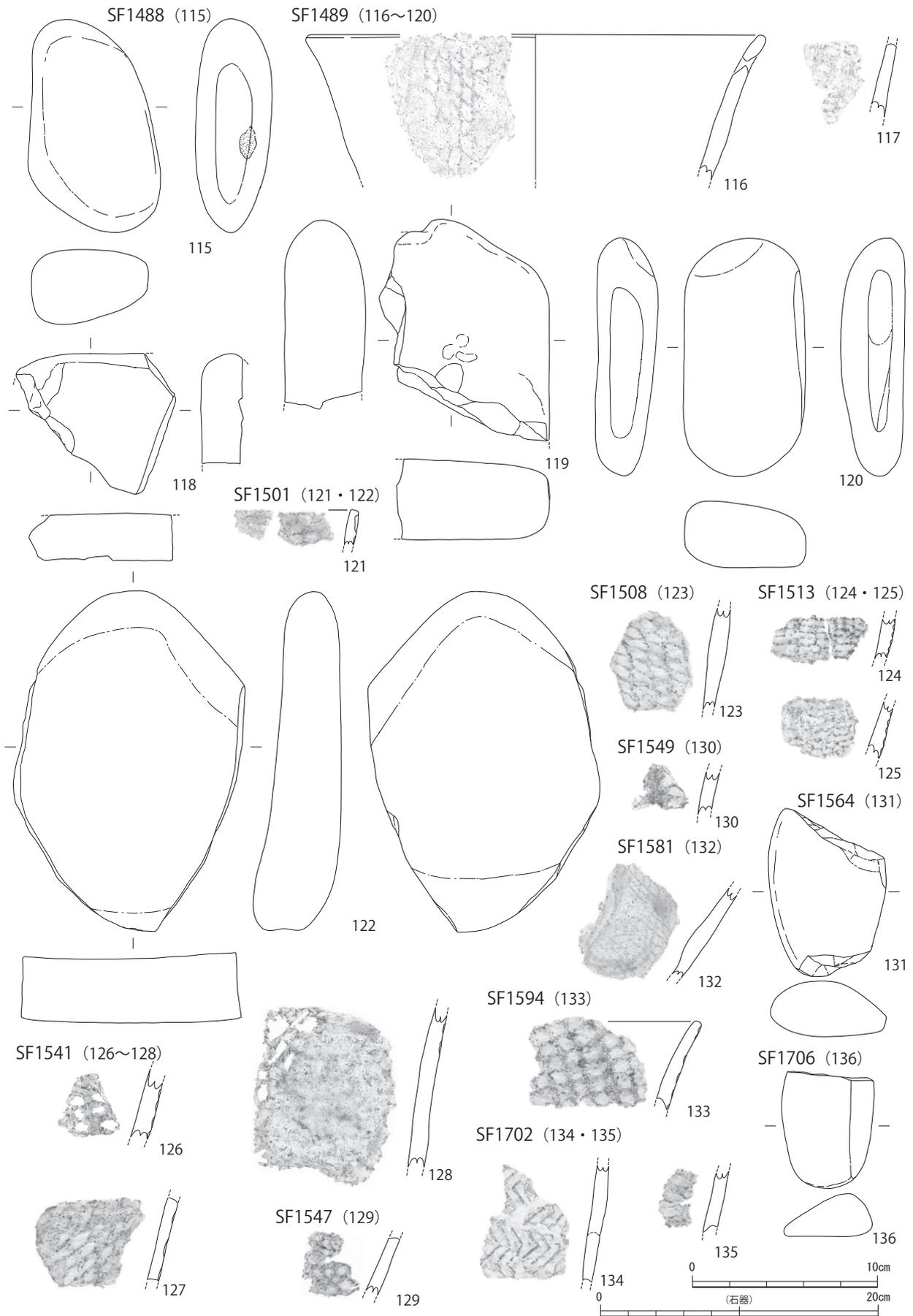
第 202 図 出土遺物実測図 2 (1 : 3・1 : 4)



第 203 図 出土遺物実測図 3 (1 : 3・1 : 4)

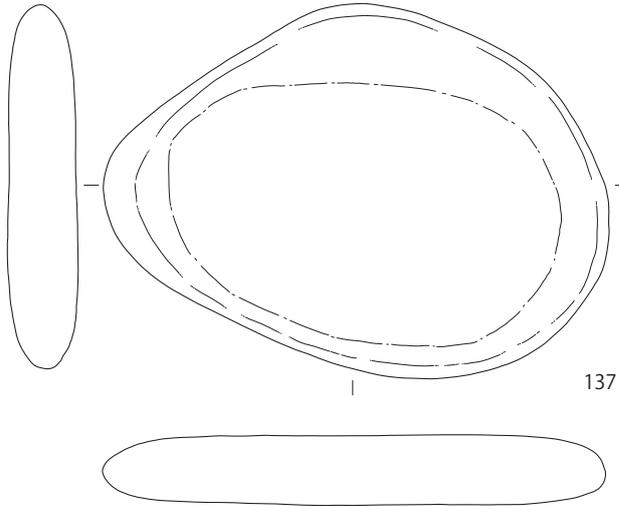


第 204 図 出土遺物実測図 4 (1 : 3 · 1 : 4)

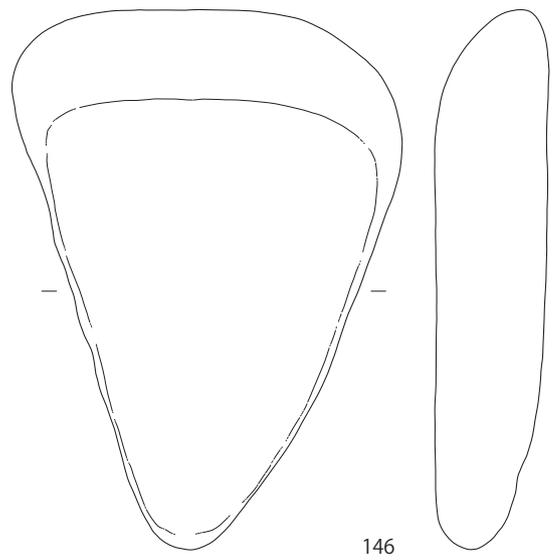


第 205 図 出土遺物実測図 5 (1 : 3・1 : 4)

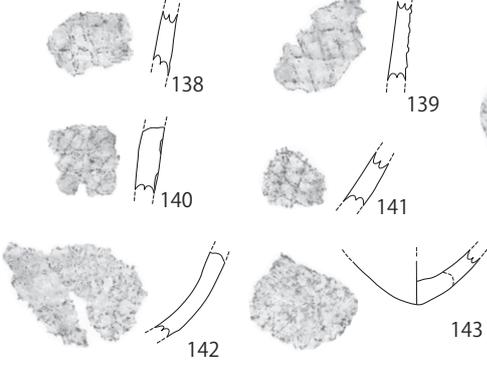
SF1583 (137)



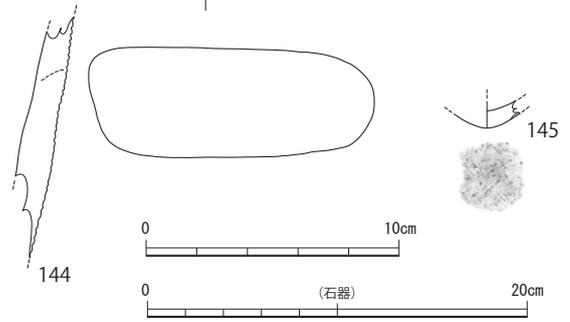
SF1728 (145・146)



SF1713 (138~143)

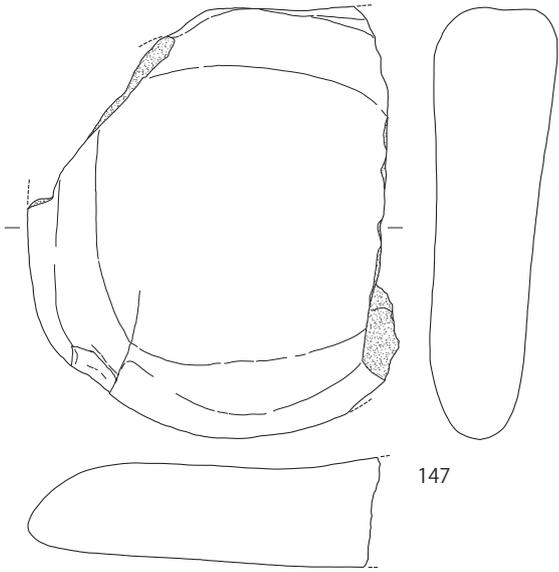


SF1724 (144)

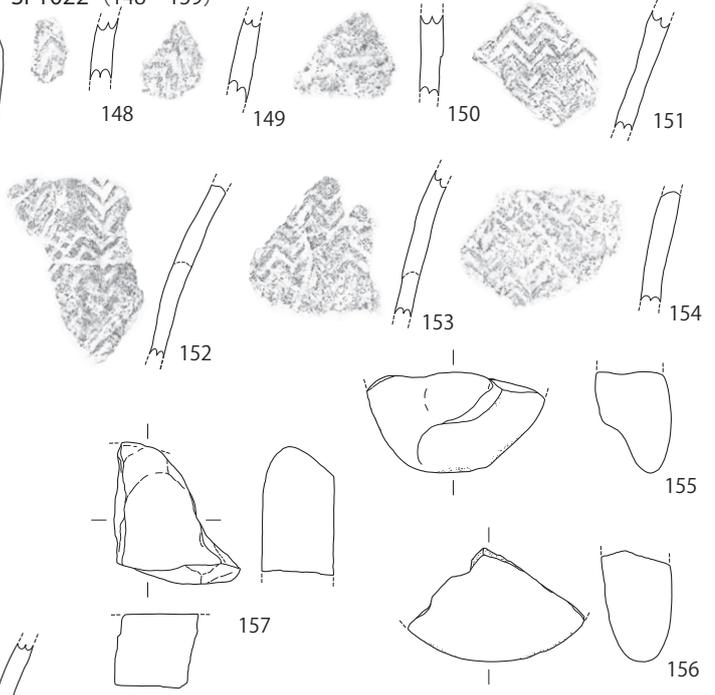


第 206 図 出土遺物実測図 6 (1 : 3 ・ 1 : 4)

SF1010 (147)



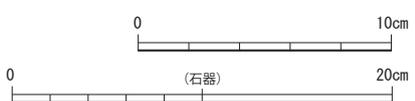
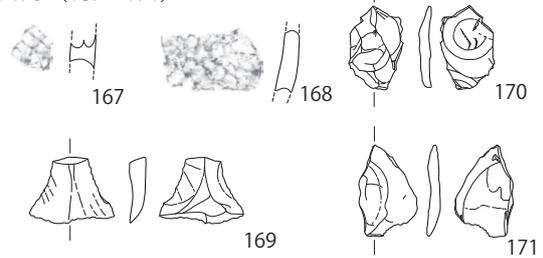
SF1022 (148~159)



SF1023 (160~166)

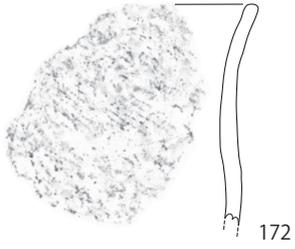


SF1479 (167~171)

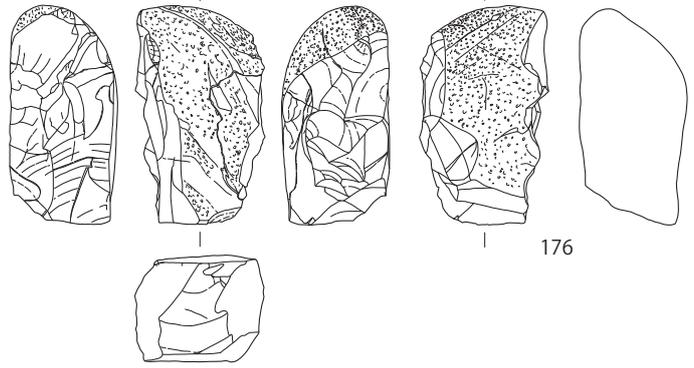


第 207 图 出土遺物実測图 7 (1 : 3 · 1 : 4)

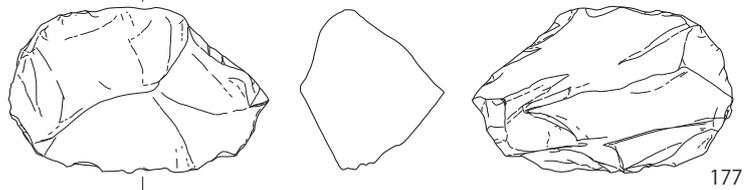
SF1404 (172~174)



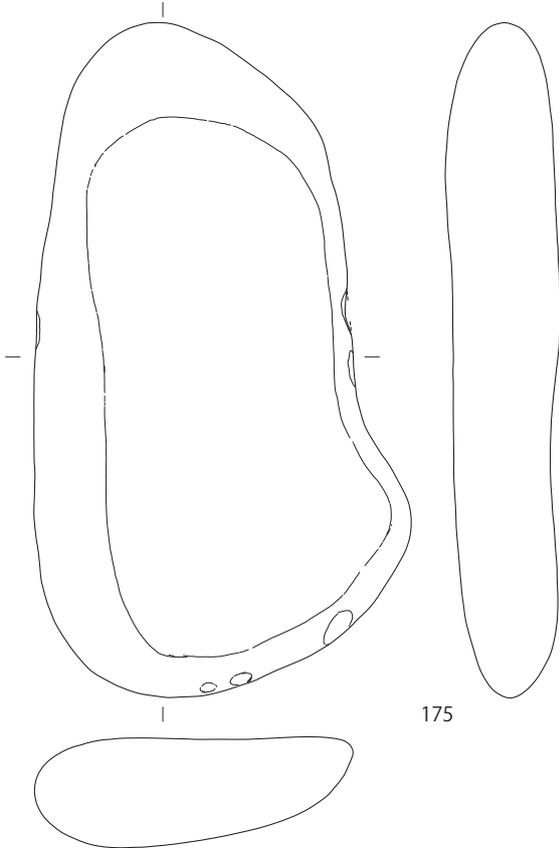
SF1490 (176)



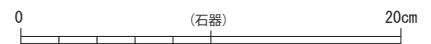
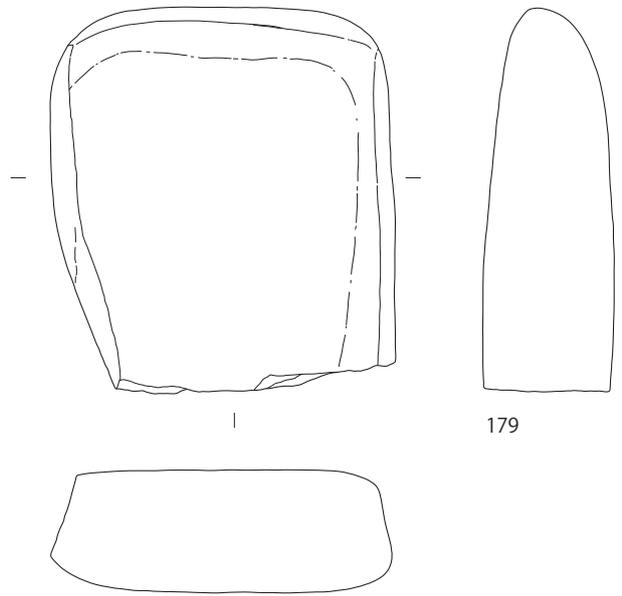
SF1492 (177・178)



SF1454 (175)

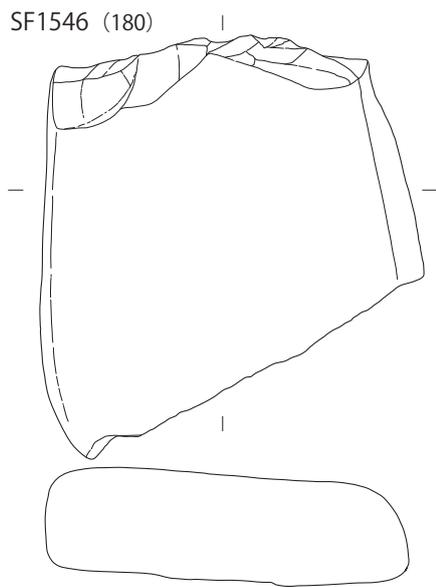


SF1544 (179)



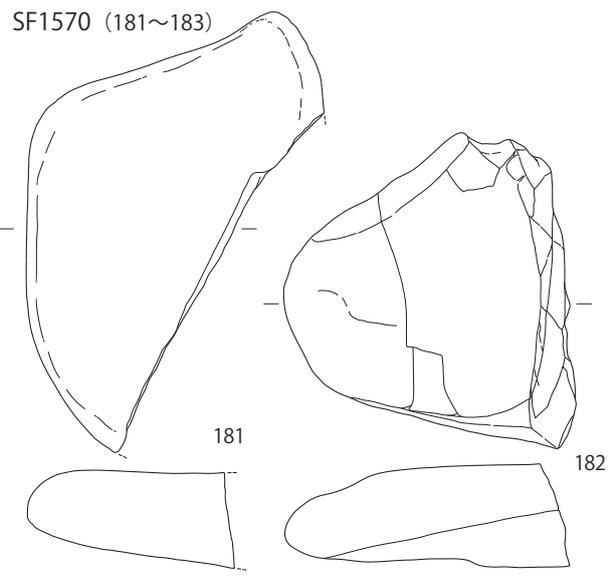
第 208 図 出土遺物実測図 8 (1 : 3・1 : 4)

SF1546 (180)



180

SF1570 (181~183)



181

182

183

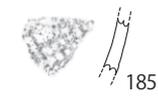
SF1493 (184)



184



SK1028 (185)



185

SK1075 (186)



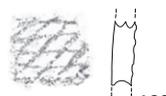
186

SK1078 (187)

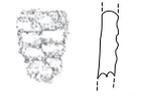


187

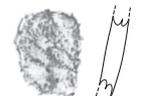
Pit (189~191)



189

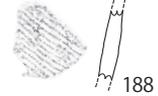


190



191

SD1021 (188)

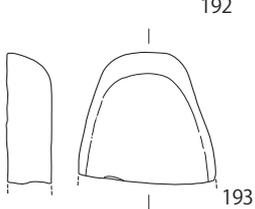


188

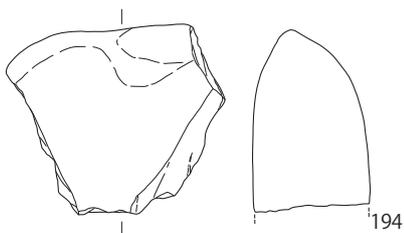
SK1722 (192~196)



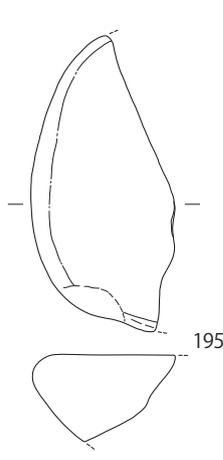
192



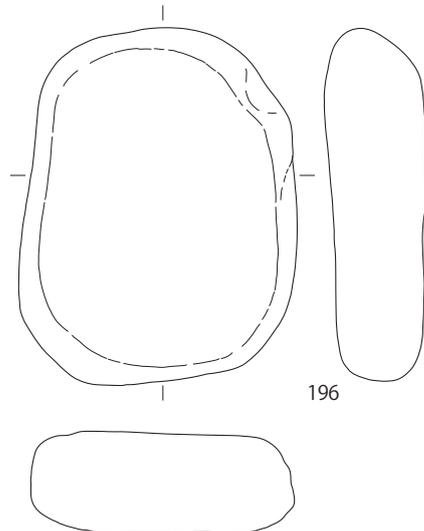
193



194



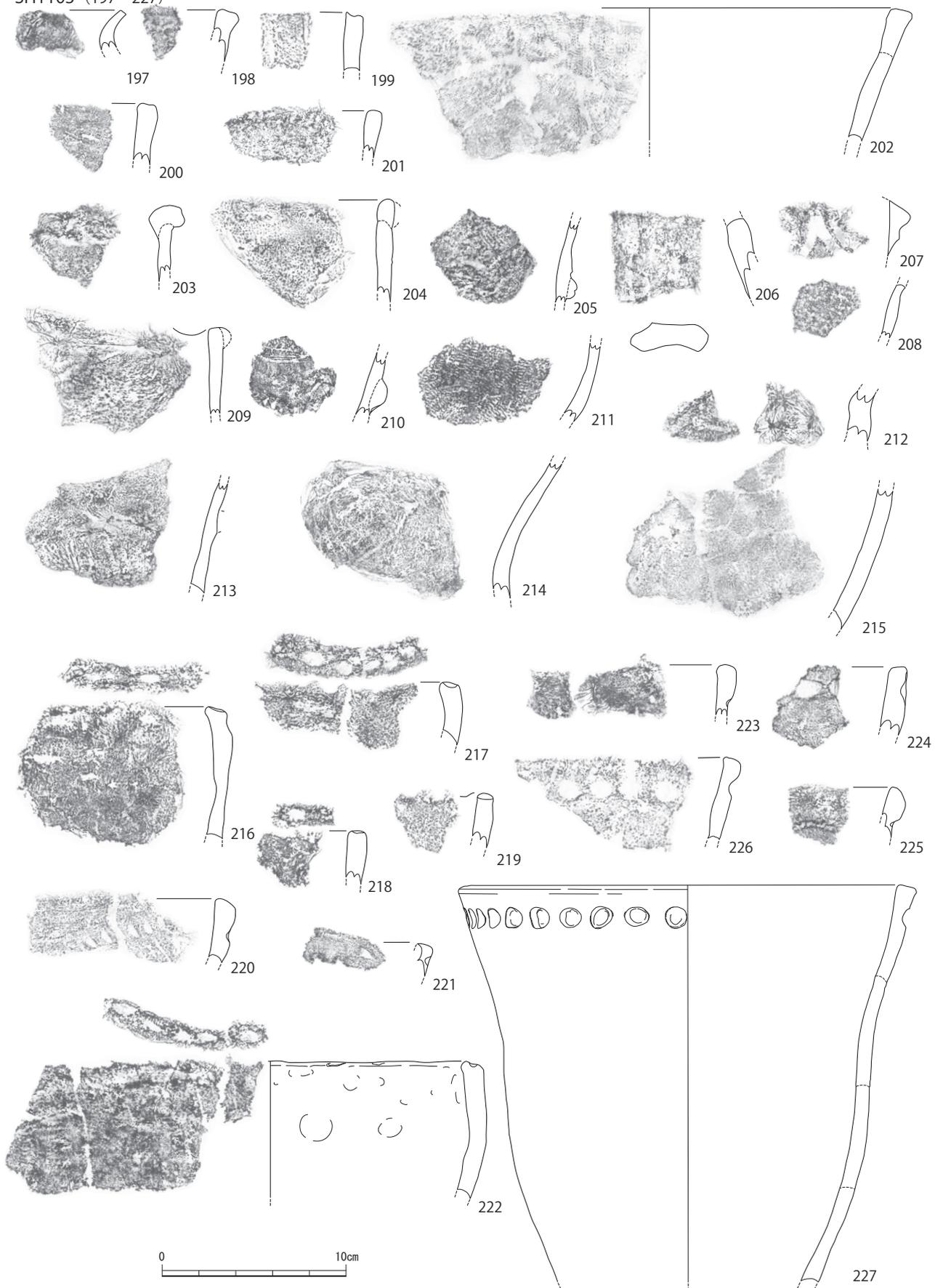
195



196

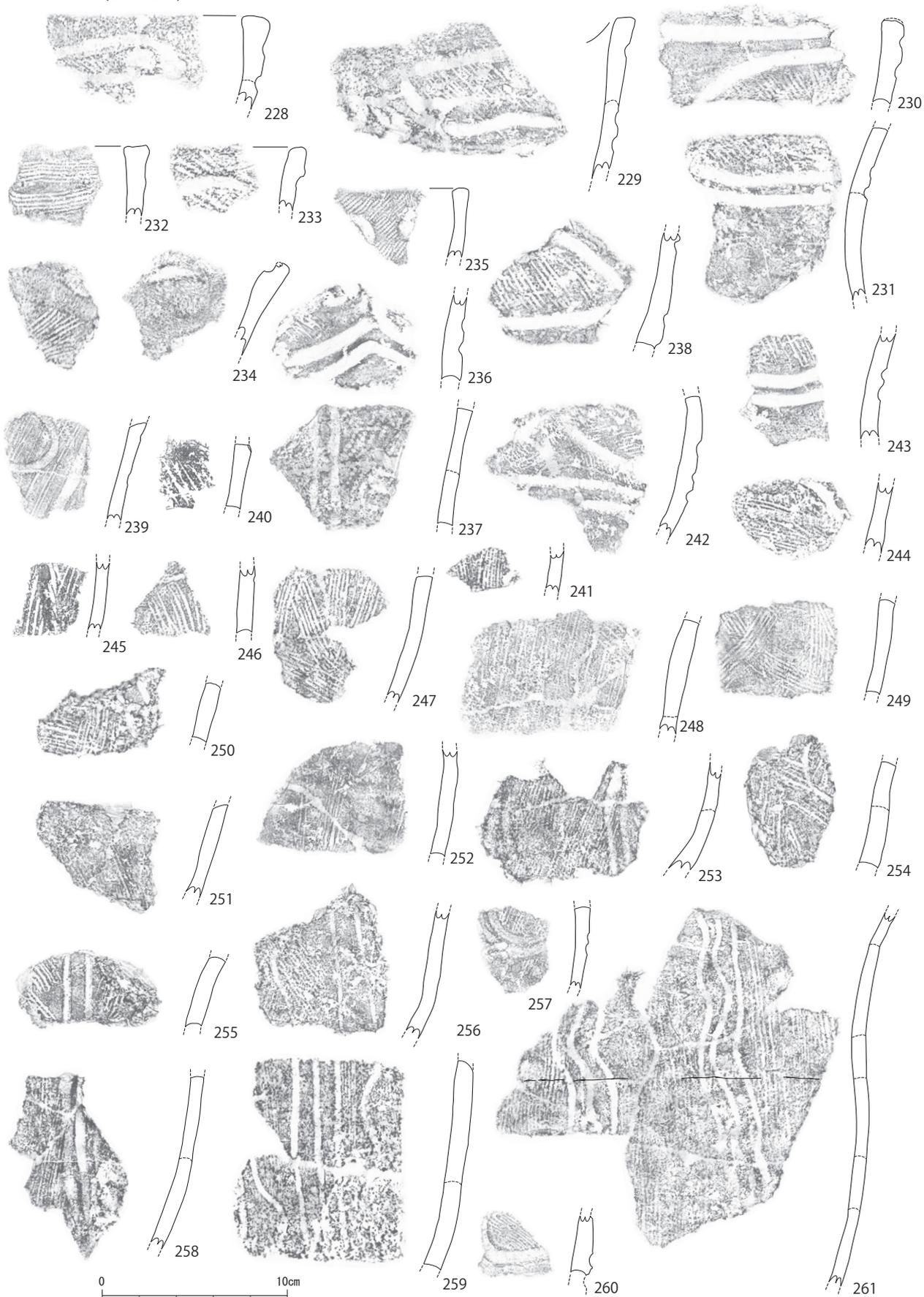
第 209 図 出土遺物実測図 9 (1 : 3 · 1 : 4)

SH1103 (197~227)



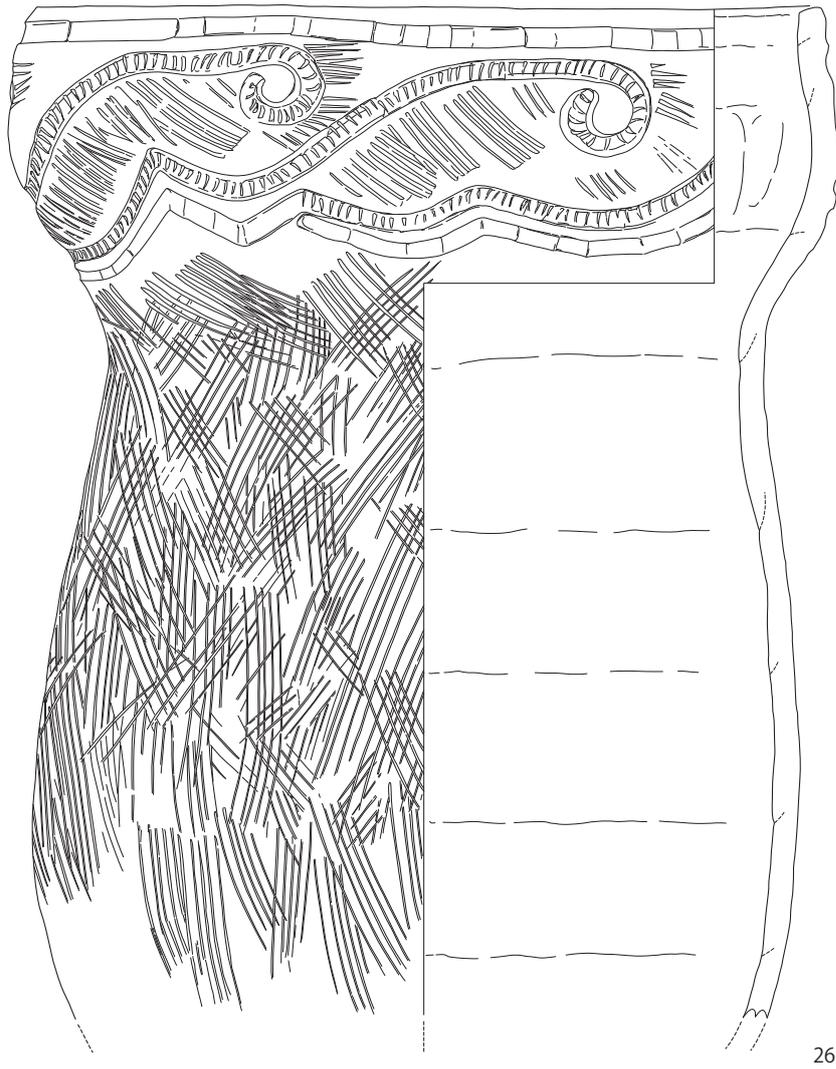
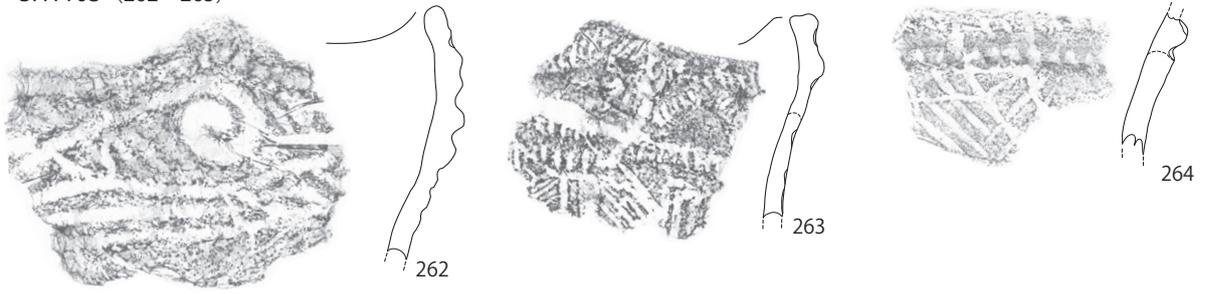
第 210 図 出土遺物実測図 10 (1 : 3)

SH1103 (228~261)



第 211 图 出土遺物実測図 11 (1 : 3)

SH1103 (262~265)



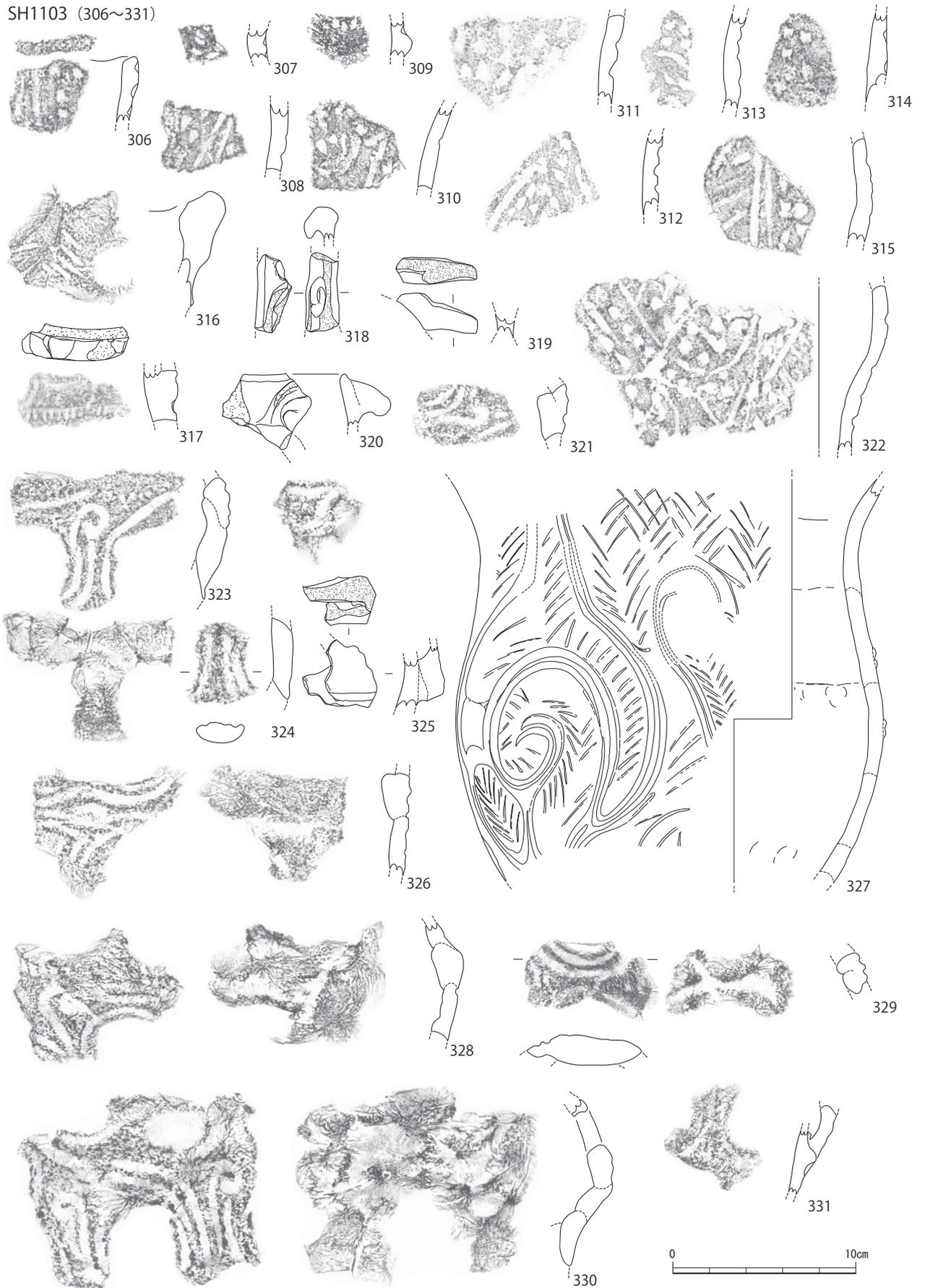
第 212 図 出土遺物実測図 12 (1 : 3)

SH1103 (266~305)



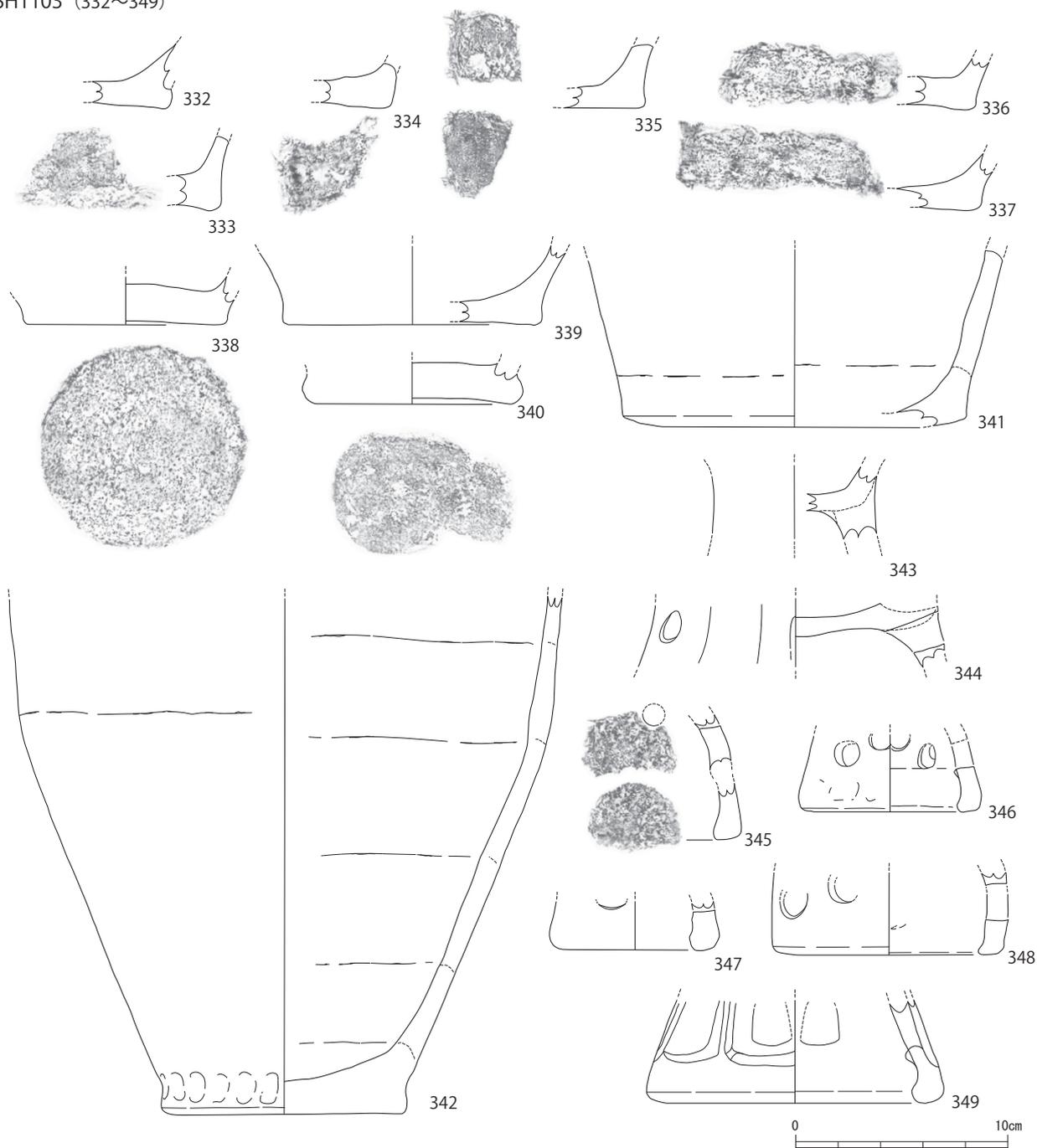
第 213 図 出土遺物実測図 13 (1 : 3)

SH1103 (306~331)



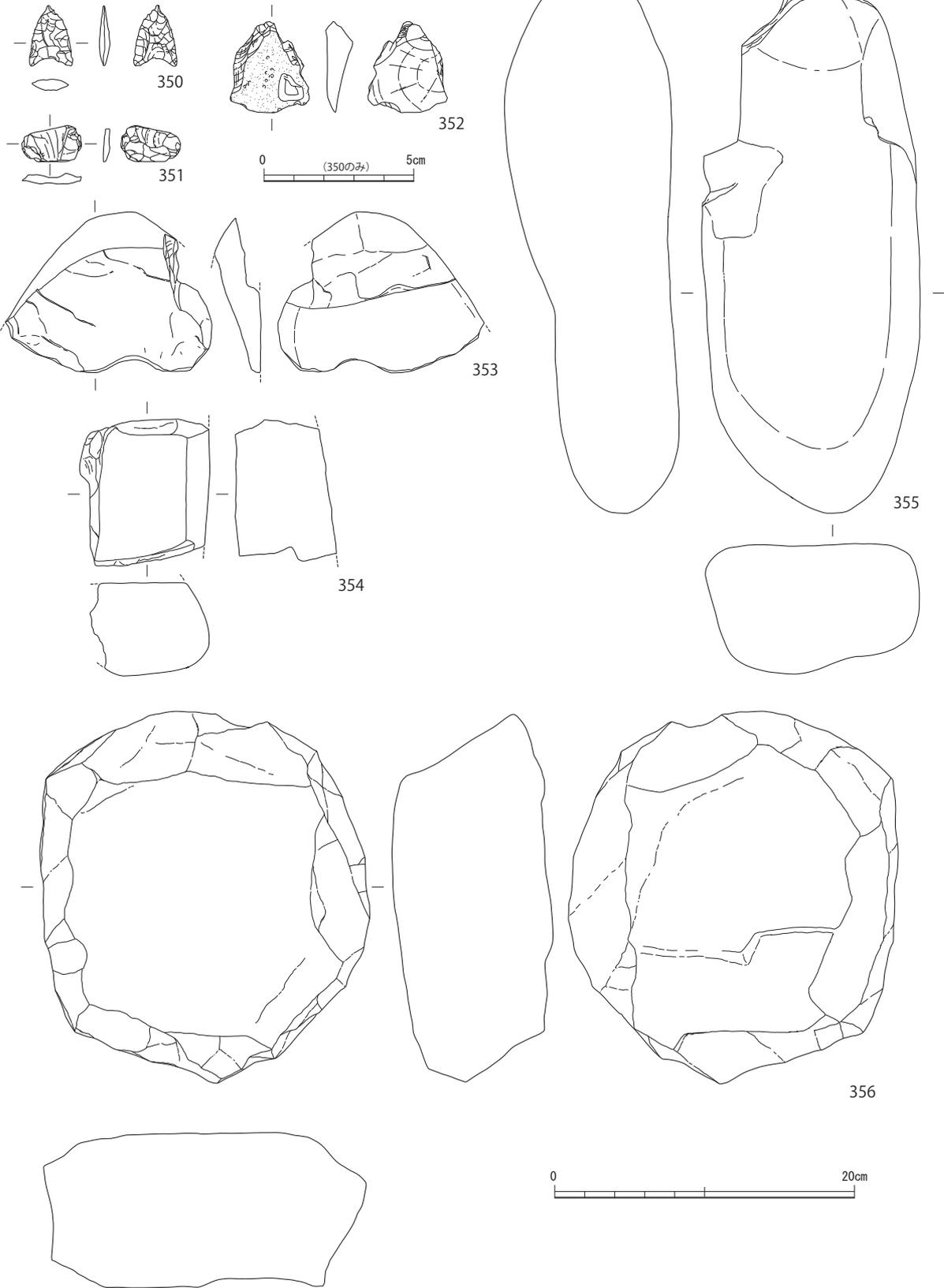
第 214 図 出土遺物実測図 14 (1 : 3)

SH1103 (332~349)



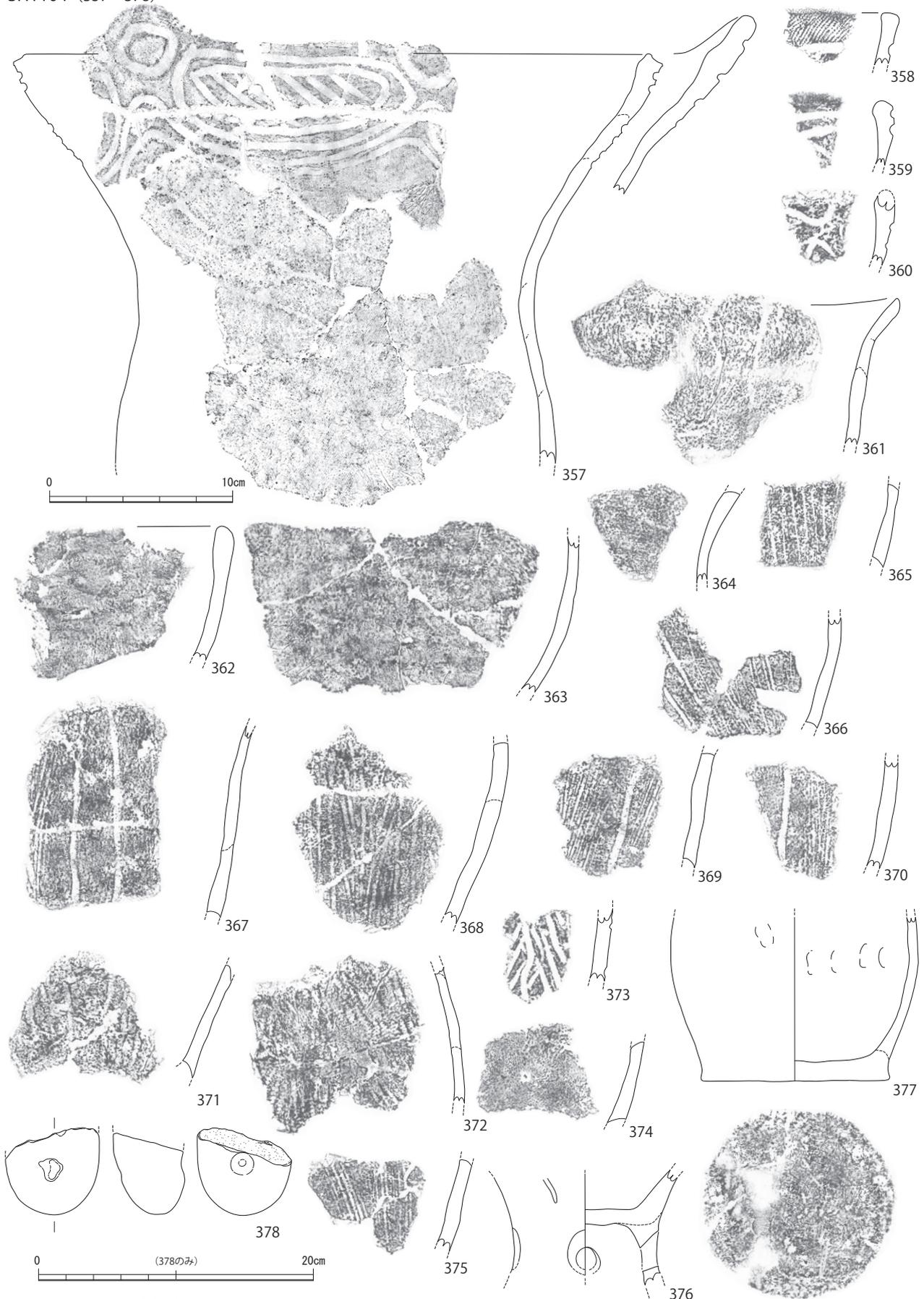
第 215 図 出土遺物実測図 15 (1 : 3)

SH1103 (350~356)



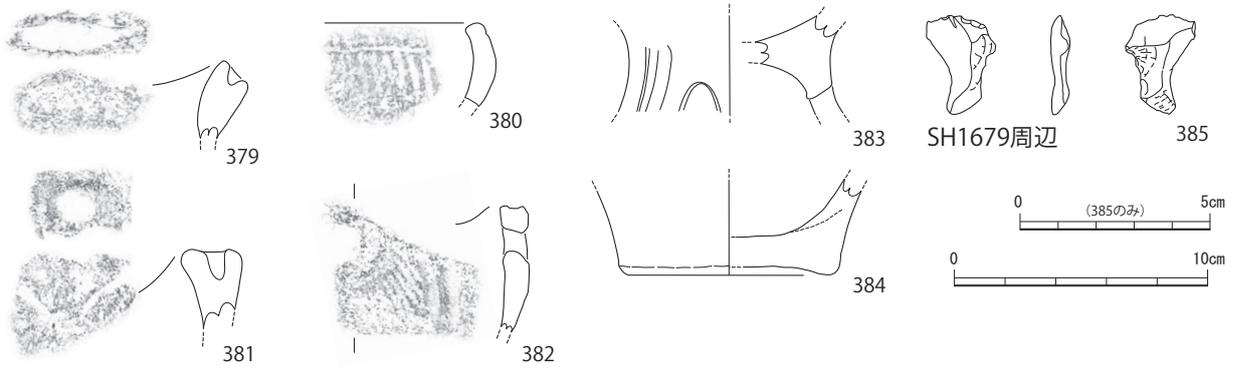
第 216 図 出土遺物実測図 16 (1 : 2 · 1 : 4)

SH1104 (357~378)

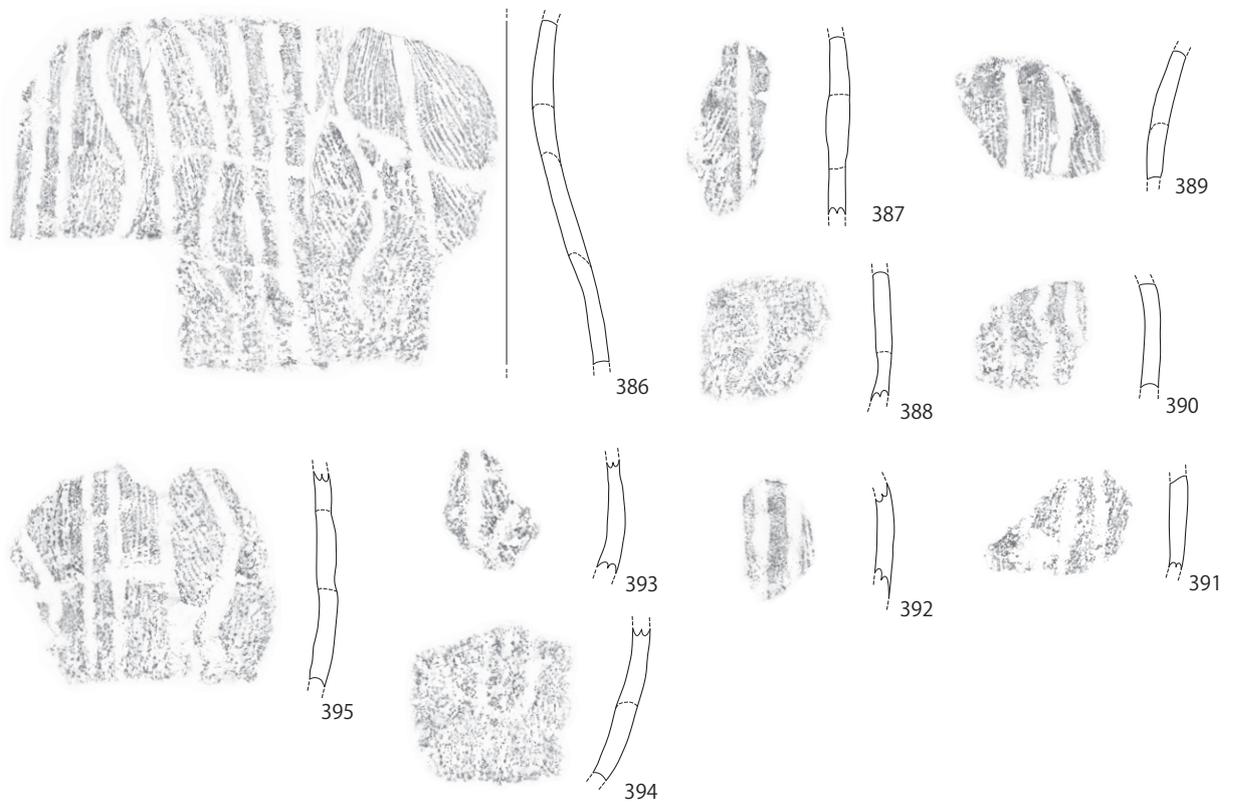


第217図 出土遺物実測図17 (1:3・1:4)

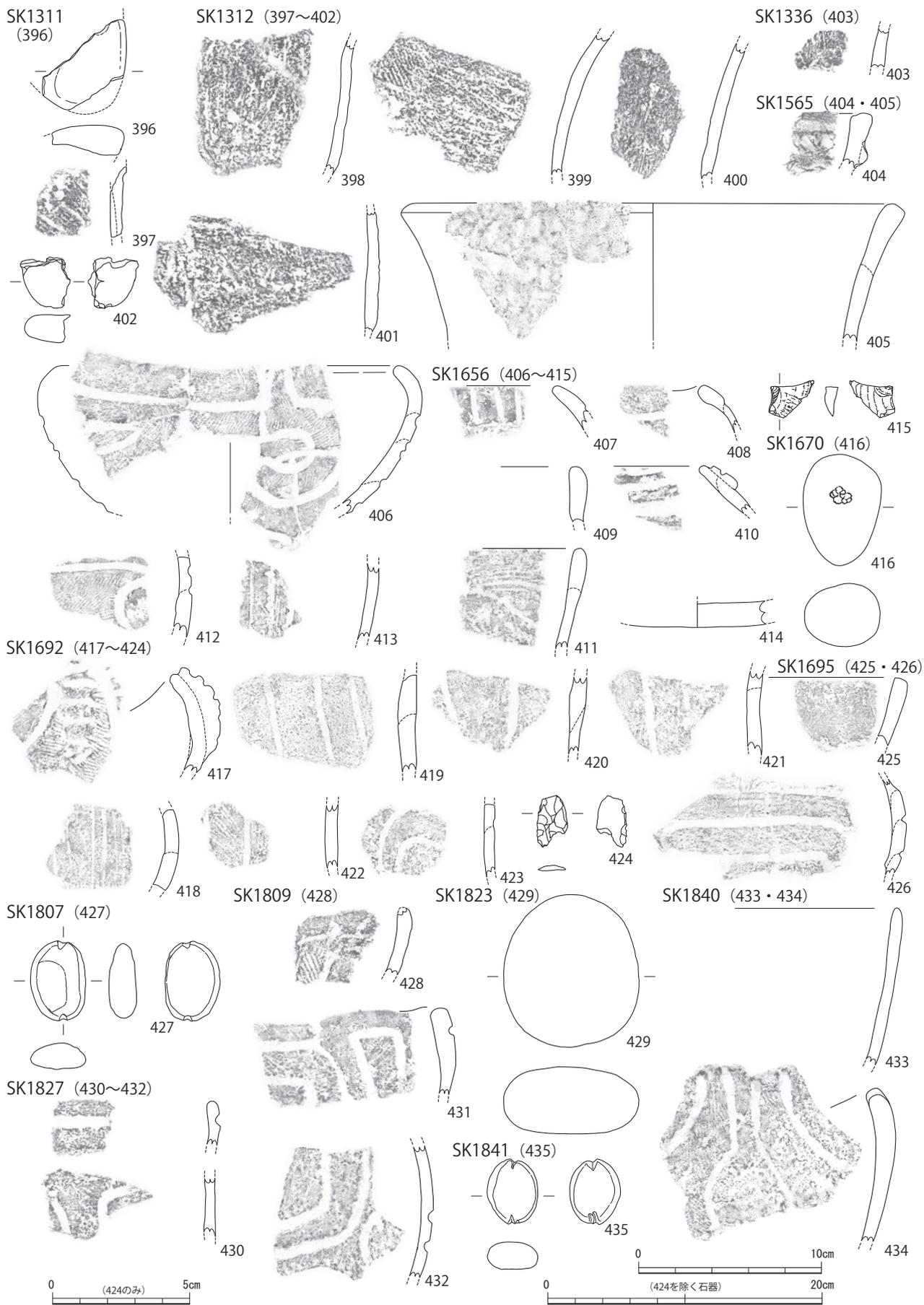
SH1679 (379~395)



SK1693 (SH1679屋内炉)

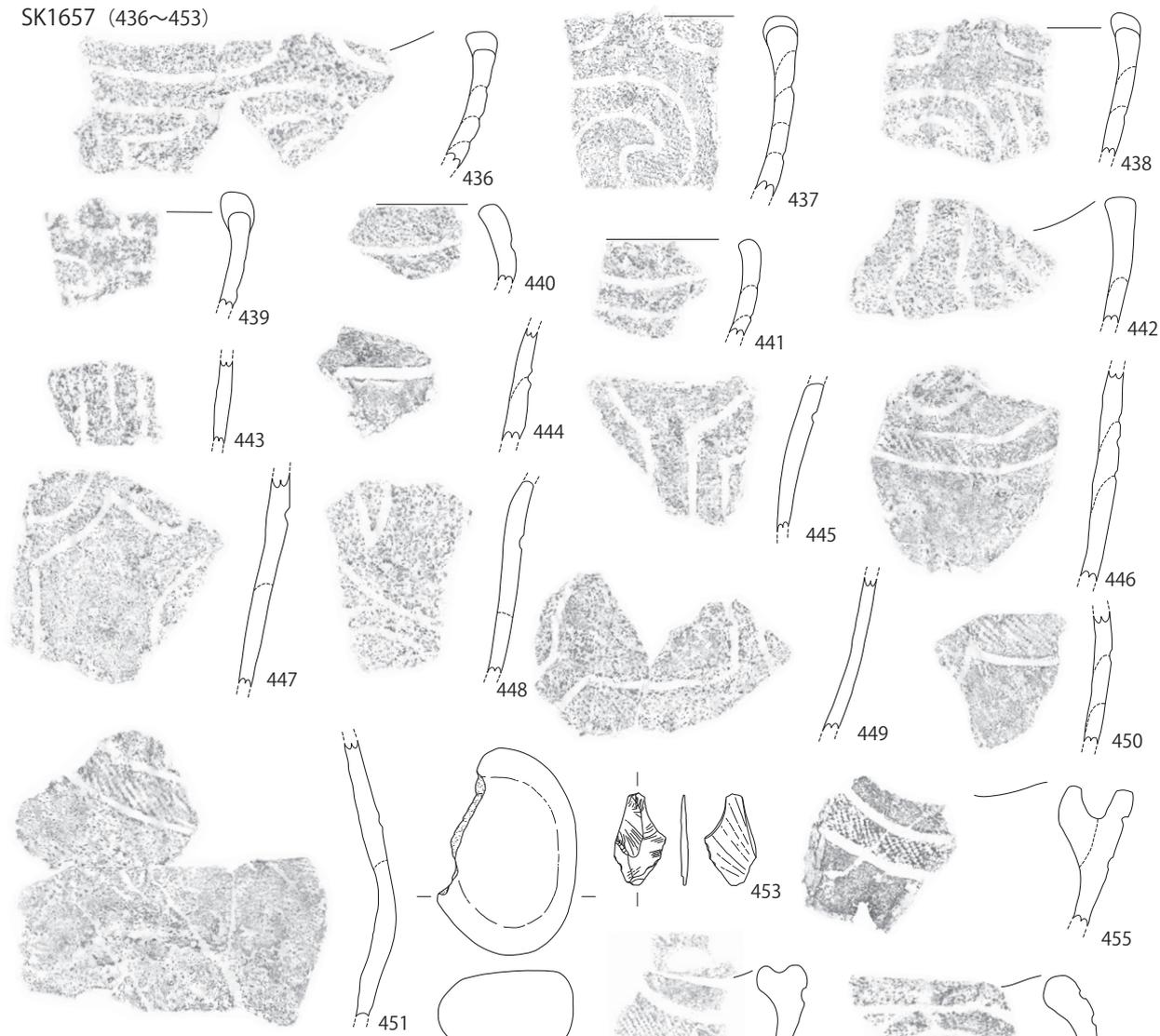


第 218 図 出土遺物実測図 18 (1 : 2 · 1 : 3)

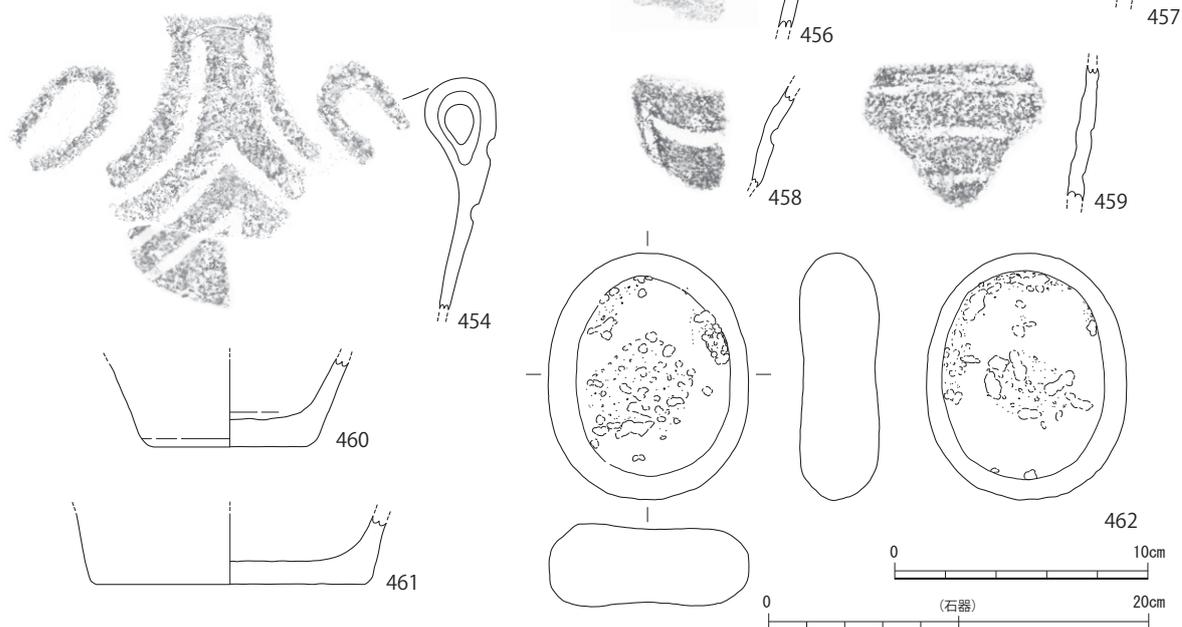


第219図 出土遺物実測図19 (1:2・1:3・1:4)

SK1657 (436~453)

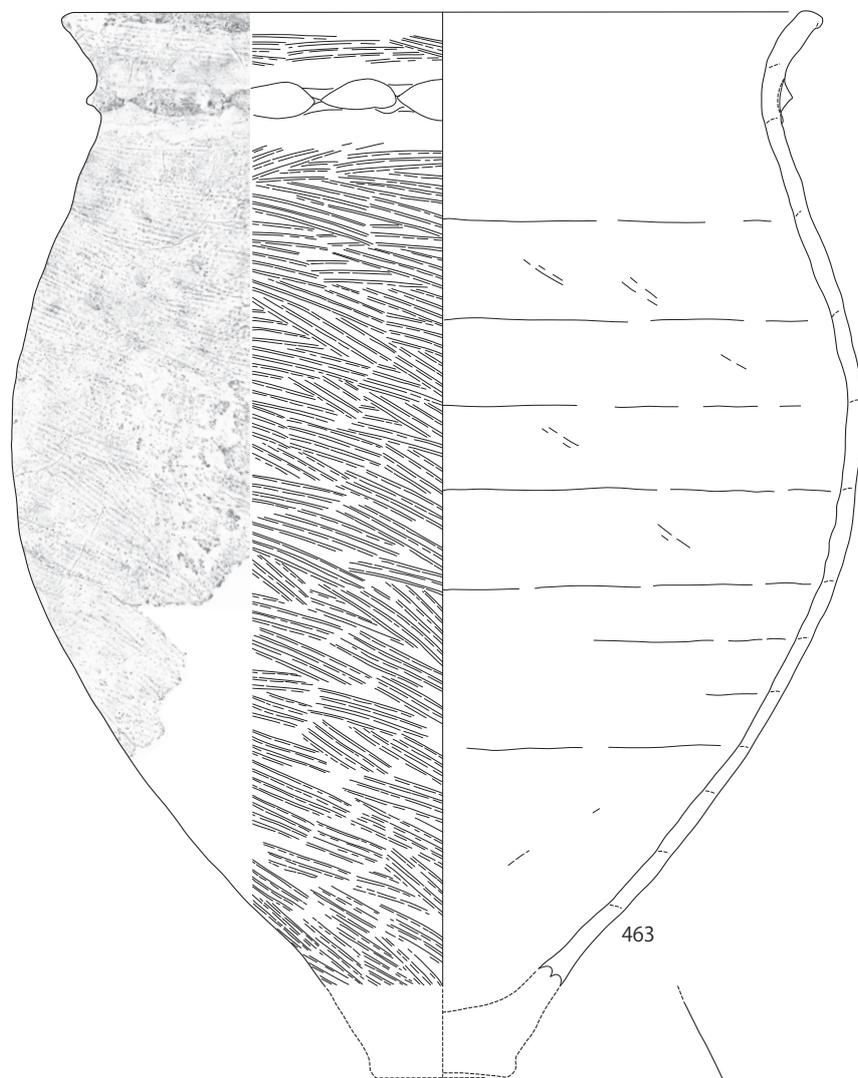


SK1838 (454~462)



第 220 図 出土遺物実測図 20 (1 : 3 · 1 : 4)

SX1109 (463)



SX1118 (464 · 465)

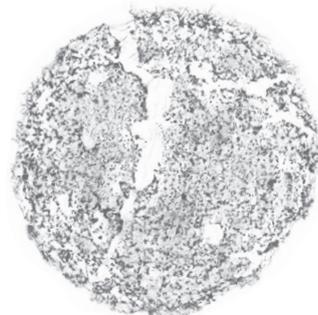


463

464

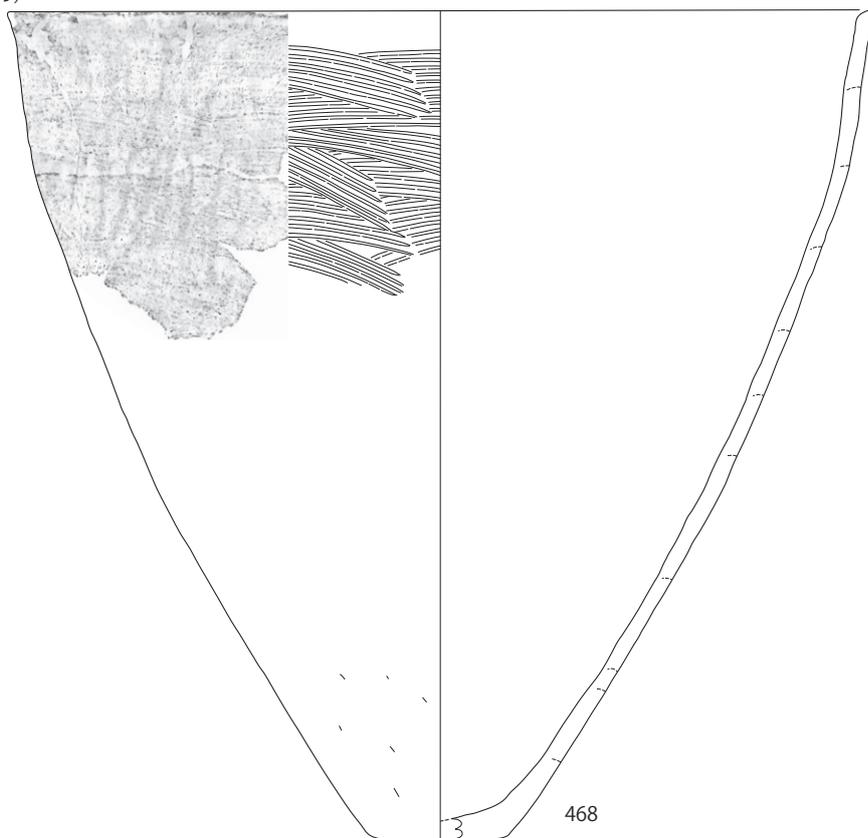
0 10cm

465

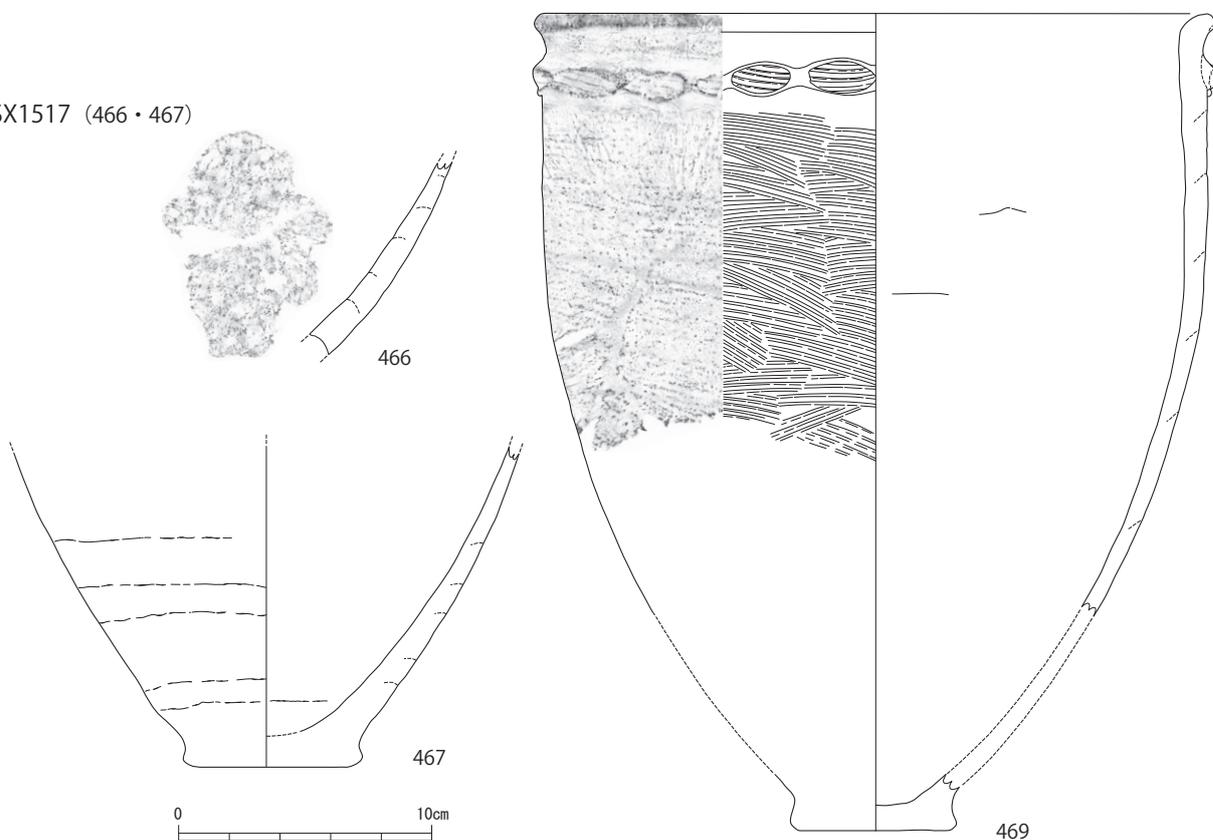


第 221 図 出土遺物実測図 21 (1 : 3)

SX1590 (468・469)

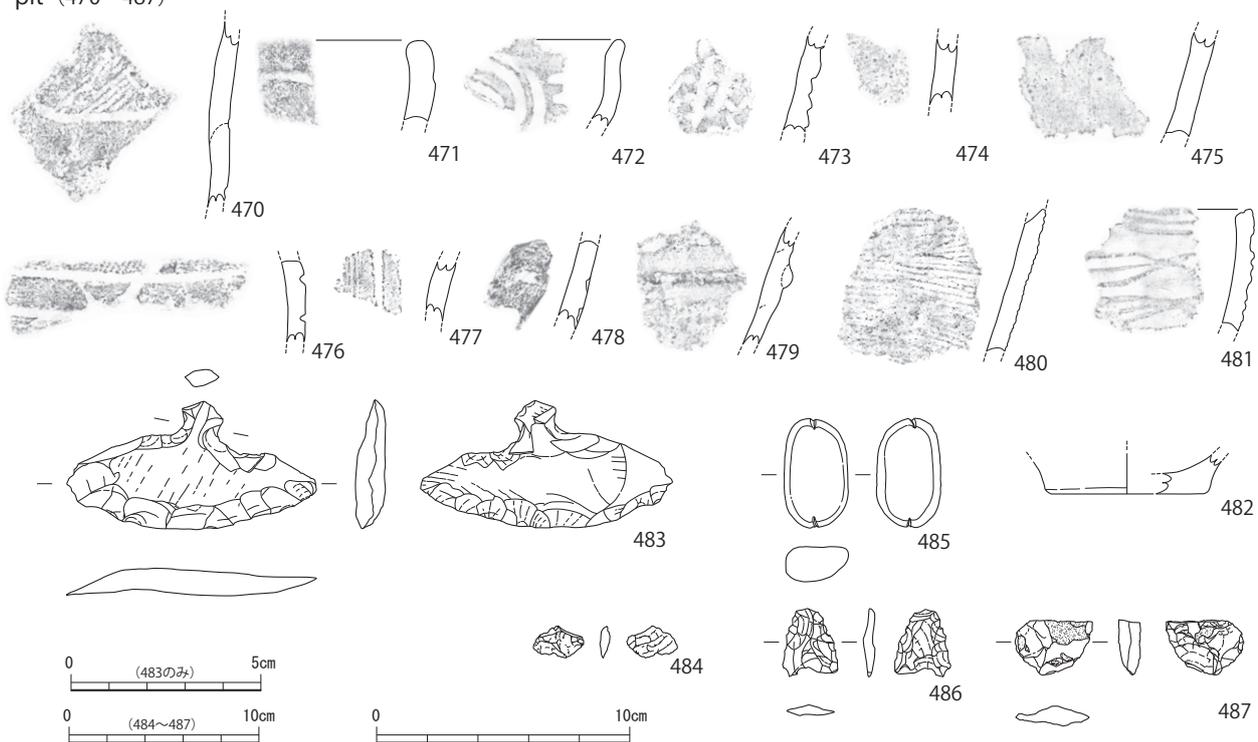


SX1517 (466・467)



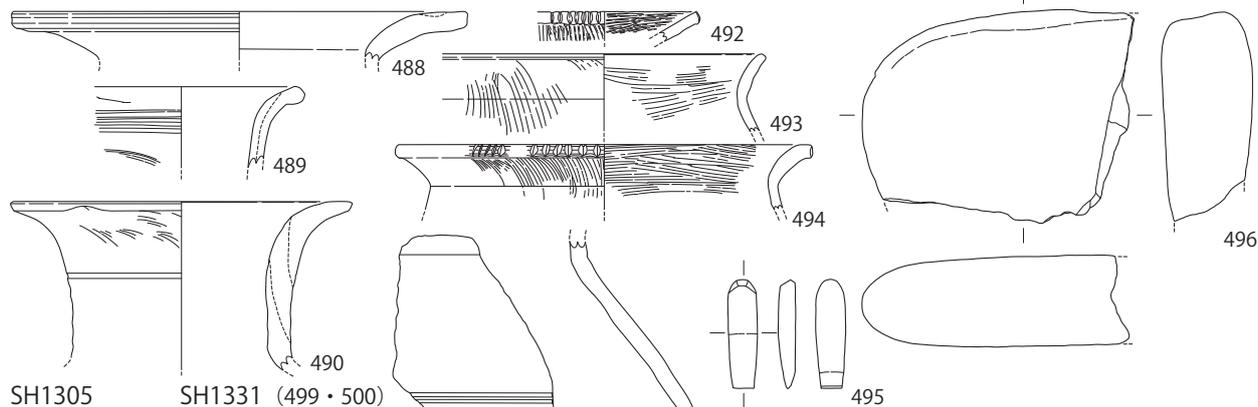
第 222 図 出土遺物実測図 22 (1 : 3)

pit (470~487)

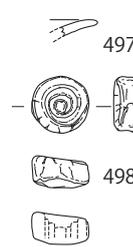


第 223 図 出土遺物実測図 23 (1 : 2 · 1 : 3 · 1 : 4)

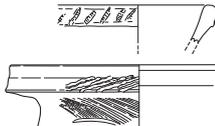
SH1026 (488~496)



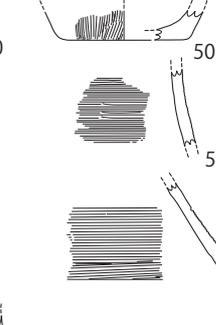
SH1305 (497・498)



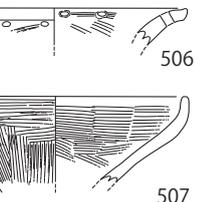
SH1331 (499・500)



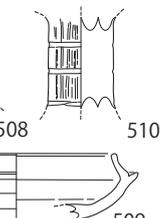
SH1444 (503~505)



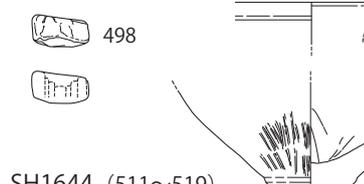
SH1639 (506~509)



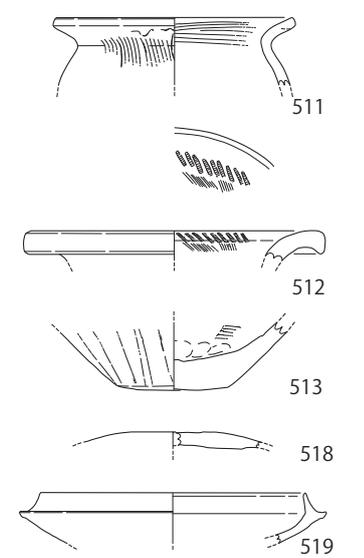
SH1641 (510)



SH1333 (501・502)



SH1644 (511~519)



502



514



515



516



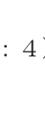
517



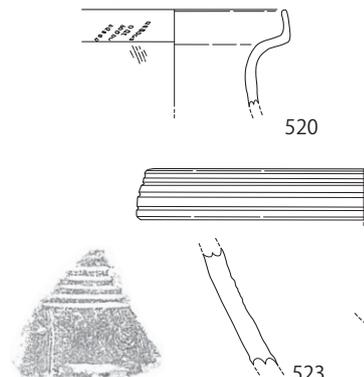
518



519



SH1646 (520~528)



502



514



515



516



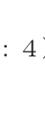
517



518

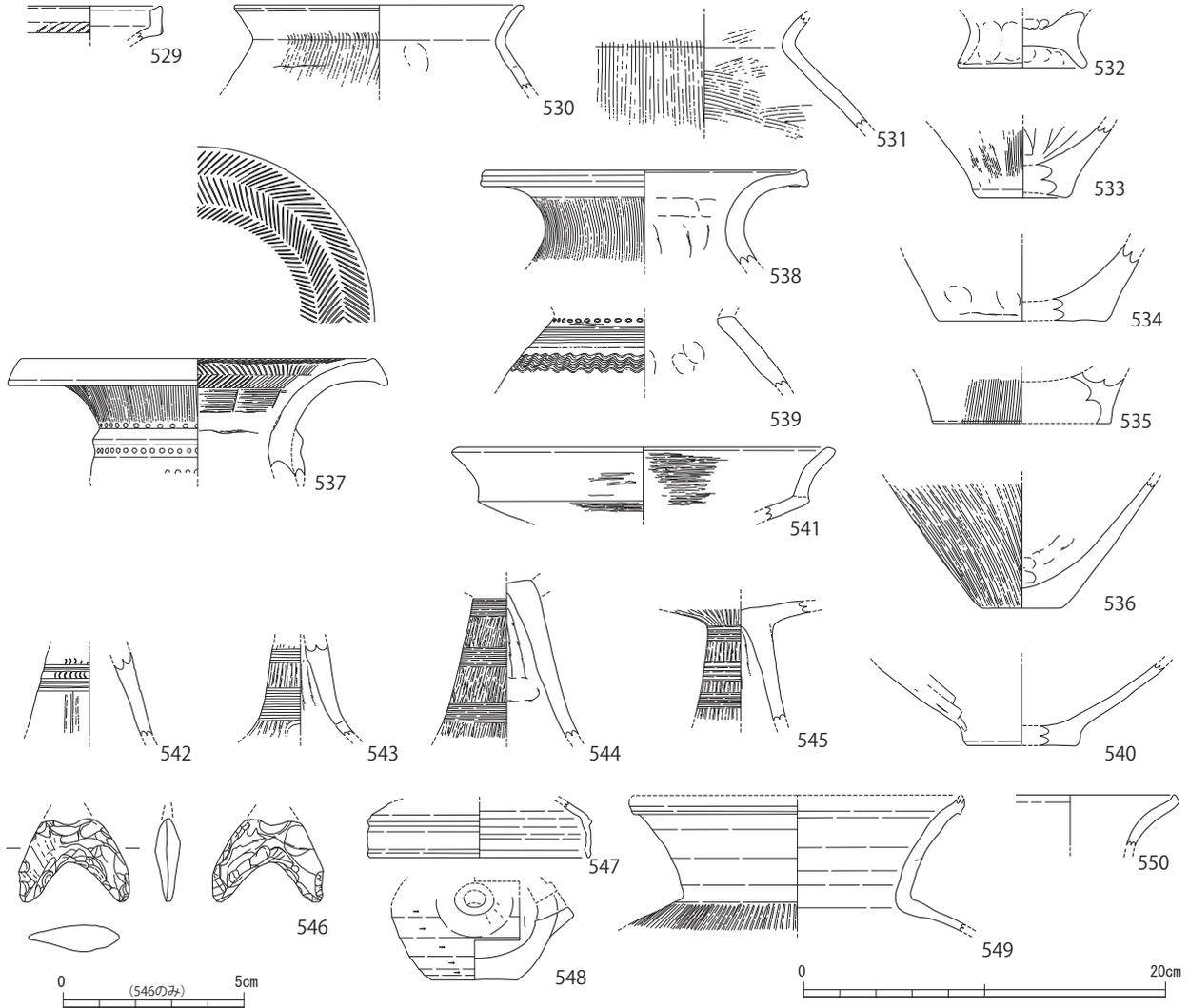


519

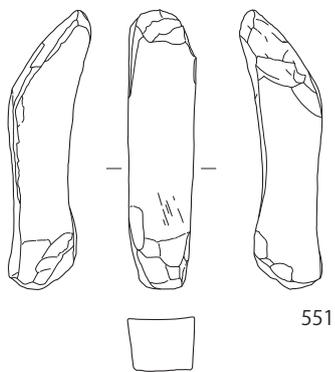


第 224 図 出土遺物実測図 24 (1 : 4)

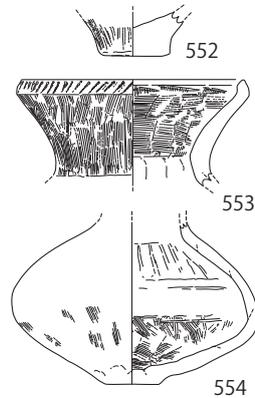
SH1645 (529~550)



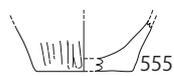
SH1647 (551)



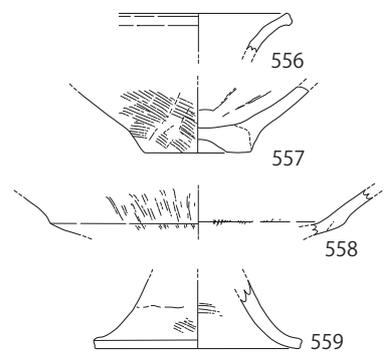
SH1661 (552~554)



SH1683 (555)

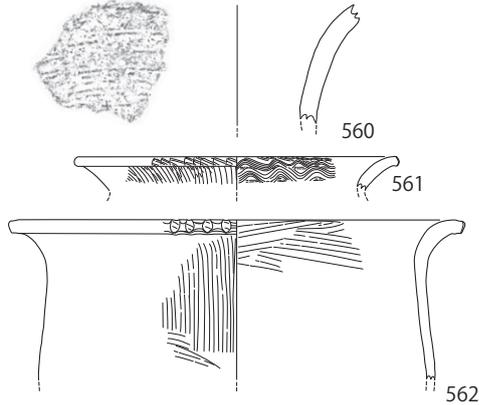


SH394 (556~559)

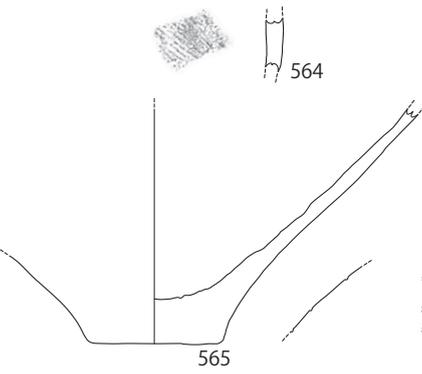


第 225 図 出土遺物実測図 25 (1 : 2 · 1 : 4)

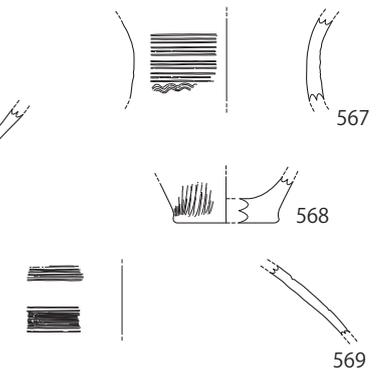
SK1027 (560~563)



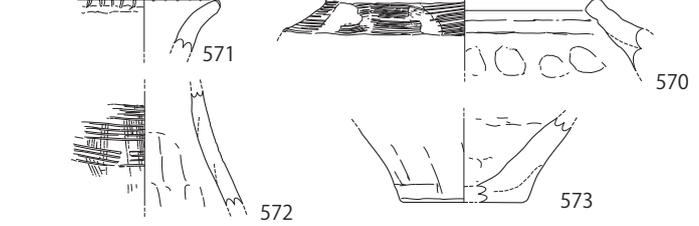
SK1038 (564・565)



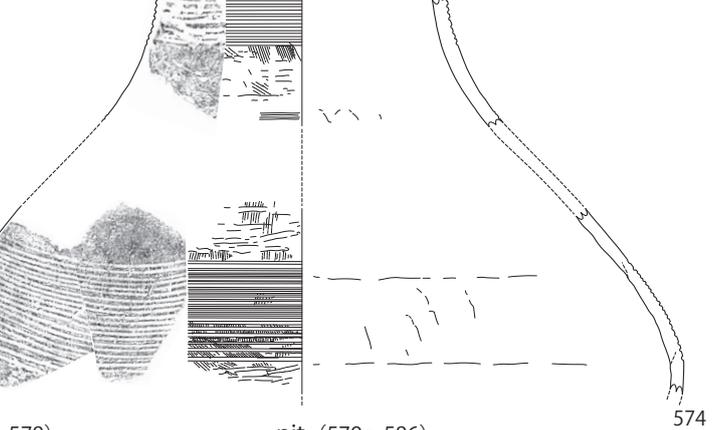
SK1418 (567~569)



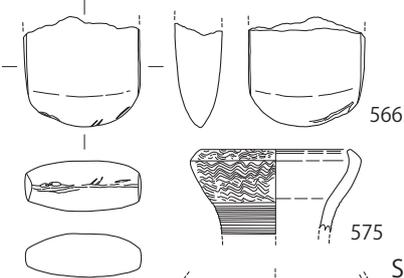
SK1653 (570~573)



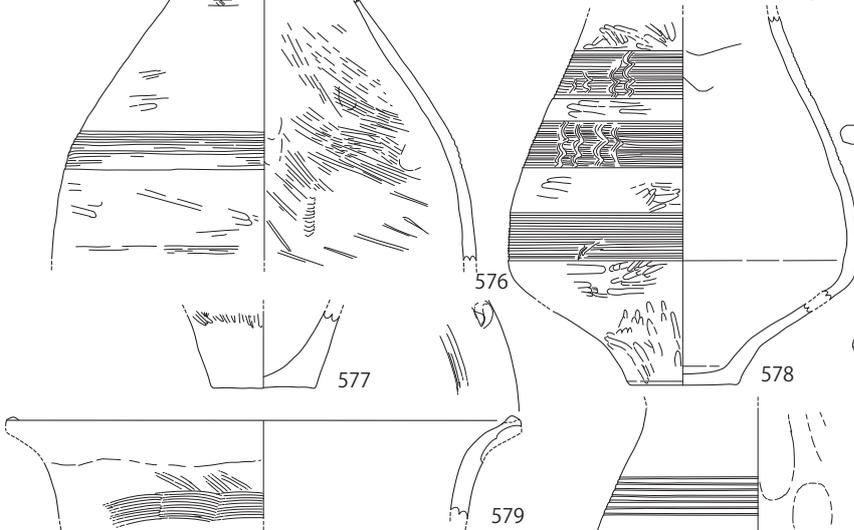
SK1654 (574)



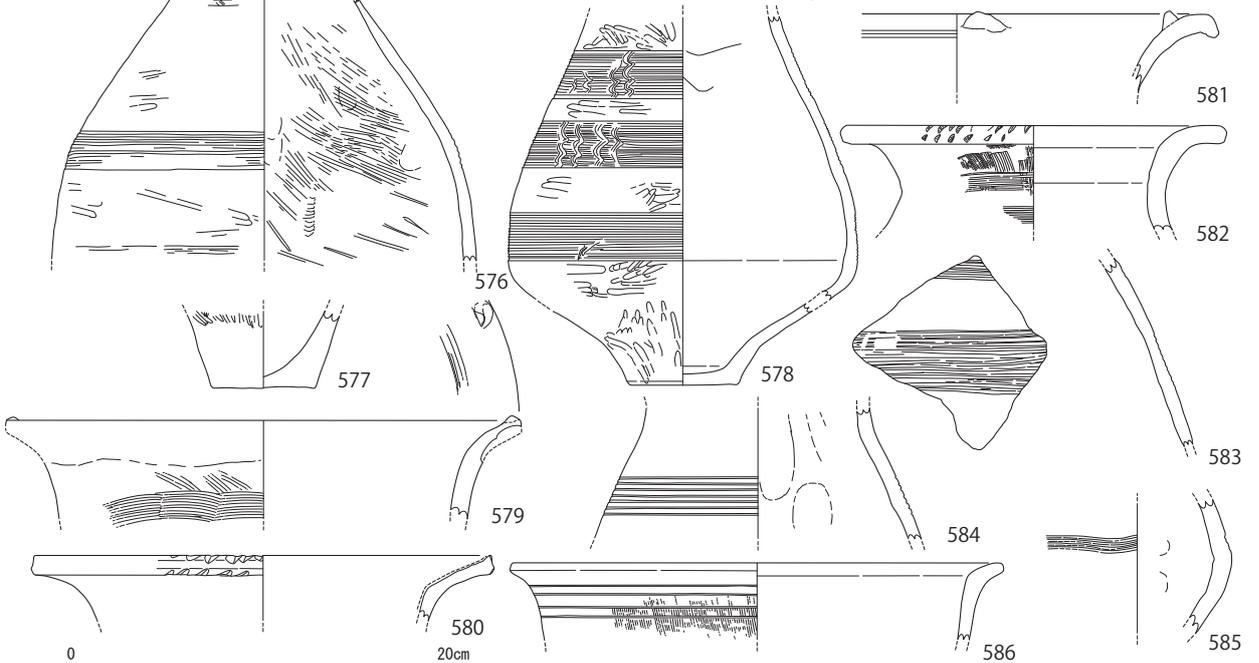
SK1050 (566)



SD1042 (575~578)



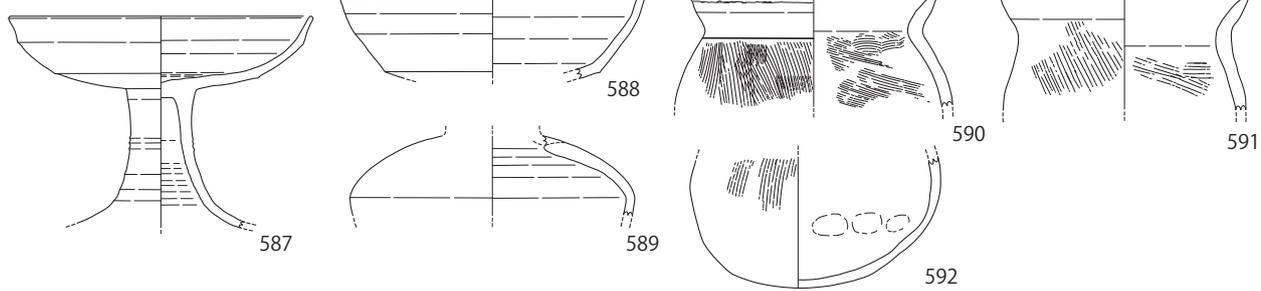
pit (579~586)



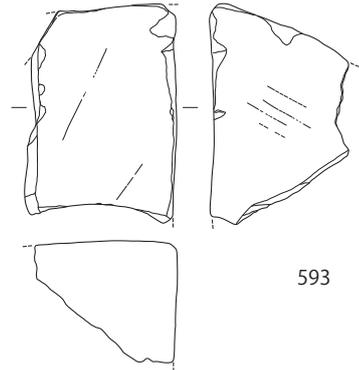
0 20cm

第 226 図 出土遺物実測図 26 (1 : 4)

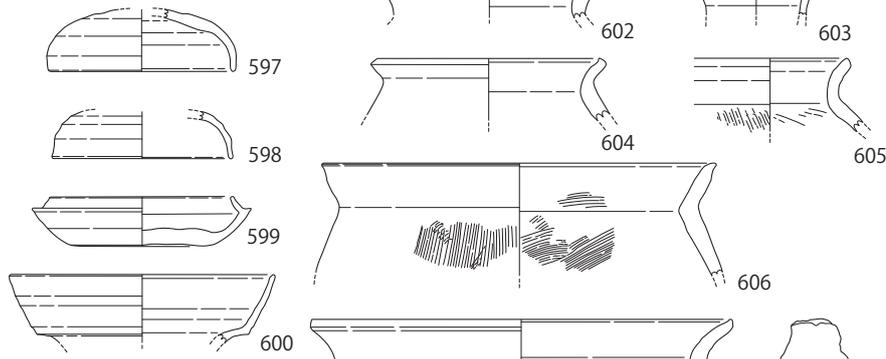
SH701 (587~592)



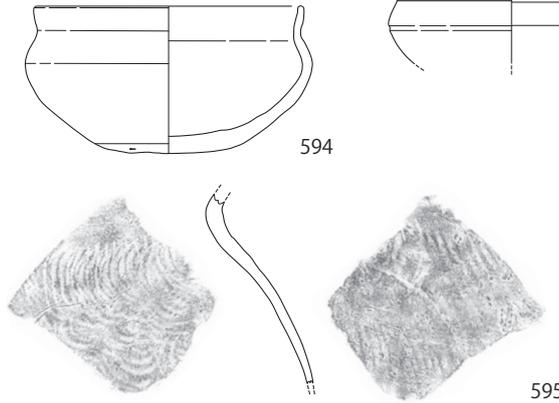
SH1011 (593)



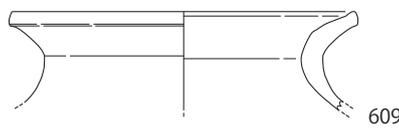
SH1057・SK1061 (597~608)



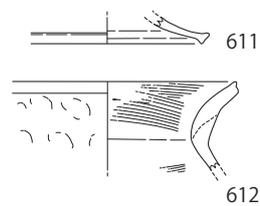
SH1044 (594~596)



SH1058 (609)



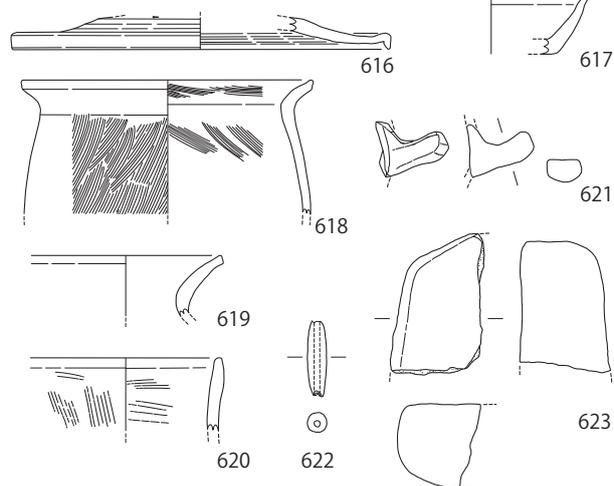
SH1164 (611・612)



SH1063 (610)



SH1223 (616~623)



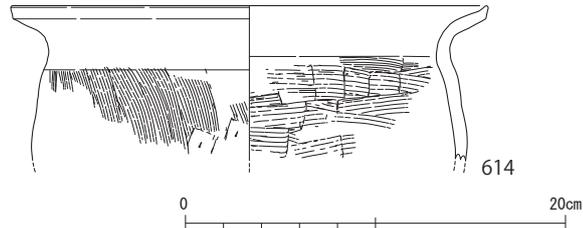
SH1209 (613)



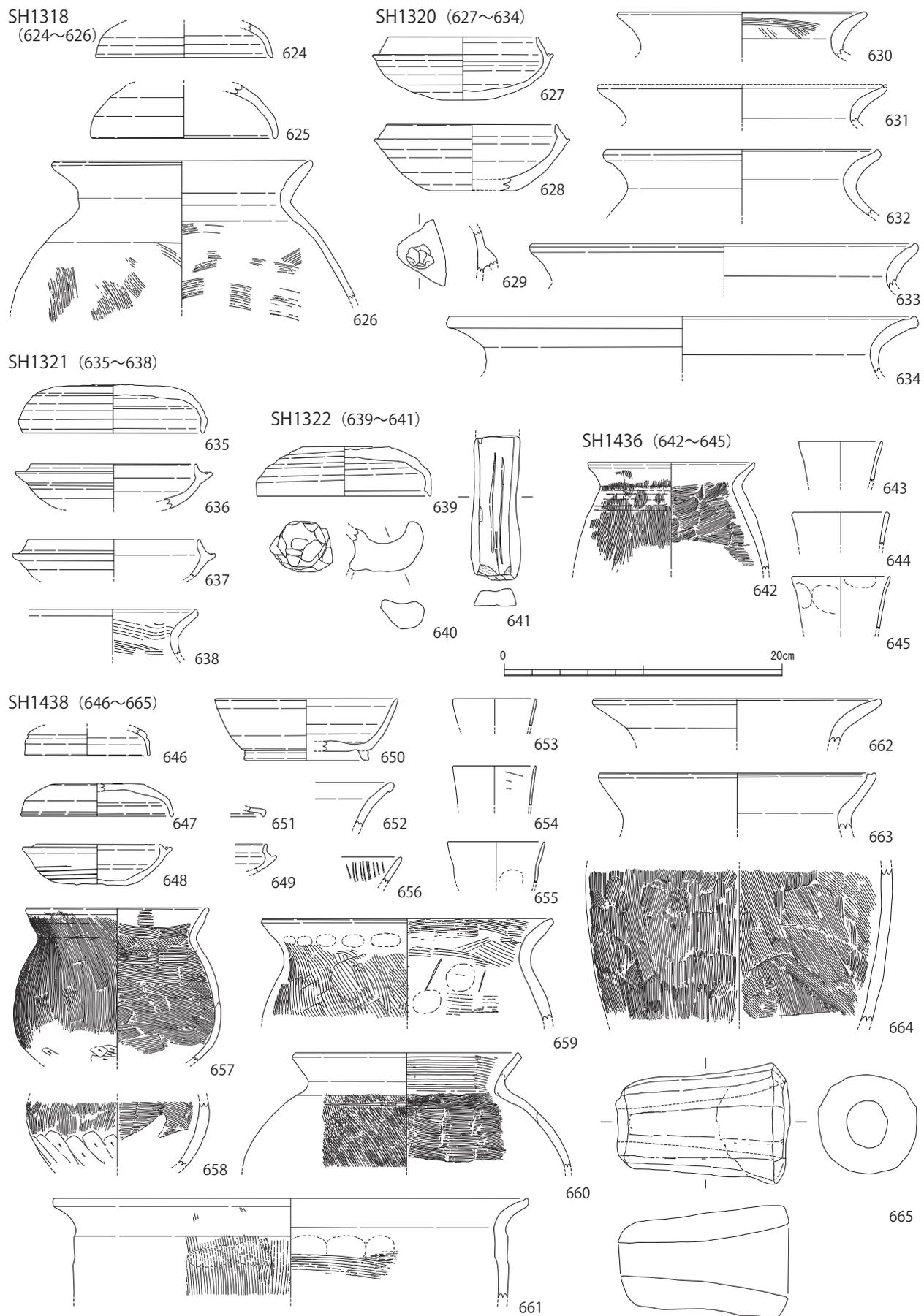
SH1220 (615)



SH1213 (614)

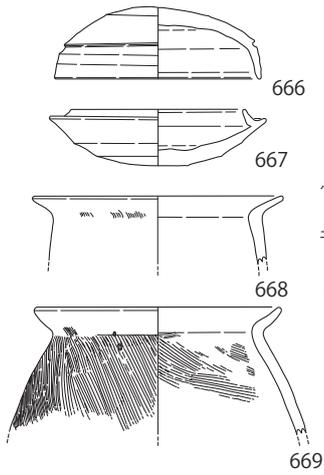


第 227 図 出土遺物実測図 27 (1 : 4)

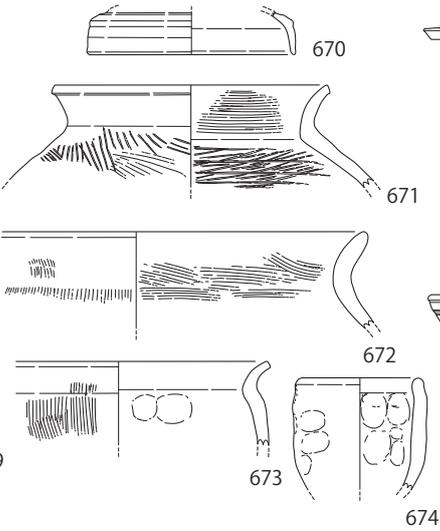


第 228 図 出土遺物実測図 28 (1 : 4)

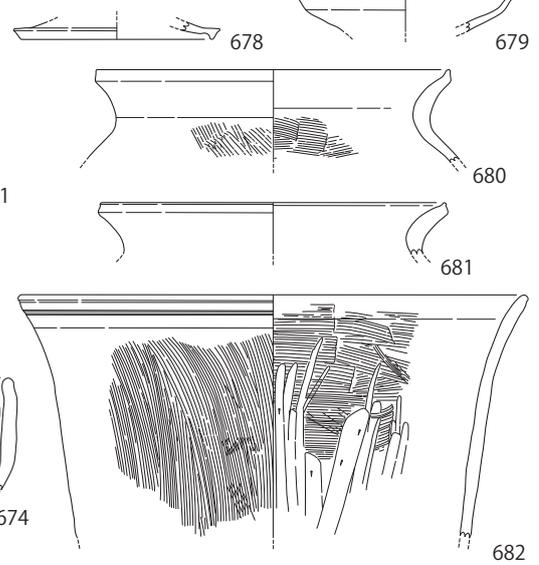
SH1450 (666~669)



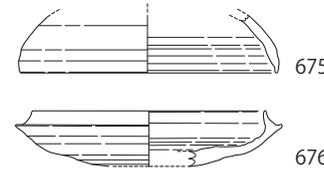
SH1496 (670~674)



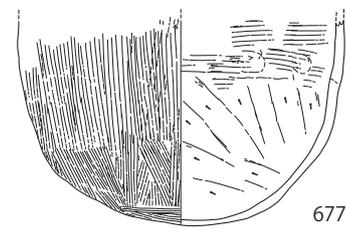
SH1562 (678~684)



SH1515 (675・676)



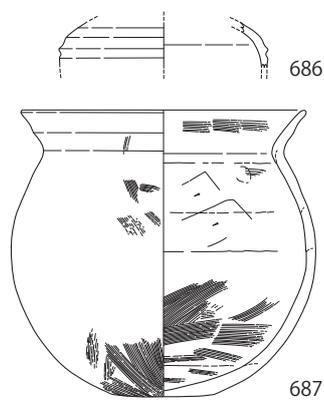
SH1516 (677)



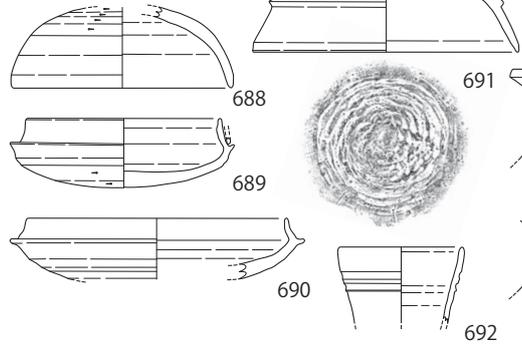
SH1598 (685)



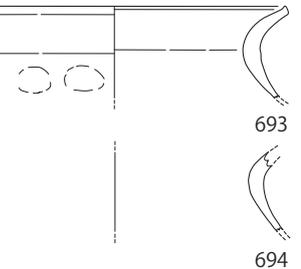
SH1606 (686・687)



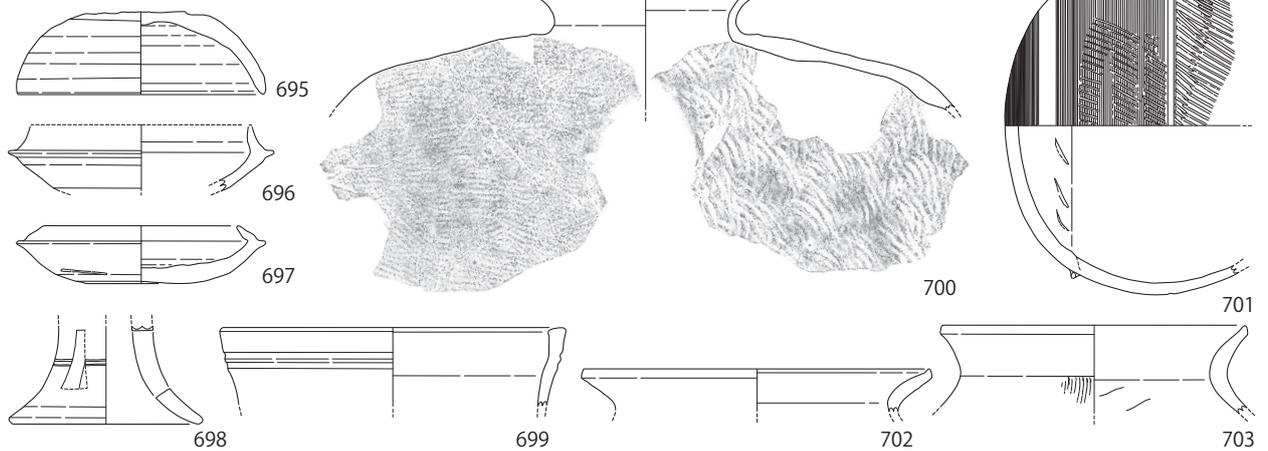
SH1607 (688~694)



0 (684のみ) 20cm

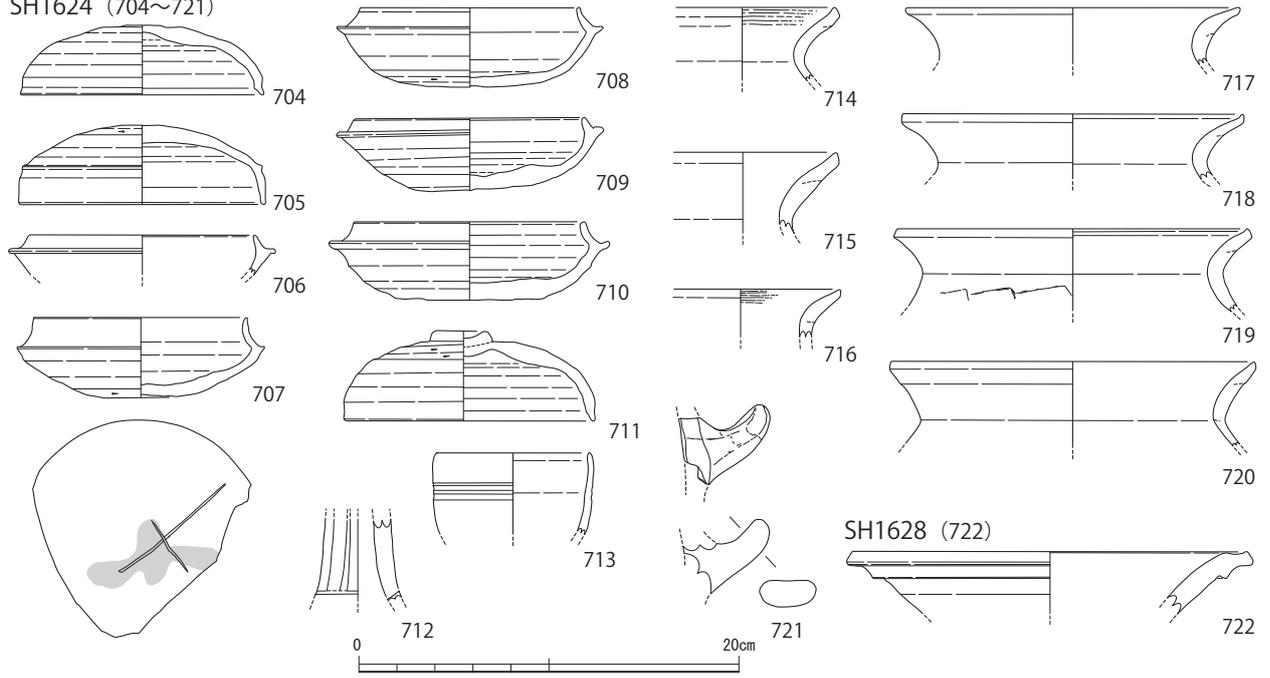


SH1617 (695~703)

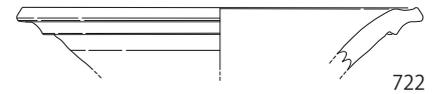


第 229 図 出土遺物実測図 29 (1 : 4 ・ 1 : 6)

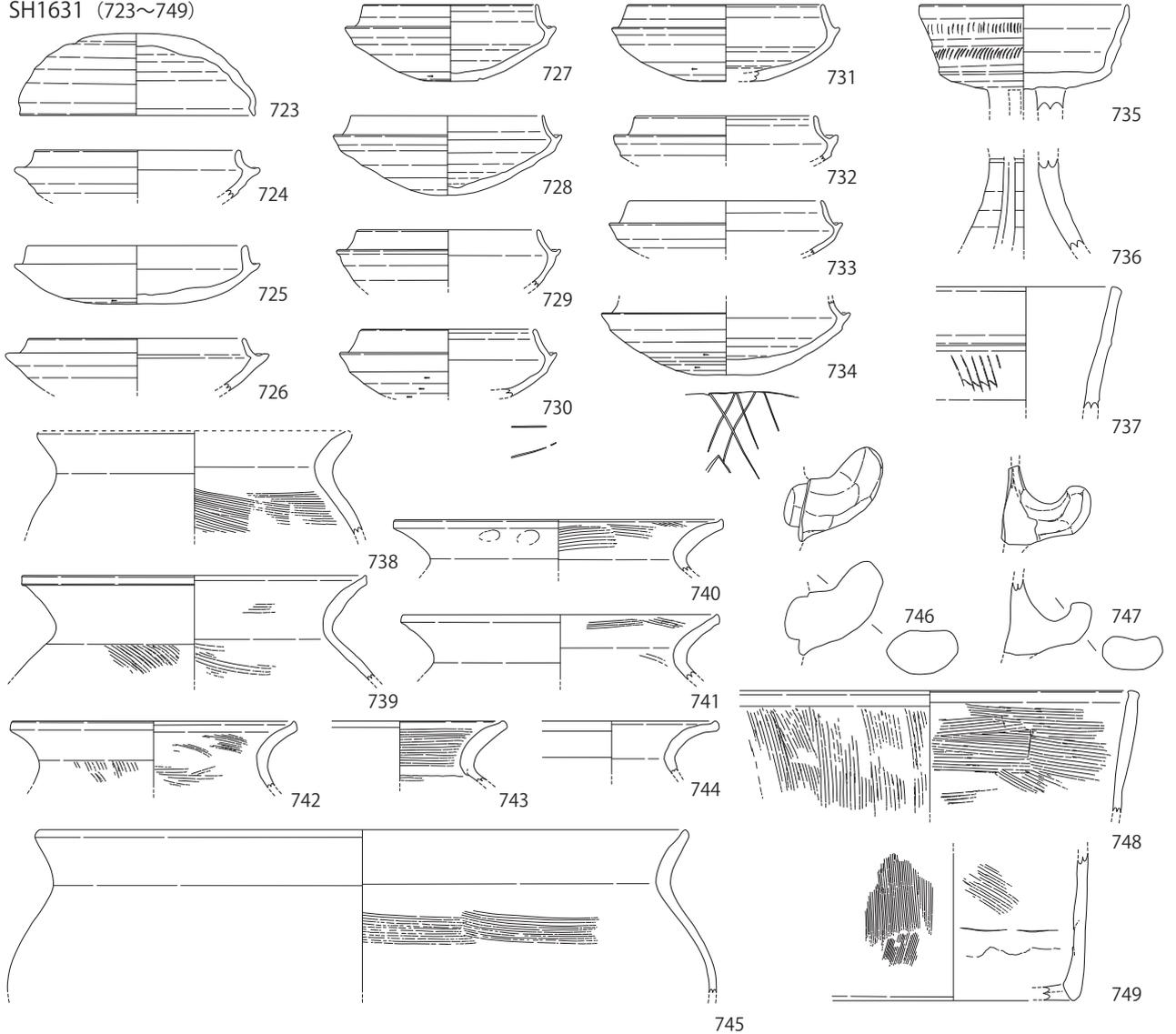
SH1624 (704~721)



SH1628 (722)

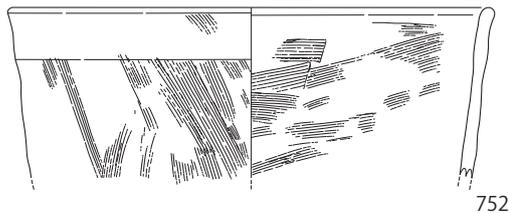
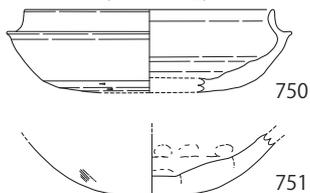


SH1631 (723~749)

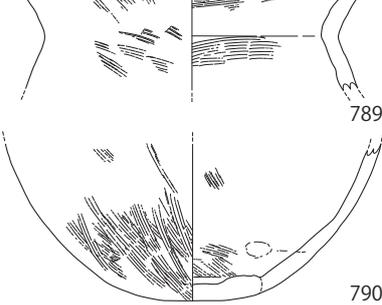
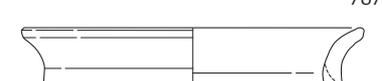
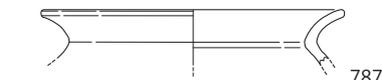
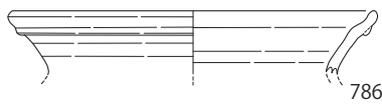
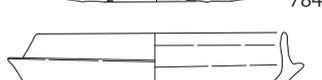
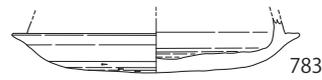
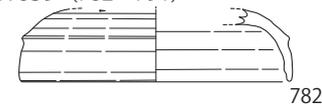


第 230 図 出土遺物実測図 30 (1 : 4)

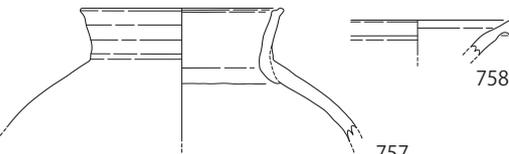
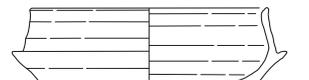
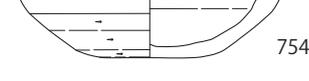
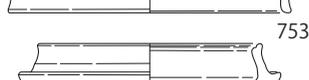
SH1648 (750~752)



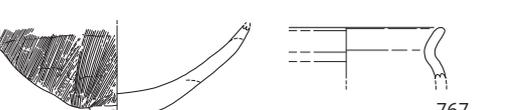
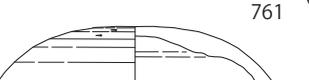
SH1659 (782~791)



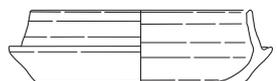
SH1649 (753~760)



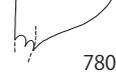
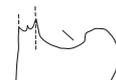
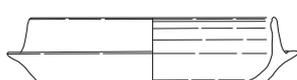
SH1650 (761~770)



SH1651 (771~776)

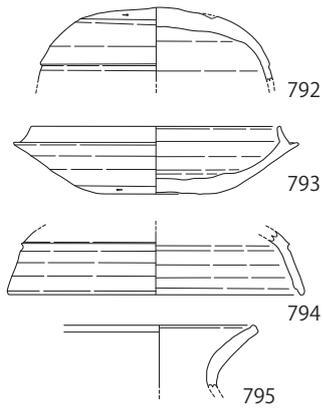


SH1652 (777~781)

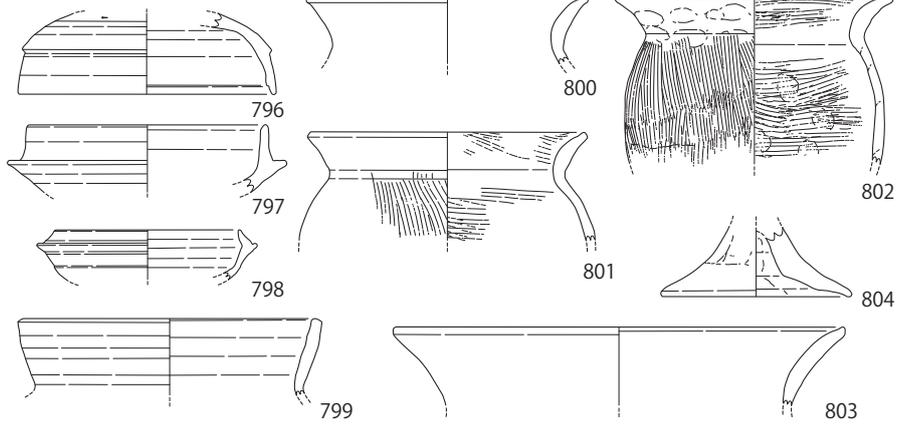


第 231 図 出土遺物実測図 31 (1 : 4)

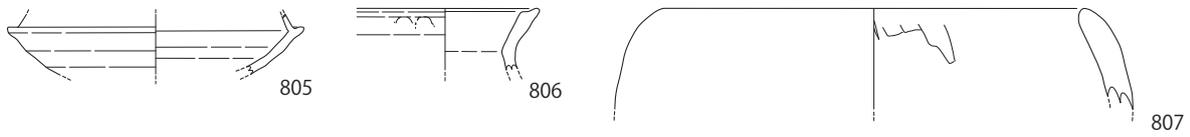
SH1660 (792~795)



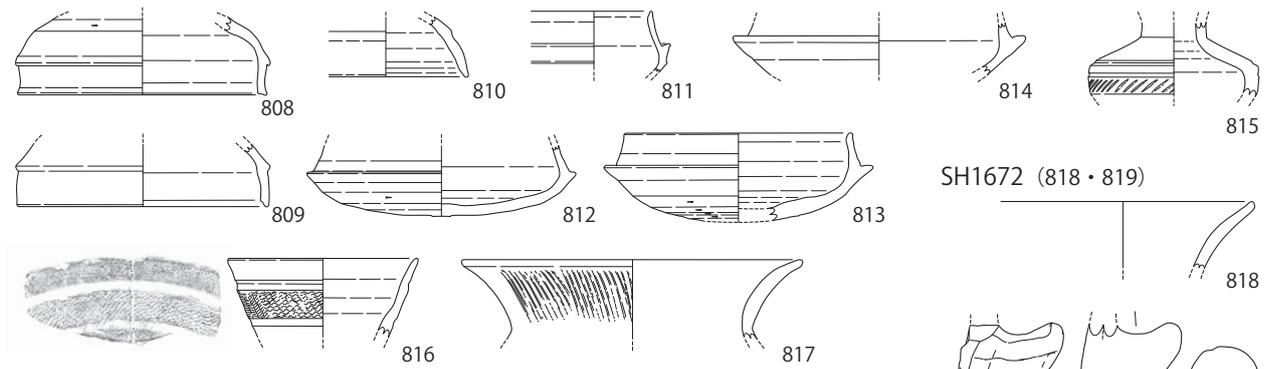
SH1662 (796~804)



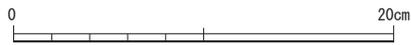
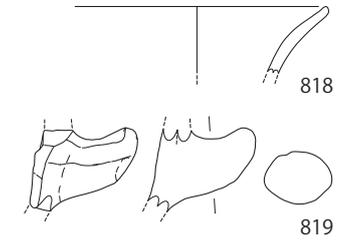
SH1663 (805~807)



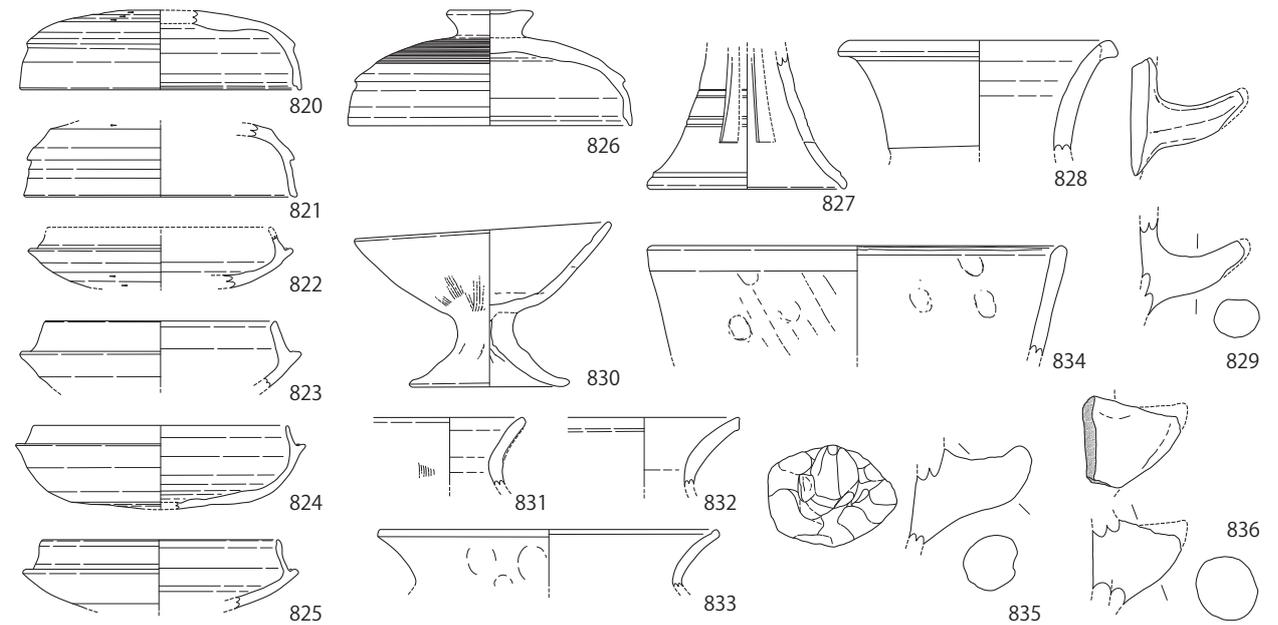
SH1664 (808~817)



SH1672 (818·819)

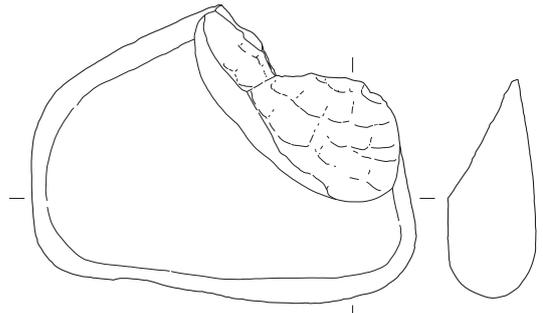
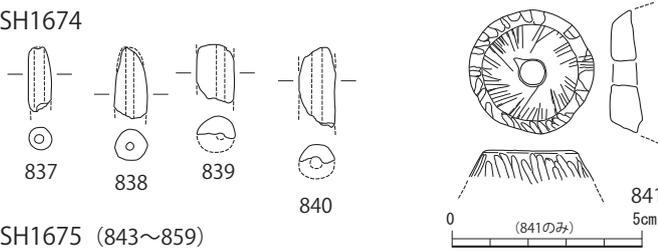


SH1674 (820~842)

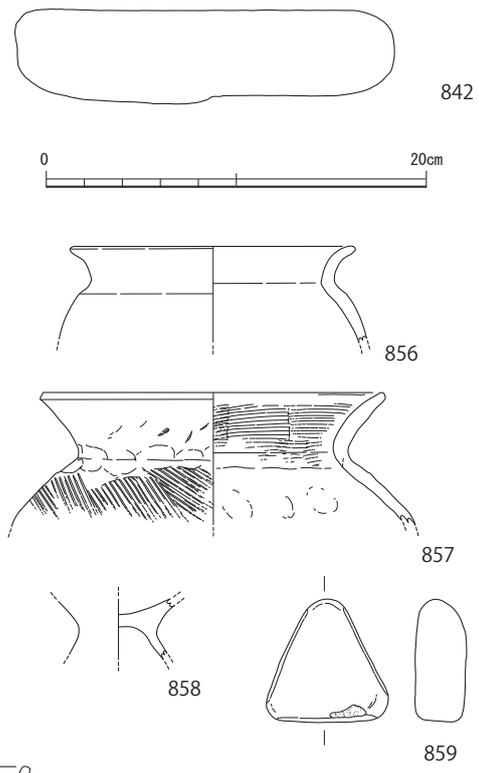
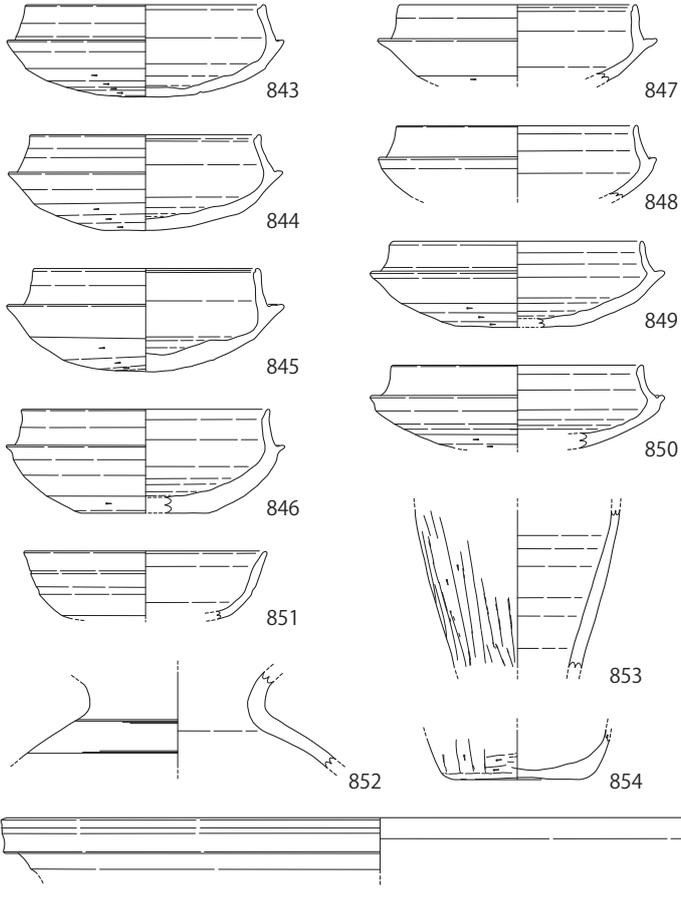


第 232 図 出土遺物実測図 32 (1 : 4)

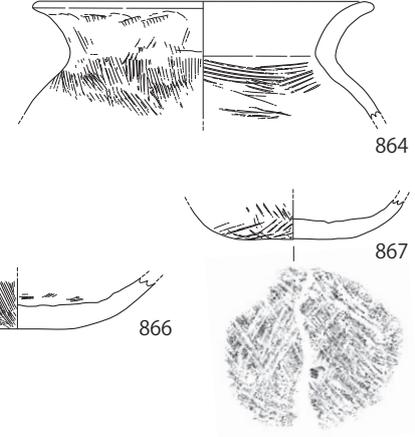
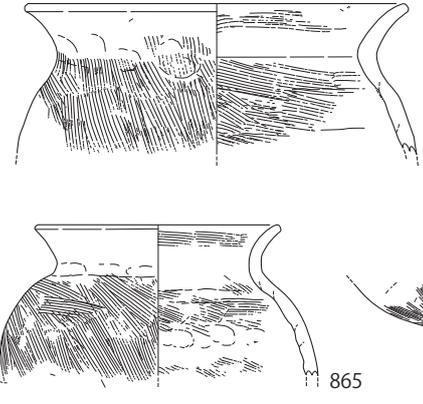
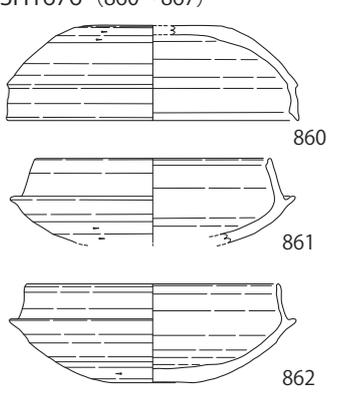
SH1674



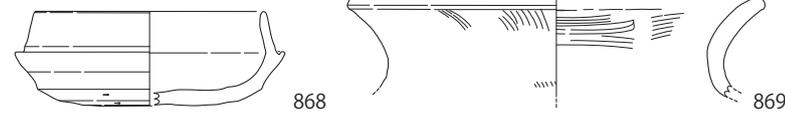
SH1675 (843~859)



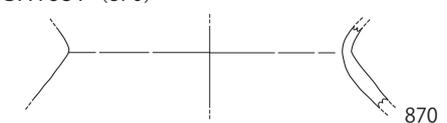
SH1676 (860~867)



SH1680 (868・869)

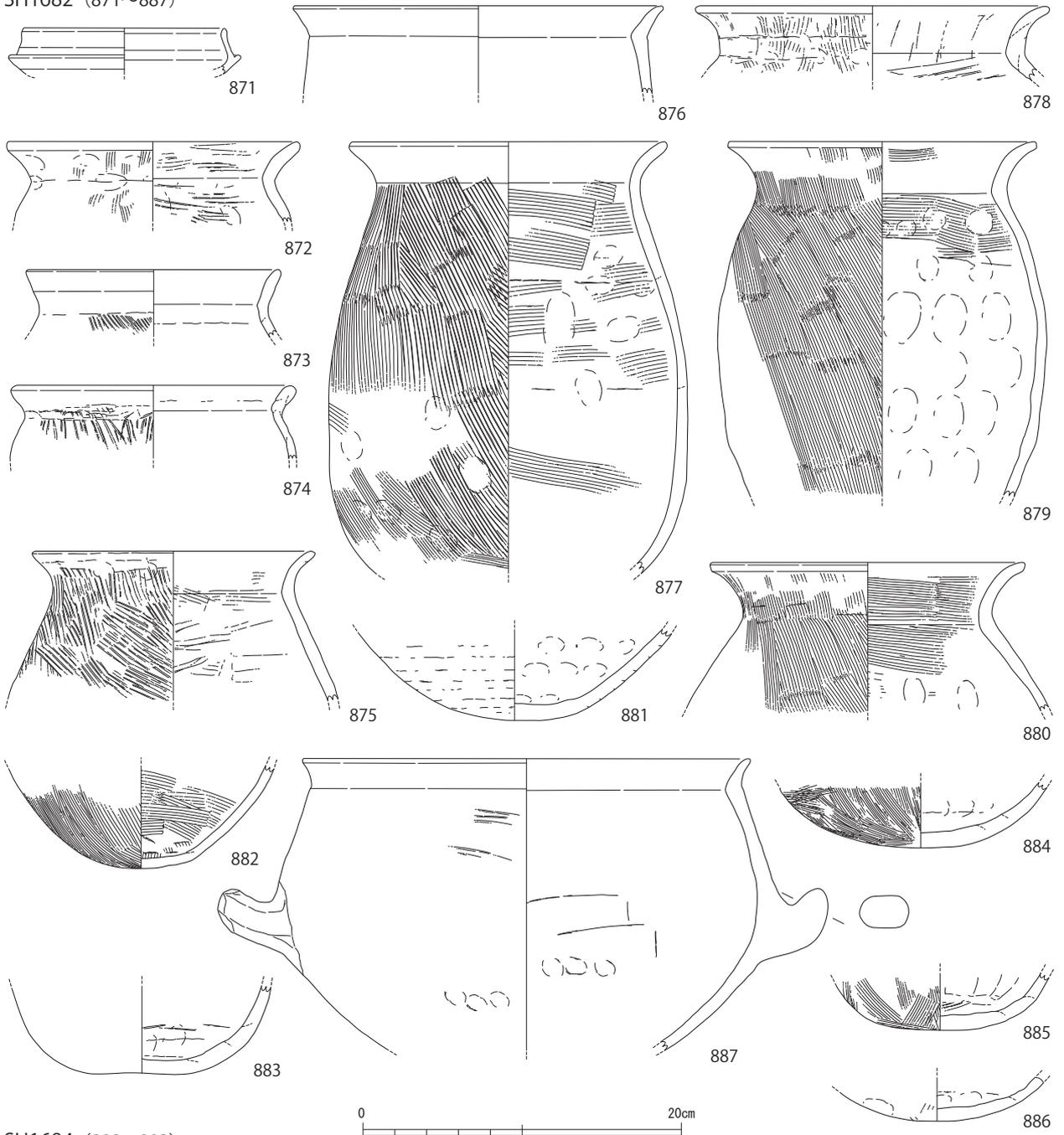


SH1681 (870)

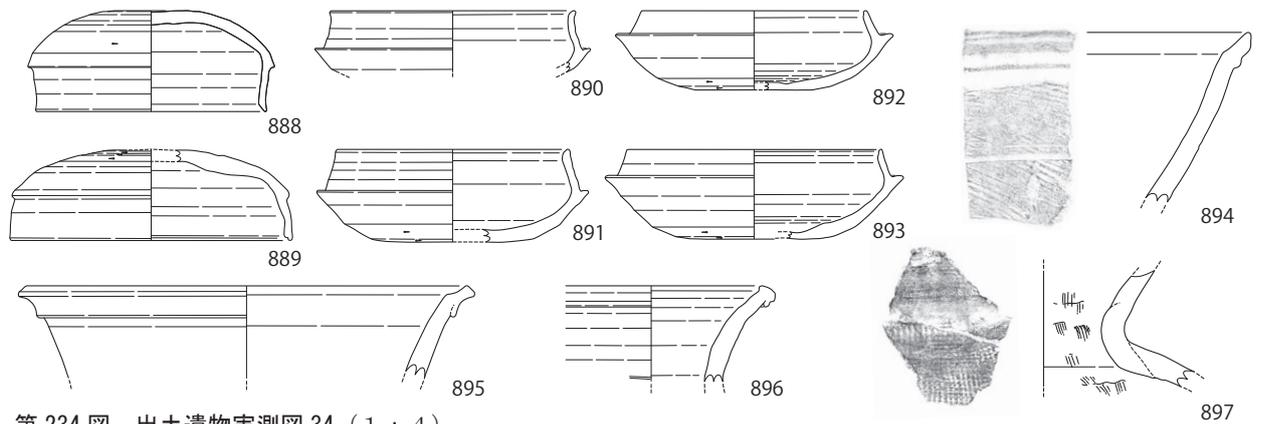


第 233 図 出土遺物実測図 33 (1 : 2 · 1 : 4)

SH1682 (871~887)

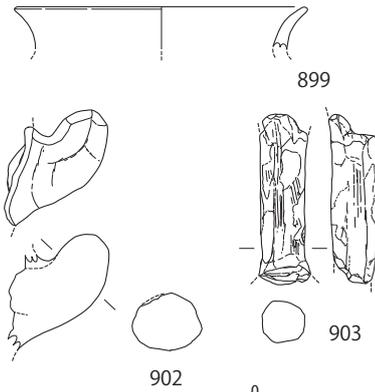
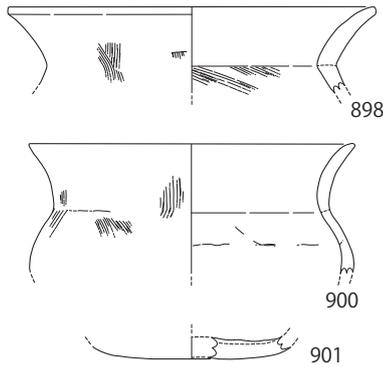


SH1684 (888~903)

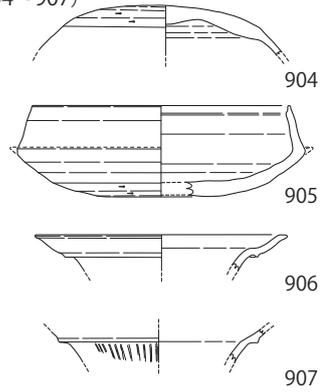


第 234 図 出土遺物実測図 34 (1 : 4)

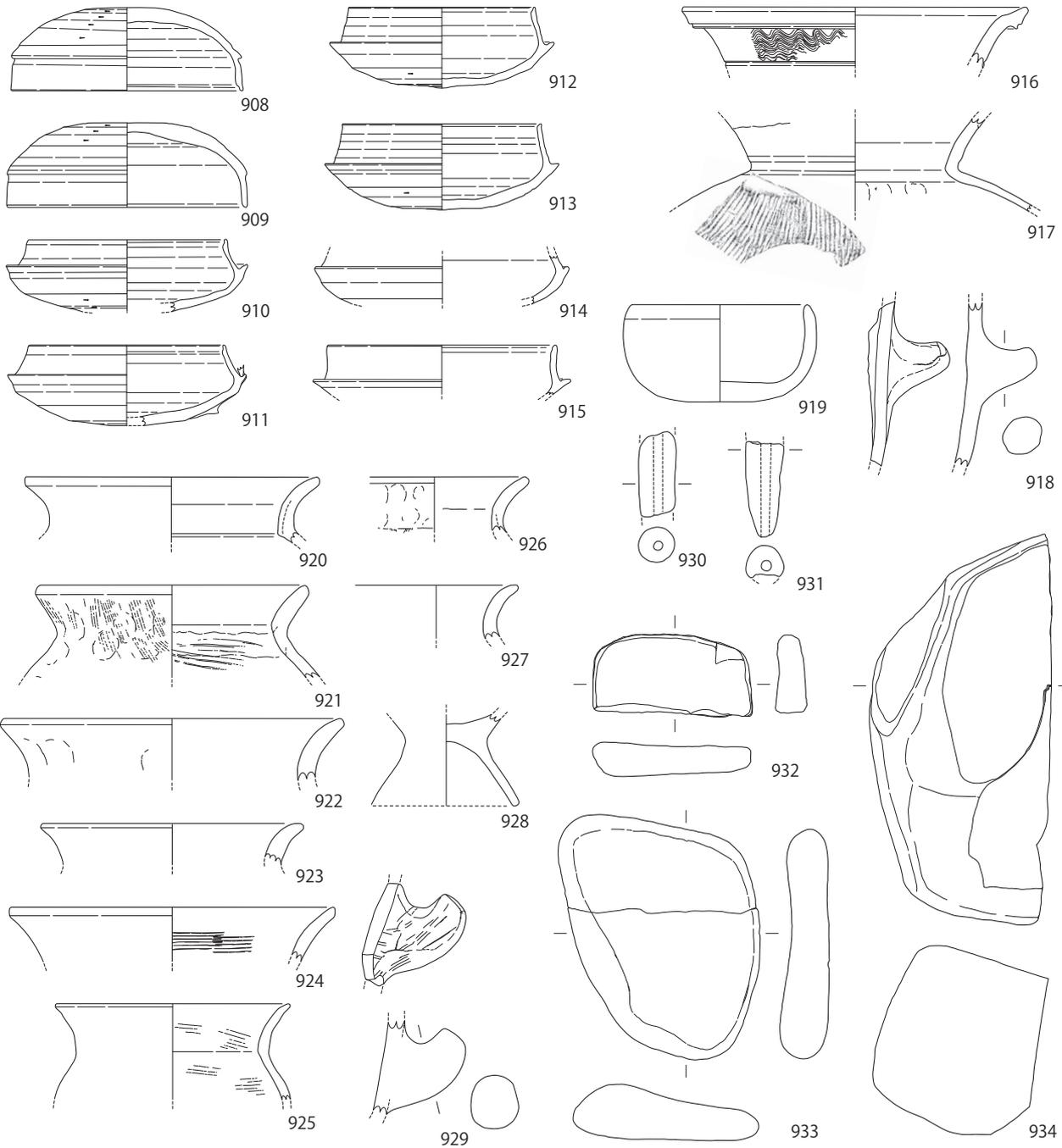
SH1684



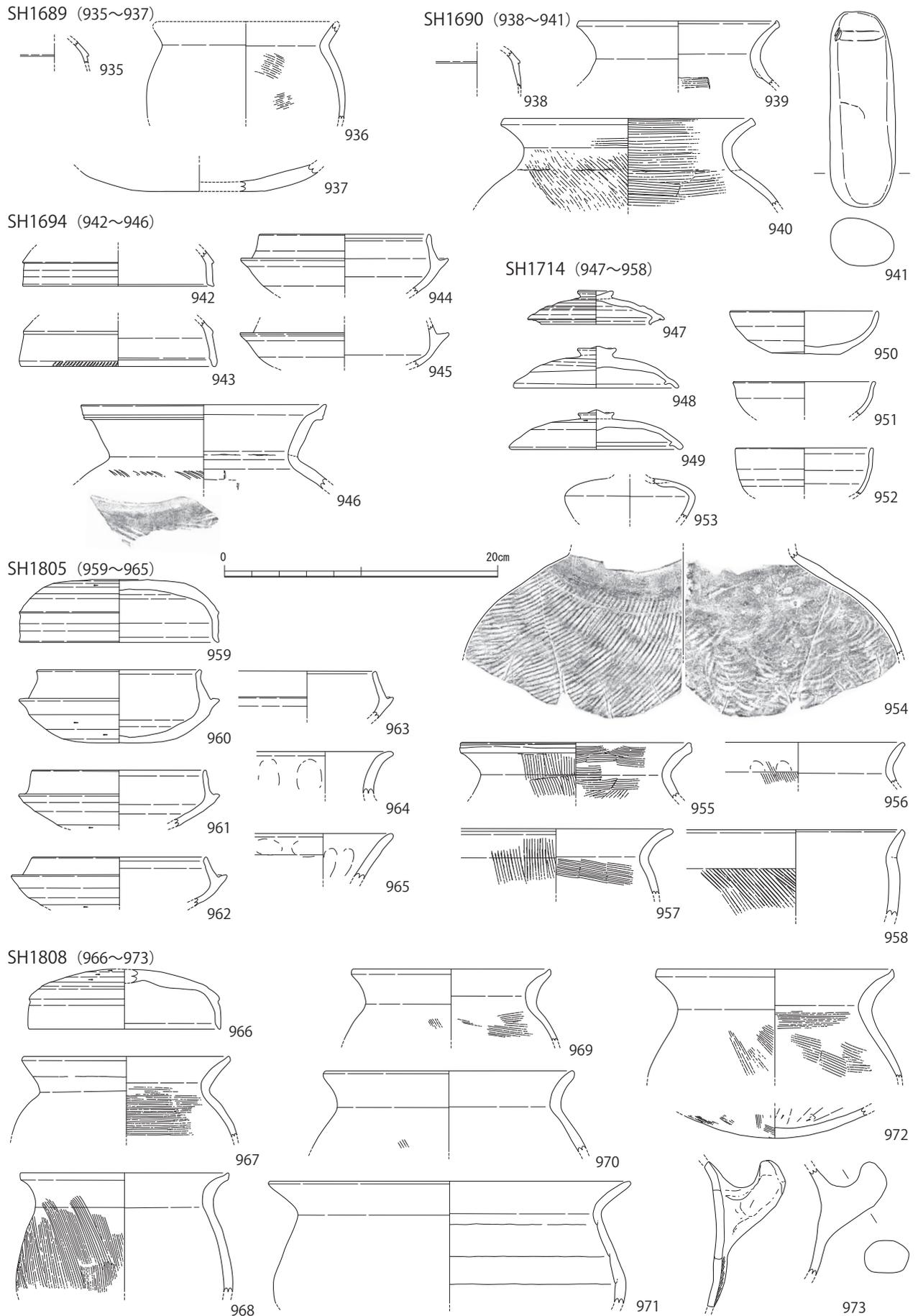
SH1685 (904~907)



SH1688 (908~934)

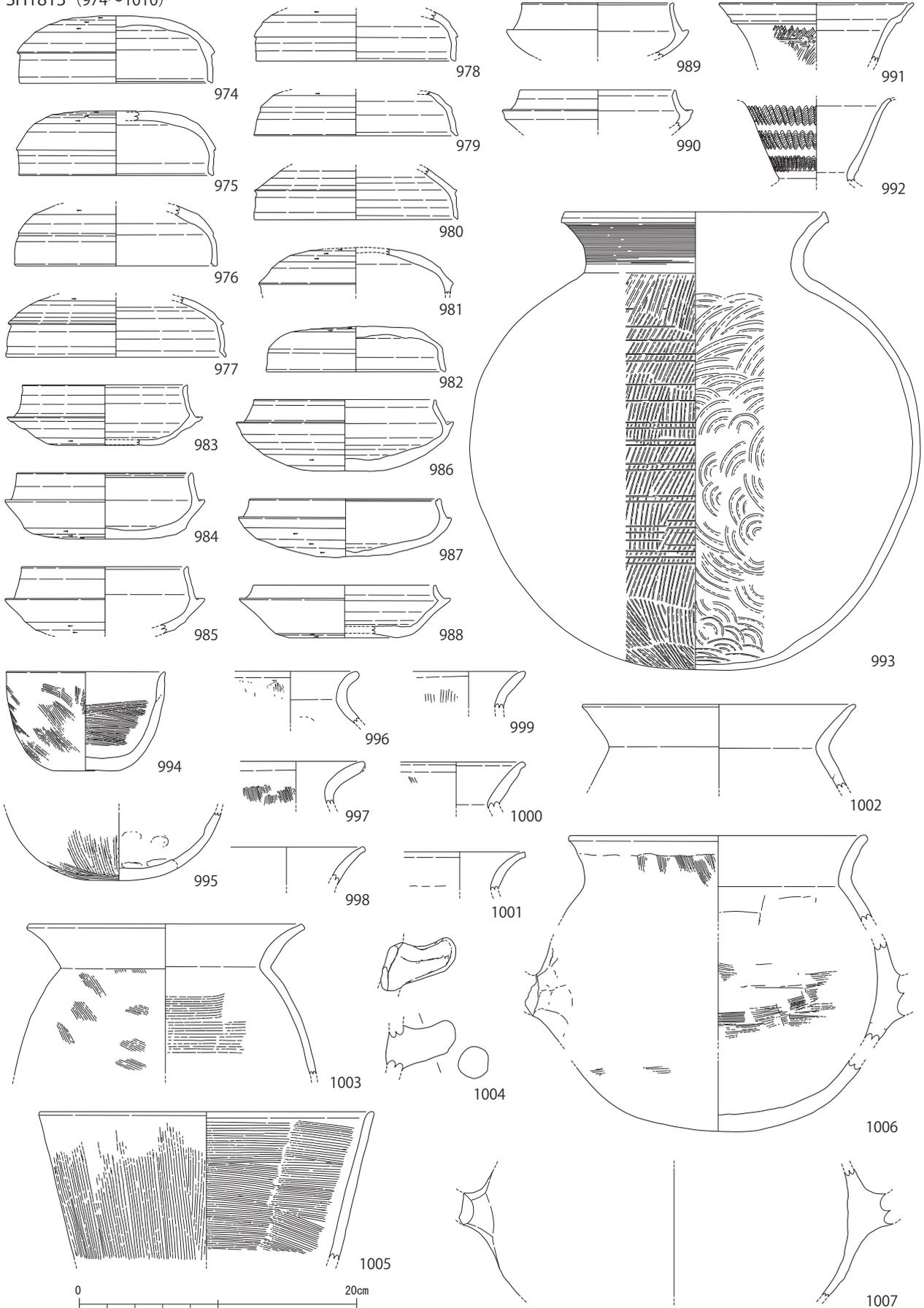


第 235 図 出土遺物実測図 35 (1 : 4)



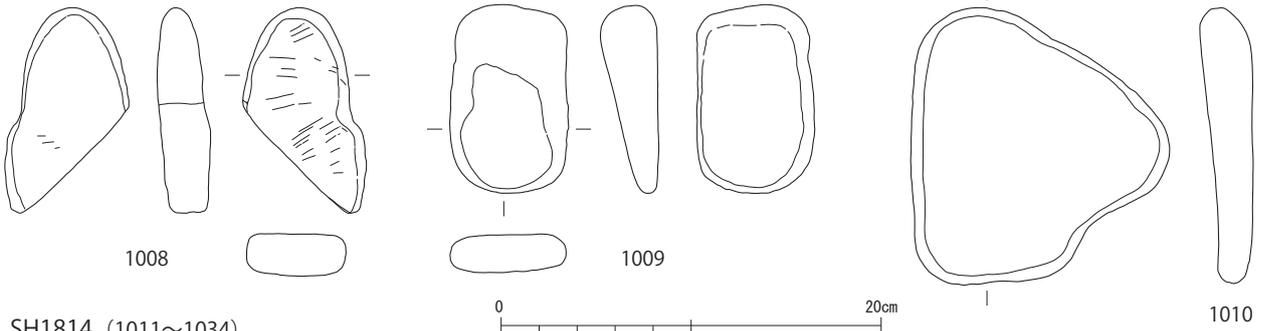
第 236 図 出土遺物実測図 36 (1 : 4)

SH1813 (974~1010)

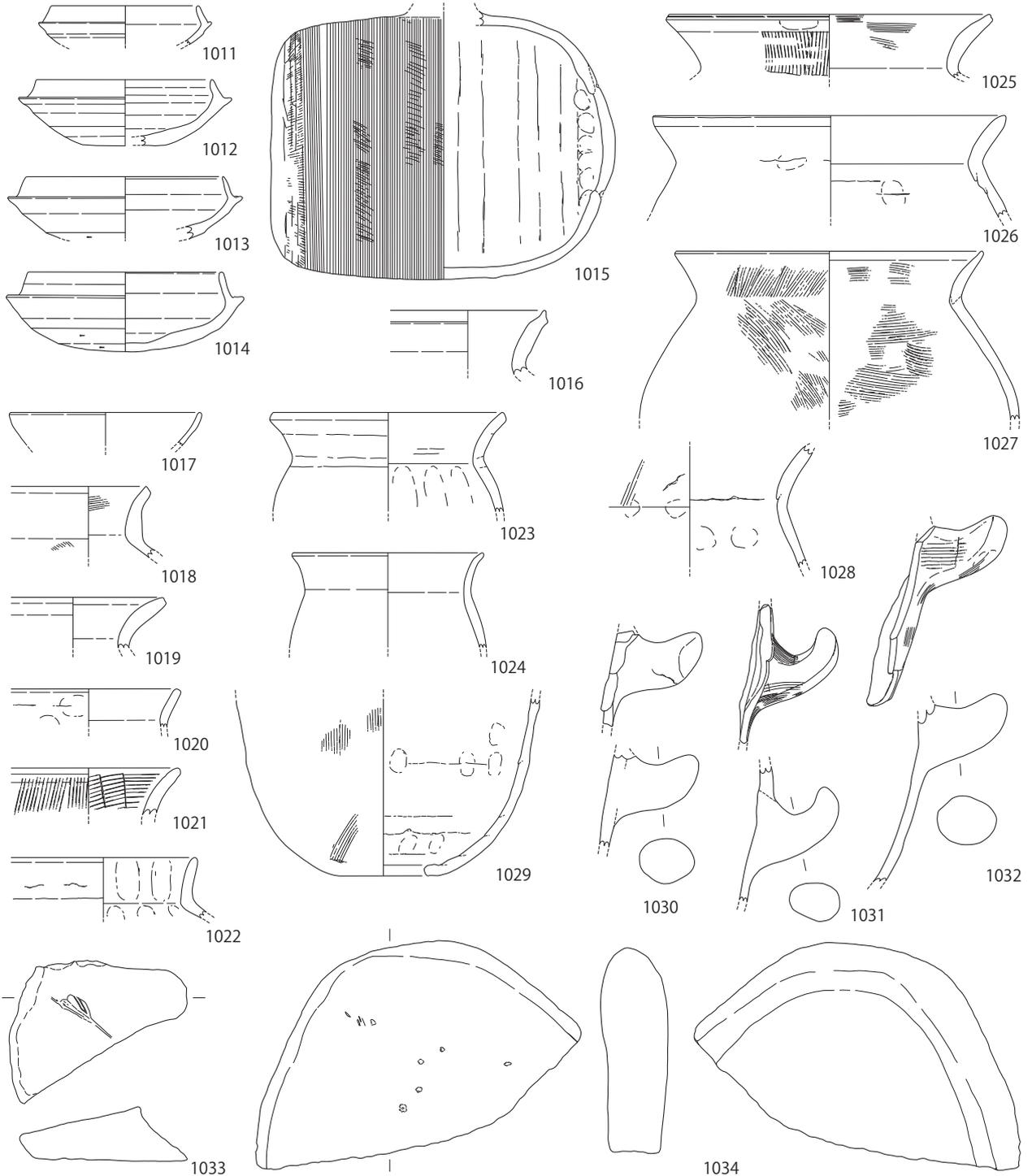


第 237 图 出土遺物実測図 37 (1 : 4)

SH1813

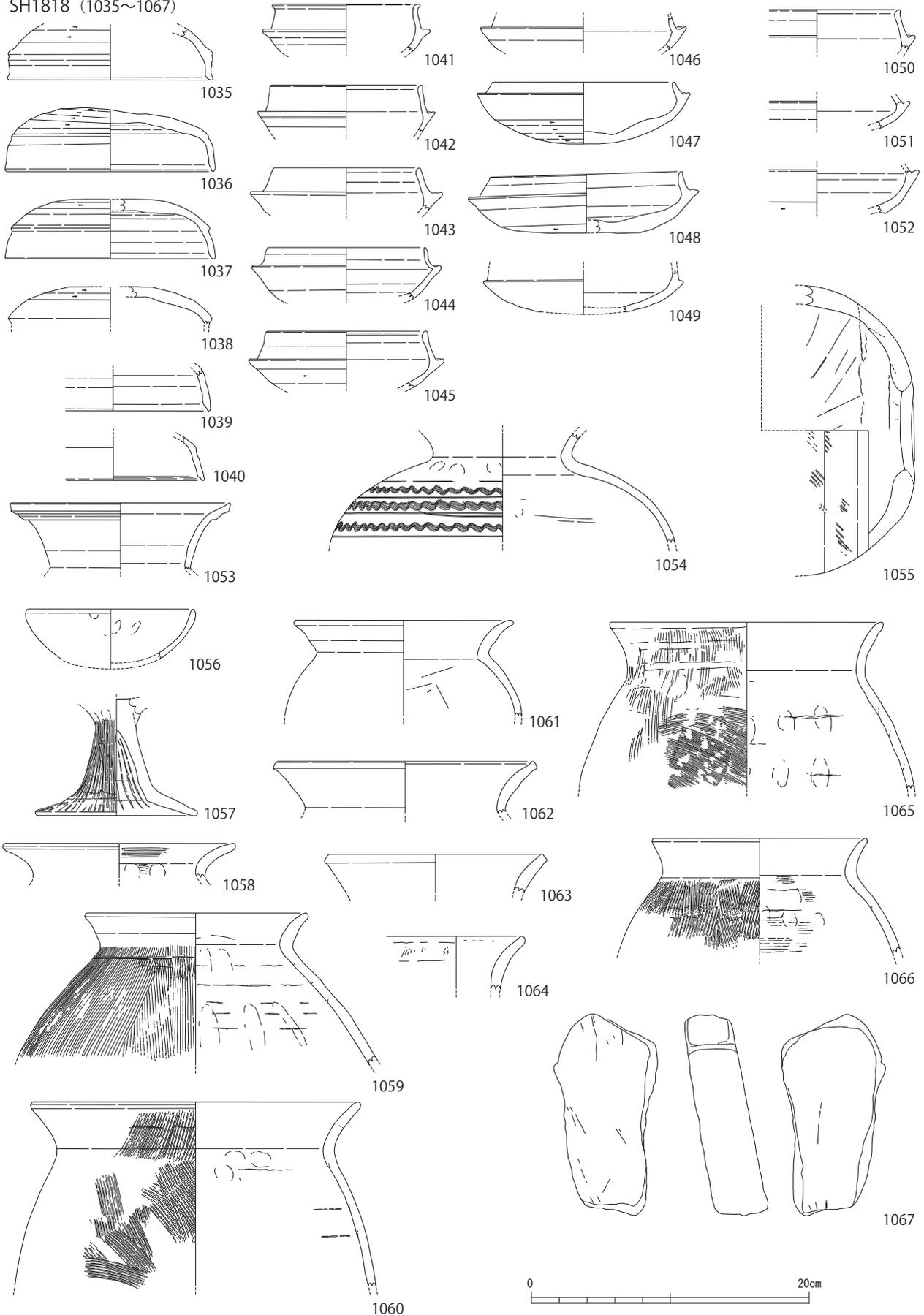


SH1814 (1011~1034)



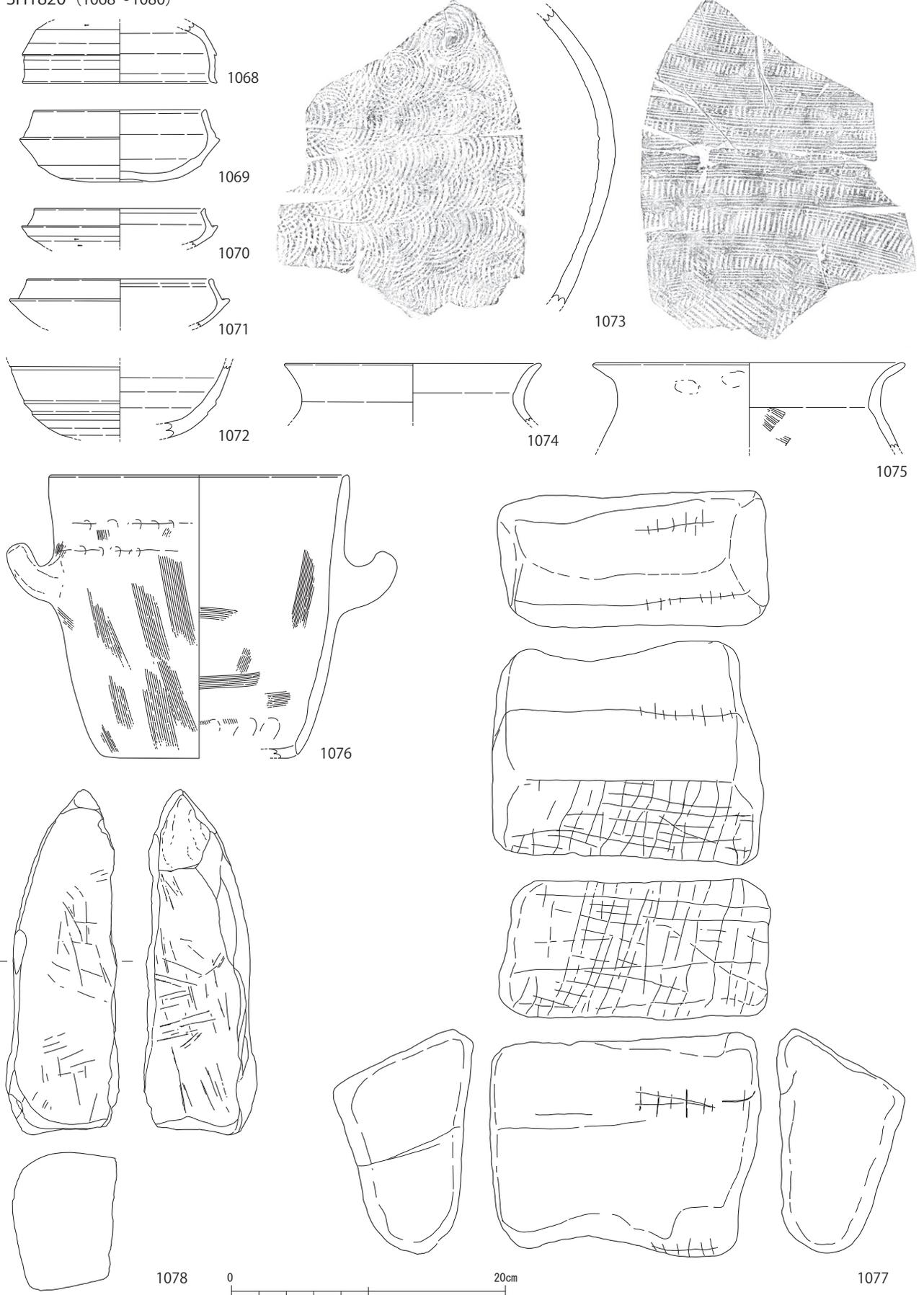
第 238 図 出土遺物実測図 38 (1 : 4)

SH1818 (1035~1067)

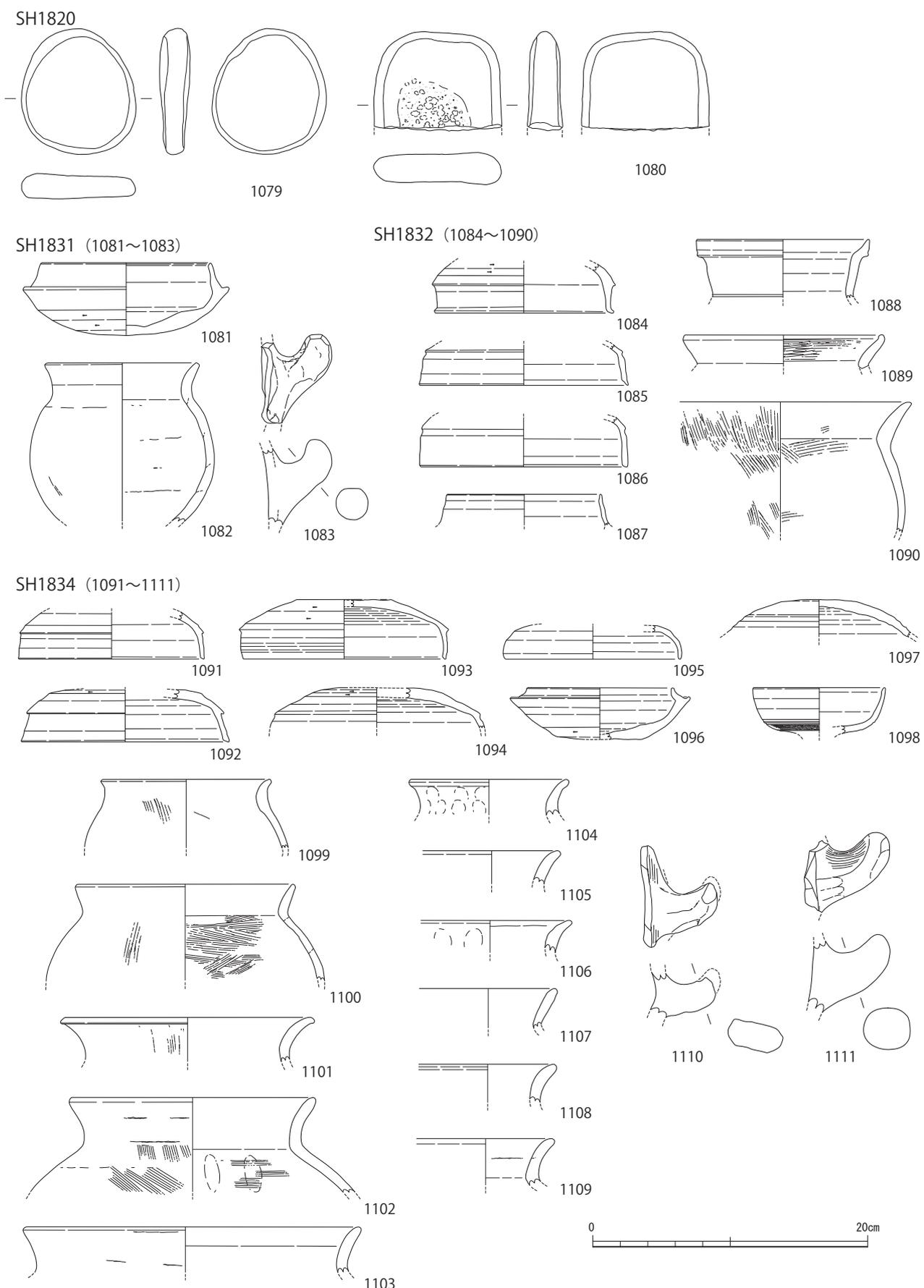


第 239 図 出土遺物実測図 39 (1 : 4)

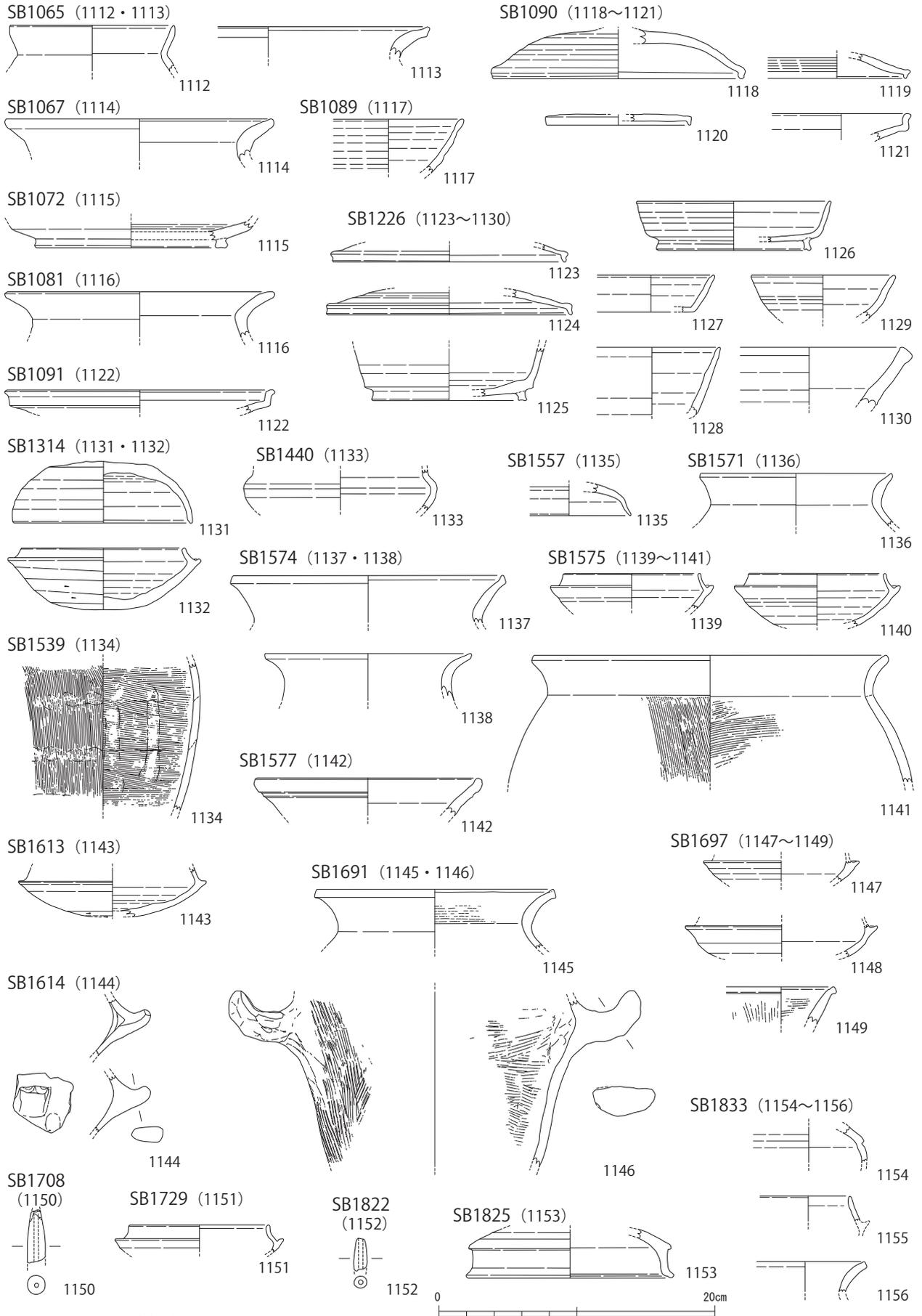
SH1820 (1068~1080)



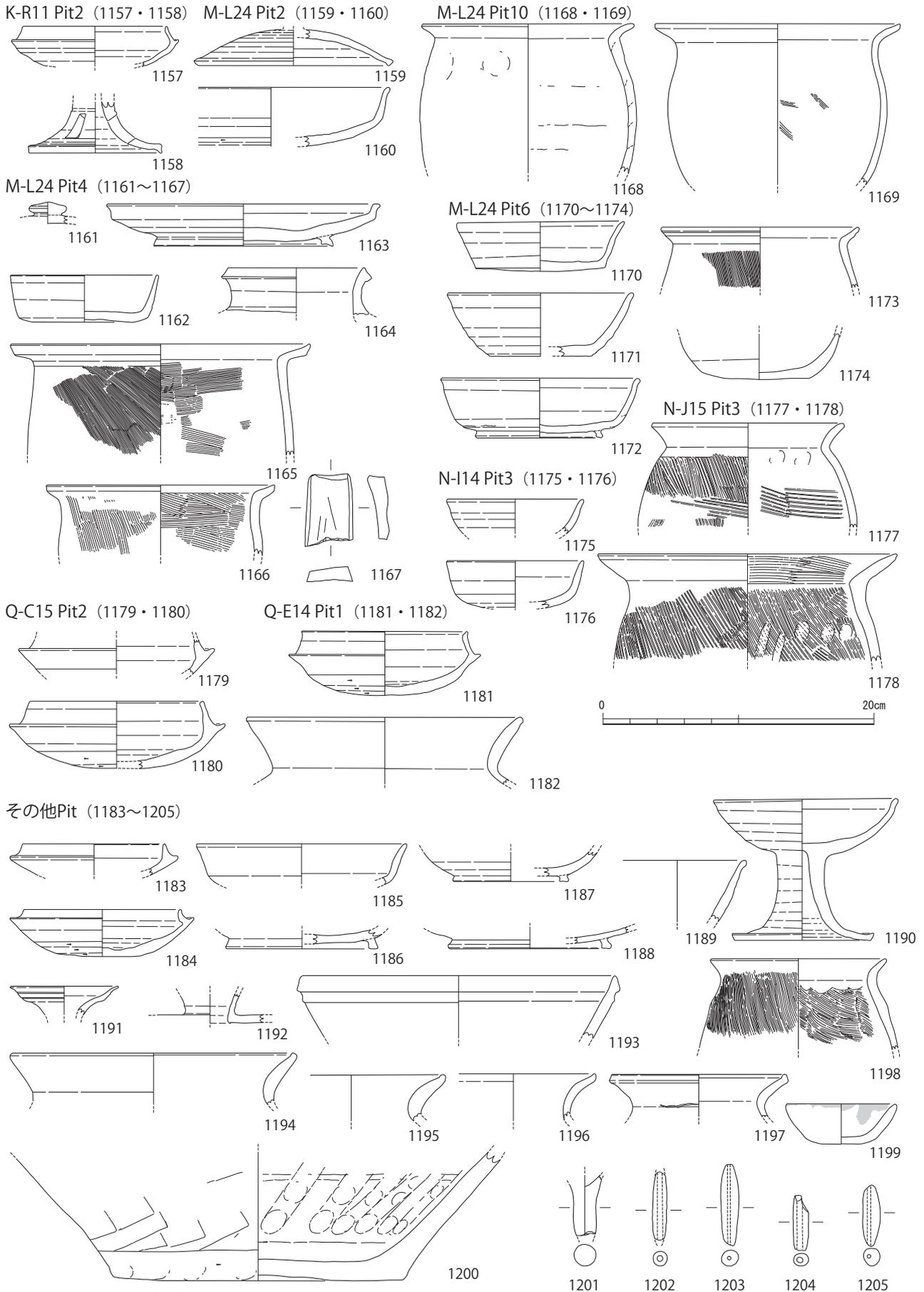
第 240 図 出土遺物実測図 40 (1 : 4)



第 241 図 出土遺物実測図 41 (1 : 4)

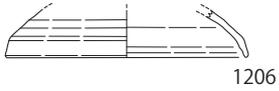


第 242 図 出土遺物実測図 42 (1 : 4)

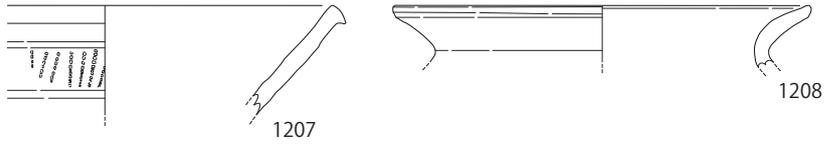


第 243 図 出土遺物実測図 43 (1 : 4)

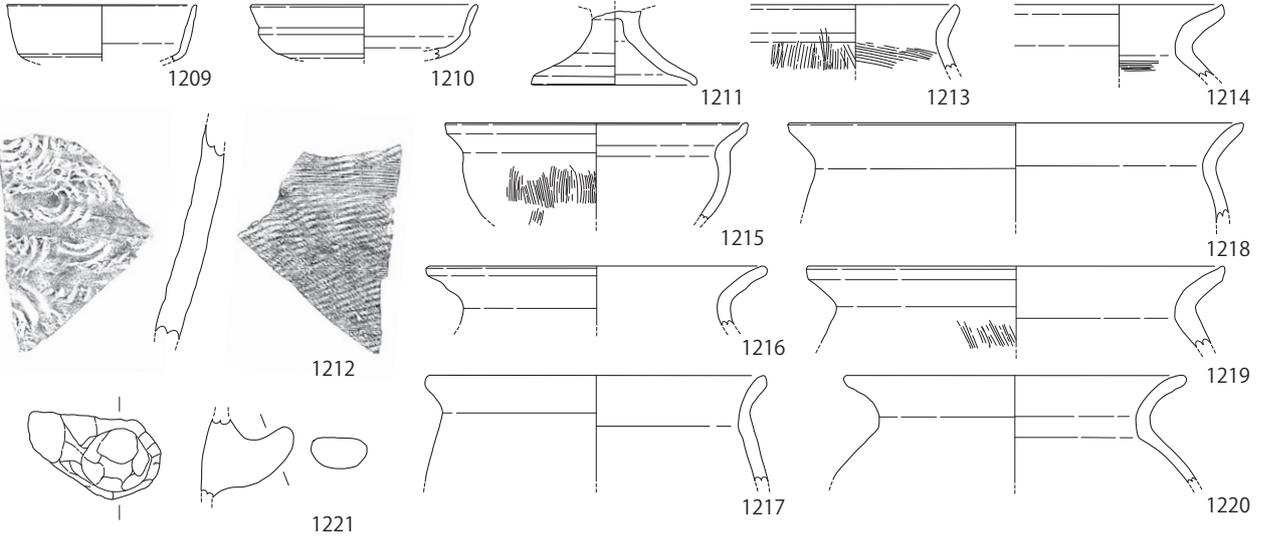
SK324 (1206)



SK1037 (1207・1208)



SK1043 (1209~1221)



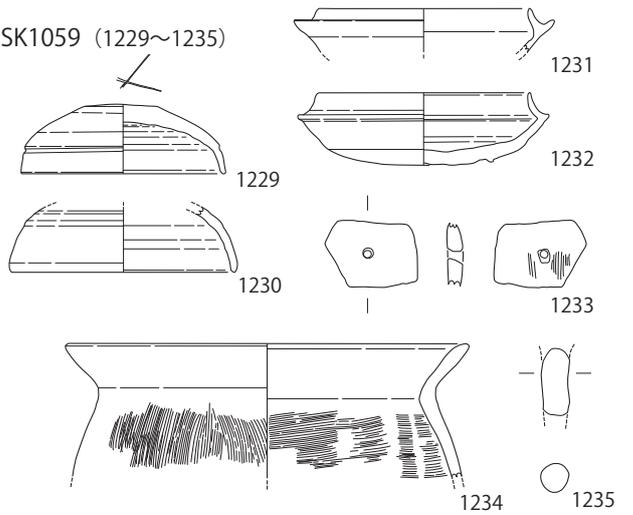
SK1051 (1222)



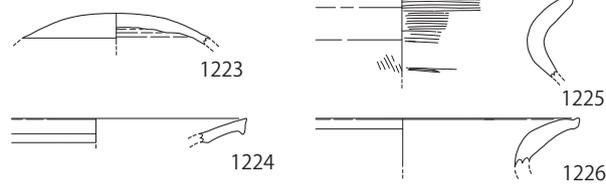
SK1053 (1227)



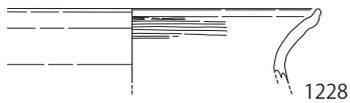
SK1059 (1229~1235)



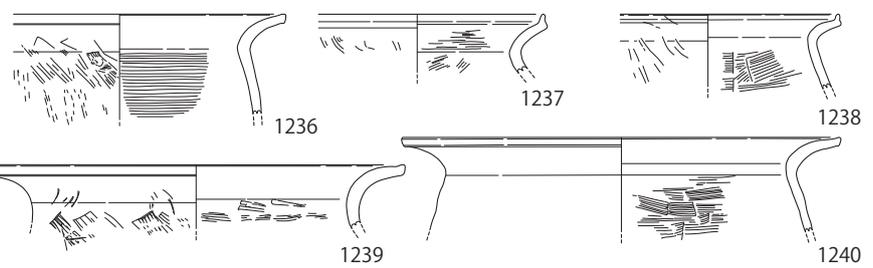
SK1052 (1223~1226)



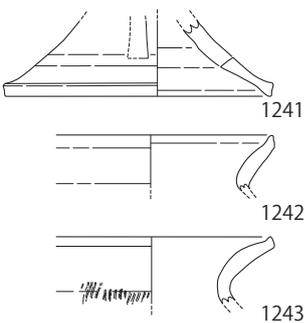
SK1056 (1228)



SK1060 (1236~1240)



SK1161 (1241~1243)

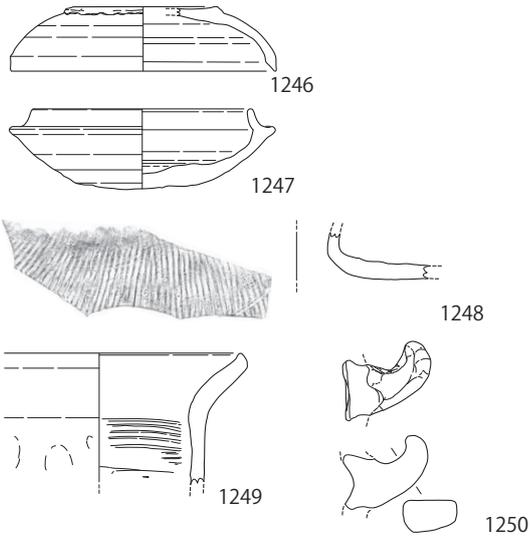


SK1162 (1244・1245)

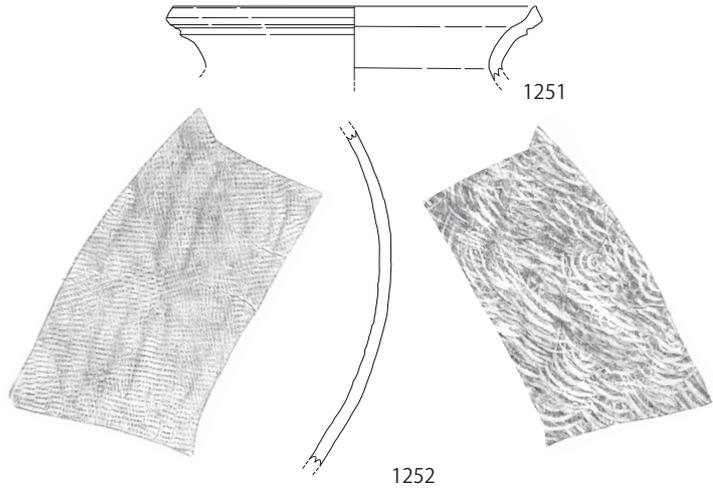


第 244 図 出土遺物実測図 44 (1 : 4)

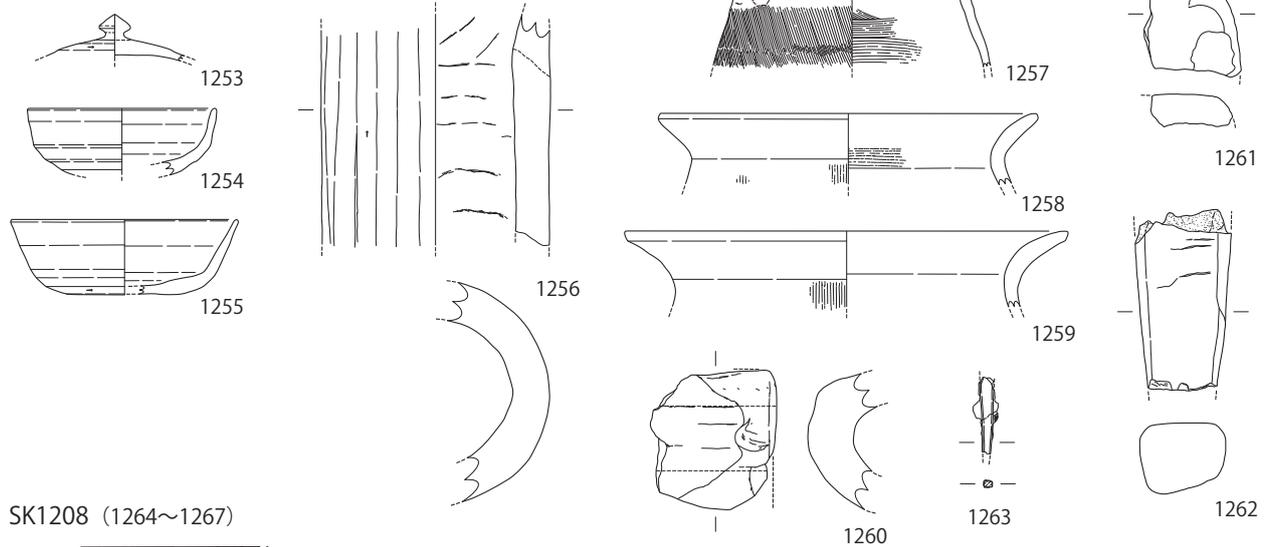
SK1165 (1246~1250)



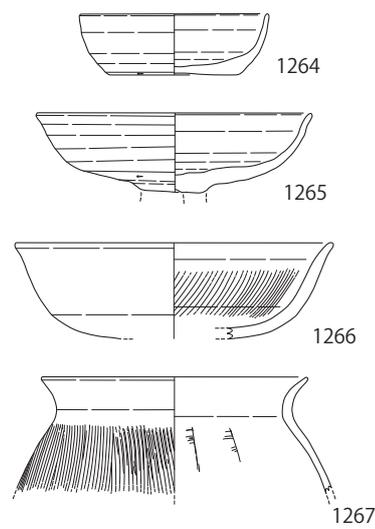
SK1178 (1251・1252)



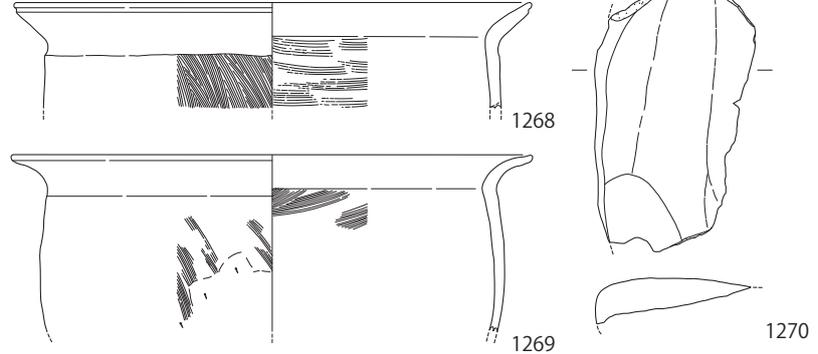
SK1206 (1253~1263)



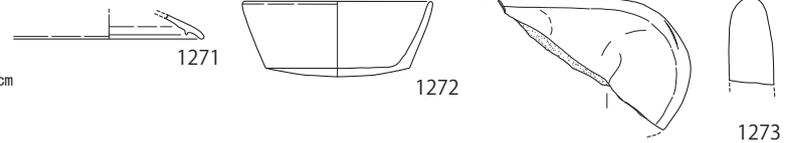
SK1208 (1264~1267)



SK1210 (1268~1270)

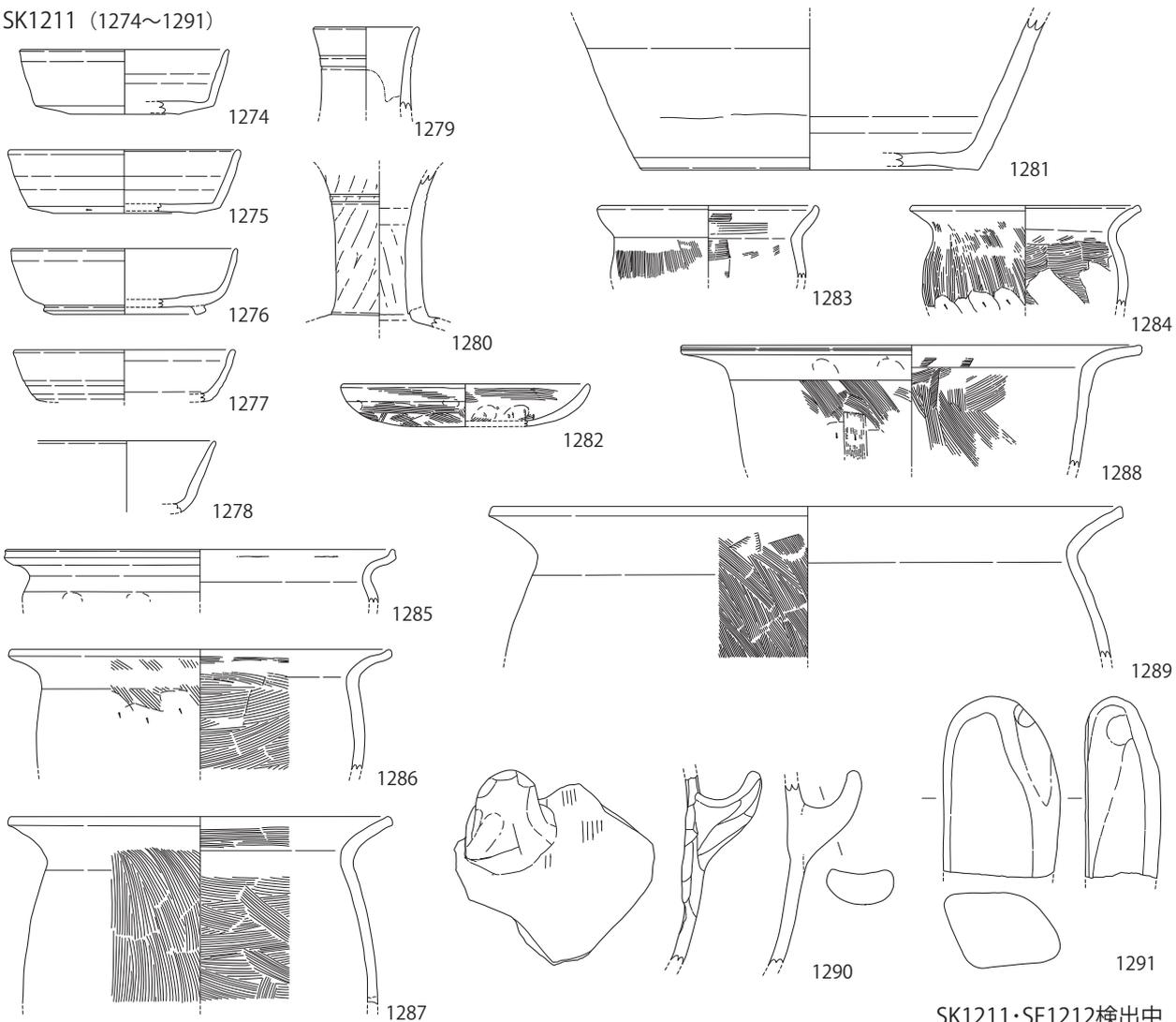


SK1210・1211検出中 (1271~1273)



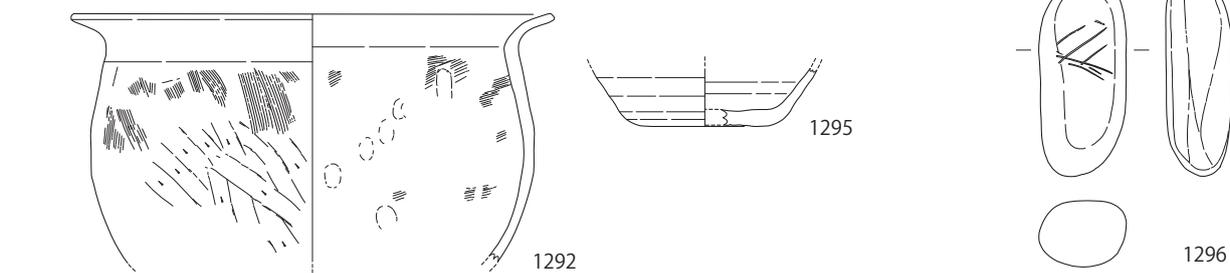
第 245 図 出土遺物実測図 45 (1 : 4)

SK1211 (1274~1291)



SK1211・SF1212検出中 (1296)

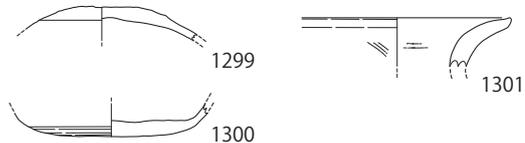
SF1212 (1292~1295)



SK1214・SK1215・SK1216検出中 (1297・1298)

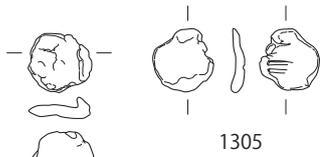
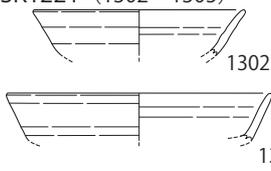


SK1216 (1299~1301)

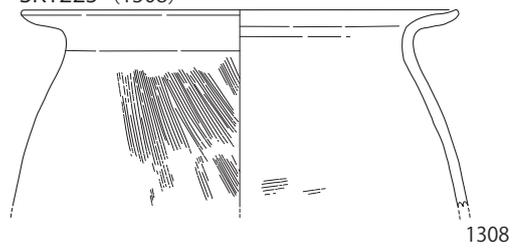


第 246 図 出土遺物実測図 46 (1 : 4)

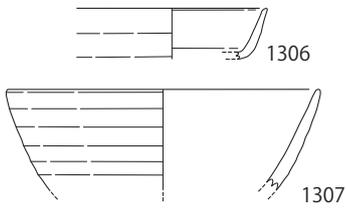
SK1221 (1302~1305)



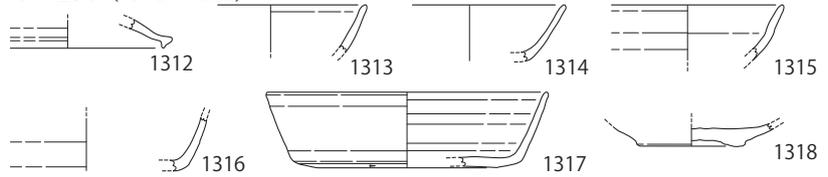
SK1225 (1308)



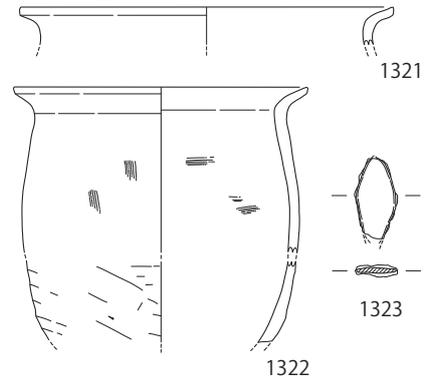
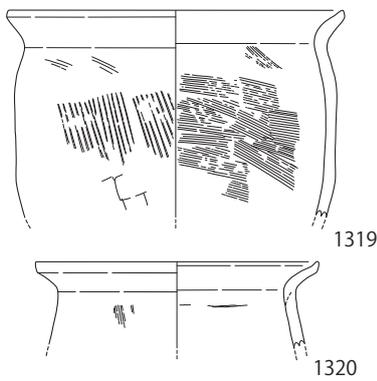
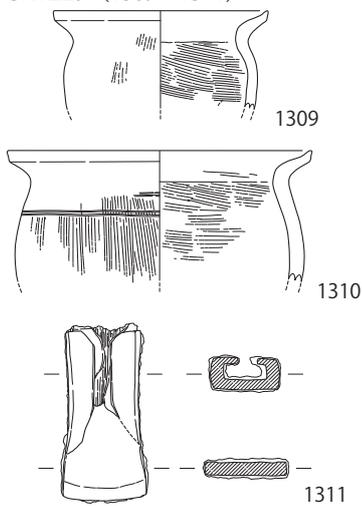
SK1224 (1306・1307)



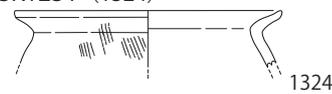
SK1230 (1312~1323)



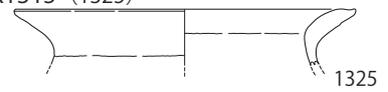
SK1229 (1309~1311)



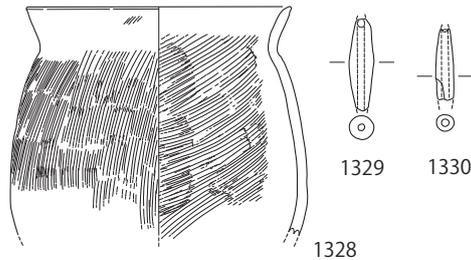
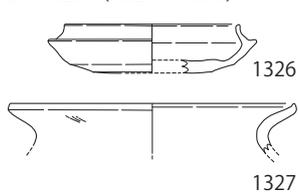
SK1231 (1324)



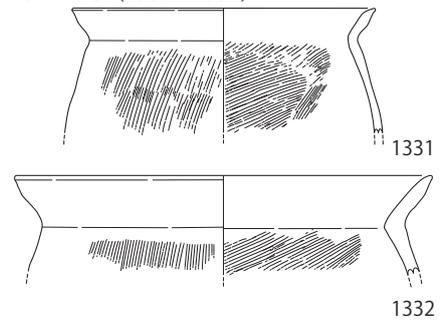
SK1315 (1325)



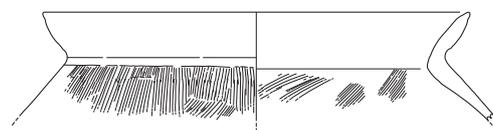
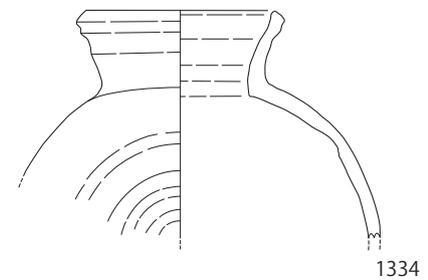
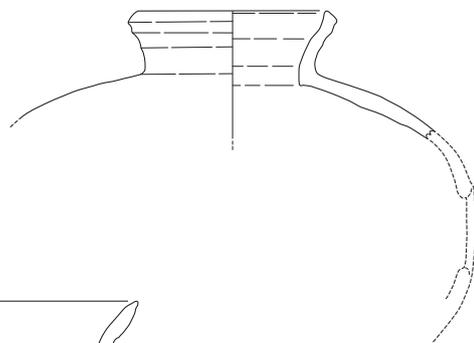
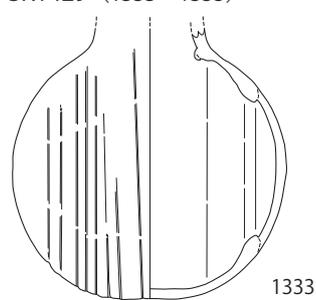
SK1427 (1326~1330)



SK1428 (1331・1332)



SK1429 (1333~1335)

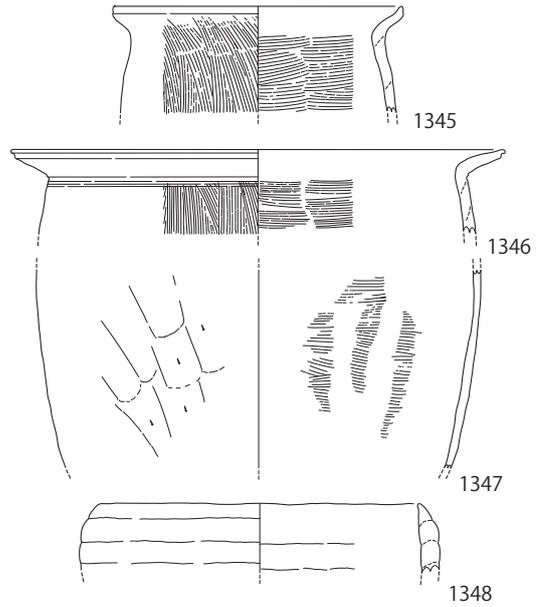
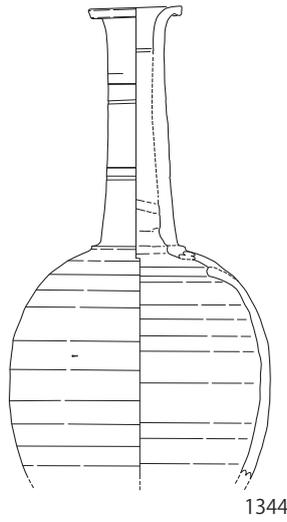
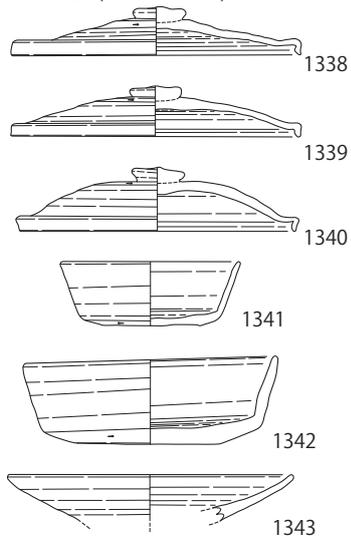


SK1439 (1336・1337)

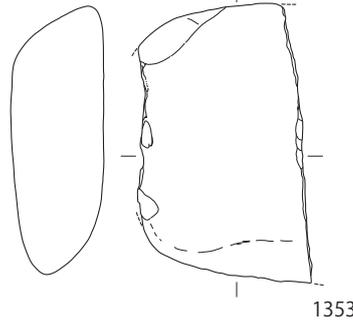
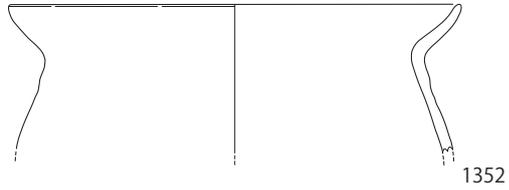
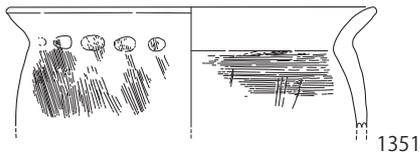


第 247 図 出土遺物実測図 47 (1 : 4)

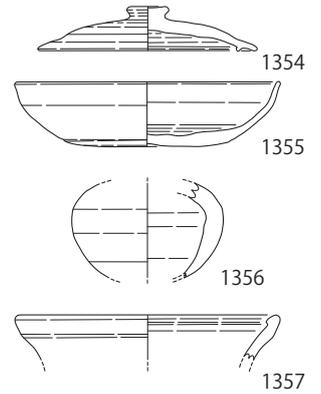
SK1442 (1338~1348)



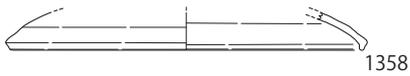
SK1445 (1349~1353)



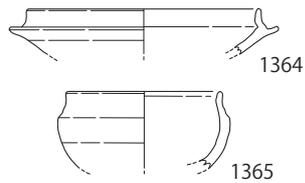
SK1448 (1354~1357)



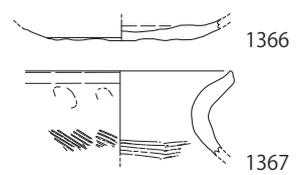
SK1449 (1358)



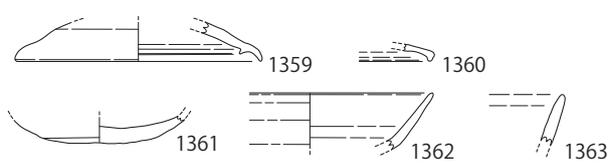
SK1503 (1364 · 1365)



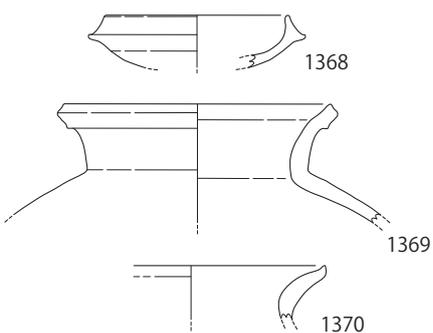
SK1510 (1366 · 1367)



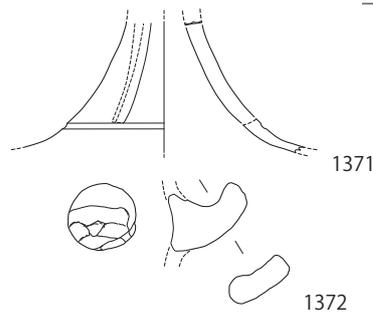
SK1451 (1359~1363)



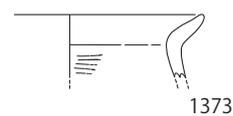
SK1520 (1368~1370)



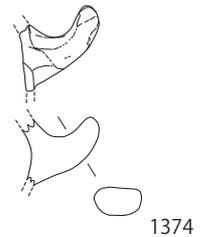
SK1524 (1371 · 1372)



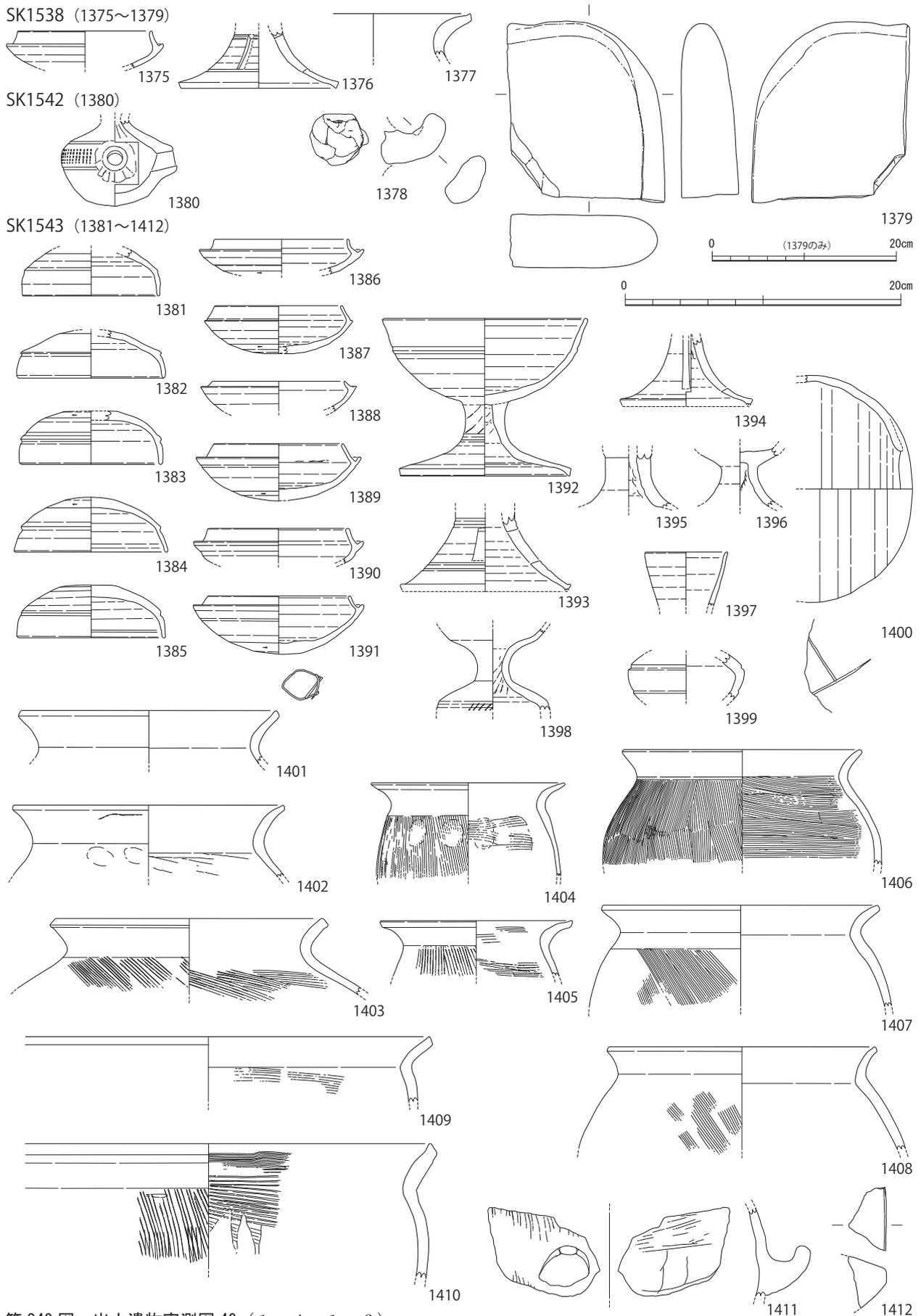
SK1526 (1373)



SK1531 (1374)

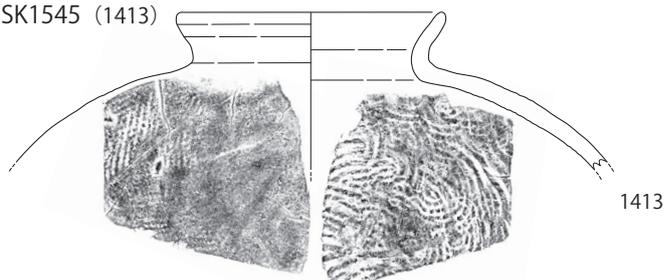


第 248 図 出土遺物実測図 48 (1 : 4)



第 249 図 出土遺物実測図 49 (1 : 4 · 1 : 6)

SK1545 (1413)



1413

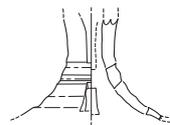
SK1569 (1415~1420)



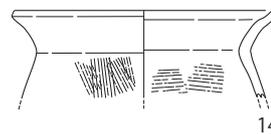
1415



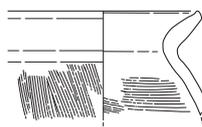
1416



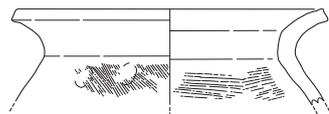
1417



1418

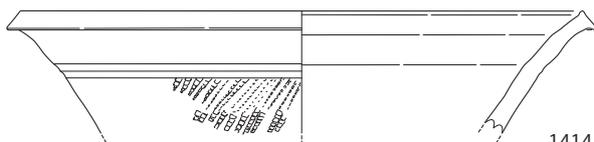


1420



1419

SK1563 (1414)



1414



SK1601 (1421~1456)



1421



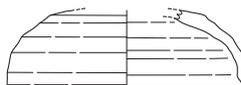
1426



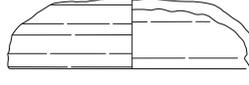
1428



1431



1422



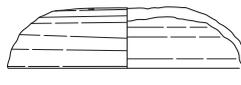
1427



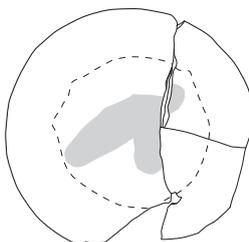
1429



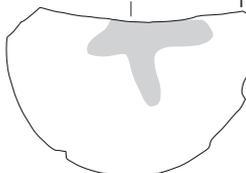
1432



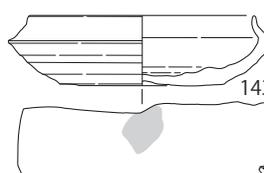
1423



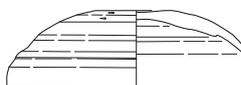
1425



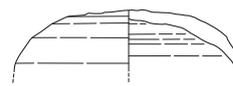
1430



1433



1424



1425



1427



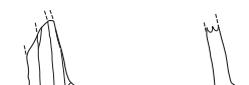
1430



1434



1435



1440



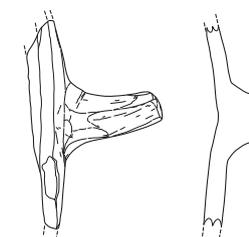
1442



1434



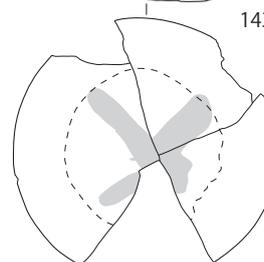
1436



1440



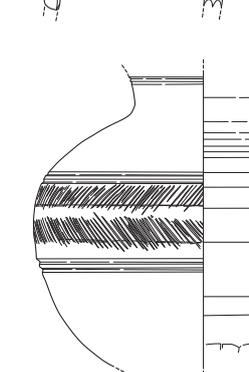
1442



1434



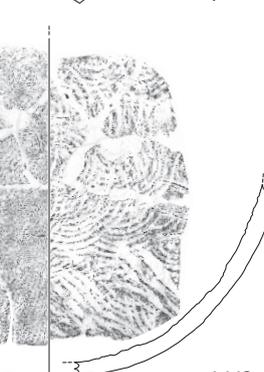
1437



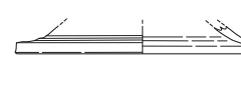
1441



1442



1443



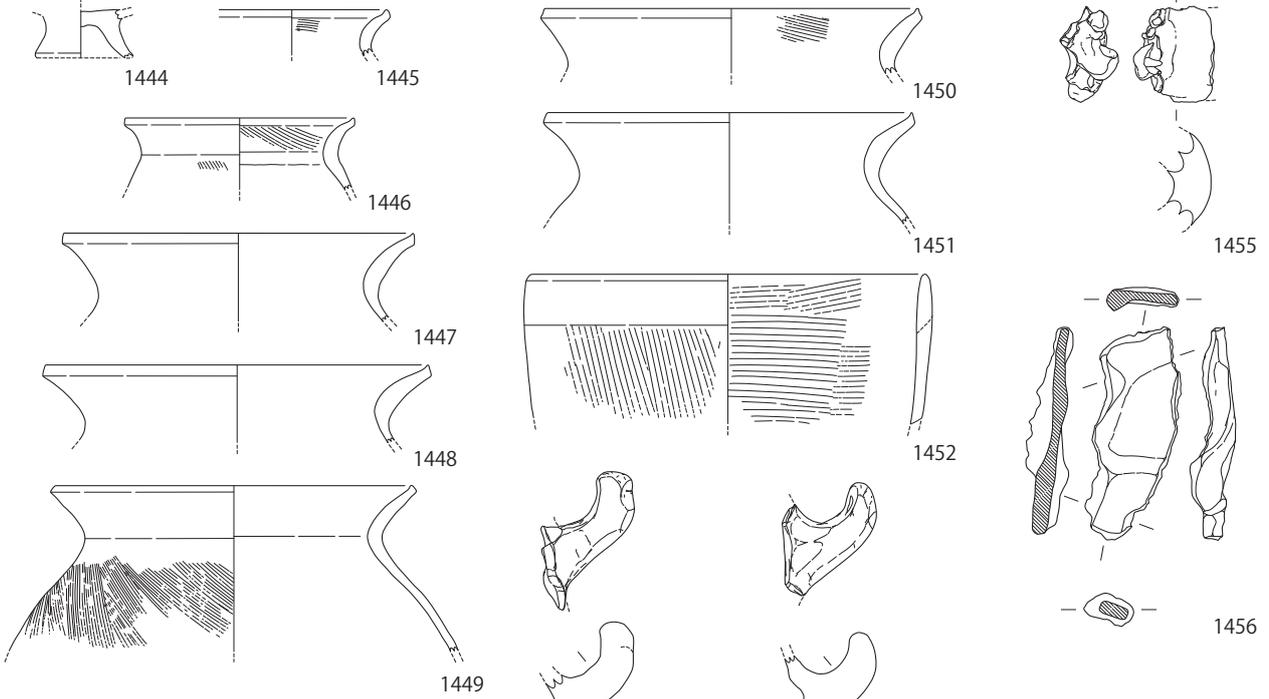
1438



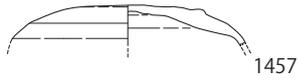
1439

第 250 図 出土遺物実測図 50 (1 : 4)

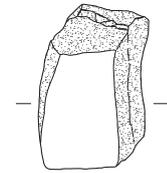
SK1601



SK1609 (1457)



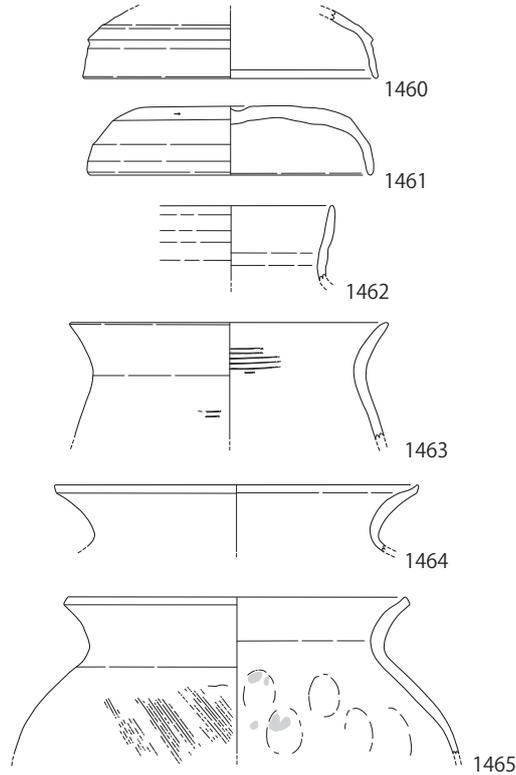
SK1630 (1466)



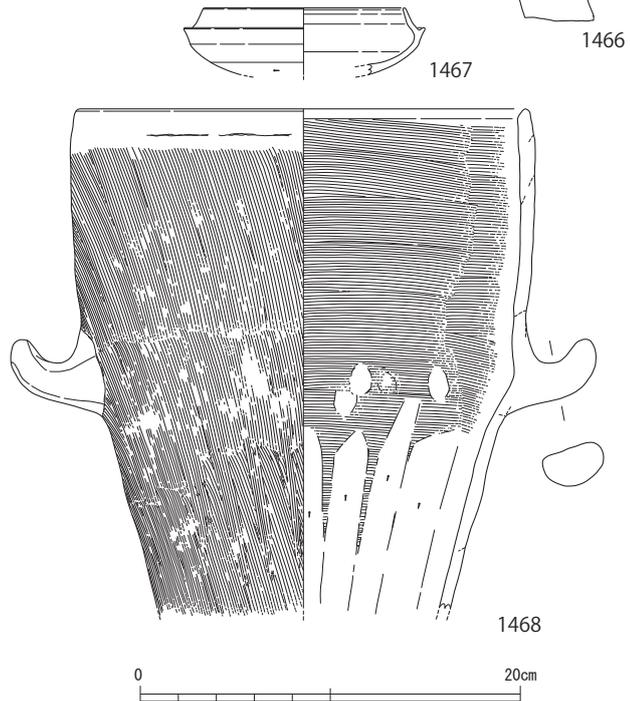
SK1610 (1458 · 1459)



SK1615 (1460~1465)

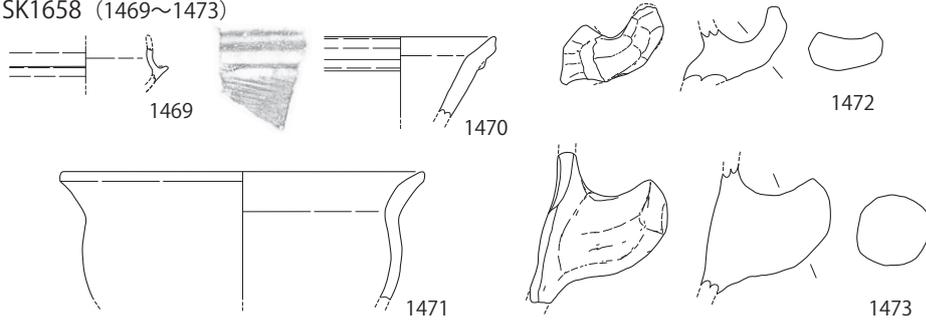


SK1633 (1467 · 1468)

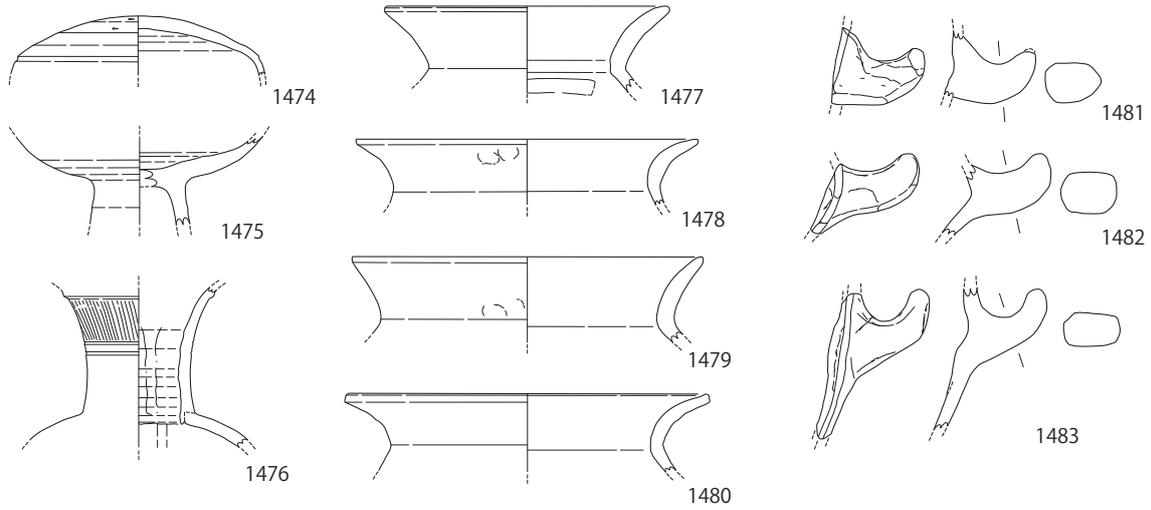


第 251 図 出土遺物実測図 51 (1 : 4)

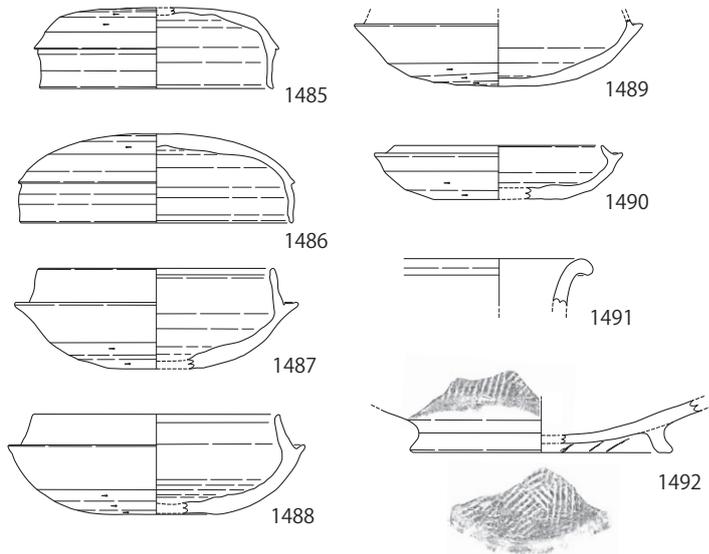
SK1658 (1469~1473)



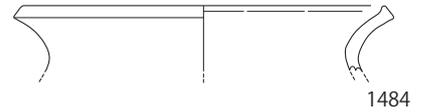
SK1668 (1474~1483)



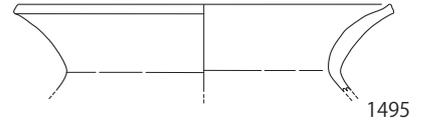
SK1673 (1485~1494)



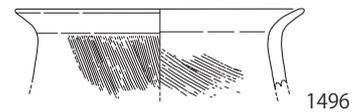
SK1669 (1484)



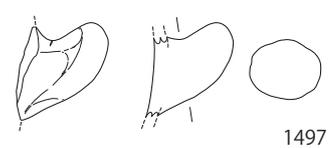
SK1687 (1495)



SK1711 (1496)



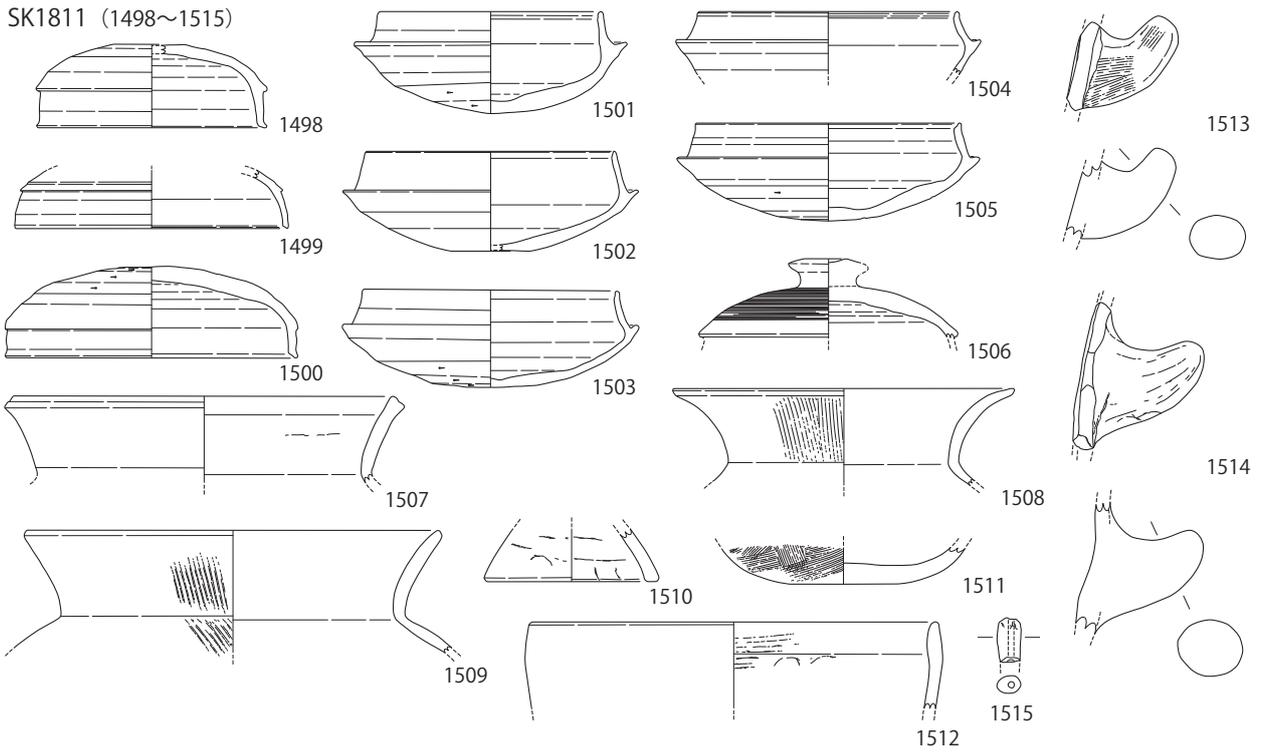
SK1806 (1497)



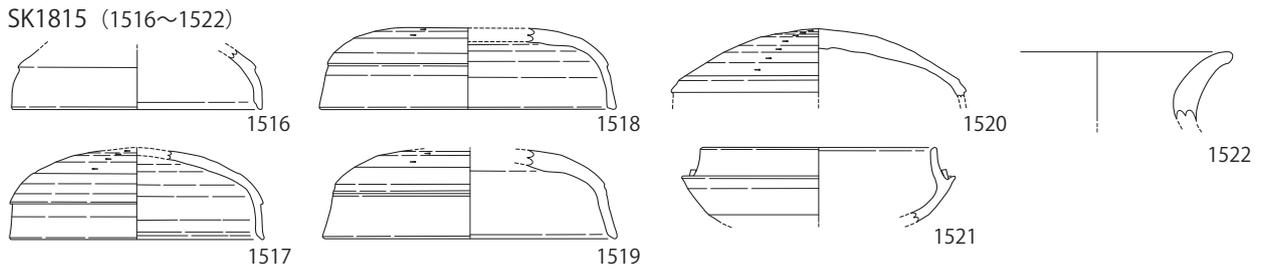
第 252 図 出土遺物実測図 52 (1 : 4)



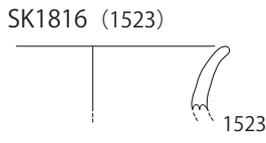
SK1811 (1498~1515)



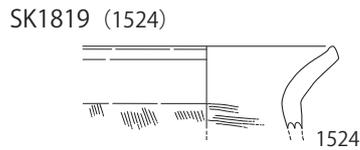
SK1815 (1516~1522)



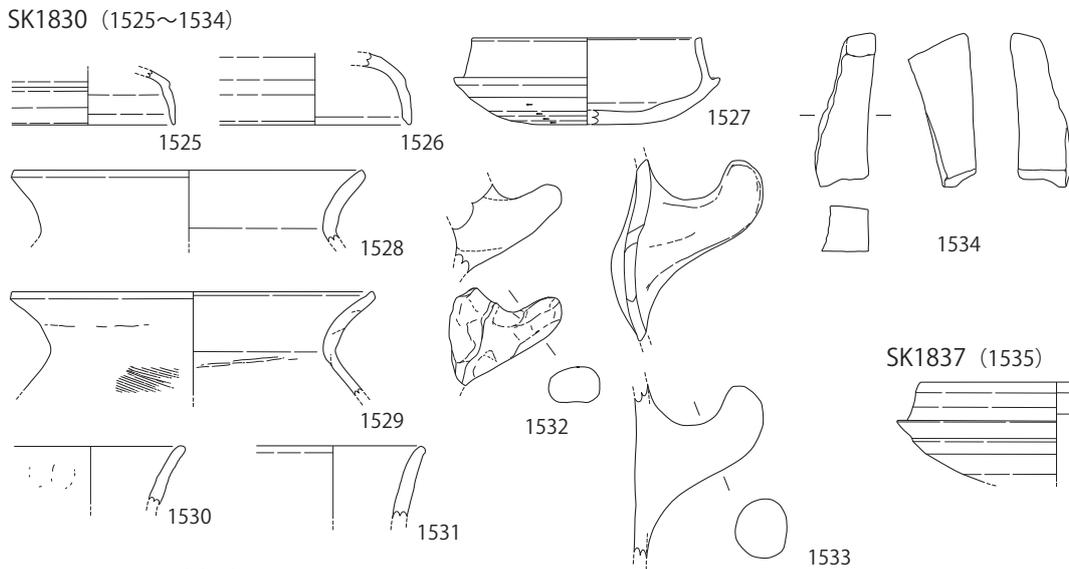
SK1816 (1523)



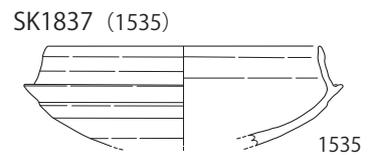
SK1819 (1524)



SK1830 (1525~1534)

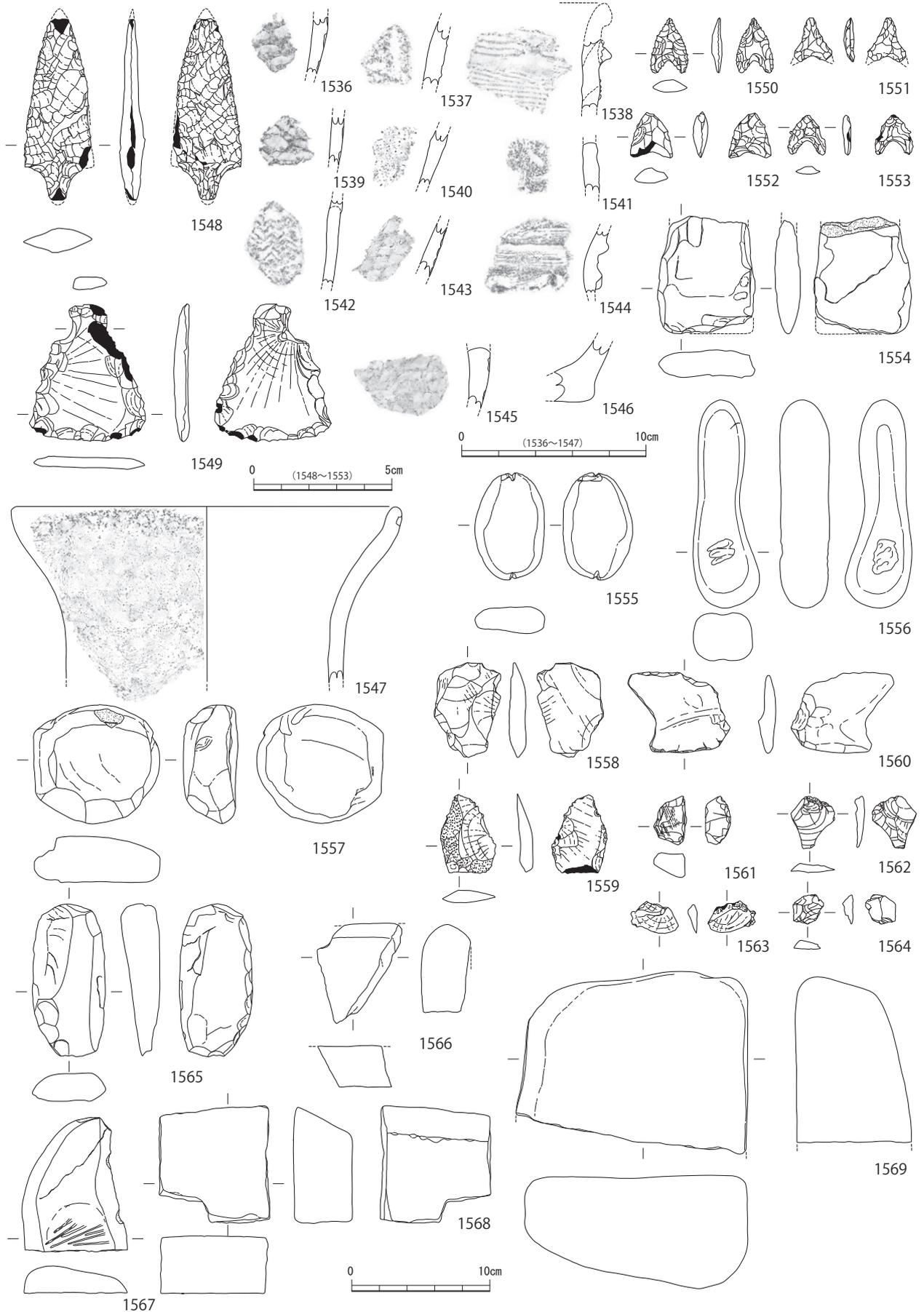


SK1837 (1535)

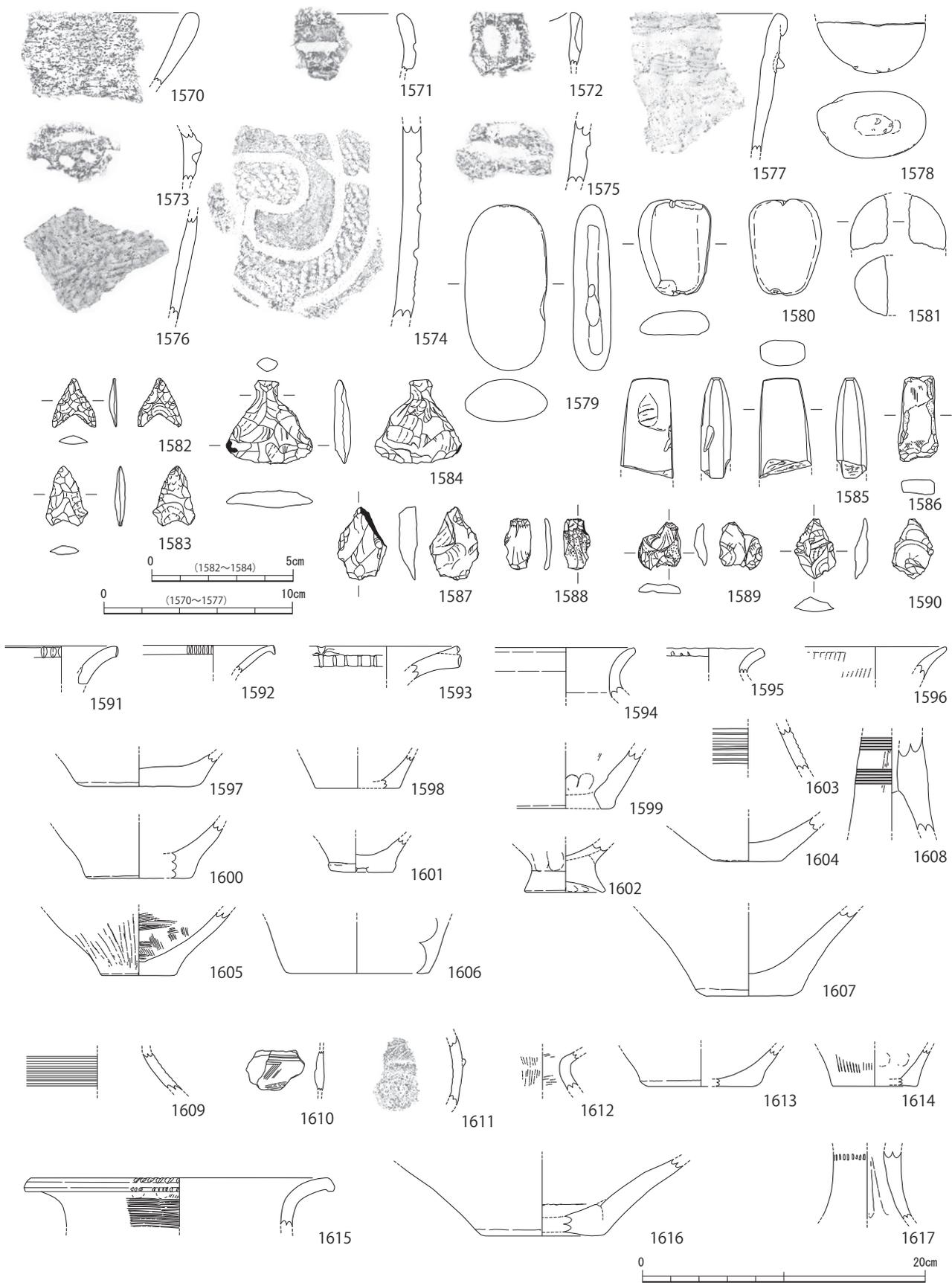


第 253 図 出土遺物実測図 53 (1 : 4)

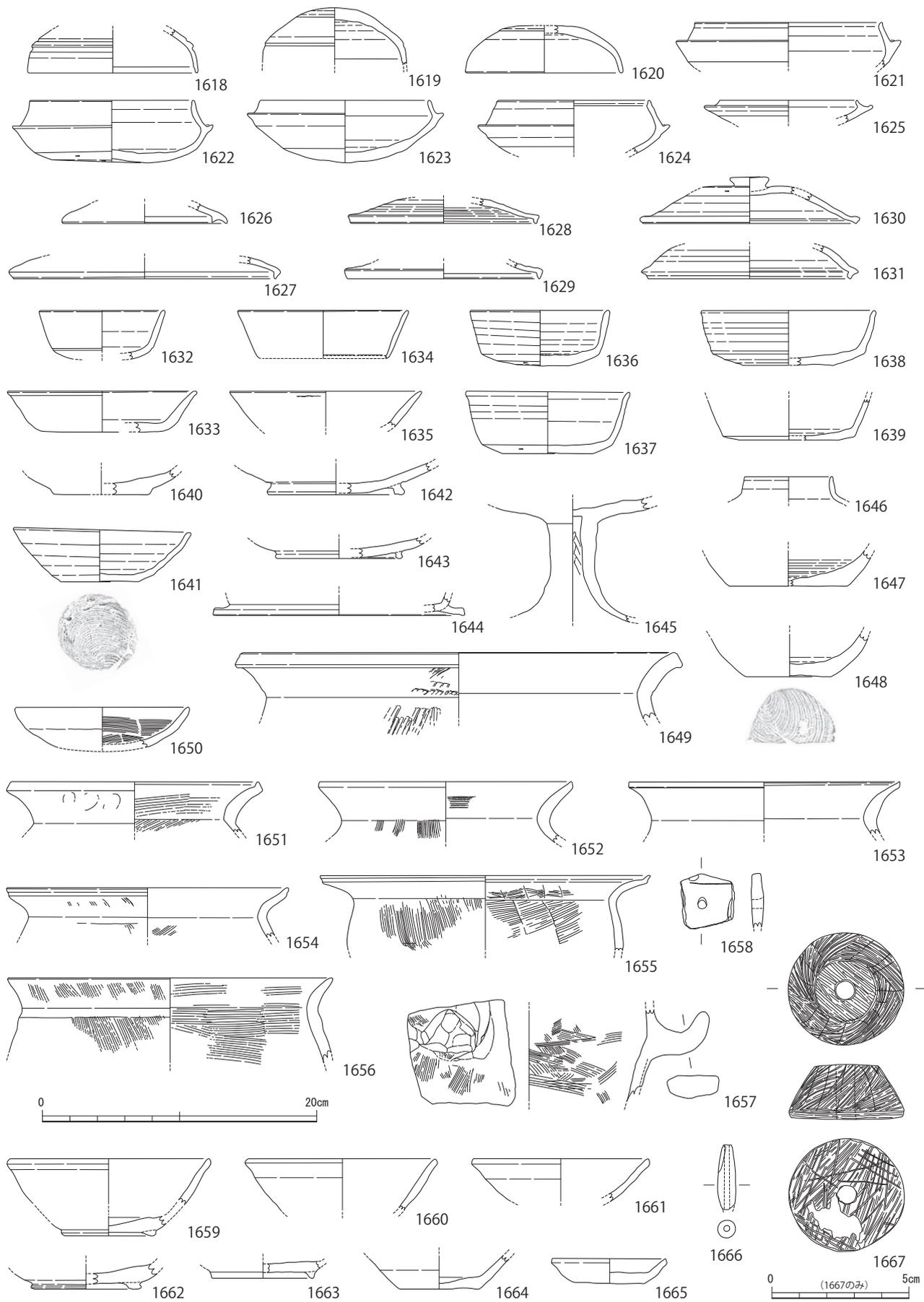
遺構外 (1536~1667)



第 254 図 出土遺物実測図 54 (1 : 2 · 1 : 3 · 1 : 4)



第 255 図 出土遺物実測図 55 (1 : 2 · 1 : 3 · 1 : 4)



第 256 図 出土遺物実測図 56 (1 : 2 · 1 : 4)

報告書抄録

ふりがな	なかのやまいせき（だいよん・ご・はちからじゅうさんじ）はつくつちようさほうこく							
書名	中野山遺跡（第4・5・8～13次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-6							
編著者	大川 操・萩原義彦・服部芳人・松永公喜・水橋公恵・村上 央・和澄さやか							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL：0596-52-1732							
発行年月日	西暦2022（令和4）年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたやまちよう 四日市市北山町	24202	238	35° 02′ 52″	136° 35′ 05″	20110425 ～ 20111222	第4次調査 4,000	近畿自動車道 名古屋神戸線 （四日市JCT ～ 亀山西JCT） 建設事業
						20110824 ～ 20120113	第5次調査 2,400	
						20120518 ～ 20130225	第8次調査 3,012	
						20120518 ～ 20130115	第9次調査 7,700	
						20130510 ～ 20140224	第10次調査 2,480	
						20130426 ～ 20140117	第11次調査 7,347	
						20130509 ～ 20140106	第12次調査 8,006	
						20140418 ～ 20141125	第13次調査 6,173	
						計	41,118	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
中野山遺跡	集落跡	縄文時代	早期：竪穴建物5棟・煙道付炉穴159基・集石炉17基 中期～後期：竪穴建物3棟 晩期：埋設土器4基		縄文土器・石器			
		弥生時代	中期・後期：竪穴建物15棟・掘立柱建物1棟		弥生土器・石器			
		古墳時代 後期 ～ 古代	竪穴建物76棟・掘立柱建物97棟・土坑108基		土師器・須恵器・砥石・鉄滓・轆羽口・製塩土器			
		中世	中世墓4基		陶器			
要約	<p>縄文時代早期～中世までの遺構・遺物を確認した。主体となるのは縄文時代早期と古墳時代後期から古代である。縄文時代早期の遺構には、煙道付炉穴159基・集石炉17基等があった。古墳時代後期から奈良時代初頭と平安時代前期頃に集落が形成され、中心となる飛鳥時代には近隣の筆ヶ崎古墳群と居住域と墓域の関係にあった。また、周辺遺跡と同様に轆羽口や鉄滓が出土し、集落内における鍛冶生産活動が明らかとなった。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告書 323 - 6

中野山遺跡
(第4・5・8～13次)
発掘調査報告
第一分冊

2022 (令和4) 年2月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷 株式会社アイブレーション
